大正十二年四月十二日印刷
大正十二年四月十五日發行

花袋全集第六卷

（非賣品）

不許複製

著作者　田山錄彌
東京市小石川區東青柳町二十九番地

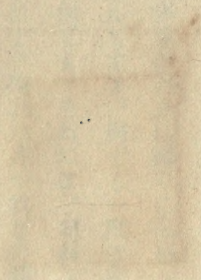
發行者　川俣馨一
東京市小石川區久堅町百〇八番地

印刷者　松浦政吉
東京市小石川區久堅町百〇八番地

印刷所　株式會社博文館印刷所

東京市小石川區東青柳町二十九番地

發行所　花袋全集刊行會

電話小石川一〇五四番
振替東京三一七〇〇番

に若い大工が入つて來たので、話をやめてそのまゝ棟梁は仕事へと取りかゝつた。

日は麗らかに照つて、新綠の間を洩れて落ちて來る光線は、チラ〳〵と美しく濃淡の縞をあたりに織つた。『はゝア、さうでしたかね。それでわかつた。あの時のあの男の慌てた顏はなかつたですからね。今でも眼に附いてゐますからね。』書生は、こんなことを客に言つた。林の鳥は頻りに歌ひ、古池の蛙は樂しげに鳴いた。

――花袋全集第六卷終――

『色戀だから、仕方がないやうなもんだけれど……』

かう客が言ひかけると、

『色戀だつて、旦那、女つ子はひどうがすよ。この前にだつて、電車の車掌とくつついて、一揉やつたんですもの。』

『電車つて、中禪寺へ行く電車かねえ？』

『え、さうでさ。あの安川町の停留場とその向うの停留場との眞中のところに奴の家はあるんですがね。若い車掌が行きに歸りに電車から手紙なんか投り込んで行つたもんでさ。そして毎晩、何處かで媾曳してたんですよ。何でも一度は近所の子守に車掌の投り込んで行つた手紙をひろはれたことがあるんですが。何でも、それには、お前さんとかうして逢ふけれども、とても行末は遂げられないんですから、悲しいけれど、別れた方が双方の爲めだとか何とか書いてあつたさうです。』かう言つて、棟梁は笑つて、

『矢張、尻ッ早なんですな。』

『何うも、男でも女でも、色戀のことに深く入ると、さういふことになるよ。さういふ人は、夫婦二人で暮すだけでは滿足が出來ないんだから。秘密の色戀の樂しみを忘れられないんだから。』

かう客は靜かに言つた。

『それはさうでせうな。内所ごとは面白いにきまつてまさアな。』棟梁はかう言つて笑つた。丁度其處

校を卒業して、洋服でも着て、技手先生で威張つてゐますからな。なアに、月給は十七八兩だから、金はそんなにありやしねえけども、奴さんと比べては、數等上ですア。男振だつて女つ子のおつ惚れさうな風をしてまさ。』

『フム、で、何うしたんだ？　東京から手紙でも寄越したのかえ？』

『この春、男が東京に行つたのも、何でも女と約束して行つたらしいですね。東京に行つて世帶でも持つなんて、旨いことを言はれたんでさ。手紙は始終やり取してゐたんですな……。なアに、女が騙されてゐるのはわかつてゐるんだけども……ちきまた裸にされて戻つて來るのも、わかつてゐるんだけれど……奴さんの身にしちや、さうしちやゐられないですから……。なアに、前にもそんなことがあつて、一騷ぎやつたやうな女だから、丁度好いから、これをしほに、離緣しちやへつて、私なんか言ふんだけども……。亭主どん、ぞつこんおつ惚れてゐるんで、何うも仕方がねい。』

『可哀相だね。』

『可哀相にや可哀相だが、何うもしやうがねえ。さつき行つて見たら、餓鬼のお守なんかしてゐましたがね。何でも、金は前から、さういふ積で支度して置いたのが、いくら位あつたかわからねえが、その他に、二三日前に、亭主から米屋に拂ふつて、五兩預つたのをそのまゝ拂はずに持つて行つたさうだ。その他一圓、五十錢とあちこち知つてゐるとこから、皆な萬遍なく借りて行つたさうでさ。』

『男は何者だえ？』

『この春まで、此處のお宮修繕に來てゐた技手先生でさ。』

『はア、』かう客は言つて考へて、『ぢや、前つから出來てゐたんだね。』

『去年あたりからでさ。だから、餓鬼なんかも、奴の兒だか何だかわかりやしないんですよ。近所では大分知つてるものがあつたんですよ。』

『はゝア。そして、女ッて、何んな女だえ。年はいくつだえ？』

『好い女でさ。年は二十四五だんべい。矢張町のもんでな。あいつには、ちつと過ぎ者なんでさ。それを、先生、おつぽれちやつて、無理をして一昨年だか貰つたんですがね。一體、評判の好い女つ子ぢやないんですよ。』

『はゝア。』

客は深く考へるやうな顏をして、暫し默つてゐた。

『それでですね。話どころぢやなかつたんですね。さう聞けば、一日置いて、道具箱を取りに來た時の顏つてなかつたんですよ。』かう傍から書生が言つた。

『フゝム。』客はかう言つて頭を振つたが、『男つて何んな男だえ？』

『何にしても、若う御座んさ。それに、することは、私等といくらも違はないけども、先きや、工手學

『弟子ぢやないんですがな、世話をしてやつてゐるんです。』かう棟梁は靜かに言つたが、暫く間を置いて、煙草をもう一服すぱ〱やつて、『譯があるんでね。』

『何う――』

『何うつてね、別に變つたことでもないんだけども……。此間、上さん、向うに突走つて行つちやつたもんだから、』かう不意に言つて、彼方を指すやうな顏をして見せた。

『え？』

『上さんが何うかしたんですか。』

客も書生も兩方から、訊いた。

『あの日、突走つちやたんでさ。』

『男と？』

棟梁は笑つて默頭いて見せて、『あの日、仕事に來る時、蟲が知らせたか何かで、烏啼きがわるいと思つて、イヤな氣持で來て、仕事をしてゐたんだつて……。と、急に、迎へに來たんでさ。何でも、女つ子は、前々からちやんとその心組でゐたんだんべい。子供が去年產れたんだが、奧の金山にゐるお袋を四五日前に、忙しいのを無理に呼んで來ておいて、ちやんと支度をしてつつ走つたんでさ。何でも、その前の日あたりに、何處からか手紙が來たらしいつて言ふ事です。』

棟梁はちよこ〳〵しながら、表門の方へ行つたり、小屋のある方へ行つたりした。日影は美しくあたりの新綠にかゞやいて、小鳥の囀る聲が鈴のやうにきこえた。棟梁は表門と小屋の間のところに、大きな杉丸太を引張出して來て、その傍に蹲踞んで、煙草を一服二服吸つた。

客も書生も、其傍に來て立つてゐた。

『一體、何うしたんだえ？　あの職人は？』

『なアに、ちよつと譯がありましてな。』

『喧嘩したのかえ？』

『なアに！』

棟梁は莞爾笑つてゐた。

『でも、變な男だからさ。口も碌々きかないやうな男だね。變人だね。何處のもんだえ？　矢張此處のものかえ？』

『石町でさ、家は。』

『土地のもんかえ？』

『さうです、此處で生れたんですア。』

『棟梁の弟子ちやないのかえ？』

と、ある晴れた朝、棟梁は遂にその姿を其處に見せた。

『お早う。』

障子を明けると、棟梁は莞爾しながら、『何うもすみません。つい、忙しいもんだから、御無沙汰をしちやつて……』

『御無沙汰は好いけども……あの職人は、一體何うしたんだえ？　ぷいと道具箱を持つて行つてそれつきり來ないよ。』

『さうですつてね……本當に、放つたらかして置いて申譯がありません。今日から、眞劍にやります。なあに、やれば、ぢき出來るんですけど……』

風呂場の方へ行つて見て、半分仕かけた跡などを見てゐたが、『でも、天氣になつて結構ですな。これで、まア、二三日はつゞくでせう。この間のやうに忙しいのに、降りこめられちややりきれない……』

『忙しい仕事つて、何處をやつてゐるんだえ？』

『なアに、仕事はお宮修繕の方ですがね。何うも手が足りなくつて、てんてこ舞をしてるんでさ……でも、此處の旦那に、此間、うんと小言を言はれちやつたから、一つ眞劍に今日からやりますよ。』

『今日は君の外に、まだ來るのかえ？』

『もう一人來ます。』

『本當ですね。生効のあるのは、これからですね。』

『まア、宜しくやるさ。』客は笑つて、『それから思ふと、和尙さんなんか、その意味に於て可哀相だよ。心から發心して僧侶になつたんぢやないんだからね。職業的に、小さい內から此山に來て、ちやんと運命をきめられて、あゝして一人でゐるんだからな。』

『本當ですね。だから、家庭の話が出ると、あんなに羨しがるんですね。和尙さんの話をきいてゐると可笑しくなる位ですけども……。そのためですね。まだVirginなんでせうか？』

『何うだか、それはわからないけれど……』

『面白いもんですね。』

かう言つて書生は笑つた。書生はこの前主僧が來て、客と一緒に酒を飮んだ時、女の話を隨分露骨にしたことを思ひ出してゐた。『一日つとめて歸つて來ると、家に、さういふ人がちやんと待つてゐるんなら、張合があるんですけれども――歸つて來ると、戶閉めで、眞暗で、それから、飯の支度を自分でしなけれやならないんですからね。實際さういふ明眸皓齒が待つてゐたら、好いだらうな。』かう言つて、盃を口に當てゝ、法衣の膝を前に乘出すやうにして聲高く笑つた。その姿が歷々と眼の前に見えるやうに書生は思つた。

また一日二日經つた。

『何うしたんだらう、本當に？』

『本當ですね、隨分づべらですね。』

『棟梁知つてるんだらうな？』

『それは知つてるんでせう。』

『まア好いや、放うつて置け、その中、和尚さん來るだらうから。』

で、また一日二日經つた。花の散つた後には、新綠が逸早く芽を出して、桃の若葉は日に照つて花でも咲いたやうに美しく光つて見えた。門の傍にある古い池では、蛙が戀の唄を唄つた。それを聞きながら、ある夜客は、『面白いぢやないか、君。蛙の戀は――。さかりがつくと、皆なあゝいふ好い聲を出すんだからな。鳥だつて、人間だつて、何だつて同じだよ。人間が色氣がついて來た時分と同じことだよ。あやつて、皆な雌を呼ぶんだよ。そして、戀の歡樂をつくして子を生殖して、死んで了ふんだよ。世の中は男女の道ばかりだね。眞に强いのは、その道ばかりだね。死よりも强し、實際、その通りだ。』

『面白いですね。』

まださういふことには深く染まないが、前途にさま〴〵の希望を持つた書生は、かう言つて考へるやうな顏をして、『鳥の聲なども矢張さうですね。春だ。春だ。歡樂の春だ。』

『君なんか、これからだ。』

『都合があつて、俺ア、今日きり來られなくなりやしたから……』

『もう來ないのかえ？』

『少し都合がありやして……。しかし、別の職人が來るでせうから。』かう言つて、道具箱をかついですた〳〵と出て行つて了つた。

『何うしたんだらう、一體？』

『變ですねえ。譯も言はずに、すた〳〵行つちやつたんですがね。本當に、をかしな奴があるもんだ。それに、變な顏をしてましたよ。』

『棟梁と喧嘩でもしたのかしら？』

『さうかも知れませんよ。あゝいふぶつきら棒の男だから。』

『馬鹿な奴だな。』

客と書生とは、こんなことを言つたが、さうかと言つて、別に氣に留めてもゐなかつた。客は矢張奧の一間でせつせと物を書いてゐた。書生は書生で、机の前に坐つて本を見たり、倦きて鏡を出して自分の顏を寫して見たり、そこらをぶら〳〵歩いて見たりしてゐた。風呂場の修繕は、半ば仕かけたまゝで、根太の丸太が半分そこに押當てたまゝになつてゐた。

晴れた日には、濡れた鉋屑が乾いて、風に吹かれて、庭の此方の方までころがつて來た。

『本當ですね。何もあんなに默つて、無愛想にしなくつたつて、よかりさうなもんですがね。棟梁と比べると、丸で違ひますね。あゝいふのは損なんですがね。つい、午の茶もやりたくないやうな氣になりますよ。』

『さう言へば、あの先生、別に、茶も欲しくないんだよ。昨日は、サッサと自分で、辨當をあけて、食つてゐたぢやないか。あゝいふ人間もあるんだからな。』

『本當ですね。』

こんな話をした翌日は、一日來て、殆ど一言も口を利かずに働いて行つたが、その翌日の午頃に、『ちよつと、家に、急用が起つたから。』かう言つて、慌てたやうにして歸つて行つた。

翌日は終日その姿を見せなかつた。次ぎの日は、雨が降つた。庭の糸櫻は濡れて散つて、鉋屑や丸太や杉板の上を白くした。

と、午後二時頃になつて、風呂場の方でガタ〳〵する音がするので、書生が出て行つて見ると、職人が一昨日放つたらかして置いて行つた鋸やら鉋やら鑿やらを道具箱に藏つて、そこ〳〵に歸り支度をしてゐる處であつた。

『何うしたの?』

職人は訥りながら、

に、黒い法衣の袖を翻して、裏から廻つて入つて來た。『棟梁は昨日も來ませんか。……別に忙しい仕事があるにはあるんだが、さうなまけちや困るなア。よく言ひませう。』

でも、一週間も經つ中には、流しの方はもうすつかり出來て、腐れた根太や羽目が新しくなつて夕暮の空氣の中に見えてゐた。で、風呂場の方にかゝる前に、棟梁はちよつとやつて來たが、『何うも忙しくつて俺ア此方に來てゐられないんですよ。旦那。』かう言つて、職人だけをよこして置くから、よろしく賴むと言つて、別な仕事場の方へと行つた。

それからその陰氣な職人だけがやつて來て、終日長く、默つて、根太を壞したり、新しい丸太の寸法を取つたり、鑿で四角な穴を明けたりした。書生も、客も、退屈すると、矢張其處へ行つて話をしかけて見るのであつたが、つひぞ職人は滿足な返事をしたことはなかつた。此方から戯談を言つて見てもそれに調子を合はせるやうなこともなかつた。そして、鑿や鋸の手を留めては、をり〳〵溜息などを吐いてゐた。

客と書生とは話した。

『あの先生、餘程變りもんだね。』

『さうですね。何だか、ブキシヤキしてゐますね。碌々、返事もしないぢやありませんか。』

『確かに變り者だ。性質つて言ふものはをかしなもんだな。』

んで、金もつかひましたし、親方にも不義理もしましたよ。しかしあの道ばかりは際限のないもんでしてな、終には、此方から手を引いて了ひましたがな。何でも突出しから馴染になつてゐたもんだから、別れるのは、あんまり好い心持はしませんでしたよ。』

『矢張、君などにも、さういふ事があつたかね。』かう理解するやうに客は言つたが、『何うしたえ？その女は？』

『何うしやしたか。もう昔のことですからな。張合つた男の噂にもならなかつたんですが、その後は、噂にもき〻ませんや。』すぐ話を別の方に持つて行つて、『旦那、随分、煙草を吸ひますな。これぢや一日に二袋や三袋ぢや足りねえでせう……。四袋？　随分やりますな。それでよく頭に來ませんな。』

『何うせ、ぷか〳〵やるばかりなんだから……』

『それにしても、一日に四つは大變だ。三四、十二圓、學校の先生の一月の給料が出るア。』

などと言つて笑つた。酒はたんと飮まないが、話好きで、種々なことを面白く饒舌るので、客はよく棟梁を閙爐裏の傍に呼んで話した。時には仕事を終つて歸らうとするのを、『まア、好いやね、今日はもう用はないんだらう。蕎麥でも食つて行きたまへ、』などと言つて、客は無理に棟梁を引留めた。

其間には、雨が降つたり、風が吹いたりした。二三日續けて、二人ともやつて來ないやうなこともあつた。寺の主僧は、本坊の方に住つて、此處には滅多にやつて來ない。が時には、仕事の運び具合を見

などと棟梁は言つた。

庭には麗らかな春の日が照つた。ぼけ、沈丁花、山櫻、山では花は皆な一緒に咲いて、鳥の聲が樂しさうに梢から梢へと渡つた。谷深く溪の流るゝ音は、心地よくあたりに響いて聞えた。

東京から來た客の一人は、髮の長い脊の高い書生らしい男であつた。で、奥の一間で机に向つて終日物を書いてゐたが、一人は四十近い髮の濃い男で、二人とも退屈すると、障子を明けて、庭へ下りて、大工の仕事を見てゐたり、その傍を通つて溪流の一目に見える崖のところに行つて立つたりした。客は此處にはもう度々來て、棟梁とは昔から知合つてゐる仲らしかつた。『何うだ、大工さん、お茶でも飮まないか、』などと言つて、客は圍爐裏の傍から聲をかけた。

『宮の方にゐる時分は、まだ若かつたから、よく出かけて行つたもんでさ。あそこの遊廓がまだ李町にあつた時分で、おい、李町へ行かうかなんて、仕事がすむと、すぐ飛び出して行きやしたよ。でも、お山買ひもつまりませんや。酒でも飮めりや、これでも亦面白いつて言ふこともありますがな。から、駄目なんですから、三杯飮むと、眞赤になつて眼がくら〳〵するもんですから。それに、持てれば面白かんべいが、俺なんか、女つ子には、つひぞもてたことはありませんからな。』棟梁はこんなことを言つて眼尻を下げて笑つて、『でも、一度はこれでも熱くなつたことがありましたつけ。何でもさうですが、色の道ばかりぢやありませんが、張合ふ奴がありましてな。何うしても向うに取られるのが辛いつて言ふ

ある大工の噂

何年と人の住んだことのない山の寺に、今度東京から客が來たので、勝手の流しの落ちたのや、風呂場の根太の腐れたのや、水桶に仕かけた樋の修繕などを俄かにすることになつて、大工の棟梁は、職人を一人伴れて來て、終日長く庭のところで鉋や釿をつかつた。

二三日前から木挽が來て挽いて行つた杉板は其處此處に散らばされて、新しい麻裏草履に腹がけの輕い扮裝の棟梁は、糸で板に墨を引いたり、丸太を釿で削つたり、寸法を測つた根太を何遍となく持つて行つてあてがつて見たりしたが、その間、二十七八位の、陰氣なむつつりした、滅多に口もきかない職人は、その傍で、臺木に杉板を當てゝ、せつせと鉋を運ばせた。一削りする度に、鉋屑は丸くなつてあたりに落ちた。

をり／＼棟梁に呼ばれて、流元の方に行つて、根太を轉ばしたり、棟梁のやりかけた仕事を手傳つたり、繼足した木材の具合を二人して覗いて見たりした。『何うも、少し中だな。右が少し上つてるらア、』

母親は別に小言も言はなかつた。

一週間ほどして、郊外の中學に滿が漸く入るやうになつた頃、おまさはふとその友達からの端書を受取つた。丁度、明日が母親の一周忌で、去年の悲しい別離のことなどが種々とおまさの胸に思ひ出されてゐた。庭には木瓜、沈丁花、椿、桃、櫻、こゞめ櫻などが咲いて、春の日の光が麗かにあたりに漲り渡つた。おまさは佛壇に花でも供へようとして、丁度、その時、鋏を持つて庭から門の傍へと歩いて居た。で、おまさは端書を受取つたが、そのまゝそれを繙して、其處に細い綺麗な字で書いた手跡と、その男の兒の合格を報じた丁寧な文句とを認めた。

母を思ひ出したり、子供達の將來のことを考へたり、自分の淋しい身の上を憐んだり、洗濯をしたり、勝手の炊爨をしたり、煩さい御用聞に應對したりしてゐる忙しい一日の間の暇をぬすんで、おまさはその友達に宛てる返事を書き出したが、途中で何遍となく立つたり坐つたりしなければならないので、夜になつて、子供達が寢靜まつて了ふまでは、落附いて筆も取つては居られなかつた。

おまさは漸く書終つた手紙を電燈の下で讀み返しながら、再び何時またその友達に逢ふことがあるだらうかなどとさびしく考へた。

おまさも友達も、着物を着飾つてぴらしやらと外に出て行くやうな年齡でもなかつた。それに、二人とも忙しい五人の子の母親だ。

つて、其の友達に逢ふ氣がしなかつた。早稻田が合格して、友達の姿が其處に見えないのも辛いし、巡禮のやうにして、平氣で、學校から學校へとその男の兒を伴れて行くのもきまりがわるかつた。『仕方がないから、もう一年、高等に入つて、しつかり勉强おしよ。その方が好いよ。そして來年は屹度入れるやうにおしよ。』

かうおまさは男の兒に言つた。

しかし、折角願書を出して置いたのを無駄にするのも惜しい。と言つて、丁度、近所に其學校に試驗を受けに行くものがあつたのを幸ひ、其日は其人に賴んで、兄と弟とは二人で朝早くから出かけて行つた。

今日はいくらか出來たと言つて、午後に兄弟は歸つて來た。『しかし、矢張あそこは受ける人が多いから何うだか。』かう兄は顏の汗を拭いて、『矢張來てたよ、母さん、あの人が――』

『さうかえ、知つてたかえ?』

『知らないやうだつたよ。』

あくる日、兄弟はまた揃つて出かけて行つたが、午前には早く歸つて來た。『矢張、駄目だつた、母さん。』

『しやうがないね、本當に――』

が、一時間目に滿はすつかり失敗して、青い顏をして、泣きさうにして、教場から出て來た。『だつて、頭が痛いんだもの、何にもわかりやしない。』

『一つもして來ないのか、馬鹿だなア。』

兄の先之助は無念さうにして言つた。

あとをやつたつて仕方がないので、おまさ達は、友達に暇を告げて、其處を出て、近所に住んでゐる姉の家を訪ねた。そこでは姉は蕎麥を取つて皆なに御馳走した。

年は取つてゐないし、學問だつて、さうすぐれて成績が好いといふのでもないから、無論、合格は難かしいとは思つてゐたが、さてかう失敗して見ると、おまさは悲觀せずには居られなかつた。『一體家では、子供を構はないからいけないんだ。何處の家だつて、子供には親が教へて面倒を見てやるんですもの。それに、學校がわるいんですよ。その證據には、麹町邊の子供はよく出來るんですもの。あんな田舍の百姓の學校に入れて置いては仕方がありやしない。』言ふまいとしても、ひとり手に愚痴がこぼれた。

始めから出來るだけ多く試驗を受けさせるつもりで、もう一つ別に市街の方にある學校に願書を出して置いた。しかし、おまさはもう自分で出かけて行く氣はなかつた。早稻田が駄目な時には、矢張友達も其方に行くやうに願書を出して置いたと言つたが、悲觀したおまさの身にしては、もう再び其處に行

た。

教場から出て來たのは、おまさの男の兒の方が先だつた。『出來たかえ？』かう總領の男の兒はそれを迎へるやうにして言つた。『少し間違ちやつた。數學のこいつが難かしいんだもの。』かう弟が言ふと、覗いて見て、『なんだ、こんなものが出來ないのか。それは教へたぢやないか、此間、』などと兄は言つた。大勢ぞろ〳〵出て來る中には、『出來た、出來た、』と手を擧げて喜悦の聲を立てるものなどもあつた。

『大分、遲いやうだ。何うしたんでせうね。』

友達は心配さうに、校舍の前に行つて、教場の方を覗いて見た。

暫くしてから、其男の兒も出て來た。

『また、明後日、早稻田でお目にかゝりませうね。』

こんなことをその友達は言つて別れたが、殊に由ると、旨く及第したかも知れない。あの兒はあゝ見えて、中々利口さうだ。家の滿などとは柄からして大きい。『しかし、あんなに應募者があるんだから、好加減に出來たのでは、早稻田に來るかも知れない。』おまさはかう思つたが、果してその友達は其日も、早稻田の方へやつて來てゐた。『矢張駄目でしたよ。あゝ大勢應募者がありましてはね。』かう言つて其友達は笑つた。おまさは此間は近所に飲食店もないので、學校の門前で、麵麭を買つて午飯の代りにしたが、今日は、ちき其の近くの蕎麥屋にでも行つて、一緒に話でもしようかなどとも思つてゐた。ところ

着物もこの前のとは立派なのを着て來た。

『あ、貴方もさうですか。此處が駄目だつたら、早稻田の方を受けさせて見ようと思つてをりますですが……。いゝえ、駄目ですともかう競爭者が多くつては、とても駄目だと思つてゐますよ。子供達が可哀相なやうな氣が致しますのね。』

などと其友達は言つた。

試驗が始まると、保護者達は、問題を刷つた紙を一枚づつ貰つて來て、それを各自に自分でやつて見た

『どうも、ちよつと皮肉な奴が出ましたね。少し考へれや、わけはないのですけれど、子供の頭ではちと難しいですね。』ある紳士とある男とは、問題の紙を手にしたまゝこんなことを話した。姉らしい若い綺麗な女學生は、頻りに數學の問題を計算した。

『先ちやん、お前には出來るかえ。』

かうおまさが總領の男の兒に訊くと、

『うん、出來る。』

昂然として男の兒は言つた。

傍にゐたその友達は、

『ちよつと、坊ちやん。』かう言つて、手を出して男の兒から鉛筆を借りて、數字を紙の上に書いて見

『いゝえ、駄目ですけども……』言ひかけて、話を變へて、『今でも、琴はなすつて？』

『いゝえ、琴どころですか。娘が此頃少し致しますから、此間も、ちよつとさらつて見たんですけども、すつかり忘れて了つて、滿足には何も彈けや致しやしません……』

『でも、本當に、子供が大勢あつては、遊藝どころでは御座いませんね。私なぞも、長唄を少し致しましたけども、今では、彈いて見ようなんて言ふ氣にはならないですから。』

『本當ですね。』

おまさの總領の男の兒は、母親達の飽かずに話し合つてゐるのを、詰らなさうに、退屈さうに見てゐたが、やがて體格試驗がすんで、校舍の外では、待つてゐた父母達が、出て來た男の兒の傍に行つて、『何うだつた。何か聞いたかえ？　何んなことを聞いたえ？』などと言つた。中には籠の鳥が遁れ出したやうに、急いで母親の方へ飛んで行くやうな男の兒などもあつた。やがてあとからあとからへと男の兒達は出て來た。あたりは騷がしく賑やかになつた。『もう、出て來さうなもんですが。』などと言つて、その友達は、校舍の中を覗くやうにした。

三日ほど間を置いて、學業試驗の時にも、昔の二人の友達は、矢張同じその廣場で落合つた。今度はおまさはフロラアシヨールなどをして、金の指環などをはめて行つた。その友達は、髮を綺麗に結つて

言はれなかつた。むづかしい夫、自分のことにのみ沒頭して妻や子供のことなどは少しも構ひつけないやうな夫、氣難かしくつて、何ぞと言ふとすぐ頭から呶鳴りつける夫、昨日も子供の試驗のことで、餘り構ひつけないので、つい言ひ過すと、『何うせ、不合格ときまつてゐる奴を、大騷ぎをしてそんな處に伴れて行く必要がないぢやないか。電車賃が損位なもんだ。女つていふ奴は、子供にかけては目はない。丸で盲目同然だ。自分の子供は誰よりも豪くしたいとばかり、唯思ひ込んでゐるんだからな。ちつともわからないんだからな。』かう言つて呶鳴り附けた。その言ひやうが餘りひどいので、つい此方でも二言三語言葉を返した。で、今朝來る時も、不愉快な顏をしておまさは出て來た。

しかしおまさは友達にはそんな話は少しもしなかつた。おまさは、唯友達の話の中から、友達の夫の自分の夫に比べてやさしく溫和しいのを發見して、それを羨しいと思つただけであつた。友達は昔の氣象で、何も彼も自分一人で切つて廻して行くらしかつた。子供達も自分の子供等とは違つて、二人して氣を揃へて敎育して行くので、出來も育ちも好いやうに思はれた『結構ですね。さういふ風に、熱心におなりになれば、子供だつて、張合が出て參りますから、自然學問も出來るといふ譯になるんですけれど……宅などでは、何にも構つては吳れませんし、私がまたこれで意氣地なしと來てゐるもんですから、本當に仕方がないんですよ。第一、貴方が昔からよくお出來なすつた方なんですから。それだけでも、お子さん達は仕合せですよ。』

つしやいますね。私はまたお姑さんかと思ひました。』考へて、『ではよろしう御座いますね。もうおいくつにおなんなさいます？』

『六十七になります。』

『それはお丈夫で結構ですね。』かう言つたおまさは、去年わかれた里の母親を思ひ出さずには居られなかつた。母親は六十四で亡くなつた。壽命さへあれば、まだ五年や六年は達者でゐられたのに……おまさは母親にわかれてから、急に年を取つたやうにも、さうでなくつてさへ辛かつた人生の艱難と辛苦の波が一倍大きく押寄せて來たやうにも思つてゐた。一年經つた今でも、おまさは、母親の俤を忘れかねた。

『でも、母さまが達者で生きていらつしやる中が、何よりも結構ですよ。私なども母がゐる中は、世の中のこともそれほど氣にしませんでしたし、困つたことや、辛いことなどがあれば、そこに行つて話せば、慰めて呉れもしましたけれど、ゐなくなつては、もうさういふことは出來ませんから……。凭りかゝりたくつても杜がなくなつたやうなもんですから。本當に、母さんの生きていらつしやるといふ方の話を聞くと、一番何よりもそれが羨ましいのですよ。』かう言つたおまさは、涙が胸に湧上つて來るのを覺えた。

今度は友達がおまさの家のことなどを訊いた。多い卒業生の中でも、おまさは、さう大して不仕合せと言ふ方ではないけれども、それは單に生活の上のことで、自分等の送つて來た生活は、決して幸福とは

體格試驗をする間、おまさとその友達とは、大勢の人達に離れて、廣場の隅の樹の下に蹲踞んで話してゐた。二人はいくら話しても話が盡きないといふやうな風に見えた。

『では、何處にもお勤めにはお出になりませんのですか。』

かう友達は訊いた。

『え、始終、家に居りますもんですから……』

『さうですか。矢張家でもさうなんで御座いますよ。』

『では、あの失禮ですけれど……』

かう言ひかけると、

『え、あの、畫の方をやつてをりますものですから……。それも、日本ではあまりはやらない昔の繪で御座いまして、駄目なので御座いますよ。でも、父の時分から、宮内省の方だの、何だのを致してをりますもんですから。』

『それでは、御養子をなすつたので……』

『え、父がゐます時分から、ちやんときめて御座いましたもんですから。』

『さうですか。』かう言つて始めて分つたといふ表情をおまさはして、『それでは、本當の母さんでいら

ところに嫁いで來た時のことなどを思出した。しかし、それももう昔になつた。おまさは唯ちよつとそれを思ひ出しただけであつた。

『あの卒業生の中では、今では、村田さんが一番御立身をなすつていらつしやるやうですよ。何でも內務省の局長とか何とかをなすつていらつしやるさうですよ。』

『村田さんつて言へば、おやつこおやつこツて言つた方ですね。まアあの人が……。人と言ふものはわからないもんですね。さうですか……。時々、お逢ひになりますか。』

『いゝえ、滅多に、逢つたことは御座いませんですけれども……』

突然ベルがけたゝましく鳴つた。體格檢査が始まるのであつた。人達は大勢校舍の方へと行つた。洋服を着た先生が出て來て、男の兒達を一々呼び出して、それに列をつくらせたりした。

『ほら、滿ちやん、行かなくつてはいけないよ。』

かうおまさの總領の男の兒は弟に言つた。弟は其方に行つた。友達の伴れて來た男の兒も、急いで教師の立つてゐる方へ行つた。

A組、B組、C組とわけられた男の兒達は、廣場の方へ列を成して進んで行つた。『とまれ』と言ふ聲がすると、やがて行進が止つて、今度は別な若い教師が、豫め屆書に添へて出して置いた寫眞を持つて來て、それを一々當人と引くらべた。おまさも友達も、大勢の人達に雜つて、長い間それを見てゐた。

夫と子供と年寄とに忙殺された若い母親は、家庭の外には滅多に出て行くやうなこともなかつた。世間とは全く離れて暮して來た。その寫眞を時々出しては見るけれども、誰が何うしたか、その噂すらも聞いたことはなかつた。電車の中などで、をり〳〵その昔の友達に逢ふこともないではないが、一言二言話し合ふ位で、いつも慌しく別れて來た。

友達は、それでも、いろ〳〵なことを知つてゐた。『え、あの裁縫の先生、お若い、お綺麗だつた？……あの方も、今では、大佐か何かにおなんなすつたつて言ふことですよ。何でも吳あたりにいらつしやるつていふ話で御座いますよ。』などと話した。

『松山さんは？』かうおまさは訊いた。それは、綺麗なので評判な人であつた。眼の涼しい、髮の濃い、脊のすらりとした。……………………

『あの方は軍人の大尉とかにお嫁きになりましたけれど……お不仕合せで、日露の戰ひで、旦那様が御戰死をなすつて、今ではお一人で暮していらつしやるといふことですよ。』

『さうですか。』

『それから、まだ他にも、軍人におかたづきになつて、お一人になつた方が隨分いらつしやいますよ。志村さん、田中さん、桐原さん……それから正田さん。』

『まア、さうですか。』おまさは嫁ぎたいと思つた軍人の許には緣がなくつて、進まぬながら今の夫の

かう言つたおまさは、自分の身に引きくらべて、忙しい暇のない母親の生活を想像しないわけに行かなかつた。無邪氣で學校の庭でいたづらをして遊び廻つた時代は早く〳〵過ぎ去つて、艱難と辛苦との人生は、漲るやうにかれ等の上に蔽ひかぶさつた。おまさは、自分の家にある嫁に來た時に一緒に持つて來た卒業當時の寫眞なぞを思ひ出してゐた。

その寫眞は、年を經て黃く薄くなつてゐたけれども、學校の近所にあつた大きな寫眞屋に、そこに春雨のふる日に、卒業生同士は盛裝して、出かけて行つたのであつた。その時寫眞室のバルコニーの外には、糸櫻が見事に咲いて、雨が脚長くそこに降濺いでゐた。おやつことといふ渾名をとつた村田さんが一人でキヤツ〳〵と騷いで仕方がなかつた。年を取つた白髯の校長先生、肥つた裁縫の女敎師、皆なの裁縫の受持は、その女敎師ではなくつて、陸軍大尉の妻の若い美しい、人に羨まれるやうな先生であつたけれど、丁度その時、妊娠してゐて、代りに肥つた女敎師がやつて來たのであつた。一番出來て誰でも競爭することの出來なかつた田上さんを眞中に、宮內省の役人の娘の志村さん、その隣に大佐相當官か何かの娘の岡村さん、なにがし子爵家の家扶をしてゐるといふ白石さん、おまさは成績が中軸位だつたので、さういふ人達とは列を異にして、一段後に列んで立つてゐた。おまさの隣には、仲が好くつて、一緒によく琴を習ひに行つた山林技師の木村さんがゐた。

嫁に來てからは、皆な離れ〴〵になつて、仲の好いその木村さんですら、いつか疎遠になつて了つた。

『いゝえ、から駄目なんですよ。……これの弟の方は、それでも少しは好いのですけども。』友達は、おまさの後に遠く離れてゐる二人の男の兒を見て、『何方の坊ちやんですの？　弟さんの方ですか。』

『え。』

『そんなことはないでせう。』

おまさは笑つて見せて、『何うせ、駄目なのは知れてゐるんですけれども……』

『いゝえ、唯、試驗だけさせて見ようと言ふんですから。』

で、二人は、大勢の人達の行つたり來たりする間で、立つたまゝ話した。おまさの男の兒達も傍に寄つて來て挨拶したりした。

子供の試驗の話から、つゞいて、子供の話が出た。『まア、さうですか、貴女も五人？　お總領は、あのお坊ちやんですか。』

『いゝえ、まだこの上に、娘が一人あるんですよ。』

『さうですか。もう、それが十七に……。さうですか。本當に早いもんですね。私どもでは總領がこれで、あとが男が三人、末が女ですけれど……。ですから、それはやかましくつて、一日騷ぎづめで暮してゐるんですよ。』

『結構ですね。男のお子さんがお四人では――』

兒に合格させたいといふ氣分があたりに漲り渡つて、中には受驗者當人よりも、却つて保護者の方が眞劍に見えるやうな人達もあつた。ある母は家を出て此處に來る間、絶えずその男の兒を激勵した。

一度群集の中にその友達の姿を見失つたが、校舍の方へ行かうとして、ふと向うからその友達のやつて來るのにおまさはぱつたり顏を合せた。

友達の方から聲をかけた。『まア、伊東さんぢやありませんか。さつきから、何うもさうだと思つてゐましたんですけども。』

『私も、さう思つてをりましたんですよ。今度見附けたら、屹度聲をかけようと思つてゐたんですよ。』なつかしさうに歩み寄つて、『矢張、あの、試驗ですか。大變な人ですね。……それにしても、貴女はちつとも、お變りありませんね。今も、さう思つてゐたんですよ。あの時分の通りだと……』

『いゝえ、もうすつかりお婆さんになつて了ひましたよ。』莞爾と笑つて見せて、『だつて、隨分年が經つたんですからね。もうかれ是れ二十年……』

『さうですね。さうなりますかね、月日は早いつて言ひますが、本當ですね。』かうおまさは言つたが、傍にゐる男の兒を見て、『このお兒さんですか。』

『え。』

『お出來になるんでせう。』

總領の方は、今、中學の二年生で、昨年、矢張かうしてこゝに來て、入學試驗を受けて、不合格だつた經驗があるので、かう言つて、母親の袖を引いた。今年試驗を受けようとするのは、その弟で、何方かと言へば、小柄な色の白い兒だつた。

『何うせ、受かりやしない。滿ちやん、乙ばかり取つてゐるんだから。先ちやんにさへ受からなかつたんだもの。とても駄目なのは知れてゐるけれど、先きにまた試驗を受けなければならないことは何遍もあるんだから、經驗のために受けさせて置くんだよ。』こんなことを言つて、おまさは、總領の兒と弟とを伴れて、今朝早く郊外の宅から電車に乘つてやつて來た。去年總領の男の兒の受ける時には、親戚の青年が伴れて來て吳れたが、今年は役所に出てゐて、さういふ暇を持つてゐなかつた。

おまさは、總領の男の兒の言ふまゝに、一二間廣場の方へ引返して來たが、しかし、その眼は矢張昔の友達から離れなかつた。さつき顏を見合せた時、向うでも此方をちらと見返した。知つてゐるに相違ない。昔の友達が來てると思つたに相違ない。しかし、そんなに仲を好くした譯でもないし、口だつてあまり利いたこともなかつたんだから、知つてゐて知らぬ顏をするかも知れない。こんなことを思ひながらおまさは立つてゐた。人は出たり入つたりした。髯の生えた男、洋服を着た紳士、飛模樣の派手なコートを着た若い女、金緣の眼鏡をかけた女敎師らしい女、退職した軍人らしいと思はれる岩乘な體格をした男、さういふ人達は、皆一人づつ伴れて來た男の兒達の父母なり姉妹なりであつた。何うかして自分の

二人の母親

大勢の中でちよつと顏を見合せた時から、おまさは、『田上さんだな』と思つた。と　無邪氣で遊んだ小學校の庭や、唐人髷に結つて赤い布をかけた時分のことが脈々と思出されて、言ふに言はれないなつかしさを感じた。多い友達の中では、一番よく出來て、自分などは傍にも寄りつけなかつた人ではあるけれども、かうして年を隔てゝ逢つて見ると、おまさは何か口をきいて見たいやうな氣がした。

おまさは昔の友達の姿を目送した。友達も矢張自分と同じやうに、男の兒を伴れて來てゐたが、何かその兒に言ひかけたり、脊の高い女と話し合つたり、大勢男の兒達の集つてゐる方を覗いて見たりした。庇の出ない束髮に、茶色がかつたお召の羽織を着て、黑繻子と縮緬の腹合せの帶をしめて、餘り派手でない扮裝をしてゐた。高い脊、鋭敏な眼、厚い唇、年こそ取つてゐるけれど、その時分と少しも變らない友達をおまさは見た。

『母さん、其方に行つたつて駄目だよ。時間が來なくつちや始まらないよ。』一人伴れて來た男の兒の

山から來る水は、齒が沁みるほど冷たく且つ淸かつた。渴いたかれは、暫しは柄杓を口から離さうともしなかつた。柄杓の中の水は、きら〳〵と日に照つてかれの顏に反射した。

『難有う！』

かう言つて、かれはやがて其處を去つた。かれは自分の後で女達の何か言つてゐるのを耳にした。また心が動搖し始めた。しかしそれよりもかれは饑ゑてゐた。一軒々々飮食店をさがすやうにしてかれは步いた。

ところで揃つて毬をついてゐた。

かれは段々町の中へ入つて行つた。淺黃の色の着物を着て、手桶を兩手に提げて向うから少女が歩いて來た。かれは其方を見た。と、少女もめづらしいものでも見るやうに凝と此方を見かへした。色のぬけるほど白い顏と肌と脛とをかれは見落さなかつた。

段々人達は多くなつて來た。百姓らしい顏の表情をしたものもあれば、商賈としか何うしても思はれないといふやうな形をしてゐるものもあつた。ある人とある人とは挨拶して通りすぎた。

ある角に來ると、其處には太い樋から綺麗な水が瀧のやうに大きな貯水桶に漲り落ちてゐた。そしてその周圍には、六七人の女達がてんでに手桶を下げて來て、それに水の滿ちるのを待つて、それを提げて向うへ行つた。さつきの少女も此處からやつて來たのであつた。

女達は嬉々として話した。赤、茶、淺黃などの着物の色が鮮やかに其處に混り合つて見られた。何か言つて面白さうに笑つてゐる聲も賑やかにした。ある女は腰卷の下から白い脛を見せてゐた。

『水を一杯下さい。』

かう言つて、かれはヅカ〳〵とその女の群に近寄つた。

女達は揃つて此方を見たが、互に眼を見合せただけで、暫しは何も言はなかつた。最後に、中で年を取つた女が默つて其處にあつた柄杓をかれに渡した。

の色は晴れて灰色から濃い紫色に變つた。

瀨の音が冴えて湧立つて聞えた。

一つの村落がかれの前にあつた。それは今朝立つて來てから、初めて見る大きな村落であつた。或は町といふ方が適當であつたかも知れない。

雪の深い北國の習ひ、屋根は高く、庇は皆な長く突き出して……。そして屋根は屋根と重なり合つた。半鐘臺が蒼空にくつきりと濃い線を劃して立つてゐた。

新しい家などは何處にも見ることが出來なかつた。古い壁、古い羽目板、古い門、そこからは筒袖を着た男だの、短い袴を着けた女などが出て來た。

女の頰はそれでも流石に紅であつた。

高原の町――そこでは、人達は、庇まで埋めて了ふ深雪と、風と、雨との中に埋れて住まなければならなかつた。夜は月が靜かに照した。

かれの心はまだ依然として動搖してゐた。不安――それは以前の不安とは、丸で意味の違つた不安がかれを襲つて來た。矢張、一宿驛だといふやうな氣がせずには居られなかつた。

其處此處に、子供達が何處でも見ると同じやうな無邪氣な遊戲をつゞけてゐた。かれ等は、此處等にあまり見當らない不思議な旅客の入つて來たのをも氣にも留めなかつた。小さい女の兒達は、壁の下の

『然り、意思なるが故に、求む。求むるが故に必ず得ニ千』の斷案を得たやうに、かれは走つて岨道を驅け下りた。

立留つて、また飜つて、やゝ靜かに氣を落着けて考へる。かれの周圍にあるとあらゆるもの、すべて求めてゐないものはないではないか。山も求めてゐる。川も求めてゐる。そして發達してゐる。そして完成に向つて不斷のリズムを刻みつゝある。鳥も求めつゝある。獸も亦求めつゝある。

何を苦しんで、人間のみ疲勞し、飢餓し、停滯し、嗟嘆し、苦悶し、絶望するのであらうか。何を苦しんで、人間のみ不滿足に、不平に、悔恨にその一生を終るのであらうか。生命は、衣食ではない。飢餓せざることを唯一の目的としてゐることが生命ではない。また、死が人間の生命の終局ではない。然るに、人間は衣食を得ることにのみ沒頭し、死を恐るゝことにのみ精神を徒費した。鳥の如く、獸のごとく自由でないのはそのためだ。誰か衣食を得ずして、飢餓を免るゝものがあるか、また誰か死を恐れてしかも竟に死せざるものがあるか。衣食を求めよ、死を求めよ、そして自然の完成を求めよ。

ふと、また我に返る。少くとも自分は大飛躍をしたやうに思はれる。それと共に、一方では、自分の言葉に實行の伴はないことがいくらか不安になつて來る。もつと、靜かに考へて見なければいけないやうにも思ふ。かれは少し落膽して步調をゆるめた。

路は岨道を下り盡して、前に、坦々とした高原が展けた。明るい日影は一面に四邊にさし渡つた。山

るであらう。如何に貧しいものも、如何に富んで貴いものも、單に貧窮、富貴として、爾の眼の前には現はれぬであらう。社會の不平均を憤る社會主義者も、單に社會の不平均を瞋るばかりで居られなくなるだらう。帝王も帝王の王座を去つて、汝と親しく言葉を交すであらう。憐れむべき汝、妥協に甘んずる人間よ。微溫い第三者の話說の境涯に甘んずるものよ。何故に、何故に、その根本にかへらざる。何故にその源頭に溯らざる？

張り切れたやうに心がはずんで、全身がわな〳〵と戰慄した。ある言ふに言はれない大きな感動が、凄じくかれの心に押寄せて來て、ゐても立つてもゐられないやうな氣がした。さうだ。その英斷だ。彼はまた繰返した。その英斷だにあらば――この根本に溯る英斷だにあらば、水も酒に均しく、土芥も寶石に均しい。喜悅の泉、苦悶の泉、皆同じところから湧出して來るのだ。性の痴態も、接吻も、死も、皆なその生命の完成に向つて波打つゝある無限のリズムだ。風が吹き、雨が降り、霜が置くのと、何の變りもないのだ。さうだ、それに違ひない。かう思ふと、かれは雀躍した。

自然の意志――突然その字が白晝の空氣の壁の中に歷々と現はれた。そして、かれの前に浮動して動いて行つた。

自然の意志といふ字ははつきりと鮮かに、丁度子供の時分、村の學校で、脊の高い白鬚の敎師が、ヲヨオクを振つて、ボールドに大きく書いた字か何ぞのやうに。

死者の再び蘇つて來ることをかれは想像した。自覺せずして、唯犬死に死んだ死も、決して徒爾ではないといふことをかれはつゞいて發見した。さういふ人達の未死の魂は、必ず再び蘇つて、その生を完全にしなければ止まないのであると考へて來た時、かれは、思はず、自然の愛の大きいのに、瞠若として、打伏して、手を合はせて、其處に跪かうとした。

林に歌ふ鳥も、野にさまよふ獸も、皆なその大きな自然の愛の下に、その各自の持つた生命を完成しようとしてゐるのであつた。そのために鳥は鈴のやうな玲瓏とした聲を立てた。

そのために、草木はさゝやかな囁きをあたりに振はせた。石、無心の石にも、矢張同じやうに、自然の大きな愛は、平等に光被されてゐるのだつた。

かう思ふと、心は俄かに生々とした。汽車を厭つたり、煤煙を避けたり、市街の騷音に耳を塞いだりしたのは、自分だつたらうかとかれは思つた。つゞいて文明の罪悪、人間の墮落、社會の不平等を憎んだ自分が今更のやうにあはれに小さく見え出して來た。其處だ! かうかれは絶叫した。すべてを捨てよ、すべてを猛火の中に入れて、一甞めになめ盡させよ。一度此の英斷を敢てすれば、その時は、その時は、――

如何なる重荷も重荷でなくなるであらう。如何なる小さなものも單に小さなものとしては汝の眼には映らぬであらう。猛虎も汝の前にひれ伏すであらう。毒蛇も汝を害さないであらう。蜂もその針を收め

ある光景は血汐で滿された。白い肌に當てた氷のやうな刄、魂ぎるやうな叫聲、傍より炎々と燃え上る業火――かと思ふと、『では一緒に……』かう言つて抱合つて死なうとする二つの魂のあとを趁つて、『私も一緒に、』と一つの魂は離れまいとして追ひかけて來る。其處では、人間の生命は戰場の露と消えるよりも脆かつた。人々は皆な喜んで滿足して死に向つて進んだ。

熱い接吻から死に、でなければ、沈默した佛の前に……。かうして人々はその苦惱から免れようとした。

さまざまの光景やら、苦悶やらが再びかれの眼の前に蘇つてあらはれて來たので、かれは思はず立留つて、兩手で眼を蔽つた。と、ある集中された思想が瀧のやうにかれの心に湧立つて來た。自然、この大きな自然は、何故に、さういふ耽溺と痴態とをその中に容れてゐるであらうか。何の必要があつて、さうした心と姿とを人間の中の自然に賦與したのであらうか。自然は滅亡を恐れざるか。自然は壞敗を恐れざるか。

その答は來らずに、反對に自然の力といふものが肯定された。それでなければ、この人間は却つて絶滅の運命に逢はなければならなかつたのであつた。それでなければ、人間の幾千萬年の連續を見ることが不可能なのであつた。かれは自分の殘虐をのろはうとして、却つて其處に自然の大きい愛を發見した。

然て、それが際限がないやうに思ふと、ぢつとしてゐられないやうに心が焦立つ。かれは何遍ある新しい心と新しい氣分とを抱いて、新規蒔直しの飛躍を試みて見たかわからなかつた。かれは街に出て叫んだ。野に出て叫んだ。ある階段に達した時は、かれは群集の巴渦をその前に見た。

その人達は襤褸を着て、拳を擧げて、獸のやうに叫んだ。水がないといふもの、食物がないといふもの、寢るところがないといふもの、さまざまの要求と絶叫とが前に滿ちた。

かれはその人達のために衣食を與へんことを神に祈つた。敬虔な熱烈な心だつた。しかし、その結果、かれは何を得たであらうか。

群集は矢張群集ではなかつたか。衣食を求める者は矢張唯の衣食を求めるものではなかつたか。

かれはさびしく其處を立去つて行く自分の憐れな姿を見た。

ある時は歡樂と淫蕩との明るいしかし爛れた空氣がかれの前に展けた。其處では性の苦惱がかれを滿遍なく取卷いた。苦と樂との兩面、喜悅と悲哀との兩面、妥協と眞劍との兩面、さういふものが複雜にかれの體に絡み着いた。其處には男と女とが手を取つて空中に翔けて行くものもあれば、一人地上に取殘されて、涙を流して、顚轉反側するものもあつた。ある男の眼は死んだ鬼の如く血走り、ある女の胸は大波の如く波打ち、ある男の頰には瀧津瀨のやうに涙が流れた。かと思ふと、この世にも稀れな喜悅は、朝日にかゞやいた花のやうに著しく開いて散つた。

かれは靜かに步を進めた。

聖者の辿つた道、大德の進んだ道、さういふ道がかれの眼の前にも見えた。それを思ふと、沙漠の野にも花が咲き、乾燥した心にも露が下りるやうに思はれる。『しかし、今は出來なくとも、自分は確かにそれに向つて進まなければならない。現に、進みつゝある。』かう思ふと、其處にあらゆる物を超脫した眞の正しい道があるやうな氣がする。

路は林から丘へと登つて行つた。その丘は何處まで行つて盡きるか、またその丘の陰には水を乞うて飮むやうな人家があるか、しばしやすんで飢餓を醫して行くやうな村落があるか、それはかれには少しもわからなかつた。

かれは唯步いた。

心と體とは、依然として動搖した。押し詰めて行くと際限がない。大空は依然として、何の關係もなくかれの頭上を蔽つてゐる。山は高く高く聳えてゐる。野には雲雀はもう揚つてゐないけれど、蜂はぶん〳〵と長い唸聲を立て、蝶は花のある方へと靜かに飛んで行つた。丘を一つ越すと、谷川の瀨は急に高くなつた。

心のバランスは上つたり下つたりする。そしてこの心が右に偏つた時は、世界のすべても右に偏り、左に偏つた時には、自然のすべても其方に偏つたやうな氣がした。何處まで行つても、同じ心で、同じ自

旅客は疲勞と飢餓とに絶望したやうにして、暫し其處に腰をやすめた。暫し行つて、振返つて見た時にも、旅客は猶ほ立上つた樣子も見えなかつた。

長い行路を行く人達に對する同情が油然として起つた。右するも、左するも、矢張同じ行路である。同じ疲勞と、同じ飢餓と、同じ絶望とは到る處にある。かの旅客も、矢張水を飲み、冷たい飯を食ひ、薄い蒲團に寢なければならないのである。林の角の長い休憩、ある山からある山への嶮しい路、食ふもの丶ない廣漠とした路、その時々の苦と絶望とをかれは歷然と眼前に浮べた。

突然、ある思想が湧き出すやうに起つて來た。その思想の中にはあらゆるものが含まれてゐる。血腥さい香が世界を蔽うてゐる。流血淋漓としてゐるのは、問はないでも、戰鬪の行はれてゐる證據である。そしてその戰鬪は、坐臥進退、覺めてゐる時も、眠つてゐる時も、常に小止みなく戰はれてゐるのである。墻にせめぐ兄弟、肉體の束縛に自由を失つた父母、夫妻、すべて皆な醫すことの出來ない戰鬪である。かう思ふと、かれはかうしてぢつとしてはゐられないやうな氣がした。誰かこれを救ふやうな大慈大悲の救世主が生れては來ないか。

他を待つまでもないことだ。自分がやつたら、何うだ。かういふ聲がかれの體の何處かでした。その天職の立派なことをかれは想像した。しかし、かれには、それが出來るであらうか。迅雷のやうな獅子吼をすることが出來るであらうか。

自分の通つて來た足跡の周圍には、必ずある思潮の痕が漲つてゐたに相違ない。現に、その痕に集つて來た人達も尠くはなかつた。かれ等は自分にある物を求めた。自分からある光と糧と魂とを得ようとした。自分は確かにそれらのものをかれ等に與へることが出來た。しかし……しかし……

押寄せて來る憂愁と杞憂とをかれはつとめて排した。艱難と辛勞、それは飽くまでも突破しなければならないとかれは思つた。

日影はいつか高くなつてゐた。朝の氣分はいつの間にか消えて、山も、谷も、村もすべて爽やかな影と姿とを失つた。俄かに起つた風が路傍の林を鳴らした。

旅客が一人向うから來た。矢張長途に勞れたといふ風をしてゐた。大きな笠、破れた衣、草鞋ももう破れて、顏には蒼白い蒼鬱な表情が見えた。

すれ違ひながら、

『――にはまだ餘程ありますか。』

『さうですね、まだかなりあります。』

これを聞くと、さもく失望したやうな顏をして、

『何か、食ふ所はないでせうか。』

『この近所には、何もありませんな。』

葉がかれの口に上つた。

何うした聯想か、破壞と言ふことがすぐあとをついて出た。「破壞ばかりして來たやうな一生だ！」と、かれには、かれの過去が歴然と現はれて見えた。後悔も追恨もない。また別に心を躍らせるやうなこともない。しかし唯さびしかつた。世にも稀れなさびしさが矢張今もかれの體を取卷いてゐた。

「合はせようとする心を、何故自分は合はせようとはしなかつたであらう。何故、別々に物を考へるやうな習慣をつけたのであらう。」

しかし、其處が自分の價値だ。それあるがために、自分はかうして自己に深く入つて來ることが出來た。と思ふと、かうした人生の一旅客と言ふ感じが、ある輕い矜持と力とを無限に添へて來るのを見た、一人、唯一人、かうして野にさまよつてゐるものゝ價値、さういふ點が尊いと思ひ上る。しかし、そこからはすぐ轉ぶやうに墜落した。丁度水中の杜か何かのやうに――ばつたりと。

過去の追憶と、自問自答との盡きない連續の中にも、かれは益々歩を進めて、斜坂から山へ、山から森へと次第に深く入つて行つた。墜落しても墜落しても、かれはそこへすがり附くやうにと心がけた。それは丁度かれのために取つての唯人の足がかりの場所のやうであつた。しかし一方では、何か心配になり出して、感情が馬鹿に昂進した。根據のない――根據のないと確かに知れてゐる惻々悶々の情が張り切れるほど募つて來て、一方では暗い憂愁が堰を切つた水のやうに烈しく強く漲り寄せて來た。

しかしこんなことを考へるのは、愚だ。自分には何のかゝはりもないことだ。かうは考へては見るが、それでもまだわからない。仕方がないのでかれは成るべく早くこの林の傍を通り過ぎようとした。

無闇に神經が跳り出した。しかし、これを靜めるには、さう骨が折れないのをかれは知つてゐた。で、成るべく思想を組立て、形をつくり、ちやんと理路を辿つて見るやうに心がけた。暫くの間に、心が整然として來て、自分で自分の統一が出來て來た。文明の罪惡などと言ふことがまた思ひ出された。

今度は過去の光景が、淡い情緒を伴つて靜かに頭の中に上つて來た。其處にも、此處にも、苦悶したり、懊惱したりする自分の姿が見えた。垣根に添つた路を歩いてゐる自分を先づ最初にかれは發見した。と、不思議にも、其時の光景が長い間靜かにかれの頭に留つてゐた。ある家のある黄い壁、明けるとベルのけたゝましく鳴る格子戸、路は昨夜の雨交りの雪で一ところは泥濘になり、一ところはまだ雪が白く殘つてゐた。そこから出て來たかれは、高い足駄を穿いて、垣に添つて、靜かに川の方へ歩いて行つた。

土手から川へ出る路には、篠原が昨夜の雪に埋れてゐた。空は矢張、今日のやうに晴れてゐた。土手に上ると、川は唯一目に見下された。浚渫船、白い帆、川を隔てた雪に蔽はれた家屋、白い鷗は影をはつきりと水の上に落して、そして往つたり來たりした。「何も彼も過ぎ去つた昔だ！」思はずかういふ言

ある才能を持つてゐながら、それを十分に發揮することが出來ないことが夥しくかれの心を刺戟した。すぐ恐ろしい憂鬱性の思想がかれの全身を領した。自分の行路、それが夥しく不安心で、無氣味で、そして乾燥してゐるやうに思はれた。

溜息がひとり手に出た。もう美しい朝も、靜かな自然も、山も、谷川も、雲雀の鳴聲も何も彼もかれの前にはなかつた。今まで通つて來た過去と、これから前にひろく横はつてゐる將來と、唯それだけが意地わるく、且つ執念くかれの頭にこびり附いた。

過ぎ去つた光景が、一つ〱繪のやうになつて、かれの前に現はれる。ある村落の中で惡戲な兒童と一緒になつてあばれてゐる姿、裏の脊戸で赤い襷をかけた女と話してゐる姿、父母の心配した顏、籾殼のぷす〱燻ぶる匂ひ、闇の中に微かに見えてゐる烟と赤い火……と、急にそれと前の山の嶮しい姿とが一緒になる。これから行く先々の豫想された光景が混り込む。――奥の奥の山の聳えた上に靡いた雲がまたそれへと混り込まれて見えた。

氣が附くと山毛欅の林が路傍にあつた。そして、それが不思議に思はれた。かうして何十年、同じところに立つてゐて、同じやうな四季の節序に逢つて、風が吹けば鳴り、雪が降れば伏し、霜が置けば萎れるのは、何うしたことだか、かれにはわからなかつた。そしてまたさういふ平凡なことが不思議に思はれたり氣になつたりするのもわからなかつた。

ゐた。ある家の軒からは、烟が薄紫に眞直ぐに上つて、それが近くに見える山よりも高く見られた。

一人の農夫がかれを掠めて通りすぎて行つた。

『好い天氣ですなア。』

かう挨拶した。

眞心で、誰にも同じ心で、かうして挨拶されたのがかれには嬉しかつた。單なる言葉、平凡な一つの音にすぎないけれど、それでも其處には汚ない旅人をさげすむやうな調子は少しもなかつた。かれは立留つて、二言三語話をした。

『よく、精が出るね。』

『もう、遲いんでごわすア。』

『でも、麥はよく出來たね。』

『お蔭でな。天氣都合がよかつたもんだから。』

かういふ野にゐて、唯一つの大きい自然を對手にして、靜かに暮してゐる人達は幸福だ。

かう思つたかれは、その農夫の姿が朝の空氣の中に段々遠くなつて行くのを長い間見送つた。

しかし、それも瞬間であつた。暫くすると、かれの心はすつかり變つた。何處から、さういふ心が起つて來たかと思はれるやうに、俄かに暗く重苦しくなつた。自分の爲なければならないことと、自分が

しかし、さう考へてゐる中に、心はいつか平靜を失つて、何の事はない、權衡の一方に俄かに重い石でも加はつたかのやうに、兎のやうに躍り出した。かれはかうして草花や、雲雀や、大地や、雲や、さういふものと一緒に考へて、ぢつとしては居られないやうになつた。

で、かれは再び歩き出した。

路は段々高くなり出した。下には溪流が瀨をつくつて白く流れてゐた。石がごろ／＼した。

ふと、ある村落が見え出した。

それは今まで見た村落のさまとは、丸で趣が違つてゐた。今までは高い尖樓、石造の巍々とした家屋、庇の短い軒の連つた屋根、さういふものばかりを見て來たが、此處では、屋は屋と重なり、家は家と重なつたやうになつて見られた。ある白堊の土藏の向うには、嶮しい山と蒼い大きい空とがレリーフのやうに覗かれた。

斜坂には、麥畑につゞいて、野菜畑が碁盤の目のやうに、青い黃い樺色の區劃をはつきりと見せた。朝早く、野良に出た農夫が、肥料桶を擔つて、彼方へ行き、此方へ行きしてゐるのが豆人形のやうに見えた。

何といふ美しい朝だらう。何といふ大きな自然だらう。青い空には、明るい光線をかぎつて、襞の多い山が重なり合つて聳え、谷川がその間から流れ出して、平和な村落が點々として其處此處に散在して

たりする話と、通り一遍に取換される無氣味な挨拶と……

頭の上を蔽つてゐる蒼空が、急にかれの心に蔽ひ冠さつて來るやうなのを感じた。胸が狹く張詰めたやうになつて、艱難や辛苦や煩悶が、自分の體から離れて行つたやうな氣がした。胸の中には、蒼空が滿ちた。胃にも腸にも、あらゆる內臟に青空が入り込んで來た。

胸が一杯になつて、歩くにも歩けないやうな氣分になる。そして、それがある大きなものに對する渴仰に近いやうな心持である。朝の光の充ちた土や、木や、草や、それと自分とは同じやうな氣がする。で、かれは大地に接吻したいやうな敬虔な心持を抱いて、暫く其處に腰を休めた。

つい其處から雲雀が高く囀りながら空に揚つて行つた。其處には朝露のまだ乾かない麥畑が斜坂になつて下つてゐて、向うに白い朝の雲が見えた。日の光線に彩られて、ある處は、鳥の翼のやうに見えたり、自分の爛れた心のやうに見えたり、女の虛僞の多い心のやうに見えたりした。

傍の草むらには、赤い黃い白い花が咲いてゐる。いかにもうれしさうだ。朝の晴々した空氣に浸つて、無限の歡樂に醉つてゐるやうにも、乃至は自然から得た生命に甘んじて、それに服從して、てんでに、自分の職分を盡してゐるやうにも見えた。滿足だ。かう言つて花は咲いてゐるやうに思はれた。これに比べては、人間は何んなに淺猿しい、利慾一遍な、爭鬪の血に塗みれた動物だかしれない。人間は爭鬪のために、砲を拵へ、銃劍を拵へ、飛行機を拵へ、爆彈を拵へ、そして平氣で血を流した。

つて微笑した。ある形はかれに近寄つて追恨の思を寄せた。黒髪が川の中の藻のやうに思へて、それに白い花が咲いた。その花の氣高い香氣、それは遠い〳〵今は手も心も屆かないところにあるのだけれども、しかもあり〳〵と薫つて來るやうな氣がした。朝の晴れた空氣の中に、かれの體は浮いてゐるかのやうに思はれた。

これからかれは大きな山を越えて行かなければならない。一歩一歩踏んで登つて行かなければならない。其處には文明の利器の汽車もなければ電車もない。灰色をした堅い土、それを一歩一歩踏んで登つて行かなければならない。でも、幸ひに、心を亂したり、胸を騷がせたりする騷音がない。人を毒する文明の騷音がない。

汽車で來た旅をかれは想像した。ゴトン、ゴトンと動く音、扉の鳴る音、一種言ふに言はれない石炭と油との匂ひ、埃の匂ひ、ある町の空は煤烟で黑く蔽はれて、樹といふ樹には綠の色もなかつた。線路に添つた川は黃色く濁つてゐた。そこらを飛んでゐる蝶の羽さへも全く汚れ果てゝゐた。

長い夜と長い晝とだつた。夜は上から石油のランプの底が頭の上で氣味わるく搖れて動いた。誰れも彼れも少しの席を爭つて、毛布をかぶつて寢た。自分の足が他人の體を侵さうが、乃至は自分の體が隣人の胸に蔽ひかぶさらうが、そんなことは何とも思つてゐなかつた。人達は唯眠ることを考へた。睡眠に由つてのみ唯々疲勞を忘れようとした。それに引かへて、晝は平凡な野と煤烟に曇つた町とが續いた。單調と、退屈と、盡きない饒舌と、上ついたお世辭と、第三者の微温い噂話と、金を儲けたり損をし

かれは久しい間、この實在といふことに苦しんだ。遁れようとしても駄目なれば、振り拂つても駄目だ。目が覺めれば、屹度其處にその實在がゐた。體、壁、蒲團、枕、窓、月の光、蒼空……。艱難に打克たなければならない。あらゆる實在の艱難、あらゆる實在の辛苦、離れ難ない愛慾――かれは目が覺めると、もう再びとは眠られなかつた。で、起上つて窓の戸を明けた。

月光は次第に薄白くなつて行つてゐた。朝が來た。爽やかな朝、美しい空。で、窓の傍に寄つてかれは新しい大氣を心ゆくばかり吸つた。しかし行先のことがすぐ胸につかへた。

廣漠とした沙漠の中、ところ定めず、其日々々と歩いて行つてゐるやうな生活だ。何うしたらそれからかれは遁れることが出來るか。

やがて鳥の聲が聞えた。矢張鳥にも夜明の喜悅はあるらしかつた。高い朗かな聲が鈴のやうに四邊に響き渡つた。林は皆な生きて動いた。葉は朝露に潤つて、生効のあるやうな囁きを振はせた。

かれは朝飯を濟すや否、急いで支度をして其處を出かけた。一宿驛――長い人生の中に一夜過した一宿驛、それがかれの立つて來る後に見えた。窓、入口、入口のところに出てゐる招牌、かれは昨夜遅く其處にやつて來たことを繰返した。つゞいて、昨日、一昨日歩いて來た山や、野や、丘や、谷や、人家を頭に描いた。

樂しい幻像やら、苦しい夢やら、美しい花園やら、種々なものが其前に顯はれた。ある姿はかれに向

山の町まで

夜遲くある町に着いた。空しい四壁の中で冷めたい飯を食つて、煎餠のやうな蒲團にくるまつて寢た。それで滿足しなければならなかつた。

少しうとうとしたかと思ふと、驚くべき騷音が耳のあたりに聞えた。確かに人の叫ぶ音ではあるが、それが何處から來て何處へ消えて行くのだかわからない。帛を裂くやうな悲痛の聲と、叱咤するやうな凄じい聲とが混り合つて、ある者の倒れたやうな絶望の叫びが何處かでした。身を動かさうとしても動かない。助けに行つてやらうと思つても其力がない。……ふとその騷音が何處かに消えてなくなつたと思ふと、窓からさし込む月の光が明るく枕元を照してゐた。

明るい銀のやうな光だ。いくらか黎明の光も雜つてゐると見えて、何處か薄白いやうなところもあつた。艱難の生活がいつの間にか再び彼の心を領した。實在の不思議は、繩か何ぞのやうにその全心に絡み附いた。

誰も知る者もなく月日は靜かに經つて行つてゐた。其間には、二階に行つて寢すごして、夜遲く歸つて行くこともないではなかつたが、誰もそれを咎めるものはなかつた。小婢はいつも茶の間で裁縫を出したまゝ打伏になつて轉寢をしてゐた。

半年ほど經つた頃には、煙草屋の店では、學校用品を少しづつ置くやうになつて、ある日は大工が二人まで入つて、その店の一部の模様替などをしてゐた。主婦はをり／＼綺麗におつくりをして、仕入をするために、外に出かけて行つた。

中田は何うかすると、書間、家の日當りのいゝ縁側で、算盤を持つて來て、頻りに何か物勘定などをした。遠くの學校に行つてゐる息子への手紙には、『病氣と言へば、止むを得ず候へども、成るべく節儉を守られたく、今月は、いろ／＼都合有之、これ以上送金相叶はず候間、それにて、何ごにか間に合はせるやう致され度』などと書いた。

眞夜中に、小婢が起きて、病人の世話をしてやつてゐる氣勢がした。かれは不思議な氣がした。自分には、かういふ病妻があつて、そのために、長い月日を暗く不愉快に送つて來たのであつた。あゝいふ歡樂が底に潜んでゐるものとは夢にも知らずに、つまらなく暮して來たのであつた。

誰も知る者がないといふことも、かれには愉快であつた。あくる朝は早く起きて、竈の下に火を焚きつけたり、庭や玄關の前やらを掃いたりした。日が自分にばかりに照るやうに明るく樂しく感じられた。四十年一日のやうにして住んで來た家だ。しかし、初めの妻が來た時にも、今の妻と結婚した時にも、今日のやうな快樂と喜悅とを感じたことはなかつた。掃くにつれて、箒の目の正しく綺麗について行くのもかれには嬉しかつた。

かれは井戸の水を汲みに來た隣の細君に聲をかけた。

『好い天氣ですな。』

『左樣で御座います。』

『こんなに好い天氣は滅多にありませんな。』かう言つて、かれは晴々した顏色をして箒を運ばせた。

かれはそれから度々煙草屋へと出かけて行つた。そしていつも長火鉢の前に坐り込んで、茶を飲んだり戲談を言つたりした。玄の兒の學校に出かけて行つたあとは茶の間はしんとした。時々店に客が來る位のもので、滅多に訪ねて來るものもなかつた。

『いゝのよ。もう、ことわつちやつたから。八千代二つで、五圓兩替してやつちや、商賣になりやしない。』

で、二人はまた話し始めた。中田の買つて來た鷄の雜物が、安物の瀬戸引の鍋に焦げつく時分には中田もうかなり醉つてゐた。『好いとも……好いとも……世話してやるとも、』などと中田は大きなことを言つてゐた。女は女で、醉つて、何も彼も忘れたといふやうにして、頻りに男に戯れかゝつた。

五

この年になつても、かういふ歡樂はあるものかと中田は思つた。かれは世の中の底の底に隱れた深い祕密を初めて此の年になつて知つたやうな氣がした。これまでに知合つた女からは、とてもこれだけの歡樂を得ることが出來なかつたことなどをかれは繰返した。

『不思議だ。不思議だ。』

かれは其夜、家に歸りながら、何遍となく繰返して自分に言つた。

金を當てにしてゐるといふことは、十分にわかつて居るが、しかし、その女の濃い情は、それとは別に、全く別にかれの體に深く絡み着くやうに思はれた。冷めたい床の中に入つてからも、かれは長い間目覺めてそのことを考へてゐた。

『貴方だつて、さうでせう。』

『さうさな、まア、一人のやうなもんだ。』

『だから、好いぢやありませんか、頼りになつて下さつたつて。』

『それは好いさ。』

女の顏を見て、『赤くなつたね。すつかり赤くなつた。そんなにたんと飮めるんぢやないんだね。』

『そんなに飮めやしませんとも……。でも今日は何だかきまりが惡いんですもの。』

その時、ふと下から、

『母さん、母さん。』

主婦は立たずに、體を斜めにして階梯から下をのぞくやうにして、『何だえ？』

『あのね、おつり。』

かう女の兒の言ふ聲がした。

『そこにないかえ。』

かう言つたが、立つて下りて行つて、やがて暫くして戻つて來て、『八千代を二つ買つて、五圓でおつりなんて言ふんだもの、氣のきかないお客だねえ。』

『細かくしようか？』

りがわるいんですもの。』

『ほ。』

男は笑つた。

『さア、お上んなさい……そんなに、笑ふもんぢやありませんよ。』

盃を受けて、『しかし、不思議だな。』

『何うして？』

『何うしてつて、つい此間まで貴女と言ふ人が世の中にゐるつて言ふことなんか、丸で知らなかつたんだもの。』

『私だつて、さうですよ。本當に不思議ですね。』かう言つたが、すぐ一歩深く入つて、『その代りこれから賴りにしますよ。好う御座んすか？』

『あはゝ。』

と、中田は笑つて、その前にあつた盃をぐつと飮干した。そして、すぐそれを女の方にさした。

『だつて、女は一人ぢや淋しいんですもの。賴りになつて吳れる人がなくつちや、女は何うしても駄目ですよ。』

『それや、ね、何うしても、一人ぢやねえ。』

主婦はやがて炭取と水差とを持つて上つて來た。
『折角、お約束しても何にもないんですよ。』
『いや、これで澤山――』
『道具なんかもね、もとは少しはあつたんですけども、すつかり賣つたり何かしたもんですから。』
かう言つて、笑ひながら、主婦は德利を火鉢の上の藥罐の中へ入れた。
暫くしてから、
『さア、おひとつ。まだ、よくつかないかも知れませんけども……』
『これは……』
かう言つて、平氣な顏をして中田は盃を取つて酌をして貰つた。
變な不自然な氣分が二人の間に起つて來てゐた。平氣でゐて好いのだか戲談を言つて好いのだかわからないやうな心持で、二人は二三杯重ねた。『これは好い德利だ、佐渡だ、』などと言つて、中田はてれかくしに燗德利を持ち上げて見たりした。
女が頻りに盃を重ねるので、
『飲むんですか、昔から。』
『いゝえ。』長く引張るやうに、艶な眼付をして見せて、『だつて、二三杯戴かなくつちや、何だかきま

『店番はお光ちやんで大丈夫なんですか。』

『えゝ、えゝ、店番だけは、あれで、何うやらかうやら間に合ひますの。』

丸い火鉢に、藥罐をかけて下りて行つたが、暫くしてから、『貴方、失禮だけど、ちよつと上からこれを取つて下さいな』かう言ふ聲が下でするので、中田は立つて階梯のところへ行くと、皿やら椀やら德利やら御馳走やらを一杯に載せた大きな春慶塗の膳を、主婦は下から上へ高く持ち上げてゐた。

二三段下りて行つて、それを手にかけると、

『好う御座んすか、お客樣をつかつて失禮ですね。』

『いや――』かう言つたが、膳に十分、手がかゝらないので、『待つてお呉れ。』

『好う御座んすか。』

『よし、よし。』

かう言つて、座敷の方へ持つて行つたが、もう一度戾つて來て、『もうないかね。』

『ちや、これを何うぞ……失禮ですけども――』かう言つた主婦は、今度は下から小さな餉臺の疊んだのを男に渡した。女の白い長い腕が、薄暗い茶の間の空氣の中に仄かに見えた。

御馳走はないと言つても、それでも刺身だの赤貝の酢の物などがそこにあつた。小さな瀨戶引の鍋の傍には、かれの買つて來た鷄の肉が置いてあつた。

『何ァに……』

『さア、いらつしやい。』

かれが躊躇してゐるのを見て、『私すぐ、行くから。ちよつと、御馳走の支度をして行きますから。』

『さうかえ。』

かう言つて、中田は、茶の間の脇の處にある暗い階梯を登つて行つた。茶の間の暗いのに引かへて二階は明るかつた。葛籠の半壞れたのが二つ置いてあるばかりで道具らしいものはなかつた。長押には誰が書いたかわからない、拙い山水繪の横額がかゝつてゐた。

『今度、私も何か御馳走を拵へますから、貴方も鷄でも買つていらつしやいな。そして緩くり話しませうよ。』こんなことを、この前來た時に女は言つた。『無論、酒でも飲ませる積りに相違ない。』かう思ひながら、中田は其處に既に前に持つて來てあつたメリンスの座蒲團の上に坐つて、袂から朝日の袋を出した。ある期待に向つての心は、かれの顔に一種の微笑を誘はずに置かなかつた。やがて階梯を昇る輕い音がして主婦は茶を運んで來た。

綺麗に髪を結つて、派手な襟をかけてゐるのが、先づかれの眼に着いた。

『でも、私の方には、何にも拵へてはないんですよ。』

かう言つて男を引かずには置かないといふやうな眼色をして、『手がないもんですからね。』

て打消しては見るが、ちやんと女の素振の意味がわかつてはゐるが、しかし、長い孤獨生活のかれの前に、さういふ女がゆくりなく現はれて來たといふことは、かれに取つては、強い誘惑を感ぜずには居られなかつた。

ある夜、矢張其處から歸つて來る途中、『もう、此方のもんだ。もう、此方から出てさへ行けば厭つて言ふ氣遣ひはない。もう大丈夫だ――』こんなことをかれは心の中で叫んだ。何年か消えてゐた愛慾が不思議にもかれの體に生々とした力を以て蘇つて來たのをかれは感じた。

四

かれは角の鳥屋で買つて來た鷄の肉の竹の皮包を其處に出した。

『御馳走さま。』

女はにつと笑つて見せた。で、そのまゝ勝手の方へ立つて行つたが、ちよつと用をしてから戻つて來た。

『二階にいらつしやいな。』

『あゝ。』

『今日はゆつくりしていらつしやい。何うせ何にもおかまひは出來ないけど。』

つた。』でなくちや、七年も、さうして御看病をなすつてゐられるわけがありませんもの。』
『そんなことはありません。』
『隱さなくつたつてよう御座んすよ。』
『だつて、本當ですもの。』
そんなことを互に平氣で話すやうな間柄に二人はいつかなつてゐた。それを中田は家に歸つて來てから、種々に想像して解釋をつけて見た。ある言葉はいつまでもはつきりとかれの頭に絡み着いてゐた。
『何ういふ氣で、あゝいふ口を利いたらう？　ほんの戲談かしら、戲談かも知れない。しかし、戲談であんなことをいふ譯もない。――それぢやおさないしいですね、何處かに好いのが――あゝいふ言葉が出る譯がない。』こんなことをかれは終日長く頭に繰返した。
夜、床の中で、一人で目ざめてゐると、その言葉がはつきりと闇の中に字になつて見えたり、その意氣な姿や、面白さうに笑ふ聲や、白い綺麗な指などが歷々と浮んで見えたりした。『たしかに節操の正しい女ではない。これまでにも、男一人を守つてゐたやうな女ではない。それを手に入れるのはそんなに難かしいことぢやない。』かう思ふと、前に知合つたことのある女の肌だの笑顏だのが一緒になつてかれの眼の前に現はれたり消えたりした。『馬鹿々々しい今の年になつて……それにきまつてゐるさ。金に眼を着けてゐるにきまつてゐるさ。でなくちやあんな素振をしたりあんな口を利くわけがない。』かう思つ

氣の毒がつて深切にして呉れた。『でも矢張世間があるからと言つて、滅多には來は致しませんのですよ。えゝ〳〵、もう親類なんか賴りになりやしません。兄なんか、中でもひどいんですから。』かう言つて、折につけての薄情な仕打などを詳しく話した。

何かの話から、

『奥さんが、さういふ御病氣ぢや、本當にお大抵ぢやありませんね。』

『いや、もう、その方はあきらめてゐるんです、仕方がありませんから。』

『御酒は召上るんですか。』

『少しはやりますけども、それもほんのわづかですよ。矢張、これぱかりですよ。』

かう言つてかれは口を離さず吸つてゐる卷煙草を持つて見せた。

『それぢやおさむしいですね。何處かに好いのがおあんなさるんでせう。』

『何うしまして――』

『何うですか、わかりませんよ、殿方は――。まあ、あの人がつて思ふやうなことがよくあるんですから。』

『私にはそんな器量がない。』

『何うですか、わかりませんね。屹度、何處かに好いのが隱してあるんでせう。』かう言つて女は笑

團をまくつて、便器を宛てゝやつた。病人は、う、うと言つて手眞似をした。
で、その用を足してやると、病人は滿足したやうな顏をして、ぐつたり頭を枕に當てゝ、此方を見て、いくらか笑つたやうな顏を見せた。中田はそれでも厄介な奴だとは思はなかつた。丁寧に蒲團をかけてやつて、便器の始末をして、そして此方へ來て坐つた。そこに婢が歸つて來た。
『何處へ行つてゐたんだえ？　今病人の用があつたんだのに……』
『さうでしたか、ちよつと、お隣に行つてゐたもんだから。』
かう言つて、婢はすぐ顏を引込ませた。
煙草がなくなると、中田はいつも其處まで出かけた。今まで買つてゐた近い店にはもう行かなかつた。そしてその煙草屋から歸つて來ては、いつもぼんやりした顏をして何か考へながら坐つてゐた。
ある日餅菓子を少しばかり買つて行つた。と、主婦はいつもより一層チヤホヤして、『サア、此方にお上んなさいまし。』と言つて、長火鉢のある處にかれを無理に伴れて來た。初めて入つて行つた室は薄暗かつた。それに、明るいところから入つて行つた故もあつた。暫くしてから、佛壇だの、簞笥だの、茶簞笥だのが見え出して來た。主婦は貰つた餅菓子を小皿にわけて、それを佛壇に上げたりなどした。
其時、親類の話や、亡くなつた亭主の友達の話などを主婦はした。何でも亭主はある役所の下級官吏らしかつた。此處に店を出すやうにして呉れたのは、親類よりもむしろ友達で、三人ある中の一人が殊に

とはなかつたが、それでも內所で逢つた素人の女は、これまで三人や四人はあつた。中の一人は、まだ今の女房が病氣にならない前で、それと嗅ぎつけられて、烈しい嫉妬をやかれて困つた。それは今思ひ出しても身ぶるひがするやうな烈しい嫉妬であつた。女房はそのために何遍となくヒステリイを起した。

『でも、今は、もうその心配はない。』

かう思つて、かれは後ろの暗い四疊半の方を見た。病人は束ねた髮を枕に宛がつて靜かに寢てゐた。またしても、女の言葉と笑顏とが繰返された。かれは種々なことを想像した。長火鉢に相對して坐つてゐる自分の姿や、學校用品の資本をつぎ込んでやつてゐる自分のさまや、女がすつかり自分のものになつて、その煙草屋が自分の別宅のやうになつてゐるさまや、さういふことが、歷々とかれの眼の前を掠めて通つた。『しかし、滅多なことは出來ない。もつとよく話して見なければ、女の素性がわからない。元、何したものだかわからない。』一方では、かれはこんなことを思つた。が、さう思つた一方から、『なあに、場合によつたら少し位使つたつて構ふことはない、』などと思つた。緣側で日向ぼつこをしてゐた猫は、此時ふいと立つて、脊伸をしてさも退屈したやうに、のそ〳〵と庭の方へ出て行つた。

病人が俄かに聲を立てた。

それは便器の要求のしるしであつた。『おい、お定。』かう呼んで見たが、婢は其處にゐないと見えて返事がなかつた。仕方がないので、かれは立つて行つて、薄暗い光線の中に寢てゐる病人の傍へ行つて蒲

何處かやさしいところがあつて、此方から話す內輪話などをも親身になつて聞いて吳れるやうな深切なところがあつた。

『まア、お光ちやんに、好い婿を取るんだが、それまではまだ間があるから、貴女も大抵ぢやない。』

『それを思ふと、心細いのですよ。』

『でも、まあ、女は――いざとなれば、何うにでもなるから。』

『でも、仕方がありやしませんよ。こんなお婆さんなんか、誰が相手にして吳れるものがあるもんですか。』

『さうでないですよ。昔から、女はいくつになつてもすたりがないつていふ諺があります。そこに行くと、男は駄目だ。五十を越したら、もう相手がない。』

『そんなことがあるもんですか。』

中田は獨りで座敷に坐つて、さういふ煙草屋での會話を思ひだしてゐた。そのをり〳〵についての女の笑顏、女の言葉、女の態度、さういふことが不思議にも細かに一つ〳〵思ひ出された。大藏省に勤めてゐる頃、髮を綺麗にわけて、新しい洋服を着て、ステツキをついて出かけて行つたことなどが思ひ出されて、狹斜にこそ入つたことはないが――そこは何だか恐いやうな氣がして、其處に一度足を踏み入れゝば、自分の財產や家作などは滅茶々々になつて了ふやうな氣がして、一度も深く茶屋酒を飲んだこ

三

それから中田の姿は、をり〳〵その煙草屋の店に見えた。女の兒が學校から歸つて來ると、其處に莞爾笑ひながら、中田が腰かけて母親と話してゐることなどもあつた。中田はその娘の名をいつか覺えて、『光ちやん、光ちやん』などと呼んだ。かれは雜誌などを買つて來て女の兒にやつた。

『亭主には、散々苦勞しましたから、もうこり〳〵ですよ。』こんなことを主婦は笑ひながら言つたりした。主婦も上さんの口を透して、中田の何者であるかといふことをかなり詳しく知つてゐるらしかつた。『貴方なんかは、お家がしつかりしていらつしやるんだから。』などと言つた。

『何うも困る。何から何まで世話をしてやるんですから、時間を見はからつて、便器を持つて行つてやらないと、すぐ粗相をして了ふんですから。あとが大變ですからな。だから下女なんか、ちつとやそつとの給金ぢやゐやしませんよ。今のは、な、まア、遠い血筋になつてゐますから、よく世話をして吳れますけどもな、困りますよ。』

時にはまた、『しかし、これも、何かの廻り合せでさ。前の世に、うんと振つたか何かした女ですな、屹度。それが、今かうやつて、仇を取るんですよ。それに違ひないと思ふことがあるのですよ。つくづくさう思ふことがありますよ。』などと言つてにや〳〵笑つた。髮はもう半ば白くなつてゐるけれども、

『昔から知つてゐるのかね？』

『私？　何アに、つい此間、懇意になつたんですよ。死んだ總領の息子が何處かで知つてゐたと言ふんでね。二三度行つて話をしたばかりですよ。』かう言つて、『あの上さんも可哀相なんですよ。つい昨年の春、亭主をなくしてね。財産といふ財産もないもんだから困つてゐたのを、親類で、少しばかり元を出して、あそこに店を出させたんですとさ、ちよつと困るんでせう。』

『後家さんが多いね、此頃は――』

『本當に……何處でも旨いやうには行かないね。まあ、然し、これも運だからね。さう言へば貞ちやんもつい此間後家さんになつたつてね。』

『さうかえ。あの亭主、死んだかね。』

『何でもぽつくり、急病でなくなつたつていふ話だよ。』

『ちつとも知らない……。知らせてよこさないんだもの。』

『皆な疎遠になつて了つたね。……でも、あそこの酒屋の上さんは、肥つて、ちや〱ばつて働いてゐるぢやないか。今度來た嫁さんが戻つたのも、あの上さんが難かしいからだつていふ話だよ。』

『さうかえ。』

こんな話をしながら、酒屋の角まで來て其處で別れた。

『えゝ。』

『此間も、坂の上で、學校から歸る處で逢つて、一緒に、あの坂の處を下りて來たんですがね、好い娘さんだ。』

『いゝえ、もう――』

『十三ですか。』

『二で御座いますのよ。』

『二では大きい。私は四かしらんと思つた。好い娘さんだ。よく本なんか讀んでゐますね。』

『何うも、本が好きで、小說がすきで、しやうがないんですよ。』

かう言つて主婦は笑つた。笑ふ時に、一種色つぽい眼色をするのが中田には氣に入つた。

『ぢや、まア、また參りませう。家で忰が待つてるから。』かう言つて、やがて上さんは暇を告げようとした。

『ぢや、私も……』

かう言つて立上つたが、次手に、朝日を二つ買つて、白い華奢な指をした手からそれを受取つて、二十錢銀貨をちかにその手にわたして、そして上さんと一緒に其處を出た。

歩きながら、

上さんは主婦に言つた。
『でも、此處は場所が好いから、賣れるには賣れませう？』
『え、まあ、思つたよりは賣れますけれど、矢張、商賣が小さう御座んすから、しやうがありませんよ。何か、一方、學校用品か、でなければ、菓子でも置けば好いですけれど……』
『さうですね、學校用品なんか好いかも知れません。』
『でも、何うせ、私達がするんですから、碌なことも出來ませんからねえ。初めから、さうも考へて見たんですけども……矢張、それにはね、元と言ふものが入りますからね。』
『まあ、少しは、いつても、さうする方が好う御座んすね。此處は學校が近いから賣れるには賣れますよ。』
『此方の娘さんですか、いつも此處に出ていらつしやるのは？』
だしぬけに、かれはかう主婦に訊いた。かれは主婦と口が利いて見たかつたのであつた。
『え〻。』
『よく、店番が出來ますね。』
『い〻え、もう、から駄目なんで御座いますよ。』
『今、學校ですか？』

『奥さんが――』『さう』といふ顔をして、此處の主婦は、碎けた物の言ひやうをしながら、すぐ奥の處にある長火鉢のところから、茶碗を取つて、茶を注いで、それをかれの方へ勸めた。

『いや、もうお構ひなしに――』

『いゝえ、もう。』

『でも、息子さんの方からは、時々便りがありますか。』

『え、此間もちよつとありました。』

『御丈夫でせう。』

『え、まア、あれは何うやらかうやら。』

『それにしても、大きくなつたもんですね。去年、おとゝしか、ちよつとお目にかゝつたけれど、それは大きい好い息子さんになつて、此頃までまだ久留米がすりか何か着て、小學校に通つてゐましたがね、早いもんですね。自分の年の取るのはわからないで。それにしてもね、前のね、あのおつるさんが生きてゐると、好かつたんですがね。』

『何うも仕方がない。』

いくらかてれかくしに、かれは其處に主婦のついで出した茶を取つて、ぐつと飲んだ。かれはをりをりその主婦の顔を竊むやうにして見た。茶を勸めた時の指の白かつたことなどをかれは思出してゐた。

かうその上さんが呼んだ。

で、寄つて來て、

『ヤ、お久し振り、何うですね。此頃のお父さんの病氣は？』

『矢張相變らずですよ。お宅では――』

『ヤア、もう、いつも……』

こんなことを言つて、店の中に入つて、そこに立つてゐると、

『まア、おかけなさいまし。』

かうその年增の女が言つた。『はゝア、これがあの娘のお袋だな。』かう思ひながら、中田はまだ色の褪せない何處か意氣なところのある女の方をじろ〳〵見た。

『おかねさん、困るねえ。矢張、寢たつきりなんですかえ？　へえ、矢張、さう。もう何年になるかねえ。』

『七年。』

『さうなるかねえ、大抵ちやないねえ、中田さん、あの病氣ばかりは本當に困るわねえ。いけないものなら、いけないで、てきぱききまれば、あとが樂だけれど、あの病氣ばかりはさうは行かないんだから、何うせ、治らないとわかつてゐて、それで十年も十五年も生きるんだからね。』

『でも、大家さんなんか、ちやんと奥さんがいらつしやるんだもの。それや、ね、病氣で寢てるから御不自由でせうけれども、それは仕方がありませんね。だつて、そんな薄情なことは出來ないぢやありませんか。』

『でも、何うも困ることがあるんでね。』

かれはにや〳〵笑ひながら言ふと、

『それは、さうでせうともね。イヤだね、まア、男は。それだから、男は罪だつて言ふんですよ。』

『まア、何うも、それも仕方がない。私だつてあきらめてゐますがな。』

かれは庭木に鋏を入れながらこんな話をした。

二

ある時、また煙草屋の前を通りかけると、其處に、その近所のしもた屋で、昔から知つてゐる同じ年恰好の上さんが、三十五六の色のやゝ淺黑い、脊のすらりとした、髮を小さい丸髷に結つた小綺麗な年增の女と頻りに何か話してゐた。

通りすぎようとすると、

『中田さん……』

鉋だのを持つて行つて、大工になつたり左官になつたりした。周圍の垣などは、植木屋の手を借りずに、大きな木鋏を持つて行つて、踏臺をして、終日長くそれをチヨキ〳〵音をさせて刈つた。三軒合同でつかつてゐる井戸の釣瓶が落ちたりすると、下女や上さん達は、いつもそれをかれの許に言つて來た。『よし、よし、今取つてやる。』かう言つてかれは勝手の棚の上から、長い棕櫚繩のついたいかりを取り出して、それを持つて、小半日井戸の傍で、沈んだ釣瓶をさがしてやつたりした。

ある時、前の小さな家を、子供二人を伴れた三十七八の後家さんが來て借りた。その時はかれは殊に親身になつて、種々と世話をしてやつた。かれの姿はいつもそこの勝手元や庭や緣側のところに見えた。『大家さん、後家さんのところにばかり行つてるね、何うかしたんぢやないか。』こんなことを、後には、店子の者などが言つた。その後家といふのが、またのんきな女で、かれを相手にして、種々と笑つて話したり何かした。『え〵、え〵、もう一人なもんだから淋しくつて仕方がありませんよ。さうかと言つて、私なんか、相手にしてくれるものはなし――』などと其女は言つた。

『矢張、旦那さんのことが忘れられないのでせう。』

こんなことをかれが言ふと、

『え〵、え〵、それはもう、宅では、やさしい人でしたから、何から何まで、こまかに世話して呉れるやうな人でしたから、死なれて、本當にがつかりしちやつたんですよ。……』かう言つて笑つて、

た三四軒の家作と、少しばかりの株券とを持つて暮してゐた。二十二三の時に區役所の書記に出て、そこに八年もゐて、それから大藏省に勤めて恩給になるやうになつてからやめた。今ではもうぶら〳〵して暮した。『これで、女房さへ病氣でなければ、何の不足もないのだけれど。』こんなことを彼は思つた。二度目に貰つた妻は、今年四十五六だが、七八年前から中風を病んで、半身不隨で、奥の四疊半に寢たきりになつてゐた。先妻に出來た男の子――その產で先妻は死んだのだが、その男の兒は、今二十四五で、仙臺の方の學校へ行つてゐる。出來が好いから、今には豪くなるだらうと誰も彼も言つた。毎月三十圓足らずの學費を送るのは、かれに取つては、餘り樂ではなかつた。それでもかれはキチン〳〵とそれを送つた。一度も後れさせたことはなかつた。家では十六七の貧しい親類の娘を小婢がはりに使つてゐた。

家は裏通りからちよつと奥に入つたやうな處にあつた。男世帶と言つても好い位の生活にも拘らず、玄關でも疊でも道具類でも、すべて綺麗になつてゐた。長押には昔を偲ぶ槍がかけてあつて、座敷の刀架に金作らへの大小などが光つた。道具などには古い價値の多いものが多かつた。庭の數多い盆栽には、毎朝かれは如露を持つて行つて、丁寧に水をかけてやつた。

家の周圍にある三軒の家作に住む人達の爲めにも、かれは種々なことをしてやつた。勝手の戸の明け閉てが工合がわるいとか、庭の木戸が壞れたとか、家が古いので根太が落ちたとか言ふと、かれは鋸だの

中田もヤ、急いで歩きながら、
『貴女の家は、此間引越して來たのね？』
『え。』
『何處から引越して來たの？』
『下谷――』
『さう？　下谷から引越して來たの、隨分遠いところから引越して來たんだね。』こんなことを言ひながら、中田は早足で歩いた。それにも拘らず、女の兒はサッサと先へ歩いて行つて了つた。やがて坂を下りて向うに行くのが小さく小さくなつて見えた。
中田は四十年、もつと以上もこの通りを歩き馴れて居た。世の中の夥しい變遷、それがをり〳〵彼の眼の前を掠めて通つた。現にこの通りだけでも非常な變りやうであつた。かれの幼ない時分には、其處に大きななまこじつくひの塀があつたり、乳のやうな金具のついた大きな門があつたりした。中田は父母の死んだ時のことなどを頭に繰返した。坂を下りた處にある酒屋だけは元のまゝだが、あの遊び仲間であつた亭主は死んで、今ではあの上さんが息子を扶けてやつてゐた。あの上さんが嫁に來た時には、丁度自分にも先の女房が來て二月か三月しか經たない頃であつた。かれはこの近所に千坪ばかりの父祖傳來の地面と、『かういふ時勢になつては、貸家でも造つて置くに限る、』と言つて父親が拵へて行つて呉れ

つて行つて、

『朝日を下さいな。』

其時も矢張、その女の兒が店にゐた。編物か何かをしてゐたが、スッと立つて、莞爾しながら手近にあつた朝日の袋とマッチとを取つて渡した。女の兒の眼には、黑の厚ぼつたいまはしを着て、茶色の古ぼけた帽子をかぶつた四十七八のをぢさんが映つた。をぢさんは莞爾とやさしげに笑つてゐた。

『よく、店番が出來るね。』

かう言はれて、女の兒はきまりがわるさうに顏を赧くしたが、そのまゝ默つて、俯向いて、編物の棒を動かし始めた。『ヤア、お邪魔』かう言つてかれは出て來た。

ある時、かれは矢張通りを步いてゐた。と、後から足早に、かれを追越して行く女の兒があつた。見ると、煙草屋の娘だ。

『何處へ行つたの。』

『…………』

『學校の歸りかえ?』袴を穿いて風呂敷包を持つてゐるので、それと察して、『矢張あの學校に行くのかえ?』

女の兒は點頭いて見せた。そしてサッサと先に步き出さうとした。

息子への手紙

一

ふと氣が附くと、いつか煙草屋の店になつてゐるのを中田は見た。元は小さな菓子屋で、五色飴だの、麵麭菓子だの、煎餅だのが硝子罎に入れて並べられてあつたが、それが引越してからは長い間貸家札が貼られたまゝになつてゐて、つい此間通つた時もまだ空家であつた。

巻煙草や煙草の綺麗に並べられてあるところには、十二三になるお下げの女の兒が顏を雜誌の上に落して、一心にそれを讀み耽りながら店番をしてゐた。

『はゝア、煙草屋になつたわい。』

こんなことを思つただけで、中田は通りすぎた。別に深く心にも留めなかつた。二三間歩いた時分には、もうかれはそれを忘れてゐた。

四五日經つて、かれはまた其處を通つた。丁度袂の巻煙草が残り少なになつてゐるのを思ひ出して入

が發見されてゐた。手紙には、『荷物も何もそのまゝにしてきましたが、前借をお返ししたら、すぐ送つて下さい、前借は明日にも返しますから、』としてあつた。

晝間の中に、近所の子供を頼んで切符を買はせたことだの、着替と位牌とを小さい風呂敷包にして二三日前から傍を放さず持つてゐたことだのが、段々知れて來た。で、すぐ停車場から、沿線の停車場に電話をかけて貰つたが、何處で何う降りたかその行方はわからなかつた。

そればかりではなかつた。その翌日、荒物屋の息子が家出したといふ報は、町の人々を驚かした。あらかじめ、打合せがしてあつたと見えて、朝の二番の上り汽車で、男は東京の方へと行つた。その時同車した町のある若者は、『別に、そんな風もありませんでしたがな、久喜までちよつと用があるつて平氣で言つてゐましたがな、』と言つて話した。尠なからぬ金を息子が銀行から持出して行つたことなども段段わかつて來た。

大騒ぎをして捜したが、二人の行方は容易にわからなかつた。それを、彼方にたどり此方に探りして漸くさがし當てたのは、それから二月ばかり經つてからであつた。女は故鄕に近いある山の中の町に矢張同じ稼業をしてゐた。男も矢張その近所にゐた。

男は連れられて歸つて來てからまた二三度遁げて行つた。女の情が何うしても忘れられないといふ風に見えた。『矢張、浮氣な女ですな。手取ですな。』か う町では評判した。

づいて、溝の畔には、なづ菜や根芹が青々として萠出した。森の中の櫻の蕾も大きく、中に暖かい穩かな春のやうな日もあつた。夜は何處となく微かな蛙の聲がした。

その時分には、おきよは家ばかりではなく、外でも息子と逢ふやうな機會をもとめてゐた。女が此方から息子の家の裏口のところに出かけて行くこともめづらしくはなかつた。寺の裏山と汽車の倉庫との間のところでは、二人が並んで何か話してゐるのを汽車賣の上さんはをり〳〵見かけた。

おきよが通ると、近所の子供達は、『ヤア、心中の片われが來た、』と言つて囃した。と、後には、『この餓鬼！』と言つて、おきよは追懸けて、その中の一人をつかまへて、打つて泣かせたりなどした。

その夜はお鶴の客が奧に一組あつたばかりであつた。あたりはいつに似合はず靜かで、停車場から町へ行く荷車も通らなかつた。亭主は近所に行つて留守、上さんはおきよを相手に酒や料理の世話をしてゐたが、それもあらかた片附いたので、末の女の兒を寢かさうと思つて、ちよつと店をおきよに頼んで、奧の方へ行つた。それは僅かな間であつた。三十分と間はなかつた。しかし、上さんが子供を寢かして店に來た時には、おきよの姿はもう其處にゐなかつた。其間に、上りの汽車の來たのを上さんは知らずにゐた。

何處か近所へでも行つたのかと思つて、初めは氣にも留めずにゐたが、餘り遲いので、段々怪しみ始めて、後には大騷ぎになつた。亭主が迎へを受けて歸つて來た時分には、棚の上に置かれた女の置手紙

勝手でおきよが聞いてゐるとは知らずに、御者は店先に腰をかけて、大きな聲でこんなことを言つた。

この話が町にひろまつてから、おきよの許に通つて來る客足はめつきり減つた。偶に來るものがあつても、それはめづらしい女の疵でも見ようとする物好きの客ばかりで、心から打込んで通つて來るやうなものは殆どなかつた。その中で、以前のやうに、寧ろ以前より足繁く通つて來るのは、唯、荒物屋の息子ばかりで、二人はいつも奧の一間で夜遲くまで靜かに話した。

あまり靜かなので、時には氣にしてお鶴や上さんが覗いて見ると、二人は酒も飮まずに、餉臺を前にして唯默つて坐つてゐた。時には、丁度泣いてゐたらしい涙を隱すために、すつと女が立つて行つたりした。

『困つたもんだな。存ちやん、すつかり丸められて了つたんだもの。』

かう亭主が言ふと、

『でも大丈夫だよ。あの女には、よく言つて置いたから。』

『言つて置いたつてわかるもんか。』

『でも、まさか、又、心中などしやしめえ。』

かう言つて上さんは笑つた。

梅の花の上に思ひもかけない大雪が降つたり、寒い〳〵西風が吹いたりしてゐる中にも、春は次第に近

相なもんですな、』などと寺の世話人は來て話した。

中には、一度關係して、それと知れてから、ぱつたり行かなくなつた男などもあつた。その男は、『何うも變なところのある女だとは思つてゐましたよ。時々わるくふさぐのは、それでですな。しかし、女は手取りですよ。心中した男ばかりだなどとは言はれませんな。その男の前にも、何人も男があつたやうな女ですな。面白い女には女ですよ。それに、容色はよし、調子はよし、藝者にしたつて、決してひけは取りやしないやうな女ですからな。それに、もう一つ、逢つて見なけれやわからない好いところがありますよ、』などと言つて、面白さうに、相好を崩して、卑しい笑ひを顏に浮べた。

おきよが風呂になど行くと、其處にゐる町の女達は、じろ〳〵とイヤに顏を見たり、襟から胸にかけた其瑕を見たりした。そして此方を見ては、伴れの女に何か耳打ちして私語き合つた。おきよはめづらしいものを見るやうな眼に其處でも此處でも邂逅した。

時には知らぬ人から、同情された憐憫の眼を親しく向けられて、そのめづらしい話をそれとなく要求せられるやうなこともあつた。ある婆さんは、『若いものはな、無分別だから、それで困るよ。何も親から貰つた體に刄物まで當てねえたつてよかんべいに――』などと言つた。乘合馬車の御者までが、それと知つてからは、一種冷めたい笑顏をもつてかの女を迎へた。

『俺も心中でもすべいかな。かう金が儲からねえではヤりきれねえ。煙草錢もありやしねえ。』

ことが出てるよ。』かう言つて、その新聞をおきよに渡した。おきよは顔を赤くした。

その頃から、おきよの態度の非常に變つて行つたのを、主人も上さんも見遁さなかつた。今までとは違つて、おきよはわるくふさいでゐるやうなことは滅多になかつた。今まで潛んでゐた烈しいところが俄かにあらはれて來たかと思はれるやうに――或は他人に祕密を知られて、それ以上に大膽に、捨鉢になつたと言ふやうに、酒を飮んだり、鼻唄を唄つたり、大口を利いたりした。もう心中のことなどは氣にも留めてゐないといふ風に見えた。聞かれるまゝに、其時の話を詳しく亭主や上さんにも話した。

『ほら、かうなんですよ。見せて上げませうか。こゝから、かう男が刺したんですけども、動脈とかを離れてゐたもんですから、一時、死んでまた生き返つたんですね。』こんなことを言つて、平氣で襟から胸のところを客に見せたりなどした。

新聞に書かれてから、町ではおきよのことが、すつかり評判になつた。『さうですつてね。位牌を抱いて寢てゐるんですつてね。』こんなことを言ふ女もあれば、『でも位牌ぢや、いくら抱いて寢ても色男のかはりにやなりやしない、』などと、酒に醉つて笑つて話す人などもあつた。そして、その話は寺の主僧の許までも傳つて行つた。『さうですか、方丈樣のとこに來たんですか。それですな、持つてゐるつて言ふのは！　はゝア、さうですか、お經を上げてゐる中に泣きましたか。矢張、忘れられないんですな。可哀

『病院に三月ゐたもの。』

『男はすぐ死んで？』

『もう聞かないでお呉れよ。思出すと、かうしてぢつとしちやゐられないやうな氣がするんだから。』

かう言つて、おきよは默つて了つた。あとは何を訊いても、おきよは口をつぐんで話さうともしなかつた。

その夜から、おきよは位牌を抱いては寢なかつたけれど、それでも時々高窓の格子先などで、それに向つて手を合せてゐるのをお鶴はよく見かけた。

その話は上さんの耳にも亭主の耳にも入つて行つた。おきよは別に何も言はれなかつたけれど、主人の自分に對する態度も共に變つて行つて了つたのを感ぜずには居られなかつた。

その一軒置いて隣の二階造は、門になにがし新聞社といふ古ぼけた大きな看板をかけてゐるやうな家であつた。それは一週間に一枚印刷して、それを彼方此方に配つて、町村のことだの、郡政のことだのに關係して、廣告費やら金やらを取つて、そして生活してゐるやうな人であつた。家の一隅には、舊式な印刷機械が一つ置かれて、それを汚い筒袖を着た職工がひとりでガラ〳〵廻してゐるのが、道を通つて行く人達の眼にも映つた。

何うして知つたか、ある日のその新聞に『心中者の片われ』といふ題で、おきよのことが面白く書き

『何うしてつて言ふこともないんだよ。さういふ廻り合せになつちやつたんだよ。一緒に死ねなかつたのが不運だよ。』

『本當だねえ。』

かう言つたが、お鶴はつゞけて、『矢張、向うでも稼業をしてたの？』

『あゝ。』

『ぢや、稼業してゐる中に出來た男だね。寫眞は持つてゐない？』

『持つてゐるけども……』

『お見せよ。』

『見せたつて仕方がない……』

『お見せつたら。』

逢つて望むので、斷るわけにも行かず、おきよは、行李の底に藏つてある半身の男の寫眞を出し見せた。男は會社員でもあるらしく、脊廣を着て、派手なネクタイをしてゐた。好い男だつた。

『お前さん、その疵だね。』

『あゝ。』

『よく治つたもんだね。』

勘附かれてゐると知つてゐるおきよは、別に驚きもしなかつた。

『何うして？』

『でも、氣味がわるいもの。』

『大丈夫よ。』

『お前さん、大丈夫でも、私が困るんだよ。それや、ね、お前さんの身になりやね、お氣の毒だとは思ふけれど。』『顏を見て、『皆な知つてるよ、もう内では――。何うして、お前さん、そんな事をしたんだえ？』

『それは、譯があるにきまつてるよ。死なうとまでしたんだもの。』

『いろ〳〵譯があるのよ。』

おきよは默つてゐた。

『その男が來るんぢやないかえ？　今でも、夜中に。』

『そんなことはない……』

おきよは笑つて見せた。

『話しておきかせよ。』

『えゝ。』

『何うして生き殘つたのだえ？』

『昨夜は寢られなくつて困つた、』などとお鶴は眞劍な顏をして言つた。

『お上さん、何うかならないでせうか。位牌を持つてゐるだけは、よして貰ひたいんですがね。……それに、あの人は、夜中にうなされるのよ。それが氣にならないで眠つて了つた時は好いけども、氣になると、もう眠られないんだから……』

『困るねえ。』

『お上さん、言つて下さいよ。』

『お前がお言ひよ。』

『言つても好いでせうね。でなくつちや、氣味がわるくつて、一緒に稼業してゐられないんだもの。』

お鶴がかうお上さんに言ふ迄には、自分の許に來る二三人の客にも、お鶴は內所でそれを話してゐた。

『さうかえ？　あのおきよが……。ちや心中の片われだね、』などとある客は目を丸くした。あるお客は、

『可哀相だねえ。その死んだ男がこんな田舍に來てまでついて廻つてゐるんだよ。一生、體からは離れないね、』などと言つて同情した。

ある夜、堪へ兼ねて、お鶴は言つた。

『お前さん、その位牌だけは、何處かに藏つて置いてお吳れな。』

ふやうな恰好をして見せた。

『だつて、お前、そんなことを人に言ふんぢやないよ。無闇に言つちやいけないよ。』そんなことがぱつとなると、客足が落ちると困るからね。』

『それは大丈夫ですけどもねえ。それでですよ、お上さん。此間、そら、息子さんが來てゐる時に酒を飲んで、私は生きてゐられないなんて、泣いたり何かしたが、矢張それなんですよ。』

『さうかねえ。』

かう言つて上さんは考へて、『それにしても息子さんは知つてゐるのかしら。』

『少しは知つて居るかも知れませんよ。お前は可哀相だなんて、この間も言つてたから……。それにしても、心中なんて、よくする氣になつたのねえ。あの襟のところにある疵がさうですね。』

『さうだね……恐ろしいやうな氣がするね。』

『本當ね。』

此方では成るたけ知らないやうな顔をしてゐるけれど、さうと知ると、ひとり手に、おきよの顔やら態度やらが見られるやうな氣分がするのであつた。氣が附かずに、おきよは襟をはだけてゐると、それをお上さんは凝と見てゐたりした。

位牌のことは、中でもお鶴には氣になるらしかつた。いつも二人は奥の一間に一緒に寢たが、

かう言つて、おきよは小さな位牌を風呂敷に包んで、懐の中に入れて、そして寺を出て行つた。

五

心中の片割といふ事が、いつとなくあちこちに知れて行つてゐた。事情の一部をおきよが話したのは、自分からもいくらか心を許した荒物屋の息子ばかりであつたが、――その息子の口からは決して洩れる筈はなかつたが、何處を何うして知れて行つたか、此の頃では、家の亭主始め上さんもお鶴も皆な知つてゐた。『いやだねえ、お上さん、おきよさんは、位牌を肌身を離さず抱いてゐるんだよ。此間、一緒に寢ようと思つて、寢卷を着替へてゐると、ぱつたり落ちたものがあるから、何かと思つたら、位牌ぢやないの。氣味がわるくなつちやつた。』こんなことをお鶴はお上さんに話した。お鶴にしては、おきよの此頃の全盛を妬むやうな處がないでもなかつた。

『いやだねえ。何うも變だ、變だと思つてゐたよ。容色はよし、調子はよし、何もこんな田舍まで流れて來なくつても好い人なのに、何うして、さういふことになつたかと思つてゐたんだよ。それで、すつかりよめたよ。一體、それで、何うしたんだらうねえ。惚れた男なんだらうね。』

『それはさうでせうとも……。だから、氣分が何處か變だ、可怪しなことをする人だと思つてゐたが、それでよ。何うしても、男の魂がついてゐるんだよ。まア、厭だ、厭だ。』かう言つて、お鶴は怖毛を振

暫くして、本堂から長い廊下を庫裡の方へ來たおきよは、腫れ上るほど眼を眞赤にしてゐた。

『何うも難有う御座いました。』

そのお禮も漸く言ふやうにしておきよは言つたが、やがて財布から五十錢の銀貨を出して丁寧に鼻紙に包んで、『本當にお恥かしう御座いますけれど……』かう言つて、それを主僧の前に出した。

『こんな御心配をなさらんやうに――』

主僧が返すのを、

『いゝえ、もつと致さなければならないんで御座いますけれど、旅の者だと思召して』かう言つてそれを押戻した。

主僧は言つた。

『兎に角、御奇特のことです。事情は存じませんけれど、お志だけでもうよくわかりました。佛にもよく貴女の志が通ずることで御座いませう。』

『難有う御座います。』

『また、今度、いつでもいらつしやい。お話もうかゞひますし、苦しい時は、いつでもお相手になりますから。佛の道は大きう御座いますから。それに、毎月、五の日には說敎が御座いますから。』

『難有う御座います。』

主僧の胸にも、女の心持がいくらか讀まれるやうな氣がしてゐた。遠い旅の者といふこと〻、三十一の男の爲めと言ふこと〻、田舍の茶屋小屋に酌婦をしてゐる女の身の上といふことが、ある一種のロマンスをかれの心に思はしめるに十分であつた。知らないけれど、其處には、何か深い譯があるに相違なかつた。年中、お經を讀んで佛のまへに手を合はせるけれども、今日のこの讀經ほど意味のある色彩のあるものは滅多にないと言ふやうにすらかれには思はれた。かれは長い間、本尊の前に祈念してから、更に位牌を置いた棺臺の方に來て、鉦を鳴らして、そして人の心に沁み入るやうな靜かな聲で讀經を始めた。

おきよは初めは、色の白い顏をあたりに見せて、默つて耳を傾けてゐたが、『修證義』の說教めいたわかり好い文句に邂逅すると、段々たまらなくなつたといふやうに、頭を垂れて、押へても押へてもこみ上げて來る涙を何うすることも出來ないといふやうにしてゐた。暫くしてから、かの女は袂からハンケチを出して、それを顏に當てたが、讀經が終に近く、愈〻急調になつて來ると、おきよは殆どぢつとして坐つてゐられないほどの激情を總身に覺えて、身もだえして、涙を流した。

讀經が終ると、おきよはやがて燒香すべく位牌の前へと立つて行つた。しかしその體はよろ〳〵と支へるものがなければ倒れて了ひさうな悲哀を感じた。で、長い間女の手を合はせた姿は、浮き出すやうに、香の烟の傍に見えてゐた。

かう言つて、主僧は引込んで行つたが、暫くして出て來た時には、半紙に、大きく新しい戒名をつけて書いて持つて來た。

『御奇特な志ですから、院號をつけて置きました。』

『難有う御座います。いろ〳〵御無理を願ひまして……』（譯をお話しすれば、それは悲しいことが御座いますのですけれど。）かう言はうとしたが、おきよはそれを押へた。

おきよは買つて來た小さな位牌を其處に出した。

『あゝそれに書くんですな。』かう言つて、主僧はそれを手に取つて見たが、『それぢや、今書いて上げませう、一寸お待ちなさい。』

其處に、上さんは茶などを運んで來て勸めた。

やがて主僧は紫色の法衣に金襴の袈裟をかけて、白い新しい足袋を穿いて、位牌を持つて、長い廊下を本堂の方へと行つた。おきよは其處に並べてある新しい麻裏草履を穿いてそれに續いた。

上さんはあとから、蠟燭を持つて來て、それを本尊の前に立てた。

戸外の明るいのに引かへて、本堂の中はやゝ薄暗く、奥に立つた如來の本尊は、瞬く蠟燭の火に輝いて見えた。親族席のところにひとりさびしさうに坐つてるおきよの姿と、主僧の嚴かに本尊の前に手を合せた姿とは、薄暗い空氣の中にくつきりと浮き出すやうに見えた。

『志摩？　遠方ですな。それぢや、鳥羽の御近所ですか。』

『鳥羽から二三里在で御座います。』

『それは遠方ですな。私も、若い時に、あちらの方にまゐつたことが御座いました。一身田といふところがありますな。あそこに一年ばかり居りましたことが御座います。』

『左樣で御座いますか。あそこには門跡さまの大きなお寺が御座いますね。』

『さうです。鳥羽もその時、參つて知つてをります。』

『左樣で御座いますか。』

で、田舍の話が暫し出てゐたが、主僧は、『今は？　町ですか。町の玉本にでも來ていらつしやるんですか。』扮裝や容色から押して、藝者でもしてゐるのかと主僧は思つた。

『いゝえ、あの川本にをりますもので御座いますが。』

『はゝア、さうですか。川本ですか。停車場の前の？』かう言つて、主僧は初めてわかつたといふ顏をした。

『それから、お氣の毒ですけれども……、戒名をつけて頂いて、それから、あのお經を一つ上げて頂きたいので御座いますが。』

『え、よう御座いますとも。……ぢや、ちよつと待つて下さい。ぢき、戒名をつけて上げますから。』

『戒名は御存じないのですか。』

『え、先きでは、つけたので御座いませうけれど、少し譯がありまして、私はそれを存じませんので御座います。ですから、私は私一人だけの心で、戒名をつけて頂きたいと存じますので御座いますが……。』

『は、さうですか。』

『水本金太郎と申します。』

かう言つたが、主僧はおきよの方を見るやうにして、『俗名は。』

『年は！』

『三十一で歿くなりました。』

急に思ひ出したといふやうに、おきよは物思はしげに頭を垂れた。

『何時お亡くなりになりましたんですか？』

『一昨年の十二月で御座います。』

『お國で亡くなつたんですな。』

『え。』

『お國は？』

『あの志摩で御座います。』

『難有う御座います。』

かう言ふ會話が取交されたが、世の中の悲喜を十分に嘗め盡した柔かな靜かな主僧の態度は、頼りないおきよの胸に沁み入るやうになつかしく感じられた。この主僧の前になら、あらゆることを話しても悔いないといふやうな心が油然として起つて來た。

『あの、御無理なお願ひですけども……戒名を一つ拵へて書いて頂きたいと存じて上りましたので御座いますが……』

『戒名を？』

主僧は考へるやうにしたが、『貴女は何方でいらつしやいます？』

『この近所のものでは御座いませんので、旅の者で御座いますが……』

『へえ、さやうですか。』

かう主僧は言つたが、まだ座蒲團を敷かずにゐるのを見て『まアお敷きなさい。』

『難有う御座います。』

かう言つて、おきよは大きい座蒲團の端を敷くやうにした。

『男ですか、女ですか。』

『男で御座います。』

『あの方丈樣にちよつと、お願ひが御座いますのですが、お出でで御座いませうか。』

かう言つたおきよはやゝ顏を赧くした。

『御用は？』

『ちよつと、戒名を書いて頂きたいと思つて參りましたので御座いますが。』

上さんは引込んで行つたが、暫くすると、再び出て來て、今度はおきよを庫裡の廣い明るい一間へと通した。

おきよの眼には綺麗な掃除の行屆いた疊の新しい十五疊ばかりの一間が映つた。床には佛畫がかけてあつて、下には剝製の山鳥の置物が置いてあつた。そこからは松だの石燈籠だのゝある庭を隔てゝ、本堂の方へ行く長い廊下が見えてゐた。

上さんが手焙を持つて來て勸めた。

暫くすると、年の頃四十七八とも思はれる、半ば髮の白い、莞爾した主僧が、向うの襖を明けて入つて來て、丁寧に初對面の挨拶をして、座蒲團を勸めた。

『何うも、春になつても、中々寒う御座いますな。』

『左樣で御座います。』

『まア、お敷きなさい、冷えますから。』

た。長い鋪石道の此方には、梅が林を成して、ところ〴〵花が白く咲いてゐるのが見えた。

霜解道を彼方此方と拾ひながら、漸く庫裡の玄關のところまで來たおきよは、また其處で立つて暫く躊躇した。

ひろく明放された庫裡の玄關には、午前の明るい日影が流るゝやうにさし込んで、其處に積重ねられた米俵の周圍には、雀が一羽二羽入り込んで、落ちた米を啄ばんでゐた。秤や、桝や、筵などが其處に置いてあつた。

誰か小僧でも出て來れば好いと思つた。しかしあたりには人の影は見えなかつた。

庫裡の中もしんとしてゐた。

案內を請ひかけて二三度躊躇したおきよは、たうとう思ひ切つて、

『御免なさい。』

小さな聲で二三度言つても聞えないので、やゝ高い聲を立てると、

『はい。』

といふ聲が奧でして、つゞいて、一方の襖が明いて、其處から寺の上さんらしい三十五六の女が出て來たが、じろ〳〵と意氣なおきよの扮裝を見ぬやうにして見ながら、

『何か――……』

向うから知つてゐる顏が步いて來た。それは家に二三度遊びに來たこともあつたが、それよりも寧ろ家の亭主と懇意な小商人であつた。

すれ違ひながら、

『何處へ行くね？』

『ちよつと其處まで。』

『此方の方に來るのは、めづらしいね。』

男はにや〳〵笑つてゐた。客筋の家にでも訪ねて行くやうに思つてゐるらしかつた。すれ違つてからも、男は二三度此方を振返つて見た。

其處から少し行くと、小川に石橋がかゝつて、その向うに、矢張こんもりした杉の森があつて、それから先は、廣い田圃が遠く展けてゐた。丁度三番の上りの汽車が、煤烟を上げて向うを通つて行くのが見えた。

おきよはかねて聞いて知つてゐるので、野を縁どつた榛の木立の長い路を眞直ぐに右へ入つて、大きな山門の立つてゐる方へと步いて行つた。山門の白い塀には、子供の惡戯書きが黑く縱橫に書いてあるのをおきよは見た。

鐘樓が右にあつて、奧深く本堂が覗かれた。あたりはしんとして、寺詣りに來る人の影も見えなかつ

『佛壇に入れるんでなく、かう不斷、持つてゐるやうなのが欲しいんですがね。』

爺は考へるやうにして、『ちよつと、お待ち下さい。此間、賴まれもので、餘つたのが一つあつた筈ですから。』かう言つて、立つて、奧の方の棚の中を頻りにさがしてゐたが、やがて、塵埃だらけになつたのを、はたきではたいて、其處に出した。

『これなら、もう一番お小さいんで、不斷お持ちになつてゐても、邪魔にはならない位なもんです。』

手に取つて見たおきよは、

『あゝ、これで結構です。これはおいくらでせう。』

『註文されて造つたのですから、なみのとは念が入れてありますが、殘り物ですから、お安くして置きませう。三十錢ばかり頂戴すれば、それで宜しう御座います。』

『さうですか、では、これを一つ。』

かう言つて、おきよは帶の間から小さな財布を出して、白銅交りの銀貨を其處へ並べて、爺の紙に包んで吳れた位牌を持つて表へ出た。

暫くすると、おきよの姿は、こんもりとした杉森に添つた長い黑い溝の傍の道のところに見えてゐた。其處には、汚い長屋が二棟も三棟もつゞいて、日傭取だの、郵便配達だのが住んでゐた。子供達は汚い襤褸を着て、日當りのところに集つて、お手玉などを取つて遊んでゐた。

それは郵便局から少し此方に來た小さな店であつた。一方に荒物などを並べて、ちよつと見ては、位牌などはありさうには思はれなかつた。其處には實直らしい爺が、寒さうに火鉢にかじりついて、ぼんやりとして通りの方を見てゐた。

おきよは躊躇しながら入つて行つた。

『此方に、位牌が御座いませうか。』

『へい。』

と言つて、爺は立ちかけたが、『何ういふのを差上げませう?』

『ごく小さいので好いんですがね。……小さければ小さいだけ好いんですけれども……。』かう言つて手で形を示して見せて、『この位ので、周圍に箔がついてゐるのがないでせうか。』

『へ、へ。』

と爺は輕く二三度おじぎをして見せたが、そのまゝ立つて、後ろの棚の中に並べてある位牌を二つ三つ其處に出した。しかしいづれも大きすぎた。

『もつと小さいのはないでせうか。』

『これが、まア、なみでは小型の方なんですけれど……』爺は揉手をして、『普通、まア、佛壇に入れますのは、此位のところが、一番お小さいんですが。』

空はよく晴れて、朝日が爽かに家々の屋根を照した。其處には、庇の長く出た青縞商の大きな家があつたり、ショウウインドゥの前に自轉車が置いてある小間物店があつたり、白いペンキ塗の郵便局があつたりした。ある店では、小僧と番頭とがせつせと大きな反物の荷づくろひをしてゐた。

自轉車がをり〱かの女を掠めて通つて行つた。

町の外れには、遠い山の雪が美しく日に輝いてゐるのが見えた。

おきよの姿は、彼方を見たり、此方を見たりして、町の中ほどから外れ近くまで歩いて行つた。をりをり立留つて店の樣子を見ては、又靜かに歩き出した。

しかし、何處にもかの女が買はうと思つて出て來た物品を賣つてゐるやうな店は見當らなかつた。かの女は何遍となく立留つて店の樣子を見ては又歩いて行つた。たうとう町の外れまで來た。そこには町と村とを境した土橋がかゝつてゐた。

小さな店のところに立つてゐる汚ない筒袖の上さんに聞かうと思つて、躊躇してまた二三歩行きすぎたが、遂に思ひ切つたといふ風で、

『少しうかゞひますが、何處か、此處らで、位牌を賣つてゐる家は御座いますまいか。』

『位牌ですか。』かう言つたが、上さんはおきよの顏をじろ〱見て、『あの佛樣の位牌ですね。』と念を押して、それからそれを賣つて居る家を敎へて吳れた。

かう傍から息子は言つた。

丁度、其時、客が來たので、お鶴は向うの方に行つたが、おきよは、顏を袖に蔽つたまゝ、容易に歔欷をやめようとはしなかつた。銀杏返に結つた鬢と鬢裏との重なつたところが歔欷げるたびに絶えず動いた。興奮した息子の默つて坐つた顏は、蒼白くランプの灯に照されて見えた。

歔欷は猶止め度なく續いた。

それは漲らしても漲らしても押へ切れないほどの悲哀のやうに見えた。漸く袖を離して、眞白な顏をあたりに見せて、何か一言二言言はうとしたが、その言はうとしたことが却つて更に新しい悲哀を誘つて來たといふやうに、また袖を顏に當てゝ泣き出した。

『餘り、飮むからいけないんだよ。』

かう息子が慰めるやうに言ふと『さうぢやない、酒を飮んだからぢやない、』と言ふやうに、おきよはすすりあげながら頭を振つて見せた。

四

そのあくる朝の九時過ぎに、町の二三の人々は、停車場の川本に來た酌婦が、意氣な扮裝をして、銀杏返に結つた髮を綺麗にあたりに見せて、靜かに町の通りを歩いて行くのを見た。」

て、構はない。私の心は知つてゝ呉れるんだから。ね、さうね、存ちやん。默つてゐちやいやですよ。それは、さうですとも、私がこんな遠い田舍に來たについては譯はありますとも、……譯がなくつて、何うして、こんな田舍に來るもんですか。もう一杯頂戴な。』

『もうおよしよ。』

いつにも似合はない、酒など深く飮んだことのないのを知つてるので、かう言つてお鶴が留めると、

『いゝのね、醉つたつて、大丈夫よ。』

自分で德利からつがうとするので、それを取つて脇にやつて、

『何うしたつて言ふんだえ、お前さん、今日は。』

『何うもしやしないよ。心配おしでないよ。』

『だつて、あんまりぢやないか。お客樣がびつくりして了ふよ。』

ぐたりとしたが、『ぢや、もうよすわ。私、正氣なんか失ひやしないから大丈夫ですよ。』屹として、今度は息子の盃に酌をしたが、急に『私、死ななくつちや、何うしてもすまないんだよ。』かう言つておいおい泣き出した。

『本當に、お前さん、何うしたのさ。しつかりしないぢや困るぢやないか。お上さんにさう言ふよ。』

『まア、放つて置きよ。何うかしたんだよ。』

『少しは構はないけども――』

『大丈夫ですよ。』

かう言つてゐるけれども、おきよの素振は今までとはいくらか違つて來てゐるのを上さんも亭主も見た。客が運わるく落合ふ時などには、おきよはその息子をそつと別の室に忍ばせて置いたりした。

息子は今年二十七で、初めて女の熱い情を知つたといふ風であつた。いつも餉臺を前にして默つて坐つてゐた。酒を飲んでも、醉ふでもなく騷ぐでもなく唄ふでもなく、むしろきまりがわるいやうな顏やら態度やらをあたりに見せてゐた。

一夜お鶴が行つて見ると、おきよばかり酒を飲んでゐた。

おきよはかなりに醉つてゐた。

『世の中はつまらないわね。』

『何うしてそんなことを言ふのさ？』

かうお鶴が言ふと、

『お前さんなんかにはわからないよ。ね、貴方、存ちやん。私、少し飲んでも好う御座んすね。ちつとは、酒でも飲まなけれや、とても生きてゐられんですもの。』一盃ぐつと飲んで、『お鶴さん、今日は、存ちやんにね、私の話をするつて言ふ約束をしたのよ。存ちやんになら、私、何んなことでも話したつ

『まア、そんなことを言はないでさ――』かう言つて、おきよは男を押すやうにして、無理に障子の中に入れた。

一人は近在の百姓の息子で、二十九位の肥つた荒くれた男であつた。一人は一里ほど離れた町の小商人で、家には女房も子供もゐた。一人はこの町の外れに住んでゐる四十男であつた。

と、ある夜、お鶴の客が町で大きな荒物屋をしてゐる梅田といふ家の二番息子を伴れて遊びにやつて來た。藝者なども聘んで、奧の座敷で大騷ぎをした。

その夜、初めておきよはその息子の席に出たが、不思議にも、それから續いてその息子はやつて來た。

『あの手堅い荒物屋で、大事な二番息子に、さういふことをさせては、』と亭主も上さんも思はぬではなかつたけれど、商賣の方から言つては、それは歡迎しない譯に行かなかつた。

『おきよさんも、滿更ぢやないんだよ。』こんなことをお鶴は上さんに言つた。

餘り度々息子が來るので、

『お前、あまり深入させてお吳れでないよ。それはね、しつかりした家だから、いざと言へば困りやしないけれど、あそこは、家でも出入してゐる大事な家なんだから、ひどいことをしちや困るんだから、……好い加減にしておいておくれよ。』

『え、え、大丈夫ですよ。』

そればかりではなかつた。おきよは、時には、甘薯だの、鹽煎餅だのを持つて行つて、それを猿にやつた。と、此頃では、猿はそれを知つてゐて、遠くにおきよの姿が見えると、キヤツ〳〵と言つて跳り上つて見せた。と、汽車賣の亭主は、『矢張り畜生にも別品さんはわかるもんだね。おきよさんが來ると、容子が違はア。』などと言つて笑つた。

後には、『おきよさん、そんなにぼんやりしてゐないで、また、猿でも見てお出でよ。』などとお鶴はからかつた。

其時分には、おきよの許に通つて來る客ももう大勢出來てゐた。あんなに上品ぶつて何うしてお客が出來るだらうと、始めは思つてゐたのに、却つて、お鶴よりもおきよの方を客が大騒ぎするのを亭主も上さんも見た。

日が暮れて灯がつく時分、湯から歸つた綺麗な顏をして、おきよが店先に坐つて居ると、男はいつも大和格子の隙間からソツと覗いて行つた。

『誰。』

かう言つて、立つて行つて、おきよは靜かに大和障子を開けた。

『貴方、好いぢやないの。』

『また、此次ぎに……』

『男のことで深入したつて、苦みはあるけども、樂みなんかありやしない。』

『そんなことはないよ。お前さんには、わからないんだよ。』

かうお鶴は笑つた。

『で、何うする積りなの？』

『何うせ、末は夫婦さね――』

『のんきなことを言つてるよ。』

『だつて、さう思つてるなくつちや、貢いだり何かする氣にはなれないよ。稼業だと思つてゐればこそ金にする氣にもなるけれども、心から思へや、男だつて、可愛いもの。』

『末は夫婦ね――』

『結構ね、』と言ふのを止して、おきよは神經性に笑つて見せた。

時には、おきよは、『だつて、男のことなんか詰らない。それよりもね、お上さん、前のお猿さんでも見てる方が餘程面白いと思ふわ。だから、よく行つて見るのよ。私お猿さんのんきで好いわ。さつきも行つて見たら、犬と一緒になつて遊んでゐるんですよ。犬と猿つて言ふから、仲がわるいもんとばかり思つてゐたら、あそこのは、さうでないのよ。よく慣れてゐるの。見てゐて可笑しくなつちやつた。』こんなことを言つて、よく汽車賣の店の前に立つて、長い間猿を見てゐた。

『國にゐた時には、何ういふことをして來たんだらうね。』
『さア。』
と言つて、上さんは考へた。
亭主の眼にも、今まで抱へた多くの女とは丸で違つた處が見えた。イヤにはしやいでゐるかと思ふと、何うしてまたあんなに沈んで了ふだらうと思はれるやうなことがあつた。そしてその時々につれて、顏の表情が著しく變つた。關東の女に見るやうな、怒つたり、ふてたりするやうなことのない代り、しよげて、半日口もきかずに物を思つてゐるやうなことは度々あつた。さういふ時に、『何うかしたかえ?』と訊くと、莞爾笑つては見せるが、何も言はずに、靜かにすうと向うの方へ行つて了つた。をりく掃除の手をやめては溜息などをついた。

三

『だつて、お前さん、無駄ぢやない?』
『でも、仕方がないよ。好きな男のためだもの。』
『でも、深入したつてしやうがないわよ。』
『それは、さうだけども、かういふ稼業をしてゐては、ちつとは樂しみがなくつちや――』

前の家の若い酌婦を罵つた。

『でも、男女のこともつまらない。』

『あんなことを言つてゐるよ。これほど面白いものはないぢやないか。』

『それはさうだけども……考へると、悲しくなつて來るもの。』

こんなことを言ふかと思ふと、おきよは、イヤにはしやいで、男を男とも思はないやうなこともあれば、浮世は其日暮し、浮いて遊んで暮さなければ詰らないといふやうな素振をすることもあつた。お鶴などがどんなに腕によりをかけても及びもつかないやうな金を、知らん顔をして男から絞り取ることもあつた。上品で、おとなしくて、座敷に出しては何うだらうかと危んだ亭主や上さんの心配も、單に杞憂に過ぎなかつた。

ある日、お鶴は上さんに言つた。

『何うして、何うして、手取にも何にも……。私なんか、とてもかなはない。やさしい顏をしてゐて、それで、男にかけちや上手なんだよ、お上さん。上方の者は旨いつて言ふが、實際あゝなんかしらん。隨分、男のことでも苦勞もして來たらしいよ。』

『でも、長く一ところにゐないのを見ると、何處か飽きつぽいのかも知れないよ。この前ゐたところでも、半年と少ししきやゐないんだつて言ふから。』

つた。お鶴はその男と摩れ違つても、平氣で、知らん顔をして、停車場の方へ行つた。

休憩した客の切符を買ふ爲めに、停車場に行く時にも、お鶴は平氣で出かけて行つた。『あいつがあそこにゐたから、わざと早く切らしてやつた、』などと言つた。

『お前さん、何うしたえ？　此間の客は？』

かうお鶴が訊くと、

『何うしたか。ちつとも來ない。』

『在のは？』

『あれも來ないねえ。』

『もつと、腕によりをかけなけれや、駄目だよ。お客なんて、シミツたれなもんだけども、こつちの出よう一つで、何うにでもなるよ。五十錢づつ貰つたつて、三人に貰へば一圓五十錢になるぢやないか。田舍ぢや、品をよくしてゐては、藝者だつて賣れやしないよ。』

『さうね。』

『さうぢやないよ。此間も、前の家に來てたつて言ふぢやないか。あんなすべたに取られちや殘念だよ。あのすべた、本當にしやうがないんだから。初めの中は、交際つて貰ひたいやうだから、交際つてやつたけれど、呆れちやつたがね。ひどい奴よ、あのすべた。』シガアの殘りを燻らしながら、お鶴は

が代り〳〵にやつて來たが、時には、運わるく一緒になつて、一人の客の歸る間、自分が相手をしてやつたりすることなどもないではなかつた。お鶴はその三人の客の中で、町から來る色の白い郵便局に出てゐる廿八九の男を一番深く思つてゐた。文なしでやつて來ても、三度に一度は自分で貢いで飮ませてやつたりして居た。

『今日も持つて來ないの？　じれつたい！』

などとお鶴は言つた。

以前の客で、金がないので暫し遠ざかつてゐる男は、ちきその近くの停車場に切符きりを勤めてゐた。家の傍にある吹井の處で、おきよが汚れたもの丶洗濯などをしてゐると、傍へやつて來て、

『ヤア、ゐるかえ？　昨夜、來たらう。郵便屋さんが。』

などと訊いた。

『知らない。』

『知らないことがあるもんか。昨夜、一緒に騷いでゐたぢやないか。』

『噓。』

『隱さなくつたつて好いよ。知つてるよ。』こんなことを言つて、暫し立つて見てゐて、やがて、停車場の方へ行つた。あとでその話をお鶴にすると、『すかない奴！　甚介を起して居るんだよ、』などと言つて笑

などと訊いた。

丁度そこの角は、この町から、なにがし町に通ふ馬車の繼立場になつてゐた。毎朝、九時頃になると、御者は一遍空馬車を引張つて、ラッパを吹いて、町の大通りを通つて行つた。と、田舍の人達は、それを待ちうけたやうにして、其處此處から出て來て乘つた。大きな包を抱へて遠い女學校の寄宿舍に通つて行く娘達もあれば、急な商用に慌てゝ乘つて行く青縞買の商人などもあつた。で、馬車はもう一度其處の角に來て、二三十分ほど待つて出かけた。その間を、御者は店に腰をかけて、女達を相手にして戯談を言つたり、蜜柑を買つて食つたりした。おきよの小づくりの姿はいつも其處に見えた。

おきよが來てから一月二月はぢき經つて行つた。來た時には、これから遠い山に雪が來ようとする頃で、寒い〳〵凩がさびしい關東平野の田舍町に吹き荒れてゐたが、段々押つまつて、年が暮れて、正月が來て、やがて垣添の路には、梅が白く浮出すやうに咲いた。その時分には、おきよにも町の樣子やら、町に住んでゐる人達のさまやら、さういふところに遊びに來る男達の種類やらも大分飲込めて來てゐた。廉い祝儀、シミッたれな小使錢、僅かばかりの枕金、さういふもの丶絞り方なども飲み込めて來た。町の金のある旦那連は、多くは堅氣で、他では遊んでも土地ではそんなそぶりも見せないといふことや、遊ぶのは多くは金もあまりない小商人、でなければ町の息子連、でなければ近在の百姓の町に出かけて來たものなどであるといふこともわかつて來てゐた。お鶴にはその時分きまつた客が三人あつて、それ

れるのは、おきよには丁度痛いところにでも觸られるやうに思へた。お鶴から、どら見せて御覽と言はれた時には、おきよは身を悚ませるやうにした。

二

おきよはちよつと小綺麗な顏をしてゐた。それに、おつくりが上手であつた。年は二十五六であるが、お湯から歸つて來る時などには、何うしてもやつと二十一二にしか見えなかつた。それに、上方近い柔かい線と濃かなる皮膚と小づくりな姿とは、此處等には見られない美しさを持つてゐた。通りすがりの人々は皆振返つて見て行つた。

『停車場の川本には、今度別品さんが來たな。』

『玉木の藝者なんかかなはねえや。』

『本當だ、好い女だ……』

『上方ものだよ。』

こんな噂があちこちにきこえた。

同業のある亭主は、其處の亭主に、

『今度は好い玉だな。何處からさがして來たえ？』

時から、わざと氣にしないやうにしてゐたが、しかもそれが絶えず氣になつて仕方がないといふやうに誰の眼にも見えた。襟をきちんと合はせてゐれば、ちよつと目にはつかない位にかくされてゐるが、少し注意しないと、すぐそれが歷々と見えた。

一番先に、上さんが訊いた。

『何うしたの？　お前？』

『これ？』

急に顏を赧くして、『これ、子供の時に大きな腫物が出來て……』

『それで切つたの？』

『え。』

『隨分大きい腫物だつたと見えるね。』

『え、え、この爲めには大變難儀したんですもの。病院に、この爲めに三月もゐたんですもの。』

『幾つ位の時だえ。』

『十一二の時ですよ。』

『ひどいもんだね。』

かう上さんは言つたが、別に深く訊かうともしなかつた。おきよはほつと溜息をついた。それを聞か

『西つて何方?』

『西つて、お天道さまの入る方さ。』

『それはわかつてるわよ。西つて、何處つて言ふのよ。』

『さうさな、名古屋?』

『いゝえ。』

『なら、伊勢?』

『いゝえ。』

『しかし、その近所だらう。中らなくつても、何でもその近所だよ。』

『さうですか——』

おきよは容易にその故鄕の地名を言はなかつた。無論、家では知つてゐる。亭主も上さんも知つてゐる。一度お鶴にきかれて、隱すにも隱されず、止むなく、それを話したが、地理に暗いお鶴には、それが十分には飮み込めなかつた。『志摩、そんな國があるのかえ? 何方の方だえ? 伊勢? さう、』と、言つたきりで、深くも訊かなかつた。その癖、自分の國の方の話が出ると、おきよは二見が浦の話だの大神宮の話などをしてきかせた。

それに、おきよには、右の襟からかけて胸の方に、かなり目に立つ大きな疵があつた。おきよは來た

『姐さんは何處だえ？　此方のもんぢやないね。』
などと訊かれると、
『いゝえ、ぢき近くよ。埼玉よ。』
かうわざとうろ覺えの關東語をおきよはつかつて見せた。」
『そんなことはないだらう。言葉が違ふ。』
『いゝえ、本當。』
『ぢや、埼玉の何處だえ。』
かう言はれると、すぐ返事に窮して、『いゝぢやないの？　そんなこと、戸籍調べなんかしなくつて好いわよ。』
『何うしても、此方のものぢやない。關東のもんぢやない。』
『さうなら、さうして置きなさいよ。』
ある客は、
『當てゝ見ようか。』
『え。』
『西だらう。』

色彩の乏しい町であつたらう。娘達にも髪を綺麗に結つてゐるものなどは一人もない。大抵は紡績か何かの地味な着物を着て汚ない顏をして平氣で町の通りを歩いた。男達には自分の故鄕に見るやうな色の白い好い男は見たくも見られなかつた。それに言葉もわるかつた。變な訛りのある言葉で、平氣で人々は話し合つた。

薄暗い停車場を出て、亭主につれられて、始めて其處の格子を明けて入つて來た時には、おきよは外國にでも來たやうなさびしさと心細さとを覺えた。その時、色い生白い、白粉のところ〳〵はげた女が、綿フランの黑い襟卷をした客と、だらしのない風をして、ふざけ散らして、奧から出て來たが、それが今思へばお鶴であつた。あの時お鶴は變な眼色をしておきよを見た。

『好い姐さんだ……何處から伴れて來なした?』

其時、そのお客はかう言つて、じろ〳〵おきよの方を見た。

國から東京、東京から上總、上總から埼玉、さういふ地名だけは、おきよは覺えてはゐたけれど、それが生れた故鄕からは、何ういふ風に離れてゐるのか、何ういふ風にやつて來たのか、自分自身にもはつきりとは覺えてゐなかつた。何でも、國は西の方になつてゐる。おきよは唯かう思つた。おきよはをり〳〵停車場の陰に薄れて行く夕日の方を見て淚を流した。

をり〳〵客から、

『置いて行つたに違ひないよ。あのお客は堅いんだから。』

雜巾がけをしながら、好加減な返事をおきよがしてゐると、

『本當に、あいつはづう〳〵しくなつて、此頃は油斷がなりやしない。今度お客が來たら、聞いてやるから好い。』

こんなことをぶつ〳〵言ひながら、上さんは向うの方へ行つた。朝日が漸く通りにさして、荷車だの荷馬車だのが、ガラ〳〵と町の方へと行つた。汽車の辨當だの茶だのを賣る向うの家の亭主は、朝早くから一商賣したといふやうな顏をして、元氣よく停車場から店の方へ歸つて來た。

キヤツ〳〵といふ聲がきこえるので、おきよが振向いて見ると、その汽車賣の亭主の店の前の高い撞木には、今しも箱から出された猿が元氣よく上つたり下つたりしてゐた。來た時から、おきよには、その猿が可笑く滑稽に思はれた。その猿はもう隨分長くそこに飼はれてゐるといふことであつた。何でも秩父の山奧から貰つて來て、客を寄せるために亭主はそれを店の前に置いた。果して其處には種々な人が朝に晩に立留つた。子供、子守、倉庫の人足、さういふものがいつも飽きずにその前に來ては立つた。

遠い海の向うから來たおきよには、あたりのものがすべて何も彼もめづらしく不思議に思はれた。小さな停車場、小さな倉庫、町と言つても、自分等の住んでゐた町と比べたら、何んなにさびしい平凡な

旅の者

一

おきよが起きる時分には、いつも下りの一番の汽車が來た。夜の稼業の遲いので、跡片附を好い加減に放つたらかして置いても、床に就くのは何うしても十二時すぎになる。しかし新參の身は、朋輩のお鶴よりも早く起きなければならなかつた。おきよは眠い目をこすりながら、いつも表の雨戸を明けた。

おきよはそれから表の通りを掃いて、店を片附けて、煙草を置いてある棚やら土間に添つてゐる三疊の座敷やらを掃除して、上さんの火を焚附けてゐる竈の傍へ行つて、湯を一杯バケツに貰つて來て、それからあちこちと雜巾がけを始めた。

何うかすると、上さんはおきよに話しかけた。

『お鶴のお客は、昨夜、はなを置いて行つたかえ?』

『何うですか。』

かれは續いて石田と同志のことを考へた。村田が死に、自分も死んで了つては、この悲壯な最期を同志に傳へるものは誰もない。誰もない。かう思ふとそれが死に臨んでの唯一の心殘りであるやうにかれには思はれた。しかしかれは何うすることも出來なかつた。

やがて時を移さず群集が上へ〳〵と押寄せて來る氣勢がした。もう確かに三階、四階あたりまで上つて來たらしかつた。鬨の聲が死を促すやうに下に聞えた。

かれは蹌踉として立上つた。かれは板敷に滴り落ちた血汐に指を染めて、前にある太い柱に『憂國の志士瀨尾半之丞秀包此處に自裁す』と大きく書いた。

しかしそれを書くのに、かれはかなりの時間を費した。血が足りないので、かれは何遍となく躊躇んで血汐に指を浸した。――で、書き終つて、それを見て、莞爾笑つて、それから自殺の準備にかゝつた。」

かれは血刀の切先を衣の袖に卷いて、ぐさつと下腹へ突刺して、それを左から右へと引いた。」

群集はその時既に其處に迫つて來てゐた。」

何處の間もひつそりとしてゐた。五年前までは、種々な武器や太鼓や器具が置かれて、足輕や徒士が頻りに往來したが、今は些の物の具もなければ、人氣もなく、徒らに蜘蛛の巢や鼠や鼬の住むところとなつて了つた。停滯したまゝの空氣には、埃の匂ひが微かに雜つた。

かれは半は血刀を杖にし、半は階段の手摺に身を凭せながら、辛うじて最後の一階まで登り詰めた。其處は二十疊敷位の板敷で、四面の小窓からさし込む光線は明るくあたりを照してゐた。大きな梁と太い柱とが縱橫に互に交叉してゐた。

かれは半ば倒るゝやうにどつかとその板敷の眞中に體を落した。死といふことより他に、かれには何物もなかつた。かれの頭はがらんとしてゐた。後から上つて來る追手のことなどは、もう殆どかれの眼中には留つてゐなかつた。僅かな間――唯、呼吸の根を留める僅かな時間さへあればそれで足りる。かう思つて、かれは安心してほつと呼吸を吐いた。

ふと天守閣の最高の一間の四面をめぐるひろい眺望がかれの眼に入つた。空、雲、日の光、遠い森、人家の烟、一ところ金屬のやうに輝くものがあると思つて凝視したかれは、それは城の半をめぐつてゐる大きな沼の水であるのを見た。

『好い死場所だ。』

かれはまたかう思つた。

キとかれは目を据ゑた。
追手は既に天守閣の門のところまでに犇々と詰め寄せて來てゐた。群集は更に群集を加へたらしく、騷音は一層高くかれの耳朶を打つた。
かれは追手の邪魔をしない中にと思つて、急いで天守閣の内に入つた。
光線の明るい戸外から入つて來たかれは、暫しはあたりをそれと見定めることが出來ないやうな暗さを覺えた。突然、かれを掠めて慌てゝ出て行く人の氣勢がした。かれは身構へした。
『其處だ、其處だ。そこに上つて行つた。』『その出て行つた人のかう言つてゐるのが後に聞えた。』
かれは血刀を杖にして階段を上つて行つた。
かれの行くところには、血汐が長く痕を引いた。
かれは力の全く盡きたのを感じた。眩惑して、倒れかけて、危く階段の手摺に寄りかゝつたりした。あるところでは、苦しい呼吸をつく爲めに、やゝ暫くの間、階段の一つに腰をかけて休んだ。多量の出血から來る心臟の鼓動は、烈しくかれの疲れた體を惱ました。
一階は一階毎に、階段が次第に狹く長くなつて行つてゐるのをかれは見た。ある階段にかゝらうとした時は、あまりに苦しいので、いつそ此處で自殺して死んで了はうかと思つた。しかしかれは勇氣を鼓して猶ほ上へ〳〵と登つた。

つたかれも、今は何うすることも出來なくなつたのを總身に感じた。かれは辛うじて井戸から水を汲みあげて、釣瓶の縁に口を寄せて、何も彼も忘れたやうに心ゆくまで水を飲んだ。

『あゝ萬事休す！』

かれは思はずかう言つたが、輕い眩惑を覺えて、そのまゝ額を押へて蹲踞んだ。いつの間にか脛にも股にも數ヶ所の創の負つたと見えて、血が傍の枯れた雜草を赤くした。

いろ〳〵な光景が早く早くかれの眼の前を通つて行つた。會津の城外で遁ぐる官軍を追つて行つたかれ、重圍の中を脫して深夜山越しに遁げて行つたかれ、函館の落城の間際まで奮戰苦闘したかれ、ひそかに東京に遁れかへつて、同志の者と頻りに再擧の肝膽を碎いたかれ、石田といふ首領と軍用金を集めるために下總から常陸、下野の間に往來したかれ、何處も彼處も新政に謳歌して天下の形勢の次第に我に非なるを見て悲憤慷慨したかれ、さういふものが繪卷物か何かのやうになつて、それからそれへと鮮かにちらついて見えた。(何も彼も過ぎ去つた。これといふも身の否運だ。天下の爲めに憂ひ、國家の爲めに謀つたことも皆無効に歸した。苦心も皆水の泡だ！　しかし、何も歎くべきことはない。この上は、この上は……唯、潔よく死ぬばかりだ。さうだ。天守閣、昔の城の天守閣の一番上で腹かき切つて死ねば、それで本望だ。)ふと主君のことだの、父母兄弟のことだの、遠い故郷のことだのが思ひ出されたが、かれは自分の女々しいのを恥ぢるやうに、すぐそれを打消して立上つた。

樣の住まなくなつてから、何もかもすつかり荒廢した。それは丁度昔榮えた封建制度の滅亡のシンボルを見るやうに、石垣は崩れ、樓門は壞れ、屋根には長い蔦が跂つた。寂寥が全くあたりを領した。

『城の中に入れるな。』

かういふ叫聲がまた後でしたが、しかし橋を渡つて、開いてあつた城門の中に入つて行くかれを誰も遮るものはなかつた。かれは幾屈曲して曲つていつてゐる路を、殆ど抵抗するものなしに、天守閣の前まで來た。

天守閣の下階に住んでゐた番人は、其時嬶と二人で内職をしてゐたが、ふと群集の揚げた鬨の聲に驚いて、何事が起つたかと思つて、大きな四ッ格子の窓から覗いた。そこからは、橋と、向うに打渡した廣場と、大勢集つた群集とが見えた巡邏を先に、槍だの刀だのを持つた侍衆が橋を渡つて此方へやつて來るのも見えた。番人は仰天した。何事かと急いでそこから下りて行つた。

番人が表へ出たのと、かれが其處にやつて來たのとは殆ど同時であつた。誰何する前に、番人は提げた血刀と、渾身赤に染みた姿と、青白い激昂した顏を見た。かれは愈仰天して、一度出たのをまた再び内に入つて了つた。

番人の炊事場らしいところの傍に井戸のあるのを見付けた瀨尾は、何をもさし措いて、先づ其方へと步み寄つた。流石にかれも疲れてゐた。昨夜から今日にかけての惡戰苦鬪、會津でも函館でも勇名を以て鳴

『さうだ。』

かう思つた瀨尾は、急に刀を揮つて、城の方へ向ふ方面の一路を切り開くべく群集の中に躍り込んだ。その勢ひは盛んであつた。それは丁度虎が羊の群の中に躍り込んだ樣なものであつた。路は忽ち開けた。

『この期を移さず搦め捕れ！』

『城の中に遁すな。』

かういふ聲が彼方此方から聞えた。

村田を失つたといふことは、瀨尾の爲めには尠くとも一大打擊であると共に、巡邏達に取つては、非常に力を添へる材料となつた。巡邏はあとからあとへと隙間もあらせず競ひかゝつて來た。

それを、その追窮を自分の身の近くに寄せまいためには、かれはをり／＼立留つて烈しく戰はなければならなかつた。かれは更に三人を傷け二人を斃した。かれ自からも、更に數ヶ所の手傷を被つた。

かれは血刀を提げながら、濶步して、三の丸の城門の方へと行つた。

『さうだ。好い死場所だ。われ等敗殘者には人の住まなくなつた昔の城の天守閣の上が最も好い死場所だ。さうだ、確かに好い死場所だ。』

かうかれは獨語した。

三の丸の城の前の門には、小さな濠が取りめぐらされて、其處に、古い朽ちかけた橋が架つてゐた。殿

『貴様とは長い間志を俱にして來た――こんなところで貴樣を殺さうとは思はなかつた。志は事と皆な齟齬した。』かう獨りで言つたが、萬感交も胸に集つて來たといふやうに、生白い激昂した顏を上げて、瀨尾は悵然とした。涙が頰を傳つて落ちた。

やがて思切つたやうに立上つたかれは、聲を張り上げて群集に向つて叫んだ。『村田新之助、函館脫走浪士村田新之助、今此處に戰死した。天下の爲めに憂ひ、國家の爲めに謀つた大丈夫の志は、爾等のやうな犬、羊にはわかるまいが、よく聞け。恩を恩とし、義を義とし、爾等の如き不忠不義の者を憎むこと蛇蝎の如き大丈夫、城を邸宅に代へ、恩顧を金に代へ、祖先の志を忘れて安逸を貪らうとした汝等不忠不孝の者は、何の面目があつて、この勇しい大丈夫の最期に對するぞ。爾等鼠輩は、大鵬の志を知らず、燕雀に伍して、われ等の志をして水泡に歸せしめた。しかしながら、言つてきかせたとて、われ等の志はわかるまい。來るなら來れ――』かう言つて瀨尾の身構へした時には、群集は旣に鬨の聲をつくつて、その周圍に押寄せて來てゐた。

瀨尾は一刻每に群集の多く簇つて來るのを見た。最早、前に進むことも出來ず、後に退くことも出來なかつた。切つて切つて切りまくつて、潔く死ぬより他に仕方がないと決心した。

ふとかれの眼に映つたのは、城の白堊と、門と、石垣と天主閣とであつた。丁度その時、午前九時過の日影は美しく昔の城壁に輝きわたつて見えた。

不意に喝釆の聲がした。

一人の男を相手にして戰つて居た瀨尾は、この聲を聞いて、何事かと振返つて見た。その時かれの眼には、村田がある大きな男に肩先を斬られて、前に踣るやうにして倒れるのが映つた。かれははつとした。と、勢ひ十倍して、いきなり眞向にその相手の眉間を割つたが、そのまゝ踵を旋らして、かれは急いで地上に倒れた友達の方へと行つた。

村田と戰つてゐた男は、今度はかれに向つて來た。

それを切つて切つて切りまくつて、かれが再び友達の傍に來た時には、大勢の群集も侍も、巡邏も、あまりの勢ひに恐れて、暫し遠卷にしなければならなかつた。

瀨尾は倒れた友達を引起した。

『氣をたしかに――』

かう言つたが、肩に、額に胸に無數の創を受けた村田は、もう再び其處から起き上らうともしなかつた。村田の魂は獨り靜かに天に昇りつゝあつた。

『村田、おい、村田。』

ほそく眼を開いて見たが、すぐまた眼を閉ぢた。胸からは血が夥しく流れた。

先づ槍を向けたのは、かなり年を取つた頭髮の半白の男であつた。藩の多い侍の中でも、武藝一殊に槍の達人としてば、聞えた人であつた。瀨尾は身つくろひをして、地に足を踏みしめてから、靜かにそれに向つた。

群集はその槍の穗と白刄との見事に空に交はされるのを見た。續いてもう一人の男は刀を揮つて村田に向つた。村田はそれを引受けて戰つた。

熟達した刀の冴えは、をり〳〵槍を地上に向けさせるべく餘儀なくさせた。それを見て取つた一人は忽ち横合から瀨尾に斬つてかゝつた。瀨尾は槍をはねのけて置いてから、直にそれと刄を合せた。

混戰は始まつた。侍の方に手傷を負つたものが二三人出來る頃には、瀨尾も、腕と肩どに薄手を受けた。それにも拘らず、かれの刄は銳く冴えて空に光つた。

瀨尾は旣に三度進んで三度退いた。二人を傷け三人を斃した。ふと村田はと見ると、かれから三四間離れて、二三人の敵を相手にして頻りに受太刀になつてゐるのを見た。瀨尾は更に立つてその一人に躍りかゝつた。

『打つて了へ！　打つて了へ！』と言ふ聲が聞えた。

『飛道具は卑怯だ。敵ながら、天晴な武士。』

續いてかういふ聲が聞えた。

『行かう。』

最後の勇氣を鼓したといふやうにして、手を負つた方は立上つた。强い眩惑はかれを襲つた。一人の方は、懷の中から、財布を出したが、もう入らない金だとばかりに、小判一枚を朱塗の盆の上に放り出した。

『世話になつた！』

で、二人は血刀を提げたまゝ表へと出た。群集はまた囃した。

城の方に行かうとする路の角に來た時には、二人はキッと目を据ゑて向うを見渡さずには居られなかつた。そこにはもう何うしても破ることの出來ない難關が橫はつてゐるのをかれ等は見た。刀や槍を持つた大勢の群集は、報を得て、彼方此方から集つて來て、かれ等の來るのを其處に待受けてゐたのであつた。

かれ等は顏を見合はせた。

で、二人はまた靜かに步を進めた。二人は此時は最早これを突破して血路を開かうと思つてはゐなかつた。それよりはむしろ見事に人に笑はれない最後を獲たいとのみかれ等は思つた。勇氣は全身に滿ち渡つた。

『天下の大勢とは言ひながら、』かう言つて手を負はない方は慨嘆して、『薩長の奴輩にかうして天下を取られようとは思はなかつた。何處に行つても眞の骨のある人間はないのか。言ふまゝに、羊のやうに從順に城を捧げ國を捧げて何とも思はない藩主共は、何と言つて好い腰拔けか。祿を金に代へ、城を邸宅に代へ、祖先傳來の家臣を捨て、恩を捨て、義を捨て、それでも生きて安逸を貪りたいのか。殊に情けないのはそれに從ふ奴輩だ。髮を斷てと言へば髮を斷ち、大小を捨てよと云へば大小を捨てた。それほどまでにしても猶ほ命が惜しいのか。』齒を喰ひしばるやうにして暫し默つてゐたが、『しかし、これも運命だ。しかし村田、今になれば、會津を遁れ、函館を遁れたのが殘念だ。何故、あの時に潔く同志と共に死ななかつた？　何故あの時萬死に一生を遁れて生き殘つて來た？　それと言ふのも志を遂げたいばかりにかうして生き殘つて來たのだ。しかしもう駄目ぢや。天下が既にかういふ形勢になつては、古河に歸つたとて、とてもわれ等の志は遂げられようとは思はれない。石田の謀略も雄志も何もかももうおしまひだ。俺はもう決心した。』かう言つたが、顏を擧げて、『それにしてもかういふところがわれ等の最後の地とならうとは思はなかつた。』

『本當だなア、瀨尾……』

二人は憮然とした。

暫くしてから、『では行かう。』

かう言つたが、無念さうな顏の表情をして、キツと群集の方を見て、『しかし、此まゝになつて了ふのはいかにも無念だ。同志に逢つて、もう一度謀略を企てて見ないのが殘念だ。言つても効がないことだが、何故、佐野であゝいふことをしたか。あゝした幕を開いたか。昨夜、また、あの渡場で、何故身を遯してしまはなかつたか。』

『それと言ふのも皆な俺の爲めだ。』

『そんなことはない。……しかし、村田、歎いたつて爲方がない。事は成敗に由て論ぜず、眞價は棺を蓋うて後定まるちや。俺も決心した。』

『血路を開いて吳れ。』

『飽まで運命を倶にしよう。生きるなら生きる。死ぬなら死ぬ。貴公一人を此處に捨てるわけには行かない。』

額から血が流れるので、今朝裂いた手拭の殘りを取出して一人の方は一人の額をしつかり結んでやつた。

群集はまた聲を擧げた。二人は屹として其方を見た。

『犬め、羊め。』

かう言つて睥睨した。

手を負はない方は考へて、『かう大勢になつてはとても駄目だ。とても切拔けて古河まで行くことは出來んな。』

『殘念だ。』

『切り拔けよう、切り拔けようと此處まではやつて來たが、これではとても駄目だ。』

手を負つた方は、『無念だが、致方がない。俺は疲れた。とても駄目だ。しかし、貴公はまだ何ともない。流石は名流の子孫だけあると思つて感佩した。もう澤山だ。友人の厚誼は、もうこれで十分だ。心から感謝した。俺はこゝに放つて置いて、何うにもして此處から血路を切り開いて吳れ。昨日、佐野で俺はもう無い命だつた。それを貴公のために、俺は此處まで生きながらへて來た。もう澤山だ。』

『そんなことを言ふな。俺一人血路を開いたところで爲方がない。奮鬪して、それで駄目なら、切つて切つて切りまくつて、それで潔く此處で死ぬばかりだ。』

『俺のまきぞひを貴公が受けてはならん。それに、古河の方のことを考へても、生きられるだけ生きなければならない義務がある。仕上げなければならないことが澤山にある。俺は大丈夫だ。俺のことは心配しないでも好い。俺は俺の處分をちやんとする。人に唄はれても恥かしくないやうな最後を遂げるのだ。決して捕縛の恥辱は受けない。』

『しかし、そんなことを言ふな。行くところまでは行かう。』

眼に入らうとするのを、煩さゝうに手で拭つた。

やがて大名小路の路の曲り角のところへと二人は來懸りつゝあつた。そこからは、城の門と、高い白堊と、蔦の絡んだ石垣とが見えた。切り拂つて殘り少なにはなつたけれども、土手の上には、まだ大きな松の並樹が殘つてゐて、晴れた空には、鳶がのどかに舞つてゐた。

曲り角には、小さな店があつた。それは通りすがりの旅客に、茶や菓子や果物などを賣る店であつた。熟した柿の實などが一杯に其處に並べられてあつた。赤い襷をかけた、ところでも評判な頰の紅い十七八の娘が、いつでもそこで客に茶を侑めた。

その時も矢張その娘が其處に出てゐた。

思ひもかけず二人は其處にある緣臺に腰を懸けて休んだ。遠卷にしてゐた群集は、ワッと聲を懸けた。

二人は娘から所望して、水を飮んだり柿を食つたりした。刀は拔身のまゝ其處に突刺してあつた。

二人はこんな話をした。

『創は痛むか。』

『うむ……』

『かなりに深いな。』

『何うも目がまはつていかん。』

『行くんだい、行くんだい。』

男の兒はかう叫んで、母親のしつかりつかんだ袖を振放つて、飛んで行かうとすると、母親はまた追蒐けて、小さな溝の白い花の咲いてゐるところで捉へた。

ワツと言ふ群集の聲がちき近いところで聞えた。

『今、其處を通つて行く。』

『何處を?』

『大名小路の戸部さんの前のところを……。もうちき曲り角のところだ。』

かう敎へてある人は走つて行つた。

二三人の女房は急いで其方の方へ驅けて行つた。長屋の門の前にも畠の桑の樹の蔭にも、大勢人が出て、その二人が群集に跟けられて通つて行くのを見てゐた。

二人と群集との距離は十間ほど離れてゐた。手を負つた方は先に歩いて、あとからもう一人の方が續いた。二人とも蚓られた刀を持つて、鳥渡でも邪魔をするものがあつたら用捨なく斬つて捨てようとする態度を見せて靜かに歩いた。

さつきの爭鬪に手を負つたと見えて、一人の方の額からは、血が流れてゐた。そしてそれがをり〳〵

『殿樣の御奉公なら、爲方がないけれど、馬鹿な眼を見たもんだ。』

『本當だ……。それに、義賊だつて言ふぢやありませんか。』

『さういふ話ですよ。唯だ城下を通して貰ひさへすれば、好いつて言ふさうぢやありませんか。默つて通してやれば好いのに……』

『本當ぢやな。』

『餓じいものには食を與へる。渴ゑたものには水を與へる。さう言つたつて言ふぢやありませんか。何も御城下に來ては、わるいことをしたと言ふではなし、さういふ義賊なら、默つて通してやれば好いのに……』

息子らしい十三四の男の兒の驅け出して行かうとするのを、一人の女房は慌てゝ走つて行つて引留めた。

『行くんだい、行くんだい。』

『なりません、なりません。』

『行くんだい、行くんだい。』

『だつて、お前、怖いんだから……。傍に寄るものは、皆なたゝつ斬つて了ふつて言ふんだから。行つちやなりません。』

槍を持つた方の一人は、先づ躍りかゝつて行つた。群集は目ざましい光景の忽ちそこに展けられるのを見た。刀を振翳した方は、もう一人の方と渡り合つた。

槍は忽ち斫り折られた。そればかりではなかつた。前から後から集つて來る巡邏を近くには寄せつけずに、一人の同志をかばひながら、一歩々々後へ〳〵と退いて行くさまは、見てゐる人達の眼を驚かすに十分であつた。三四分渡り合ふ間に、槍を持つた男は、群集の中に追ひまくられ、刀を振翳した男は肩の處に痛手を負つて後に倒れた。巡邏は三人まで斬られた。

ある路の角で女房達は話した。

『見さつたか?』

『見た。』

『まだ若い男ぢやつてな。』

『えらいにも何にも。腕のきゝ手だ。一人は手を負つてゐるから、それほどでもないが、一人は容易につかまへやうたつてつかまえられない。堀内の坊ちやんは斬られた。』

『清助が槍の柄を切られたつて言ふぢやないか。馬鹿な奴だ。物笑ひの種だがな。出いでも好いところへ出て。坊ちやんは、また何故そんなところへ出たんぢやな。』

『物好きに出たんぢやらうがな。命があぶないつて言ふ話だがな。』

『何者だ？ 城下を騒がすのは？ 殿樣がお住ひにならなくなつたと思つて、侮つた業をして後悔すな。』

かう言ふ聲を二人は聞いた。二人はある侍らしいものが、一人は長い槍、一人は刀を振翳して、群集の中から此方へと向つて來るのを見た。なまこじつくいの長い塀の續いたところに來た時であつた。

『何者だ？ 名告れ！』

『名告らぬか。』

傷痍を負はない方は、振返つて身構へした。そして聲を張り上げて言つた。『此處は天下の大道だ。それを通るのに、邪魔をするものこそ心得ぬ。われ等は佐野から來て、此處を通つて、古河に行くものぢや。古河には我々の同志がある。我等は義に由つて動くもの丶一人ぢや。民が餓ゑるのを見てるのに忍びないもの丶一人ぢや。われ等は新しい政治に不滿を抱き、薩長の奴輩に天下を任せることの出來ないもの丶一人ぢや。われ等は餓ゑた者には食を與へた。渴したものには水を與へた。われ等の同志は、天下と國家とのために憂ふるものだ。われ等の同志の爲めに民の食を得て飢餓を免れたものは何れほどあるかわからない。……それでも猶ほ邪魔をするか。』

『天下の秩序を亂し、人を殺し、財を奪ひ、それでも猶、上の威光を恐れぬ鼠賊ぢや。』

『からめ捕れ！』

靜かであつた城内は、俄かに群集の聲に目覺めた。其處の門からも、此處の門からも人が走つて出た。めづらしい光景を知らせるために、外に遊んでゐた子供は走つて内の中に入つて行つた。

其處からも此處からも、犬が吠え蒐つた。大抵は地犬で、仔牛のやうに大きいのが多かつた。ある大きな構の家の前に來た時には、餘りにそれが煩さく吠え蒐るので、脛に手痛を負つた方の一人が、刀を拔いて、近くへ來た黄い毛色の大きな犬を眞二つに斬つた。犬の脊から胴にかけては、血が夥しく流れた。犬は猶ほ吠え蒐つた。

巡邏の數は、此時は既にかなりに多くなつてゐた。非番の人達も變を聞いて彼方此方から集つて來た。少くとも十五六名には達した。それでも、かれ等は何うすることも出來なかつた。

隊長は脊の高い鬚の生えた男であつた。不恰好な服を着て、だぶ／＼したズボンを穿いて太い棒を持つてゐた。それが彼方へ行つたり此方へ行つたりして、部下を指揮してゐるのが明かに朝の空氣に浮き出して見えた。しかし最初の一擊に氣を飮まれた巡邏達は、進んでかれ等に當らうとするものはなかつた。

二人の歩くのにつれて、群集と巡邏とは唯動いて行つた。

『駄目だ、駄目だ。刀が無くつちや駄目だ。刀を持つて來い。槍を持つて來い。』かう誰か叫んだのを二人は耳にした。

あとから巡邏が二三人續いた。しかし一人の方の男の切先が鋭いので、それと渡り合つてゐた巡邏は棒を落されて、あつと言ふ間に、額に創を受けた。

數名の巡邏のぱつと後へ退くのが歷々と指さゝれて見えた。

と、逃げるものは追はずといふ風で、刀を鞘に收めて、二人の男の並んで靜かに此方へと步いて來るのが見えた。嚊もその時には赤兒を抱いて、飯を食ふのを止して、そこから顏を出して見てゐた。

この時、誰か人があつて、大手の門を閉めたなら、二人は何うすることも出來なかつたであらう。現に、巡邏の中にはさういふことを思ひ附いてゐたものも一人や二人はあつた。しかし時機は遲れた。二人は靜かに大手から城内へと入つて行つた。

城内には、新しく酒屋だの物賣店などが二三軒出來てゐた。昔の城内の威嚴は全く地に委して了つて、土手には草叢やら竹藪やらが茂つた。仲間も赤兒を抱いた嚊も群集に雜つて後から續いた。

群集の中からは種々な聲が起つた。斬られた巡邏は士族だと言ふことやら、城内に入つたら士族が大勢出て來るであらうといふことやら、棒ではとても敵し難いといふことやら、何や彼やと喧しく騷いだ。天誅組の仲間だと言ふものもあれば、旗本の落武者だといふものもあつた。『侍だ。立派な侍だ。あゝいふ侍を侍らしく取扱はないからいけんのぢや。あれを縛め取らうと思ふから間違つてゐるのぢや。』分別顏をした男は、かう言つて同情するやうな顏をした。

二人が料理店で飯を食つてゐる時分、町の巡邏の集合所には、あちこちから頻々として警報が傳へられて來てゐた。佐野からも來れば、その間に流れてゐる川の渡場からも來た。二人は二三日來、あちこちを暴ばれ廻つた。殆ど手をつけることが出來なかつた。佐野では、巡邏が數十名で取卷いて、既に捕縛に及ばうとしたところを、殘念にも遁がした。あとから追ひかけて來た數名の巡邏は、棒だけではとても何うすることも出來ないと言つた。

『しかし、もう疲れてゐる。一人は手創をさへ負つて居る。手筈をきめさへすれば、捕縛するのに、さう困難も感じまい、』と追手の一人は言つた。

町の巡邏が逸早く斬られたといふ報は、集合所の巡邏達を總立にさせた。巡邏達は大騷ぎをして跡から追ひ懸けた。

その先發隊の數名の巡邏が群集に追ひついた時には、二人はもう町の角を城の大手の方へ行かうとしてゐた。大手の門は、殿樣が住まなくなつてから、明け開いたまゝにしてあつたが、それでもまだそこに通ずる路は、ひろ〴〵と綺麗になつてゐた。門の傍の二階の中には昔の仲間が住んでゐた。

仲間はその嬶と一緒に朝飯を食つてゐたが、表が急に騷がしくなつたので、何事かと思つて古い昔の格子戸から覗いて見た。仲間の眼には、群集と、怪しい形をした拔身を持つた二人の男と、棒を持つた巡邏とが手に取るやうに映つて見えた。丁度その時、一人の男は先に進んだ一人の巡邏と渡り合つてゐた。

から再び禮を述べて刀を鞘に收めて、そして外に出て行く二人を人々は見送つた。その時には、巡邏こそまだ來てゐなかつたが、噂を聞いて群集が大勢その家の前に集つて來てゐた。

二人が出ると、群集は忽ち路を開いた。種々な聲やら噂やらが其處から起つたが、しかし誰も二人を留めるものはなかつた。群集の中には、子供も女も雜つてゐた。『佐野の方から來たんだ。人殺をして來たんだ。……追手がかゝつてゐるんだ。』かう物知り顏に言ふものなどもあつた。二人の歩いて行く後から群集は續いた。

不運なのは、それと聞いて最初にそこに驅けつけて來た一人の巡邏であつた。群集をわけて、二人の前に立塞がらうとすると、年上の方の男の刀は忽ち鞘を離れて、あつと言ふ間に、その巡邏の肩のところに觸れた。巡邏はあつと言つて、後ろに倒れた。

『拔いた、拔いた。』

群集はかう叫んで後退りをした。

あまりの離れ業に、群集は唯呆れるばかりであつた。誰一人手を出さうとするものもなかつた。二人は朝日の光の美しく漲つた町を靜かに歩いて行つた。

噂はやがて町にひろがつた。行く先々の町では、危險を恐れて、一度あけた戶を再び閉めるものなどもあつた。親達は急いで子供を奧に隱した。

手創を負つた方の一人は、一杯食ふには食つたが、咽喉に通らないといふ風で、すぐ箸を傍に置いた。

人々は年上の方の男が飯を食つてから、しつかりと帶を緊め直したり、草鞋の紐を結びかへしたりするのを見た。年上の男は年下の方の男に向つて言つた。

『痛むか。』

『いや――』

手拭をぴりゝと裂いて、渡すのを默つて受取つて、一人の方は、それで確かりと脛の傷を結へた。そして立上つて、地踏をして、これで大丈夫といふ風を見せた。

『忝けなかつた！』

かう年上の方は言つたが、『古河の方への道は何う參るのぢや？』

主人は指さして二言三語敎へた。

『城の中を通るのぢやな。』

『左樣で――』

『何里あるかな？』

『五里には近う御座います。』

『忝けなかつた！』

今朝早く町のある店で若い主婦が戸を明けた。と、その二人の男は、そこに立つてゐて、いきなり船られた刀を眼の前に突きつけた。

若い主婦は氣絶した。

『無心ぢやが、水を呉れ。』

かう言つて、齒の根も合はぬばかりにぶる〳〵戰へてゐる主人の手から水を貰つて飮んだ。一人の方はことに咽喉が乾いてゐるといふ風で、二杯も三杯も續けて飮んだ。

それは小料理屋らしい店であつた。棚には德利などが並んでゐた。昨夜遲く洗はずに婢が放つて置いた膳椀なども其處等に散らばつてゐた。

『腹が空いた。氣の毒だが、飯を一椀振舞つて呉れ。』

かう一人の方が言つて、血のついた刀を土間に突きさして、そこに腰を懸けた。年の頃三十八九で、苦味走つた好い男であつた。死の追窮の中を遁れて來た激昂と、夜を徹して歩いて來た疲勞とは名殘なくその面やら態度やらに現はれてゐた。一人はそれよりも一つ二つ年下らしく、脛のところに二三ヶ所創を受けてゐた。

氣絶した若い主婦を番頭や婢達が奧へ運んで行つたり何かしてゐる間に、主人と氣丈な一人の婢とは、飯櫃と膳椀と昨夜の殘肴とを其處に出した。一人はそれに水をかけてさら〳〵と旨さうにして食つた。

ある人は言つた『えらい騷ぎぢや。とても巡邏などの手には合はん。追手のところで、二人まで斬られた。それから、もう少し來たところで、侍がこりずに劍を拔いて向つたが、忽ちそれを打落されて眞向に額を切られた。武士ぢや、確かに武士ぢや、腕の利いた武士ぢや。えらい騷ぎぢや。今、丁度杉山さんのところを通つて行つてゐる。』

『强盜か？　人殺しか？』

『そんなもんぢやない。えらい勢ぢや。及向ふものは片端から斬つて捨てるといふ勢ひぢや。』

『一人か？』

『いや二人ぢや。二人とも立派な着物を着て、裾を高く端折つて、血刀を提げてゐた。一人の方は劍を額のところに受けて、血が其處から流れてゐた。』

『何處から來たのか？』

『何でも佐野の方から來たといふ話だ。昨夜佐野を荒らして、今朝、町へ入つて來たといふことぢや。』

『何者か、わからんか。』

『わからない。』

かう言つて其人はまた走つて行つた。

『何うした？　何うした？』

さういふ聲が到る處で聞えた。何處の家からも人が出て來た。髮を斷ちかねてまだ髷に結つてゐるものなどもあつた。ある家の格子窓からは女房の顏が覗いた。子供達は無意味に唯騷ぎ廻つた。

火事かと思へばさうでもない。喧嘩かと思へばさうでもない。それでゐて、人は彼方からも此方からも走つて行つた。呼び留めて訊いても誰も知つてゐるものもなかつた。

兎に角、事件は大名小路の方面にあるらしかつた。路の角に立つて、其方を眺めてゐる女房達は、不安さうに何彼と噂した。また何か事件でも起つたのではないか。一昨年の騷動のやうなことが起つたのではないか。或は知らぬ間に戰爭が始まつて、殿樣の世になる運動が始まつたのではないか。

『巡邏がやつつけられた！』

向うから走つて來た男は言つた。

『巡邏が？』

『何うしたんだ？　何だ？　事件は何だ。』

人々は忽ちその周圍に集つた。その男の言ふ所によると、何でも血を見る騷動であるらしかつた。『堀内の坊ちやんが斬られた。それから戶部さんが出て槍で向つた。槍は見事に切落された。えらい腕だ。冴えた腕だ。』かう言つて走つて行つた。

二人の最期

何となく騷々しい。誰も彼も出て見る氣勢がした。犬が頻りに吠える。不吉なある事變が起つたのではないかと疑はれた。

その朝は靜かであつた。風も吹かず、木の葉も動かず、それでゐて空は美しく碧に晴れて、士族屋敷の處々から騰る烟が、細く眞直ぐに立昇つた。殿樣がお城を引揚げて東京住ひをなされてから、衰頽と絶望と寂寥とが全く四邊を領した。長い間の家祿に離れて、大小を差すことを禁ぜられて、頭も町人のやうにザンギリにしなければならない士族達は、殆どあてどもないほどに思ひ惑つた。

お厩にも馬の嘶きも聞えず、大名小路に弓の練習をするものもなく、三の丸に通ふ路も全く草に蔽ひかくされた。城の門は明放され、白壁は崩るゝまゝに任せ、石垣には蔦が絡み附いてそして紅葉した。

『何ちや、何ちや。』

をばさんは今は思ひ立つて來た時のやうに、老師の跡を探らうともしなければ、祕密の緒口を探らうともしなかつた。をばさんは全く信徒の一人になつたやうに朝から御堂の方へと出かけて行つた。積る罪障は今更のやうに深く〳〵をばさんの胸に集つて來てゐた。をばさんは唯珠數を繰りながら手を合せて祈念した。

金色の藥師の三尊佛は香煙と讀經との中に寂として立つてゐた。

見えた。
やがて以前來た時に世話になつた旅館に宿を取つたをばさんは、老師の遺物の珠數を手にかけたまゝ、茶も飲まずにすぐ其處を出て、石段を登つて、山門を潜つて本堂の方へと行つた。
境內はしんとしてゐた。五重の塔が杉の並木の中に屹然として聳えて、葉間を洩れる日の光線が、暗い杉並木の中を一ところぱつと明るく照した。ある儀式に參すると見えて緋の衣を着た若い僧が三四人並んで本堂の方へと步いて行くのが見えた。大きな石の手水鉢からは、淸い水があふるゝばかりに漲り落ちた。
白足袋に草履を穿いたをばさんの姿は、やがて本堂の階段の前に見えた。鉦の音、讀經の聲、參詣する信徒の捧げた蠟燭の火は、無數に薄暗い殿堂の中に燃えて、香煙はむせるやうに四邊に滿ちた。をばさんは多くの參詣者の集つたところに靜かに步み寄つて、そこに跪つて、珠數を繰りながら一心に祈念した。そして日の暮るゝまで、をばさんは其處を離れようともしなかつた。
をばさんは到るところで、老師の話やら噂やらを耳にした。誰も老師の德をたゝへないものはなかつた。短い間の住職にも拘らず、老師は種々な功德を其處に施した。『えらい老師さんでいらしつたのに、何うしふことで御座いましたか。本當に、山では、惜しまないものは御座いません。』かう旅館の主婦は話した。

つて行つてゐるなどとは夢にも知らないだらう。かうして三年前のことも忘れかねて、絶えずその面影にあくがれてゐることなども知らないだらう。……それも逢つて話をする時が來るのなら好いけれど、……それも出來ない。……もう逢ふことも出來ない……。」

陰のものとしてこの自分があつたといふことが、老師の家出と密接な關係を持つてゐるといふことは前にも度々考へられたが、行く〳〵をばさんはその考の事實であることを思はずには居られないやうな氣がした。

佛の罰と言ふことを老師は絶えず氣に懸けて居た。愛慾の爲めとは言へ、佛に仕へる僧侶の身でありながら、煩惱と歡樂とに捉へられたのを常に悲しみ苦しんでゐた。老師はよく本尊の前に行つて手を合せて讀經した。『私の爲めの家出だ。それに違ひない。』かう思ふと、をばさんはかうしてその面影を追つてばかりゐられないやうな氣がした。

しんとした杉の並木の中から大きな寺の伽藍の屋根の見えた時には、をばさんは思はず手を合せて祈念した。後生を忘れてはならないと言つた老師の言葉は、その時新しい力でをばさんの胸に一杯になつて押寄せて來た。

をばさんの頰には涙が流れた。

今まで悟らずにゐた無限の罪障が、繪卷物のやうになつて、今しもはつきりとをばさんの前に現はれて

光丸様に行つて、老師の噂やら面影やら、出來ることなら、その不思議な家出の祕密の緒口を探りたいと思つた。しかしをばさんはそれを誰にも話さなかつた。

ちよつと知人の許に寄つて行くからと言つて、宇都宮までの切符を山の停車場で買つたをばさんは、そこで下りて、海岸の町に行く汽車とは反對の方向に行く汽車の來るのを待つて乘つた。

矢張、前に來た時と同じさびしい野原を通つてをばさんは行つた。夏と冬との違ひだけで、あたりのさまの昔に變らないのを見るにつけても、をばさんは夥しく變つて行つた自分の境遇を考へずには居られなかつた。その時の樂しさと得意さとに引較べて、何といふ淋しさであらう。何といふ悲しい辛い境遇であらう。をばさんは俥の上でをり〳〵袖を顏に當てた。

落葉はがさこそと風につれて路傍に散つた。遠くに村があり丘があり、その丘を廻つて路は次第に向うへと通じた。枯れた白い薄の穗には、午後の日がさびしく照り、百姓達の遲い收穫の車は、田圃の間の路から街道へと出て行つた。振返ると、國境の山の雪は白く日に輝いてゐた。

俥に搖られながらも、老師の Image は絕えずをばさんの眼の前を往來した。緋の衣を着た時分の若い姿、白の重ねを着てやさしげに笑つた長火鉢の前の姿、大勢の僧を從へて高い聲で讀經した立派な姿、さういふものが種々な事象と事件と一緖になつて、絡みつくやうに絕えずをばさんの胸を惱ました。またしてもをばさんは考へた。『それにしても、今、何うして何處にゐるだらう。私がかうしてこの道を通

『何處かあるだらう。』

『無えや。』

ふと言葉を改へて、『昨夜もさわぎだつたぜ。大師堂がお師匠の貯金を引張り出して、三人づれで町へ行つて、太鼓を打たせたり何かして大騒ぎをやつたんだとさ。師匠が大怒りさ。貴樣のやうな奴は日通りは叶はねえつて言つてゐたつけ。』

『いつやつたんだえ？』

『一昨日の晩のことだ。光明院と町の眞光寺と三人でやつたんだとよ。呆れたもんさ。』

『だから、早く上さんを持たせねえぢやしやうがないよ。』

『お寺も俗人もねえやな。今は――』

『來年來れや、お寺にや、もう一人づつ上さんがゐるだらうよ。』

『本當だ……』

『今はお寺も樂になつた。上さんでも何でも幅で持てるんだから。』かう言つたをばさんは、自分達の長い間の戀の苦しみと祕密の歡樂とを思ひ出してゐた。

暖かい海岸近い町に歸つて、再び多い昔の追憶の中に生活しようとする前に、をばさんは、もう一度

山は次第に寒くなりつゝあつた。最後まで殘つた梅もどきの赤い實も、いつかすつかり落ちて、霜が栖朝寺の屋根の瓦を白くした。手水鉢には叩いても割れないやうな厚い／＼氷が張つた。

さびしい寺に一人ゐるをばさんは、をり／＼目の縁を赤くなどしてゐた。をばさんはつく／＼ひとり身の頼りなさを感じた。通り一遍の明淨院の世話では、をばさんは滿足してゐられなかつた。それに老師がお前の後の爲めにと言つて面倒を見て置いて吳れた新しい住職も、此頃のやうにかまひつけて吳れなくては、とてもその世話になる氣にもなれなかつた。をばさんには何うしても老師がわすれ兼ねた。草をわけても搜したいといふ氣がをり／＼起つた。

鐘を撞く男は言つた。

『をばさん、歸るんだつてな。』

『寒くつて仕方がないから、暖かい方へ行つて來ようと思つて……』

『それが好いよ。住み馴れないぢや、とても此處にはゐられないや。それは寒いの何のつてお話にも何にもなりやしないんだから。また夏になつたら來るさ。』

『さうしようと思つて……』

『その代り、をばさんがゐなくなつちや、寒いな。朝、炬燵に當てゝ貰ふ家がなくなつて了ふでな。』

肴も十分にある。あそこから此處に冬籠りでは堪らない、』などとその客の言ふのにつれて、をばさんはある時つい話すともなくその老師の一伍一什を話してきかせた。

『何うも、しかしをかしいですね。何かわけがありさうな話だ。』かう言つて其客は考へて、『かげに女か何かあるんぢやないですか。』

『さうも思ふんですけれども……年が年ですから。』

『それもさうですね。』

かう言つてまた考へて『前に、さういふことはありはしませんか。五年とか六年とか前に、内所で逢つてゐたといふやうな女がありやしませんか。』

『そんなことはつひぞなかつたんですがね。』

『不思議ですね……しかしわからない。ことによると、その光丸樣とか言ふ寺の方に、何か祕密があるのかも知れませんよ。』

こんなことを客は言つた。

しかしこの二人の客も長く寺に留つてはゐなかつた。『寒いですな。これぢやとても堪らない。もう歸りだ、歸りだ、』などと言つてゐたが、ある日、そこ〳〵に始末をして、山から停車場の方へと俥を急がせた。

ざう思ふと、何うしてもその祕密の緒口を捜し出さずには置かれないやうな心持になつた。
をばさんは裁縫の手を留めて、その老師のゐなくなつた海岸近い町の寺から、この山の中に來たことを思ひめぐらした。初めはめづらしいと思つた殿堂も、寺も、谷川の流も、いつか興味を惹かなくなつて、此頃ではさびしい寒い山の中に變つて行くのををばさんは見た。心にはいかな日にも思ひ出さないことはないけれども、此處には老師の追憶の種となるやうなものは何物もなかつた。本堂もなく庫裡もないやうな寺、あけても暮れても水の音ばかり聞える寺、新しい住職は大師堂の方に行つたきりで滅多には家にも寄りつかぬやうな寺、周圍にゐる女達も田舍染みて、灰色の顏をして、女に似げないやうな口をきく寺、さういふ處に住むといふことの佗しさに、をばさんは段々堪へられなくなつて行つてゐた。
豆腐、油揚、芋の子、御馳走と言へば、硬い太い蕎麥切位で、肴屋も滅多にはやつて來ないやうなところで、をばさんは終日長く鯵だの鮪だの鯛だのを想像した。蜜柑の黃く色附いた谷々を想像した。丘と丘の間から廣く豫想せられる海を想像した。
奧の二階を借りてゐた東京の客の許には、此頃新たにまた一人、客がやつて來た。その客は若い色の白い方の一人とは違つて、年をとつてゐるだけに話でも態度でも碎けてゐて、出入りに聲をかけたり口をきいたりしたが、寒い朝などには、をばさんの拵へた炬燵に來てあたつて話をすることなどもあつた。
「さうですか。今まであそこにいらつしたんですか。あそこは、暖かい、好いところだ。あそこなら

暫くして靜かに紫の衣をひるがへして入つて來た老師の尊かつたこと、美しかつたこと、見事であつたこと、嚴かであつたことなぞを、をばさんは續いて繰返した。それが長い間自分が世話をした同じ老師であるとはをばさんには思はれなかつた。をばさんは唯頭の俛るゝのを覺えるばかりであつた。

期待して來た希望は、すべて全く遂げられなかつた自分ををばさんは見た。それほどそこは堅いむづかしい山であつた。をばさんは老師の親戚の一人として取扱はれて、丁寧な饗應やら、深切な案内やらを受けたが、しかもその夜は旅館に歸つてひとりさびしく寢なければならなかつた。老師とは靜かな積る物語をすらすることが出來なかつた。

そしてそのあくる朝は、また俥に乘つて昨日通つた長い〳〵道を停車場の方へと戻つて來た。あとでそのことを聞き知つたらしい明淨院は、それとは言はなかつたけれど『困つたことをして吳れた。』といふやうな風ををばさんに見せた。

その堅いむづかしい山、その山には何んな祕密があるか知れなかつた。達つてそこに望んで行つた心は？　私と別れるやうなことをしてまでもそこに行かうとした心は？　突然そこから歸つて來て姿をかくした老師の心は？

其處まで行くと、をばさんはいつも赫となつた。欺かれたのではないか。初めからさういふ決心がついて私とわかれる手段を取つたのではないか。何處か其處らで人知れず樂しく暮してゐるのではないか。

の停車場で下りて、そこで俥を雇つて、長い〳〵路ををばさんはその寺の方へと志して行つた。光丸樣と言へば、其處等でも音にきこえた流行佛で、その靈驗のあらたかなのは、一國中誰も知らないものはない位であつた。信徒は遠くから常に陸續として押かけて行つた。參籠の日などは、附近常に立錐の地がないといふほどの賑かさを呈した。それに、參詣者はそこに行つて祈禱をこめて、密教の尊い護摩を焚いて貰ふのを例にしてゐた。

停車場から七里も隔つた山の中で、そこに行くには、ひろいさびしい野原を通つたり、街道に外れた荒れた田舍町を橫ぎつたり、丘から丘へと續く路を越えて行つたりしなければならなかつた。それは丁度梅雨の上つた頃で、綠は綠に續き、若葉は若葉に續いた。日影は晴れやかに四邊に照つた。

をばさんはやがて別世界のやうに前に展げられた寺、杉森、町、人家の簇りを驚いたやうな心を抱いて見てゐる自分を見た。町の入口の大きな旅館に俥を留めて、やがて二階の一間に通つて行く自分を見た。其處に老師樣がゐると思ふと、何とも言はれない嬉しさで、胸が躍つて仕方がなかつた自分を見た。をばさんは遲い午飯をすますとすぐ、高い石段を上つて、大きな山門をくゞつて入つて行つた。そして立派な庫裡の方から老師の安否を聞いた。

立派な廣い十疊の座敷、高い檜の一枚板の天井、大きく龍を描いた金屛風、厚いふつくりとした綾絹の座布團、そこに綺麗な小僧が桐火桶を運んで來て、長い〳〵間をばさんを待たせた。

何かそのために、あのお寺にゐられなくなるやうなことがあつたんではないかしら。』

『そんなことはないでせう。』

かう光順は強く打消した。

實際、明淨院が調べたところに由つても、さうした話や形跡は少しもなかつた。向うの寺でも好い老師を失つたことを不思議にし且つ惜しんでゐた。

ある時をばさんは言つた。

『それにしても、誰か世話をしてゐる人があるでせうか。』

『さア。』

『あるかも知れない。私に代つて、世話をしてゐる人があるかも知れない。』

『そんなことはないでせう。』

『兎に角、かういふことだけは確かです。今度家出をするやうな心をお起しになつたのは、向うの寺に行つたためです。それだけは本當だと私は何うしても思ふ。あの寺に祕密があるのです。それだけは確かです。』

『さうかも知れないけども、何うもわからない。』かう光順は打消した。

一度訪ねて行つた其寺の光景が、をり〳〵をばさんの眼の前に浮んで見えた。その時はさびしい田舍

『生きてゐるとすると、何か仕事をしてゐるでせうが――、持つて行つた金だつてさういつまでも殘つてゐる筈はないから、何かしてゐるに相違ないが、何をしてゐるでせうね。』

『さア。』

『生れ故鄕にでも歸つてゐやしないでせうかね。』

『國に歸つてゐれば、すぐわかるわけです。』

『學問もあるし、手も旨いしするから、困るやうなことはないだらうけれども、それでも此處にゐた時や、向うの寺にゐた時分のやうに、皆なに尊敬されて、老師樣、老師樣と立てられてゐるやうなわけには行かないだらうから。』かう言つて考へて、『それにしても、何故さういふ樂な大名のやうな境遇を捨てゝ、身を隱しなどしたのだらうね。何うしてもわからない。老師樣の心がわからない。』

『實際、不思議ですよ。』

『それとも、私が煩さかつたのかしら。』をばさんは其處に行くと、いつも急に暗い壁にでも打突つた樣に言葉をとめて默つて了ふのが常であつた。『さうかしら、さうかしら。』かうをばさんは繰返して考へた。

『そんなことはないでせう。』

『そんなことはないだらうと思ふんだけれど……。けども、一度、私が向うのお寺にこつそり行つた時には、老師樣は非常に迷惑の樣子だつた。あれほど言つて置いたのに、何故來たといふ顏をなさつた。

つて深い眠りに落ちるまで、老師のImage は常にをばさんの眼の前を往來した。居間、座敷、すべて其處には老師の日夕手に觸れたものばかりが殘つてゐた。机、硯、筆架、座布團、拂子、床の間にかけた文珠の幅、押入の中にあるをばさんが拵へてやつた絹布の夜着、九谷燒の大きな茶碗、常に愛玩した德利と盃、何を見ても、老師の面影と追憶とが生きて殘つてゐないものはなかつた。其時々の出來事、歡樂と悲哀と絕望とは、常に種々なものに絡み着き纏れ着いてゐるのをばさんは見た。

をばさんは默つて每日々々さがし物をした。反古、日記、手紙、さういふものゝ中から、その不思議の謎を解かずには置かないといふやうな氣分で、をばさんは寺に殘つたあらゆるものを展げて見た。机の抽斗、押入の奧、後には本堂の方まで出かけて行つてさがした。時には本尊の前に行つて坐つて、長い間、手を合せて祈念をしたりしてゐるをばさんの姿を光順は見た。

をばさんはさびしく暮した。以前のやうな快活な賑かな氣分はなくなつて、默つて物を思つてゐるやうなことが多かつた。體も瘦せ、顏色も艶を失つた。今まで身嗜みを忘れたことのなかつたをばさんも、此頃ではもう髮も結はなければ、鏡も手にしなくなつた。着物も着更へようともしなかつた。『何うしていらつしやるだらうね。何處にいらつしやるだらうね。』夜など、長火鉢の前で、をばさんは光順に話しかけた。

『さア。』

た。凡そ手蔓のあるところへは、遠くまで人を出して搜させた。しかし、竟に〳〵老師の行方は知れなかつた。

何故老師は跡を晦したか。そこには何か深い理由がなければならぬ。しかし、その理由は明淨院にも光順にも、をばさんにもわからなかつた。赴任した寺の方を調べて見ても、それらしい原因は少しもなかつた。不思議なことがあるものだと誰も皆思つた。

出る時のさまが繰返し、繰返しをばさんの口から話された。『今考へて見ればさういふ積りでゐたんですね。それは確かにさうなんです。去年あたりから、さういふことを考へてゐたのかも知れませんよ。金は何でも出る時百兩や二百兩は持つてゐたでせう。忘れ物をしたと言つて、一度出かけたのをまた歸つて來ましたが、その時の顏は、いつもに似合はぬ青い思ひ詰めたやうな顏をしてゐました。居間で捜し物をしてゐるところに、私がふと入つて行くと、持つてゐた手紙のやうなものをちよつと隱すやうな風をして、私の顏を見ました。しかし、それが別れだとは夢にも知らなかつた。』かう云つてをばさんは泣いた。

時は過ぎて行つて、不思議は只不思議として、やがて人々の口にも上らなくなつて行つた。明淨院は、『何うも仕方がない。緣が熟すれば今にわかる時が來るだらう。あまり心配せずに置きなさい。をばさんに苦勞をかけるやうなことはしないから、』と言つて慰めた。をばさんの淚は乾く時もなかつた。

をばさんは老師が住んだ跟跡の殘つてゐる寺でさびしく暮した。朝、目が覺めるときから、夜床に入

やうなことは出來ん。田舍寺で、お前と一緒に暮すやうなことは出來んな。』

かう言つて老師は默つた。をばさんもその後をつゞけなかつた。

今日行かうと言ふのを、一日延して、その翌日立つことにした。熱海の方に行つて一周りも湯治して來る積りだと老師は言つてゐた。誰もその言葉を疑ふものはなかつた。光順もをばさんと一緒になつて、湯治に行つて不自由のない樣に種々とその支度を整へてやつた。『なァに、三界に家なしぢや、何にも入りはせん。』などと言つてはゐたけれど、それでもをばさんはちやんと暖かい着替から襟卷から齒みがき楊枝までも鞄の中に入れてやつた。

『ぢや行つて來るぞな。』

いつも着る黑の被布を着て、下に白を重ねて着てゐた。山門のところまで出て行くのを、をばさんは見送つてゐたが、暫くしてから又戻つて來て、『忘れものをした。』かう言つて自分の居間に入つて三十分ほど何かさがし物をしてゐた。再び出て行つた時には、何も言はなかつた。後も振返つて見なかつた。

一日々々と經つた。初めは別にあやしくも思つてゐなかつた。熱海にゐることとばかり思つてゐた。それにしては、手紙が來ないが、何うしたんだらう位に思つてゐた。また日は日と經つた。向うの寺からは、日每に歸任を促して來た。疑惑は遂に人々の胸に萌した。明淨院が山からやつて來て、熱海の方へ出かけて行つたりする時分には、老師の姿はもう何處にも見出されなかつた。やがて大騷ぎは始まつ

『さうかな、さうでもない積りぢやが――』かう言つたが、笑つて、『でもな、いつ無常の風がさそへて來るかわからないからな。後生だけは片時も忘れてはならんよ。お前だつて、私だつて、如來樣がお迎ひに來ればいつでも行かなけれやならないからな。』

『それはさうですとも……。私も後生は片時も忘れません。』

と、老師は笑ひながら、『でもな、私はこれでも一生佛に盡して來た積りぢや。國の方の寺も好くなつたし、明淨院は立派な和尙になつたし、光順もまアこの寺のあとがつげるやうになつたし、學校に行つてゐる奴も、來年は山に歸れるつて言ふから、もう何も心配はないぢや。唯お前ばかりぢや。子供がないから、淋しいなア。』

『なアに、私なんか何でもありませんよ。誰でも世話して吳れますから。』

『まア、順當に行けば、わしが死んで、お前が殘るのが當り前だが、その時は、明淨院も世話をして吳れるだらうし、學校に行つてる奴も、來年か來々年住職に直れば、お前一人位世話するのは、何でもないからな。そこは安心ぢや。』

『だから、もつと樂な寺に入つて、二人でしづかに暮すやうにするのが一番ですよ。もう年を取つたんだから。』

かうをばさんが言ふと、老師はやゝ暫し考へてゐたが、『でも、な、私は佛樣に捧げた身ぢや。俗人の

のまゝ立つて茶の間の方へ行つた。

それは暖かな春のやうな日であつた。老師は僅かばかりの休暇を取つて、赴任して行つた大きな寺から海岸の方へと歸つて來てゐた。餘り心勞して、體が少しわるいから、溫泉にでも出かけて行くつもりだなどと言つてゐた。をばさんは一度國に歸つたけれど、何うしても老師のことが忘れられず、一度は老師のゐる寺にこつそり訪ねて行き、そこから歸ると、再び舊知の多い暖かい海岸近い町へと身を落着けた。寺は、二番目の光順といふ弟子が嗣いでゐた。

老師は肥つて好い血色をして、莞爾してゐた。『どうも、忙しくつて、本當にこまつた。一刻もやすむ暇もないぢやでな。大きな寺に入れば、入つただけの苦勞があるぢや。立身するものは恐ろしいもんぢやな。』などと云つてゐた。別に變つたこともなかつた。いつものやうに、好きな酒に醉つて夜は早くから寢た。

『本當に、年を取つてゐるんだから、無理をしては仕方がありませんよ。』

かうをばさんが言ふと、

『何ァに、大丈夫ぢや。』

『でもね、何しろ年が年だから……。さういふ忙しい心配な寺にゐては、何うしても體に利きますよ……酒も前と比べては弱くなりましたよ。』

にしたものはあるであらうか。老師に侍する以前に、をばさんは既に一度ある立派な農家に嫁いて男を知つてゐたのであるが、一度老師に侍してからは、をばさんは他の男を思ふ暇もないほど深い〳〵情と歡樂とに身も心も溺らせて了つたのであつた。祕密から來る歡樂、それ以上に男の情は深くをばさんの魂に染みた。女に餓ゑた畸形じみた情、飽まで女の方に偏つて來る濃い心、女に對して起した空想じみた所業、さういふものは到底この世の普通の男には望む事が出來ないものであつた。あけ方近く、をばさんが其處から出て來ると、今の明淨院は、其時分はまだ小僧で、眠むさうな不思議さうな眼をして、をばさんの歸つて行く姿を凝と見送つた。その頃はをばさんは、髮を銀杏返しに結つて、派手な襟をして、曉の空氣の中にぬけ出すやうなさまをして靜かに裏道を通つて家の方へと歸つて來た。夏は道の畔の池の中に紅い白い蓮の花の美しく咲いてゐるのを見たことなどもあつた。

あの時分は老師はまだ三十八九だつた。まだ若かつた。緋の僧衣などを着て、町を歩くと、人は皆振返つて見た。『それにしても、何故、あんな心持を起したのか。私のことも考へては吳れなかつたのか。』かう思ふと、すぐあとから、『それにしても、生きてゐるなら、何うしてゐるだらう。何處にゐるだらう。何んなにして暮してゐるだらう。寒くなるのに、誰が着物を縫つてやつてゐるのだらう。』それからそれへと際限なく集つて來る想像に堪へかねて、をばさんはほつと溜息を吐いた。障子に映つた梅の枝は、いつか消えて、日ざしが次第に午近くなつて行つてゐた。をばさんは縫ひかけた綿入の針をとめて、そ

へと出かけて行つた。

三面を丘で圍まれて、一面遠く海の遠鳴を聞くやうな町には、南國の暖かな氣分が漲るやうに行き渡つて、娘達の頬も紅るに、着物の裾や襟もはなやかに、笑聲が家から家へと漂つて、冬は蜜柑の黃い實が谷といふ谷を彩つた。ある朝は海から來る水蒸氣があたりを籠めて、朝日の薄いかゞやきの中に寺の山門が繪か何ぞのやうに見えた。夏は綺麗に煙草の畑がつゞいて、農夫達がせつせと蟲を捜してゐる傍に專賣局の役人が白い洋服姿で立つて話をしてゐるのが見えた。鮪、鯛、鰹、中でも秋の小鯵が旨かつた。『小鯵よしかな。』身輕な、いなせな若い肴屋がいつも海の方から驅けるやうにしてやつて來ると、家々の若い上さん達は、喜んでそれを呼びとめて買つた。

煙草の葉の上納期の賑かさなども、をばさんの眼の前にあつた。夕方になると、工場の門からは娘達がぞろ〳〵と笑ひさゞめきながら出て來た。何處の家でも煙草の葉を揃へるのに忙しかつた。『をばさん遊んでゐるなら、少し手傳つて下さいな。』こんなことを言つて、近所の娘や上さん達は無理にをばさんを作れ出して行つた。やがて賑やかな富んだ年の暮が來た。婚禮が其處にも此處にもあつた。

をばさんは夜毎に寺の裏門から忍んで入つて行く自分を見た。あの時分はまだ若かつた。二十五六であつた。をばさんは老師と自分との緣を不思議にせずには居られなかつた。世の中に女は多いであらう。人に知れない歡樂に身も世も忘れた女も澤山にあるであらう。しかし自分ほどすぐれた異つた歡樂を恣

借りて住んだ。をばさんは僧侶と女との關係のむづかしかつたその時代のことなどを考へた。

『まア、さう泣かずに置いて呉れ。あの寺に行けるやうになつたのは、私の立身ぢや。私は田舍坊主で一生は終りたくない。弟子の明淨院でさへ、今ではあの名高い山の寺の住職となつた。それに、今度のことについては、あれも骨を折つて呉れた。師匠の一生の花の咲いたやうに喜んでゐて呉れた。……だから、お前もそこを聞きわけて、一時、私の言ふ通りになつて呉れ。決して惡く思ふのではない。思ひたくつても思はれないのぢや。別れて呉れとか何とか言ふのではないのぢや。一時、ほんの一時、國に歸つてゐて呉れと言ふのぢや。』

かう言ふのを、をばさんはそれでもとは言ふことが出來なかつた。老師の立身のさまたげをするには忍びなかつた。で、をばさんは一時國の方へ歸つて行くことになつた。

その時の寺は、つい此間まで、をばさんの住んでゐた町にあつた。それは丁度靜かな富んだ町の外れにあるやうな寺で、大通りから山門が高く立派に見上げられてゐた。鋪石道の兩側には、高野槇だの檜だの松だのが栽ゑてあつて、寺男がいつもそこを綺麗に掃除した。本堂は明るくかゞやいて、立派な金色の本尊がいつも寂然として立つてゐた。明淨院も、今の若い住職も、皆な其處で大きくなつたのだ。それに町では、皆なをばさんのことを知つてゐて、寺に入れても差支なかつたのではあつたけれども、それでも老師は世を憚つて、別に一軒、町に家を借りてをばさんを置いた。をばさんはいつも其處から寺

『でも、此處に私だけ殘つてゐれば好いぢやありませんか。』

『さうは行かない。向うの寺に入る以上は、さうは行かない。すぐ噂に立てられるから、此方の方のこともすぐわかるから。こゝに少しばかりだが、金があるから、これを持つて國に行つてゐて呉れ。その中に、また旨く話をつけるやうにするから。』

『でも、今までかうしてお世話になつて來て……。今更……そんな水臭い……これまで何んなに苦勞をして、日蔭の身を耐へて來たとお思ひですか。』

『それはよく知つてゐる。よくわかつてゐる。でもこの際困るのだから。』

『では、何故そんな堅い立派なお寺にお入りになるのですか。此處で安樂に暮して行けば、それで澤山ではありませんか。何故、そんなお寺に入るのをお斷りなされないのですか。』

をばさんは泣いて口說いた。をばさんは自分ながら老師と其身との緣を不思議にせずには居られなかつた。老師は六十五をすぎてゐた。それに拘らず、をばさんはまだ五十をいくらも出ては居らなかつた。をばさんが老師に初めて侍したのは、二十一の時で、初めは自からも厭だと思ひ、人に後指さゝれるのをも恐れたが、後には老師の濃い情に體も魂も引寄せられるやうになつて行つた。公にすることの出來ないだけそれだけ一層祕密の色彩の濃い氣分も加はつて行つてゐた。で、老師の行く寺から寺へとをばさんは後を追つて行つた。ある寺では寺に入れられないので、一里ほど離れた町のある家の二階の一間を

は原書と英譯と下飜譯とを其處に並べて、難かしいところに出會す度に、字書を引いたり、溜息を吐いたり、萬年筆を傍に置いてぢつと物を考へるやうな顔をしたり、退屈して障子のガラス越しに外に聳えた山の翠微を長い間眺めてゐたりした。そして新しい文藝にあくがれる心は、をり〳〵潮のやうに、かれの胸に押寄せて來た。しかし、をばさんにはそんなことは少しもわからなかつた。をばさんは唯沈默して、よくも倦きずに書を讀んだり物を書いたりする若い人を見た。

その若い人は、朝、雨戸を明けると、長いドテラを着たまゝ下に下りて來て、湯殿に入る前に、その長いドテラを脫いで、そして、何んな寒い朝でも、冷めたい手の切れるやうな水で半分胆になつて冷水摩擦をやるのが例であつた。『寒いのによくまア』とをばさんは思つた。しかしつひぞ言葉をかけたことはなかつた。わかい客は『勞働と沈默』といふやうなことを書いて、『今日は一日誰とも口をきかなかつた。實際の沈默だ。』などと記した。

飯櫃と汁の鍋とを二階に運んで來てから、裁縫を前にしたをばさんのVisionは再び續いた。

……老師は言つた。

『ね、さうして呉れ、賴むから、さうして呉れ、今度向うの寺に入るにつけては、何うしても、さうしなければ具合がわるいから。あの寺は固い難かしい寺で、いままでのやうなことがあるのが人に知れては、とてもつとめてゐられないから。』

があつたら明淨院に相談するが好い。』かう言つてすうと向うへ行つた。

しかし、死んだ者は口を利かないさうだ。をばさんはかう思つて、思ひ附いたやうにまた一針二針、針を動かして見て、『何うしてあんな氣になつたか。』

ふと奥の二階の雨戸の明く音がした。もう十時だ。起きたと見える。かう思つてをばさんは立ち上つた。一月ほど前から、東京の客が三人づれで來て、月五圓で、奥の二階と下とを貸した。萬事自炊ですると言つて、夏の時に使ふ炊事場に水の來るやうにして、鍋や俎板や擂鉢などを貸してやつた。下の座敷にゐた方の客は早起で、をばさんが起きる時分には、いつもきまつて雨戸を明けた。で、をばさんは一番先に火を持つて行つてやつて、御飯とお汁とを拵へてやるやうにしてゐたのが、それが十日ほどゐて歸つて了ふと、二階の方の一人も山が寒くなつたと云つて、月の末に歸つて、あとには丈の低い色の白い客がひとり殘つて、いつも夜更しをしては朝は遲くまで寢てゐた。

二階には、大きな机の上に、原稿紙だの洋書だのを一杯にひろげて、電燈を室の眞中から机の上に引張つて、一生懸命になつていつも筆を走らして物を書いてゐた。をばさんとは滅多に口をきいたことはなかつた。

その客はトルストイだの、ドストイフスキーだの、モウパッサンだのを讀むやうな若い人で、かねてやつてゐた外國の小說の飜譯を完成する爲めに都會の煩累を避けて此處にやつて來たのであつた。かれ

樹の枝や、その枝に戯れてゐる小鳥の影などが靜かに映つた。寒い冬の近いのを知らせる谷の音が凄じくあたりに響いて聞えた。

『死んだんぢやない。何處かにゐるに相違ない……あの易者も確かに生きてゐると言つた……』考へて、『生きてゐるとして、何處に生きてゐるだらう? 何んな風にして生きてゐるだらう。お寺には無論ゐない。お寺にゐれば、あれほどさがしたんだから、わからない筈はない。還俗して了つたに相違ない。それにしても、還俗して、何をしてゐることか、お寺でこそ、立派な和尚さんでゐられるけれど、俗人になつては、とても立派に暮らしてゐられるとは思はれない。國には無論行きはしない。生れ故郷にも行つた跡もない。世話をする人もなく、この寒いのに困つてゐやしないか。』かう思ひ出すと、想像は想像へと長く續いた。繰返しても、繰返しても、際限がない。

初めの中は、夢を見て仕方がなかつた。ある村の役場の隅に大勢人がゐて、その隅の方に小さくなつてゐる老人がゐた。ふと見ると、それは老師であつた。『こんなところにゐるんですか。ちつとも知らなかつた。さうなら、さうと何故早く知らせて下さらなかつた。』かう言つて、をばさんが袖に縋つて泣き寄ると、老師は濟まなかつたといふやうにしてにつこり笑つた。そして夢が覺めた。しかしその笑顏はいつまでもをばさんの頭について離れなかつた。ある時はもう死んで了つてゐる夢を見た。『私はもう死んだ者だから……思ひを殘してはいけない。そのため、ちやんと、あとのことを心配して置いた。困つた事

つたつていふ話だつけ。』

『何うしたね。其女は？』

『何うしたか？　もう女でもなかんべい。もうぢき七十五だ。』

『それぢや門跡さまより上だね？』

『上だとも……。門跡さまは、まだ七十になつたか、なんねえか位だんべ。……でもなァ感心なは、門跡さまだ。あの人ばかりだんべい。本當に女つ子知らねえのは。』

『さうかね。』

『だから、今度お山で皆な鼻茶を持つやうになるつていふ話には、門跡さまばかりは困つていらしやるつて云ふこんだ。……お寺もなァ、上さんが出來ちやぢきおしめを干すやうになるだんべい。』

『矢張、時世で、これも仕方がないよ。誰でも上さんは持ちたいんだから。……却つて表向きに持つ方が好いかも知れないんだよ。』をばさんはこんなことを言つて茶を勸めた。

三年になつても、その時のことは、をばさんの頭から離れなかつた。をばさんは今でも一日の中に何遍となくそれを思ひ出した。

『何うして、あゝいふ氣になつたんだらう？』

かう言つて考へては、をばさんはいつも運んでゐた針を止めた。窓には暖かい冬の日が射して、庭の

煙草錢さへ滅多に呉れやしねえ。婆ァ、婆ァなんて言ふけども、本當に内を借りてるばかりだから、何一つ世話になんかなりやしないんだから。』

『そんなかね。』

『さうともな……。家の和尙の吝嗇は、だから山でも評判だな。丸つきりつき合ひつて言ふことはしねえんだから。だから、誰だつて人一人來やしねえ。』

『さむしくはねえのかね。』

『ちつとァさびしかんべいよ。だから、お經ばかり讀んでらァ。』

その讀經――隣の老僧の讀經を、をばさんはいつも朝早くから耳にした。三時の時計が鳴ると、やがて鉦の音がして、靜かな靜かな讀經の聲が始まるのが常であつた。『でもな、朝のおつとめをするのは、お前さんとこばかりだよ。』

『昔から氣狂坊主つて評判だな、』こんなことを言つて、婆さんは、その老僧が山の中にゐた時、不思議な奇蹟を行つた話などをした。『今ぢや、もうな、附かねえけども、その時分にやな、あの坊主がお經を讀むと、頭の後のところに五色の絲筋が附くつて言はれたもんだァな。お經べい讀んで、それで僧正さまにまでなつたんだんべい。』かう言つて笑つて、『矢張、女だァな、女に心を寄せちや、佛樣も愛想をつかさつしやらァな。十年ばかり前に、何でもこつそり女を圍つて置いてから、その絲筋がつかなくな

『なァに、五時のは、滅多に氣が附くものもねえがね。晝のは忘れたぢやすまねえからね。』

『それはさうだともさ。おつとめだもの……』

『夜あすびがすぎると、つい寢込んぢやつてね。はゝはゝ。』こんなことを言ひながらその男は出て行つた。

をばさんが裁縫にかゝりかけると、隣の寺の婆さんがやつて來たので、又一しきり炬燵で話した。婆さんは、今年三十になる娘と七歳になる孫と三人で、その寺の老僧の世話をしてゐた。娘は一日僅の賃金で毎日朝早くから箒を持つて山内の掃除に出かけた。婆さんは小屋で、山から刈つて來た萱を編んで、一俵三錢で炭俵をつくつた。『年老つたでな、遠くまで山ん中に萱を刈に行くのは大變だけどもな……でも遊んでもゐられねえし。煙草錢まで娘に出して貰つては氣の毒だでな、』などと言つて、皺の出來た手をごそ〳〵と揉んで見せた。娘の話が出ると、『もう婿どんにはこり〴〵したぜい……お前さん、つい此間まで、內所でやつて來ちや、せびつて行くぢやねえか。緣も切れた他人だからつて喧しく言ふんだけども、な……娘が人が好いからな。本當に困るんだよ、』などと言つて話した。婆さんは、夜は孫の女の兒を抱いて寢た。

『でも、和尙さんが少しは面倒を見て吳れるだらう？』

などと人が訊くと、『何うして！　お前。米でも何でも別にしてるんだから、何してくれるもんかね。

――』と訊いた。『大師堂に行つてゐますよ、』と言ふと、『さう――』と言つて顔も振くせずに出て行つた。ぢうく\しい女もあるもんだ。それに住職も住職だ。あんな女が何處が好いんだらう。あれほど師匠に心配をかけて置きながら、それでもまだ懲りないと見える。

こんなことを考へたが、すぐ止して、今度は田舍の話を始めた。平野の裾の細長く山の中に入つて行つたやうなところにある町、石灰の出る町、蒟蒻の出來る町、生絲の盛んに賣買される町、さういふ町で、このをばさんも師匠も鐘を撞く男も若い住職も大きくなつた。をばさんの世話になつた老師の寺は、その町の裏の丘の上にあつた。遠くからでも一目にそれとわかるやうに、杉の森が黑くこんもりとその寺の背後を取卷いてゐた。

こんな處にゐるよりも、田舍の方が面白いことも旨いこともあるだらうなどとをばさんは言つた。男は唯にや〳〵笑つてゐた。やがて男は、をばさんの淹れて出れた香りの高い番茶を一杯飮んだが、柱にかゝつてゐる時計を見て、『もう時間だ。忘れるとまた叱られらァ。』かう言つて立上る支度をした。

『さう言へば、昨日は來ないと思つたら、寢過したね。どうも音がしないと思つてゐたら、六時が鳴つたよ。』

『はゝはゝ。』

『叱られたらう？』

夏、をばさんは肴の多い蜜柑などの出來る暖い海岸からこの山へと呼寄せられて來たのであつた。新たに住職になつた若い僧といふのも、矢張をばさんの世話になつた老師の許で大きくなつたやうな人で、老師は、『お前だつて、後で世話にならなければならないんだから、今の中面倒を見て置いてやらなければいけない、』などとよくをばさんに言つたものだ。その若い住職は今輪番で、その近所の大師堂の方へ行つてゐた。

『大師堂では遲いかえ？』

『まだ中々。七時の鐘をつかなくつちや。』

『此頃はそれでもおとなしくしてゐるかえ？』

『うむ――』

などと言つて男は笑つた。

『昨夜はゐたかえ？』

『ゐたつけ。』

『困つて了ふよ』と言ふやうな顏をしたが、をばさんは默つて二三日前のことを思ひ出してゐた。をばさんが其處で仕事をしてゐると、輕い小さい下駄の音がきこえて、誰か其處に來た氣勢がした。障子を明けると、色の生白い白粉をべた〳〵つけた、一と目でそれとわかる女が立つてゐて、『淸光院さんは

『をばさん、いつも早いね。』
『目が覺めると寢てゐられない性分だから……』
『でも、をばさんが早く起きてゐて吳れるんで助かる。まだ、何處にも、火なんかありやしないから。』かう言つて、男は遠慮なしに炬燵に當つて、
『これからは、朝はたまらない……』
『本當だね。』
『これからは寒くなるからな、をばさん。それや、ひどい處ですよ、此處は――。一月頃になると七時位までは、撞木を握る手に覺えがない位だから。』
『さうかね、雪降りなんかには、大變だらうね。』
『雪はさうたんとは降らねえけれど。』
谷を越して來る朝日が前の障子に當る頃まで、をばさんと男とは炬燵に當りながら種々なことを話した。男はをばさんが里で長い間世話になつた老師の弟子の異腹の同胞で、その弟子といふのが、今では立身して、この山にすぐれた勢力を持つた幹部の一人になつてそこから二三町隔つた山懐に大きな立派な寺を持つてゐた。今度その弟子の弟子が山のある寺の住職になるにつけて『をばさんに來てゐて貰へないだらうか。若いもので仕方がないから、是非、さうして貰ひたいんだが――』かう賴まれて、この

をばさんの IMAGE

山寺は別に用事とてもないけれど、さうかと言つていつまでもぐづ〳〵と寢てはゐられない性分のをばさんは、いつも暗い中から目を覺ました。

飯を炊いて、たき落ちを十能に入れて、それを座敷の炬燵に入れる時分には、本坊の傍にある大きな鐘樓の夜明けの五時の鐘が、山の翠微を動かすやうにして高く聞えた。

と、をばさんの眼には、筒袖を着た丈の高い大きな男が、撞木の綱を長く引張つて、力を籠めて鐘をついてゐるさまが歷々と映つて見えた。鐘の音は一つ〳〵餘韻を殘して消えて行つた。

暫くすると、

『おう寒い、寒い。』

かう言つて、表からその男は入つて來た。

『寒いね、今日は氷が張つた。まア、入つてお當り。』

『私は貴方の細君の服簞笥の抽斗の中に藏された、矢張、同じ小さな罎です。――私は朋輩の世に出るやうになつたのを喜んで、一緒に此處にやつて來たのです。しかし、私もやがては、この朋輩と同じやうに貴方の細君に呼ばれるに違ひないと思つてをります。そして朋輩のやうに私の持つた役目を果すのを喜んで待つてをります。』

『さうか。』

『私達朋輩は始め五つありました。それがゆくりなく貴方の家に行けと命ぜられました。で、私達は出かけました。そしてその五つの中の三つは、貴方に、用がないと言はれて、裏の掃溜の中に捨てられて了ひました。しかし矢張、貴方には用があつたのでした。』

『さうか。』

主人は手を伸べて、『その白い藥をよこせ。』

最初の一つの形相は靜かに近寄つて、それを主人に渡した。主人はそれを仰ぎ飮みながら、『これで私の事業は完成した。永久に行く道は開けた。大きな生命の潮流の中に入ることが出來た……』主人は次第に昏睡狀態に入つて行つた。

再び其處に現はれた美しい女の顏には、得意らしい妖しい微笑が湛へられてゐた。

どめることの出來ないと誰やらが言つたが、實際さうだ。』考へて、『ぢきだ、ぢきだ、ぢき消えて行つて了ふ。……あ、もう消えた。世界は二人きりだ。お前には何も彼も捧げた。』

『生命でも何でも？』

『生命でも何でも……』

女は手をひろげて主人を抱いた。ある不吉を示す樂の音は再ぶ緩かに聞えて來た。

九

『お前は何だ？』

靜かに寄つて來た一つの形相は、あやしく笑ひながら近寄つて『私は貴方の書齋の抽斗の底に長い年月を忍んで待つてゐた小さい罎です。私は時の來るのを待つて居ました。貴方のお呼びになるのを待つてゐました。今、貴方は私をお呼びになつた。』

『さうか、お前があの小さな毒藥の罎か。』

形相は點頭いて見せた。

他の一つの同じ形をした形相は、つゞいて靜かに寄つて來た。

『お前は――？』

ば——。さうすればまた賑かになるわ。そら、いつか常ちやんと、元ゐた光やと乳母車でお池に行つて、金魚を見たことがあつたわね。あの時分のやうに賑かになるわ。』

末の女の兒は默つて父親の顏を唯見上げてゐた。

『常ちやん、お父さんがゐて嬉しいだらう。お父さんとお言ひなね。』

『お父さん。』

此時、主人の坐つてゐる背後から、靜かに影のやうに美しい女の姿が現はれて來た。女は端麗なすつきりした態度をして、長い白い衣の裾を曳いて、ぢつと二人の幼い女の兒の方を見た。長い髮は流るゝやうに背後に垂れた。

『お父さん、左樣なら。』

『お父さん、左樣なら。』

女の兒達は母親ならぬ女の顏を見ぬやうにして急いで彼方に行つて了つた。

『何か賑かだと思つたら、あんな子供が來てゐた。何ですか、あれは?』

『昔の影だ。昔の聲だ。その昔の影と昔の聲とが私の心の中に映つて反響して來たばかりだ。しかしそれが何にならう。』主人は靜かに立つて緩かに歩きながら、『それが何にならう。昔の聲が蘇つて來たとて、何にならう。皆な過ぎ去つたことだ。夢のやうに過ぎ去つて了つたことだ。一度踏み入れた足はと

『お父さん、お達者で。』

男の兒は直立して、禮をして、項を高くして、急いで向うに行つて了つた。

何か賑かな聲がすると思ふと、今度は十になるさげ髮の女の兒と八歲になるおかつぱの女の兒とが、無邪氣に互に何か話しながら此方へとやつて來た。

『お父さんがゐた。お父さんがゐた。』

『お父さん！』

女の兒達は急いで主人の默つて坐つてゐる前へと走り寄つた。末の幼い兒のおかつぱの髮の亂れたのや、着物の褄の合はないのや、寒さうにさびしさうにしてゐるのが主人の眼に附いた。

大きい方の女の兒のなつかしげに父親の傍に寄つて行つたのに引かへて、小さな方の女の兒は、母親思ひの、父親を怖いと思ふ平生の習慣が除れぬらしく、姉の立つてゐる後ろに離れてさびしさうにして立つてゐた。

『母さんがゐない、母さんがゐないつて、この常ちやんが泣いてしやうがないのよ。常ちやんひとりよ。母さんがゐなくなつたつて泣くのは。常ちやんは弱蟲よ。でもね、父さん、此頃は泣かなくなつたわ。夜は、私と寢るわ。おとなしく寢るのよ。朝も泣かなくなつてよ。でも、ね、父さん、今度の家は狹くつて、小さくつて、何にもないの。お二階もないの。でも、好いわ。父さんさへ歸つて來て下され

た。

暫く沈默が續いた。

と、また足音がして、さつき娘のやつて來た階梯を、十五位になる中學校の制服を着けた男の兒が此方へと上つて來た。大きい頭と痩せた體とが矢張その不整な不健全な發育を示してゐた。

『お父さん！』

『ヤ、お前か。』

『お父さん、僕の家はもうなくなつて了ひました。僕は今日から伯父さんの家に行くことになりました。母さんも姉さんも皆な何處かに行つて了ひました。お父さん、僕は何うしたら好いでせう。……お父さんが曾て言つたやうに、自分で自分の生活を築き上げなければならないのでせうか。僕はそれには餘りに小さい。僕はこれから種々なことを苦しまなければならない。いろ／＼のことをしなければならない。しかしお父さん、心配はして下さいますな。お父さんがゐなくつても、母さんがゐなくつても、僕は、僕は一人で……』急に聲を飲んで、『お父さん、あの時分は樂しかつた。お父さんは僕を活動だのボオルだのによくつれて行つて下すつた。父さんや母さんや姉さんと一緒に御飯を食べた時分は賑かだつた。お父さんは、さうはお思ひになりませんか。』

主人の頭は次第に低れ、深い溜息は肩を搖かした。

凭つて富士を眺めることも出來ません。あの大きな樹の下で戀しい昔の唄をうたふことも出來ません。何も彼も荒れて壞れて了ひました。折角、お父さんが築き上げた生活も皆な亡びて行つて了ひました。お父さんの書齋には、埃やら塵やらが一杯にたまつて、蜘蛛の巢が網のやうにかゝつて居りました。此間は、ある人が來て、私の常に離さない琴をも無理やりに持つて行つて了ひました。』

『母さんは、何うした？』

『母さんも此間出たきり、もう歸つてまゐりません。母さんはある人と手を携へて町中を步いてゐるといふ話です。私はその男の人を二三度見ました。』『娘は不思議なフィックルな笑をちよつと顏に見せて、『好い立派な男でした。役者のやうな男でした。お父さん、もう、私達は獨立しなければなりません。自分のことをしなければなりません。私は私の好んだ方へ行かうと存じます。私には、私の相手が澤山あるといふことを私は漸く此頃になつて知りました。お父さん、家なんか潰れたつて構ふことはありません。お父さんやお母さんの生活なんか壞れて了つたからとて、私の生活には何の影響もありはしません。私達の前には樂しいことや美しいことや悲しいことが澤山に澤山にあります。此間も手紙が參りました。』手紙を袂から出すやうな形をして、『今日も待つてゐて吳れる筈です。あの林の陰に、あの青草のしげる美しい花の咲く林の陰に……。それでは、さやうなら。』

かう言つて、娘は體をこゞみ加減にして、主人の默して坐つてゐる傍を掠めるやうに通つて出て行つ

八

不思議な形をした娘の姿が急に其處に現はれた。年は十六七で、髮は庇髮を眞中から割つて、前櫛を二枚差して、袴を裾長く穿いて、靜かに此方へと歩み寄つて來た。不完全に發達した春期の覺醒は、胸のあたりに高くふくらんだ乳房と、青白い皮膚と、動搖し易い表情とに名殘なく現はれてゐた。放縱に捨てられて育てられた荒んだ氣分も歷々と見えた。

『お父さん!』二步三步進み寄つて、茫然とした主人の顏を凝と見た。

『お父さん!』二度目の聲に、主人は初めて氣が附いたものゝやうに、懶いどんよりした眼を開いて其方を見た。

『お、お前か。』

『お父さん、お父さんは何故歸つていらつしやらないのです?』

主人は默つてゐた。その顏には昔の孤獨と憂愁とがはつきりと掠めて過つた。

『お父さん、お父さんがお歸りなされないので、私達はもうあの家に住んでゐることが出來なくなりました。家は荒れたまゝになつて了ひました。昨日も或人が來て、家の一部を壞して持つて行つて了ひました。今日もある男が來て又其一部を壞して持つて行かうとしてをります。私達はもうあの二階で、欄干に

『藝術は？』

ふと振返つて女は訊いた。女の眼は美しく輝いた。

『藝術は……藝術は……御身の眼と御身の髪と御身の心とに由つて、更に無限の美しさと輝きとを增すであらう。世の中に稀な尊い價値のある藝術が私の胸にやどるであらう。御身の胸を透して……』

主人は言ひ淀んだ。主人は急に言葉をとゞめた。主人は女の眉のあたりに、ある小やかな瞋の色の上るのを見た。

『では、藝術と私と比べては？』

『…………』

『私か？　藝術か？』

主人は沈默した。主人は急に女の傍に走り寄つた。主人は口に出してこそ言はなかつたけれど、無限の服從は殘りなくその顏に現はれてゐた。

二人は抱き合つた。靜かな音樂は何處からともなく起つた。美しい緩かなしかしその底に測りがたい不吉を暗示したやうな旋律は長く續いた。

花に眼を娯ませ心を淨くするであらう。そしてその花のかをりはかれ等の思を私達の境に誘つて來るであらう。』

『では、貴方の妻は？』

『妻？　妻は別な道を行つた。妻は更に新しくかの女の行く道を開くであらう。そしてそこに花を咲かせることに力と心とを盡すであらう。』

『妻の涙は？』

『それも間もなく乾くであらう。何んな涙でも、時を經て乾かぬものはない。』

『時は？　貴方の最も苦しんだ時は？』

『時はもう私の心を惱まさなくなつた。時も私達二人に對しては、如何なる作用をも呈することが出來なくなつた。私達の歡樂は世の中にある刹那の歡樂ではない。苦痛を後に脊負つた歡樂ではない。刹那と永久との交渉を唯一の題目にした時は、二人の間には何等の欺騙を働かすことが出來なくなつたのだ。』

女は微笑を湛へて、靜かに立つて、窓のところに行つた。

窓の下にある花園には、種々の美しい花が咲いてゐた。日が靜かにそれにさして、裊々と風の渡る度に、花と葉と共に女の髮が輕く搖いた。

の方を見た。

主人は猶續けた。

『奇遇――眞に奇遇だ。この眼と御身の眼とは何千年來相觸れよう相見よう相近づかうとしてゐたかも知れなかつたのだ。互に捜し合つた眼と眼とがこの廣い世界で逢つたのだ。その瞬間は、何といふ好い日、好い時間、好い時間、好い分秒であつたらう。あの時、御身は今まで川を見てゐた眼を移して、忽ち私の方へと近寄つて來た。その時から、私の孤獨は救はれた。私の苦惱は取除かれた。私の暗い四壁は崩れた。』

女は始めて口を開いた。『その時から、さうです、その時から憂愁の谷も花で彩られ、困憊の天地も金色で輝いた。千載の一遇、實際千載の一遇でした。』

窓の外からは、俄かに美しい日光が灑ぐやうに女の肩の處に射した。

女は言つた。

『社會は？』

『社會などはもう既に既に、とうの昔に、私から去つた。孤獨の世界にゐる時にも、社會はもう私の頭の中にはなかつたのだ。』

『他人は？』

『他人も矢張社會と同じだ。他人はこの千載の一遇を羨み且つた〻へるであらう。私達の間に咲いた

よりとした空が明けてそして暮れて行くのを私は見た。そして人達は、さういふことが何でもないやうに、當り前のことであるやうに、平氣な顔をして、滿足して歩いてゐるのを見た。黄い佗しい砂塵がいつも私の眼の前に舞つた。私の頭は「平凡」と「無爲」と「無思想」とに疲れた。しかし人々の言ふやうに、勞働といふものが孤獨に比べて、果してそれほど貴い價値あるものであつたらうか。勞働、努力、さういふものに何の意味があるであらうか。しかし、今はさういふ境から離れた。それも皆な御身の賜だ。』

女は微かに笑つて見せた。

『かういふ價値ある世界が別にあらうとは夢にも思はなかつた。かういふ光輝ある美しい世界が私の前に展けて來ようとは思はなかつた。それにしても、何といふ緣だらう。何といふ幸福だらう。ゆくりなく御身の眼を見たといふことは――。御身はその時、流るゝ川の畔を歩いてゐた。御身は私の其處を通るのも知らなかつた。御身はその河の中に御身の眼と御身の心とを限りなく誘惑するあるものがあるやうにぢつと深くそれに見入つてゐた。あの時、御身がちよつと頭を擧げて私を見なかつたならば――そして永久に御身の眼を見ることが出來なかつたならば、それは私に取つて、何んなに不幸であつたであらう。それこそ私は長い長い暗い壁の中の生活を猶つゞけて行かなければならなかつたのだ。しかし、私は御身の眼を見た。御身の眼と私の眼とは運好くそこで逢つた――』

女は顔を此方に向けた。黒い眼はけだかいしかしフイックルな蠱惑のかゞやきを持つて、ぢつと主人

『孤獨の苦惱、寂寞の煩悶、さういふものを免れるのは、唯御身の眼を見た時ばかりだ。御身の體には、この世では見ることも味ふことも出來ない或る尊い美しいものがかくれてゐる。御身を見ない以前は、この身は全く孤獨に虐まれた。右を見ても、左を見ても、何處を見ても暗い壁ばかりであつた。何物も私を樂ませるものもなければ、何人も私を慰めて呉れるものはなかつた。これはかりは眞實だと思つて、それを日蒐けて一心に追求して行つた本能さへも、次第に茶褐色から灰色に變つて行つた。後には全く暗黑な壁になつて了つた。そしてその壁には「生殖」といふ無氣味な字が唯大きく書かれた。私の周圍は夜のやうに暗かつた。妻は蒼白い顏をした幽靈であつた。子供は執着く絡みつくけだものゝやうであつた。』

女は默つてその黑髮を梳いた。

『孤獨の苦惱、それは何んなであつたと思ふ。生の苦惱、死の苦惱、それよりももつと苦痛であつた。ぢつと坐つてゐると、體がずんと千億萬仭の底に沈んで行くやうな氣がした。そしてこの孤獨には、いつも退屈と寂寞とが伴なつた。何故、人間はかうして生きてゐなければならないのか。幾日も幾日も一語も口を利かずに生きてゐなければならないのか。死ぬにも死なれず、生きるにも生きられず、「社會」とか「他人」とか言ふものが、絶えずその背後に絡みついてゐて、自分で自分を自由にすることが出來なかつた。自分は鳥のやうに自由に空を翔つて行く翼のないのを悲しんだ。毎日々々唯同じやうに、どん

にも、さういふ資格は昔からあつたのです。』

『私の妻にも？』

『さうです。貴方と貴方の奥さんには、かういふ運命がいつか一度はやつて來ずにはゐないのでした。』

『それが昔から知れてゐたのか。』

『暗示がもう昔からあつた筈です。今更急に起つたことではありません。かうなつて行くのは、前から知れてゐました。』

『進んだが好いか、退いたが好いか。』

『お進みなさい。』

『よし。』

扉は閉つた。

七

妖艶な美しいその女は、その黒髪を、その肌を、その姿を前にかけた大きな鏡に映して坐つた。

主人はそれと相對した。

『お前は何處から來た。』

『遠くの遠くから。』

『何故來た？』

『お招きになつたから。』

『いやそんな用はない筈だ。』

『いゝえ、お招きになりました。あそこに行けと命ぜられました。私は好んで此處に來たのではありません。私は谷の底に靜かに眠つてをりました。青草が私の寢床で、谷の水が私の音樂でした。長い長い眠りを私は眠つて居りました。それを呼びさましたのは、貴方ではありませんか。』

『お前は何だ？』

『私は歡樂と苦痛とを裏表に持つてゐるものです。私は盲目です。私はこの世に稀なものを人間に見せる技倆を持つてゐます。私に逢つてはどんな豪い人でもすぐれた人でも皆な盲目にならずには居られません。そして私の見せるものは、この世の中にあるやうなものではありません。「生存」でもありません。「生死」でもありません。さうかと言つて物質でもなければ精神でもありません。人間は時には死を代償にしても、このめづらしいものを見ることを厭はないことがあります。しかし、多い人間の中で、このめづらしいものを見られる資格のあるものとないものとの區別があります。貴方にも、貴方の奥さん

た。そしてその產後にかの女は斃れたのであつた。丘の陰にある小さな農家にゐる老いた父母は、淚ながらにその娘の艱難な短かい一生をかれに話した。

その墓は村の寺の奧の方にあつた。小さな塔婆が唯一つ立つてゐるばかりで、石碑もなければ墓標もなかつた。かれは其前に行つて花を手向け線香を燻した。で、かれは其處を去つて、寺の後を流れてゐる川の土手の上に立つた。丁度秋で、野はひろ〴〵と川の向うに展けてゐた。其處此處の森は濃く淺く紅葉して、もずがキヽと聲を立てた。

この婢の身の上ばかりではない、この他にも、其間に種々な事件やら悲劇やらが澤山に澤山にあつたに相違なかつた。絕え難い苦痛、狂はしい煩悶、愛着と嫉妬とに堪へかねて、ある男はある女の腹に刄を刺した。ある女は流るゝ水に向つて身を投じた。飛行機からは若い軍人が墜落して死んだ。遠い外國では、聞くも恐ろしい戰爭が起つて、何百萬といふ人間の血は時の間に流れた。——その間を、小さな二つの髑髏は、つひに來る時を待つやうにしてそこに橫はつてゐた。

六

ある人がある扉を開けた。『あゝあの扉を開けなければ、かうした空氣は此處に入つて來なかつた。』かう悔んだとて、それは何の役にも立たない。靜かに靜かにある空氣は入つて來た。

細君は時々不仕合せな小婢のことを思ひ出した。ある夜、その小婢は、自分の荷物をあるところへ持ち出して置いて、細君が幼い兒に乳を呑ましてうと〳〵してゐる間に、戀に惱んだ娘の多くのするやうに、こつそりと裏口から出て、外に待つてゐる男の方へと行つた。細君の起きた時には、茶の間には灯が徒らに明るくついて、子供の明日の辨當の菜のかんぺうが黑く鍋の底にこげついてゐるばかり、呼んでも呼んでももう婢は其處にゐなかつた。

しかし小婢の上にも、樂しい戀の歡樂は長く續かなかつた。婢は男の爲めに彼方から此方へと流浪した。其處で逢つたといふものもあれば、彼處で逢つたといふものもあつた。ある人はその婢が落魄して汚いざまして歩いてゐるといふことなどを細君に話した。

それはかりではない。ある年のある日、細君は婢の田舍の父親から其の死去を報じた手紙を受取つた。早く〳〵流れ行く生活ではないか。あの小さい娘が、あの池の緣で女の兒に金魚を指さした娘が、戀をして、苦勞をして、子を生んで、そして逸早く過ぎ去つて了つたではないか。『あゝ光も死んだかね。あの娘は一番劾々しい好い婢だつたのに……。樂もせずに、死んで行つて了つたのかねえ。』かう言つて其時細君は淚をそのはがきの上に落した。

主人はまた主人で、旅行の次手に、その小婢の墓のある田舍を訪ねて行つたことがあつた。婢は家出をした時の男とわかれて、別な男を持つて、その胤を懷姙して、困つて、田舍に歸つて行つたのであつ

た。
　小さな罎は、さういふものゝ中に、到底世に出る春の希望の絶えて了つたものゝやうにさびしく斜に横はつてゐた。
　服箪笥の方に藏はれたものは、これとは違つて、倒れて、腹を白く見せたまゝになつて其處に横はつてゐた。其處には古い縮緬の帶揚などがあつた。そしてその帶揚の中には、女の心の底に人知れずかくれてゐるやうな秘密がいくつとなくひそんでゐた。油の匂ひの失せない半襟、香水のかをりの殘つた風呂敷、ある男から貰つた記念の指環、さういふものが澤山に澤山に入つてゐた。何うかすると、細君の白い手が、その指環を其處から出したり入れたりした。ある小さな繪の本などが入れられてあつた。
　細君は、時には小さな鍵で、その抽斗をあけて、帶揚の中から、昔の手紙や反古を出して、長い間、そこに坐つて、それを見てゐることなどもあつた。さういふ時には、子供達は大抵學校に行くか、外へ出て遊んでゐるかして、あたりにはその姿を見せなかつた。前の庭に面した緣側はしんとして、樹の影が靜かに半ば閉めた障子に映つた。
　知らぬ間に過ぎ去つた時だ。その時、乳母車に乘せられて行つた女の兒は、もう七歳になつて、來年からは學校に行けるやうになつてゐた。其時、八歳であつた女の兒は、今年から女學校に行つて、靴をはいて、カシミヤの袴を裾長に曳いて、『行つて參ります、』と言つて、快活に出かけて行つた。

白粉下、油、鏡などが常に細君の居間に置かれた。『でも、これは貴方の爲めではありません。私の爲めです。私だつて生きなければなりません。私だつて生きる路を築いて行かなければなりません。』かう言つてゐるやうにして細君は長い髮を梳いた。

五

書齋の抽斗と、服箪笥の抽斗との奥に藏はれた小さな罎は、長い〳〵年月を全く埋れて過して來た。誰もそこにさういふ罎かあるのを知らなかつた。藏つた人達も、つひぞ一度もそれを思ひ出さなかつた。

書齋の抽斗の方には、紙屑や反古が一杯に詰められてあつた。そこには、主人の昔の戀の手紙が一束になつて入つてゐたり、秘密の日記が雜つて入つてゐたりした。男と女と戯れに書いた歌の斷片もあれば、あるところから要求された計算書の半ば破れたのが入つてゐたりした。金を借りた證書なども雜つた。ある手紙は破れて丸められて押詰められてあつたが、それは女のやさしい手跡で、それを讀んだ主人の激動と昂奮とは、その時のまゝに依然として其處に殘つてゐるのを見た。主人の胸の其時のなやみは、とうに消え去り醫やし盡されて了つてゐるけれど、ある人が來てそれを持ち出して去るか、その丸めたのをひろげたりするかしなければ、何時までも何時までも同じやうにして跡を示してゐるのであつ

が、さういふ冷めたい空氣に包まれるやうになつて行つたのでせう。それも皆この爲めです。この夜着の爲めです。この夜着に貴方の心が絡みついて行つてからです。』

『何うも仕方がない。』

『では、何うしても再びもとに戻すことは出來ないのですか。昔の温かい柔かい賑かな空氣には引返すことは出來ないのですか。』

『何うも仕方がない。』夫は三度重ねて言つたが、急に聲を強くして、『過ぎ去つたものは仕方がない。お前は寧ろ新しい生活を築くが好い。過去を夢みるよりも、將來を築き上げるが好い。寒い國も仕方がない。冷めたい空氣も仕方がない。』

『では何うしても……』

夫は默つてゐた。細君は凝と夫の方を見たが、そのまゝ冷めたい長い廊下を向うの方へと行つた。

またある年月は過ぎた。

矢張二人はその同じ家に住んでゐた。家を取圍んだ樹には月が照り、日が照り、風が吹いた。何も知らない子供達は無邪氣に唱歌をうたつたりした。大きな男の子達は、ボールなどを投げた。

此頃、細君は髮を美しくすることに心がけた。今まで入つたこともない髮結なども出入した。新しい

『それでも好ければ持つて行け！』

細君の目からは涙が流れた。

『この心を、この涙を貴方は汲んで下さることは出來ないのですか。これまではそんな貴方ではなかつた。やさしい人だつた。この夜着に絡みついた心の起らない中は、貴方は立派な家長であつた。すぐれた父親であつた。貴方は五六年前の昔の賑やかな家庭を飜つて考へて見ることは出來ないのですか。あの賑やかな暖かい家庭を、赤兒の聲で滿された賑やかな家庭を。日の暖かい明るい部屋に私が寢てゐる。その私の傍に小さい生れたばかりの赤兒が寢てゐる。小さい可愛い呼吸を立てゝゐる。その周圍には、お七夜の祝物の赤飯やら鰹節やらが散らばつてゐる。あの時分の暖かい生々した空氣に返らうとは、貴方は思はないのですか。』

『何うも仕方がない。』

『あの時分の空氣と今の空氣と何んなに違つてゐることでせう。あの時分は苦勞を苦勞と思はなかつた。一つのものを半分づつわけて食つても私達は滿足してゐた。人達も大勢訪ねて來た。親類の娘達も絶えずやつて來た。笑聲が門に滿ちた。希望の光はこの家に滿ちあふれてゐた。それを今の空氣に比べたら、何んなに違つてゐるでせう。今は、今の空氣は、丸で氷のやうです。北國の雪や氷に閉された家と同じです。いつの間にさうなつたのでせう。いつの間に、この同じ家が、この同じ部屋が、この同じ家具

『俺にはわからない。』
『その夜着の中には、私から貴方を奪つたものが住んでをります。ある女が住んでをります。美しい女が住んでをります。』
夫は起上つて、
『何を言ふんだ?』
『そんなにしらを切らなくとも好う御座います。その夜着は私が戴いて、向うに持つて行きます。』
『これはやられない。』
『頂戴して參ります。』
『いや、これは俺の生命だ。俺はこの爲めにのみ生きてゐるのだ。これを失つては、俺の生活もなければ、俺の藝術もない。これぱかりはやることが出來ない。』
『何うしても頂戴して參ります。』
夫は考へて、
『そんなに欲しければ、持つて行くが好い。しかし、俺の心まで持つて行くことは出來まい。この夜着は持つて行つても、俺の心は持つて行くことは出來まい。それで好いか。』
『…………』

書齋の柔かい寢臺の上に赤いメリンスの裏のついた夜着を着て、夫がひとり寢をするやうな年月がかなりに長く續いた。細君は毎夜大勢の子供の世話をしてから、おそくまでひとりで茶の間に起きてゐた。

で、細君が大勢の子供に取卷かれて自分の床に入る前には、屹度一度は夫のゐる書齋の方を覗いて見るのが例になつてゐた。時にはもう灯が消えて暗くなつてゐることもあれば、時にはカン〳〵と明るく灯が點つてゐることもあつた。しかし細君は一度もその長い廊下を書齋に入つて行つたことはなかつた。細君は靜かに障子をしめて、電氣のスイッチをひねつて、そして自分の床に入つて寢た。

ある日、寢臺の上に寢てゐる夫の傍にやつて來た細君の顏には、赤い昂奮した色が隱されずに漲つてゐた。

『この夜着を私に下さい。』

『何うして？』

夫の顏にも急にある表情が上つた。

『何故でもよう御座んすから。』

『何故、そんなことを言ふんだえ？』

『言はないでもわかつて居ります。』

『何故でせう？』
『肉體の關係が女親よりは薄いからだ。男は乳を飲ませない。だから、子供は父親のものと言ふよりは、母親に屬してゐると言ふことが出來る。』
『だから、男は何んな眞似でもして差支ないつて言ふんですね。』
『いや、男ばかりぢやない。女でもさうだ。お前だつて、これから肌を美しくし、髮を美しくしようと思ふやうになることがないとは言はれない。その對象さへあれば、生殖の芽は再び萠え出して來るに相違ない。』
『ぢや、他に男を拵へろと言ふやうなものですね。』
『拵へろとは言はない。しかし、お前に取つては、さういふ新しい芽の萠える方が或は幸福であるかも知れない。しかし、恐らくは、さういふ元氣はあるまい。何故と言へば、お前の肉體はもう衰へつゝあるから……。新しい芽を萠えさせようとするには、子供の養育になど忙殺されてはゐられないから。子供を捨てなければならないから。さういふ元氣はお前にはあるまい。』
『それはわかりません。』
『さうだ。それはわからないかも知れない。』夫はかう言つて笑つた。

育てることにばかり興味を有たなければならないのだ。』

『さうでせうか。』

『何故さうでないんだえ？』

『だつて、私の年位で、まだ子供の出來る人は澤山にあるんですもの。』

『ぢや、何故、さういふ風にしないんだ？』

『貴方がさうなさらないからだ。』

『俺にも責任があるかも知れないが、お前にも責任がある。それならば、何故、お前は肌を美くし、髪を美しくしないのだ。』

『何故男は肌の美しい髪の美しい女ばかりをもとめるのでせうか。肌が美しく髪が美しくなければ、女は男には用はないんでせうか。』

『さうではない。しかし、美しくないよりは、美しい方が好い。お前が髪を美しくしようと思はないのは、お前の心も體も、俺から離れて行つてゐるからだ。子供の養育に忙殺されて、生殖には段々緣が遠くなつて行くからだ。お前の體と心との中に、生殖の芽が段々薄くなつて行つてゐるのだ。』

『男は何うです？』

『男には直接には子供の養育といふことはないから、女とは違ふ。』

に、子供の生れる月を數へて、襁褓でも拵へて見たいやうな氣がしますよ。あの時分は、まだお互に若くつて、元氣でしたからね。家も賑やかでした。赤兒の啼聲といふものは賑やかな好いものですからね。』

『ぢや、拵へるさ。』

『もう出來やしませんよ。あゝ〳〵小石川にゐた時分が戀しい。』

『さうだな、あの時分は賑やかだつたな。何んな苦痛も苦痛にならず、何んな煩悶も煩悶にならなかつたな。周圍を見廻しても、自分達と同じやうな生活をしてゐる若い人達が多かつた。行く先にはいつも色彩のあるはなやかな希望の雲がたなびいてゐたからな。何んなことをしたつて、氣はまぎれて行つたものだ。』

『本當ですね。』

『しかし、皆なかうなるんだから、何うも仕方がない。若い人達が、ミルクの罎を赤兒にふくませたり、ねんねこで子供を負つて寒い朝に立つてゐたりする光景は、今でも到る處で見受けるが、さういふ人達も、皆な私達と同じやうになるんだから。』

『さうでせうか。つまらないのは私達だけぢやないでせうか。』

『そんなことがあるもんか。皆なさうだ。子供を生まなくなれば、皆なさうだ。お前達はもう子供を

『それはさうだ。長い一生だからな。それはわからない。』

『それを思ふと、厭な〳〵氣がするんですの。』

かう言つて細君は其話をやめた。

しかし何うかすると、其話は夫妻の間に取換された。そして、その話の出る度に、豫言者の言つた通り、二人はある宿命に向つて徐々として進んで行つてゐるやうなのを感じた。『馬鹿な。』かう言ひながらも夫は顏を曇らせ、細君は聲を顫はせた。夫は野道を夜遲く歸りながら、さうした宿命を頭に描いたりなどした。

孤獨はやがて二人の間に來た。

それは長い間互にそれを合せることに努力した愛情の蔓が、ぱつたりある處で切れたやうなものであつた。今更それを繋ぎたいにも繋ぐことが出來ないのを二人は感じた。

ある日、細君は末の五歲になる女の兒の襁褓や着物を行李の中から出して、それを展げ　な　がら言つた。

『もう、これを着せるものもない。』

『まだ、子供が欲しいのかえ。』

『欲しいといふわけではありませんけれど、――生れればまた困るのは知れてゐるけれど、元のやう

姉さんは、あゝいふ人でしたから、何ぞと言ふと、すぐ其處へ見て貰ひに行つたんですがね。その時は、何でも指環が見えなくなつたとか何とか言ふので、出かけて行つたのでした。私は好いつて言ふのに、姉が逢つて勸めるものですから、見て貰つたんですがね。』かう言つて細君は笑ひかけた。

『何つて言つたえ？』

『大變にわるいんだつて……』

『星が？』

『貴方と私との間が……。出來るならば、此人とは今の中にわかれて了ふ方が好い。とても平和に一緒に暮してゐられる星ぢやないんださうです。貴方にくつついてゐれば、私は身の破滅を見なければならないんですつて……』

『馬鹿な。』

『姉さんもその時は笑つて、あの易者は上手だと思つたら、あんなことを言ふがね。それはお前のことぢやない、私のことだがねつて言つてゐましたがね……』言ひかけて少し考へて、『でも、今の話なんかきくと、さういふことがないとは言はれませんわね。私達の間には、どんなことが起つて來るか、それはわかりませんからね。今までは平和でやつて來ても、先は何うなるかわかりませんからね。おしまひの一時間に、さういふことがあつても、それでもその豫言は當つたんですからね。』

『それが――その若い美しい叔母が運命の手であつたとは誰が知らうだ。その女と男とは家に辿りつくまでに、既に全く戀に落ちてゐたんだ――』

『へえ！』

『で、それから後は何うなつたか、皆さんは知つてゐるか。御覽の通りで、かうして、かういふところに彷徨してゐる。かう書いてある。實際、不可思議だ。』

『さうですね。』

『お前と俺の間だつて、何うなつてゐるかわかりやしない。いつ、何んなことが起つて來て、平和が忽ち破れて行つて了ふかわかりやしない。』

『本當ですねえ。』

かう言つたが、細君は思ひ出すやうにして、『さう言へば、かう言ふことがありました。』

『何ういふ？』

『今までは話をしたことはありませんでしたけれど、一度、姉と一緒に、ある易者に、運星を見て貰ひに行つたことがあるんですがね。』

『何處にゐた時？』

『小石川にゐた時分ですがね。……あそこは非常に旨いつて言ふから、私もついて行つて見たんです。

すつかり變へて了ふやうなことが起つて來る。かうその豫言者は言つた。それをかれは二十五の年の大晦日の日に思ひ出した。『今日一日だ。何がこの身に起るだらう。何がこれから先き十時間か十二時間しかない間に起るだらう。それも市街の眞中とか、人の大勢ゐるところなら、さういふ運命が何處からかやつて來ないとも限らないけれど、この荒野で、人一人ゐない荒野で、雪ばかり降頻つてゐる荒野で、何が起つて來るだらう。』かう思つて、その男は停車場で圍爐裡にあたつて、汽車の來るのを待つてゐた。

『で、何うしました？』

『何うしたと思ふ？』

『わかりません。』

『實際、廣い野には、雪が降り頻つてゐて、人一人ゐない。汽車が來ても、乘るものもなければ降りるものもない。唯、停車場を掠めて通つて行くばかりだ。時間は時間と經つ。何もない、何もない。これから、歸つて、妻のゐる宿にかへつて寢るばかりだ。かう思つてゐるところに、最後の汽車が來た。』

『それから。』

『そこには、男の叔母さんだといふ女が唯一人乘つてゐた。そしてそれは今までに二度と逢つたことのない若い美しい叔母さんだ。男は喜んでそれを自分の家に伴れて行つた。』

『それで何うしました？』

渠は深夜ひとりさめて、悚然として床の上に起きかへつた。

長火鉢に相對して坐した夫と妻との間にも、長い盡きない會話があつた。物質上の爭鬪、精神上の爭鬪、肉體上の爭鬪、さういふものが盡きずに其處にあつた。

『お前は何故しつかりと俺をつかまへてゐないのか。』

『貴方は何故しつかりと私を捉へてゐて下さらないのですか。』

『組合せた手も離さなければならない。抱きついた肌も離さなければならない。』

『何故離さなければならないのですか。』

こんな會話が絕えず繰返された。しかし時の所業を人間は何うして拒ぐことが出來るであらうか。

ある日、渠は小册子に讀み耽つてゐたが、急にそれを下に置いて、長い〳〵溜息をついた。

『あゝ〳〵。』

『何うなすつた。』

『實際、人間の運命はわからない。』

かう言つてかれは今讀んだ小說の話を細君にした。

渠の讀んだのは、チエホフの短篇集中の一つであつた。そこには荒野の停車場と、そこにゐる男とが描かれてあつた。男は昔ある人から豫言された豫言を覺えてゐた。二十五の厄年には屹度お前の一生を

若い時、堅いと言はれた男が、一生堅いで通つて行くものでもなければ、道樂で仕方がないと言はれた男が一生道樂で身を滅して了ふものでもない。榮えたものもいつも榮えてゐるものではない。衰へてゐるものもいつも衰へてゐるものではない。好いが好いでなく、わるいがわるいでない。時が經つて見なければわからない。棺になつてからでなければその人のことはわからない。不思議だ。不可解だ。』こんなことを主人は思つた。

ある時には、『時と言ふものが不思議だ。時がいろ〳〵に人間に人間の心理の底をひらいて見せる。ある時はその面影をさへ見せなかつたものが、時が到來するにつれて、次第にその姿を見せて來る。こんなことがあり得るかと疑はれるやうな時が來る。こんな大膽な、こんな無法な人間になることを曾ては夢想だもしなかつたと思はれるやうな時が來る。遲かれ、早かれ、人間は自己の持つたものを一生の中に經驗せずには終らない。怖しいのは時だ。不思議なのは時だ。』かう彼はかれの日記に記した。

『自分の魂は今暗黑の底に落ちつゝある。それを自分は知つてゐる。今、それを何うかしなければ底止するところを知らずに眞逆樣に底の底に落ちて行つて了ふ。しかも、さうと知りつゝも、何うすることも出來ない。人間の力ではとてもそれを支へることが出來ない。情けないが仕方がない。』

こんなことも書いた。

『時はすぎつゝある。そしてその過ぎ行く時の音は明かに感じられる。あゝあの音だ。あの音だ。』

し今度はそれを石で碎いて捨てゝ了はうと思ふほど主人の心は激してゐなかつた。主人は誰にも話さずに、それをそのまゝ本箱の抽斗の奧に投り込んで置いた。

もう一つの罎は、主人がそれを發見する十日ほど前に、服箪笥の陰に落ちてゐるのを細君が發見して、矢張『危險なものだから』と思つて、抽斗の奧の方に藏つて置いたが、しかしその時丁度何や彼やと忙しいことがあつたので、ついそれなり主人に言ふのも忘れてゐた。で、二つの毒藥の小罎は、書齋の抽斗と服箪笥の抽斗の底に深く藏はれたまゝ、誰にも全く忘れられて了つてゐた。

靜かな長い年月は經つて行つた。

時には、何うかして、主人も細君も、さがし物などの次手に、『こんなところにまだ罎が藏つてあつた』と思ふことがないでもないが、いつもすぐ忘れて了つて、つひぞそれを話の種にしたことはなかつた。子供達も段々大きくなつて行つた。其時分栽ゑた庭の椰樹は、見上げるほど高くなつて、柿の枝には大きな赤い實などが見えた。

四

『長い年月の中には、いろ〳〵なことがあるものだ。艱難が艱難でなく、平和が平和でもない。そんなことがあつて堪るものかと笑つて過ぎたことも、何時の間にかこつそりやつて來るかもわからない。

『何處にでもあつたら、父さんに敎へるんだよ。持つて遊んでなんかゐてはいけないよ。これは毒藥だから。』

『毒藥つて、毒なの？』

『飮むと死ぬんだよ。』

『さう。』

かう大きな女の兒は眼を瞬るやうにした。夕飯を食ふ間、三つの罎は、長火鉢の猫板の上に並んでゐたが、それがすむと、主人はそれを持つて、下駄を突かけて、勝手元から裏の方へと出た。晴れた寒い夕暮で、豆腐屋が垣の外を通つて行つてゐた。

さながら自己の心の底にかくれた暗い心を亡して了ふやうにして、主人はその三つの小さな罎を石でこな〴〵に碎いて捨てた。白い粉が夕暮の黑い地にはつきりと散らばつた。主人の心は震へた。

三

『あ、こんな處に一つある。』

かう思つた主人は、佛壇の奥の揮發油の罎や白粉下の罎の中にまぎれて隱れてゐたその小さな罎をさがし出して、それを自分の書齋の方へと持つて來た。それはそれから一月ほど經つた後であつた。しか

な一室の中に起つて來ないとも知れなかつた。かれはかれの胸に潛んでゐるある暗いものに觸れたやうな氣がした。その暗い物は、今こそ平和と光明とに打克たれて、何の影をも動搖をも見せて來ないけれど、それがある機會とある心理とに觸れて、何んな光景を呈して來るか知れなかつた。罎の中にある白い藥――それを見た二人の心は震へた。

默つて立つて、簞笥の上をさがして見た細君は、矢張同じ罎が二つ其處にころがつてゐるのを發見した。

『これつきりかしらん。』

『此處には、これつきりありませんがね。』

『もつとある筈だがな。五つ位あつたと思ふがな。』

『子供がもつて玩弄具にしてゐたと思ふんですけれど。』

『もつと搜して御覽。』

子供等に聞いて見ても、皆な『知らない、知らない、』と言つた。大きな女の兒は、『そこらに一つあつたと思ふけれど、それよ、屹度。玩弄具に入つてゐたのよ、私が見たのは――』などと言つた。

『本當に危險だ。』

『ちつとも知らなかつたんですもの。』

『そら、光やが持つて行つてわからなかつた包ですよ。』

『あの中に、こんなものが入つてゐたのか。』

『え、さう言へば、小さな罎があちこちにごろ〳〵してゐましたよ。此間もう一つ其處等にころがつてゐましたよ。』手に取つて見て、『さうですか。そんな怖いもんですか。毒藥ですか。まァねえ。』

『ちやんと、ァヒ酸と書いてある。これを飮めばすぐ死んで了ふんだ。子供なんか、何も知らないから、いたづらしながら飮まないとも限りやしない。そんなことがあつたら何うするんだえ。』

『まァねえ。』

『あとは何うしたえ?』

『其處等にあるでせうよ。』

『其處等にあるぢや困るぢやないか。さがして御覽。』

細君の胸にも主人の胸にも、ゆくりなく死の問題が往來した。誰かゞそれを飮んだら何うだらうと思ふと、身内がゾク〳〵した。主人は『ボヴリー夫人』のことなどを想像した。床に横はつて苦痛の襲つて來るのを待つてゐる青白い顏、やがて一刻毎に烈しく襲つて來る苦痛、輾轉反側した體が次第に床の中に陷つて行く狀態――さういふ光景が歷々とかれの眼の前に搖いて見えた。不思議の災害が何處から襲つて來るか知れないやうな恐怖をかれは感じた。長い人生の間には、さういふ悲慘な光景がかれの平和

二

ある日、子供の玩弄箱の中に、小さな罎を發見した主人は、
『こんなもの、何うしたんだ？』
『何です、それは？』
『こんなものが玩弄箱の中に入つてゐた。一體何處から持つて來たんだ。これはアヒ酸ぢやないか。毒藥ぢやないか。こんなものを玩弄具にさせて堪るもんか。』
『ちつとも知りません。』
『これはお前、飲めばすぐ死んで了ふんだぜ。何うしてこんなものが宅にあるんだえ。』
『何うしてですかねえ。』
『近所からでも持つて來たのかしら？』
『何うですかねえ。どうして、こんなものを持つて遊んでゐるんでせうね。』
『注意しなくちやいけないぢやないか。』
『あ、わかつた……。そら、それはこの間の包の中から出たんですよ。』
『この間の包？』

『さうですよ。』

仕方がなく、婢は其處から引返した。婢が池の縁に行つた時には、日影が美しく半分ほどその池を染めて、築山の向うには、立派な御殿の邸の硝子戸が長く見わたされた。黃い白い菊の花壇なども見えた。池の藻の中には、大きな緋鯉や金魚が泳いでゐた。

『金魚、金魚。』

かう言つて女の兒は喜んだ。

夕暮近く婢は歸つて來て、その旨を細君に話した。『不思議だわね。さういふ家がないのかえ？　ぢや、仕方がない。』かう言つて、細君は婢の手からその紙包を受取つて、再びそれを簞笥の上に載せた。

思ひ出して、夕飯の時に、主人に話すと、『不思議だな。さう言ふ家がないつて言ふわけがないがな、さがしやうがわりいんぢやないかな。』

『でも、一軒きりないんだつて言ふんですもの。』

『ぢや、先で番地を間違へたのかな。郵便局へ返すより他に仕方がない。』かう言つたが、主人は再びその紙包を見ようともしなかつた。紙包は簞笥の上に置かれたまゝになつて幾日か過ぎた。

やがて乳母車は靜かにその丘の傍の路を向うに行つた。

『そら、お池が見えるでせう。』

『お池、お池。』

『あのお池に金魚がゐますね。歸りに見ませうね。』

かう小さい女の兒は言つた。

『金魚、金魚。』

『そら、いつか光やが負ぶして伴れて行つて上げたでせう。』

こんなことを話しながら、婢は靜かに乳母車を押した。乳母車の中の兒が、すぱ〳〵とミルク罎の細い管を吸ふと、それにつれて、罎の中のミルクは靜に日に搖いて光つた。

行く先には、藥葺屋根の家が二三軒丘に添ふやうにして並んでゐた。婢はある家の角で訊いた。『七十七番地……此處は七十四番地ですがね……もつと先きでせう。』かう百姓の上さんらしい女が敎へた。

婢は其處此處とさがし廻した。七十五番地、七十六番地、漸く其處をさがし當てたと思ふと、其處には別な姓の家が唯一軒あるばかりで、高田といふ家は何處にも見當らなかつた。『さうですね……。高田……聞いたことがありませんね。』其處にゐた婢らしい女が言つた。

『七十七番地つて言ふのは、お宅ばかりでせうか。』

くつて言ふのはひどいな。本當に、一體、誰が受取つたんだらう。』

『子供かも知れませんよ。』

『これは藥品だ。確かに見本の藥品だ。小さな罎が二つ三つ五つある。向うでも、何うして着かないだらうつて思つて困つてゐるだらうから、今度、持つて行つておやりよ。今日でなくつて好いから、ね。明日でも、あつちの方へ行くつい手があつたら屆けておやりよ。七十七番地の高田つて言ふんだから、今更郵便局に歸すのも變だから。』

『ぢや、明日にでも、私が貞ちやんを遊ばせながら、彼方の方へ行つて、屆けてやつて來ませう。ねえ、貞ちやん、明日行きませうね。お池の方に遊びに行きませうね。』丁度其處に入つて來た五歳位の女の兒に言ひながら、婢は勝手元の方へ行つた。

あくる日、婢が去年生れた末の女の兒を乳母車に乘せて、その傍にその紙包を置いて、貞といふ女の兒と一緒に、林に添つた道を靜かに歩いて行くのが、晴れた秋の日影に明かに際立つて見えた。林には鳥が鳴いてゐた。ひろい野には靑い大根や菜の畑の中に洋館が一軒ぽつんと立つてゐて、其處から靜かにピアノの音が洩れて聞えた。丁度その時、刈稻を滿載した車が一臺喘ぎ／＼野の方から登つて來たが、それの通る間、婢の押した乳母車は、靜かに林の方に寄つて待つて居るのが見えた。派手な女の兒のメリンスの着物が鮮かに野を彩つた。

『俺はこんな他人の名の書いてあるものを受取るもんか。』かう言つた主人は其處に書いてある番地と宛名とを讀んで見て、『七十七番地？　餘程先の方だ。何うしてこんなものが俺の家にあるんだらう？配達も餘程間が拔けてゐるな……』

『私も一昨日あたりから、それがそこらにごろ〳〵してゐるのを見て知つてました。』

かう婢は傍から言つた。

『何だらう？　一體？』主人は觸つて見て、『何か小さな罐のやうなものだな。見本つて書いてある。藥品か何かの見本だな……。早速、郵便局にかへすなり、先方に屆けてやるなりしなけれやいけないね。』

『さうですね。』

『七十七番地つて、お前、何處だか知つてるかえ？』

かう主人が婢に訊くと、

『七十七番地？　さう？　何處等でせうね、奧さん。あの池のあるあたりかしら。』

『あんな遠くかえ？』

『だつて、此間いらしつたお客樣の宅が七十一番地だつて言ひましたから。』

『さうかね。あんな方になるかね。』

『ぢや、持つて行くのが大變なら、郵便局に返してやるさ。それにしても、三日も知らずに放つて置

毒薬

一

『これは宅に來たんぢやありませんね。』かう言つて妻はある日小さな紙包を主人に見せた。

『どれ？』

手に取つて見た主人は、『宅ぢやないとも……ちやんとあて名が書いてあるぢやないか。何うしてこんなものを受取つたんだえ？』

『何うしてですかね？　誰が受取つたんですかね。私が受取つたんぢやありませんの。』勝手元で働いてゐる婢を呼んで見て、『これはお前かえ？　お前が受取つたのかえ？』

『いゝえ？』

『不思議なことがあるもんだね。二三日前から、簞笥の上にあるから、何うしたのかと思つてゐたんですよ。貴方が受取つて、忘れたのかと思つてゐたんですよ。』

二日間の歡樂は面にも現はさずに、二人はいつもの通りに出勤した。東京の客はもう歸つたらしく、寺はしんとして、庫裡には何の物音もなかつた。常のやうに生徒達は喧しく騷いでゐた。

一昨日の午後、東京から來た客と、主僧と、女と三人で、この教場の中を彼方此方と歩いたことなどは誰も知つてゐるものはなかつた。その人達はかうした寺を借りた田舍の小學校の教場をさもめづらしいといふやうにして彼方此方と見て歩いた。客が男教員の卓の前に立つたり、女教員の椅子に腰かけたりしてゐる間に、オルガンの前に行つて女はそれを鳴らして見たりした。二人の教員の話の客と主僧との間に出た時には、『それは險呑だね。もう屹度出來てるよ。男と女とを二人一緒に置いて何等の反應がないつて言ふことはありやしないよ。』などと笑ひながら客は言つた。女は、『君が代』を鳴らして見てゐたが、急によして『本當に思ひ出しますね。小學校に行つてゐた時分を。あの時分が一番無邪氣でしたね。』などと言つた。やがて客はボールドの前に立つてチヨークを取つて、惡戲書きを始めた。始めはLiebeだの Amour だのといふ字が頻りに書かれたが、最後に、Woman, Wine and Song. と大きく書いた。

その文字はその翌々日の二時間目の數學の時間までそのまゝ消されずに殘つてゐたが、やがてそれと氣が附いて急いで拭き消した男教員は、Woman, Wine and Song. と口の中で繰返した。

『さうだね。』
『まさか方丈さんぢやありませんね。』かう言つて考へて、『矢張、東京の藝者はちがひますね。』
しかし五六間行つた後には、二人はもう別な話をした。
『ぢや、八時の汽車？』
『あ。』
『貴方はその前の汽車で行つてゐるのね。さう？　七時の？　一時間位待つてるのね。停車場で待つてゝ下さるの？』考へて、『誰かに見られると大變ね。』
『大丈夫、東京なら大丈夫。』
『ぢや、私は家に行くつて言つて出ますからね。』
『あゝ。』
二人はこの計畫をするために、長い間無駄づかひをせずに金を殘すやうに心懸けたことを繰返して考へた。女教員も金を五六圓は持つてゐた。
いつもの林の角で、『ぢや、もう明日まで逢ひませんからね。屹度待合室に待つてゐて下さい。』
『あゝ。』
あたりに誰もゐないのを見廻してから、二人は唇を當てゝそして別れた。

男教員にも女教員にも、飾臺を前にして酒を飲んでゐる肥つた客と、痩せた主僧と、三味線を彈いてゐる若い綺麗な女とがあり〳〵と見えた。女は髮を銀杏返しにしてダイアの指環などをはめてゐた。

『藝者よ、屹度。』

此方でも女教員はわざと立つて行つてオルガンを彈き始めた。譜につれて、長い短い種々な調子が夕暮近い四邊の空氣に漲り渡つて聞えた。わざと『君が代』を長く引張つて彈いて見たりした。

隣の三味線は、暫くして聞えなくなつたが、やがて歸り支度をして外に出ようとした女教員は、急いで戻つて來て、『早く……早く』と言つて手招きした。慌てて男教員が行つて見ると、丁度庫裡の脇から山門の方へと、寺の娘に伴れられて、その東京の女が歩いて行つてゐた。すらりとしたその後姿は薄暮の空氣の中に靜かに動いて行つた。

二人は跡を片附けて、やがてそこから出て山門の方へと行つた。女教員を先に、男教員はそのあと五六間ほど距離を隔てゝ歩いて行つた。果して二人は、山門の少し手前で、その東京の女の此方へと引返して來るのに逢つた。二人は色の拔けるほど白い綺麗な女の顏を見た。

寺の娘は丁寧に先生達に禮をした。

山門を出て通りに行つてから二人は一緒に並んで歩いた。

『藝者ね。』

穴から其方を覗いて見た。
暫く見てゐたが、やがてそつと拔足して此方へと戻つて來た。
『見えて？』
男教員は點頭いて見せた。
今度は女教員がそつと其方へと歩いて行つた。矢張男教員のやつたと同じやうに其處にある小さな穴のところに身を寄せて、ぢつとそれに見入つてゐたが、その姿は容易にそこから離れようとしなかつた。廣い教室にさした夕日の影はもう消えて風が裏の林からサッと落葉を吹込んで來た。
やがて此方に戻つて來た女教員の顏は笑つて居た。
『見えたらう？』
『え。』
かう言つたが、『別品ね、東京の人ね、藝者ぢやないかしら？』
『さうかも知れないね。』
『此處の方丈さんが相好を崩して……』言ひかけてぷつと噴き出すやうにして口を押へて、『あの女は東京からあのお客と一緒に來たんですね。』
『さうだよ、屹度。』

男は點頭いて見せた。女は始めて安心したといふやうな顏の表情をした。女教員はよくオルガンの前に行つた。男が無器用な手つきをしてオルガンを鳴らすのを笑つて立つて見てゐたりした。

それは日曜日と大祭日と續く前の日であつた。終りの授業の時間、ふと女教員は庫裡の方で女の艶やかに笑ふ聲を耳にした。續いて、三味線の音がした。今までつひぞさういふためしがなかつたので——來客も滅多にやつて來ないほど靜かな寺だつたので、女教員はそれを不思議にせずには居られなかつた。寺の娘は三味線を習つてはゐるが、その娘の彈いてゐるのでないのは、音〆でもわかるし、また其處にその娘のゐるのでも知れた。

そればかりではなかつた。その三味線の音は次第に高く、女と男の笑ふ聲ははつきりと手に取るやうにきこえて來た。授業の濟んだ頃には、いよ〳〵それが盛んになつた。三味線につれて男の唄ふ聲などもきこえた。

『お客かしら。』

『さうらしいね。』

『上手ですね、三味線が……。』

かう言つて女教員は抑揚に富んだ達者な三味線に耳を傾けた。

あまりに賑かなので、男教員は、釘づけにして兩方をしきつた扉のところにそつと身を寄せて小さな

んでゐられる身分ぢやないんですから……。それはわかつてゐますよ。只、ね、一緒に、一緒に勉強することを承知して下されば……』

女教員は默つて點頭いて見せた。

その日は、女は、男より一足先に歸つて行つた。しかし、男教員の胸は樂しい希望に滿されてゐた。一緒に歸つて行く以上に、かれの心は喜悦に躍つてゐた。

一月はまた經つて行つた。

林は風に鳴り、霜は庇の板を白くした。山門の傍の大きな銀杏はすつかり黃葉して、夕日は美しくその輝きを其處に集めるかのやうに見えた。教場は依然として元のまゝで、時計もボールドも、火鉢も卓もすべて同じであつたが、しかし、二人はもうもとの二人ではなかつた。二人の會話はもうもとの會話ではなかつた。授業の終つた後の人目のないところでは、二人はこんな風に話した。

『あれから何うして？』

『すぐ歸つた。』

『隨分遲くなつたでせう？』

『え。』

『誰にも逢はなかつた？』

方に讀方と算術とがあり、女教員の方には體操と習字とがあつた。やがて四時の板木は鳴つた。生徒はどやどや包をかゝへて教場から出て行つた。つゞいてやつて來た小使の爺も腰掛を机の上にあげたり、箒であたりを掃除したりしてゐたが、土瓶の水を取替へて、炭を火鉢に加へて歸つて行く時には、二人は二人とも自分の卓に向つて、頻りに何か調物をしてゐた。

暫くしてから、男教員は立つて、椅子を火鉢の傍に持つて行つて、それに腰をかけて、土瓶から茶をついで飮んだ。女教員は矢張頻りに物を書いてゐた。

男は立つてその傍に行つた。

『てるさん！』

女は猶默つてゐた。

『てるさん！』

女は振返つた。眞面目な顔をしてゐた。やがて微かな聲で、『でも……』

『聞いて下さらない？』

女教員は微かに頭を振つた。

『私なんか……』

『それはね、わかつてゐますよ。私達は勉強しなけれやならないんですから。そんなことをして遊

『えらい睦まじさうだね、二人は？』

『さうか。』

主僧は笑つて、『何かしてたかえ？』

『いゝえ、何でもありませんけれども、二人で待ち合せて歸つて行くんですよ。男の方の先生が待つてゐることもあれば、女の先生が待つてゐることもあるんですよ。學校を了つちやうと、何か二人でむつまじさうに話してますよ。』

『でも、大丈夫だらう？』

『男の方がしつかりしてゐるから――。今、つまらないことに引つかゝつて、一生損をしてはつまらないと思つてゐるから、大丈夫でせうけれどもね。』

『それでも矢張氣にかゝるかね。』

『さうでもないけど……』

主僧は笑つて『しかし、險呑だよ。いくら堅い男でもね。』

『本當だ……。』

こんな話を庫裡でしてから二三日經つたある日のことであつた。その日は男教員と女教員とは朝から變な顔をしてゐた。男は女の眼に逢ふのを避けた。女も男に顔を見られるのを恐れた。其日は男教員の

二人はこんな會話を取替した。

男教員は來年は縣廳に行つて正教員の免狀を取りたいと思つてゐた。女教員は出來るなら東京の學校に行つて、裁縫の免狀を得たいと思つてゐた。

二人は學校を出ると、主僧達の住んでゐる庫裡の方は通らずに、本堂の前から鋪石道を山門の方へ出て、街道を通つて、林の方へと出て行つた。その頃はいつも夕日が美しく野を彩つて、町に歸る自轉車が滑かに平らな道を走つてゐた。停車場近い信號柱のあるレールの傍の踏切の小屋では、上さんが頻りに夕飯の支度をしてゐた。

『さよなら。』

『さよなら。』

林の角で二人はわかれた。

體操の時間には、女教員は女の子を大勢庭に連れ出して、『龜よ龜さんよ』などといふ唄をうたつた。小さな生徒達は行儀よく並んで、先生の身振手眞似に應じて立つたり蹲踞んだりした。それが男教員の讀方を教へてゐるところから手に取るやうに見えた。男教員は女教員のカシミヤの袴の裾の高く低くあほれるのををりをり見た。

ある時寺の上さんは言つた。

る小使の爺も、もう用事をすまして歸つて行つて了つてゐた。何うかすると、その時分になつて、女教員はオルガンの前に行つて、新しい譜を選んで彈いて見たりした。

多勢の教員の中から、二人だけ選ばれて特に此の離れ島のやうな教室によこされたといふことは、それはある運命の神の所業のやうであつた。二人は授業のすんだ後の靜かな一二時間の空氣に浸ることを樂みにした。

男教員はある時小さな本を持つて來て女教員に貸した。二三日してから、女教員は、『難有う御座んした。』と言つてそれを男に返した。

『何うでした！』

『さうですね。』

女教員は笑つて面白いとも面白くないとも言はなかつた。本の中に書いてあるやうな世界は、女教員に取つても男教員に取つてもちよつと想像の出來ないやうなものであつた。歡樂――さうした歡樂がこの世の中にあるだらうか。體も魂も一緒になつて空を翔つて行くやうな歡樂がこの人間に出來ることだらうか。手と手、顏と顏、唇と唇、涙と涙、さういふことが實際さう容易く行はれることだらうか。

『想像で書いたんですね。』

『さうですね。小説ですから面白く書いてあるんですよ。』

やがて板木が鳴ると、ガタ〳〵と生徒の教場に入る氣勢がして、暫くの間しんとなつて、續いて女教員の冴えた聲が靜かな秋の晴れた空氣に震へるやうに聞えた。

一月ほど經つて校長と視學と一緒に來て見た時には、古い小屋を壞して持つて來て便所が庫裡の傍に出來てゐて、女教員と男教員とは、熱心に互にその受持の組を教へてゐた。男教員の方は丁度數學の時間で、頻りにボールドに數字を書いてゐるのが見えた。校長と視學とは默つて暫しその授業振を見てゐたが、やがて男教員の卓の傍に置いてある二脚の椅子のところにやつて來て腰をかけた。そして一時間終るまでぢつとして其處にゐた。傍に置いてある土瓶の茶をついで校長は視學に勸めた。

『兎に角、これで間に合ひますから。』

『さうですな。』

などと視學は言つた。ピンと延びた鬚と丸い赭ら顏とを女教員はその視學に見た。

男教員と女教員とは、始めは別々に歸つて行つたが――男教員の方がいつも一二時間あとに殘つて種種調物をして行くのが例になつてゐたが、後には二人は互に待つて一緒に歸つて行くやうになつた。『まだですの、』などと女教員は男教員の卓の傍に行つて言つた。

その時分には、教場にはもう誰も居なかつた。夕日が靜かに生徒の机と腰掛との間にさし込んでゐた。ボールドの傍にかけた大きな時計は五時あたりのところを指して、本校からいつもきまつて跡掃除に來

ボールドに書いた字

校舍の普請の出來上る間、一年生と四年生の教室がないので、ぢきその近くにある寺の庫裡の一部を借りて、そこで授業をすることにした。座敷と居間と玄關の間とを三間打通しにして、生徒の下駄箱を玄關の隅に持つて來て、奥の床の間の傍の男教員の卓の上にボールドを懸けた。小さなオルガンを女教員の卓の傍に据ゑた。立派な教場が出來た。

朝早くから小さな生徒はぞろ〳〵と集つて來た。今までの學校の庭よりも寺の庭の方が廣いので、生徒達は包を自分の座席に置くとそのまゝ、彼方此方に散らばつて勝手な眞似をして遊んだ。騷がしい聲は段々高くなつて行つた。敎場と同じ長さの同じ間取の三間を、しきつてあるところの扉を釘づけにして、其方の方に小さく引籠つて住んでゐる主僧夫婦が、朝飯の膳に向ふ時分には、殊にその喧騷は夥しくなつて行つてゐた。寺の娘は四年生で、主僧の好みで踊を町の師匠の許に習ひに行つてゐたが、自分の宅が學校になつたのを喜んで、朝飯をすますと、袴を穿いて、包を持つて嬉しさうにして出かけて行つた。

る好いにほひを鼻にした。それは丁度昔馴染の女に長い年月を隔てゝ逢つたやうな感じであつた。主僧は高く積まれた籾がらのぶす〳〵と赤く燻つてゐるのを其處に見た。

此頃では、籾がらは養蠶の材料に買はれて行くので、何處の農家でも昔のやうにそれを燃して了ふやうな家はなかつた。主僧はぶす〳〵と赤く燻ぶる火と一種言ふに言はれないそのにほひとを背景にして、女の許にあくがれて行つた自分のわかい時を思ひ出さずには居られなかつた。かれは庫裡の玄關の前に立つて一ところ闇に赤く見えてゐる火をぢつと見詰めて恍惚としてゐた。お貞のことなどがまた眼の前に浮んで來た。

へ通ずる廊下とを背景にして、脊の低い主僧と體格の大きい上さんとが、一緒に一生懸命に臼を廻してゐるさまは、丁度レリーフか何かのやうに、くつきりと明るい午前の光線の中に浮き上つて見えてゐた。臼の棒が上さんの方へ行く時には、主僧の腰は浮くやうにをかしく動いた。

あたりはしんとしてゐた。其處には誰も訪ねて來るものもなかつた。上さんはやがて再び臼の中に新しい籾を入れた。臼の棒は頻りに動いた。傍では鷄がコヽ〳〵と集つて來て餌を拾つた。

『何年振りだかな、臼を挽くのは――』主僧は休んでゐる間にこんなことを言つて考へて、『もう二十年も挽いたことがないからな。くたびれるわけだ。』

午後に其處にやつて來た百姓の上さんは、『方丈さん、あゝ見えても、中々旨めいだな。腰振が好いな。なア、お上さん、』などと言つて笑つた。

唐箕にかけたり、箕で吹いたりして、すつかりその仕事の終つたのは、もうかれ是れ薄暮に近い頃であつた。上さんが唐箕や臼を藏つたりしてゐる間に、主僧はさつき水を汲んで火を燃して置いた据風呂の竈の下に、大きい木の根の割つたのなどを入れた。勞働の後の疲勞と暢氣な百姓めいた心持とは、久し振で、主僧の體にある樂しい氣分を染み込ませて行つてゐた。

上さんにまかせて好加減に上にあがつて來た主僧は、湯に入つて、好い氣持になつて、着物を着替へて玄關の方へと出て行つた。日はもうすつかり暮れ果てゝゐた。主僧はふと何年にも嗅いだことのないあ

『え。』

『やつても好いけども……』

『やつて下さいよ。さうすれや片が附くから。臼だつて、さういつまでも借りて置いちや先方だつて困るだんべ。』

『平公は何うしても來ねえんか。』

『あいつは、ぐづ〳〵してゐて、來ても役に立たねえから。』

『ぢや、やつてやんべ。』

主僧はかう言つて立上つたが、『まだ餘程あるんか？』

『もういくらもねえよ、半日かゝりや出來ると思ふんだがな。』

『ぢや、やらう。』

で、上さんは外へ出て、また昨日のやうに十文字に張つた竿に臼をしかけて、一方には唐箕を出して、その傍に新しい筵を二枚ほど敷いた。

暫くすると、主僧は古い單衣を着て、手拭で頬かぶりをして、そこに下りてそして臼の前に行つた。

上さんは臼の中に籾を入れて、そしてそれを廻し始めた。臼の廻る音が遠雷の轟くやうに聞えた。

それは晴れた風のない好い日であつた。井戸の傍に咲いてゐる白い赤い朝鮮菊の向うに、玄關と本堂

『平公は何うもつかひにくくつて仕方がねえ。』
『何うして？』
『何うしてつて？　唯、うはの空で臼を廻してゐるだで、ちつとも力にならねえ。誰か他にゐると好いけれども……』考へて、『正公だと、餘程好いんだけども……』
『正公、何處かへ行つたのか。』
『さつきも行つて見たが、何うも頼まれてゐるんで、手が離せねえつて言つてゐたつけ。』
『他にはねえかな。』
『さうさ……』こんなことを言つて、上さんは靜かに夕飯を食つてゐた。
その使ひ難い平公を相手に、それでも上さんは三日ほど働いた。籾はもうその三分の二ほどこなされてあとにはいくらも殘つてゐなかつた。『さうだな、五俵と少しあんべ、』などと上さんは言つた。
一日は平公は加減がわるいと言つて何うしてもやつて來なかつた。一日は終日雨が晴れずに暮れた。唐箕は空しく庫裡の入口のところに幅をして置かれてあつた。
あくる朝、平公を待つてゐてもやつて來ないので、上さんは主僧に言つた。
『あんた、ちよつとやつて呉れませんか。』
『俺れがか――』

『皆な忙しいから。一人前のものは、皆な日雇取に行つてゐるから。』
『それぢやまァ、放つて置け。』
『でも、なァ、今の中、して置くと、面倒がなくつて好いんだがな。』
主僧は丁度其時忙しかつたので、別に深く取合はずに好加減な返事をしてゐた。
二三日してから、上さんはまた言つた。
『片附けて了ふと好いんだがな。』
『誰かゐねえか。』
『平公でも仕方がねえから頼むか。』
『さうするが好い。』
で、上さんは收穫のあら方片附いた懇意の百姓の家に行つて、唐臼と唐箕とを借りて來ることにした。
二三日すると、上さんは、庫裡の玄關の前の處に竿を十文字にわたして、それに唐臼を仕かけて、平公と二人でそれをごろ〳〵と廻し始めた。
少し智慧の足りない丈の高い平公は、にや〳〵笑ひながら、上さんと一緒になつて終日頻りに働いてゐた。主僧はをり〳〵玄關のところに行つてそれを見てゐた。
夜、上さんは言つた。

『これでも五六俵はあるべ。』

『まァよくついた方だんべ。作の野郎につくらせるよりは得だァ。』

墓掃除の男はこんなことを言つた。

稲扱きは、近所の百姓が來てして呉れた。廣い庭には大勢の男や女が集つて一日ですつかりそれを籾にして了つた。『かうして置きさへすりや、いつでも米にするのはわけはねえから、その中、家の方の用でもすんだら、また、一日二日來てやつてやんべ。』その百姓はこんなことを言つて、その籾を廣い庫裡の玄關の隅へと置いて行つた。

一日は一日と經つて行つた。町役場の兵事係が來て、演習の兵士の爲めの割宿をきめて行つたりした。その兵隊達もやがてやつて來て、三日ほどとまつてそして立つて行つた。凩が潮のやうに裏の山を鳴らして行く夜などもあつた。

ある時、上さんは言つた。

『籾にして置いても仕方がねえ。あれを何うかしたいもんだが。』

『平公でも頼んだら、何うだ。』

『平公も怠け者でなァ。』

『ぢや、正公は?』

て大きくはないけれども、それでも平年作位の收穫は確かであつた。暴風雨の過ぎた後は、空は連日美しい碧に展けて、光線の强い秋の日影は、靜かな濶々とした野に濃かなさびしい影を投げて行つた。垣の蟲の音は次第にかれ〴〵に、街道を通る荷車の音は高く夕暮の空に響いてきこえた。

冴えた月の光は夜每に露の多い野の草道を照した。黑く地上に落ちた町の家々の庇の影、何處からともなく匂つて來る木犀のかをり、睦じさうに並んで步いて行く二つの影――秋は次第に深くなつて、忙しい收穫はやがて野にやつて來た。

一年の收穫を樂しむやうにして、百姓達は皆な忙しく野に出かけて行つた。男女の群は其處にも此處にも群を成して黃く熟した稻を刈取つてゐた。髮の上の白い手拭、赤い襷、時には鎌の刄に日影のきらきらと映つて光るのが、其處を通つて行く汽車の硝子窓に反射したりした。夕暮には、刈稻を山のやうに積んだ車が靜かに街道を村の方へと轢つて行つた。朝夕は日增に寒くなつて最初の霜は田に刈り干した稻の束を白くした。

寺の田の稻は、矢張、墓掃除の男と日雇取とに刈られたが、時には上さんの手拭をかぶつた姿などもその中に雜つて見えた。一日二日してからその日雇取達はやがてその稻を寺の庫裡の前の庭へと運んで來た。

『餘程あるなァ。』

警戒を解かなかつた。

其の次の日も晴れたり降つたりしてゐた。日が明るくさして、空が青くなつたと思ふと、やがてまたすぐ曇つて雨は車軸を流すやうに降つて來た。

米が高くなつて却つて好いかも知れないなどと始めは言つてゐたが、次第に不作の心配になつて行くのを人々は見た。毎朝の新聞には、各地の出水が二號活字で報道され、T川の土手がところ〴〵危いなどといふことも業々しく書かれてあつた。

『困つたもんですな。』

『早く晴れねえぢや困るが……』

こんなことを人々の繰返す中にも、矢張暴れ模樣はそのまゝに續いて行つた。一日は風が強く吹き、一日は雨が烈しく降つた。一週間目には、人々は心配らしい顏をして、T川の刻々に增水するさまに胸を轟かせた。一里と隔らない川添ひのなにがし町では、人々皆な結束して、夜は高張の提灯が濁流の漲り渡る土手の闇を照して、その光景は丁度戰場のやうであるといふことであつた。近在の村々には、地水が出て稻の穗のすつかり浸つて了つたやうなところも尠くなかつた。毎日裏の森を掠めて通つて行く汽車はこの停車場に入る一里ほど前のところで、すつかり水に蔽はれた畠や田の中を通つて來てゐた。

しかし寺の後ろの田は、さういふ水害の影響も少しも受けずに、靜に黄く熟して行つてゐた。穗はさし

車の繼立場へと行つた。馬車の周圍を卷いたヅックから雨滴が落ちて、御者の體はすつかりびしよ濡れになつてゐた。

母親は車軸を流すばかりに降り頻る風雨の中に、傘を傾けて立ちながら、娘の乘つた馬車が靜かに出て行くのを見てゐた。

凄しい暴風雨はやがて來た。裏の森は鳴り、木の葉は飛び、鼠色をした雲はちぎつて投げられた古綿のやうに早く〳〵暗澹とした空を掠めて行つた。寺の高い屋根の樋からは、雨が瀧津瀬のやうに漲り落ちた。

夜半に凄しい音がしたと思つたのは、それは裏の森の中の大きな欅の枝の折れたのであつた。朝になつても、風雨はまだ止まなかつた。井の水を汲むためには上さんの髪はしどとに濡れた。

暴風雨の野のさまは慘憺としてゐた。野菜はすつかり倒され、田の稻は半ば水に浸された。

『えらい荒れでしたな。』

『困りやんしたな。』

『土手が何處か切れたつて言ふぢやないか。』

かういふ噂はやがて彼方此方からきこえて來た。風雨は一時やんで、明るい日影がさしたけれど、あれ模樣はまだ容易に收らなかつた。小學校の屋根の向うに見える天氣豫報の旗は、依然として暴風雨の

說だのを讀んでゐるのが此方の路から見えた。百姓夫婦は相變らず朝早く支度をして野の方へと出て行つた。

野には朝日が朗らかにさした。

賑やかな盂蘭盆、それもやがて過ぎて行つた。寺の山門の中の鋪石道には、紅い白い松葉牡丹などが咲いてゐた。蟲の音が段々繁くなつて、草原には螽斯だのかまきりだのが飛んだ。近くの町の女學校の寄宿舍から歸つて來た寺の娘は、畠の緣に並んで出來てゐる玉蜀黍を晝中よく折りに出かけて行つたが、それももう殘り少くなつて、幹も葉も赤く枯れて、玉蜀黍の實の毛は黑くちゞれて見えた。畠の茄子も段段小さくなつて行つてゐた。

娘は休暇中を多くは三味線や踊の復習に費やした。娘は主僧と上さんとの間に出來た子とは思はれないほど品の好い容色の好い娘で、女學校に行かない以前には、學校から歸ると、包を臺所に投り出して置いて、町の踊の師匠の許へとすぐ出かけて行つた。娘は春雨や潮來や松の綠などを踊つた。大浚ひを町の芝居小屋でした時には、主僧夫婦は、尠なからぬ金をかけて、派手な長襦袢のやうな模樣の縮緬の着物を拵へてやつたりした。主僧夫婦に取つては、娘は何物にも替へ難い寶のやうに見えた。

その娘が寄宿舍の方へ歸つて行く日は、あれ模樣で、風雨が凄じく裏の梢を鳴らした。通りの方へ出て行く裏の近路は水に浸つて步けないので、娘は山門の方から大廻りをして母親に送られて、町はづれの馬

『田は何うだな。水はあるかな。』

主僧はある時墓掃除の男に訊くと、

『水は大丈夫でさ。』

『草は？』

『草も此間取つておきやんした。』

『ちつたァ、取れべいか？』

『取れやすとも……。なァお上さん、此頃は始めのやうなことはがァせんなァ。あれぢや、實もかなりつくべいと思ふだ。』

『さうかな。』

『作の野郎にやらせて置くよりやぐつと好いつて、此間もお上さんに言ひやしたのさ。』

主僧は矢張其處に行つて見るやうなことはなかつた。しかし、墓掃除の男の言つたやうに、土用に入つてから、其處の田の稻はぐつと好い勢ひを見せて來た。幸ひに蟲もつかずに順當に育つて來た稻の緑は靜かに朝風に靡いてゐた。

その間に、汽車の助役は變つて、前の肥つた細君の代りに、今度は小學校教師の上りだといふ色の淺黑い脊の高い束髪の女が來てゐた。今度のは、子供がないので、亭主の留守を寢そべつて、雜誌だの小

『醉つたら、俺が手傳つてやら。』

かう言つて、にこ〳〵しながら、主僧は盃を上さんにさした。

何うかすると横綴の長い酒の通帳をひつくり返して見てゐることなどもあつた。『ほ、もう、隨分飲んだぞ。盆には、取られるぞ。一番酒が大きいな。』かう言つて、それを傍に置いて、『でも、まア好いや、酒だけだ。道樂は――。酒位十分に飲まなけりや、生きてる効がないからな。』

『もう、いくら位飲みました？』

『さうさな。』ちよつと勘定して見て、指を四本出して見せた。

『さうなりますかね、……此間のが大きいから。三人で一日に五升も飲んだんだもの。あん時はびつくらしちやつた。』

『まア好い〳〵。今年は桑を旨く賣つてやつたから。』

かう言つて主僧はにこ〳〵してゐた。

裏の小さな池に來る剖葦は、土用になると、ぱつたり聲を絶つて了つた。暑い〳〵日が毎日のやうに續いた。夕暮には、古い軒に蚊柱が立つて、その鳴く聲が鼎の沸くやうに聞えた。草は取つても取つてもあとから出來た。勝手の流元の溝の周圍には、一杯に青い草が繁つて、汚ないよごれた水が長い木の樋から落ちた。

『吉田さんが死んでは、もう昔のことを知つてゐる人も町にはゐなくなつて了つた。好い人だつたがな。あの人の聲を聞くと、その時分のことが浮び出して來るやうな氣がしたがなァ。段々、昔が遠くなつて行つて了ふんだ。』あとでかう主僧は上さんに話した。

二三年前までは、主僧は閑暇すぎて困つたほどであつたが、宗務所の札が山門にかけられるやうになつてからは、人の出入りも多くなれば管内の僧侶達も何の彼のとやつて來るといふ有樣で、時には上さん一人では手が廻りかねて、近所の懇意な女達を賴んで來るやうなこともないではなかつた。僧侶がやつて來ると『まァ〳〵何がなくとも？』と言ふ風で、主僧はいつも上さんに酒の支度をさせた。湯豆腐、精進揚、前栽物位で、さういふ人達は、酒を飮んで歸つて行つた。

『まァ、さう、言つたもんぢやないよ。酒の一杯も呑ませて置けば、何ぞの時に役に立つものだ。』主僧はこんなことを言つて、忙しいのをこぼす上さんを手で制したりした。

上さんも長い間には段々酒を飮み習つて來てゐた。始めは、一二杯で眞赤になつて、すう〳〵言つて苦しがつてゐたものだが、此頃では、夜は主僧の酒の相手も少しは出來るやうになつて來てゐた。町の人達は、古い煤けた庫裡の一間で、長火鉢を挾んで、薄暗いランプの光線の下に浮き出すやうにして二人が盃を手にしてゐるのを、をり〳〵見かけた。『もう澤山、そんなに飮むと、あと片附が出來なくなるで、』などと言ひながら、上さんは主僧の酒を強ひるのを喜ぶやうに見えた。

の白壁のかけて媾曳した酌婦の遁げた話は、それでも寺までは聞えて來て、『はゝア、さうかえ、近在のものかえ。何處へ行つたかわからないのかえ、』などと主僧と上さんとはちよつと話の種にした。しかしそれでもすぐ忘れられて行つて了つた。町ではいろんなことがあつた。郵便局の息子が首を縊つたり、かけ替のないある金持の一人息子が死んだり、年を取つた深切な寺の世話人が昨日まで丈夫でゐて朝ぽつくり死んで行つたりした。その世話人は先住が不動堂を勸請する時分から何彼と寺の世話をした人で、主僧が放浪生活からこの寺に入つて來る時にも、何彼と深切に口をきいたり肝煎りをして與れたりした。律義な堅い一方の青縞屋さんで、滅多に昔の話などはしなかつたけれど、時には二三杯の酒に醉つて、先住の不動樣時代を話し出すことがないでもなかつた。『本當に、あの時分はえらい騷ぎでしたからな。先住は借金の殖えるのなどには構はずに、朝から酒を飲んでゐる。お大黑樣はぴらしやらして不斷着に絹物を着てすましてゐるといふ譯ですから、とても堪りこはありやしません。それに、あの今、前にゐる青山が、その時分、酌婦と驅落なんかして、先住は心配する。お袋は泣く。えらいことがありましたよ、』などと話して笑つた。主僧の兄弟子で、其頃三十位であつた僧は、今でも近在の寺に住んでゐるが、この世話人とは殊に合口で、何うかして寺で邂逅すことなどがあると、二人は何の彼のとその時分のことを盡きずに話した。葬式の時には、その老僧はわざ／＼草鞋ばきで遠くからやつて來て、主僧と一緒に長い長い讀經をした。

が不思議にも今美しい鮮かな繪となつて、再び主僧の眼の前に現はれ出して來た。

主僧は後ろに手を組みながら、其時分と同じでありながら、本堂も庫裡も鐘樓も山門も、全くその時分の賑やかな派手な色彩を失つて了つてゐるのを見た。あたりは靜かなさびしい落附いた空氣で滿されてゐた。不動堂の門前の繁華も一度全く亡びて、今は貧しい町の人々の長屋になつてゐた。主僧は山門から鐘樓の傍を通つて、荒れ果てた不動堂の傍に行つて立つた。先住のあのやうな熱心と努力とで、兎に角一時は賑かな門前町をつくつて、參詣者なども遠くから集つて來るやうになつたのも、忽ち荒廢の址を留むるにすぎなくなつて了つたことを主僧は繰返して考へた。

やがて主僧は庫裡の方へと戻つて來た。臺所に上さんはゐたけれど、主僧はいつものやうに言葉をかけようともしなかつた。主僧は其日一日、青春の歡樂の追憶の甘い空氣に浸つて、それから離れることが出來ずに暮した。

一番草、二番草、その田の稻は次第に成長した。到底瞬の出來榮えと比べることは出來なかつたけれど、それでも綠の色は段々濃かになつて行つた。暑い日影が照つたり、夕風が靜かに渡つて行つたり、雨が斜に降つて通つたりした。

主僧はその頃は寺の用事が忙しいので、もう以前のやうにその田のほとりに姿を見せなかつた。倉庫

のことは今でもかれの頭にはつきりと浮んで來た。其時と今との間に經過した年月もそれを遮る力はなかつた。かれにはそれがまだ昨日のやうに思はれ、お貞が其處にゐるやうに思はれ、自分がまだ十八九の若い僧であるやうに思はれた。お貞は先住とその大黒との間に出來た綺麗な娘であつた。その時十七であつた。

今から十年前に、主僧はある親しい友達に話した。『私が此寺に住職になつて來た時には、その女はまだ近在の町へ嫁いて生きてゐたんですよ。私がね、こいつ（今の妻）を貰つたのを聞いて見に來たことがあるんですよ。こいつは、其時、知らないもんだから、平氣な顏をしてゐましたけれど……。あとで、こいつのわる口をいろ〳〵言つたつて言ふことでした。可笑しなもんですね。えゝ〳〵、それはもう關係が深かつたんですとも……。私が足利の僧房に修行に行く時なんか、お互ひに前の夜は遲くまで爐ばたで泣き明かしてそしてわかれて行くやうなわけでしたんだから……。え、その女ばかりぢやない、お袋がさういふことを娘のするのを平氣で見てゐるやうな女でしたから。』

『何うして死んだんです。』

『病氣で死んだんですがね。今、生きてゐると面白いんだが、』などと言つて、主僧は其時笑つたが――その時分には、酒に醉ひなどすると、上さんを捉へてその女の話をきかせたり何かするのが例であつたが、此頃ではもうその話などは何處かに行つて了つて、お貞のおの字も出なくなつて了つてゐた。それ

うに此方から身を隱すやうにして、田に添つた榛の並木を別な方へと靜かに出て來た。半ば老いて髮もや〻白くなつた主僧の頭腦には、此時何年にも思ひ出したことのない遠い昔が、美しい繪でもあるやうに靜かに浮び出して來てゐた。靑春の歡樂、血の燃えるやうな烈しい戀ごゝろ、美しい房々した娘の髮、何も彼も忘れて互に寄添つて行つたやうな溫い肌、――あ、あれも死んだんだ。もうこの世の中にはゐないんだ。』かう思ふと、不思議な人間と人生とが今更のやうに主僧の心に繰返されて來るのであつた。

先住が勸請した不動堂、その門前の兩側に並んだ茶屋、湯屋、あの時分は賑やかであつた。先住は町に法事などに行くには、いつも駕籠に乘つて二人も三人もつれて出かけた。金襴の袈裟は美しく日光に光つて見えた。維新の瓦解の後に漲るやうに押寄せて來た廢頽した氣分、絕對に表面にはすることの出來なかつた大黑を――ある時はその爲めに危く牢に入れられようとした女を、先住は其時分はもう幅で寺に伴れて來て一緖に住んでゐた。主僧は十七八の可愛い若僧姿をしてゐる自分の姿を其處に見た。茶屋の女や湯屋の娘達に大騷ぎをされてゐる自分を見た。夕暮にそつと寄つて來て自分に抱きついたのは自分よりも五つも六つも年上の色の白い女であつた。ある娘は、自分が庫裡の玄關の脇の三疊で佛書を讀んでゐるといつもそこに來て、障子をそつとつばで濡して穴をあけて、そこから眞珠のやうな冴えた眼を見せた。

しかし、さうした多い情よりも一層深い濃い情がかれを別な方へと伴れて行つてゐた。お貞――其女

『色の白い、少し肥つた、脊の低い女だんべ？　男は？』
『男はゐなかつたがね。男もゐることがあるんかえ？』
『此間はゐたつけ……。あの倉庫の壁んとこにくつつくやうにして、こそ〳〵話をしてゐたつけ……』
『何處の女だらう？』
『川島の酌婦だよ。此間、來たばかしなんだつて？』
『ふん、あれがね……』
これでその時の話はお了ひになつたが、主僧はその後も度々其女の倉庫の白い壁のところに立つてゐるのを見かけた。女は銀杏返しに結つて、セルの單衣に縮緬と繻子の腹合せの帶をしめてゐた。ある時には、女はゐなくつて、田舍の息子らしい髮を分けた二十三四の男が其處等をぶら〳〵歩いてゐた。
ある日の午後、主僧は一番草を取つたあとの樣子を見ようと思つて、暗い杉森をぬけて、明るい野の方へと出て來たが、ふと、いつもの倉庫の白壁の陰にその男と女とが相對して、熱心に何か話してゐるのを主僧はちらと見かけた。榛の並木の蔭になつてゐるので、此方の此處に立つてゐるのは向うからは見えないが、向うの壁にくつつくやうにして話してゐるさまは、此方からは手に取るやうに見えた。女は後姿を見せて男の手を執つてゐた。男の顏は際立つて白く見えた。
主僧は長く見てゐるのに忍びないと言ふやうに、寧ろさういふシーンを攪き亂すに忍びないといふや

『旨く行きませんか。』

『すつかり田をわるくしちやつてるからな、肥料を入れても無駄なやうな氣がする。』

『だつて、肥料を入れずにもおかれますまい。……だから、銑公に貸せや好かつたんだ。』

『うん。』主僧はこんなことを言つてゐたが、少し考へて、『仕方がねえ。今年はまア、損をしても、肥料を入れてつくつて見るさ。あれでも、ちつとは穫れるだんべ。』

『正公の田はよく出來てるねえ。矢張かせぎ者は違ふだ。』

その田と相接してゐる田の苗の發育の好いのを思ひ出して、上さんは言つた。

『本當だ。正公の田は好い。矢張、かせぎ者でなくちや駄目だよ。怠け者に貸しちや往生だ。』

『作の野郎のは、ひどいんだから。あいつに作らせるよりは、それでもまだ此方でやる方がましかもしんね。』上さんはこんなことを言つて、勝手の方へと下りて行つた。

ある日、主僧は言つた。

『何處の女だんべ。あそこいらにまご〳〵してゐるのは？』

『今日もゐたかえ？』

上さんは笑ひながら言つた。

『いつでもゐるんかえ？』

明けて、竈の下の火をたきつけた。

寺の後ろの水田の苗は、日増に大きくなつて行つてゐた。水に不自由のないこのあたりでは、何處の田にも苗の根元まで十分に水が來てゐた。朝風に夕風に苗は靜かに靡いて、蜻蛉などがその葉末にとまつてゐたりした。田の畔に近寄ると、蛙は音を立てゝ水の中に飛込んで行つた。

靜かな白い雲が映つたり、田の畔を劃つた榛の並木の影が映つてゐたり、杉森の黑い影が田の一ところを薄暗く見せたりした。桑畑で桑を摘んでゐた娘達は、俄に降り出して來た雨に慌てゝ、その田の畔を拔けて、寺の森の中に入つて行つたことなどもあつた。夕日は明るくその水田の一面を照した。

この田のところの向うには、一軒藁葺の百姓家があつて、そこからは、向うの別な田に働きに行く百姓夫婦の姿がいつも見られた。嬶は鎌や水を入れた土瓶などを持つて、七歲位になる女の兒を伴れて、その畑の傍の榛の並木の蔭を通つて、朝露の深い路のレールを越して向うに行つた。その百姓家の向うには停車場に近い倉庫の白い壁だの、運漕店のこぢんまりした勝手元だの、助役の住宅の草花の庭などが見えてゐた。貨車から豆糟の丸い肥料を運ぶ人足の懸聲が終日そのあたりにきこえて來てゐた。

時々見廻りに來た主僧は、歸つてから上さんに言つた。

『何うもいかんな。』

でゐた。『新さん、茶でも飮みなせい。』かう遠くから聲をかけた。『これから日雇取を始終入れて、草を取つたり何かするんぢや大ごつたな。……私ももう少し體が丈夫だと好いけれど、とても百姓は出來ないから、』などと言つた。その癖、庫裡の周圍にある畑の前栽物は、皆なこの上さんと新さんとでやるので、里芋でも茄子でも菜でも皆なこの上さんが指揮してつくらせるのであつた。町の人々は暑い日影を饅頭笠に避けて、畑でせつせとさくを切つてゐる上さんの姿をいつも見かけた。『お寺の上さんな、えらい働き者だ。方丈さんが留守でも皆な間に合つて行くんだから。じんやほんの世話でも何でもするんだからな。』かう人々は言つた。

そして暇があると、裏の山に行つて、枯枝や松葉などを拾つて、それを庫裡の廣い臺所に持つて來ては積んで置いた。主僧との仲も至極圓滿で、『おきよや、おきよや』などとやさしく主僧は呼んだ。一人ある娘が今年十三になつて、小學校を卒業して、遠い町の女學校に行つてからは、その交情は一層濃かになつて行くやうに見えた。

それでも主僧が東京で豫定以上に遊んで來たり、近在へ行つて泊つて來たりするやうな時には、上さんの顏にはきまつてむつとした表情が現はれた。『もう、働くのは御免だ。働くのは、緣の下の力持ちだ。厭なこつた。此方ばかりせつせと東京も見ねえで働いてゐたつて爲方がねえ、』などと言つた。しかしそれもその時ばかりで、あくる朝は、上さんは矢張早く起きて、元氣の好い顏色をして、庫裡の戶を

られてゐた。方丈さんもやがてはその中の一つになる運命を持つてゐるのではあるが、そんなことは一度も念頭に置いたことがないといふ風で、いつもサッサとその暗い濕つた墓地の中を通つて、榛の木の並んだ明るい野の方へと出て行つた。

『何うもうなひ方がぞんざいだな。』時にはかう言つて墓掃除の男に話しかけることもないではないが、大抵は默つて日雇取達の精々と働いてゐるのを見てゐた。桑畑を越して向うに、明るい野が見え、青い田が見え、汽車のレールが見え、信號柱が見え、湧くやうに渦巻き上つた初夏の午後の白い雲が見えた。

『すつかり田をわるくされちやつた。丸で肥料なんか使はないんだから。』

こんなことを方丈さんが言ふと、

『本當でがんすとも……。手入がわるくつちや、田も臺なしだ。』

傍にゐた日雇取が調子を合せた。

方丈さんはいつもそこから野の方へと歩いて行つた。日雇取が見てゐると、桑畑の中の眞直ぐな道をぶらり〳〵と靜かに歩いて、近所の畑に出てゐる百姓の上さんと話などをして、それから汽車のレールの踏切のあたりまで行つて、そこで長い間默つて立つてゐて、そこから靜かに引返して來た。時には汽車が凄じい煤烟をあたりに漲らして、寺の森の裏にある停車場へと入つて行つたりした。

時には色の淺黑い肥つた寺の上さんの姿も其處に見えた。上さんは墓掃除の男を新さん新さんと呼ん

『作の野郎、此處借りて作らねえちや困るんだで、毎日のやうに行つて賴むんだけども、方丈さんな、何うしてもきかねえんだ。あんな奴に貸して置くと、小作が取れねえべいぢやねえ。田がわるくなつて仕方がねえつて言ふんだ。』

『あいつは怠け者だからなァ。』

他の一人の日雇取の男は、『それでも、他にいくらも借手があんだんべいがな？』

『方丈さんな、何のかんのとむづかしいことべい言ふんだなァ。なァに、借手がねえけりや、俺がつくる。俺が日雇取を入れてつくるつて言つてゐたけが、たうとうさういふことになつちやつたんだがな。』

『田がわりいでな……。日雇取にかけちや損だんべい。』

こんなことを皆なして噂し合つた。『好い方丈さんだが、もう少し慾をかわかねえと猶好いんだが、』などとも言つた。日雇取達は精々と働いた。榛の並木の間から日影が晴れやかにさし込んで來たり、向うの桑畑の深い綠の中に村の娘の赤い襷や白い手拭が透いて見えたりした。時には雨が靑い野を斜に掠めて通つて行つた。

半ば植ゑかけた田のほとりに、時々方丈さんの姿が見えた。脊の低い方丈さんは、へこ帶をぐる〳〵卷きにして、頭の毛の伸びたのも氣にせずに、本堂の傍から暗い墓地の中を通つて、杉や竹藪の茂つた中を此方へと出て來た。その墓地には、この寺の歷代の僧の丸い墓石が澤山に並んで、深く蘚苔に封じ

籾がら

寺の後ろの隅にある二反歩ほどの水田は、今年は借手がなくつて、遲くまで耕しもせず田植もせずに放つて置かれたが、他の周圍の田の苗の綠が綺麗に朝風夕風に靡く頃になつて、急に寺の墓掃除の男が他の日雇取の二三人の男と一緒にやつて來て、げんげの咲いた荒れた田を慌たゞしく掘り返して、用水を引いて來て好加減にぼつ〳〵と苗を並べて植ゑて行つた。

『方丈さんな、慾べいかわくから、こんなことになるんさ。』

墓掃除の男は、苗の置いてある田の畔のところに蹲踞んで、先づ一服といふ形で烟管を口に啣へながらこんなことを言つた。

『作は今年は作んねんか？』

『作りていいんだが、去年、小作がをさめてねえからな。』

『ふん、それでか……』

かう言つて手を叩いて婢を呼んだ。

やがて婢は來て、蚊帳を吊つて行つた。男はビイルなどを取寄せて、その中で、頻りにひとりで飲んでゐた。『外にゐちや蚊に食はれるでせう。何うです。蚊帳の中に入つては、』などと男は言つた。小蔦は愈ゝ油斷が出來ないと思つた。しかし、如何にしても外は蚊がひどかつた。蚊帳を吊つてからは、一層蚊が自分の周圍に集つて來た。爲方がないので、『ぢや、御免なさい。』かう言つて小蔦は蚊帳の中に入つて行つた。小蔦は笑ひもしなかつた。男がひとりでビイルを飲んでゐるので、小蔦はわざと遠慮もせずに、煤煙に塗れた亂れた長い黑髮を解いた。そしてそれを櫛で梳き始めた。

劍を鳴らして驅けて行くのなど見えた。

あつちを歩き、こつちを歩きして、漸く泊るところを二人の發見したのは、それから二三十分してからであつた。しかも、それは旅籠屋ではなく、何でも荒物屋の店か何からしかつた。奥にある二間の一間には既に客が入つてゐた。

『お伴れですか。』かうじろ／＼と二人の樣子を見ながら、その家の主婦の訊いたあとについて、『いゝえ、途中で御一緒になつたんですけど……』かう言つて、小蔦はその奥の間に入つて行つた。

『くたびれたでせう。』

『えゝ／＼もう大變！』小蔦はかう言つたが、此處で氣を許してはならないと思つて、帶も解かず、着物も脫がず、緣側のところに立つて、唯、團扇などを使つた。蚊は盛んに音を立てゝ押寄せて來た。

『あなた、夕飯は？』

『澤山。』

『少しお附合ひなさいよ。』

『澤山です。』

『ぢや、私だけやるかな。これも爲方がない。かういふ日に逢ふのも運だ、』などと言つて、男は腰卷一つになつて涼んでゐたが、『これは堪らん。ひどい蚊だ。まア、一番先に、蚊帳でも吊つて貰ひませう。』

が、落ちたとか落ちるとかいふ騷ぎです。そこいら、もう一面に水ですよ。』かう入つて來た旅客は言つた。

『ヤァ、大變だ。』

『それは大變だ。』『困つたなァ。』などといふ聲が彼方此方から起つた。

其處に車掌はやつて來た。『お氣の毒ですけれども、汽車はもうこゝから先へは危險で行かれませんから、止むなく停車致します。……明日になれば、大抵通ずるとは思ひますけれど、それもはつきりとは申し上げられません。』かう言つて、一つ一つ客車の中を覗いて觸れ廻つて行つた。

『まァ、大變だわ。』

かう言つて、小蔦は唯まご〳〵してゐた。男は、『爲方がありません。ぐづ〳〵してゐて、泊るところがなくなつては、それこそ猶大變です。さうときまつたら、一刻も早く出て泊るところをさがさなくちや――』かう言つて、先に立つて小蔦の信玄袋を持つてやつた。

小蔦は何うすることも出來なかつた。今になつて、自分一人男に別れて、別な旅籠屋をさがすといふ譯にも行かなかつた。小蔦は男のあとに跟いて、群集の中を押分けるやうにして停車場を出た。

此處から東京に三里といふだけで、何處の何といふ町だかをも知らない小蔦は、唯、騷々しく町の兩側に高張などの明るく闇を劃つて點いてゐるのを見た。町にも既にいくらか水がついてゐるらしく、星の光の映つた片側の水溜りを人達はぢやぶ〳〵とこいで行つたりするのが見えた。巡査が提灯を下げて

停車場の他には、灯といふ灯も見えなかつた。一驛毎に次第に殖えて來る乘客は、車の扉をあけると、いつも潮のやうに驀進して入つて來た。もう入れない入れないと叫んでも、あとからあとへと押寄せて來た。ある驛で窓から外に顏を出してゐた男は、『えらい騒ぎだ。百人位、あとに殘された。』などと小蔦に話した。

小蔦は窓に身を凭せて、群集の中に埋められるやうにして、蒼白い彫塑のやうな顏をはつきりと薄暗いランプの光線の中に見せてゐた。

『まだ餘程ありませうか。』

『さう。あと五つ六つです。此處はW驛だから。』かう男は數へた。

あと二つしかないといふ驛に來た時には、汽車は長い間停車した。前から案じられた水は何うやら其の近所まで來てゐるらしかつた。驛夫や車掌がプラットフォムを往つたり來たりした。扉をあけて樣子を聞きに外に出て行く人などもあつた。一方の窓から外をのぞいて見た小蔦は、一面の水の上に星の影がキラ〳〵と映つてゐるのを見た。

『ヤア、ヤア、駄目だ、駄目だ。』かう言つて誰かゞ入つて來た。乘客は皆な其方の方を見た。

『何うしたんです？』

『すつかり水になつたさうですよ。とてもK驛までは入つて行かれないさうです。何でもA川の大橋

かつた。それに、切符も買つて了つてゐた。『この線で行つて大丈夫でせうか。』かう小蔦はソッと傍の田舍者に訊いてからその汽車を下りた。

I驛でも、乘客がプラットフォムに溢るゝばかりに集つてゐた。それは皆な洪水の爲めに此方へまぎれ込んで來たといふやうな人達であつた。この線でも、汽車が果してK驛まで行くか何うかはわからなかつた。東京のA川の氾濫は非常で、K驛附近は事に由ると、水に浸されてゐるかも知れなかつた。その樣子を訊きに行つた男はやがて歸つて來て『なァに、今はまだ大丈夫ださうです。しかしA川が一刻每に增水してゐるさうですから、ことによると、水に浸されるかも知れないつて言つてゐるんです。なァに、大丈夫ですよ。此處まで來ちや、もう行つて見るより他は爲方がありませんよ、』などと言つた。

そこでは、汽車が一時間もおくれて發車した。出た時には、時計はもう八時半のところを指してゐた。東京のK驛まで首尾よく入つて行き得るとしても、それから先のことを考へると、小蔦は不安の念に襲はれずには居られなかつた。それに、前の汽車もさうであつたが、この汽車は一層乘客が一杯で、二等室でも殆ど身動きも出來ない位にぎつしりと詰め込まれた。小蔦の信玄袋の上には、斷つても斷つても田舍の一紳士らしい男が腰を掛けるやうにした。

眞暗な闇の中を汽車は轟々として進んで行つた。小蔦は昨日からの旅行に全く疲れ果てゝ、窓に凭りかゝつて唯昏々としてゐた。暗いランプの石油は小蔦の頭の上にゆら〳〵と搖いて見られた。

が藝者であるといふことなどは、一目見た時から逸早く飮込んでゐるといふ風であつた。桐生の織物の話や、足利の名所の話などが絶えずその男の口から出た。

しかしその氣安いと思つた心は次第に油斷が出來ないといふ風に變つて行つてゐた。小蔦は其處にも女の一人旅の恐怖と心配とが常に身の邊に附纏つてゐるのを思はない譯には行かなかつた。それに、男の餘り深切過ぎるのも、後には小蔦に疑惑の念を起させた。

『新橋は、何方です?』

などと後には男は遠慮なく訊いた。

行く〳〵男が厭に道伴らしい風を見せるのも段々小蔦の氣に懸つた。それに二人で話してゐるのを、じろ〳〵と車中の人に見られるのも厭であつた。で、小蔦は、男の馴れ〳〵しい口を利くのとは反對に、わざと他人らしい敬語澤山の言葉を遣つて見せた。ある驛で買つて呉れたミルクキヤラメルにも女は手を觸れなかつた。

小蔦は段々心配になり出して來た。I驛から別の汽車に乘替へる時には、果してそつちについて行つて好いのか。今夜東京に行けるなどと旨いことを言つて、わるいところに伴れて行つて、騙さうと企らんでゐるのではないか。かう思ふと、旅馴れない小蔦はそれからそれへと益々心配になり出して來た。いつそその男と別れて、獨りになりたいなどと思つた。しかし、今更折角の深切を無にする譯にも行かな

りに舟で、喜んで、一緒に伴れて行つて貰ふことを賴んだ。『え、え、今日つきますとも。A驛までは何うかも知れませんが、K驛までは無論行きます、そこから電車がありますから、遲くも十一時までには歸れますとも！』などと其男は言つた。

小蔦はその深切とその人柄なのに引かされて、ついKの山の中から一人旅をして來た話などをして了つた。『それは大變でした。旦那さんは？』などと男は輕く慰めるやうに言つた。切符はその男が一緒にK驛まで買つて來て呉れた。

好いと言ふのを、男は小蔦の信玄袋を持つて呉れて、とても女一人では何うすることの出來ないやうな雜沓を、『私の後に跟いていらつしやい、』と言ひ〳〵、先に立つて押しわけて行つた。改札所を通る時は、眞劍になつて、小蔦の爲めに路を開いて呉れるやうにした。

『早くいらつしやい。早くいらつしやい。』改札所から辛うじて出ると、男は小蔦を引張るやうにして先へ〳〵と驅けて行つた。で、二人は辛うじて腰を掛けるやうな位置を得た。

『何うも難有う御座いました。』

小蔦はかう幾重にも禮を言つた。

小蔦の見たところでは、男は桐生足利の間を往來してゐる機業仲買の番頭らしかつた。少し急な商用があつて是非今夜東京まで行かなければならないと言つてゐた。何處となく打解けた氣安い人で、小蔦

つて來てゐたであらうか。二等、三等の待合室で足らず、場外までにも一杯に乘客が充滿してゐた。誰も彼も皆なR線を利用して一刻も早く東京に行かうといふ人達であつた。小蔦は其處にも思ひがけない艱難の横はつてゐるのを見た。

老いた夫婦連は、『これではとても乘れませんから、一晩泊つて、明日にしませう、』などと言つて構外へと出て行つて了つた。

小蔦はひとりさびしく二等待合の隅の方に腰をかけてゐた。汽車は兎に角、六時に出る。しかしこの汽車がO驛まで行つて、その先の線が連絡するか何うかそれはわからない。工事中だし、それに東北から來る唯一の幹線だから、大抵は大丈夫だが保證することは出來ないといふことであつた。小蔦は何うしようかと思つたが、一日後れゝば、水が増して、また何うなるかわからないと言ふので、兎に角行くことにきめて、切符を賣る時間を待つてゐた。

と、傍にゐた角帶を緊めた三十一二の商人風の男が、

『何方までお出ですか？』

と訊いた。その譯を話すと、『さうですか、それぢや、私と一緒に入らつしやい。私も東京に行くんですから……。しかしR線よりも、これからI驛まで行つて、T線に乘る方が距離も近いし、金も安いし、便利ですから、さうなさい。その方が好い、』と深切に教へて呉れた。一人で途方に暮れてゐた小蔦には、渡

I溫泉から東京へ歸る客で、電車はかなり一杯になつてゐた。それでも午前の乘合馬車に比べたらどれほど好いか知れないと小蔦は思つた。電車は滑らかに、山裾の平野を通つて、濁流の漲つたT川をわたつて、次第にM市へと近づいて行つた。

電車の窓からは、重なり合つた山又山が潤々と指さして見られた。山から渦巻き上る白い雲は、簇々と碧い空に漲りわたつて、その山又山の奥には、青い高い山が微かに覗いて見られた。

『Kは何方になりませう?』

かう小蔦は隣の男に訊いた。

『さうですな、此處からは見えませんけれど、あの雲のある山の奥あたりになるでせう。』

『難有う。』

かう言つた小蔦は、もう一度ぢつとその山の方を見た。其處にひとり殘されてさびしく酒を飲んでゐる男のことが再び小蔦の頭に上つて來た。ぢつと見てゐると、その奥の山には、雲が深くかゝつて、僅かに見えてゐた一角も、やがてすつかり見えなくなつて了つた。『好いわ。今度逢つたら、詫びれば好いわ。』かう思つたあとは、心はすつかり東京の方に向いて、あたりで話してゐる汽車の連絡の話の方に氣を取られて了つた。

M市に着いたのは、午後五時すぎであつた。しかしそこの大きな停車場には何んなに大勢の旅客が集

つてゐるものなどもあつた。ある女は居眠りをして、前に踣りかけてはまた起き返つた。
やがてけたゝましく鳴りひゞいた喇叭の響は、馬車のS町近くやつて來てゐることを人々に知らせた。

S町の電車停留場の前では、小蔦は始めて生返つたやうな心持になつて、涼しい葡萄棚の下の一間で遲い午飯を食つた。此處に來ると、洪水の被害の話が其處でも此處でも話されてゐた。T川はところ〴〵で堤防を破つて、M市の下流三里のところなどは、殊にその慘狀が甚しいといふことであつた。東京の被害もかなりに大きいらしく、山の中で新聞で見た以上に、汽車のとまつてゐるところは多いらしかつた。東京のS川の氾濫なども此近所まで語り傳へられてゐた。

『M市からR線で、東京に歸れるでせうか。』

小蔦は逢ふ人々にかう言つて訊いて見た。しかし誰もその實況を知つてゐるものはなかつた。I溫泉場から下りて來た老夫婦連は、

『私達も、その汽車で行かうと思ふんですけども、何うですかわからないで困つてゐるんです。S町まで行けばわかるつて言つて下りて來たんだけども……。しかし社で聞いて貰つてゐますから、やがてわかるでせう、』などと言つた。小蔦は賴んでM市まで道伴になつて貰ふことにした。『Kから！　まア、ひとりでよく下りてお出なすつた。』老いた品の好いお婆さんは、かう言つて深切に何彼と話した。

目に逢はんぢやつた。K峠あたりはわるい場所だがなァ。』

『ほんまにさ――あそこはえらいとこぢや。』もう一人の方はそれにつれて、ある年ある女がそこで旅客に弄ばれた話などをした。

汗臭い匂ひを載せて、馬車は白い埃の立つ暑い田舍道をガタ〳〵と進んで行つた。涼しい山の嵐氣は此處あたりまではもうやつて來なかつた。日に面した方に張つた白い幔幕はをり〳〵風に飜るが、しかもそれは僅かで、時によると、そこから暑い〳〵日影がさし込んで來た。矢張、川に路は添つてゐるけれど、その川は緩かに靜かに流れて、何處にももう涼しい樹の蔭などもなかつた。日のキラ〳〵照つた長い赤膚の崖などに沿つて馬車は駛つて行つた。

堪らなく臭い女の髮の匂ひが、乘つた時から小蔦の鼻について爲方がなかつたが、それはぢき自分の前に乘つてゐる娘の髮であるといふことが、やがて知れた。娘は眼の緣の赤く爛れた、色の黑い、凸額の、二目とは見られない顏であつた。小蔦は成たけその顏を見ないやうにして、ハンケチで鼻を押へた。しかし、相對して腰をかけてゐては、その顏を見、その臭を嗅がないといふわけに何うしても行かなかつた。これも皆な誰の爲め？　こんな難儀な旅をして、山の中から命がけで出て來たのも誰の爲め？恐ろしい思ひをしたり、暑い思ひをしたり、さびしい思ひをしたりしてやつて來たのも誰の爲め？

車中の人達は暑い日に辟易して、中には細い柱に身を凭らせて、汗を額に、鼾を立てゝいぎたなく眠

して襟から顔のあたりを拭いた。好い香水の匂ひが四邊に漲りわたつた。
『好い匂だ……』
こんなことを誰かゞ言ふと、
『何うしても別嬪なァ、違ふわ。』あたりも憚らずに誰かゞ言つて笑つた。
しかし小蔦はそんなことに頓着してはゐなかつた。今朝、温泉場を出てから、心は全く東京の男の方にのみ向つて靡いて行つてゐた。何んな艱難な旅行を敢てしても、今日は是非とも東京に歸らなければならないと思つてゐた。小蔦は、懐から小さな鏡を出して、遠慮なしに馬車に乗る時に亂した鬢と髱とを丁寧に梳いた。
『姐さん、何處から？』
鬚の男が無遠慮に訊いた。
小蔦は餘程返事を爲まいと思つた。しかしさうしても居られなかつた。
『Kから。』
『今日？』
『いゝえ、昨日。』
『よんべ、Kとまりか、はァ。』考へて、『一人で來さしやつたか。えらいこんぢやつたな。よくえらい

N町に一里といふところで、車夫は急に脚氣が出て思ふやうに走れないと言ひ出した。さう言つて車上の小蔦を振返つて見た車夫の眼はわるく光つてゐた。其處等あたりに、車のないのを豫め知つてゐて、そして女と見て難題を吹きかけたのであつた。車夫は定額の外に猶五十錢の增賃を要求した。小蔦は二言三言爭つて見たが、効がなかつた。小蔦が承知しない間は、車夫はわざとぐづ〳〵と足を引きずるやうにして、梶棒を高く上げて車を曳いた。街道の白い埃はともすると仰向にならうとする小蔦の髮や顏に舞ひ上つた。

『なら、上げますよ。』

小蔦の聲は肝立つて聞えた。

N町に行つた頃は、もう十時をすぎてゐた。町の外れにある馬車は、客がもう一杯で、今しも其處を發たうとしてゐるところであつた。小蔦は其處にゐる總べての人の視線がわるく自分に集るのを見た。

『もう、乘れませんや――午後まで待つだ、』などとある男は言つた。

しかし此馬車で行かなければ、M市の午後の汽車に間に合はず、それに間に合はなければ、もう一夜何處かで泊らなければならないので、小蔦は無理に賴んでその馬車に乘せて貰ふことにした。『別嬪ぢやで詰めてやれや、』などとある鬚の生えた男は笑ひながら言つた。

その男と年老つた婆さんとの間に身動きも出來ないやうに押詰められた小蔦は、ハンケチを袂から出

な形をした岩山が屹として聳えてゐた。
大湯の前には、髪をぐる〳〵巻にした田舍の嬶だの、柄杓を持つた婆さんだの、白縮緬のへこ帶に銀ぐさりを絡ませて得々としてゐる田舍息子だのがぞろ〳〵と歩いてゐた。その前の廣場に晴れやかに朝日がさす頃になつて、昨夜頼んで置いた車が來た。

『N町から先は馬車がありますから。』

かう番頭は教へて呉れた。

つとめて素人づくりにしたつもりだが、それでも艶な小蔦の車上の姿は、到る處の人の眼を惹いた。誰も彼も言ひ合せたやうに振返つて見て行かないものはなかつた。溫泉場を出外れるところでは、前の綺麗な流れで膳や椀鍋を洗つてゐた丸髷の赤い手絡の細君が、ぢつとその後姿の見えなくなるまで見送つてゐた。

種々な人達や種々なシインが小蔦の眼を走馬燈のやうに掠めて行つた。ある農家の軒からは、七歳位の裸の女の兒をつれた娘が出て來た。ある家からは鋤をかついだ肥つた百姓が出て來た。ある家の緣側には、一生東京も知らずに暮したらしい婆さんがせつせと古風な絲車を廻してゐた。ある路傍には、竹藪があつて、その中で大きな水車が凄じい勢ひで廻つてゐた。重なり合つた山は次第にひらけて谷も段々ひろく〳〵なつて行くのを小蔦は見た。

切さうに身を近く寄せて來た。

（本當に、さつきの馬子に、そんな心があつたら、それこそ何んな眼に逢つたかわからない。人一人居ない山の中だし、聲を立てたつて誰も聞いてゐるものはないし――）かう思ふと、さつき勝手で噂してゐたやうに、自分ながら大膽な冒險をしたものだと思はずにはゐられなかつた。馬に乘せられる時にかき抱かれた大きな黑い岩乘な皺の多い腕などを小蔦は思ひ浮べた。化粧箱の中に入れて置いたダイアの指環を、小蔦はあらためて財布の中に藏つて、そしてそれを敷布團の下に置いた。金簪は拔いて、信玄袋の着替の中の中にわからぬやうに深く隱した。

ダイアを盗まれたと思つて。目をさまして、敷布團の下に財布のあるのを確めて、またうと〳〵すると、今度は怒つた客の顏がありありと見えて、それがいつか馬子の顏に變つてゐる。と、行燈が薄くぼんやりとついてゐて、隣で何か物に魘される氣勢がする。谷の瀨の音が雨か何ぞのやうに聞える。雨滴の樋をつたふやうな小さな瀨の音もそれに雜つてきこえてゐる。誰か自分の傍に一緒に寢てゐると思つて、ふと目をさますと、自分はひとりさびしさうにひろい一間に寢てゐるのであつた。

やがて朗らかな朝が來た。昨日は日が暮れてから着いたので、よくわからなかつたけれど、今朝見ると、そこはこんなに深い山の中にあるかと思はれるやうな狹い〳〵谷の間に挾つて村が出來てゐて、谷川は村を右から左へと取卷いて烈しい瀨をつくつて流れて行つてゐた。窓の前には尖つた恐ろしいやう

振放つてて來た情と、離れかけてゐる情との間に小蔦は身を置いてゐた。離れかけた情を追はうとする心と振放つた情を顧みる心とは、深く絡み着いて容易にその念頭を離れなかつた。自分の氣強さが一方で後悔されると共に、一方では行くところまで行かなければ止まないといふ心が熾に燃えてゐるのを小蔦は見た。田舍の溫泉場は夜は賑やかで、細い暗い通りを浴客はぞろ〳〵と通つて、大湯の方へと出かけて行つた。小蔦は其處でも到る處の眼が皆な自分に向つて注がれてゐるのを發見した。內湯の入口で着物を着てゐると、其處に滯在してゐる田舍客は、彼方此方から指さすやうにして此方を覗いた。長い廊下では、人達は皆な眼を睜るやうにして長く小蔦の後姿を見送つた。

『東京の藝者だんべ。』さういふ言葉がふと耳に入つたので、小蔦はそれとなく覗いて見ると、そこは勝手で、大勢の男や女がごた〳〵と膳や椀を其處に並べて蹲踞んでゐた。『フムKからよく一人で下りて來たものだな。あんな綺麗な衆が山の中を通つて來ちや、ひよんな眼に逢はねえとも限らねえが……東京の衆は大膽だなし――』などといふ聲が續いて聞えた。

靜かな一夜ではあつたけれど、旅馴れない小蔦に取つては、種々なことが氣に懸つて爲方がなかつた。隣にゐた紳士風の男は、番頭と小蔦との會話を聞いてゐたと見えて、さつき廊下で逢つた時に、向うから丁寧に挨拶して、『M市へお出ですか。私も明日は行くんですが、』などと馴々しく話しかけた。

『え、さうですな、そこの處はわかりませんが、明日までには、何方か通るでせう、』などと言つて深

る音ばかりがきこえた。ある家の傍を通る時には、夕顔の棚の下に、据風呂が置いておつて、裸形の女が腰巻一つで此方を見てゐるのを見た。夕炊の煙が低く裏の山畑を這つて靡いて行つてゐた。

山と山との谷合に、低く高く十五六戸の人家の屋根が見えて、灯が明るく處々に見え出した時には、小蔦はホッと溜息をついた。それは今夜泊つて行かなければならないK溫泉であつた。やがてそこにある或る大きな旅館の番頭は、馬の上に勞れ果てた色のくつきりと白い綺麗な女を迎へた。

『お一人さまで、へい。お一人さまで。』

かうした女性の一人旅を不思議にするやうな調子で番頭は言つた。小蔦は途中不安であつたにも拘らず、座敷に上る前に、その馬子に種々とやさしい言葉をかけてやつた。帶の間から財布を出して、賃金をやる次手に五十錢銀貨を一枚やると、馬子は丁寧に禮を言つて、馬を牽いてトボ〳〵と薄暮の中に姿を隱した。小蔦の案内された室は、終日添つて來た川に臨んで、水の瀨の音が屋を撼かすやうにきこえた。

小蔦は靜かなさびしい一夜を其處に過した。山の中に置いて來た客のことと、東京にゐる男のことを思ひながら……。宿の番頭の話によると、此處からM市までは十二三里あるが、もう今日通つたやうなひどいところはないといふことであつた。『え、え、もう馬に乘るやうなところは御座いませんとも……』かう言つて詳しく行先の話をして吳れた。

子の肩に凭りかゝる時、小蔦は思はず言つた。

路を破壞した洪水のさまがやがて小蔦の前にあつた。瀬が幾筋となく路を貫いて流れてゐて、其間を粗朶を編んだ橋が無數に架けられてあつた。ある橋は水が二寸ほどその上を越して流れてゐた。ある橋を渡る時には、小蔦は危く駒下駄を迅い流れに取られやうとした。

じろ〳〵と絶えず此方を見る馬子の眼を小蔦はいつも避けるやうにした。ところ〴〵にちらほらと散らばつて見えてゐる人家、をり〳〵出會す山の人達、後には小蔦にはさういふものが唯一の力のやうに思はれるほど心細くなつて來てゐた。夕暮近い影の多い山の空氣も女の胸に染み通るやうに思はれた。カナ〳〵蟬がところ〴〵で鳴いた。

『まだ遠いの？』

かういふ質問を小蔦は既に前から何遍も馬子にした。しかし一度も滿足した答を得ることが出來なかつた。馬子は唯、小蔦の顏ばかり見た。

馬上の小蔦は種々な想像やら空想やらで夥しく心をさいなまれてゐた。考へると自分は何處へ伴れて行かれるのかわからなかつた。其時は……其時は……。小蔦の蒼白い顏は、夕暮の影の濃い山の空氣の中にくつきりと浮き出して見えた。

高い山の陰に日が落ちてから、あたりは急に薄暗くなつて行つた。靜かな山の中には水の凄じく流れ

『ドウ、ドウ。』

などと馬子はをり／＼聲をかけた。

谷の縁を通る時には、小蔦は殆ど生きた空がないやうな氣がした。下には深い／＼谷川が凄じい瀬を立てゝ流れてゐた。一歩躓けば、馬も人も毬のやうに其處に墜ちて了ふに相違なかつた。墜ちれば、もうお了ひだ。かう思ふと、いつそ馬から下りて歩かうかしらなどと小蔦は思つた。

一つの崖を廻ると、一つの谷が現はれて來るといふやうなところを通つて行つてゐた。怖しい山がそれからそれへと續いて、何處まで行つたち、この山が出られるのだらうと思ふと、小蔦は堪らなく心細くなつた。その間にも、山の中に振放つて置いて來た客の顏が見えたり、東京で怒つてゐる男の顏が見えたり、貴公子の顏が眼の前にちらついて見えたりした。明るい東京の夜の灯の中の賑かな街に一刻も早く行き着いて、今の難儀を早く話の種にしたいと思つたり、明日M市に行つても、汽車が旨く連絡するか何うかと思つて心配したりした。崖の路の崩れたところに來た時に馬子は言つた。

『姐さ、危ぶねえだで、ちよつくらのとこ、歩いてくれさい。』

『下りるのかえ？』

『はア。』

小蔦は再びあらくれ男の腕に抱へられて、馬から下りなければならなかつた。『おう、あぶない！』馬

『しつかりやれやァ。』

『御機嫌よう。』

あとのは、其處まで乘せて來た車夫が言つた。

馬は靜かに歩き出した。鈴の音がチャラ〳〵と鳴つた。山には白い雲がかゝつて、瀨が凄じい音をして流れた。

『好い姐さ乘せたナア。何處へ行くだア。Kへか。フム。』

到るところでかういふ聲を馬子はかけられた。馬子はトボ〳〵と歩いた。路は廣いところを通つたり、藪の傍を通つたり、橋の上を渡つて行つたりしてゐた。近所に見たことのない色の白い華奢なすらッとした小蔦の姿は、くつきりと午後の明るい日影の中に繪のやうに見えてゐた。

すれ違つた村の娘は、世にもめづらしい綺麗な人を見たと言はぬばかりに、何邊も振返つては見て行つた。

斜にさし添ふ夕日が暑いので、小蔦は何うかして蝙蝠傘をさゝうと思つたけれど、鞍につかまつた右の手を離すことが出來ないので、幾度か企てゝそして幾度かよした。さぞ、色が黑くなるだらう。かう思つて見ても何うすることも出來なかつた。小蔦は唯一生懸命に鞍にかじりつくやうにしてゐた。

と行つた。何か笑ふ聲がした。

『一生のかはうぢや。』

『只でも好いやな。』

『貴樣、駄賃、みんな此方へよこせ。』

などといふ聲がつゞいてした。

『ぢや、參りやすべ。』

かう言はれて、小蔦は茶代と勘定とを多分に置いて、Kまでの賃金を堅くきめて、荷物をその男に渡して、其處に出かけて行つて見たが、何うして馬に乘つて好いかわからないので、唯まご〳〵してゐた。馬子は信玄袋を鞍の後のところにつけてゐた。

『姐ィ乘せてやれや。』かういふ聲が何處かでしたと思ふと、やがてあらくれ男が二三人出て來て、小蔦は忽ち荷物のやうに、橫にかき抱かれて、時の間に鞍の上へと乘せられて了つた。小蔦の顏は眞赤になつてゐた。

『此處へしつかりとつかまつてゐれや、大丈夫だ。』

此處の亭主らしい色の黑い男は、こんなことを言つて鞍の前の處をしつかり女の手に握らせた。

『ぢや、行くべ。』

きたくなけりや、斷れば好いぢやないか、』と言つて逹つて留めた。それを根に持つてか、山の中に來て此方から手紙を二度出しても、一度も男は返事を吳れなかつた。男は怒つてゐるかも知れなかつた。

午後三時すぎの日影は、半ば茶店の中までさし込んで來てゐた。小蔦の腰をかけたところの向うには、山から引いた竹の樋があつて、其處から綺麗な水がちよろ〳〵と桶の中に流れ落ちてゐた。樹の葉と樹の葉との間には、日影がチラ〳〵と明るく動いた。小蔦は上布の單衣に、黑繻子と絹の腹合せの帶をしめて、指にダイアを二つはめてゐたが、ふと氣がついたといふやうに、ソツとそれを指から外して、金の指環一つだけにして、信玄袋の中の化粧箱の中にソツと藏つた。

『大丈夫かねえ、おかみさん。』

茶をさして來た主婦を唯一の力のやうにして訊ねると、

『大丈夫でがすとも……それに、Kまで三里だァで、一つ走りだ。』

『馬子さんは？　大丈夫ですかねえ？』

『大丈夫だとも……心配しねえでも。堅い男だで。』

暫くしてゐる中に、其處に馬がやつて來て高く嘶いた。小蔦は鳶色の汚い一疋の瘠馬が塵埃に白く塗れたたるんだ腹掛をしてゐるのを見た。古びた鞍の上には汚れた袋見たいなものが二つ載せられてあつた。それを曳いて來た男は、じろ〳〵此方の方を見てゐたが、挨拶にも來ずに、すぐ大勢男のゐる方へ

蔦に勸めた。

小蔦はあらくれ男が傍でずる〳〵心太を啜つてゐるのなどを見た。誰も彼も小蔦の方を見ては、いろいろなことを言つて評判してゐた。しかしそれが何を言つてゐるのか小蔦にはよくわからなかつた。繩を帶にして山刀をさした男は、じろ〳〵と絕えず此方を見た。

小蔦は殆ど思案に餘つた。芝居などで見た光景がありありと小蔦の眼を掠めて行つたりした。わる者に誘拐されて行く若い女——自分は何だかその若い女のやうに思はれた。と、恐怖の念が凄じく小蔦の心を襲つて來た。いつそあとへ戻らうか……

『さうするか、姐ィ。』

『さうする方が好かんべ。』

山の人達は口々に言つた。

茶店の主婦は、『なァに、大丈夫でがんすよ。心配なんかねえよ。この先が、ちつとんべいわりいだけなんだから。』

『大丈夫かねえ。』

『大丈夫でがんすとも……』

で、小蔦は漸く決心して、馬を賴んで貰ふことにした。客と湯治に來る話をした時、東京の男は、『行

暴風雨の後の空は美しく碧く晴れ渡つてゐた。そしてその空を劃つて、見馴れない怖しい形をした山が幾つとなく重り合つて聳えてゐた。下には赤ちやけた濁流を漲らした大きな谷が凄じく流れて、瀬の音があたりに響き渡つて聞えた。『いつそ、あとへ戻らうかしら。』かう思つて見たが、小蔦は何うしてもその氣にはなれなかつた。一歩でも東京の方へ行きたかつた。朝夕念頭を離れずにゐる男の顔が、更に一層の鮮かさを持つてかの女に迫つてゐた。それに、今朝發つた湯治場からは、もう七八里も出て來てゐた。

『姐イ、馬がよかんべ。』

茶店の爺は傍に來て言つたが、『乘つたことがねえ？　さうだんべ？　無かんべな？　こんな綺麗な姐イぢやなァ。』

『でも、馬より他なかんべ。』

『でなけりや、あとへ引かへすか……』

こんなことを其處等にゐた山の人達は繰返した。其處まで車に乘せて來た男は、『大丈夫ですから馬でいらつしやい。こゝからKまで三里ありますが、まだ日が高いから、そこまでは何んなにゆつくり行つても樂に行けますから、そこで一晩泊つて、明日SからM市の方へ行けば、其處はもう好い道だァで、…………なァに、馬だつて、鞍さへ置いてありや、危ねえことなんかありやしねえから。』かう言つて深切に小

た雨は、深く樓上樓下を包んで、雲と霧とが常に流るゝやうに室の中まで入つて來た。小蔦は何故物好きにもこんなところへ伴れて來て貰つたかと何遍後悔したか知れなかつた。

『また、今日も雨ねえ、くさ〳〵するわねえ。』小蔦は欄干のところに行つて立つて、晴れようともしない深い灰色の雲霧の往つたり來たりするのを眺めた。

續いて洪水の報が到る處から聞えた。自分等の通つて來た道は、三ヶ所も鐵橋が落ちて、とても十日や十五日では開通する見込がないといふ噂が聞えた時には、小蔦はがつかりして了つた。小蔦はさも絶望した人のやうに深い〳〵溜息を吐いた。湯に入りに行く氣にもなれなかつた。その傍では、男は、却つて暢氣さうに、『でも仕方がないさ。』緩くり遊んで行くさといふ調子で、ひとりで朝から酒などを飮んでゐた。

昨夜湯の中で、山越えをしてI村の方へ出て、M市から別な線の汽車で行けば、東京に歸れないことはないといふことを聞いた時には、小蔦は雀躍した。小蔦は今朝男と殆ど喧嘩せぬばかりにして、無理やりに其處から發つて來たことを頭に繰返した。『ようご座んすよ、もう貴方のお世話になんかならなくつても。』こんなことまでも小蔦は言つて發つて來た。

『何うしたら好いだらう。』

小蔦は茶屋の店に腰を掛けながら思案に餘つて溜息をついた。

歸京

これから先きは路は壞れてゐて、何うしても行かれないといふ。爲方がないので、小蔦は車を下りて、路傍の小さな汚ない茶店に腰をかけて休んだ。小蔦はほと〳〵困却して了つた。いつそ引返さうかしらとも思へば、男の留めるのを無理に振り切るやうにして、今朝ひとりで發つて來た自分の無謀も後悔された。しかし、何うしても歸らなければならないと小蔦は思つた。一週間の豫定で、ある人に伴れられて、この山の中の湯治場に來たが、雨と洪水とで一週間が十日になり、十日が十二日になつてもその山の中から出ることが出來なかつた。東京には種々な人達がかの女を待つてゐた。ある貴公子もあれば、ある實業家の若旦那もあつた。中でも內所で逢つてゐたある若い男のことは、朝夕小蔦の頭を離れなかつた。赤く濁つた熱い湯、プンと玉子の腐つたやうな厭な匂ひ、赤くなつた手拭を下げて、室に戾つて來ると、中年を過ぎた半白の反齒の男は、自分の持物だと言はぬばかりの顏をして、いつも厭な笑顏を見せてかの女を迎へた。それも天氣でもあればまだ慰めることも出來るのに、來て三日目から降り出し

ひ屈してはゐられなかつた。イヤだとか、つまらないとか言つてゐては、自分が滅びて行くより他仕方がなかつた。あれかこれかと思ひ迷つた境からかの女は一歩先に踏み出して行かなければならなかつた。兩親も、妹も、弟も、旅にゐる男も、自分で何うかして行きさへすれば、何の文句も起らず、見苦しい親子の口爭ひも起らないのであつた。娘は何うしても一月か二月の中に、あの若いおとなしい公達をつかまへなければならないと思つた。娘は自分の肌や、眉や、髮や、姿や、さういふものがまだあらゆる異性に對して強い魅力を持つてゐるといふことを信ずる時のみ新しい希望の波の溢れて漲り渡つて來るのを覺えた。かの女は其處に新しいポイントを發見した。そしてそれを確實につかむことを心がけた。

『あゝ、これで淸々した。』かう言つて娘は緣側のところに來て坐つた。狹い庭の上には、星が透明に美しく金屬のやうに輝いてゐた。男の書間持つて來た菓子がまた其處にひろげられて、茶などが淹れられた。時計が十二時を打つ時分には、それでもあたりがしんとした。座敷には蚊帳が吊られ、三疊には朝が早いからと言つて、老婢は先に御免を蒙つて早くも微かな鼾を立てゝゐた。二階にはもうちやんと支度が出來て、新しい匂ひのする蚊帳が涼しい夜風に吹かれてゐた。やがて其處に上つて來た二人は、夜涼を貪るといふやうに、暫し窓の簾の前のところに立つてゐたが、ふと、男は向うの家の座敷に、はつきりと繪か何ぞのやうに、枕の二つ並んだ空しい床が青い蚊帳の中に透いて見えてゐるのに眼をつけた。

『いつでもあゝなのよ。』

『さうかえ？』

『あんまり覗くとわかつてよ、およしなさいよ。』

『大丈夫よ。』

こんなことを言つて、二人は笑つた。窓のところに置いてある合歡の小さな鉢は斜に微かに灯の光を受けて、夜目にも著るくそれと見えた。花は赤く、葉はぴつたりと重なり合つてゐた。

娘の心はある計畫に向つて絕えず步を進めて行つてゐた。あるところまで發展して、自分で自分の生活を築き上げるより他は何うすることも出來ないと思つた娘は、ぐづ〳〵して、寢たり起きたりして思

『さうでした。』

『今日はちつとは賑やかでしたかえ？』

『さうですね。ちつと動きましたね。』

娘は機嫌好さゝうに、若い車夫とこんな話をした。

格子戶を明けて入ると、世話になつてゐる人は、母親と緣先に涼みながら、何か頻りに話してゐた。軒には岐阜提灯が下つて、團扇などが輕く動いてゐた。娘は、『あゝ、あゝ、えらいお座敷につかまつちやつた。お客七人に私一人ぢやないの？　あとではそれでも秀子さんを賴んでかけて貰つたけれど、隨分ひどい目に逢つたわ。』

『お客は男ばかり？』

『いゝえ、よし町あたりの藝者が一人に、女中がついて來てましたけどもね。その女中がまた氣がきかないのよ。でもね、三圓は貰つて來ましたけれどもね隨分困つたわ……』母親に向つては、『奧では、それは込んでるるのよ。お客が一杯。何んな室でも明いてゐる室はない位。それなのに、土地の藝者は、私と、秀子さんと他に妻吉さんが入つたきりなんですもの。あとから正子さんが行つたけれど……。ひどいのね。』

こんなことを言ひながら、娘はお座敷着を中形に着替へたり、手拭を絞つて貰つて顏を拭いたりした。

『さう、今下りて行く。』

かう言つて下りて行つたが、すぐ上つて來て、『ちよつと行つて來ますわ。奥だから、ぢきあきますからね。此頃のやうに不景氣ぢや、一つだつて無駄には出來ませんからね。此頃ではお茶を挽くと、それやイヤな氣がするのよ。一つでもしないと、何だか體が滅入つて行くやうな氣がするの。ね、少しおよつていらつしやい。』

で、娘は男のことなどには頓着せずに、急いで出かける支度をした。娘は、その奥のお座敷のお客の誰であるかをよく知つてゐた。それはその方面から幸運を引き出さうとしてゐる大切な若いおとなしい品の好い公達に相違なかつた。

娘がその奥のお茶屋の門を出たのは、其夜の十時すぎであつた。五時間ほど娘は其處にゐた。車の上で涼しい風に吹かれながら歸つて來る娘の胸には、溢るゝばかりの期待と喜悅と希望とが漲つてゐた。ある計畫が整然として娘の腹の中に出來かゝつて來てゐた。『何も心配することはないわ。旅から歸つて來る時分までには、屹度物にして見せる。種が大きいから好い。』こんなことを娘は絕えず考へてゐた。川にはモーターの音がけたゝましく聞えて、軒に岐阜提灯を綺麗に下げた舟の灯が明るく水に映つて動いて行くのが見えた。涼しい風は絕えず川の方から吹いて來た。

『歸る時、入つて來たのは、正子さんね。』

の男の話が最近にすつかりばれて來てから其男は以前のやうに大氣なところを見せなくなつた。もとは、財布に金がありさへすると、五十や百は何とも思はずに出して異れたけれども、今ではそれを强ひて望む譯に行かないやうな位置に女は身を置いてゐた。『仕方がないわ。困れば、もとのやうに發展するわよ。もとは賣れたんですからね、これでも……。一月に二百や三百はいつでもかせいだんですから。』娘はこんなことを言つて男の顏を見て、『唯ね、その時分から見ると、體が弱くなつてゐますし、それに、お茶屋へ行つて、しんきに發展するとも言はれないから、それがちよつと困るのよ。矢張、あれでなくつちや駄目ね。おきまりの祝儀ばかり取つてるやうでは駄目ね。何しろ、こつちの量見の持ちやうで、此方の意氣込がちがひますからね。何でも、そのお客を物にしようと言ふのと、このお客の座敷に二時間なり三時間なりつとめさへすればそれで歸れるといふのでは、何うしたつて違ひますからね。』

『さうだらうね。』

女の言葉の裏をわざと讀んでやらないやうにして、男は言つた。

娘は溜息を吐いた。

下で、『姉さん』と呼ぶ妹の聲がした。

『何ァに！』

『奥からお座敷！』

何でも、平氣で書くやうな人なんですから、あれが稼業なんですから。』

『さうかね。』

かう言つて笑つて、『旅からも、たよりがあるかね。』

『ちつともないわ。』

娘は笑つて打消すやうに言つた。

娘は自分の方からよしたといふ人に此間も逢つたことを思ひ出してゐた。ある人をある時はかけにし、ある人をある時は表にするやうな境遇に、長い間娘は身を置いて來たことを考へた。此間、其人に逢つた時、娘は自分の今の境遇を話して、つとめて同情をひくやうにして置いた。何ぞと言ふ時には、其方の方からも、いくらかは援助を得ることが出來ると娘は信じてゐた。

世話になつてゐる人は其日は機嫌よく酒を飲んで、娘に三味線を彈かせなどした。その人は清元が上手で、醉ふと、いつも好い聲で唄つた。ある大きな店の番頭をしてゐるやうな人であつた。來る時には母親が好きだと言ふので、いつも新橋の青柳の金鍔を土産に持つて來た。『あゝ、また、私のすきなもの』などと言つて、母親はボール箱の蓋を明けた。

其日も旅にゐる男の話だの、榮がゐなくなつて、ひとりで稼がなければならなくなつたことだの、ひまでお茶ばかり挽いてゐて、これではとても稼業にならない話だのを娘は持出してその男に話した。旅

かえ？　お見せな、』などと言つて、押入の中につくねて置いた其日の新聞をさがさせて、平氣な顏をして、それを讀んで、『此處に書いてある人は何うしたえ？　逢ふかえ？　時には？』
『ちつともお目にかゝらないわ。』
『すつかり切れちやつたのかえ？』
『だつて……あの人、怖いやうな人よ。何でもよく見拔く人よ。ちつとも、まご〳〵してゐられないやうな人ですもの。』
『でも、一時は大分、此方からも打ち込んでゐたぢやないか。』
『だつて、あの人とは五分々々ですよ。向うだつて、隨分お寶を使つたんですもの。』
『何方が先によしたんだえ？』
『それは私よ。』
かう言つて娘は笑つた。
『うそだらう、向うからよされたんだらう。』
『本當よ、私よ。私が無心を言つてやつてから、何とも言つて來ないわ。』
『向うでも、それぢや、そんなに深くも思つてゐなかつたんだね？』
傍にゐた母親は、『さうでもないやうでしたけれど、あゝいふ人はわかりませんね。自分のことでも、

あれに出されるやうになれば、いゝ廣告でさ、』などと言つて却つてそれを持揚げるやうにしたけれども、娘は矢張あまり好い氣持はしなかつた。夕方に、ある茶屋からかゝつて行つて見ると、入るより早く、『書かれましたね。はア、かういふ姐さんですか、』などとお客は言つた。お茶屋の女中なども何の彼のとひやかした。ある女將は、『雪ちやんなんか、ちつとやそつと浮氣をしたつて、後循がたんとあるから安心だよ、』などと言つた。

『でも、不思議なもんね。新聞に書かれたので、今日はお座敷を三つした。』其夜おそく娘はこんなことを言つて歸つて來た。

一日二日、娘は浮かぬ顏をしてゐるのを母親は見た。母親にはその原因はちやんとわかつてゐた。内内母親にもそれが心配にならぬでもなかつた。世話になつてゐる人は新聞を見たに違ひない。しかし、見たからと言つて、そんなことを氣にするやうな人ではないが、さうかと言つて、そこからまた何んな空氣が醸されて行くかも知れなかつた。默つて詰らなさうにしよげてゐる娘のさまを見ると、母親はいつものやうに、『だつて、仕方がないよ。身から出た錆ぢやないか、』と言ふにも忍びないやうな心持がした。

しかし母親と娘とが氣にかけたほどのことはなかつた。ある日、その世話になつてゐる人はやつて來た。初めは——入つて來た時は、その顏がすぐ覗かれるやうな氣が親子ともしたけれども、いつものやうに矢張機嫌の好いのを母親も娘も妹も見た。『さうだつてね、却つて廣告になつて好いさ。新聞がある

『きつと、あの人が話したのよ。それにきまつてゐるんだから……。あそこには、此の新聞の記者がよく來るんだから。……取消をやらうかしら？』

『そんなことをしたつて仕方がないよ。』

妹はそつと取つて、讀んで、又そつとそれを下に置いた。

『何うせ好加減だから、構はないけども、稼業にさはるから困るわ。何うせ、新聞社では面白半分に書くんだらうけども……』

『本當だよ。』

しかし、母親にしても、娘にしても、それを何うすることも出來なかつた。娘はその記事の影響して行く種々の人達のことを考へた。そこに書かれてある人達は、それほど氣にかけないでも好いけれども、書かれてない人達で、この記事を讀んだために、思ひもかけない悪い結果を娘の身の上に齎らして來るものがないとは限らなかつた。ある大きな幸運が鼻の先に垂下つてゐたのに、そのため急に何處かに行つて了ふかも知れなければ、着々と計畫して行つてあることが、そのために向うから壞れて、男が旅から歸つて來るまでの準備がすつかり駄目になつて了ふかも知れなかつた。娘は中でも此頃あるお茶屋に來てゐる髮を綺麗にわけたおとなしい身分のある公達の眼にその記事が觸れないことを切に望んだ。

その日は娘は一日詰らなさうな顏をして暮した。何處に行つて見る氣もしなかつた。呉服屋は、『でも、

つた。しかし、そんなことは出來なかつた。

娘は默つて坐つてゐた。

わざとさういふ風に書いたのか何うか知らないが、昔のことゝ今のことゝが一所になつて出てゐるのを娘は見た。正面にゐる人を側面にしたり、側面にゐる人を正面にしたりしてゐた。しかし、そんなことは何うでも好いとして、これが出たために、これが世間に知られたために、直接に損害を受ける方面が一番烈しく娘の胸をついて來た。『確かにさうだ。さうに違ひない。あの姐さんが話して書かせたに相違ない。言つてやらなくつちやならない、』などと思つて下唇を咬んだ。

母親が新聞を手に取つた時、娘は言つた。『母さん、書かれちやつた！』

『何を。』

『私のことを。』

『何處に？』

『其處に――』

母親は手早く新聞をひろげて、娘の指さす條を見た。『困るねえ――これぢや怒るよ。』

『だつて仕方がない。』

『困るねえ。』

のもそれと察しられた。女の手は男の胸のあたりを輕く打つた。男も打つ眞似をした。

おなかの大きい妹が、その次の間に落附いて、隣の間の歡樂をも知らないやうな顏をして、メリンスか何かの單衣の袖を縫つてゐる形が娘には殊にある强い性慾的の感じを與へた。妹はをり〳〵針の手をとどめては苦しさうに長大息をついた。壞れかけた大きな丸髷の下には、やつれた影の多いさびしい顏が浮き出すやうに見えてゐた。

『あゝ、あゝ。』

思はず溜息をついて、娘はぐつたりとした。旅にゐる男のことや、世話になつてゐる人のことや、其處此處のお茶屋で逢つてゐる客のことなどが際限なく思ひ起された。娘はまた頭を枕につけた。

『あゝ、あゝ。』語らなさうにして再び溜息をついた娘の眼の前には、薄紅い美しい合歡の花の鉢が置いてあつた。娘は隣近所に通つて來る男や旦那を種々に想像して見た。娘はまたも溜息を吐いた。

ある朝、何氣なく新聞を見てゐた娘は、ふと其處に自分の名の出てゐるのを見た。娘は、引込まれるやうにして、その記事を讀んで行つた。始めは、赫となつた。中ごろは腹立たしいやうな氣分になつた。終には冷めたい水を脊中から浴せられたやうな氣がした。娘はそのまゝ新聞を傍に置いた。成らうことなら、この新聞を母親や父親や妹に見せたくないと思つた。破つてこつそりと何處かに捨てゝ了ひたか

下谷に出てゐたといふ妓の一家族が引越して來た。娘の家に、今、旅に行つてゐる男が出入る頃には、其處の妹だの下婢だのがめづらしがつて、よく上り端のところからすき見をするので、妹や母親は怒つて、あてつけるやうなことをわざと聲高く言つたりした。姉といふのは、三十を出たか出ぬかと思はれる位の薄手の女で、この二三軒先きの三助といふ藝者の家から看板借で出てゐるのではあるが、お座敷などは滅多にかゝつて來ず、一日ぐづ〳〵と暮らしてゐるやうな生活であつた。そこに毎日女よりは三つ四つ下位のちよつと男らしい苦み走つた好い男が出入したが、何うかすると、女と其男と戯れてゐるのを此方の二階から見るやうなことはこれまでにも度々あつた。夜は、蚊帳の中に枕が二つ並べて置いてあるのが明るく電燈の光に透いて見えた。

ふと、見ると、此方の六疊には、七月ぐらゐのおなかの大きい妹が裁縫をしてゐて、そこと奥の座敷との中の襖は閉めてあるらしく、座敷には、男が浴衣姿で仰向けに兩方の膝を持ち上げて寢轉んでゐて、その此方に、女が矢張だらしなく並んで寢てゐるのが半分ほど見えた。女の顔は襖の陰になつて見えないが、男の鬚の生えた顔ははつきりとよく此方から見られた。男の手と女の手とは絡んでは離れ、離れては絡んだ。

男は體を揉むやうにしたりした。

何か甘い物語に耽つてゐるといふことはすぐわかつた。女の心が漲るやうに男に注がれて行つてゐる

『これは、山には澤山あるなァ。日中は離れてゐて、夜になると一緒になるつてな、男と女のやうだなんて、よく田舍では言ふだよ。』田舍育ちの老婢はこんなことを言つて笑つた。

『餘程したんだらう？』

『ナァに……』

『隱してゐるんだよ。二圓ぢや買へないかもしれないよ。』

『ナァに……』

『父さん、本當にいくら？』

『一圓出ない……』

『うそ、うそ。』

『本當ですよ。』父親の笑顏はその言葉の好加減なのをあらはしてゐた。

父親はその小さな鉢を身も離さないやうにして愛玩した。二階に持つて行つたり、床の間に置いて見たり、緣側に出して水を灌けてやつたりした。時には、二階の窓の盆石の間に置いた。

ある日、娘はいつものやうに思出して二階の窓のところに坐つてゐた。と、面白さうに笑ふ聲がふと耳に入つた。で娘は何氣なく體を起して、向うを見下ろした。そこからは、簾を通して、前の平家の並んだ三間が一目に見わたされた。そこの家は去年の秋ごろから久しく明いてゐたのであつたが、この春

『えぢやないわ。隱したつて駄目よ。鰻かえ？　それともお鮨？』

『アハ、ハ、ハ。』

と父親は大きく笑つた。

『たんと罰金を出させておやりよ。あれほど言つたんだから。』

母親の言ふ跡について、父親は、また『アハ、ハハ』と崩れるやうに笑つた。

『でも好い花ね。』

『好いとも……。あんな小さくつて、あれだけ花を持つのは滅多にありやしない。』かう言つたが、父親はすぐ二階に上つて行つて、得意さうにそれを持つて來て、そのまゝ緣側に置いた。

『何うも、父さん、二階に上つて來て、何かゴソ〳〵やつてるから、變だと思つたのよ。さうしたら、ちやんと隅つこの方に、これが置いてあるぢやないか。』

妹や其處に見に來た老婢に話してきかせるやうに娘が言ふと、父親はまた笑つて、

『ちよつと、あるところに寄つて見ると、これがあるから、もう欲しくつて仕方がないから、金がなかつたけれど、手金を置いて持つて來ちやつた。……この花が好い。』

『本當に綺麗ねえ。』

妹も仕事の手をとめて見てゐた。

『道理で、歸るとすぐ二階にあがると思つた。』
『でも、綺麗な花ねえ。』
『合歡なんかしやうがないよ、お前。ぢき枯らして了ふんだから。これでも、餘程出したんだよ。あの爺が本當に、もう決して買はないなんて言つて置いて、そんなお金があるんなら、浴衣でも買へば好いのに……』
『でも、ちよつと綺麗だわ。』娘は母親の言葉には頓着せずに、手に取つて見て『やさしいしほらしい花ね。それに葉が面白いわねえ、日中はひらいて、夜になると、一緒になるんでせう。面白いわねえ。田舍なんかに行くと、川の緣なんかによく咲いてゐるのよ。』
『でも、この位で、かう花を持つてゐるのは少いよ。餘程したんだよ、あの爺――』
二人はやがて下に下りて行つた。
娘は、
『父さん、罰金、罰金！』
『え。』
『何をおごつて吳れるの？』
『え。』

ある日、その晝寢からさめて、何氣なしに、裏の窓のところに行つて見た娘は、盆栽やら石やら水盤やらが並べられてある椽の下の隅のところに、小さな白い鉢に合歡の花の薄紅く美しく眼もさめるやうに咲いてゐるのを發見した。

『あ、お父さんがまた買つて來た。さつき上つて來て、何かゴソ〳〵してゐると思つたのは、これだよ。』かう思つた娘は、ひとり微笑まずには居られなかつた。娘は引入れられるやうにして、その可愛い美しい紅い花に見入つた。

『母さん、ちよつと。』

娘は二階から呼んだ。

母親が上つて來た時には、娘はその小さな鉢を隅の方から水盤の方へと持ち出して見てゐた。

『御覽な、母さん。綺麗ね。』

『何だえ？』

『合歡の花つて言ふんでせう？』

母親はわるい眼を押附けるやうにして見たが、『あゝ合歡だ。』かう言つたが、『何うしたんだえ？　また買つたのかえ？』

『今、買つて來たのよ。今、ゴソ〳〵つて置いて行つたのよ……』

夏の中頃に來る颱風は、もうそろ〳〵やつて來てゐた。空は晴れてゐながら、いやな强い風が吹いて、白い雲が湧き立つやうにかゝつては晴れて行つた。時には、驟雨が凄じく軒を掠めて行つた。

『また、水が出やしないかねえ。』

と、母親は眉を蹙めた。

『さう言へば、母さん、三味線がすつかり駄目よ。新しいのだけでも直して置かないと、一つしかないんだからね。本當に、南風に逢つちやたまらない。』

『本當だよ。』

『何うか工夫がないもんかね。』

『南風の當らないやうなところに置くより他仕方がないよ。』

『本當に困つちやう。』

娘は習ひかけた一中節も面倒臭いといふやうに、一日おきにやつて來る師匠を門口から返した。『何うも、體中がだるくつて仕方がないんですよ。足は丸でぬけるやうなの。脚氣にでもなつたんぢやないかしらん、』などと言つて、朝からごろ〳〵と寢そべつた。時には、二階に上つて、長い間、下りて來ないので、母親が行つて見ると、風通しの好い室の眞中に、蓙蓙を敷いて、すや〳〵と心持好ささうに寢てゐた。

『お向う？　めづらしいわねえ。何處からかゝつて來たんだらう？』
『花村か何處かよ。』
『さういふところでも、何處でも行くんだからね。』
『お前さんは、贅澤なんだよ、一體。』
かう傍から母親が言ふと、
『さうね。えりごのみなんかしてゐられないわねえ。こんなに不景氣では——。昨夜なんか、奥が一杯になつてゐながら、土地の藝者は二人つきり入つてゐないんだからね。』
『お隣でも、これで三日お茶を挽くよ。』
『そんなことはないよ。昨夜もおそく歸つて來たぢやないか。』
『あれは、お座敷ぢやないんだよ。あの男と何處かへ行つたんだよ。』
『さう——。照ちやんなんか暢氣ね。』
『あんまり暢氣でもないよ。此間のやうに、夜中に喧嘩なんかしちや——』
『でも、思ふ通りにする氣なんだから好いわ。それに、照ちやんなんか、一人だから好いわ。何をしても、誰も喧しく言ふものがないから——』
『すぐあゝだ、』と言はうとしたが、母親は默つて了つた。

『お前、お湯に行くかえ？』

『もう、そんな時間？』

『あゝもう五時すぎだよ。何なら行水も沸いてるよ。』

『行水ぢや綺麗にならないから、お湯に行くわ、私。』

暫くしてから、手拭と石鹼を持つて近所の湯に出かけて行く娘の姿が見えた。

お座敷が二日も三日續いてかゝらないやうなことが時にはあつた。さういふ時には、娘は一層懊惱した。『あんなにお茶ばかり挽いてるるんぢや、下宿代も出やしない。向うで、住替へに出たい氣なら、今度は無理にとめない方が好いよ。』かう言つて、榮を出してやつて了つたけれど、今度は自分一人がかせぎ人で、自分が休んでお茶を挽いてゐては、一文だつて入つて來やしないと思ふと、お座敷がかゝつて來ないといふことが一層深く氣に懸つた。榮がゐれば、三日に一度出て行つても、二人でかせいでゐるといふ心丈夫なところが何處かにあつたけれど、今ではそれがすつかりなくなつて了つた。『本當に、ひまね。丸でお話にならないわね。檢番に行つて見てお出でよ。』姉はかう言つて、妹を見せにやつたりなどした。

切火の音がすると、『何處だえ？　今のは？』

『お向うよ。』

『矢張、苦勞してるんだ。』
かう思つた母親は何となく可哀相になつて來た。
ふと、恐ろしい夢か何ぞに魘はれたやうに、無意味な聲を立てゝ手足を動かした。が急に枕から頭を擡げた娘は、ぱつちりと大きな赤い眼を明いて、其處等に怖しいものがゐやしないかといふやうに四邊を見廻して、『あゝ怖い夢を見ちやつた。何か言つて？』
『何にも言はないけれど、うなされてゐたよ。』
『さう！』起き返つて、亂れた鬢を櫛でかき上げながら、『今、本當に、怖い夢を見ちやつた。追つかけられて、つかまへられて、殺されるところなのよ。あゝ怖かつた！』
『誰に追つかけられたんだえ？』
『それが不思議ね。吉井のやうでもあるし、小林のやうでもあるのよ。怖い顏つてなかつた。短刀をかう持つてね。もう少しで斬られるこころ。』
『道理で、いやな聲をすると思つた。』
『母さん、さつきから其處にゐたの？』
『あゝ。』
娘は考へるやうにして、『あゝ厭だ。いやな夢を見ちやつたものねえ。』

微温い水道の水は、一時間も經たない中にすぐ湯になつた。と、父親はそれを盥に汲んで、ゆつくり行水をつかつてから、腰まき一つになつて、『行水が沸いたよ。お前、つかはないかえ。』こんなことを言つて妹娘の坐つてゐる前のところに來て、緣側に腰をかけてから、盆栽などを眺めた。

『父さん、行水に入つて好のかえ？』

かう母親が言ふと、『好いとも……よく沸いてゐらア。入るが好いや、』などと父親は機嫌よく言つた。

母親の肥つた體は、長い間簾越しに行水場に見えてゐた。妹娘の體も十分に發達して、乳などはもう大きくなつてゐた。『本當に行水はさつぱりして好い。』淸々しい好い心持らしい顔をして、妹は其處から出て來て、老婢と一緒になつて緣側を拭いたが、姉のぐつすり寢込んでゐる方を見て、『姉さんよく寢てるわねえ。』

『まア、そつと寢かしてお置きよ。』

『えゝ。』

かう言つて妹は向うの方へ行つた。

母親は長火鉢のところに坐つて、細長い煙管に煙草をつめながら、姉娘のすや〳〵寢てゐる顔に凝と見入つた。さびしい衰へた表情が名殘なくその寢顔に表はれてゐるのを母親は見た。白粉をも附けない素顔は、いやに黑く煤けたやうに見えた。

返された。

いつとなく眠くなつたと見えて、娘は目をふさいだ。やがて妹は姉の呼吸の秩序正しい微かなリズムをなして行つてゐるのを聞いた。

今まで狹い庭のこまぐした鉢物から棚の上のしたみに赫と照りわたつてゐた暑い日は、やうやくかげつて、さつき父親が尻端折をして、バケツに水を汲んで、一二杯そこにぶちまけて行つた餘滴は、未だに鉢物の葉の上に殘つて、夕立にでも逢つたやうに、濃いかげつた空氣の中に涼しく見えてゐた。隣の窓にかけた簾の向うには、風鈴の微かに鳴る音がした。

隣との間に、幅二間ほどの長方形の空地があつて、石で出來た下水の溝が長くそれを横に貫いてゐた。草の繁つた中にほたる草などが雜つて咲いてゐた。もとは此處は此方の巷路から向うへ拔けて行くぬけ道であつたのであるが、吉井が懊惱して娘をつけつ覘ひつした時分、不用心だと言つて、大家に談判して、其處に自費で大きな板塀をつくつて、扉をつけて、往來が出來ないやうにした。で、午後四時すぎになると、父親はいつもきまつて其處で行水の支度をした。先づ大きな盥を下水の溝の上に置いて、それに並んで廣い洗場を拵へて、傍に、水甕と水桶と瀨戸引の金盥とを置いた。その傍に並んで置いてあるトタン製の湯釜の長い鐵砲に、踞みながら小さな炭を入れてゐる父親の姿は、午後の明るい光線の中に簾を透してはつきりと見えた。

その時分、蒲團と夜着とを新調しなければならなかつた。もとから絹布が一組あつたけれど――母親が嫁に來た時に持つて來たといふ夜着と、父親の家の沒落した時にわづかに殘したといふ蒲團とがあつたけれど、それはところどころ切れて、繼などがあたつてゐて、枕を置くあたりは地が薄くすくやうになつてゐた。それに柄や模樣も舊式で、綿も何遍か打返されて固くなつてゐた。一組拵へなければ仕方がないと母親も娘も言つてゐた。で、一昨年の冬の初め頃に、近所の知人から裁縫の出來る婆さんを一人頼んで來て、呉服屋から柄の好い銘仙を買つて、一週間もかゝつて、一組の寢道具を拵へた。二階には綿や綿の屑や糸屑などが一杯に散ばつた。傭つた婆さんは仕事は丁寧だが、針の運びが遲かつた。半日かゝつて一枚の敷蒲團のかはを縫ふことが出來なかつた。氣の勝つた母親は『本當にぐづだよ、三日かゝつて、まだ綿が入るやうにならないんだから、』などと言つた。ある日は、世話になつてゐる人が其處へやつて來た。坐るところもないやうに、二階には一杯に綿が散らばつてゐた。娘は、『好い柄が好いでせう。何うしてもね、もう一組なくつちや不便ですからね。敷蒲團も少し長く拵へたのよ。これなら、いくら脊が高くつても、足が出ることはないでせう、』などと言つて笑つた。娘はその時、旨く言つて、その世話になつてゐる人からいくらか金を出して貰つたりした。折角寢道具が出來ても、それを入れる押入がないなどと言つて、大工を一日頼んで、奥の長三疊の上につくりつけの大きな戸棚をつくつて貰つたりなどした。年の暮近く、男が旅から歸つて來た時の夜のことなどがつゞいて娘の頭に線

ら出さなければならない着物や帶が澤山にあつた。

『矢張、あの吉井が祟つてゐるのかしら。』娘はふとこんなことを考へた。と、その時、怒つた顔が歴々と眼の前に見えた。怒つて激昻した底にわかれ難い男の執着をはつきりと見せた顔！　續いて絡み着いて來る恐ろしい男の心の炎を娘は思ひ出した。家の周圍を附け覘つてゐるので、娘はその時は一月もお座敷に出ることが出來なかつた。その時分は、家では金に不自由をしなかつた。あの榮を抱へたのも、母親と旦那がいくらか出しては呉れたものゝ、矢張あの吉井から絞つて貯めた金が主な金であつた。『不思議だ、考へると怖いやうだ。あの金をすつかり使はなければ駄目なのかも知れない。』こんなことを考へながら、娘はぼんやりした。

『姉さん、枕を上げませうか。』

傍で裁縫の針を動かしてゐた妹が氣が附いて言ふと、

『あ。』

妹は立つて、押入をあけて、定紋のついた朱塗の船底枕を出した。これは、この前の時に、男が名古屋からわざ〳〵買つて送つてよこしたものであつた。枕は對になつてゐた。それとは知らない旦那は、『好い枕が出來たねえ。何處で拵へたの？』などゝ言つた。床の上には、いつもその枕が二つ並んで置いてあつた。

る人の方の手のことも心配になつた。氣が附くと、旦那は久しくやつて來なかつた。何故、あの時、あの旨い口に乘せられて、あんなことまで饒舌つて了つたらう。あんなことは言はなければ好かつた。かう考へて來ると、あれも是れも心配になつて來ることが澤山に出て來た。

旅に行つてゐる男から、此間、手紙が來て、土地の名産の味噌漬などを送つて來た。ひどい田舍で、毒のある黄色の蝶がゐて、それに觸ると、肌が脹れ上るなどと書いてあつた。娘はいろ〳〵に思ひ惱んで、終には、手枕をして、ぐつたりそこに横に倒れた。

母親に喧しく言はれないまでも、これではとても駄目だとは娘も常に思つてゐた。男の方でももつと進んで出て來ても好いとも思つてゐた。しかし、頭ではさうとちやんとわかつてゐても、何うしても、それをやめることは出來なかつた。何も彼もやめる代りに、旦那も親も皆捨てゝ、何處か遠くへ行かうかなどと思ふ時には、自分ながら自分の心がわからなくなつて、ひとり手に溜息が出た。

かと思ふと、こんなにしてもゐられないといふ心持が強く心の底から湧き出して來た。昔はこんな意氣地のない自分ではなかつた。何處のお茶屋からも爭ふやうにして口をかけてよこした。お客は皆な自分の前には從順な羊のやうであつた。お座敷に出て行くのが面白いほどであつた。かう思つたかの女の頭には、母親と一緒に月々溜つて行く金を勘定した時のことなどが浮んで來た。と、すぐそのあとから借金や、質や、段々少くなつて行く金のことなどが消極的に繰返された。秋から冬になるにつれて　か

けれどね。』

『本當に困つちやつた。……あの人らしいのよ。そら、あそこで二三度逢つた……。』

『だつてわかるもんかね。そんなことが――』

『兎に角、早く何うかしようと思つてはゐるんですけどもね――』『今、急に何處にも出るわけには行かない』といふ口調で榮は言つた。

『兎に角、私の方にはお寶さへ返して貰へばそれで好いんだから。ちやんと公正になつてゐるんだから、お前さんぢやわからないなら、保證人に來て貰ふより他に仕方がないんだよ。私の方だつて、さういつまでも放つて置かれちや困るからね。』

『本當に呆れて了ふよ。踏むつもりでゐるんだよ。』榮の歸つたあとで、『何處までづう〳〵しいかわかりやしない。』

『ぐづ〳〵してゐると、ひどい目に逢ふよ。』

『ちやんと公正になつてゐるから、いざとなりや、保證人にかゝつて行くから、其れは安心だけれど。』娘はかうは言つたものゝ、しかしそれが果して本當に旨く取れるか何うかといふことが不安心になつて來た。僅か三百圓の金だが、それすら取れないでは、愈ゝ困るばかりであつた。娘は長火鉢の前にぽつねんとして坐つてゐたが、考へれば考へるほど、不安心は益ゝ募つて來た。それに、世話になつてゐ

そのあくる日に、榮はやつて來た。家にゐた時から、餘り綺麗な方ではなかつたが、自分の家に歸つてから構はないと見えて、一層やつれて色が黑くなつて見えた。自分の家の話だの、兄の話だの、田舍の口の話だのを盡きずにしたが、母親が勝手の方へ行つて、姐さんと二人きりになつた時、

『姐さん、困つちやつたのよ。』

『何うしたの？』

榮はやゝ言ひにくさうに、『姐さん、私、とまつちやつたのよ。』

『うそだらう？』

『本當なのよ。』

姐さんは、默つてぢつと榮の顏を見た。榮の顏は見る〳〵赧くなつた。

『お前さん、うそをいつたつて駄目よ。此間、つい此間、腰卷がよごれてゐたのを洗つてゐたつて言ふぢやないか。』

『でも、本當なんですもの。困つちやつたわ。もう四月位なんですもの。今の中、何うかして了はうかと思つてゐるんですけどもね。』

『本當でも、うそでも、そんなことは何うでも好いんだよ。鬼に角、お賓さへ返して貰へば私の方はそれで文句はないんだから。これがね、私がね、旦那でもつけたとか何とか云ふんなら、また話もある

榮の仕替も捗々しくなかつた。その元金は使つて了ふことは出來ない金だけれど、兎に角それででも一時融通して置くより他に仕方がなかつた。世話になつてゐる人からは、もう何うすることも出來なかつた。

『榮ちやんのところへ電話をおかけよ。檢番で下谷に四百圓で口があるつて言ふから。』お座敷から歸つて來て、かう言ふので、妹はすぐいつもの藝者屋の電話を借りに行つた。

やがて、歸つて來て、

『榮さん、ゐないんですつて。』

『ゐないつて、困るぢやないか。それから何つて言つた？ すぐさがして、よこすやうに言つたかえ？』

『え。』

娘は母親に向つて、『隨分づう〳〵しいね。人が喧しく言はないと思つて、勝手に出て遊んでゐるんだよ。向うでなんか、口をさがしてゐるか何だかわかつたもんぢやない。』

『喧しく言はなくちや駄目だよ。』

娘は下谷の口の話を母親にしたりなどした。素直に金を返して吳れゝば好いがなどと二人は思つてゐた。

『なにも、そんなに事を大きくしないたつて――』

『それだから、お前さん、意氣地がないつて言ふんだよ。あいつの世話なんかにはもうならないから、勝手にするが好い。あとで目が覺めたつて知りやしない。』

『そんなに言つたつて仕方がないよ。あれでも苦勞があるんだよ。』

『苦勞、苦勞つて。自分一人で、親の世話にならずに、何も彼もやつて來たやうに思つてゐる。誰のお蔭で大きくなつた――』

しかし、こんなことをいつまで言つてゐたとて仕方がなかつた。默つて顏を見合せてゐる辛さから、何方から解けるともなくその厭な重苦しい空氣は段々晴れて行つた。後には、『だつて、母さんだつて、あんまり人の心を知らないからさ。』などと娘は言つた。

その別居問題も、もう今年になつてはすつかり出なくなつた。母親は何うすることも出來ない自分達の生活を思つた。簞笥の底の金は次第に尠くなつて行つた。その上に、七三の祭まで、お茶ばかり挽いてゐるので、住替を希望して出て行つて了つた。

仕方がないので、母親は澁々金を出して、呉服屋とその月の勘定の不足分とを立替へてやつた。しかしこの春、男と一緒に遊んだ茶屋の勘定と、質に入れた指環や頭のものなどはそのまゝになつてゐた。娘は車屋を賴んで質屋の利子を入れさせた。

笥の開きをあけて、そしてその抽斗の奥から金を出した。

ある時は大喧嘩をした。『早く皆な出て行つてお吳れ。こゝは、私の內だから……。私が拵へたんだから、榮ちやんと私の道具だけ置いてサッサと出て行つてお吳れ。何うせ、さうでせうよ。かういふ家にゐでは、お花の嫁づくにも邪魔になるでせうよ。弟もその爲めに道樂をするやうになつたんだらうから、うちになんかゐて吳れなくても好いよ。』餘り劍幕が恐ろしいので、近所では何事が始まつたかと思つて仲裁にやつて來た。それにも拘らず、娘は氣違ひのやうにたけり立てた。

『勝手に何うともおしよ。』

『するともね。』

『親に向つて、何と言つた。もう一度言つて見ろ。』

母親もまけてはゐなかつた。

其時は母親もしんから別居する氣になつて、父親に近所に家をさがさせたりした。母親はその時ほど父親の腑甲斐のないのを情なく思つたことはなかつた。喧嘩して別居しても、矢張娘から月々いくらかの金を貰はなければならなかつた。それでも母親は何うしても別れるつもりでゐた。一家の動搖した空氣は二三日經つても容易に靜まらなかつた。娘は默つてひとりでお座敷着を着てお座敷へ出て行つた。

『父さん、お前さん、今度はしつかりして吳れなくつちや困るよ。』

男が好いんだらうと母親は不思議にした。

娘と此處に一緒に住むやうになつてから以來のことを母親は考へた。その時分はこんな娘ではなかつた。稼ぐ一方であつた。道具や衣裳や指環の殖えて行くのを唯一の樂みにしてゐた。『さうね、もう少し殘して、抱妓の二三人も置くやうにしなけりや……』などと言つて、貯つた金の額の多くなるのを樂んだ。從つて、お茶屋にも如才がなく、女中などの機嫌を取ることも上手に、お客の取扱ひ方にも氣が利いてゐた。いろ〳〵な誘惑から巧みに遁げて來て、『お茶屋のお上さんなどにもわるい人がゐるから、油斷が出來やしない、』などと言つた。

世話になつてゐる人に內所で、他に尠なからぬ金を月々貢いで貰ふやうな人がゐた時には、中に入つて母親は矢張いろ〳〵と心配をした。しかし稼業なら仕方がないと母親は思つてゐた。體だけで、心ではないから、如何やうにも申譯が立つと思つてゐた。何も、家のためだ……といふ風に思つてゐた。それを、娘は、今では、『だから、母さんは薄情だつて言ふんだ。私のことなんかちつとも思つてゐないんだから、私が何うなるかなんていふことは思つて吳れたことはないんだから、その證據には、お金になることなら、今でも何とも言ひやしないでせう。』

昨年の暮に見て貰つた易者は、『何うも、この二三年は入るよりも出る一方ですな』と言つたが、實際、その通りで、母親はその時分に貯めて置いた金が段々尠くなつて行くのを見た。母親は曇つた顏をして、箪

『すぐあれだから……。そんなことはわかつてるよ。』あとの一句を娘は烈しく言つて、そしてぷいと縁側の方へと立つて行つた。

そのことになると、娘はいつも赫となるのを母親は見た。道理も何もわからなくなつて了ふのであつた。それを思つて母親は黯然とした。母親はそのことに就いてこれまで何んなに心を痛めたらう。何うかしてよすやうにと母親は豐川樣に願までかけた。しかし娘は未だに眼が覺めなかつた。

あのわるい虫がついてから、娘の變つて行つたのを母親は見遁さなかつた。それに、その爲めに母親は種々の方面で心配した。あるお茶屋の上さんとも喧嘩をした。ある藝妓屋の女將とも絶交した。後には、間を堰くのが却つて薪に火を加へるやうなものだと思つて、十のものなら五つは知らない顏をして通した。しかし、何う觀察して見ても——ある時には、こつちで折れて、何うせこれからも娘の世話にならなければならない身の上だからと觀念して、世話になつてゐる人に知れた時には、ちやんとその話をしてお暇を貰ふつもりに腹をきめて、一時家に入れて見たけれども、とてもこれから二人一緒になつて地道な生計が立てゝ行かれるやうには母親には思はれなかつた。娘はいつの間にか指環やら髮のものなどを失くして了つた。

それに、ごろ〳〵寢て飮んで食つてばかりゐるやうなその男の生活が母親には厭であつた。その上男は金のことには無頓着で、母親から借りた尠なからぬ金をも返さうともしなかつた。何うして、あんな

『なら、頼まないわ。』

かう言つて、祝儀帳をぐつと引たくつて、それを投げるやうに抽斗の中に入れた。眉のところがやゝつるし上つてゐた。

『だつて、しやうがないもの。』

『何がしやうがないの？』娘は母親の方を睨めるやうにして、『ちつともしやうがないことなんかありやしない。娘が困つてゐるのに、母さんが融通して呉れるのは當り前だわ。母さんは、何でも自分のお寶のやうな顏をしてゐるけれど、母さんが一人で拵へたやうなお寶なんか一つもありやしない。皆な私がゐるから出來たんだ。』

『それはさうさ……。皆なお前のお寶さ、母さんだつて、母さんが何う彼うしようと思つて殘して置くんぢやないよ。何ぞの時にと思つて、準備して置くんだからね。』

『だから、出せないつて言ふんだね。』

『だつて、さうぢやないか。此のまゝにしてゐては、際限がないぢやないか。乞食になつて了ふばかりぢやないか。商賣は不景氣だし、榮ちやんは行つて了ふし、無心を言へる人にも無心が言へなくなつて了つたし、これで、つゞいて行つちや、お前これからの暮しだつてつきやしないよ。――お前だつて、考へて呉れなけりや……。』

んなもんかね。それに、此處はよこしやしないよ。』
『困るねえ。』
『だつて、仕やうがない……』
『呉服屋にだつて、いくらかやらなけりやならないし、彼方の方も今月は何うかしなくつちやならないし。』
『…………』
『母さん、此間、お師匠さんの返して下すつたのを出して置いて頂戴ね。』
『…………』
『ね、ね、母さん。』
『でも、ね、私だつて少し持つてゐなくつちやならないからね。』
かう言つた母親の顔には、お前の尻ぬぐひばかり出來ないよといふ表情が歴々と現はれて見えた。かういふ時には娘はいつも強い反抗を見せるのが例であるが、つとめて、それを押へるやうにして、
『だつて、困るもの。』
『困るのは、當り前ぢやないか、お前。困るやうになるのは始めからわかり切つてるぢやないかえ。』
と、娘はぷつとして、

言ふにも拘はらず、兎に角、ある女學校を三年までやらせて、あとの二年を裁縫女學校にやつて、立派に嫁入りさせるまでに仕立上げた。花も生ければ、手紙なども巧く書いた。近所の藝者屋の上さんなどが來て、『花ちやん、惜しいもんだね。姐さんのあとつぎにすれば好いのに……。本當にお寶をねかして置くやうなもんだよ。』などと言ふと、母親はむきになつて腹を立てた。『あんなことを言ひやがつた。お前、本當に見返しておやり。』と母親は言つた。

姉は父親に似て、盆栽が好きで、よくそれに水などを灌けてやつた。お座敷に行く支度をしながら、『おあもう、りんだうの蕾が大きくなつたのね。樂しみね。明日は咲くだらうね。』と言つてそれを眺めた。

姉は地の薄い涼しさうな中形に、博多の伊達帶をぐる〳〵とまきつけて、大きな鏡臺の前で、抽斗から、つい此間までゐた七三の妓の祝儀帳と自分の祝儀帳とを引較べて見てゐたが、

『母さん。』

『何だえ？』

『ちよつと――』

長火鉢の傍に坐つてゐた母親が、肥つた體を引摺るやうにして其方に行くと、

『とても、これぢや駄目ね。』

眼のわるい母親は、二册の祝儀帳を顏に押附けるやうにして見てゐたが、數へて見て、『七ッだね、そ

父親はしかし誰にも好人物だと思はれてゐた。江戸子だけに、ちよつと喧嘩早いやうなところがあるけれど、此頃では、年も取つて、母親の擧動やら言葉やらには心も留めようともしてゐなかつた。何處かの集金の方に出てゐて、毎朝早く出かけて行くが、午頃にはもう大抵家に歸つて來てゐた。盆栽が道樂で、金さへあるとそれを買つて來たが、それも娘や妻に何か言はれるのが厭さに、二階に持つて行つて知らん顔をしてそれを隱して置いたりなどした。『もう、これつきり買つて來ない。今度買つて來たら、何んな罰金でも出す。』などと言つてゐた。

そして狹い庭に一杯に置いてある柘榴だの、千兩だの、楓だの、小さな檜だの、中から、一つ二つ氣に入つたのを選んで、それを緣側の上に持つて來て樂しさうに眺めた。すり鉢の中の睡蓮は、暑い午後の日影に美しい白い小さい花を見せてゐた。

買つて來た時に、母親も娘も末の妹も老いた下婢も、皆な一樣に貶しつけた赤い大きな缺けた鉢には、軈て緋の見事な美しい石竹の異り種が咲いた。『それ見ろ、好い花が咲いたらう。中々安く買へる種ぢやないんだから。』などと父親は得意さうに言つた。

その緣側の傍で、肥つた末の娘は大きな裁物板を並べて、終日長く針を動かした。姉のやうにはさせたくない、何んな男でも好いから、しつかりした堅い亭主を持たせたいといふ母親の希望で、姉が時々反對して、『お孃さんぢやありやしまいし、女學校なんかに入れて……。私ばかり苦勞するんだよ。』などと

に似てゐる娘を思はずにはゐられなかつた。『父さんさへしつかりしてゐれば、先祖の家だつて潰さなくても好かつたのだし、娘だつて、稚さい時分からこんな境遇に身を沈めなくつたつて好かつたのに……』かう思つて、母親は常に父親に似てゐる娘の行先を心配した。娘は二十七八の立派な姐さんとしては、母親の眼には映つてゐなかつた。

母親は長い間の艱難を繰返した。それは子供の爲めにのみ働いて來たやうな一生であつた。母親は若い身空で三歳になる娘を抱へて丹波の山の奥まで夫の跡を追つて行つた自分を見た。死んだ母親に度々意見をされてそして泣く〳〵子供達の許に戻つて來る自分を見た。大きな家から三間しかない小さな長屋に移つて行く自分を見た。それでも、父親は平氣で、居心がわるくなると、勤めてゐる役所を何の理由もなしに止したりなどした。狹い家の中では、父親と母親とは常によく喧嘩をした。傍で娘は總領だけによくわかつて泣いてそれを止めたことも一度や二度ではなかつた。『子供の爲めばかりにかうして別れずに暮して來たんだから、父さんなんかもうとうから私には用はないんだよ。子供さへ大きくなりや好いんだよ。それで本望なんだよ。』今でも母親は平氣でこんなことを言つた。

母親は里方の母から分配して貰つた金をいくらか持つてゐたが、それは娘には話しもし、何うかすれば融通もしてやるけれど、父親にはその所在をすら示さなかつた。『親父には、もうこり〳〵してゐるんだからね。』母親はかう言つてピンと簞笥の鍵を下した。

合歡の花

母親は常に心がけて、無駄をしないやうに、僅かな金をも簞笥の底に藏つて置くやうにした。今日は肴を買はずに濟ませたから、その分だけ除けて取つて置かう。今日はお座敷に行くのに車に乘らずに行つたからその分だけ別にして殘して置かう。長い間艱難を經て來た母親は、すべてかういふ風に、何んなものでも粗末にしないやうにして、紙屑を賣つた錢なども丹念に貯めて置いた。

母親は長い間一家の面倒を見て來てやつたことなどををり〳〵考へた。かうしてこれまで何うやらかうやら暮して來たのは、それは娘のお蔭ではあるけれど、娘のためにも隨分種々な心配もし、迷惑もし、心にもない薄情なことをもした。自分が世話を燒いてやらなければ、あの時だつて、何うなつて了ふかわからなかつた。あの時だつて何んな目に逢ふか知れなかつた。あの時自分に金がなかつたなら、娘は今時分は何處か遠い田舍に身を賣られて、慘めな生活を送らなければならないに相違なかつた。派手な浮氣な心緊りのしない娘の性質をよく知つてる母親は、つゞいて姿から心から氣風からすつかり父親

合歡の花

外十一編

『重雄さんは？』

『今日は、會があるから、遲いとか何とか言つて行きました。』

『さうですか。おぢいさん、一人では大變ですね。』

『なア〳〵、もう……』

良太は火鉢に火を起したり、藥罐に水を入れたりしたが、それをお元は見兼ねて手傳つて炭をついでやつたりした。『おぢいさん、丈夫だと言つても、それでも年を取りましたね。年寄のすることは見てゐられないんですもの。あの暗いランプの下で湯わかしから急須に湯をつがうとして疊の上についだり何かするんですもの。構つて下さらなくつても好いつて言つても、それでも構つて異れるんですもの。本當に見てゐられない。』かうお元は眞弓に話した。

良太はその薄暗いランプの下で、遠い昔のことなどを繰返しては考へてゐた。髷に結つて大小を挾んだ時代や、下に〳〵と言つて大名の行列の通つて行つたさまや、日本橋の大通りが夜になるとすつかり闇で、往來する提灯がちら〳〵と花火のやうに見えた時のことなどを良太は思つた。今でも良太は、何うかすると、外國へ行つた息子の歸つて來た喜悅の夢から覺めた。おかねの命日にはいつもきまつて花を買つて來て供へた。

『何處でだえ？』

『何でも、向うの方だつた。つい出ちやつたもんだから、その話をしちやつたんだよ。ぢつと人の顔を見て、まァ似てるよ、お初ちやんになんて言つて、奥から年寄まで呼んで來るんだもの、閉口しちやつた。』

『清さんの家だらう。』

『さうかも知れない。』かう言つて、重雄は其他彼方此方で、昔の話が出ることを話した。十二社の茶亭の主婦は、養子を出してから、長い間、後家の生計をしてゐるが、其處でも、『大きくなつたねえ、重雄さん。』かうびつくりしたやうにして顔を見詰めた。

良太は長い間やつて來た通り、矢張草鞋を穿いて、毎日奥の方へ出かけて行つてゐた。もう廣い地面もなく、畠もなく、あたりはすつかり家作になつて了つたけれども、それでも、壞れた垣を繕つたり、散らかつてゐる庭の掃除をしたり、旦那の話相手になつたりして暮した。旦那の耳も此頃は益〻聞えなくなつた。ちよつとした話をするにも、大きな聲を立てなければならなかつた。旦那は矢張ぶらり〳〵庭などを散歩してゐた。

夜など、お元が通りに買物に出た次手に寄つて見ると、良太は何をするでもなく、唯一人ぽつねんとして坐つてなどゐた。

たが、その光線はやがて低く〳〵下へと下りて見えなくなつた。喝采の聲は暫しは止まなかつた。『えらいな、スミスは！　スミス、スミス！』かう言ふ聲は、其處からも此處からもきこえた。

やがて戸内に入つて行つた良太は、默つて薄暗いランプの下に坐つてゐた。かれは外國へ行つた息子のことを思ひ出してゐた。しかも海の外には、國を賭したやうな大きな戰爭があつて、一戰爭每に、何萬人といふ人間の血が流れてゐるといふことなどは良太は知らなかつた。

五十八

臨時雇でその土地の町役場に勤めるやうになつた重雄は、忙しい戸籍の方へ廻されて、一軒每に戸別訪問などをやつてゐた。重雄は繼母と一緒にゐたり、眞弓の家にゐたりしたが、勤めに出るやうになつてから、良太の家に來て起臥してゐた。

重雄は今年二十六で、もう立派な一人前の青年になつてゐた。丁度實が初めて役所に出てお初の家に下宿してゐた年恰好であつた。良太は朝寢勝ちの重雄を成たけ起さないやうにして、自分で辨當の菜の心配までしてやつてゐた。

ある日、重雄は言つた。『母さんのことを知つてゐる家が隨分あるね。今日も、まア、さうですか、お初ちやんのお子さんですかつて言はれちやつた。菓子なんか御馳走になつちやつた。』

五十七

表で喝采の聲が湧くやうに聞えた。と、昨日から來てゐる重雄は、走つて入つて來て、『おぢいさん、來て御覽よ。飛行機がよく見えるから。』

良太は別に見たいとも思はなかつたけれど、兎に角、下駄を穿いて、靜かに表の方へ出て行つて見た。

表の廣場には、大勢人達が集つて、夜の空を仰いでゐた。空は暗く、まだ何も見えなかつたが、飛行機の機械の音が凄じくあたりに響き渡つてきこえた。良太は旣に何遍も飛行機の飛ぶのを見てゐた。『人間が鳥の眞似をするやうになつた。不思議なことがあればあるもんだ。』などと思つて、高く飛んで行く飛行機を夕暮の空に見送つたことも一度や二度ではなかつた。しかし、今夜のは、外國人がやるので、世界にもめづらしい宙返りをするといふことであつた。良太もしよぼ〳〵した眼を見張つて、大勢の人のやうに空を仰いだ。

突然、光線が光つたかと思ふと、續いて一道の光が花火か何かのやうに長く美しく尾を曳いた。

『スミス萬歲、スミス！』

といふ聲が凄じく起つた。

暗黑の空に描かれた光線は、S字形をなして、美しく空を彩つて、暫しの間ははつきりと見えてゐる

『このすぐ裏のお宅？』

『え。』

『さうですか、それはまァ、結構ですね。ぢや四十恰好の肥つた方ですね。あゝ、あの方？　あの方があの小さい、何つておつしやいましたつけね。さう〳〵眞弓ちやん。あの眞弓ちやんなんですか。まァねえ。』

さも〳〵驚いたやうに目を瞠るやうにして主婦は言つた。主婦は茶だの菓子だのを持つて來て進めた。良太の眼の前には、稚かつたお初の姿や、その時分一緒に遊んだこの主婦の姿などがまた繰り返された。良太は目をしよぼ〳〵させた。

『お孫さんは？』

『もう、今年二十四ですから、大きくなりました。』

『さうですかね。年を取るのも無理はありませんね。』

こんな話を暫しの間二人はした。『こんな店ですけども……今に、よくなるかと思つてやつてるんですけど、』などと主婦は言つた。暫くしてから良太の姿は、煤煙の漲りわたる機械の音の凄じく聞える大きな工場の方へ行く坂の上に見えた。坂の下では車力が一生懸命に動かぬ馬を鞭打つてゐた。

『をぢさん、本當に暫く……まァ、此方にお入んなさいまし。』
『難有う……』
『今、此處で見てると、何うしても、をぢさんだから、急いで驅け出して行つたんですよ。』良太の入つて來るのを迎へて『さァ、此方におかけなさい。本當にお久し振り、何年、お目にかゝらないか知れませんよ。……それでも、をぢさんお丈夫で結構ですね。』
『いゝえ、もう……』
『矢張、元の處にいらつしやるんですか。……さうですか、私も、長いこと、近所にゐなかつたもんですから。』主婦はちよつと途切れて『をばさんもお亡くなんなすつたんですつてね。……一度うかゞはなければならないんですけども……本當に、まァ、なんて言ふ久し振りなんだか。本當に、今、ちよつと見ると、をぢさんだから、……もしや人違ひかと思つたけれど、飛出して行つたんですよ。今日は何方へお出ででした？』
『ぢき、この裏に、甥がゐるもんですから。』
『甥御さん……』主婦は考へて『お初ちやんの旦那さんは、お亡くなんなすつたつてきいたから、ぢや、あの、あの時、小さかつた……』
『え、二番目の。』

五十六

ある日、良太は眞弓の家を出て、裏の通りを靜かに歩いて行つた。そこらも丸で見違へるほど變つてゐた。元は畠で、大きな松が五六本あつたが、もうそれも枯れて了つて、そこには小さなお宮見たいなものが出來て、二階屋だの、トタン葺の屋根だの、小さな鳥居だのがごた〴〵と集つてゐた。赤い黄い西洋の花などが宮の廣場の彼方此方に咲いてゐた。

角の茶屋の處を曲らうとすると、

『青山さん！』

かう後で呼ぶ聲が聞えた。

自分のこととも氣がつかずに、良太は猶二歩三歩歩いて行つた。

『青山さん！　青山のをぢさん！』

振返ると、年の頃五十二三の女が店先へ出て、頻りに此方を向いて自分を呼んでゐるのであつた。それは團子だの鮨だのを並べて賣つてゐるやうな店で、手拭などがピラ〳〵と午前の風に靡いてゐた。

『あ、お鶴さん！』

かう言つて良太は、お初の昔の遊び友達の面影をその女の顏の中に見出してゐた。

『え、さうでせう。芝定さんのところへ行くんでせう。』
『定さんの許へ……』良太は考へるやうな表情をした。
『そら、何處かに、あそこの總領の娘が、小間使か何かに上つてゐましたね。あの娘が去年とか、前の奥様が亡くなつて、あと目に直されたもんですから、それが時々あゝして來るんですよ。』
『總領娘？』
良太はちよつと思ひ出せないといふ風にしてゐたが、『そら、腹違ひの……をぢさんがよく話をなすつた、三味線などの出來る……』かうお元が言つたので、始めてわかつて、『あゝあの常磐津の師匠の娘の。』
『えゝ、さうです。今は大變、仕合せになつたんですつて。』
『はア、さうですか、先の奥方が死んで、あとに直つて、……はゝア、さうですか。』良太はかう言つて暫し默つて、『餘程前に、お小間使に上つて、お手がついたとか何とか言つてゐましたつけが……？』
『その娘ですよ。今ぢや、奥様で、あゝして自動車で里に來るんですから、大變な出世なんですつて。贅澤をしてゐるつていふ話ですよ。』
『さうですか。』
良太はさう言つたきりて、別に深くその話もしなかつた。

良太はしかし依然としてその長屋の一軒に住んでゐた。薄暗い二分心のランプ。古い火鉢、古い鐵瓶、古い竈、朝は矢張早く出かけて行つて、日の暮れる時分に歸つて來て、湯を沸かして、夕飯を食つて、それから靜かに歩いて、橋の向うにある風呂へと行つた。おかねが死んでから、もう早くも二三年は經過してゐた。武雄は一昨年あたり、克巳の田舍に引取られて、今は一人さびしく暮した。眞弓夫婦は、叔母が死んだ當時、叔父さんもこれでがつかりして體が弱らなければ好いがと心配したが、そんな容子もなく、依然として丈夫で、毎日同じやうに働いてゐるのを見て『叔父さんは丈夫だ、實際、あの眞似は出來ない。』かう眞弓はつく〴〵感心したやうに言つた。

をり〳〵良太は眞弓夫婦の家を訪ねて行つた。その時には、矢張前と同じやうに、芋の子を持つて行つてやつたり、長い間かゝつて貯めた棕櫚繩を持つて行つてやつたりした。いつも草鞋を穿いてゐる良太は、裏口の緣側に腰をかけたまゝいくら勸められても、決して上へはあがらなかつた。

『叔父さんは本當に遠慮深いんで……』

『いゝえ。』

などと言つて、わるい目をしよぼ〳〵させながら、途切れ〳〵に種々な話をした。ある日、さうして緣側のところで話してゐると、不意に、前の通りをけたゝましい音を立てゝ自動車が通つて行つた。

『自動車ですか。』

五十五

世は絶えず移り變りつゝあつた。眞弓が移轉して來た時から見ると、更にまた一時代過ぎ去つたやうに思はれた。大きな工場の煙突、凄じく湧くやうに漲り上る煤煙、電車が出來るので廣く取りひろげられた通り、新しく建築された二階屋。誰が昔此處に畠があり、林があり、竹藪があり、水車小屋があつたと想像するものがあらう。また誰が昔此處に常磐津の三味線の師匠が住み、男女の若い二人の心中があり、闇の通りをさびしく荷車が通つたと想像するものがあらう。到る處に、新しい時代が新しい色彩と巴渦を巻いてゐるのを良太は見た。

何處に行つても、地面が小さく仕切られて、垣が出來て、門が立つて、瀟洒な二階屋などがつくられてゐた。川の畔、林の蔭、谷地の窪、さういふ所まで、皆な立派な家屋が建ち大きな廣い道路が出來た。

昔の百姓達も地主として見違へるやうな立派な生活をしてゐた。かれ等はもう土地などを耕してはゐなかつた。やはらか物などを着て、ぶら〳〵として毎日遊んで暮した。あるものは、村會議員や郡會議員になつて、羽織袴で俥に乘り廻したりなどした。住宅なども驚くほど立派になつた。檜木づくめの新しい建築、大きな石の門、數奇を盡した庭、何處の大家の邸かと思ふと、それは昔良太が世話をしてやつた百姓の甚兵衛の住宅であつた。

お愛はかう言つて、今になつても、幼い時に、『立派になるんですよ、』と言つて死の床に手を堅く握られた母親のことを思ひ出してゐた。

『何うも仕方がないよ。誰でも皆なさうなんだから。』

『本當ですね。ですから、まア、さう思つてあきらめてはゐるんですけどもね。』

お愛は包の中から、『ほんの私の志だけですから、』などと言つて香奠を出したりした。男の兒は、肥つて、元氣で、片言を言ひながら、人見知りもせずに、狹い室の中を彼方此方と惡戲をして歩いた。『こら隆さん、そんなお惡戲をするんぢやありませんよ、』などとお愛は言つた。

一時間ほどして、お愛は暇を告げて歸つて行つた。

あとで、良太は言つた。

『お愛さん、亡くなつた母さんにそつくりになつた。』

『さうですかね。あんな風でしたかね、死んだ姉は？　中々氣が勝つてゐますからね。』

で、香奠のつけ落ちがないかと、眞弓はまたあちこちの引較べに取りかゝつた。通りには荷車の通る音が高く響いてきこえた。

良太に向つては、そんなことを言つた。眞弓に向つては、『をぢさんの許なんかには、ちよい〳〵上らうと思ふんですけども、子供は多いし、母さんはあるし、それで、貧乏ひまなしなんですから、とてもをぢさんやお元をばさんなんかとは、おつき合は出來ないもんですから、つい、御無沙汰をして了ひましてね。』

『何アに。そんなこと構はんぢやないか。ちよい〳〵お出でよ。』

『難有う御座います。』しやんとお辭儀をして、『をぢさん、世の中つて、本當につまらないもんですね。漸く、此頃、世の中がわかつたやうな氣がしますけれども、眼先のことに騙されて通つて來るんですね、好いことがあると思つて、行つて見ると、何にもないやうなものですね、世の中は――』

『何うして？』

『何うしてつて、さうですよ、をぢさん、子供のことなんか殊にさう思ひますよ。』

眞弓はそれには答を與へずに、『此頃は、旦那さんは？』

『去年の秋、お上の用で、英國へ行つてゐますけどもね。……え、丈夫ではをるやうですけども……。矢張、をぢさん、思つた通りには何でも行きやしませんよ。え……精一でもあんなでないと好いんですけども……。父親だつて、あの年になつて、あの病人の看病だけで日を送つてゐるやうなもんですから、考へれば可哀相なんですけども……。母さんさへ、生きてゐて呉れゝば好かつたんですよ。』

太を相手に重雄と二人でやつてゐると、ふと入口の格子戸が明いて、『今日は、』といふ聞き馴れぬ女の聲がした。

立つて行つた重雄が、すぐ引返して來て、『お愛さん。』

『さう、お愛が來たの。』

かう言つてめづらしさうにして、眞弓と良太とは迎へた。お愛はおてつの總領娘で、精一の姉であるが、海軍の方の人の許に嫁いてからは、滅多に互に逢ふやうなこともなかつた。娘の時分可愛らしかつた豐かな頰や美しい皮膚はすつかり褪せて、繕はない地味な一家の主婦になつてゐた。年は三十一二だが、子供が六人もあつて、總領はもう十五六になつてゐた。今日も末の三つになる男の兒に海軍帽などをかぶせてそして負つてやつて來た。

昔から一面氣の勝つた一面涙脆い質であつたが、『いゝえ、知らせてなんか頂かなくつたつて、是非上らなくつちやならないんですから。をばさんはおいくつでした。さうですか、六十四、それぢやまだそんなに年を老つたつて言ふんぢやないのですのにねえ。本當に、をばさんには、小さい時分、大變お世話になつたんですから、忘れやしません。』かう言つて、佛の前へ行つて長い間合掌した。此方に來て坐つた時には、眼の緣は赤くなつてゐた。

『おぢいさん、お一人で、これからさむしいんですね。』

ものに引緊められて、キウと緊縮して行くやうに感ぜられた。今上皇帝の死、乃木大將の死、叔母の死、つゞいて大きく人間の死といふことがはつきりとかれの眼の前に映つて見えた。

『出てますよ、彗星が――』重雄が家の内の人々に言つてゐるのが後に聞えた。

それと聞いて、家の内からは、誰も彼も皆な出て來た。

『はア、成ほどはつきり出てる。』『大きいですね、此前出たのから見ると餘程大きい、』などといふ聲がそこゝに聞えた。石川もお勝も大工の棟梁も出て眺めた。

最後に、良太までも出て來た。足元が危いので、入口の處で、始めは覗くやうにして見てゐたが、やがて下駄を穿いて、とぼ〱として戸外へ出て來た。

『見えますか、をぢさん。そら、明けの明星の少し上のところ。』

かう眞弓が指さして見せると、

『はア、成ほど、見えます、見えます。』良太は皺の深い老いた顏を夜明の爽やかな空間へと向けた。

夜は次第に明けつゝあつた。

五十四

葬式の濟んだ翌日、眞弓が行つて、費用の計算だの、香奠の書入れだの、殘つた用事の整理だのを良

『何でも東の方だつて言ふことですよ。明けの明星の上とか下とかに出るんださうですよ。私もまだ見ないですがね。』彗星の出るのを初めに言出した人はかう言つて笑つた。

『ぢや、出てるかも知れませんね。』

『出てゐませうよ、屹度。』

眞弓が先に立つて、あとから重雄が續いた。入口の雨戸を一枚明けると、爽やかな黎明近い空氣は、一夜人の呼吸やら烟草の烟やら線香の臭ひやらで滿された一間へと流るゝやうに入つて來た。くつきり晴れた暗碧の空には、明方の光が何處からともなく雜つて、星が燦爛として天上の美しい莊嚴な世界を語るやうに輝いてゐた。永久にかけず崩れず滅びない穹窿は、幾億年前から少しも變らないやうに廣く地上に垂れ下つてゐた。

夜明けの明星の輝きを先づ目に留めた眞弓は、『出てる！　出てる！』と叫んだ。その明星から上に高く離れて、多い細かい金屬の粉のきら〳〵するやうな星屑の中に、成はどかなりに大きな彗星が頭と尾とをはつきりと手に取るやうに見せてゐた。

『出てる！　出てる！』

重雄が續いて叫んだ。

悠久な感に撲たれた眞弓は、そのまゝ默つて立つて、深くその彗星へと眺め入つた。頭腦が何か力強い

お勝はそれから思ひ出して、『克巳から便りがあるかえ？』
『さつき、電報で知らせてやつたら、矢張電報でくやみが來たつけ。』眞弓は其處にある弟からの電報をお勝に渡した。それには『ヒツウニタヘズ』としてあつた。
厠から出て來た武雄は、再び床に入つて、すぐ寢て行つて了つた。
一時甚へ難い睡眠が一座を襲ふやうに見えたが、それが通過した時には、夜明にもうほどなかつた。
『此頃、明方に、彗星が見えるつて言ふぢやありませんか。』
かう一座の中の誰かゞ言つた。
『さう、そんなことが書いてありましたな……。何でもかなりに大きいさうですな。さう言へば、明治十二三年に出た彗星が大きかつた。』
『さうでしたね、兄さん。丁度、姉さんが病氣で、母さんがお孝をつれて田舍に歸る時分でしたね。本當に大きかつた。こんなにありましたよ。』お勝は手をひろげて見せて、『それにしてもお孝は何うして死んだんですかね、兄さん？』
『何うしてつて言ふこともないサ。』かう石川は笑つて言つた。
『何方に出るんでせう。』
かう眞弓が訊くと、

折々立つて行つて線香を新しくした。

明方近く、昔の話などがまた始まつた。『あの時分は、眞弓さん、まだ小さくつて、雜巾がけをおてつに吩咐かるとはい〳〵なんて素直にやるにはやるが、緣側が丸で縞が出來てるんだからね。』あはゝと言つて笑ふと、お勝もそれに續いて、その時分の話をして聲高く笑つた。皆なして揃つて王子へ遊びに行つた時の話なども出た。『世の中があの時分から見ると、すつかり變つた、』などと遠い昔を思ふやうにして石川は言つた。

『もう、おぢいさん一人になつたから、精々長生して貰はなけれや――』

『本當だよ。誰もゐなくなつちやつたよ。』

かうお勝も合せた。

ふと武雄が眼を覺まして、立つて、不思議さうにきよろ〳〵と四邊を見廻してゐるのを見て、『おしつこかい、さァ武坊。』良太は立つて、押すやうにして便所へと伴れて行つた。

『可愛いんだね、おぢいさん。』

『武坊でなくつちや、おぢいさん、夜も日も明けないんだよ。』

傍にゐた重雄が言ふと、『お前のお代りだよ。それでもよく世話をするね、おぢいさん。子煩惱なんだね。』

『矢張同じさ。藥や滋養で持つてゐるんだからね。』

『矢張、寢てるの？』

『あゝ。』

お勝は此頃の境遇を石川や眞弓から訊かれても、はつきりしたことは言はなかつた。『まア、何うやらかうやらしてるのさ、』などと捨鉢な言ひ方をしたりした。

十二時過ぎには、近所の人々も段々歸つて行つた。極めて親しい間の人達と肉親とだけが跡に殘つた。十一月の初めではあるが、夜はもうかなりに寒く、蟋蟀の聲も微かに枯々になつてゐた。さびしい通夜の團欒の上に夜は靜かに更けた。

御大葬の話から、今上皇帝の御卽位の時分の話が石川と良太の間に出て、會津と薩長の對抗した時のさまなどが繰返されたが、それが今度は乃木大將の殉死に移つて行つた。『何も、殉死するのが大和魂の發露でも何でもないがな、』などと石川は言つた。石川は退屈しのぎに、此頃では、禪などを學んで、碧巖の講義などをある高僧の許にきゝに行つてゐた。『何も殉死したから、乃木が急にえらくなつたわけでもないさ。死ななくつたつて好いさ。世間なんかつまらないことを騷ぐもんだからな、』などとも言つた。

しかしさういふ話にも勞れて、皆な言ひ合せたやうに押默つて了つた。『をぢさん、また明日があるんだから、少し寢たら何うです？』かう眞弓が言つても、良太は眼をしよぼ〳〵させながら起きてゐた。

が寄り集つて、ざつと湯灌をして棺に納めた頃には、もう夜はかなりに更けてゐた。其處にひよつくりお勝がやつて來た。

矢張、貧しい生計をしてゐると見えて、古い色の褪せた袷を着て、借衣らしい袖の合はない羽織を引かけて、蒼いやつれた顏をしてゐた『をばさん亡くなつたんだつてね。』入つて來て其處に立つてゐた眞弓と顏を合せて言つたが、其まゝ良太の傍に行つて、『急に亡くなつたんですか……。さうですか、一年も煩つていらしつたんですか。それをちつとも知らずに、お訪ねもせずに、お世話になる時ばかりなつて、本當に申譯がない。』淚を袖で拭いて、『もう少しさつき手紙が來てびつくりして飛んで來たんですよ。眞弓でも知らせて吳れゝば好いのにね。さうすれば、もう一度位逢ふことが出來たのにね。本當に、私達はをばさんには世話になつたんだから……』あとは聲が曇つた。暫しは手を顏に當てゝゐた。

で、線香を上げて合掌して席に戻ると、其處に石川がゐて、

『勝ちやん、久し振でしたね。』

『まア、石川の兄さん……』きまりがわるいやうにお勝は顏を赧くした。

『いつも變りはありませんか。』

『えゝ、いつも……』

何か言はうとして中途でよして、『精ちやん、何うです？　此頃は？』

ないやうにと注意して良太は重雄に帳面につけさせた。
寺は矢張侍衆が切腹して葬られたり、佝僂の番人の老いて死んだのが埋められたり、水死した姉が埋められたりした同じ寺であつた。その寺は今は新しくなつて、大きな石の門などが賑かな通りに面して立つてゐた。賑やかな緣日などが立つた。
しかし埋葬するのは、青山の方にしたいといふ良太の意見であつた。さつき穴を何方の方に掘らせやうといふ相談の出た時、『さう? 祖父さんと、祖母さんが右で、その隣はお初だから、その隣にして貰ひませう。』かう言つて良太は考へて、『まだ、そこを掘つても、隣にもう一つ位は掘れる筈だから。何うせ、私も行かなければやならないんだから。』
『まア、然し……』
『でも、さうですから。』
良太は笑ひもしなかつた。
寺から僧が來て經を上げてゐる間でも、あたりはかなりに賑やかであつた。線香の烟、チラ〳〵と瞬く蠟燭の灯、盛り飯に眞直ぐに指した箸、讀經の間にをり〳〵鳴らす鉦の音、さういふ光景を見てもお化を思ひ出して戰慄してゐた武雄も、その中にはいつか隅の方に丸くなつて眠つて了つた。初夜を過ぐる頃には、それでも人達は一人去り二人去りして、あたりはいくらか靜かになつた。やがて肉親のものだけ

屋の主婦も來て泣いた。

朝鮮にゐる克巳の許には、『キヨウダイガミンナセワニナツタヲバガシンダ』といふ電報を眞弓は打つた。

奥の旦那もやつて來て、『おかねも死んだか、』と言つて線香を上げた。

『をぢさんはまアじつとしてゐたら好いでせう。若い者が大勢ゐるんだから。』良太が立つたり居たりするのを見兼ねて、石川はかう言つたが、しかし良太は落着いてぢつとしてゐられなかつた。

狹い二間しかない家は、悔みに來る人達でやがて一杯になつた。大工、左官、土方の親分、近所の百姓、肴屋、豆腐屋、凡そこの町で昔から古く住んでゐる人達は、皆な此處に集つて來た。眞弓や重雄達は、隅の方に押されるやうに小さくなつて通知の手紙を書いた。町役場へは穀屋の亭主が行き、青山へは大工の棟梁が行つた。

年を老つたものの死は、若いものの死に比べて、何處となくあたりが陽氣で賑やかであつた。添つて來た妻の別れの悲哀は、老いれば老いるほど悲しいものだと聞いたが、しかも若い人々は良太の悲哀を深く思ひやるやうな心はまだ持つてゐなかつた。大勢の人達の中に良太は唯押されるやうにしてゐた。

家が手狹だからと言つて、達つて斷つても、それでも、せめて半夜だけでもなどと言つて、人達は集つて來た。ある女などは入口の板の間に腰を掛けてゐたりした。五十錢、一圓などといふ香奠を落ちの

『だつて、さう言つてるたんだもの。』

『何つて。』

『化けて出て來るつて。』

『餘り、言ふことをきかなかつたからでせう？』

『だつて、僕が……僕が……』何か言はうとしたが、止して、じろ〳〵と眼をあたりに配つた。

幸ひに、午後の三時頃になつて、眞弓は旅から歸つて來た。『さうか——何うも今日は變だつた。胸騒ぎがした。』かう言つて急いで良太の家へと行つた。其時にはもう重雄も來てゐれば、石川も來てゐた。

遺骸の前に坐つた時には、眞弓は『あゝをばさん！』かう言つたきりで腕を組んで、暫しの間、堰き來る涙をぢつと押へるといふやうにして危坐してゐた。眞弓の頭には、丁稚に來た時分のことがあり〳〵と浮んで見えた。『死目に逢はれなくつて殘念だつた。……』また暫く默つて、線香を上げて、『をばさんには本當に稚い時分から世話になつた。私ばかりぢやない。兄弟が皆な世話になつた。』

聲は曇つた。

しかし過ぎて行くものに對して、何うすることも出來ないのがこの人生の習である。眞弓はそれから先に立つて良太を扶けて種々と世話を燒いた。悔みに來る人達が出たり入つたりした。友達であつたといふ穀屋の婆さんは、線香を上げてから、長い間顏も上げずに歔欷げてゐた。お初の友達であつた乾物

手も足ももう冷たくなつてゐた。

不思議さうに無氣味さうに傍に立つてゐた武雄に、『そら、武雄、婆ちやんが死んで了つた。口をぬらしてお上げ。』良太はかう言つて筆を取つてやると、武雄は矢張無氣味さうにぶる〳〵體を震はしてゐたが、それでも立つて來て怖さうに口に筆を寄せた。

『本當にねえ、まア……たうとうお亡くなりになりましたかねえ。』かう言つて、お元は良太の方を見た。良太は頻りに口の中で念佛を唱へた。

しかしいつまでもかうして悲哀に浸つてゐる譯には行かなかつた。重雄を呼びにやつたり彼方此方に電報を打つたり町役場へ死亡屆を出しに行つたりしなければならなかつた。『それは困つたな、眞弓さん、今日歸つて來て吳れゝば好いが……』

『今日は歸る筈ですが――』

眞弓の細君は、いくらか慌て加減にそは〳〵してゐる良太を見た。『ちよつと此處にゐて下さい。彼方此方知らせて來ますから。』やがて良太はかう言つて出て行つた。

お元は獨りで其處にゐるのが何となく無氣味に思はれた。武雄は武雄で、『婆ちやん、化けて出て來やしないかしら。』

『何うして、武ちやん？』

やん、ぢいちやん、婆ちやんが變な目をしたよ。』かう言ふので、慌てゝ良太が飛んで行つた。容體が臨終に迫つてゐるのがすぐ解つた。

『武坊、武坊、婆ちやんが變だから、好い兒だから、驅けて、向うの伯父さんの内へ行つて來て呉れ。』

かう命じて置いて、自分は隣の人を頼んで醫師の許に走らせた。

醫師はすぐ來て呉れた。脈を取つて見たが、『何うもしやうがありませんな。しかし、注射すればまだ一時間や二時間は持ちますけれど……御老人ですからな。』こんなことを言つてゐるところへ、眞弓の細君が慌てた顏をして入つて來た。眞弓は一昨日から旅に出てゐた。

『今日は歸るだらうと思ひますけれど……』かう言つて、お元はおかねの床の傍に坐つて、『まア、ね、』と言つたきりで、今、呼吸を引き取らうとしてゐる病人の方を見た。

『注射は、それぢや、しなくつても好う御座んすな。』

『え、もう……』

かう言つたが、『南無阿彌陀佛々々々々々、』と念じながら、良太は何遍となく筆で口を濡してやつた。病人はちよつと口を動かして、皺の寄つた顏を曲げたが、その時痰が込み上げて來たのであつた。『南無阿彌陀佛々々々々々々。』お元も口の周圍を濡してやつた。

おしよ。』衰弱し切つてゐても、それでも奥方はこんなことを言つた。

三十分ほど其處にゐて、おかねは再び良太に負はれて家の方へ歸つて來た。おかねはすぐ疲れたやうにして、ぐつたりと床の上に横になつた。

　　　　　　　　　　　　　……

『でもよかつた。お目にかゝつて……』

良太がかう言つても、おかねは何も言はずに唯默つてゐた。口にすることの出來ないほど種々な昔が思ひ出されて、さま〴〵の光景が眼の前を早く〳〵通つて行つた。感激した爲か、心臟の鼓動が高く、熱がまた出て來た。

　　　　　　　　　　　　　……

それから五日ほどして奥方は死んだ。それを聞くと、『あゝ、たうとうあれがおわかれになつたか。』かう言つておかねは泣いた。涙はほろ〳〵とやつれた皺の多い顏をつたつて流れた。

葬式や何かで良太が忙しがつてゐるさまを、おかねはひとり床の上で聞いてゐた。葬式の日には雨が降つて、生花や造花の濡れて立てかけてあるのが裏の縁側から見えた。會葬者の俥の何臺となく其處に置かれてあるのも見えた。

十一月のある晴れた日曜の朝の九時頃、ちよつと眼を放して良太がゐると、傍にゐた武雄が、『ぢいち

さい白髪の髪は、良太の肩のところに見えた。

勝手元から入つて行くと、女中達は笑つて好いのか泣いて好いのかわからないやうな顔をして見てゐた。良太は負つたまゝで、奥方の病室の方へ伴れて行つた。

『大變だつたね。そんなにわるいのに、氣の毒だつた。』まだ丈夫な肥つた姉刀自はかう言つて、良太とおかねとを迎ひ入れた。

『奥さま。』

昏睡してゐた病人は、かう言はれてぱつちりと眼を明いた。

『あ、おかね來て吳れたか。』

『私も、どうもわるいもんですから。』

奥方の眼からも、おかねの眼からも涙が流れた。かうして相對すると、二人とも胸が塞がつて何も言へないらしかつた。二人緣があつて、一緒に主從となつて、娘時代からかうして離れずに暮して來たことを考へると、種々なことが潮のやうに二人の胸に湧き上つて來た。

『逢ひたかつたよ、おかね。』

奥方は聲を飲んで泣いた。

しかし暫くすると、いくらか落着いて、一言二言話が出來るやうになつた。『お前も痩せたね。大事に

夏はかうした大きな悲哀の中にすぎて、やがて淋しい秋が來た。垣の蟲の聲、草原の朝の露、空は碧く澄んで、赤蜻蛉などが野に群がつて飛んだ。蟋蟀の聲がさびしく枕のあたりに聞えた。

奥方の病氣は最早危篤に瀕してゐた。奥の一間、長い間居間にして住んで來たその一間に、奥方は厚い蒲團を重ねて、枕を高くして、著しく痩せた顏を見せて寢てゐた。『おかねに逢ひたい、一目で好いからおかねに逢ひたい。矢張、おかねもわるくつて來られないのかねえ。』かう毎日のやうに奥方は言つた。

『あんなに言ふから、逢はせてやりたいもんだがな。何うだらう?』

かう旦那に言はれて、良太は歸つてその話をおかねにした。

『逢つたつて、仕方がないけれど……。泣きに行くやうなもんだから。』

『でも、折角、旦那があゝ仰有るんだから、行けるなら、寒くないやうにして、行つてくれると好いがな。』

『…………』

おかねは返事をしなかつたが、午後には强ひて起きて、髮を梳いたり着物を着たりした。

『何うも眼がまはつていけない。』

『なら、俺が負つて行つてやる。』かう言つて良太は、おかねを負つて、裏口から出て、奥へと行つた。小

一日二日、世の中はしんとして了つた。何處の家の軒にも、弔旗がかゝげられ、商賈は皆な戸を閉めて休んだ。誰も大きな聲を立てるやうなものもなく、街道を轢つて行く車の音も、いつものやうに騷がしい響を立てなかつた。曇つた鬱陶しい悲しみの日が毎日續いた。人々は悲しい表情をして、喪のしるしの黒い布を胸につけて歩いた。新聞は毎日生前の御記事で埋つた。

『えらい今上さまだつた……』

奥の旦那も深く昔を思ふやうにして良太に言つた。

一月ほどしてから、乃木大將夫妻の殉死がまた人々を驚かした。愛國と勤王、日本人の血は皆な沸き立つた。殉死した當日の光景、狹い室に滿ちた悲慘な氣分、グサとつき立てた長い劍、そこから滴つた血汐は日清日露の兩役に躍り上つて敵に向つた人達の血汐と同じであつた。國民は一齊にその血汐に向つて暗涙を呑んだ。

また一月經つて、夜中に莊嚴な弔砲の鳴り響いた時分には、おかねの病氣ももう餘程わるくなつてゐた。それでもおかねはその時目を覺してそのさびしい悲しい砲の音の連續を聞いた。雨は篠をつくやうに凄じく軒から落ちた。

おかねは何も言はなかつたが、良太は、『青山でお葬式が始まつたと見えるな。今夜、伏見の方へお出になるんだな。』かう言つて、蚊帳の中に起きて、頻りに雨中にきこえる砲聲を聞いた。

て、『また何處かで戰爭でも始まつたのか、』と思つてゐたが、ある日、良太は歸つて來て、『今上さまがおかくれになつたつてな、』と話した。

『何時?』

『昨夜だとよ。』

『さうかねえ、まア。あゝいふ上つ方でも、何んなに豪いお醫者が揃つてゐても、壽命ばかりは仕方がないねえ。』

『今上さまは、お位にお卽きになつた時、まだお若かつたが……。えらい今上さまだつたがな。元の天子樣の御氣象を受けて、烈しい偉いお方だつたが……』良太もかう言つて深く考へるやうな顏をした。我々と引比べて申上げては畏れ多いことだが、矢張過ぎ行く時の力は、何うすることも出來ないのであつた。艱難と辛勞の多い世の中にお生れ遊ばして、若くして父君に離れて、內では勤王佐幕の徒が相鬩ぎ、外では外國が禍心を抱いて隙を覘つてゐる間に、一步々々とその維新の大業を築き上げ、西南の役、つゞいて日清の役、更に國を賭した日露の役、それにも首尾よく御稜威が働いて、今では國運日に盛んに、世界でも嫉視するやうな隆々とした勢ひに向つてゐるのに……』『畏れ多い事だな。』かう言つた良太の眼には、昔を思ふの心と、時の力に打克つことの出來ない人間の悲しさとがひし〳〵と胸に押寄せて來て、涙はほろ〳〵と膝の上に落ちた。

『此頃は、何うしてだかこんなに肥つちやつて……』

『矢張忙しいだらうね。』

『え、何の彼のと。』

かう云つたが、眞弓は『をばさん、誰か一人看護するものを賴みませうかね。』

『なァに、好いよ。』病人は拒むやうに、『他人になんか來て世話して貰つたつて駄目だよ。お前やお元さんが度々來て呉れるからそれで澤山だよ。』

『でも……』

『なァに、その方が好いよ。』

『それぢや、武雄だけでも連れて行つて置かうか。』

『だつて、お前の家だつて、子供が多いぢやないか。それに、おぢいさんが武雄がゐないとさむしがるしするから。』

『でも、大變でせう。』

『なァに……』

強ひて勸めるわけにも行かないので、眞弓はそのまゝにして置いた。

突然世の中は騷がしくなつた。二三日前から號外賣の聲が湧くやうに通りに聞えるのを病人は耳にし

ぶり返して、今度はどつと床に就くやうになつた。良太は朝、出かける時に粥の支度をして置いて行つて、午にまた見に來て、夜に歸つて來てから、病人の世話をしたり醫者に藥を取りに行つたりした。此頃では醫者も首を傾けるやうになつた。『さうですな、肋膜ですな。年を老つてからあゝいふ病氣が出るのはめづらしいんですけれど、』などと良太に言つた。

奥方の病氣見舞に上京した半田の養子は、醫學士で、その土地で病院長をしてゐたが、ある日、やつて來て、おかねの體を診察して行つた。見立は矢張同じであつた。『まァ、私が處方を書いて上げるから、増田さんに加減して貰ふ方が好い。』醫學士も長年世話になつたので、深い同情をおかね夫婦に寄せてゐた。

『まァ、心配せずに、ゆつくり氣を長く持つ方が好いよ。』かう慰めて歸つて行つた。

暑い日影のぎら〳〵するやうな日が續いた。狹い庭には赤い花が咲いて、緣側には脫だの汚れたものなどが積み重ねられてあつた。おかねは毎日碧い空を見ながら、薄い單衣を上にかけて寢てゐた。夜は、蚊帳の中で團扇をつかふ音が大儀さうに遲くまできこえた。

眞弓も時々は訪ねて來た。此頃は肥つて、背廣のズボンがはち切れるやうに見えた。金緣の眼鏡をかけて、髮を綺麗に刈つて、派手なネクタイなどをしてゐた。

『お前は肥つたねえ。』

『何か食べたいものがあつたら、遠慮なく仰しやつて下さい。すぐ拵へて持つて來ますから。』
『難有う。』
床の上に起返つてはゐるが、いかにも大儀さうであつた。『矢張、熱がありますね。』お元は萎びて骨立つた手に觸つて見て言つた。
武雄は矢張言ふことを聞かないで、よく病人に世話を燒かせた。『なァに、此頃はもう仕方がないから投つて置くのさ。とても言ふことなんか聞きやしないから。』かう笑ひながらおかねは言つた。何うかするとお元の行つてゐる時に武雄は學校から歸つて來たりした。『何かお呉れ、婆ちやん、俺ァ、腹減つちやつた。』
『そんなことを言ふと、をばさんが見て笑ふよ。』
流石にお元がゐると、じろ〳〵と見て默つてゐるが、ゐない時には、おかねの枕元にある菓子でも何でも平氣で取つて食つた。『武雄はそんなに言ふことをきかないと、婆ちやん死んでから化けて來るから、その積でお出で、』などと病人は言つた。
『困るね、あの病人にあの子をまかせて置いては――』かう眞弓も言ふけれども、今更急に何うすることも出來なかつた。
段々夏になつて行つた。一時いくらか好いと言つて、風呂にはひりに行つたりなどしたが、それから

ると見えるね。それが除れさへすれば好いんだけれど……何うも大儀でね。かうして寢てゐられない用もあるんだけれど、』と言つて、床を取つて突伏して寢てゐた。束ねた髪が白くぶる〳〵と戰へてゐた。

『用があるなら、何でも致しますから。』かう言つて眞弓の細君が出懸けて行つた。其時はおかねはそれでも大儀さうにして起きて、晝飯の土鍋の粥を七輪にかけて、ぐたりとしてその前に坐つてゐた。衰弱と憔悴とが著しく目に立つた。眞弓にしても、眞弓の細君にしても、老いて病んでかうして誰も世話するものがないのを見ると、深く同情せずには居られなかつた。『嫂さんでも來て世話して上げると好いんですけどもね。とても、嫂さんには出來ないだらうし、をばさんだつていやだらうし、本當にあゝして年を取つてひとりでお粥などを煮てゐるのを見ると、氣の毒になりますよ。子供でもゐなければ、私が行つて世話をして上げるんだけども……』かう言つて、眞弓の細君は、毎日來る肴屋から、比目魚とか鰈とか病人にわるくない魚を買つて、それを煮て皿に入れて持つて行つてやつた。

『氣の毒だねえ、お元さん。此間、貰つた比目魚は旨かつた。』

『何うでしたか、加減がわからないから。』

『結構でしたよ。お元さん、中々煮物がお上手だ。』かう言つて、また持つて來て呉れた魚を喜んで貰つた。

『お元さん、使ひ立てゝお氣の毒ですけれど、戸棚に藏つて置いて下さいな。お午の時に戴くから。』

に出かけて行つた。奥方は瘦せて血色もわるくなつて、烈しい咳嗽などをせいてゐた。

『もう、今年は駄目だよ。お別れが近づいたよ。』

微かな聲で苦しさうに奥方は言つた。

をり〳〵訪ねて行く眞弓の細君が、『何うもをばさんの樣子は變ですよ。風邪だつて言ひますけども、何うもそれにしては長すぎるから。』かう言ふのを聞いて、眞弓が行つて見たのは、それから一月二月經つて花などがもう咲き始める頃であつた。その日はおかねは起きてゐた。『まだ、どつと寢るつていふほどでもないけれども……何うも氣分がさつぱりしなくつていけない。……それに、武雄が言ふことをきかなくつて、……何うも始末に困る、』などと言つてゐた。いくらかは血色もわるく瘦せも見えてゐたけれども、それほどひどく憔悴してもゐなかつた。『誰か一つしつかりした人に見て貰ふ方が好う御座んすね。』かうは勸めながらも、眞弓は其日は奥方の病狀などを話し合つてそして歸つて來た。

『なァに、大したことはないんだらう。暖くなれや段々よくなるだらう。根が丈夫な元氣な質なんだから。』

かう眞弓は細君に言つた。

花は咲いて散つた。綠葉が美しく郊外の道を彩つた。續いて袷やセルの時季が來て、雷が鳴つて雹などが降つた。矢張おかねの病氣は本當でなかつた。梅雨の鬱陶しい天氣の續く頃には、『何うも心に熱があ

たことも、その時分の功臣や元老連が一人々々死んで行つて段々新しい人達の世の中になつて行つたことも、東洋の一島國が俄かに世界にも恐れられる一等國になつて行つたことも、女學生が昔とは違つて男にも拮抗するやうな生々とした色を着けて來たことも、カフヱなどといふものが出來て、給仕女が美しい色彩をあたりに附けるやうになつたことも、何も彼も此處には知られずまた語られなかつた。月日が唯流れた。

五十三

ある年の二月のある晩、おかねは風呂から歸つて來て、『風邪をひいたと見える。惡寒がして、ぞくぞくして仕方がない。』かう言つて早くから寢たが、それから、五日が十日になり、十日が十五日になつても、氣分が何うもさつぱりしない。平生丈夫なので、醫者に懸つたことなどもなく、大抵は賣藥などで間に合はせてゐたが、餘り長く治らないので、かねて知つてゐる醫者に診て貰ふことにした。中年の醫者は、『なアに、矢張、インフルですかな。』かう平氣な調子で言つた。

寢たり起きたりで、どつと床に着いてゐるやうなこともなかつた。それに、丁度その時分、去年の秋頃からこれも矢張風邪の氣味で床についた奧方が、急にどつとわるくなつて、博士がやつて來たり、半田に醫者をしてゐる養子が上京したりしてゐたので、氣分のわるいのを押へて、おかねはよく見舞に奧

の上に散らばつた塵埃をトン〳〵とはたいて立つて、火鉢の處に坐つて、鐵瓶の下の火をあらけた。髪の具合から腰の曲つた形まで、何うしてももうお婆さんとしか眞弓の細君には見えなかつた。覺えてから元氣もなくなれば、影も薄くなつた。もう元のやうな活潑な物の言ひやうもしなかつた。

長い間心配した相續者のことなどももう問題にはならぬらしく『どうせ、こんな貧乏者のところに養子なんか來やしないから、死ぬまで稼いで、その跡は眞弓やお元さんなんかによくして貰ふんだ、』などと笑ひながら言つた。齒がなくなつてから、をぢさんは入れろ〳〵つて言ふけれど、そんな不自由な眞似をして齒を入れて見たところで仕方がないよ。『なアに、高いお錢を出して、齒を入れて見たところで仕方がないよ。』をぢさんは入れろ〳〵つて言ふけれど、碌々味もしないといふのに、馬鹿々々しい。』

眞弓の細君が、大勢の子供を持てあます話をして滴すと『それはさうだけども、順送りだからね、育てゝ置いてわるいことはありませんよ。』

何うかすると、茫然して、何も考へずに長い間ぢつとして坐つてゐることもあつた。古い箪笥、お初の嫁に行く時に持つて行つた箪笥、その隣には佛壇があつて、一方には蛇のとぐろを卷いた宇賀神の幅物などがかけてあつた。時計も昔の時計、長押の額も昔の參議連の銅版繪の寫眞、山陵の檢分の時の記念の送り狀、さういふ古い空氣の中にをり〳〵明るい午後の日がさし入つて來た。

さうしてゐる中にも、月日はまた流るゝやうに經つて行つた。維新以來の大きな變動が思潮界に起つ

『お前、お復習をしなくちやいけないぢやないか。』

『遊んで來てッからすらい。』

『遊んで來てからではいけないよ。すぐしないと、折角教はつて來たのを忘れて了ふぢやないか。だから、此間のやうに丙なんかになるんだよ。』

それにも頓着せず、武雄は平氣で外へ出て行つた。

五十二

今でもおかねは詮造のことを思ひ出した。何うかすると、ひよつくり歸つて來やしないかしらなどと思つて胸を躍らした。時には、もう此世にはゐない姿がはつきりと明方の夢に見えたりした。おかねの頭には、いつか雜誌で見た獰猛な土人が集つて、詮造がそれに捕へられて、深い森林の中で殺されてゐる悲慘なさまなどが想像された。しかしおかねはもうそれを誰にも話さなかつた。良太にすらも話さなかつた。

おかねは老いて內職などはしてゐなかつた。大抵明るい狹い緣側に向いて、古い針箱を出して、もうわるくなつた眼で良太の着物の繼ぎなどを當てた。足袋をついだり雜巾をさしてゐることなどもあつた。眞弓の細君は、それでも町に使ひに來た次手などに、時々ちよつと寄つて行つたが、さういふ時は、膝

『よう、お呉れよ。よう……』

『上げないつて言ふのに……わからない子だねえ。そんなに我儘を言ふと、向うの伯父様に言ひ附けてやるよ。向うの伯父さんはこはいよ。』

『あんな奴、こはくないやい。』

あきれて、おかねは默つて、くし卷にした白髮頭を裁縫の上に落して、針を運ばせてゐると、

『婆ァ。』

猶、默つてゐると、

『婆ァ、呉れやがれ。よう、よう。』

立つて來て、小さな體を寄せて、ぐい〳〵おかねの體を押した。

『何をするんだよ。そんなに押すと、婆ァちやん、轉んで了ふぢやないか、本當にあきれて了ふ。ぢや、ね、お菓子をやるから、それを食べて勉強おしよ。』

立つて、茶簞笥の中から、最中を二つ出してやると、

『そんなもんなんかいらないやい。お錢でなくつちやいやだい。』かう言つて、猶すねてゐたが、急に其處に、針箱の上に置いてある最中をぐいと取つて、『呉れなけれや、好いやい。婆ァ、婆ァ。ぢいちやんに貰ふから好いやい、婆ァ、婆ァ。』かう言つて舌を出して、袴をぬぎ棄てゝ外に行かうとした。

五十一

『何うしたんだえ？　今朝、帳面を買ふつて、お錢を持つて行つて、それで帳面を買はないで……』
『だつて、落しちやつたんだい。』
『此間も、そんなことを言つてゐたぢやないか。落したんぢやないんだらう。何か買喰ひでもしたんだらう？』
『さうぢやない、さうぢやない。』
武雄は學校から退けて來ると、すぐカバンを其處に投り出したまゝ、袴もぬがずに、其處に仰向けに寢轉んで、壁に兩足を寄せて、おかねをせがんでゐるのであつた。
『よう、お呉れよ。』
『だつて、そんな買喰するお錢なんか、婆アちやんはやれないよ。』
『よう、お呉れよ、よう……』
『本當に、此頃は武雄はわるくなつた。友達がわるいんだよ。あそこの豆屋の子や肴屋の子なんかと遊ぶんぢやないよ。あんなものと遊ぶから、いけなくなるんだよ。武雄は、豪い人になるんぢやないか。父さんに褒められるやうな子になるんぢやないか。』

『年を取つたな。』

『でも、此頃は大分燒がきてるァな。よし、よし、よしなんかんて言つてるけれども、本當はこれが駄目なんだから。』かう言つて耳を指して、『でも、運は好い方だな。淨水の時もさうだが、今だつて、金が入つて、ウン〳〵鳴る位だ。』

などと笑つた。

『でも、澁谷の旦那にはいくらか分けてやつたのかしら。』

『始めは少しはわけてやつたらうけども……。今ぢや、何うして、何うして？　澁谷の旦那、こぼしてらァね。』

『ぢや、半田の旦那が一番旨いんだな。』

『それも、何うだかわからねえな……。何うなつてゐるんだか、本當に。金ばかり殘したつてほつくり明日にも死んぢや何にもならねえがな……。靑山さんなんか、長年つとめて、それで、今だに元の通りの四十錢だとよ。何うしてさう年を取ると、慾が深くなるのかなァ。』

『何うも、人間はさういふもんと見える。年を取るほど、慾が深くなるもんと見える。さういふ老人が彼方此方にゐるよ。』一人の職人はかう言つてその例を舉げた。人々は皆な笑つた。

程度の貸家を二三軒拵へさせた。植木屋の親方は、眞弓が引越して來た頃には、まだ丈夫で生きてゐて、庭をつくつたり何かしたが、昨年ぽつくり六十五で死んで、あとは二十八九の若い息子が繼いで、身輕の扮裝で、職人を指揮して、木を移したり庭をつくつたり垣を拵へたりした。大工は例の子供の時分淚ばかり垂らして馬鹿ではないかと言はれた倉橋が引受けて、毎日トンカントンカンと音を立てた。その大工には既に十七八になる重雄と友達の息子がゐて、父親と一緒に、臺木に杉板を載せて、終日長く鉋を使つた。

職人達はをり／＼奥の噂などをした。『何うも、金が殘ると見えて、此頃は旦那は汚くなつたぢやねえか。何うだえ？ まァ、今日の茶請は？ 誰に殘してやるつて言ふ本當の子もないのに、何うして、ああ金汚くなるんかな。年を取ると、段々わからなくなるつて言ふが、本當だな。』こんな事を言ふかと思ふと、『あの養女だつた娘さんは、今ぢや三人の子持になつて北裏にゐるつて言ふぢやないか。なァに困つちやゐねえよ。男がしつかりしてゐるから、小女なんか使つて、門構への家に入つてしやんとしてらァな。あの時は騷ぎだつたな。』『本當だよ。あの孃さんも、隨分、思ひ切つたことをやつたもんだ。』午後の茶の時などには、皆な寄つてたかつて、種々な噂をした。

『旦那は一體いくつだらう？』

『もう七十五六だな。』

『丈夫で結構ですね。』

おかねはいつも其處で五六分立話をした。

お初の友達の乾物屋も、以前ゐたところから五六軒先に引越して、二階屋などを建てて、綺麗な店にしてゐた。その友達の髮ももう白かつた。

奥でも、此頃は良太のする用が多かつた。値の出た廣い地面を畠や竹藪や梅林にして置くのは惜しいと言ふので、樹を伐つたり、竹を賣つたり、畠をつぶしたりして、高い地代で都會の人達に貸した。で、其處には瀟洒な二階屋が出來たり、長い立派な板塀が取廻されたり、七八圓の家賃の同じつくりの家屋が二三軒建てられたりした。臺灣に行つて澤山金を殘して來たやうな俄分限もあれば、毎日俥で會社へ勤めに行く口髭の生えた中年の紳士もゐた。と思ふと、ある家の若い奥さんは、流行の肩掛にお召の派手なのを着て、ダイヤの指環などをはめて、ぴらしやらして小婢を伴れて出掛けて行つた。七圓の家賃の家屋に大きな招牌をかけて住んだ醫師は、年を取つた白髭の人で、學問が出來るので評判な娘は、二十七八でもあらうが、今だに獨身で、茶色の袴を着けて、町の方の學校へと毎朝出て行くのを人達は見かけた。

『何うも、地面で貸すよりも、家を建てゝ家賃で上げる方が得かな。』『今ではこんなことばかり考へるやうになつた奥の旦那は、退屈まぎれに、猶明いてゐる地面に繩張を良太にさせて、そこに十圓、七八圓

時分のさびしい通り、其處に一軒此處に一軒と言ふやうに途切れ〳〵になつた通り、それも大抵は茅葺で、瓦屋根などといふものは一軒もなかつた。そしてその附近は梅の林と竹藪と畠と唯それ ばかりであつた。そこを日の暮れる頃に、百姓の車が一つ二つさびしさうに通つて行つてゐた。おかねはちよいと使ひに出た折などに、その時分のさまををり〳〵今も頭に浮べた。尼寺の門前は、長いさびしい通りだつたが、今はそこはすつかり家で一杯になつた。常磐津の師匠の借りてゐた家は、一部は取壞されて大きな荒物屋になつたけれども、一部は今でも殘つてゐて、その舊い小さい窓が通る度におかねの眼に留つた。おかねはをり〳〵その不仕合せの母子の行方などを頭に浮べた。

豆腐を買ひに行くと、其處の婆さんは、今年八十で、まだ達者で店に出てゐるが、それがよくおかねをつかまへて昔話をした。『さうですかね。あの貞公が生きてゐましたか。』こんなことを言ふかと思ふと、『それでもおかねさん、達者で結構だ。何でも、長生しなけれや損ですよ。私なんかでも、婆ァ婆ァつて若い孫に馬鹿にされながらも、かうして生きてゐるから、賑かになつた町でも見られるんですよ。』などと言つた。

『でも、貴方のやうには――』

『なァに、八十なんて言ひますがな、經つて見れや、何でもありやしませんよ。唯體がきかねえのが一番困るけれど、心持は、昔の通りですがな。』

て、地主顏して、懷手をして其處等を步いてゐた。

眞弓の細君は、ある時、あたりの開けた話をおかねにすると、

『本當ですよ。百姓が皆な立派な地主さんになつて了つたからね。』

『本當にびつくりするやうですね。私の周圍ももう大抵家になつて了ひましたよ。』

『定さんなんかも好いつていふ話だね。』

『え、え、もう、此頃ぢや、立派にしてますよ。來た時には、あそこの子供達なんか汚い着物を着てゐたんですけどもね。お上さんでも、ちよつと小綺麗になりましたよ。』

『をぢさんなんかも、あの時分、地面でも買つて置けば好かつたんだけれど……。矢張、運がないんだね。をぢさんは――』

『さうですね、その時分買つてお置きになると好う御座んしたね。その時分なら安かつたんでせう。』

『安いどころか、お元さん。坪一圓の二圓のつて言ふことはなかつたんですよ。一段いくら、一町いくらつていふ値だつたんだから。だから、其時分、少しでも好いから買つて置いたら何うですつて、をぢさんに言つたんだけども……矢張、運がないんだよ。』

『惜しいことでしたねえ。』

通りなどでも見違へるほど綺麗になつて、二階屋の店などがあちこちに出來た。初めて田舍から來た

ゐるのを眞弓も眞弓の細君も見た。

それに引かへて、あたりの其頃の發展は非常なものであつた。眞弓が其處に引越して來た時分から、都會の郊外膨脹はその萠芽を出しかけてゐたのであつたが、此頃では殆ど眼も驚かるゝばかりにあたりがひらけて行つた。新築の家は畠の中、野の道、林の角などに到る處に建てられた。今までは畠道であるのが廣い二間道路になり、思ひもかけない大きな門や大きな家屋が其處に建てられたりした。

地代も俄かに五厘から三錢四錢になり、元は坪一圓でも買手のなかつた土地が五圓、六圓、十圓でも滅多には得られないやうになつた。百姓達も穀物や野菜や桑をつくるよりも、都會の人達に貸して地代を取上げる方が好いので、畠は次第に宅地になり、百姓は一躍して立派な地主さんになつた。俄分限が其處にも此處にも出來た。

『えらい値が出て來たな、良太。かうと知れば、運動までして、金をつかつて、地面を淨水に賣るんぢやなかつたな。』

などと奥の旦那は言つた。

山師で、長い間良太がつかつて、木を切らせたり土方代りにしたりした惣助といふ男は、先妻を離緣する時に、良太が仲に入つて一方ならず骨を折つてやつた男だが、先祖から讓り受けた田地に値が出た爲に、此頃では、立派な大きな何處のお邸かと思はれるやうな家屋を新築して、着物なども小綺麗にし

實の死に逢つてから、人々は良太の白髮の多くなり、おかねの元氣の著しくなくなつて行つたのを見た。相變らず草鞋を穿いて、良太は奥の方へ出かけて行くけれども、もう昔のやうな氣力はなかつた。おかねもめつきり年を取つた。をり〳〵出かけて行く眞弓の細君は、『をばさん、大變に弱りましたね、』などと言つた。

それでも十六七になつた重雄は、ちよい〳〵良太夫婦を訪ねた。重雄は武雄を伴れて十二社に遊びに行つたりした。何も知らない武雄は、矢張、毎夜良太の脊に負はれてお湯に行くので、『もうをぢさん、こんな大きくなつた子を負つて行くのは大變でせう。歩かせて行く方が好いでせう。』見かねて、眞弓はさう言つたりした。

『克巳も、朝鮮に行つてゐるから、仕方がないけれど、老人達に、あゝいふ子の世話をさせて置くのはいかんよ。何ァに、世間なんか、何うでも好いぢやないか。何うせ、自分の本當の子なんだもの。親類になんか知れたつて構ひやしないぢやないか。今度、手紙で、さう言つてやらう。』こんなことを眞弓が言ふと、

『何ァに好いよ。世話がやけるつて言へば、世話もやけるけれども、おぢいさんには、あれで、いくらか樂みになるんだから。……でも、此頃は武雄はきかなくなつた。私の言ふことなんか、てんで聞きやしやいから。それも、まァ、子供だから仕方がないよ。克巳に言つてやつたつて、心配するばかりだから、まァ世話の出來る中はするよ。』かうおかねは言つた。何時となく全くのお婆さんになつて了つて

大急ぎで俥を賴んで、またもさびしい悲しい心を抱いて、いつもの同じ道を山の手の方へと急いだ。

四十九

『實は一番貧乏鬮を引いたな。』かう激昂して言つた石川は涙を流して、『をぢさん、新町のをぢさん、實は幼い時分から世話をしてやつたりしたもんだから、氣心もわかつて、本當の兄弟のやうだつた。氣の毒だつた。本當に氣の毒だつた。一家のために犧牲になつたんだ。しかし、をぢさん、これと言ふのも、本當は御維新さへなければ、若い者がこんなに苦勞しなくつても好かつたんだ。おてつだつて、この父さんだつて、母さんだつて、皆なそのために、苦勞をして命を縮めたのだ。おてつなどでも、父が死んでから、何んなに、この家のことを苦勞してたか知れなかつたんですからな。口をつぶるまでそのことを心配してゐましたからな……。あゝ、實際、御維新は、士族に取つて、大きな打擊だつた。しかし、をぢさんそれももう過ぎ去つた。かうして一つ〳〵過ぎ去つて行くのだ。』

良太は點頭いただけで、唯默つて俛首れた。良太の老いた皺の寄つた眼からも涙がほろ〳〵こぼれた。

五十

また月日が經つて行つた。

を病人は常に口走つた。

十一月のある寒い曇つた午前に、一臺の擔架は、看護婦に送られてその病院の門から出た。そこには、まだ死なゝい實の屍が載せられてあつた。大きく明いた眼、尖つた鼻、痩せ切つた頬、それに絶えず咳嗽をせいて痰を吐くので、傍につき添つた人達は、その度毎に擔架をとゞめてそれを拭き取つてやらなければならなかつた。何うせ、助からないのなら、家に伴れて來て引取らせたい。かういふのも、實は高價な病院の失費に人達が心を惱した結果であつた。傍には、良太と眞弓と石川と重雄と、他に實の門下生のやうな男がつき添つて靜かに歩いた。

石川ももう著しく髮が白くなつてゐた。良太と並んで歩きながら、昔の話などをいろ〳〵とした。かうして實に附添つて來ようとは思ひもかけなかつたなどと石川は言つた。空の曇つて今にも降り出して來さうなのと共に、人々の心の光景も慘としてゐた。

夕暮近く、病人は山の手の自宅へと漸く擔ぎ込まれた。延びた頭髮のやうに鬱陶しく茂つた樹、ところ〳〵破れた暗い障子、軒の曲つた古い家、黴臭い古文書の散つた室の中に、枕を東向にして、病人は靜かに寢かされた。『家の方が好い、家の方が靜かでいゝ。』蒲團の裾を輕く叩きながら良太は言つた。

良太夫婦は、今は、實の死去の報を待つばかりであつた。一日々々とさびしい暗い日が經つて行つた。二人は夕飯の膳にも落着いて向つてはゐられなかつた。果してその別れの日は來た。良太とおかねとは、

しかし良太夫婦の誠實な祈念も、神は受けては呉れなかつた。肌寒い風が郊外の草を吹く頃には、實はもうとても見込のないものにされてゐた。夥しい痰、烈しい熱、おかねが最近に見舞に行つた時には、もう起上ることも出來なくなつて、盡きずに出る痰を細君は一々紙で拭き取つてゐた。『をばさん、もうこんなになつちやいました。』かういふ病人の眼からは、大粒の涙がほろ〳〵滴れた。

病人は熱が取れないと言つて、焦れて檢溫表を壁にたゝき附けたり、『死んでも死なれない體だ、』と言つて聲を上げて泣いたりした。今になつて、一家の犧牲に一生を徒費した自己の生活が呪はれるといふやうに、『殘念だ、殘念だ、』を連呼した。後には傍にゐた眞弓にすら當り散らして、『誰のお蔭で、貴樣はそれだけになつた、』などと呶鳴つた。

かと思ふと潮が引いたやうに、ぐつすりと深く寢込んで一日一日と過した。診察に來る醫師は、一刻每に脈搏の不整に、呼吸の數の多くなつて行くのを見た。『ホ、これはひどい。肺に大きな穴が明いたと見えるな。』さもめづらしい病狀を確め得たのを喜ぶやうに院長は言つた。

熱のために腦を侵されて、意識を失つたやうな狀態がまた幾日か續いた。良太やおかねが行つても、もう本當にわかるのかわからないのか知れないほどであつた。眞弓の新築の家屋を自分で建てた家のやうに言つて、『もう立派な家が出來た。廣い家だ。庭も立派だ。あそこに行つて寢る。』かう言つて强ひて起上らうとした。何も彼も皆涙の種であつた。思つて得ることの出來なかつた希望の成就したやうなさま

やることになつて、一緒に二人して送つて行つた時のことなどを頭に描いた。『おてつもさうだつたが、實も矢張苦勞したからね。それで、そんな病氣が出たのかも知れない。』良太夫婦は、さびしく夕飯の膳に向ひながらこんなことを話した。

ある夜には、良太は死金にと貯蓄した金の一部を郵便局から下げて、それを持つて眞弓の家に行つた。『働きさへすれば、金はまたどうにでもなる。死にかけてゐるものを病院から出すわけにも行かない。』かう言つて良太はおがねと相談して來た。それは村雨の降つたり晴れたりするやうな夜で、秋はもう闌けて、木の葉などはすつかり黃葉してゐた。蟲の音が露に咽んで微かに鳴いてゐた。

『私も、その積りでをりました。』かう眞弓は言つて、その金と自分の金とを併せて、翌日病院の方へと屆けた。病人は、『濟まない、濟まない。さうでなくつてさへ、新町のおぢいさんには世話になつてゐるのに……』と言つて淚を流した。

醫師は何と宣告したからとて、萬が一治らないといふことはない。良太夫婦は實が全快して退院して來るのを每夜夢に見ながら、絕えず神佛に祈念した。お初に死なれ、詮造に別れ、今また實に逝かれては、二人はこれから先の老後を誰を賴つて送つて行つて好いかわからなかつた。物質の方では、何ぞと言つて困るのを見兼ねて補助してやつてゐるけれど、精神の方では、どれほど實に力になつて貰つてゐるか知れない。それに、重雄の生長についても、今死なれては、それこそ大變だ。

病人のことが氣にかゝつて、落着いて垣根を直してなどはゐられなかつた。夕方になると、良太は眞弓の家へとその容體を聞きに出かけた。

眞弓は大抵社の歸りに、病院に寄つて來ることにはなつてゐたが、その話に由ると、一日增しに好くなつて行くどころか、段々重く、衰弱して、顏の色なども日增にわるくなつて行つた。それに、病人は生計の貧しいのに、さういふ高い費用のかゝる病院に入院してゐることを氣にして、每日口癖のやうにそのことを案じてゐた。『本當に、困つたもんです。あの病氣には心配とか苦勞とかゞ一番いけないんですからな。院長なんかも、もう少し氣を落着けるやうに……やうにつて言ふんです。何か心配ごとでもあるんですか。何うも神經が昂つてゐて仕方がないつて言ふんです。しかし、實際困るんですからな。嫂さん始め、もう來週拂ふ金はないなんて言つてゐるんですからね。』かう心配さうに眞弓も言つた。

『何うして、そんな病氣が出たんだらう。』良太夫婦は、かう言つては、艱難と辛苦との多かつた實の一生を頭に繰返した。難かしい母親、多い兄弟、一家の爲めに犧牲となつて、抱いた志をも十分に成遂げることの出來なかつた半生、さういふ種々の光景を良太夫婦は思ひ出して同情した。本當に、自分の我儘の一日も通つたことのないやうな實の半生だ。續いて、おかねは、實がまだ年若くて、日曜日每に、短い袴を穿いて、太いステッキを持つて、本鄕からやつて來た時分のことや、始めて役所に出て、塾からおかね達の家に下宿することになつて、お初と一緒に樂しく暮した時分のことや、いよ／＼お初を嫁に

『谷口で。』

『ア左樣ですか、ついお見それ申して。』

良太はかう言つて詫びた。それは細君の實の兄であつた。

熱が三十九度、痰には血は交つてはゐないけれど、徴候に、何うしてもその疑ひがある。血色もよくない。良太は默つて唯おづ〳〵して坐つてゐるばかりであつた。と、前の緣側の處に來て、看護婦は、病人の頭に響くにも頓着せずに、氷の大きな塊を錐で碎いて、それを氷嚢の中に入れた。夕日は中庭の樹立の間からさし込んで來た。

良太は歸る途すがら心配しながら歩いて來た。『實に、今、死なれたら、何うするんだらう。』かねて婿とも息子とも思つて世話もし、賴りにもなつて來ただけに、一層そのことが苦勞になつて、電車の停留場の階段では、二段ほど踏外して、ばつたり倒れて、暫くは起上ることも出來ないほどにしたゝかに腰を打つた。

それと聞いて、おかねも心配して出かけて行つたが、『困つたもんだね。とても五日や六日で治るやうな病氣ぢやない。』かう言つて、落膽したやうな顏をして歸つて來た。しかし、いくら心配して見たところで、二人には何うすることも出來なかつた。良太は近所にある神に茶を斷つて、病氣平癒の願をかけた。

一日は一日と經つた。矢張、良太は毎日草鞋を穿いて仕事には出て行くけれど、用をしてゐる間にも、

『やれ、やれ。』かう良太は言はずには居られなかつた。カン〳〵と夕日の當る障子の蔭に、實は氷嚢を頭に載せて、足を長く延して寢てゐた。細君と重雄と他にもう一人見知らない口髭の生えた男とが其處にゐた。

病人は四五日前から、惡寒惡熱が往來して、何だか風邪を引いたやうだと言つてゐたが、一昨日此處に診て貰ひに來て、突然卒倒してそのまゝ入院しなければならないことになつたといふ話であつた。實の生計の貧しいのを知つてゐる良太は、困つたことが出來たと思つた。續いてそれが重い忌はしい病氣であるといふことを聞いて、一層心を苦めた。病人の前では、滅多に大きな聲をしては言へないけれど、何でもおてつの歿つた病氣と同じらしく、長く潜んでゐたのが突然出て來たのだらうといふ醫師の診斷であつた。

やがて眼を覺ました病人は、『おぢいさんでしたか。こんな病氣になつて了つて、また御心配をかけて……』と一面苦しさうな一面術なさゝうな挨拶をした。今朝、眞弓に逢つた時にも、その話が出たが、『一日、五圓づゝもかゝる病院に入つて、何うする積りだらう?』かう良太は思はずにはゐられなかつた。

『新町のおぢいさんで御座いますか。』

傍にゐた口髭の男がかう言つて丁寧に挨拶した。

『誰方さまで?』

立つて行く。お前の父さんは、足弱や老人を馬に乘せて出して置いてから、あとで勘定をすまして來るといふ役なので、祖父さんやお前の父さんにはつまり一日中逢へない。いつも一里か二里づつ隔つてゐる。そして、向うに着いて、夜始めて皆な一緒に顏を合はせるといふ譯なのさ。考へると、今でも見えるやうだよ、祖母さんがほつくりほつくり馬に乘つて行く樣子が……。丁度、六月頃で、山には藤の花が咲いて、鶯が好い聲で鳴いてゐたよ。』

『遠い昔ですね。』

『本當だね、遠い昔になつたね、もう。』

おかねは其時分のさまを思ひ出すやうな風をして凝と深く思ひ沈んだ。

四十八

その翌年の秋の九月頃、良太夫婦は、實が急に重い病氣にかゝつて、駿河臺の病院に入院したといふことを耳にした。驚いて早速見舞に行つた良太は、大きな病院と白いピラシヤラする服を着た大勢の女達と廣い長い廊下とその廊下に添つて一間毎に仕切られてある病室とを見た。眼の悪い良太は、彼方に往つては聞き、此方に往つては聞きして、それでもわからずにまご〳〵してゐたが、ふとそれを孫の重雄が見附けて、『おぢいさん其方ぢやない、此方ですよ、』と言つて伴れて來てその病室の中へと入れた。

好い……その從妹なんかだつて、わざ／＼行つて逢ひたいとも思はないよ。お錢をつかつて、くたびれ
つらしい……』

『さうですかね。行くと好いんだがな。』

『折角だけどもね。』

おかねは笑つて『母さんなら、また、話もあるだらうし、それに、母さんなら、まだ伯母が生きてる
るかも知れない。もしゐれば、八十五六だけれども……』

『しかし、時と言ふものは面白いもんですね、昔は十日も十五日もかゝつてやつと行つたところを、
一晩かそこらで行けるやうになつたんですからね。をばさんなどの生れた所に停車場が出來てますよ。』

『高揃にかえ？』

『いゝえ、漆山。』

『さうかえ、漆山に停車場が出來たかえ？　高揃から山形に行くには、漆山から長町といふ長い〳〵
退屈するやうなところを通つて行つたものだがね……。夏なんか暑いところだつた。それにその時分、漆
山には陣屋があつたからね。』かう言つて、その時分のことを思ひ出すやうにして、『さう言へば、お國替
の時が目に見えるやうだ。私はまだ十九でね。祖父さんと盲目の祖母さんと、それからお前のお父さん
とお母さんとそれだけで來たんだがね。祖父さんは、宿をきめなければならないので、いつも一足先に

工事で、つかへてゐましたが、漸く先月通じましたから、山形までわけなく行けるんですから。』

『さうかねえ。』おかねは笑つて、『だつて、大變だ。それに、行つたつて、仕方がないよ。』

『夜上野を立つと、明日の朝は、山形へ着くんですからね。行つて見ませうよ。二日三日のつもりで。』

『だつて、かう年を老つちやね。』

『一度、お袋が生きてる中に、是非伴れて行つて見たいと思つてゐたんですよ。一緒に行つて、昔のことを聞いたり、今のさまを見せたりしたら、面白いだらうと思つて……。梟のゐた立谷川だの、山寺だの、さういふ處も一緒に見たいと思つてね。今でも、をばさんの知つてゐる人が生きてゐるにはゐるんでせう。』

『さァね。』考へて、『もう、大抵ゐなくなつたかも知れないよ。從姉妹が二三人ゐて、その中の一人は死んだつて、もうとうに聞いたが、あとのが生きてゐるか何うだか。何でもお咲つて言ふのが、さうだね、私なんかより一つか二つ上で、今では大層好いつていふ話だつたが、それが生きてゐれば、生きてゐるんだけれど……』

『行つて御覽なさいよ。』

『折角だけども……本當に、かう年を老つてから、長い汽車なんかに乘つたつて、面白いことはありやしないよ。昔の遊んだところなんか見たつて仕方がない。それよりは、かうして家にゐる方が安樂で

四十七

ある時、眞弓は突然やつて來ておかねに言つた。

『叔母さん、叔母さん。』

『え。』

『叔母さん、山形へ行きませんか。』

『山形へ？』

山形はおかねやお幾などの生れたところであつた。お幾が眞弓の父の許に嫁いて來たのも其處なれば、眞弓の姉のおてつの出來たのも其處だ。おかねの十八九の時に、殿樣は其處から此方へとお國替になつた。盲目の祖母を馬に乘せて、長い旅をおかねもお幾もして來たのであつた。

『行きませんか、叔母さん。』

『だつて、今、行つたつて、しやうがないぢやないか。』

餘り進まないといふ風でおかねは言つたが、言葉をついで、

『何うして、急にそんなことを？』

『でも、汽車が漸く開通しましたから。板谷峠と言ふのがありますね。あそこで、長い間、汽車が難

『一つは好いでせう。召上るんでせう。』

かう言つて、奥方が酌をして呉れた。

『此頃、實は來るかえ？』

『え、此間、ちよつと參りました。』

『今度來たら、ちよつと寄つて呉れつて言つて呉れ。久しく逢はない。別に用つていふ用もないがな。』などと旦那は言つた。今はもう誰も訪ねて來るやうなものもないらしかつた。『でも、近くに越して來たつてな。良太やおかねが心丈夫だと言つてよろこんでゐたつけ。何しろ、もう年を取つてるからな。さうだ……良太は私と一つ違ひだから、七十一だらう。』

『皆な年を取るばかり。』

かう傍から奥方はさびしさうに言つた。眞弓は、養女のことやら、養子のことやらを訊きたかつたけれど、さういふことを訊く場合でないのでよした。石川や、精一の話も出た。しかし昔娘時分にこゝに奉公に來て、奥方が喧しいので、夜は行燈に衣をかけて本を讀んだといふおてつのことは遂に噂に上らなかつた。餘りに時が隔てすぎた。

んで、良太は持つて來た。何もない時には、『これは、何ぞの用に立つでせうから、植木屋でも入つた時にはいるでせうから、』と言つて、丹念にためて置いた棕櫚繩の赤いのと黑いのとを五束も六束も持つて來て呉れた。

ある時には、『此方に引越して來たんだから、奧にもちよつと顏を出して置いてお呉れな。』かう叔母から言はれて、眞弓は久し振りで奧の邸を訪ねた。眞弓の眼には、十年前と少しも變らない茶の間の中に、人間のみ徒らに老いて行つてゐるさまが映つた。長火鉢、長押の額、長い緣側、庭、深い樹の繁茂、何一つ變つてゐないのに、奧方の顏には夥しく深い皺が刻まれ、姉刀自の髮は白く、旦那の耳は餘程聲を高くしなければ通じないほど遠くなつてゐるのを見た。『眞弓さん、まア見違へるやうに立派になつた！』かういふ姉刀自の聲は同じであるけれど、何處か影の薄いやうなところのあるのを眞弓は見た。旦那はまだそれでも丈夫であつた。『さうか、地理の方をやつてるか、地理と言ふことは、一番大切だ。戰爭でも、產業でも、地理がすつかり呑込めてゐなければ何にも本當のことは出來やしないんだから……。それは面白い、』などと大きな聲で言つた。今の政治界の話なども出た。『何うも、不眞面目でいかん。勿論、時勢が違ふには違ふが、御維新時分には、政治家はもつと眞面目な眞劍なもんだつた。伊藤なんかでも、もつと眞面目だつたがな、』などと言つた。矢張、毎日一つづつはかゝさず豆腐を食ふと見えて、湯豆腐鍋は旦那の膳の前に置かれてあつた。婢はやがて膳などを運んで來た。

けれど、それでも良太は別に何とも思つてゐなかつた。それに、克巳の子の武雄が、二人に取つては、今は此上ない慰藉ともなり退屈凌ぎともなつてゐるらしかつた。殊に、良太は、『武坊、武坊』と言つてあまやかした。仕事から歸ると、夜は武雄を負つていつも近所の湯へと出懸けて行つた。お元が行つて話してゐる中にも、武雄の話が二人の口から何遍出るかわからなかつた。今年七つになる武雄は、其間にも絶えず良太の肩に乘つたり膝に腰かけたり突懸つて押倒さうとしたりして戯れた。『おぢいさん、もう參つた。御免、御免。武坊はきつい、きつい、』などと良太は言つて笑つた。

『不思議ですよ。此兒は――おぢいさんばかりにかじりついてゐるんですよ。私の方には、ちつとも來ないんですよ。』

『矢張、をぢさんは子煩惱でいらつしやるからですね。』

『昔から、さうですよ。をぢさんは、子供の育て方を知らない人なんだから、あまやかしてばかり了ふんですから。』

『好いな、何でも好いな。おぢいさん子だな、武坊は。女と寢ると、男は弱くなるな。』こんなことを言つて、いかにも樂しさうにして、良太は武雄の頭を撫でた。

物日に五目鮨だの萩の餅だのが出來ると、眞弓の細君は、いつもそれを重箱に詰めて、婢に持たせてやつた。と、その返しに、田舍から來る肥料取が持つて來た里芋や、大根や甘藷などを澤山風呂敷に包

『兄さんだつて、あの老人達に、直接、間接に、何んなに世話になつてゐるかわからないんだからな。實際、めづらしい人達だよ。それに、あの叔父叔母には、蔭日向がない。いつも同じやうな平らな心持でゐる。何んなことが起つても、びくともしないやうなところがある。叔母なんか殊にさうだ。つく〴〵感心して了ふことがあるよ。學問をさせると、えらい女になる人だつた。』

『本當ですね。本當に、氣の置けない好い叔母さんですね。』

『それに比べると、兄の生活なんか、丸でうそだからねえ。』

『兄さんは又兄さんでちがひますよ。その代り兄さん位、世話好きな、やさしい人はない。貴方なぞと丸で違ふんですもの。』

『弱いんだよ、兄貴は――。強くなくつちや駄目だ。そこに行くと、をぢさんやをばさんは強いからな。』

夜など買物の次手に、眞弓の細君が寄ると、良太とおかねは、昔と少しも變らずに、同じ火鉢、同じ鐵瓶、同じ炭取、同じ薄暗い二分のランプの下で、茶を淹れて呉れて、一緒に伴れて行つた總領の娘に最中を三つ四つ紙に包んで呉れたりなどした。『もう、年を取ると、夜は寢るばかりで、』などと言ひながら、それでも良太は途切れながらぽつ〳〵と種々な話をした。『をぢさんのすることは、それはまどろこしいんだから、見てゐても見てゐられないことがあるんだからね。お元さん。』こんなことをおかねは言ふ

いつの間にか、人は生れて、大きくなると共に、またいつの間にか老いて死んで行くのであつた。奥の旦那、奥方、姉刀自――此間も姉刀自が七十二になるといふのを聞いて吃驚したが、自分ももういつか六十に四つ五つ出てゐるのであつた。おかねは御維新以前のさまなどを頭に浮べて、それを今の世の中と比べて見たりした。其處には、川が流れて橋がかゝつてゐた。おかねは橋の傍にある銀杏の大樹から黄い葉のバラ〳〵落ちるのを見た。

其處に引越して來てからは、眞弓も眞弓の細君も、ちよい〳〵良太の家にやつて來た。ブリキ屋、しつくひ屋、植木屋、桶屋、俥屋、用があると、眞弓はいつも良太の許に來て頼んだ。さういふ職人達の上に働いてゐる良太の信用といふものは大したものであつた。『靑山さんの御親類ですか。』かう言つてさういふ人達は熱心に仕事をした。

眞弓は細君に言つた。『何うも、あの新町の叔父叔母の眞似は出來ない。あんな人は少ない。貧しいなどと言ふことは少しも苦にしないで、あゝして運命に安んじて仕事をしてゐるんだからね。そして、自分のことは、皆な自分でして、決して人に指をさゝれるやうなことはないんだから。職人達に、信用があるんでもわかる。あんな汚い恰好をして、草鞋なんか穿いて、町を歩いてゐても、皆な人が尊敬して行くんだから。……何うも、あの眞似は出來ない。』

『本當ですね。』

『本當に生かして置きたかつた。生かして置いて、一日でも好いから、この家を見せてやつたら、何んなに喜んだか知らないよ。……それや、苦勞したんだから。』

『さうですつてね。』

『何うも思ふやうにはならないもんですよ、世の中と言ふものは。』

『本當ですね。』若い細君は不圖思ひ附いて『あの、外國の方からは、何うしてもお便りがないんですか?』

『あれはもう死んだんだか、生きたんだか……』かう言つておかねはさびしく笑つた。

『本當にねえ、其方さへ丈夫でいらつしやれば、をばさんやをぢさんもお仕合せでしたのにねえ。何うしたんでせうね?』

おかねは唯笑つてゐた。そんなことを今更繰返したつて仕方がないといふやうな顏をしてゐた。暫くして、おかねは暇を告げて歸つて來たが、途々種々なことが頭に繰返して考へられた。絆纏を着て、髮の毛を伸して、寒さうにいぢけてゐた眞弓、店の方をしくじつて附手紙をされて送り還された眞弓、詫證文に大きな掌を捺させられた眞弓、僅かばかりの小遣を貰つて新宿の閻魔へ出かけて行つた眞弓、それが兎に角に立派な人になつて、あゝして家屋を自分で建てるやうになつたとは、おかねには何うしても不思議に思はれた。人の運と言ふものはわからない。かうおかねはつくぐ〳〵思つた。

たつて、四谷まで行かなければならないんだから。奥なんかでは大抵は四谷まで出るよ。』
『さうですかね。』
おかねは若い母親に、買物の店を種々と教へてやつたりした。乾物屋、肴屋、蕎麥屋、金物屋、時計屋、穀屋、『でも、ちよつとしたものなら、あそこでも間に合ふよ。』かう言つて、寺の前にある呉服屋なども教へてやつた。
『兄さんは來たかえ？』
『まだ、お出でにならないんですよ。』
『何うしたんだらうね？』
『何だか、非常に忙しいんですつて……』
『矢張、西洋人のことで？』
『さうでせう、屹度。』
かういふ時にはいつも先に立つて手傳ひに來る實が、今になつてもやつて來ないのをおかねは不思議にしたが、別に深く訊いて見ようともしなかつた。
茶を飲みながら、『それにしても、母さんがゐるとねえ、何んなに喜んだか知れないんだけれど……』
『宅でも、さう言つてゐるんですよ。』

には油畫の女の額だの、松林の額だのがかゝつて、外國の木の一杯詰つてゐる大きな本箱などが置かれた。

『あ、此處が眞弓のゐるところだね。』折れ曲つた處にある四疊半の前では、長い間立つて庭の方を見てゐた。茶の間には、簞笥、服簞笥、鏡臺などがあつた。其處には炬燵が切つてあつた。『さうともね、子供がゐるちやね、炬燵がなくつちや、冬は寒くつて、可哀相だからね。』かうおかねは言つた。

長火鉢の前に坐りながら、『それでも大變だつたね。』

『いゝえ、粗雜な普請なんですから……。でも、ね、子供がゐますと、借家をしても、大家がイヤな顏をするもんですから……。まア、何んな家でもなんて言つて、建てたんですから。』

『結構だよ。……廣くつて、明るくつて好いよ。唯、夜は淋しいでせうね。』

『本當ですよ、來た晩なんか、淋しくつて寢られない位でした。何だか鉋屑や新聞紙の散らばる音さへ、何か來たかと思はれるんですもの。』

『でも、ぢき馴れますよ。』

『それに、をばさん、買物が不自由で仕方がありませんの。一々、をばさんの方まで行かなくつちやならないんですもの。』

『さうだね……。それに、私の方だつて、碌なものはありやしない。好い物を買はうと思ふには何うし

『今日は何だか忙しいつて來て呉れません。』

何か御むところがあるやうな調子で眞弓は言つた。

何處からか賴んで來たらしい若い娘達二人と、細君と、細君の兄に當る人と、若い書生と、皆なして一緒になつて疊を拭いたり雜巾掛をしたりしてゐる間を、良太は植木屋を相手に庭の掃除を手傳つてやつた。眞弓は庭や家の周圍に植ゑる樹の話を良太にした。塵埃の山はぶす〳〵燻つて、風の吹く度にをり〳〵ぱつと燃え上つた。

おかねが始めて其處に訪ねて行つたのは、それから四五日經つてからであつた。この前にも良太は、『眞弓さんの家に行つて見ないか、』などと言つたけれど、年を取つて此頃出不性になつてゐるおかねは、まだ一度も行つて見たことがなかつた。おかねは、四面すべて畠の中にほつゝり立つてゐる新しい家屋を見た。新しく掘つたらしい井戸なども見えた。

『これは、いゝ處だね。』かう言ひながら、おかねは裏口から入つて行つた。丁度其時眞弓の細君は、勝手元で何か用をしてゐたが、『オヤ、をばさん、何うかそつちから。』かう言つて緣側の方に迎へた。冬の日は暖かに緣側に當つて、其處では總領の女の兒が人形などを飾つてひとりで遊んでゐた。

『これは廣くつて好い。』かう言つて、おかねは茶の間から玄關、座敷、書齋の方まで行つて見た。座敷

西風が凄じく芝定さんの家の周圍の欅に鳴る頃には、家はもう大抵出來上つて、建具が入れられるまでになつてゐたが、初冬のある寒い晴れた日に、眞弓の家族は、運送の車に家具を一杯に積んで、山手から移轉して來た。

眞弓の細君は、二十五六で、髮を束髮に結つて、銘仙の着物に縮緬と繻子の腹合せの帶をしめて、色の白い顏をあたりに見せて、莞爾して俥から下りた。後からは、九歲になる可愛いお下げの女の兒と七歲と五歲とになる紺絣を着た二人の男の兒とが續いた。やがてあとから若い書生と眞弓とが書籍や道具を一杯に積んだ幾臺かの荷車について來た。十二月の初めの晴れた日で、大工達は仕殘した外圍ひの塀などを頻りに造つてゐた。

良太は眞弓と話した。四五年この方眞弓は肥つて、口髭などを生やして立派な一廉の紳士になつてゐた。良太には眞弓の勤めてゐる社が何ういふ處で、やつてゐることが何ういふ仕事であるかわからなかつたけれど、兎に角かうして家屋を建てるまでになつたのは見上げたものだと思つた。良太は、本家の實と分家の眞弓とを引くらべて考へた。實が今だに困つて、慘めな生計をしてゐるのが氣の毒に思はれた。役所をやめてから、長い間、何うにもしやうがなくなつて困つてゐたが、此頃では、イギリス人に日本語を教へて何うやら斯うやらやつてゐるらしかつた。

『實さんは？』

眞弓の洋服姿と、良太の筒袖姿と、芝定さんの百姓姿とが、暫しの間、彼方へ行つたり此方へ來たりした。眞弓は林の中に分けて入つて行つたりした。

その年の九月頃には、話がきまつて、眞弓は愈そこに小さな家を一軒建てることになつた。良太の世話で、倉橋の棟梁が一切建築の方を引受けた。

眞弓は忙しいので、滅多に此方に來て見ることはないけれど、良太は、奥の仕事の間には、ちよいちよい其處へ出かけて行つた。運送の車の轍の縱横に深く土に喰ひ込んでゐる通りに面して、建前をした前で、大工や土方達が祝ひの蕎麥酒で醉つてゐるところで、木材や瓦や壁や、さういふことに就いて、良太はいろ〳〵と世話を焼いた。時には、武雄を負つて來て『そら、此處に、坊やのをぢさんの家が出來るんだぞ、』などと言つて聞かせた。

垣を結ぶ時にも、井戸を掘る時にも、壁をぬる時にも、良太はいつも來て指揮をした。職人といふ職人は、誰とて良太を知らないものはなかつた。『本當に、青山の旦那位、眞當な、正直な人はない。あゝして默つていらつしやるけれど、何でも分つていらつしやるのだから。』桶屋の親方はかう言つて眞弓に話した。

其間には、雨がつゞいて降つたり西風が寒く梢を鳴らしたりした。大工達の削る鉋屑は其處から此處へと轉つて行つた。

處にも、好い地面は澤山に空いてゐた。綠葉の濃い松林、陸稻の熟した畠、芝草の仕立てゝある地面、その間に、昔から住んでゐる百姓達の茅葺の家が點々としてあつた。大きな欅の並木があつたり、松、楢、榛などの林の下に萱原笹原がかさ〳〵と風に靡いてゐたりした。

良太はかねて懇意な百姓達の家に眞弓を伴れて行つて、種々な地面を見せて貰つた。筒袖を着て、眼をしよぼ〳〵させて、ちよつと見ては、何處の爺かと思はれるやうな良太の姿であつたけれど、それでも、何處の家でも、良太の顏を見ると、主人も主婦も出て來て丁寧に應對した。何んな忙しい用事でも放つて置いて、一々その地面を見せて詳しく說明して吳れた。

最後に、良太は眞弓を芝定さんの家へと伴れて行つた。上さんは出て迎へた。定さんは丁度ゐて、一緖に、その地面に隣つて芝草を仕立てた地面を見せて吳れた。そこはいくらかかうもり高になつてゐるやうなところで、傍に栗の林があり、裏に見晴しの好い大きな松などがあつて、高燥な氣分があたりに滿ちてゐた。

『好いですね。此處は？　何坪あるでせう。』

『さァ、當つて見なければわかりませんけども、林を入れると、五百坪位はあるでせうか。』

『此處にしますかな、をぢさん。』

『さァ、好いには好い處だ。此處なら、まァ申分がない。』

か。本當に馬鹿々々しいにも何にも……』こんなことを笑ひながら良太は實や眞弓に話した。

それに、地所の價格の騰つて行くことも、良太を驚かした。今までは百坪五六十圓であつたものが、坪一圓でドシ〳〵賣れるといふことであつた。それに、新しい家屋が其處にも此處にも出來た。近所の地主は、高い地代で地面を貸してゐるといふ話などが傳つて來た。

『東京が段々ひろがつて來るんだ。今に、此處等も立派な町になる。』

かう誰も彼も言つた。

丁度その頃のある夏の暑い日に、久しく來なかつた眞弓は、ひよつくり其處に顏を見せた。眞弓はもう三十六七の男盛で、戰爭に行つて來てから、體格も肥つて、洋服などもよく似合つた。

『をばさん、此處等に借りる地面はないでせうか。家を借りて、家賃を取られて、その上、子供が多いの何のと言はれてはやりきれないから、好いところがあつたら、一軒、家を建てようと思ふんですがね。』

『をぢさんに聞けば、いくらもあるだらう？　此間も、そんなことをききに來た人があつたよ。』

『をぢさんは、奥ですか。』

『そこらにゐたつけ、迎へに行つて來よう。』かう言つておかねは出て行つたが、暫くしてから良太は草鞋のまゝで戻つて來た。で、良太は眞弓と一緒に橋を渡つて、濶々とした野の方へ行つた。そこにも此

送りの人々を窓から離させると、やがて出發の汽笛は鳴つた。列車は靜かに搖ぎ出した、萬歲の聲は湧くやうに場内に滿ち渡つた。良太は高く武雄を抱き上げた。

『萬歲！』

また一しきりその聲は喧しくきこえた。

四十六

戰爭は二年で濟んだが、その後の世間の發展は、良太やおかね達の眼にも驚かれるほど著しく急劇であつた。良太達は、二本の棒で獨りで走る電車をも見れば、目もくらむやうな明るい電燈が街上の家々に點されるのをも見た。『遠くつても近くつても、同じ賃錢、そんなことが何うして出來るもんだなァ。』かう言つて、良太は三錢均一の電車賃を不思議にした。

奥の用事で、ある處に行つた時には、良太は電話といふものゝ前に初めて立たせられた。『年寄を若い者が馬鹿にするに相違ない、そんなことがあるもんか。魔法ぢやあるまいし。』かう思つて騙されると思ひながら、室の隅の方に行つて、其處の女中が笑ひながら渡して呉れたものを耳に當てた。と、やがて、蚊の鳴くやうな聲が良太の耳に傳つて來た。『馬鹿な、本當に、あんな馬鹿なことはない。二里も三里も先にゐる人の聲がちやんときこえるぢやありませんか。そして何でも話が わ かつて行くぢやありません

『あそこだ、あそこだ。』
人達は驅けて其方に行つた。
その時には、陸軍中尉の服を着けて劍と水筒とをぢやらつかせた克巳の姿が、車室の中からもうプラットフォムの方へと下りて來てゐた。人々は皆帽子を取つて挨拶した。良太は武雄を高く抱き上げた。
『それ、それが父さんだよ。』
武雄はきまりがわるいやうな顔をして、じろ〱と克巳の方を見た。克巳は、『何うも、をぢさんとをばさんには一方ならぬお世話になつて、お禮の申上げやうもない……。ほ、こんなに大きくなつた。どれ、抱かつて見ろ。』克巳は活潑に良太の手から武雄を抱き取つた。良太の眼からは涙が流れた。
克巳はそれから實と話したり、石川と話したり、眞弓の細君と話したり、眞弓の總領の娘の頭を撫でたりした。その近所には、一緒に出征する同僚や兵士達が、矢張これと同じやうに見送りの人達に取卷かれてゐた。
『此處で待つ間が三十分あるんです。さうですな、何方にやられるか、まだわからないですけども……何でも、話では、餘程、難局に向けられたらしいですよ。……さア大阪だらうと思ふんですが、そこに五六日ゐて、それから船に乘るやうになるでせう。』かう克巳は石川や實に話した。
やがて時間は來た。出征の軍人達は、皆な車室の中に入つて行つた。車掌が來て、危險を注意して、見

てきかせた。

停車場のプラットフォムは、乘降の客や見送りの人達で一杯になつて混雜してゐた。そこには石川も實も來てゐた。眞弓の細君は今年七つになる總領の女の兒を綺麗に着飾らせて伴れて來てゐた。古びた廻しを着て、中折の帽子をかぶつた實のさまがいかにも元氣のないやうに良太達には見えた。

『精ちやんは、いかゞですか。』

かうおかねは石川に訊いた。

『いや、此頃はちつとは落着いてゐます……』

『御丈夫ならば、精ちやんも、かうしてお出かけになられるんですけれども……』

『いや、もう……仕方がありませんよ。これも運だから……。同期生で、もう戰死したものもありますよ。』

種々な話をしてゐる中に、あたりは急に騷々しくなつて、凄じい勢で、長蛇の如く列車はプラットフオムへと入つて來た。人達は皆な其方へと走つて行つた。

列車の中は總て軍人で、其處の窓からも此處の窓からも見送りの人達をさがすやうな顏が見えた。軍帽、軍服、ヂヤラ〳〵音を立てる劍、アルミニユウムの水筒、悲壯な張詰めた空氣は、漲るやうに四邊に滿ちた。ふと、氣が附くと、向うに行つた實が手を擧げて此方を招いてゐた。

『あの子も可哀相だねえ。若い人の肺病になるのは、本當に見てゐられない。今は、世が開けて、上手なお醫者樣なぞも澤山ゐるんだらうから、肺病だつて治りさうなもんだがね。』

『何うも、あればかりはまだ療法がないやうですよ。外國でもないんですから。』

『さうかねえ。』

この話をした翌年の同じ節句時分には、また大きな凄じい戰爭が日本とロシアとの間に起つて來てゐた。停車場は再び兵士の群と萬歲の聲とで滿たされて、號外賣の聲は、良太達のゐる場末の町までも騷しくきこえて來た。やれロシアの軍艦が津輕の方へ攻寄せて來たとか、やれ朝鮮で日本の騎兵とロシアの騎兵と衝突したとか、いろ〳〵な噂が彼方此方にきこえた。世間は騷々しく、物價は日に騰貴しつつあつた。眞弓はそのつとめてゐる社から、從軍記者になつて逸早くこの二月に出かけて行つたが、續いて、克巳も戰場へと向ふことになつた。で、良太達はある日、その克巳が出征の途中、新宿の停車場に着くから、そこで武雄とも別れを惜みたいから、作れて出てゐて吳れといふ電報を受取つた。實の方からも、豫じめ其話があつたので、其日は、良太達は朝早くから支度して、新しい着物を着せたり、袴を穿かせたり、小さい國旗を持たせたりして、武雄を作れて、そこからさう離れてゐない停車場へと行つた。

『武坊のな、父さんがな、兵隊さんを大勢連れて、戰爭に行くんだからな、よく挨拶をするんだぞ、萬歲つて言ふんだぞ。ロスケを退治に行くんだから。』停車場に行く間、良太は何遍となくかう武雄に言つ

ですからね。本當に氣の毒ですよ。もう、とても恢復の見込はないんでせう。』

『殘念だね。』

『矢張、姉が肺病で死んだから、その遺傳なのかしら？』

『おてつかえ？　さうさねえ、遺傳つて言つて、此方には、そんなわるい病の血すぢはない筈だがね。おてつは、餘り心配したから出た病氣なんだがね。』

『兎に角、困つたもんですよ。』

『石川さんも、それぢや大變だ。あのお爺さんの歿くなつたのは、一昨年だつたが、まァ、年寄を見送つて好いと思ふと、精ちやんがすぐそれぢや、本當に困るねえ。それや、家作もあるし、お金だつてあるんだらうから、石川さんなんか暮らし向きには困ることはないだらうけれど……』

『なァに、此頃ぢや、困る困るつて言つてゐますよ。地面を抵當にして金なんか借りてゐるやうですよ。しかし、あそこの地面は、今ぢやもう高くなつてますからね。買ふ時は、おれだけで五百圓とか六百圓とかだつたさうですけども、今ぢや一萬圓以上に賣れますからね。ちつとやそつとは、抵當にしたつて大丈夫ですけどもね。』

『だつて寢たつきりかえ？　精一は？』

『さうでせう。』

おかねは紅梅を奥で貰つて來て、それをビイルの空罎にさして、雛段の上に置いた。『お、まだ、ちやんとしてますね。』ある年丁度其頃にやつて來た眞弓は、かう言つて、なつかしさうにして見た。お初が着物を縫つて着せた可愛い人形は矢張元のまゝに其處に置かれてあつた。

『精一の病氣は何うだね。』

かう其時おかねが訊いた。

『駄目ですね。』

『矢張、肺かね。』

『え、さうです。』眞弓はちよつと間を置いて、『此間なぞも大分わるかつたんですよ。北里の病院も、金がかゝつて仕方がないつて言ふんで、此間中、家に伴れて來て置いたんですけども、先月あたりの寒さで、ぶり返して、大騷ぎをして、茅ケ崎の病院につれて行きましたよ。』

『今も行つてるのかえ？』

『え。』

『困つたもんだね。石川さん、弱つてゐるだらう。』

『兎に角、一人息子ですからね。それも、出來が好くないのなら、あきらめるといふこともあるけれど、士官學校を優等で卒業して、少尉になつて、新しい軍服を着て、青森の隊に行くと、すぐ起つたん

けてゐると言はれて馬鹿にされたものだが、今では人一倍すぐれた立派な棟梁になつて、弟子を三四人も使つて、老爺の死んだ跡を立派に引繼いでやつてゐた。今でも、途中で良太やおかねに出會すと、丁寧に時候の挨拶をして通つて行つた。

さうかと思ふと、其時分、學校も出來、頭腦も利口で、今に何んなに豪くなるだらうと思はれた種物屋の息子は、肝心な中年でぐれ出して、道樂を覺えて、父祖傳來の身代を滅茶々々にして、今では鳴子あたりで、ひどく落魄れて暮してゐるといふ話であつた。『何が何だかわからない。皆な其人々の持つた運だから。……重雄だつて、武雄だつて、今はあばれだとか惡戯者だとか言つても、行先は何うなるんだかわかりやしない。』おかねは折々こんなことを言つた。

長屋の一部の改築をした時に、良太達は、長年住んでゐた記念の多い通りに面した家を離れて、少し奥に入つた長屋の一軒へと移轉して行つた。其處は前の家よりも間數も狹く、庭といふ庭もなく、風通しもわるかつた。『旦那の持つてゐる家だから、何うも仕方がない。苦情を言つたつて役に立たない。』かう言つたおかねは、奥の人達の慾の深いのを憤つたが、しかし何うすることも出來なかつた。ぶつ〳〵言ひながら、良太は土になづんで年々多く實を持つやうになつた記念の多い柿の樹を、前の家から持つて來て、入口の處に栽ゑた。置きどころもないので、お初の遺物の一部も其時賣つて金にした。

しかし、お初の持つた昔の雛は、まだ賣られずに、春が來ると、いつも簞笥の傍のところに飾られた。

來た。中學校に入る時には、良太達はその費用の一部を實の方へ出してやつたのであつた。
夏休みには、重雄は祖父母の家に泊りに來て、近所の友達と、十二社の池に泳ぎに行つた。その時には武雄も一緒について行つて、重雄達の面白さうに泳ぐのを池の畔で羨しさうに見てゐた。『また、十二社に行つて泳いで來たね。本當にいくら言つても言ふことを聞かないね。あそこには主がゐて、毎年一人や二人は屹度取られるんだからつて言ふのに……。武雄なんかに泳がせては、それこそ大變だよ。』かう言はれても重雄は平氣で池の方に行つた。池の畔は、實が書生時代に來た時のさまとは丸で變つて開けてゐたけれども、それでも岸には蘆荻や眞菰が茂つて、松の大きな梢には蟬が喧しく鳴いてゐた
お初の學校友達であつた茶屋の娘は、一度迎へた養子が不緣で出て行つてから、ひとりで一切を切り廻して、後には大きな旗亭を池の畔に起した。其處に行く人達は大勢の女中を使つて一緒に働いてゐる中年の上さんの甲斐々々しい姿を見た。
それに限らず、おかねは詮造やお初の友達であつた人達を其處此處に見た。穀屋の五人子持の上さん、酒屋の肥つた元氣な亭主、材木屋に嫁いで行つて此頃では家運が傾いて眞黑になつて躍蹤と働いてゐる上町の質屋のお常さん、土方の親方の上さんになつたお鶴さん、さういふ人達は、いづれも四十近い年輩で皆な好い上さんや亭主になつてゐた。大工の棟梁になつた倉橋の主人は、詮造より年が二つほど下で、洟を垂らして、『詮ちやん、詮ちやん』とよく遊びに來たものだ。近所の評判では、あの兒は何處かぬ

『何うも、人間といふものは、一生經つて見なければわからないと言ふが、本當だな、何う浮き沈みをするか、人間はわからない。好いと思つても、好いが好いで通らないし、何んなにわるいと思つたつて、わるいで通つて一生終るものではなし……』良太はある時こんなことを言つて慨嘆して、『實だつて、あゝぢやなかつたんだけれど、つまり兄弟中で、一番わるいくじを引いたんだ。一番苦しいところを實が引受けてやつて來たやうなもんだからな。』

『それはさうともね。實がゐなければ、眞弓だつて、克巳だつて、何うなつて了ふかわからないんだから……克巳なんかだつて、學校にだつて入れなかつたんだから。』

『まア、運がわりいんだ。』

また考へて『矢張、元は御維新のぐらつきが始まりだ。御維新がなければ、義兄さんだつて、戰爭に進んで行く氣にはならなかつたらうし、嫂さんだつて、あんな風にぐれ出さなかつたらうし、實だつて、もつとしつかりして行けたんだ。内の詮造だつて矢張さうだな。』

『まア、過ぎ去つたことはいくら言つたつて仕方がない。』

でも、武雄が一緒にゐると言ふことは、良太達のかうした愚痴を慰めるためには非常に有力であつた。さびしい二人の心は、重雄と武雄で常にいろ〳〵に彩られた。武雄は重雄を兄ちやん、兄ちやん、と呼んでなづいた。重雄は、いつか小學から中學へと移つて、此頃では、制帽を冠つて靴などを穿いてやつて

けれど、それも今では駄目だし、お前だつてイヤだらうし、重雄は本家をつがなくつてはならないし……』良太夫婦は、何うかすると、をり〳〵思ひ出したやうにそんなことを言つた。『それは私達の跡なんか何うなつても好いやうなものだけれど、それでもきめる時にはきめて置かないと、もう叔父さんだつて、私だつて、年を取つてゐるからね。』

『何ァに、心配しない方が好う御座んすよ。甥がこんなになるんだから誰だつてをぢさんやをばさん位の世話をしますよ。』

かう眞弓が言ふと、

『それや、二人して、かうして働いてゐられる中は、世話になんかならなくつても好いけれども、いつ、何方がかけないもんでもないからね。』

『しかし、今、生中、跡取をさがして、養子なんか取るのは愚ですよ。苦勞をまうけるやうなもんですよ。それよりもぢつとして安心してゐる方が好う御座んすよ。』

で、おかねは仕方がないと言ふやうに、いつもそのまゝ默つて了つた。

實はしかし眞弓のやうに、ツケ〳〵と思ふところを言つて、叔父叔母を失望させるやうなことはしなかつた。もう少し經つたら、本家は重雄につがせて、私がお世話をしても好いなどと言つた。實の一生には小さな池のある庭を前にして、お初と互に戀ひした時分のことが、鮮かに離れず印象されて殘つてゐた。

氣があると好いんだけれど、』などと眞弓は言つた。
『お前の方の社にでも、ないかえ？　口が？』
『僕の方なんかとても駄目だ。』
『さうかねえ。』
其處に、もう其頃は、學校に行くやうになつた武雄が、顏や手を墨だらけにして歸つて來たりした。
そして大きな目で、眞弓の方を見た。
『武雄の學校はいつから休みだえ？』
『明後日！』
かう言つて、袴をぬぎすてゝ元氣に外へ遊びに行つた。
『大變元氣になりましたね。』
『此頃では、もう本當に、始末に困る位だよ。おぢいさんが甘やかすもんだから、好い氣になつて、少し氣に入らないことなどがあると、婆、婆なんて大口をきくんだから……』かうおかねは笑つて話した。
言葉や調子や氣分は、昔と少しも變らないけれど、髮はもう目に立つて白く、腰もいくらかは曲つて、つぎはぎの筒袖などを着てゐると、何處のお婆さんかと思はれるほどおかねは年を取つて了つたっ
以前にもそんな話が度々出た。『私等の跡は何うするんだらう。克巳でも繼いで呉れると好かつたんだ

四十五

實の家の困つてゐるさまは、そのまゝ默つて見てゐるに忍びないやうなところがあつた。實はまだ四十になつたか、ならないのに、此頃では、すつかり氣分も衰へ、顏色も憔悴して、世間に對しても、人に對しても、非常に內氣にやさしくなつた。得にもならない他人の世話を好んで燒いて、見合をさせたり結婚の媒妁をしたりするのを課業のやうにしてゐた。昔、白い袴を穿いて太いステツキを振廻しながら、本鄕の塾から通つて來た少年とは何うしても思はれなかつた。で困つてゐる度に、良太とおかねはいつも此方から金を持つて行つてやつた。

それとは反對に、眞弓は段々世間へと出て行つてゐた。結婚した裏の家からは、一年ほどして移轉して行つたが、それからそれへと移轉して、此頃では、元、御家人の住んだやうな山の手のさびしい屋敷町に住んでゐた。間數も實の家に比べては多く、座敷に面した庭なども見事であつた。年の暮には眞弓は新しいスコツチの脊廣に厚ぼつたい鳶色の立派な外套を着て、俥に乘つていつものお歲暮にやつて來たりした。『兄さん何處か好い口がないかね。あゝして遊んでゐては困るばかりぢやないか。お前も月々助けてゐて吳れるさうだが、お前だつてさう〳〵大變ぢやないか。』かうおかねが言ふと、『私もさう思つて彼方此方に賴んで置いては見るんですけども、兄さん、イヤに悄氣て了つてゐるんだもの。もう少し元

るまでは、十分に生ひ立つことも出來なかつた。其後二本は枯れて、今は三本しか殘つてゐないが、多い樹の間に挾まれたやうになつて栽ゑられてあるので、幹ばかりひよろ〳〵と高く、上に行つて、枝が四方にひろがつて、葉に雜つて花が咲いてゐた。

『十年前に行つた時にも、吉野は變つてゐたから、今ではもつと變つたらうな。』

旦那はかう言つて『それにしても樹と言ふものは、面白いもんだ。矢張、人間と變りはないな。何うかすると、人間と同じやうな心がありはせんかと思はれる位だ。芽の出る時とか、花の咲く時とか、實のなる時とかには、矢張一時衰へるな、草でも木でも……。面白いもんだな。かうして、毎年見て來たが、いつもあの時分のことが思ひ出される。あの時分は元氣なもんぢやつたな。それが、御維新になり、新しい政治になり、世は變つて、ずん〳〵若い者が出て行つた。その時分の人達は、死んだり年を取つたりして了つた。』

『仰つしやる通りですな。』

かう言つたが、良太も旦那も默つて、高い梢の花を仰いだ。落花は靜かにチラ〳〵と四邊に散つた。

旦那は二足三足歩き出したが、振返つて『良太、來年は一つあの高野槇を庭に持つて來るやうに植木屋に言つてくれ。それには今から根を廻して置かないといけないからな。』かう吩咐けて靜かに邸の方へと引返して行つた。

『かうと……文久だから、もう四十年先になるな。』

『さうなりますかな。』

良太も考へるやうにして『樹が大きくなるのも無理はありませんな。』

『本當だ……』

かう言つたが、『でも、吉野の山櫻だから、この位壽命があるんだ。此處等の櫻は、二十年、長くつて三十年が精々だな。』

『さやうですな……それにしても遠い昔になりましたな。』

その時分、旦那は水戸學の影響を受けて、山陵狂と呼ばれたほどで、萬事を捨てゝ、大和河内にある山陵の發見と修繕とに力を盡した。南朝の事蹟には、殊に同情を寄せて、後醍醐天皇の陵のあるあたりや、如意輪堂の邊は、慷慨悲憤して、何遍通つたかわからない位であつた。その時、良太も一緒について行つた。旦那も良太も、大小をさして、髷に結つて、たつつけなどを穿いてゐた。と、ある時後醍醐天皇の陵の傍で、『良太、此處の櫻の實を持つて行つて、實生で播いて見ようぢやないか、旨く生えるかも知れない。』かう言つて二人はそこの櫻の實を拾つて、そして國に歸つて來て播いた。

五本ほど生えたが、維新の際の艱難に處して、旦那は幽閉されたり城外閉居を命ぜられたりして、それにつれて、その若木もある處からある處へと移されて、明治の初めに、此處に位置を定めて栽ゑられ

良太は遠い昔を思ひ浮べるやうな顏をしながら夕飯の箸を取つた。
『定さんも、もう餘程の年になるね。』
『家の詮造と三つ違ひだから、もう四十二だらう。』
『さうなるかな、早いもんだな。』
かう言つた良太の頭には、常磐津の師匠や、その色の白い可愛い娘や、三味線の音や、村の若者の大勢集つて來たさまや、定さんが困つて一足いくらの草鞋を作つてゐたさまなどが一つ〳〵浮んで見えた。時はかうしてゐる間にも早く〳〵經つて行くのであつた。

四十四

旦那と良太とは、邸の門内に新綠雜りに美しく咲いてゐる幹の太い脊の高い山櫻を仰いで並んで立つてゐた。
咲きすぎた花は、をり〳〵風につれて二片三片散つて落ちて來た。
『大きくなつたもんだな。』
かう旦那は言つた。その聲には、昔を思出すやうな調子が籠つてゐた。
『もう、何年になりませう？』

『お民さん？』

まだわからずにゐると、

『そら、お民さん、……あの常磐津の師匠の娘に出來た子さ。』

『あ？』始めてわかつたといふ風で、『あ、あの娘の子、里子にやつてあつた？　あれが、あの子かえ。あの子があんなに大きくなつたのかえ？』

『いくつ位だつたえ？』

『二十歳位！』

『それぢやお民さんだよ。なんでもこの奥の福永さんに、お小間使か何かに上つてゐるといふことだつたが――』

『さうかな。』

『別品さんだらう。私は、何うかすると、町などで見かけることがあるよ。里から歸つて來て、大分長く定さんの家にゐたんだけれど、今の上さんにも子供が多いから、何うも丸く行かないらしい。今の福永さんには、去年だか上つたんだが、今ぢやそこの旦那様のお手がついて、なんでも、綺麗な扮裝なんかして歩いてゐると言ふことだよ。此間穀屋のお上さんがそんなことを言つてゐた。』

『さうかな。』

水車場から橋を渡つて、通りに出た良太は、其處でふと立留つて自分に挨拶する女づれを見た。一人は四十近い上さんで、一人は二十位の若い綺麗な娘であつた。

『何うも、いつも御無沙汰ばかり致しまして。』

上さんからかう聲をかけられて、始めてこれを知つた良太は、

『あ、芝定さんでしたね。……眼がわるいもんですから。……定さんも相變らずお達者ですか。』

『難有う御座います。内でも、あまり御無沙汰してゐますから、一度、おたづねしなければならないと言つてをるのですけれど……』

『父さんも御丈夫ですか。』

『え、弟の方に別居してをりますけれど、相變らず丈夫で。』

『定さんにもよろしく仰しやつて下さい。』

『難有う御座います。』

かう言つて上さんは別れて行つた。良太は振返つて見たが、一緒にゐた作れの娘はちよつと誰だかわからなかつた。娘はゐない筈だが……などと思ひながら、良太は家の方に歸つて來た。

夕飯の時にその話をおかねにすると、

『そら、それがお民さんぢやないかい？』

『甥御のお兒さん。さうですか。可愛い坊ちやんだ。おいくつです？　五つ？　五つにしちや大きい。』

其人は頭を撫でた。

實は自分の觀察と計畫とが思ひ通りに行つてゐるのを見た。さびしい二人の生活は、その男の兒のために、日增に尠なからぬ色彩と溫味とを添へて行つてゐた。男の兒はいつも良太に抱かれて寢た。

四十三

ある時、水車場から良太は歸つて來た。かれは上水から落ちる水の落口の具合のわるくなつたのを昨日も一昨日も土方と一緒に直してゐたが、漸くそれも出來上つて、水は淡竹の藪の中の樋を、以前のやうに漲つて流れて行くやうになつた。良太はその近所も、昔とは違つて夥しい變遷のあつたのを見た。心中した男女のあつた時分のやうに廣い眺望はもう何處にも認められなかつた。田と田との間には、新しい家屋が續いて立つて、工場なども出來た。トタン屋根が日に光つて、小さい烟突から薄黃い煤烟がなびき上つた。

水車場の中は、しかし依然としてゐた。古い建物、古い羽目板、流れ落ちる水につれて、車の輪が廻つて、杵が躍るやうに動いた。淡竹の藪には、春は矢張筍が出て、叱つても〳〵子供達はそれを持つて行つた。

て肩にかじりついたり、脊に負さつたりした。良太が負つて奥に伴れて行くと、奥方は、『まア。これが克巳さんの子かえ？　好い兒だね。もう五つになるのかえ、早いもんだね、』などと言つて菓子を紙に包んで呉れた。

奥方も、此頃ではすつかり年を取つて了つてゐた。昔は誇りにした房々した髪も半ば白くなつて、美しかつた顔にも皺が一面に寄つて、『何うも、年を取つたせゐか、寒さがひどく體にきくやうになつたよ。良太なんか、それでもまだ丈夫だね。よく、さういふ小さい兒の面倒が見られるね。』

こんなことを言つて笑つた。それに引きかへて、姉刀自は、少し耳が遠くなつたなどと言つてゐるけれども、矢張體はよく肥つて丈夫で、三度の食事も人並よりは進んで食つた。そして、暇があると、矢張、三十年前、四十年前と同じやうに、兩手を後に組んで、ぶらり〳〵と邸の中を歩いてゐた。

お初の友達であつた隣の乾物屋の上さんにも、もう白髪がちよい〳〵雜つた。子供がないので、よく男の兒を借りて半日遊はせて呉れたりした。夕方には良太はいつも負つて近所の風呂に伴れて行つた。其處で昔から懇意にしてゐる地主や百姓などに邂逅すと、

『お孫さんぢやない筈ですね。』

などと訊かれた。

『イヤ、甥の子で。』

『五つになるかねえ、早いものだねえ。眞弓の満子と同じ年だつたね。』

『え、』と實は言つて、

『里を今まで三度更へて、今度のは、好いと思つてゐたんですけれど、矢張駄目です。あれぢや子供がわるくなるばかりですから……』

『私等だつて、十分にやとても育てられないよ。婆ァ育ち、三百安いつて、昔から言ふぢやないか。』

しかし、おかねはきつぱり斷つても了はなかつた。『新町では、年寄同士で淋しく暮してゐるんだから、却つて好いかも知れない。』かう思つた實の觀察も滿更中らないでもなかつた。『おぢいさんにも相談して見て、』とおかねは言つたが、良太にも別に異存はなく、重雄の後のためにも、世話して置いてやれば話相手になつて好いと言ふので、やがて里からその兒を迎へることになつた。

それは肥つた眼のくり／＼した兒であつた。『克巳によく似てるねえ。』かうおかねは良太に言つた。

一日二日は、馴染まないので、泣いたり何かしたが、一週間も經つと、やさしい老人達の養育に男の兒はすつかりなづいて了つて、實が心配して行つて見ると、通りに面した格子戸の中で、下駄を並べておとなしく遊んでゐた。『ぢいちやん、ばァちやん』などと言つて、男の兒は良太やおかねの方にかじり附いて行つたりした。

ことに、子煩惱の良太には、一層深く馴染んで、仕事から歸つて來ると、それを待ち兼ねるやうにし

と思ふんですがね。』かう言つて實は話した。それは克巳についての話であつた。克巳の赴任した遠い雪國の聯隊の方に、克巳が戀ひした娘があつて、母親の死ぬ間もなく、其話は始まつたが、まだ結婚しない前に、おなかが大きくなつたので、土地でも話が難かしく、實が行つて、その娘を此方へ連れて來て、山の手の家で身二つにさせたが、それは男の兒で、産後五六ヶ月で里に出した。その話はおかねも良太もかねてきいて知つてゐた。色の白い顏の長い、言葉に田舍訛のある娘にも二三度は逢つてゐた。

『何うも困るんです、克巳には。あとに女の兒が出來たんだから、いつそ作れて行くと好いんですけれども、矢張りはたが面倒で、さうすると、折角今まで伏せて置いた不始末が世間や親類にばつとする。それも、軍人でなければ構はないんですけども、上役や何かゞあつたりするので、これからの立身にさしさはつても困るつて言ふんで、里にやつてあるんですけれど、何うも里がわるくつて困るんです。何うでせう、をばさん、世話して頂くわけに行かないでせうか。』

『さうねえ。』

おかねは考へて、『もう少し若いと、子供の一人位何でもないけれど……』

『それは、もうお察ししてゐるんですけど……』

『幾つになるんだえ。あの子は？　たしか武雄つて言つたね。』

『え。もう五つですよ。だから、さう世話はやけないんですけども……』

の生えた塲で取卷かれて、眞中に湛へた淨水池は其處からは見えなかつたけれども、梅の名所の角から曲つて、十二社の方に行くところは、丁度淨水が池に流れ近む閘門になつてゐるので、其處からは、綺麗な廣い平らな淨水池が繪のやうになつてひろげられて見えた。

『これがあの草叢、林、畠であつたらうか。』良太はをり〳〵其處に立つて昔を思つた。

實や、眞弓は、それでも時々やつて來た。何うかすると、石川なども來た。お幾が死んでから甥達に對する心持はいくらか薄くなつてゐたが、それでも實だけは、婿だけに、何處か親子らしい感情があつた。實は、母親が死んでから、三四年同じやうにして役所に勤めてゐたが、ふとしたことから、其處をやめることになつて、それからは貧しい不如意な生活が續いた。

男の兒がゐるので、良太やおかねも、時々其處に訪ねて行つたが、お幾がゐた時分とは、家の整理から、氣分から、態度からすつかり趣を異にしてゐるのを二人は見た。それに、二年ほどして實の嫁の妹の子で、父親のなくなつた不憫な女の兒を實が引取るやうになつてからは、重雄の養育の仕方について良太やおかねの不滿は、訪問する度毎に增して行つた。『何うも、お年さんも困るね。丸で、重雄のことは構つて呉れないんだから。』今日も、あの娘の子の髮を結つてゐたが、あの子のことばかり構つてゐる。あれぢや、本當に重雄が可哀相だ。』かういつも二人は滴した。

ある日、實は訪ねて來た。實は、『今日は、をばさんにお願ひがあるんですがね。是非きいて戴きたい

出されることはあるまいと思はれるやうな遠い昔は、それからそれへと話しつゞけられた。後にはその話は世間話から不可思議の話などへと落ちて行つた。良太が昔、狐につまゝれた人の話をした時には、聞いてゐた人達は皆笑つた。

葬列は賑やかであつた。實が交際家なので、其處からも此處からも、大勢會葬者が來た。生花と造花、棺、棺側には、實と眞弓が神主の着るやうな袖の長い衣を着、克巳ははなやかな少尉の軍服を着けて從つた。良太と石川とは徒歩で其後に續いた。

田舍から東京に出て、老祖父が死んだ時に初めて買ひ取つた青山の三坪の墓地、そこには老祖父母、お初、お雪の生んだ男の兒の墓が並んで、その傍に、今度はお幾の埋葬される穴が深く掘つてあつた。良太が先年車に載せて運んで行つた楓の樹はいつか大きくなつて涼しい蔭をあたりにつくつてゐた。

四十二

月日はまた經つて行つてゐた。

裏の淨水池がすつかり出來上つてからも、もう二年や三年は經つた。大きな赤煉瓦の建物、正門は良太のゐる町の通りとは反對の町の通りの方に出來て、裏門は昔、切腹を命ぜられた侍や僧侶や、傴僂の老いた爺や、おかねの姉などの葬られた寺の傍のところにつくられた。周圍はぐるりと石垣の上に芝草

しかしお幾の死は、實の一家に取つては、平和の到來のやうに見えた。涙に暮るゝものは、お勝位のもので、誰の顔にも新しい生活と平和とに對する希望がかくすところなくあらはれてゐた。いつも暗い實の顔も明るければ、新しい嫁の笑聲も高く冴えてあたりにきこえた。裏にある眞弓の家におかねが行つて見ると、嫁は綺麗に丸髷に結つて、銘仙の派手な單衣を着て、莞爾と笑つて迎へて、縁側では、克巳と眞弓とが、畑の周圍に出來てゐる玉蜀黍を取つて來て、七輪を出しかけて、ばた〳〵團扇で煽いで燒いてゐた。

通夜の夜は賑やかであつた。奥の疊を二疊ほどあけて、大盥に湯を波々と汲んで、肉身の者が寄り集つて湯灌をする時には、そこは人で一杯に埋つた。『こんなになつちやつた。まァ、この手の細いこと……それ、母さん、お勝ですよ。苦勞と難儀ばかりした母さんだつた。來世は樂な好い處に生れてお出なさいよ。』かう言ひながら、お勝は綺麗に體や顔を洗つてやつた。『どうも、これは仕方がない。誰でも一度はかうなるんだから……それを考へると人間も儚いものさ。』こんなことを言ふものもあれば、『をばさんは元氣な人だつた。誰にでも負けてゐることの嫌ひな人だつた、』などといふものもあつた。種々な心と種々な思とが一緒になつて其處に巴渦を卷いた。

月が明るく中庭を照した。樹の影と樹の影とが重り合つて、夜露に濡れた椿の葉は美しく光つた。良太は實や、眞弓や、克巳などを相手に、父親の戰死した時分の昔話をした。遠い昔は――滅多に再びと思

なども其處に來てゐた。

『タヾイマハヽシス』といふ電報を受取つた時には、おかねの眼からは流石に涙が流れた。『あゝたうとう佛樣になつたか。』かう思ふと、長い間一緒に通つて來た年月が歷々と繰返されて、其折々につけての光景が一つ〳〵浮び出して見えた。山形で初めて兄の許に嫁に來た時分、綺麗に丸髷に結つて赤い手絡をかけた姿や、お國替の時に、おなかにおてつを孕んで、長い道中を馬に乘つて旅をして來た姿や、御維新後に、兄と一緒に畠の畦を切つて、百姓になる決心をした時分の姿などが、ごたごたと一つになつておかねの眼の前を浮んで通つた。お初のことを考へると、『嫂さんも餘りひどい、』といつも思ふのが常ではあつたが、しかし愈〻別れるとなると、悲哀の情が塞るやうに胸に溢れた。で、おかねは電報を持つて、邸の植木に手入をしてゐる良太の許に知らせに行つた。

『やれ、やれ、たうとう亡くなつたか。』かう言つて、良太も眼をしよぼ〳〵させた。別れの辛さといふことよりも、免れ難い死に對しての悲哀は、一時二人の胸を堪へ難くさせた。

やがて二人は揃つて山の手の實の家へと行つた。家にはくやみの客やら親類やらが大勢集つて遺骸の寢かしてある隣の間は、坐るところもない位混雜した。逆屛風の陰には、枕團子や箸をさした山盛飯や線香の烟の下に、新しい手拭をかけて、お幾は丸で別な人のやうな顏になつて、冷たく橫はつてゐた。『やれ、やれ、こんなになつたか。』かう言つて線香を供へた良太の手はぶる〳〵と顫へた。

『すつかり痩せちやつた……』

『あんまり氣を揉んで、焦々するからわりいんだ。自分で、自分の壽命を縮めてゐるんだから。』

『何うも性分だから仕方がない。』

『折角、子供を大きくすると、親は死んで行くやうなもんだ。』

良太はこんなことを言つた。二人はそれでもお茶など飮んで、それから床を取つて、さびしさうにして寢た。戸外は月が晝のやうに明るかつた。

四十一

半年ほど苦しんで、お幾はその年の八月の中旬に死んで行つた。それにしても、その苦痛は何んなに烈しかつたか。とても助からないといふ醫師の宣告は、その年の花の咲く時分から受けてゐたが、萬一を思つて、高い診察料を出して、實は大學の名高い博士などに來て診て貰つたりした。新しい實の嫁、眞弓の嫁、貧しい生活の淵に沈淪したお勝、石川、石川のおてつの總領娘、さういふ人達の絶えざる看病と見舞との中に、病人はひとり何うすることも出來ない苦痛と煩悶とを續けた。時にはひとり死んで行く苦悶に堪へかねて、藥瓶をあたりに投げつけたりした。八月の初めに、おかねが見舞に行つた時には、體は瘦せ、骨はあらはに、顏つきなども變つて、口も碌々きけなかつた。遠い雪國の聯隊に赴任した克巳

つて來たが、十一時近く、倅が來て、折詰などを持たせられて、良太達は明るい月夜を宅の方へと歸つて來た。

良太の胸にも、おかねの胸にも、種々なことが思ひ出されてゐた。良太は倅の中で、維新後に此處に來てから、始めて田舍の城下町をたづねたことなどを思ひ出してゐた。老祖父、老祖母、さういふ人々は皆死んで行つた。現に、その時分はまだ若かつた嫂も、重い病床に臥しつゝある。今度は難かしいかも知れないのである。そして、その病床で、息子達が嫁を迎へる……。良太は過ぎ去つて行く年月の悠久なのを思はない譯に行かなかつた。つゞいて、良太は、賣られた地面、失はれた貯金、外國の何處で何うして死んだかわからない息子、青山の土の中に年若くして靜かに眠つてゐる娘などのことを思つた。その前には、矢張同じ思を載せたおかねの倅が月明の中を逸早く走りつゝあつた。

しかし家に歸つてからも、二人はそのことについては別に何も話さなかつた。おかねはランプをつけてから、火鉢の埋火をかき起して、それに炭をついだ。良太は默つて袴を脫いだ。と、暫くしてから『もうお歸りですか。』かう窓の處から隣の乾物屋の上さんが聲をかけて呉れた。

壁に映つた二人の影はさびしさうに薄暗く見えた。

『今日は機嫌が好かつたけれど、嫂さんの今度の病氣は何うも難かしいね。』

『さうだな。』

父母がついて來た。おかねは頬の豐かな、色の白い、脊のあまり高くない肥つた無邪氣な娘が、滴るやうな高島田を、重さうに恥かしさうに俯向いてゐるのを見た。儀式の時に使ふ鼈甲の簪は、はなやかに灯に光つた。

屛風を建て廻した前に、二人を坐らせて、儀式の盃をさせて、それから一行は實の家の方へと行つた。其處にも矢張三組の朱塗の盃が置かれてあつて、嫁と母親と兄弟との固めの盃が取交された。男の兒は、手に持たせられた盃につぐ眞似をしてお酌が引込んで了つたので、『坊やのには何にもない。一つも入つてやしないや、』と言つた。それが一座をドッと笑はせた。

實の時に比べると、初婚だけに、和氣が何處となく靄々としてあたりに滿ち渡つてゐた。母親の腹も幸ひに痛まずに、いつもに似ず莞爾して、眞弓の傍で招宴のすむまで坐つてゐた。嫁は新たに着更へをして、今度は主人側になつたといふやうにして馴れぬ手つきでお酌などをした。

『眞弓がかうして嫁さんを持つやうになつたんだからな。早いもんですね。根岸にゐる時分には、まだ六つか七つ位だつたが、年を取るのも仕方がありませんな。』半ば醉つた石川はこんなことを言つて昔を話した。あらゆる艱難、あらゆる辛苦は、時の力の中に氷のやうに跡なく解けて行つて了つてゐた。良太や石川は、嫁の父と舊藩時代の話などをした。嫁の父は醉つて高砂などを謠つた。

新夫婦を再び裏の家に送りとゞけて、式ばかりの床盃をさせて、やがて良太夫婦は實の家の方へと戻

いろな世話は私の方でしますから、當日だけさうなつて戴けば好いんですから。』實の心では兄弟は皆な一方ならずこの叔父叔母に世話になつてゐるのだから、かゝり子のない叔父叔母に取つても、その方が將來の緣が深くなつて好いと思つたのであつた。

で、良太とおかねとは、實の結婚式に列つてから二月と經たない中に、再び紋附を着て、上水に添つた道を山の手の方へと行つた。實の時には、良太とおかねは、二十七八の、いくらか髮の毛のちゞれた、色の白い、脊の高い新しい嫁を見た。言葉には、いくらか田舍訛があつて、丁寧な流暢な世馴れた調子でその人は話した。盃をあげる時分、母親の胸は急に痛くなつて、纔かに儀式だけをすませると、病人は四疊半の方に伴れられて寢た。

眞弓の時には、お幾の機嫌が好かつた。寫眞では見てゐたが、實物には初めてなので、おかねが早目に出かけて行つた時には、床から起きて來て、『何んな嫁が來るか、眞弓の惚れた娘は何んな子か、』などと言つて笑つてゐた。裏の家に行つて見ると、三間しかない家は綺麗に片附いて嫁の方から送つて來た簞笥や長持が其處此處に片寄せて置いてあつた。緣側の處で、眞弓は鬚などを剃つてゐた。

日が暮れる時分に、嫁は嫁の姉に送られてやつて來た。丘の向うの林の上には、大きな月が出て、家家の窓には既に灯が明るくついてゐた。

媒妁役に定められた良太とおかねとは、やがて出てそれを迎へた。嫁には姉の外に昔風の士族氣質の

まだ好かつたけれど、あゝどつと寢てゐちや、家にしつかりした世話をするものがなくつちや駄目だよ。それに、重公の世話だつて困るだらう。お雪さんは、もう歸つて來ないかしら？』

『駄目です。駄目です。あれは、母さんに氣に入らないから。』

實は頭を振つて言つた。

處が、突然近所から世話をする人があつて、てきぱきと話は纏つて、病人もさうする方が好いと言ふので、その年の中に、實は新たに結婚した。

續いて眞弓の方にも、結婚の話があつた。それは友達の妹か何かで、兩方で思ひ合つて、何うしてもそれを貰ひたいといふ話であつた。實は來て話した。『母さんがあんなだから好くなつてからと言ふ方が好いんですけれど、また一方から考へると、結婚させて、母さんに安心させるのも好いと思ひますから、儀式をさせて了はうと思ふんです。行田の士族の娘で、私も一度逢つて見ましたが、あれならわるいことはなからうと思ひます。眞弓ももう來年二十九ですからな。』

『母さんは？』

『母さんも好いつて言ふんです。』

『それなら、好いだらう。』

『それには、叔父さん叔母さんに、是非媒妁になつて戴く方が好いと思ふんですが――いゝえ、いろ

出たり入つたりした嫁が、たうとう不縁になつて出て行つたが、その年の冬頃から、お幾は、『何うも具合がわりい、わりい、』と言つてゐた。中年から胸の下のところに持病があつて、寒いにつけあついにつけ、癪が起つたり何かして困つてゐた。押すと、胸の下に固いものがあると言つてゐた。それが急に痛み出して來た。二十八になつた眞弓は、その頃、何うやらかうやら書いたもので自分だけは食つて行かれると言ふので、實の家のすぐ裏に明家のあつたのを一軒借りて、手廻りの道具は、二つあるものは、本家からわけてやつて、兎に角世帶を持つことは持つたが、その時分には、お幾はそこに出かけて行くにさへ呼吸が切れて仕方がないと言つてゐた。嫁が出て行つてからは、丸髷に結つた中年増などが手傳ひに來てゐた。

克巳はその附いてゐた隊が變つて、今では遠い雪國の聯隊の方へ赴任して行つてゐた。

良太とおかねはよく其處へ見舞に出かけた。『何うも、今度は治りさうもない。』かうお幾は絶望して言つてゐたが、おかねも良太も、初めの中は、さう大して重い病氣とも思つてゐなかつた。しかし、衰弱は次第に加はつて行つた。實の話では、始め瘍が内部に出來て、それを散らしたが何うも旨く行かなかつたらしかつた。『腸に癌でも出來たんぢやなければ好う御座んすが――』役所の歸りに、實はやつて來て、話した。

『それも、さうだが、お前も、一人相應なのがあつたら、持たなくつては困るよ。母さんの達者の中には、

にね。』

『なァに、あの人は駄目だよ。小さい時から、そんな風だつたから……。それに奥さまもわるいんだよ。甘やかして育てたから。』

『でも、地面が賣れて、奥では好いんだらうね。』

『それは好いのさ。何でも七八萬になつたつて言ふから。どうせ、奥のもんだから、仕方がないけども、をぢさんは、長年手がけた地所なもんだから、惜しがつてゐるけど、何うも仕方がない。』

『をぢさんも、少し樂をする方が好い。』

『それやね、奥だつて、今になつて、暇になつたから、何うでもしろつて言ふわけには行かないだらうけども……。何うしても、働くところがなくなつたから此方が損さね。その日〳〵のものつきり貰へないつて言つたやうな勘定だから……』

『それは何うしても、さうだね。』

『俺も、内職でもするかなんて言つてゐるよ、家では――』笑つて見せて、『矢張、人は人、自分は自分で、身始末はしなければならないのさ。死ぬ支度さ、これからは――』

『そんなことはないけどもね。』

『なァに、本當のことだよ。』おかねは煙草入を出して、煙管からスパ〳〵と煙草を喫つた。

わるいのを口癖のやうに言つたりした。實は相變らず古ぼけた一枚しかないフロツクコートを着て朝早く役所へ出かけて行つた。

『嫂さん。本當に、そんなに氣を揉んでは駄目だよ、壽命を縮めて了ふよ。』かういくらおかね達が言つてきかせても、お幾は何うしても暢氣にはなれなかつた。

お初の生んだ男の兒も、段々大きくなつて、もう小學校へ上つてゐた。すつかりおばアさん兒になつて了つて、寢るにも起きるにも、お幾でなければ承知しなかつた。その男の兒のことについてもお幾はよく嫁と衝突した。

『水溜はもう餘程出來たかね。』

『まだ半分だよ。』かうおかねは言つて、『大變だよ。それに、土方達が大勢入るもんだから、人氣がわるくなつてしやうがない。』

『あ、さう言へば、何うしたえ？　お孃さんは――』

『あれつきりだよ。何でも、評判では、男が女房を出して、一緒になつてゐるつて言ふことだよ。何でも北裏あたりにゐるつて……』

『さうかねえ、まァ、奥なんかのお孃さんでも、さういふことをするのかねえ。色戀の道ばかりは別だかねえ。ぢつとして、おとなしくしてゐれば、一度は不緣だつたからつて、いくらも好い處に行けるの

『もう八十一。』

『八十一？　お達者ですね、矢張昔の人は丈夫ですね。劍術や柔術で、體が鍛へてあるからですね、』などとおかねは言つた。

時には、男の兒が幼年校の制服で、ちよつと家に來てゐることなどもあつた。『まア、こんなに大きくなつたかね、精一が――。今度、日曜にでも遊びにお出でなさい。あんな處だけれど、十二社にでも行つて見ると好い。もういくつだえ？　二十一、さうですかね。さうなりますかね。』かう言つたおかねは、おてつの死んだ時のことなどを思ひ出してゐた。横須賀に嫁いで行つた總領の娘は、姿といひ、眼色といひ、氣立といひ、死んだ母親にそつくりで、『何うかすると、おてつかと思ひますよ。聲なんかそつくりだよ。をばさん。』かう言つて、石川は最近に寫した寫眞をおかねに見せた。石川は今でもおてつを思つてゐるやうに見えた。今の妻を貰ふ前に、『お勝は、運がわるいつて言つたが、來て吳れると好いがな。さうすると、子供達のためにも好いが――』などと言つたことをおかねや良太は聽いて知つてゐた。

死んだお初や、外國へ行つた息子の話などが出た時には、『そんな筈がないがな。分りさうなもんだがな……』かう石川は考へるやうにして言つた。

實の家では、嫁が出たり入つたりしてゐた。お幾は相變らず、晩酌の二合を樂んで、夕暮にさへなると、酒癖がわるく、昔を思ひ出して泣いたり、子供達の恩知らずを繰返したり、嫁や實に平生の處置振の

實の家に來た次手に、おかねや良太ば、土產物などを持つて訪ねて行つたが、西南の役の後に建てた二階屋はもう古くなつて、庭木は深く繁り、門の袖なども半壞れてゐた。其處はさる人に貸して、石川はおてつと結婚した古い家の奥に、一間建增して、そして住んでゐた。老人の世話をさせる爲めに貰つたといふ新しい細君は、藩の奥女中か何かをつとめて、その年になるまで男を知らずに通して來たといふ四十二三の女で、年に似合はず、皺の多い顏に白粉をつけたり袖口に赤い切をつけたりしてぴらしやらしてゐた。

石川は世間から後れて了つた人のやうに、何處にもつとめずに、本を讀んだり、昔の知己を訪ねたりしてぶら〳〵と日を送つてゐた。

『何ァに、世の中はかうしたもんですよ、』などと石川は良太に云つた。

維新の際に、會津の山奥で農兵を組織して、一方の隊長となつて、三斗小屋で官軍と戰つた老父は、體は依然として丈夫で、言葉は依然としてわからないが、持病の喘息で、ゴホン〳〵と咳嗽をせきながら、大きな老眼鏡をかけて、唐机に向つて、終日長く漢詩を作つたり、石川の郡長をしてゐた田舍の地理の編纂をしたりして日を暮した。『やァ、これは、これは、新町のをばさんですか。』おかねが行つてゐると、こんなことを言つて、眼鏡を外しながら奥から出て來た。

『おぢいさん、御丈夫で結構ですね。もう、おいくつです？』

には、『好い鹽梅だね、戰爭がすんで――』かう唯簡單におかねは云つた。

山の手のお幾の家では、戰爭で士官が足りないので、度々落第した克巳が士官候補生に合格して、新しい軍服を着け得るやうになつたのを喜んでゐたが、それも時の間に年月が經つて、この春は學校を卒業して、正裝の少尉の軍服に金のかゝるのをお幾は苦勞にしてゐた。今でも依然として、嫁と姑の仲はわるく、實一人が中に入つて困つてはゐたが、それでも、かゝり子のないさびしい自分達の生活に比べては、子供達が段々大きくなつて、世の中へ出て行くのが羨しかつた。『でも、皆な、大きくなつて行くから、嫂さんなんか、これからは、樂が出來るよ。今までの種が芽を出して來たんだよ』などとおかねは言つた。それにつけても、外國へ行つた息子のことがをり〳〵二人には繰返された。今でもその息子が立派になつて突然歸つて來た夢などからおかねは覺めた。

その頃、石川は田舍の郡長の職をやめて男の兒と老父とを作れて、元の邸の前にある通りに面した小さな古い家に來て住んでゐた。石川も年を取つて、髮も白く、警察の署長をした頃のやうな元氣は、何處にも見出すことが出來なかつた。おてつのあとに來た細君には、幸ひに子供はなかつたが、田舍から出て來る時分、運わるく狂氣になつて、病院に入れたり何かしたが、いろ〳〵相談の上、たうとう田舍の里に歸してやつて了ふことになつた。總領の娘は、同藩士の海軍の屬官に緣があつて、橫須賀の方に行き、男の兒は、出來が好くつて、一度で及第して、陸軍の幼年校に入つた。

トタン葺の小さな工場などが建つて、細い煙突から、薄い黄い煙が秋の晴れた碧い空に捺すやうに靡いて居た。娘達は今まで見たことのないやうな袴を裾長に着て、小さい靴を穿いて、そして活潑に股をひろく歩いて行つた。ある西洋づくりの高い家屋の窓からは、ピアノの音などが嚠喨として聞こえて來た。

青年達の風俗も變つた。見附けてゐるから、別に際立つて變つたとは思はないけれども、昔のことを考へたら、何といふ違ひであらう。大髻に大小、劍術を學ぶために、または學問をするために、大名小路を歩いて行つた若者の姿などは、もう何處にも見ることは出來なかつた。誰も彼も、外國の學問をして、昔の人にはわからないやうな言葉を口にした。眞弓や克巳のやつてゐる學問なども、良太やおかねには丸でわからなかつた。それに、若い人達の心持も違つてゐた。『どうも、今の若い人達の云ふことは、何だかわからないよ。丸でちんぷんかんぷんだから。』かう笑ひながらおかねは眞弓や克巳に云つた。

二人はまたをり／＼近い頃にあつた戰爭のことなどを頭に浮べた。軒毎に並べて立てられた國旗、湧きかへるやうな聲を立てゝ街頭にふれて歩く戰勝の號外、停車場から列を成し隊を組んで萬歳の聲に送られて出て行く兵士の群、それが、ともすると、陣羽織にだんぶくろ、火繩筒を持つて調練しつゝ出かけて行つた維新の戰爭と一緒になつて見えた。西南の役に戰死した兄のことなども浮んだ。しかし、新聞も讀まない身には、それが何ういふ風に、國家の一大事であつたか、また何ういふ風にその戰爭は戰はれたか、人から聞く話以上に、良太もおかねも何も知らなかつた。凱旋の提灯の街頭を賑かにした時

次がれて話された。何でも、その技師は依然として、其の小屋にその姿を見せてゐるといふことであつた。土方達のトロコを運ぶ聲は、矢張、垣を越して、旦那の書齋まできこえて來た。旦那は夜おそくまで、ランプの下で眼鏡をかけて歴史の本などを讀んだ。

四十

良太もおかねも、山の手の方へ行く時には、いつも上水に添つた裏道を通つて、汽車の通る間を、鐵道の踏切に、荷車や俥や大勢の人達と一緒に待つて、それから女郎屋の淺黄木綿の暖簾の汚れて下つてゐる處から裏に拔けて、杉森の繁つた社、古い大きな寺、田圃、場末町、兵營のある長い堤、昔の大名の長屋の殘つた邸、さういふところを捷路をして通つて行くのを例にしてゐた。そして、實やお幾達の住んでゐる家の近所の菓子屋で、よく櫻餅だの柏餅だのを買つて土産にした。

二人はいつも其處を通る度に、種々なことを思ひながら歩いた。祖父母達の田舍から出て來た時、お初の嫁入の俥のあとについて行つた時、お初の辛いといふのをなだめたり賺したりして歸してやつた時、急報を得て俥で驅けつけた時、初七日に進まぬながら二人して出かけて行つた時、思ひ出せば、思ひ出すほど種々な光景と狀態と感慨とが網のやうに複雜に織り込まれて浮んで來た。それに、世の中も著しく變遷した。ある田圃は埋め立てられて屋敷町となり、ある杉森は切拂はれて畠となり、ある田圃には、

かう良太に言ふと、

『そんなことは、知らないが、よく裏門から土木の小屋へ行くのを見かけたことはあるよ。』

『さうかね。』愈ゝ驚いたらしく、『それに、女房子があるんだつて、その男には――』

『本當なら、困つたもんだ。』

噂はいつとなくあちこちに語り傳へられてゐた。十二社の奥の森、森の中に近頃出來た茶屋、それから停車場附近にある二階屋、さういふところを媾曳の場所にしてゐることなども端なく人の口に上つた。それでも、お光は無頓着な顔をして、奥方や姉刀自に變な眼色を浴せかけられるのを平氣で、誰もゐない時には、勝手元で女中と男の噂や惚氣などを言つてゐたが、秋が更けて、庭の楓がそろ〳〵赤くなる時分、人目に立たない指環とか時計とかいふ金目なものだけを持つて、ある夜こつそりと裏門から出て行つた。門から少し行つた垣の傍には、男は身を闇に忍ばせて、女の來るのを待受けて、急いで停車場の方へと行つた。

邸では大騷ぎをしたが、何うすることも出來なかつた。それに、肉身の子と養女とでは、親達の心持も違つてゐた。『放つて置け、放つて置け、捜して見たところで、さういふ了簡の奴では仕方がない、神山に籍を返してやれ。』かう言つたきりであとは旦那は何も言はなかつた。

その仲を取持つた女中は、すぐ暇を出されて了つたが、それから暫くの間は、その噂が彼方此方に取

かけずに、折からさし込む夕日を華奢な白い手で遮つた。

それからは、樹陰の多い裏門のところにお光の姿がをり／＼見えた。其處を通る人達は、何うかすると邸のお孃さんと洋服の男と立話をしてゐるのを見かけて振返つて見て行つた。

良太達の耳にその話の入る前に、良太は度々夕暮などに小屋掛の方へ行く路を急いで登つて行くお孃さんの姿を見た。しかしそれに就いては、良太は別に話しもしなかつた。おかねにも言はなかつた。それがある日、奥から歸つて來たおかねは、突然『あきれたもんだね。そんなことが本當にあるのか知ら。』かう言つて、お光について奥方から聞いた話を良太にした。奥方は殆ど泣かぬばかりにして殘念がつて話した。

『あの子には、お前も知つてる通り、幼い時分から骨が折れて、並大抵ぢやなかつたんだからね、私は私の緣たからと思つて、人間に出來上らないでは、旦那樣にもすまないからと思つて、何んなに苦勞したかわかりやしない。學校でも、出來なくつて落第ばかりして困つたし、お嫁にやつたつてあの通りだし、何うしてあゝいふ子が神山の家に出來たかと思つてゐたのに、今度は、まア、呆れたぢやないか。……』

かう言つて、奥方は聲を低くして裏の技師と出來合つたことを話した。おかねも流石に呆れずには居られなかつた。

『本當かしら、ねえ、まア。』

『本當ですかね、まア。』おかねは眼を丸くした。

『好い男ですね。お孃さん。』

『さうね。』

お光は笑つてゐた。

ある時、女中はお光と其男と二人で井戸の傍で立話をしてゐるのを見た。お光は後向きになつて、恰好の好い銀杏返しを見せてゐた。男の可愛い眼をして笑つてゐるのが此方から見えた。

『え、好う御座んすとも……いつでも入らつしやい。まだ出來上らないから駄目ですけども、小屋に來れば、それでもちつとは向うが見えますから。』女中の近寄つて行つた時には男はこんなことを言つてゐた。樹の間から洩れた夏の日影は、チラ〳〵と、お光の髪やら着物やら帯やらの上に動いた。リンネルの白い服もあたりにふさはしくはつきりと際立つて見えた。

『貴方もいらつしやい。』

かう男は女中にも言つた。

で、ある日の夕方に、お光と女中の姿は、その小屋掛の中に見えた。半ば掘られた低地には、縱横にトロコが往來して、赤土の積み上げられた中に、一かたまりになつて土方達がせつせとシャベルを動かしてゐるのが蟻の群か何ぞのやうに見えた。其時は杉田の上役の技師はもう歸つて下に使はれた脊廣の男が卓の上で頻にペンを動かしてゐた。『成ほどあついわ。』かう言つて、お光は勸められた椅子にも腰を

も譲らなかつたので、男の兒は先方で引取り、お光の籍は惜しげもなく向うから突返して寄越した。子供を手離すのを別に何とも思つてゐなかつたお光の心と體とは、一度目覺めた異性の方へと強く〳〵引張られて行つてゐた。お光は一人寢の夜をことに堪へ難くさびしく感じた。

水を貰ひに來る三四人の連中の中に、一人三十四五位の色の白い髮の漆のやうに濃い男があつた。何でも技師の一人であるらしかつた。やさしい口のきゝ方をして、笑ふと眼が可愛く見えた。その男は、お光のそこにゐる時に、二度ほどやつて來たが、三度目に、

『お孃さんですか？』

と女中に訊いた。

『え……』

女中は笑つて見せた。

その話を女中がお光にすると、不思議にもお光の眼が美しく輝いた。『さう、そんなことを聞いたの？何といふ方だか、今度訊いて御覽。』

で、お光はやがて女中からその男のその小屋での次席の技師であり、高等工業の土木科出身であり、月給もかなり多く貰つてゐるといふことを知つた。『さう杉田さんつて言ふの？　宅は何處なの？　さう？新宿の北裏にゐるの？』

に上に立つてゐるやうな人で、其處にはテイブルが置いてあつたり、測量機械が置いてあつたり、インキ壺に並んで設計圖がひろげられてあつたりした。暑い夏は既に來てゐた。工事はまだ三分の一も終らないけれども、それでも元の林であり畠であり茶畠であつたさまは、もうすつかり跡も形もなくなつて了つて、驚くべき大工事の光景が歴々とその前に展げられてゐた。赤い白いしるしの旗などが處々に立つて、掘り上げた土は、山をなして到るところに積まれた。夏の日影はヂリ〳〵と堪へ難く木蔭のない小屋掛の上に照つた。

で、何うかすると、その技師や技手達は、そこから裏門を入つて、その近くにある井戸に水を貰ひにやつて來ることなどがあつた。邸の内は樹木が深く、蔭が多く、涼しい風があたりに滿ちた。蟬などが靜かに鳴いた。

女中が洗濯などをしてゐると、さういふ人達は、づか〳〵と遠慮なく入つて來て、水を貰つて『お邸は涼しくつて好い。此處にゐると、夏知らずだ。それから思ふと、私のゐるところなどは熱帶國だ。少し涼ませて貰ひますかな、』などと言つて、傍の草原に腰をおろして、リンネルの白い服のボタンを外して、ポケツトから卷煙草などを出して吸つた。

何うかすると、お光が髮を綺麗に銀杏返しに結つて、涼しさうな單衣を着て、しよざいなさゝうに、其處に逍遙してゐることなどもあつた。春から夏になる間に、お光の方の話は急轉直下して兩方とも一步

『しかし、まァ開けては行くんですから。……段々好くはなつて行きますよ。』

平凡なさびしい場末町は、俄かに巴渦を卷いたやうな賑やかさと活氣とを見せて來てゐた。それは丁度淀んだ靜かな淵に急に石を放り込んだやうなものであつた。今まで聞いたことのない噂がそれからそれへと傳つて行つた。あるだるまを二人の土方で張り合つて、一人の土方が一人を死ぬほどなぐつたといふ噂をするものもあれば、通りの裏の貧乏者の娘をある土方が盗み出して、向うの裏の方に隱して置いたなどと話してきかせるものもあつた。ある監督は、ある家の女房と出來て、亭主の眼を忍んで、夜遲く小屋の中で媾曳した。

トロコが土を滿載して、五臺も六臺もつゞいて坂を下る時には、面白がつて、ワィ〳〵と言つて土方達は聲を揚げた。その聲は垣を透して、奥の旦那のゐる書齋の方まで聞えて來た。お光は何うかすると、子供を女中に預けて置いて、色の白い顏と派手な扮裝とを、あたりに浮き立つやうに見せて、垣の內から土方達の騷ぐのを面白さうに見てゐた。

三十九

垣の傍にある奥の裏門から、一番近いところにある小屋掛の中には、新しいパナマ帽を冠つた技師だのリンネルの白い洋服を着た技手などが五六人常に出入した。さういふ人達は、請負の土方の親分の更

向いて來たんですな。あの旦那。』
かう一人が言ふと、
『それにしても、青山さんは氣の毒だ。あそこを開いたのは、青山さんですからな。あの人がゐなければ、とても、あゝいふ地面にはなりません。それなのに、奥では、一文だつて呉れやしないつて言ひますし、青山さんは青山さんで、あゝいふ正直な人だから、そんなものを貰はうともしないで、あゝしてせつせと働いてゐますがなァ。』
一人はかう噂した。
『一體、何年かゝるんです。工事は？』
『淨水池ですかえ。』
『え。』
『三年や四年はかゝるんでせうよ。あそこをあら方掘りつぶして、そして、上水を引くんだつて言ひますからな。』
『それは大變だ。……それにしても、何處から引くんです！』
『なァに、ぢき向うの處に、閘門を拵へて、一里ほど先きから引くんでせう。』
『兎に角、金は落ちるから、商人は好いけれど、わし共なんか、却つて煩さくつて困るですな。』

『よう、來ましたな！』

などといふ聲が其處からも此處からもかゝつた。ある娘は、ある夕暮に、路の角で危くさういふ人達に手ごめにされるところであつた。そればかりではなかつた、その大勢の土方達を相手にするあやしい飮食店が、いつ何處から移つて來たともなく町の通りに出來て、夜は白粉を眞白にぬつた女が黄い聲を出して道行く人々の袖を引いた。

『何だ、何をしやがるんだ。』

こんなことを言つて、蹌踉として、醉漢は町の通りを歩いた。

『えらいことになりましたな。』

『でも、まァ、金は落ちるには、落ちるんでせうが、何うも、人氣がわるくなつてしやうがない。女の子なんか、滅多に、夜は外へなんか出せやしませんぜ。』

『左樣ですな、それに、喧しくて困りますよ。私の隣に、料理屋が出來ましたが、夜おそくまでだるまが騷いで、本當にゆつくりも寢てゐられやしません。』

町の人達は逢ふとこんな話をした。

『一番好いのは、まァ青山さんの奥の旦那でせう。坪一圓ぱにしても、六萬兩だ。大したもんですな。俄分限ですな。あの地面なんか、元は、藪で、やるつて言つても貰ひ手がなかつたもんですがな。運が

ても駄目だよ。奥さまが何うしてあゝいふのを默つて見てゐたかと思ふ位だよ。』などと言つてゐた。里に歸つて來てからも『だつて、あれぢやしやうがない、男の兒に乳を飮ませるのさへ面倒なんだから。』

『何うしてあゝだか、性分だ、矢張。』

などと良太も合はせた。

その西風の寒く吹く時分、先方から人が入つて、元の鞘にもどすやうにと、種々口を利いて呉れたりしたものがあつたが、話は容易に纏らずに、お光は姉自刀の居間の隣の六疊にぶら〳〵と起臥してゐた。時には、女中に着飾つた男の兒を抱かせて、自分も盛裝して、鎭守の社にお詣りに出かけて行つたりした。

梅がそろ〳〵咲き始める頃から、裏の淨水池の工事は段々活氣を帶びて來た。何組、何組と受負の土方達は大勢入つて來て、廣い地面の到る處に、トロコの軌道が縱橫に敷かれて、掘つた土を滿載しては、此方から向うへと運轉して行つた。トロコには、鶴嘴を持つた土方達が大勢乘つてゐた。

入つて來る土方の數は、日を追つて、益々多くなつて行つた。町の人達は、時の間にあたりの空氣の夥しく變つて行くのを感ぜずには居られなかつた。娘などが邸と實地との間を通ると、

『おい、姐さん、下から何か出るよ。』

『もつとまくらないか。』

裏が急に一面に展けたので、其冬の西風は、殊に烈しく凄じく奥の邸を襲つた。『裏ががら明きになつたもんだから、寒いにも何にも……。良太、もう少し樫でも境に植ゑなければ、とても凌がれない、』など旦那も奥方も言つてゐた。奥方は性のわるいインフルエンザにかゝつて一月以上も床を離れずに寢てゐた。

『本當に、寒い。』

かうおかねも言つた。

そればかりではなかつた。町の通りに住んでゐる人達も、皆な寒がつて、風邪などを引いた。遮るものなく平野を越して來る風は、家の隙間と云ふ隙間から寒く〳〵吹き込んで來た。

奥の養女のお光は、近所でも評判するほど綺麗な娘になつて、一二年前の春に、ある財産家の辯護士の許に眼を驚かすほどの立派な支度をして嫁づいて行つたが、姑や夫との間が面白くないので、男の兒を一人生むと、そのまゝ里へと歸つて來てゐた。おかねは、お光の嫁に行く時にも頼まれて侍女になつて、一週間も向うに行つてゐて、種々なことを知つてゐたが、かうならない以前から『奥のお孃樣にも困るよ。あれではとても一家の奥さんにはなれない。朝なんかでも、いつまでも平氣で寢てるんだもの。姑さんなぞが起きて、御飯を食べて了つても、まだ寢てるんだもの。それに、女郎の腐つたのか何かのやうに、いやに、亭主にべたついて、長襦袢やなんかで起きて來たり何かするんだもの。あれぢや、と

樹木や、竹藪や、さういふもの丶取片附の爲めに、良太は忙しい月日を送つたが、それが略〻濟むと、市廳からは、市長や助役や技師や屬員が澤山にやつて來て、先づ最初に、空地のところ〴〵に土木の小屋掛をした。

種々なものの取片附をしたあとの廣い地面は、荒漠としてさびしいものであつた。良太の整理した六萬餘坪、それにその他の農家の持つてゐる十萬餘坪、それが唯一目に見渡されて、其間に通じてゐる道路を人々の通つて行つてゐるのが小さく手に取るやうに見えた。廣い地平線の上には、秋の色ある雲がふうはりと浮んだ。

處々にはまだ片附け殘された檜の木や、椎の樹などがぽつつり立つてゐるのが見えた。丘といふほどではないが、高く低く地面が連つて、その向うには今まで林や竹藪に遮られて見えなかつた十二社の森がこんもりと見えた。邸と賣つた地面とを劃つた垣のところには喪心した人か何ぞのやうに、ぢつとして立つてあたりを眺めてゐる良太の姿がをり〳〵見られた。

しかし、大工事が眼に立つほどに始められるのは、容易ではなかつた。處々に立つた土木の小屋掛、其處に洋服を着た技師や、腹がけをした土方の親方などがをり〳〵見えたが、しかもその冬は、格別の工事もなくて過ぎた。行つて見ると、小屋掛の中では、焚火などをして瀨戸引の紫色の藥罐などをそこにかけて、二三人の技手が何か話してゐたりした。

『明日、明後日になりませう。』

最後の日には、土方の數を增して、夕方までかゝつた。四方から根元に打込んで行つた鉞、高い幹の上からは、太い綱引を二筋も三筋もかけて、それを遠く離れて、大勢で引くやうにした。丁度その時夕日は美しく野を染めてゐた。『エイヤ、エイヤ……エイヤ』と言ふ聲がすると、『待つた、待つた』と言ふ聲が根元の方からきこえた。

鉞は猶二三度根元に打込まれた。『それ、よし、引いた!』

『エイヤ、エイヤ、エイヤ。』

やゝ曲りかけた太い幹が、少し傾いたと思ふと、やがて凄じい音がして、つゞいて、大地に橫はる地響が地震か何ぞのやうに四邊に轟き渡つた。

其處に離れて立つて、この光景を見てゐた良太の顏を夕日が赤く彩つた。

伐り倒された後の野は、さびしく空しく見えた。いつでも裏に行くと、きまつてその梢を仰いだ良太には、殊にさういふ感が深かつた。伐り倒したのを忘れて、良太はまたしてもその方を仰ぎ見た。

三十八

地所の賣買が濟むと、時を移さず、淨水池の大工事が始められた。初めは畠の茶の樹や、野菜物や、

はもう六十をすぎてゐた。髪は半ば白く、眼がしよぼ〳〵してゐた。根が丈夫なので、腰はまだ曲らないけれど、昔の元氣はもう見ることが出來なかつた。

最初の日は、先づ枝を伐り下すために暮れた。山師の遣ふ鋸につれて、大きな枝は凄じい音を立てゝ落ちた。其處にも此處にも、枝が轉がつて、其傍で、人々は午飯の辨當などを食つた。

『かういふ古い木を切る時には、兎角、過ちがあるものだから、餘程用心しないといけない。』

かう山師の親方の言ふのにつれて、彼方此方で伐つた大きな樹の話が始つた。伐らうとすると天氣が荒れたり、不思議があつたりして容易に伐れなかつた樹の話や、鉞を使つてゐた男が急に血反吐をはいて死んだ話や、伐り終つた夜からある山師の親方があらぬことを口走るやうになつた話や――さういふ話が盡きずに出た。『古い木になるほど、イヤなもんだ、』などと親方は言つた。

三日目に旦那が來て見た時には、枝はもう大抵伐り落されて幹ばかりになつてゐた。

『ほ、すつかり坊主になつたな。』こんなことを言ひながら、『惜しい木だな。こんな松は東京の周圍には、たんとありやしない。麻布の奥に、一本あつたが、あれも、今ぢや、あるかないか。』

『あ、廣尾の？　あゝもうあれは御座いません。』

かう傍から植木屋の親方が言つた。

『明日は伐れるかな。』

ゐた。太田道灌が江戸にゐた時分にも、北條と上杉とが覇を武藏野に爭つた時分にも、矢張この松は依然として此處に聳えてゐた。

冬が來る度に、山から來る西風はいつも凄じく、梢を鳴らした。濃やかな綠の葉の上には霜が白く置き、月は冴えてその影を地上に落した。

『三百年、もつと前だ。』

旦那は散歩のをりなどには、よく其處に來て、その高い松を仰いだ。『ことに由ると、この松は鎌倉時代も知つてゐるかも知れない。義貞や尊氏時代も知つてゐるかも知れないよ。』旦那はこんなことを言つて、それを邸中の自慢の一つにして、五言古詩などを自から賦した。

『何うも、惜しいが仕方がない。』

で、土方やら山師やら植木屋やら、大勢の人達が彼方此方から其處にかり催されて來た。しかしこの大きな松は、とても一日や二日では伐り倒すことが出來なかつた。『惜しい松だな、大きい好い松だな。』山師も植木屋も、皆なかう言つて仰いで見た。

幹は高く、中頃から太い枝が左右にひろがつて、それが笠か何ぞのやうに見えた。梢の綠葉の繁茂は更に見事であつた。雲が低く掠めて通つて行つた。

脚絆を着け筒袖を着て、それこれと指揮してゐる良太の姿は、大勢の人達の中に雜つて見えた。良太

『それはさうだ……』

『よしんば、今度は賣れないにしても、いつかはさうなるには違ひがないんだから、仕方がないさ。いくら、此方で骨折つて開墾したものだつて、此方のもんぢやないんだから、惜しいと思つたつて仕方がない。』

『それはさうだがな……』

『そんなことを考へてゐたつてしようがない。奥は奥、此方は此方だから、此方はつかはれてゐるんだから。』かうおかねは皮肉に言つたが、『奥ぢや、賣れれば結構さ。兎に角、廣いんだから、お金にはなる。』

良太は默つてさびしさうにして、夕飯の膳に向つた。

三十七

殿樣の下屋敷であつた頃、庭の築山の背後に高く聳えてゐた大きな松、殘月に照され、風雨に鳴り、時を時とも思はずに殘つてゐた松――その松が今度愈〻伐り倒さるゝことゝなつた。

その松は、此處がまだ武藏野であつた頃、町などもなかつた頃、村などもなかつた頃、人間などの來て住まなかつた頃から、巍然として高く空に聳えてゐた。その松は、長い間種々の世の變遷を閲して來て

一草一木にもかれはなつかしい馴染を覺えてゐたのであるのに……それであるのに……。

良太の頭には種々なことが往來した。榛莽の中で汗みどりになつて開墾に從事してゐるかれ、とても自分の力では何うすることも出來ないと思つた草藪が段々茶畠になつて行くのを喜んで見てゐるかれ、仕立てた梅の林の中に立つてゐるかれ、筍の一日毎に大きくなつて行くのを樂んでゐるかれ、他の人が何と言つても土地のことだけは自分に旦那が相談せずには置かなかつたのを得意にしたかれ、夕日のさした道に躑躅んで垣を繕つてゐるかれ、土地のことで近所の地主達と種々な交渉をやつてゐるかれ、さういふ自分の姿が歴々と眼の前に映つて見えた。無論、そのために、奥では自分等を捨てることはない。また、さういふことをする旦那でも奥方でもない。しかし、良太は言ふに言はれないさびしさを感じないわけには行かなかつた。

おかねに其話をすると、

『本當かしら?』

『本當らしいな……。しかし、まだきまつた譯でもないらしいが、兎に角、この裏あたりに大きな水溜が出來るらしいな。』

『どうせ、奥だつて、こんな廣い地面を唯放つて置きやしないんだから、いづれ、さういふことになるのは知れてゐるやうなものだけども。』

雜木林があつたり、笹原があつたり、水車場があつたりした。一ところは潭を成して、溪流か何ぞのやうに音を立てゝ流れた。それは水に乏しい都會の爲めに、わざ〳〵遠くから昔の人が引いて來たもので、『上水に塵埃を捨つべからず』といふ高札が、ところ〴〵に立てられてあつた。それにも拘らず、古桶が捨てられ、古茶碗が放り込まれ、時には土手でつばなを摘んでゐた可愛い女の兒が過つて落ちて溺死したりした。

かういふ上水では仕方がない。もう少し立派な水道にしなければいけない。かういふ話は、もう以前からあつた。それにその土地の選擇に就いて種々な噂などもあつたが、現に、ある地主は高價に政府に買上げて貰ふために運動したりしたが、それがゆくりなくも、良太の長年かゝつて整理した奥の土地の上に落ちて來た時には、旦那や奥方の顏には、喜悅の色がかくされずに上つた。『良太、裏の地面が上水の水溜に賣れさうだ。』かう旦那は莞爾しながら言つた。

『それは結構ですな。』

かう言つて、良太は歸つて來たが、長年馴染んだ土地と離れなければならない悲哀が滾々としてかれの胸に上つた。畠、茶畠、林、樹木、竹藪、かれに取つては、それは唯一の慰藉であり、事業であり、隱場所であつた。かれが世間に望みを絕つて一生を託さうとしたのも、銀行が潰れて多年の勞働の貯金がなくなつたのを慨いたのも、娘に死別れた悲哀を慰めたのも、皆な林の陰、森の陰、竹藪の中であつた。

もすつかり變つて、娘や上さんの風俗なども夥しく昔とは違つて來てゐた。誰も彼も、若い娘は皆な束髪に結つて、鹿の子の赤い切をかけたものなどは容易に見られなかつた。『何だ、をばさん、氷を飲まないのかえ、牛乳も飲まないの？』などと驚いたやうにして克巳は叔母に言つた。

『だつて、牛乳はイヤにわる臭いぢやないか。叔母さんや叔父さん達には、さういふものは食べられない。それやね、今ぢや、昔の人だつて、牛肉でも豚でも何でも食ふ人があるけれども、とても叔母さん達には、駄目だよ。舊弊だつて笑はれるかも知れないけども……』

『さうですかねえ。何うしてだらうな。豚なんか旨いもんだぜ。』

こんなことを克巳は言つた。

良太夫婦の住んでゐる土地などにも、夥しい變遷が日に〳〵行はれつゝあつた。雨が降ると、泥濘の海と化して、荷車や圓太郎馬車の轍が深く地に喰ひ込んで、高い足駄でも容易に歩けなかつたやうな街道も、此頃では道路修繕が行渡つて、もう以前のやうなわるい道ではなくなつた。始めて此處に來た頃には家並も老人の齒の拔けたやうに疎らに、其處に一軒、此處に一軒といふ風であつたが、此頃では、それがぎつしりと軒から軒へと續いて、をり〳〵其處等に點綴されてゐた孟宗の竹藪も段々切り倒されて行つてゐた。

その街道に添つては、小さな上水が布を引いたやうに細長く流れてゐた。そしてその兩岸の土手には、

けて別れて行つた。ねんねこで乳呑兒を負つたお勝のあとから、子供達がぞろ〳〵續いた。街道の白い埃が一しきり渦のやうに卷き上つた。

三十六

忘れ形見の男の兒がお幾と一緒に訪ねて來るのを樂みにしたり、家の中に殘つてゐる微かなお初の面影を偲んだり、とても行方の分らない息子の立派になつて突然歸つて來るのを夢に見たりして、良太とおかねは同じやうな月日を送つた。良太は矢張朝早くから支度をして草鞋を穿いて奧へと出かけた。おかねは、夜遲くまで、勝手の仕事場で、暗いランプの下で、鉈で竹を割つて內職のさゝらを造つた。

ある年の秋には、裏庭の隅に、枝も撓ふばかりに大きな見事な柿の實が熟して、それを眞弓や克巳が來て喜んで採つて行つたりした。克巳ももう立派な青年になつてゐた。頭を五分刈に、久留米絣を粛短かに着て、白い木綿の羽織の紐を長く首にかけて步いた。何うしても軍人になると言ふので、去年から豫備の學校に入つて、代數や幾何を勉强した。引かへて、眞弓は髮の毛を長く、それを額の眞中からわけて、蒼白い顏をして、終日書齋の中に閉ぢ籠つて讀書をした。

世はいつ變つて行くともなく世間は日に推移しつゝあるのを良太もおかねも見た。街頭の夏を飾る氷店、昔は忌んで食ふのを屑しとしなかつた牛や豚を賣る大きな店、四谷の通りあたりを行くと、店の飾りつけ

を始める金は、多少持つて出て來てゐたが、それとて、大したものでないらしかつた。子供達も餘り綺麗な身なりではなかつた。

『長くはお世話になりませんけれど、何うか二三日、向うで家の見つかるまで。』かう言つてお勝は叔母に賴んだ。停車場からは、やがて薦包の荷物が五つも六つも屆いて、狹い六疊の間は殆どそれで一杯になつな。子供は喧嘩をしたり泣いたり喚いたりした。

おかねはお勝の幼なかつた頃のことなどを考へた。石川に來てゐた時分には氣の勝つたしつかりした好い娘だつたがなあと思つた。またしてもお初のことが思ひ出されて來た。子供を大勢持つてゐながら、さびしく暮してゐるお幾と、子供を皆な亡くして、かうして暮してゐる自分とが引くらべて考へられた。

お勝は母親の話や、お初の話や、外國へ行つた詮造の話などをした。お勝は生活の荒波にやつれた姿で、乳香兒に乳を飲ませながら、『石川の姉さんが生きてゐるとよかつたんですがね、』などと言つた。

亭主は朝早くから出て行つて、いつも夕方に歸つて來たが、四日目に漸く家が見附かつて、借りる約束をしたと言つて、その間取りや位置やをお勝に話した。その時分には、義理や人情で仕方がないとは言ひながら、子供の喧しいのと、家の狹いのと、朝晩の食物ごしらへの忙しいのとにおかねはほと〳〵困り拔いてゐた。

しかし五日目には、荷車が來て、荷物を載せて、亭主がそれについて行つた。お勝達もやがて暇をつ

『東京でも、矢張機をやるのかえ？』

『え、山谷あたりでやらうと思つてゐるんですがね。東京の方は、桐生、足利あたりよりか餘程景氣が好う御座んすからね。馴れた道ですから、矢張、小體に、機をやつて、問屋に持つて行けば却つて市に出すより得ですから。』

『それも好いねえ。』

『足利はもうすつかり駄目です。大きな問屋がドシ〳〵つぶれる位ですから……我々にはとても駄目です。一反機をこしらへれば一反いくらつていふ損なんですから、やりきれません。』かう傍から亭主は言つた。

『それで、山谷の方は、家でも借りてあるのかえ？』

『これからさがすんですけどもね。知つてゐる人があるし、いくらも、あつちには、家はあるつて言ひますから……餘り、急で、をばさんびつくりしたでせう。でもね、ぐづ〳〵してゐると、田舍は面倒だから、思ひ切つて出て來ちやつたんですよ。』

かうお勝は話した。お勝は自家で織つた結城木綿を二反、『ほんのお土產の印です、』と言つて其處に出した。

話の樣子では、家屋も抵當に取られて、夜逃げのやうにして田舍を出て來たらしかつた。東京で仕事

『國、おじぎをしないかえ？　行儀がわるいねえ、皆な……。皆な、田舍つ子なもんだから、世話ばかり燒けて仕方がないいんですよ。』

『かう大勢ぢや、本當に大變だ。』

おかねは菓子を子供達にやつたり、取散へず茶を勸めたりした。

お勝とこの亭主との間には、何遍となく離緣話が持上つた。實の家で上京したその翌年からその話が始まつて、ある時には、お勝が總領の女の兒をつれて、一月近くも實の家に歸つてゐたこともあつた。お初のまだ生きてゐる中にもさういふことが一度あつた。最近では、もう何うしても見込がないと言ふので、生れたばかりの子を伴れて、半年以上も牛込の家に來てゐたが、最後に、亭主が上京して來て、愛情やら未練やらに引かされて、お勝は母親にも兄にも默つて、ある夜、裏の勝手口からこつそり逃げて行つた。母親はその時非常に腹を立てゝ、『もう、二度と、お勝は家によせつけるな、』と言つた。で、お勝は上京しても牛込の兄の家には行くことが出來なくなつてゐた。

『急に、思ひ立つて來たもんですから。』

『ぢや、これから、すつかり東京かえ？　もう田舍を疊んで來たのかえ？』

『田舍にゐたつて、機の方は不景氣で、何うにも斯うにもならないいんですもの。それよりか、まだ何うにか出來る中に、東京に出て來て、一はたらきしようと思つて、それで、まァ、出て來たんですがね。』

三十五

ある日の夕方に、田舍の商人風の男と、三十二三の上さんと、十一二の女の兒と、五つ位の男の兒とがごた〳〵した良太の狹い家に入つて來た。上さんの脊には昨年生れた女の兒が負はれてあつた。

『何だえ、お勝かえ？』

入つて來た上さんと顏を合はせたおかねは、驚いたやうに言つた。

お勝は、挨拶も、そこ〳〵に、『をばさん、急に田舍を引上げて、東京に出るやうになつ』もんだから。……今、新宿に着いたばかりなんですよ。』

『さうかえ、まア。』

かうおかねは言つたが、『兼さんも一緒なんだらう？　何には兎もあれ、まア、お上んなさいな。』立つて行つて、入口の格子の處でまご〳〵してゐる商人風の男をおかねは此方に誘ひ上げた。兼といふお勝の亭主は、勸められて上るには上つたが、きまりがわるさうに頭をかき〳〵其處に坐つた。おかねとその亭主とは、初めて會つたのであつた。

『この大きいのは、お艶ちやんかえ？　大きくなつたね。』

おかねは其處に小さくなつて坐つてゐる總領の女の兒を見て言つた。

ら。』

『いゝえ、それでも、内裏樣は好いですよ。』

『好いつて言つたつて、もうぼろ〳〵だよ。何しろ年數物だからね……。お前白酒でも飮んでお出でな。』

かう言つて、おかねは餅だの豆煎だのを眞弓の前に並べて、白酒を罎から二三杯盃について吳れた。

眞弓の顏はぢき赤くなつた。

『嫂さんが生きてゐると好かつたんだがな。』

かう眞弓が言ふと、おかねはわざとさびしく笑つて見せて、

『だつて、死んだもの、しようがないさ。いつまで思つてゐたつてきりがないよ。』

『それはさうですけども……』

一二年前までは外國の方の消息の有無がきまつて眞弓の方から言ひ出されたのであつたが、此頃では、それを聞くのさへ氣の毒のやうな氣がして眞弓は默つてゐた。薄暗い室の中の雛壇の上には、紅白の梅がくつきりと浮き出すやうに見えてゐた。

夕暮に、良太は仕事から歸つて來て、草鞋をぬいで、手や足を洗つて、佛壇に燈明を上げたり、雛壇の兩側の雪洞に灯を入れたりして、それから、二人さびしく夕飯の膳に向つた。

奥方の里から頂戴したもので、何でも百年以上も經つたものであるといふことであつた。五人囃しは、戰死した兄が始めて東京に出て來た翌年の節句の時に池の端あたりで買つて來て呉れた。三段目にある大原女の人形は、良太が奥の旦那について上方の山陵を調べに行つた時購めて來たもので、手拭をかぶつて妻木を頭の上に載せてゐる形が巧妙に出來てゐた。高砂の爺さん婆さんは、老祖父が田舍からお初が生れた年に祝つてよこした。其他、皿にしても、器具にしても、簞笥にしても、一つとしてその時々の歷史と追憶とを持つてゐないものはなかつた。おかねは一年中貯めて置いた乾飯で、豆煎を拵へて、それをその壇の上に供へた。

お初の死んだ翌年には、思ひ出すから今年は出さない方が好いと言つた。その翌々年には、『いつそ思出すから、賣つて了はうかね。重雄が女の兒なら、あとで讓るつていふこともあるけれど、男だから、こんなもの入りやしない。』かう言つて、おかねは古道具屋に一度出して見せた。しかし娘の形見を賣るとしては、餘りにその價が廉かつた。おかねは再びそれを箱の中に藏つた。

丁度、節句の日に眞弓がやつて來て、

『あ、嫂さんのお雛ですね。』

かう言つて感慨に打たれたやうにして其處に立盡した。

『家ぢや、飾つたつて、見るものもなし、しようがないんだけども……それに、碌なのぢやないんだか

跡に建てられたやうな家で、昔はさぞ立派な庭であつたらうと思はれる池や築山が畑や野山になつてその前に見渡された。良太は初めて訪ねた時、『はゝア、さうだ。上總の大多喜の殿樣の邸址だ。こんなになつて了つたかな。』かう言つて緣側に立つて、昔を忍ぶやうにしては四邊を眴した。

三十四

每年三月の節句には、お初の殘して行つた雛壇が奧の四疊半の薄暗い空氣の中に飾られた。大きな舊式な內裏樣の衣の裾はやつれて、殿樣のかぶつた金鍍の冠りが何うかするとをり〳〵落ちた。五人囃しの笛が取れたり、鼓手の鼓を搗つ手が徒らにあげられてあつたりした。下の段にはお初が持つて遊んだ人形だの、十五六になつてから丹念に自分で縫つて着せた人形の着物だの、小切の入つてゐる文箱だの、きんからかはの箱だのが一面並べて据ゑられた。おかねはそれでも、紅梅の花の枝を折つて來てさしたり、蠑螺を通りで買つて來て上げたり、三色の菱餅を供へたりした。

『誰も見るものもないけどもね。目鼻のあるものを藏ひ切りにして置くとわりいつて言ふから、每年出すけれど……もう古くつて駄目なんだよ。』

こんなことをおかねは實やお幾に言つた。

でも、その雛の中には、遠い昔のことが種々と細かに織り込まれてゐた。內裏樣はお初が生れた時、

りは、何うかして豪くしたい、家名を辱しめないやうにしたいと思つて、何れほどやきもきしたかわかりやしない。それは、おかねさん、本當だよ。田舍にゐた時なんか、自分が食はないでも、子供の爲めにしてやつたもんだ。それが大きくなれば、皆なあの通りなんだから、もう／＼愛想が盡きた。それから思ふと、年寄の方がどれほど世話甲斐があつたかわかりやしない。お祖父さんだつて、難かしい舅だつたけれども、此方に出て來る時分には、もうやさしくなつてね、お幾、お幾つて何でも私に相談して呉れた……』

かう言つて、お幾は昔を思ふやうにして聲を曇らせた。

良太夫婦は、お幾の言ふほど實をわるく思つてゐなかつた。若い身で、兎に角、母親と弟達との世話をして行かなければならない重い責任に同情した。新しく結婚したことに就いても、却つて此方から勸めた位で、決して惡感を持たなかつた。おかねは行く度に、『お雪さん、お雪さん、』と娘のやうにした。お初の着たお召の羽織を、『こんなもの、氣持がわるいかも知れないけれど……。家に置いたつて仕方がないから、ちよい／＼着にでも着て下さい、』と言つて、持つて行つてやつたりした。

實の家では、山の手から四谷に引越したり、新宿裏に引越したり、また再び牛込の奥に移轉して行つたりした。何の家にも、良太夫婦は訪ねて行つた。水道の水の落ちる音の夜もすがら聞えるやうな家、裏に栗の樹の二本も三本もあるやうな家、殊に最後に引越して行つたところは、元大名の下邸のあつた

嫂さん。年の進つたものと話したつて、話がちつとも合ひやしない。』
『それはさうだともね。』
『だから、のんきにして、長生する方が好いよ。私なんかも、もうあきらめた。これからは冥土へ行くまで、人樣のお世話にならないやうに、働いて、死金でも拵へるんだ、それより他にしようがない。』
『でも、此方では、おかねさんも良太さんもしつかりしてゐるから、好いけれど……。家なんか實が愚圖だから仕方がない。三十二三にもなつて、二十五圓の月給取ぢや、女房子だつて滿足に過して行けやしないぢやないか。』
『だつて、嫂さんは、そんな心配をすることはないぢやありませんか。實がいけなけや、眞弓だつて克巳だつてあるぢやないか？』
『眞弓なんかに、何が出來るものかね。蒼い顏をして、女のことばかり考へて、小說なんか書くなんて言つて、毎日一間に引こんで書いてはゐるけれど、まだ、一枚だつて、お錢になつたためしがない。自分一人さへ、行末食へるか何うかと思つて、心配してゐる位なんだもの。』
『そんなことはないよ。』
『もう、子供には愛想が盡きた。此家なんかでは、子供が割合に世話をやかせなかつた方だから好いけれど、私は內で死んでから、子供の爲めには、それは何んなに苦勞したかわかりやしない。子供ばか

は始めてお幾の老後の寂寥といふ心持を理解することが出來た。『嫂さん、しかし、それは無理だよ。若い人達は矢張若い人達にやらせなければいけないよ。それはさびしいさ。長年ひとりで、息子は嫁に取られて了ふやうな氣がするのだから、さびしいのはわかつてゐるけれども、そこが人間の悲しさですよ。年を取つて行くものは、何うしたつて年を取つたやうにしなければならないんだから。若い人達を自分の氣に合ふやうにしようとするのが間違つてゐるんだよ。それよりも嫂さんなんか、散々苦勞をして來たんだから、樂隱居で、坊やでも相手に、のんきに思つて長生する方が得だよ。くよ〳〵思つたつてしようがありやしない。』

『だつて、おかねさん、聞いておくれよ。實は何處まで女に甘いんだかわかりやしない。手前の嬶の言ふことなら、何でも、フン〳〵なんだから、見てゐられないぢやないか。まだ若いからつて、汚れた夜の物を平氣で其處等に散らかして置くぢやないか。何も、私だつて、そんなにやかましく言ひたくないけれど、樂にしてゐたいけれど、それぢや家が治つて行かない。それに、眞弓や克巳なんていふ若いものもゐるんだもの。』

『それがいけないのだよ。段々年を取つて行けば、若い者は若い者のするやうに任して置く方が好いんだよ。見かねた時には、小言を言ふ間に、默つて、坊でも伴れて此方に遊びにお出でなさいよ。段々年を取ると、嫂さんにでも長生してゐて貰はないと、話の相手がなくなつて了ふから……。矢張年だね、

叔母に言つて置くより他仕方がなかつた。

一年二年の間、良太の姿はをり〳〵その麴町の Austria の公使館の邸内に見えた。時には公使が丁度出かける處で、立派な脊の高い外國人が、綺麗な粧ひをして腕に寶玉の輪をはめたその夫人らしい女と箱馬車に同乘して、砂利を蹴立てゝ出て行くところに邂逅したこともあれば、入り口を間違へて、洋館のひろい中をまご〳〵して、小使の男にとがめられたことなどもあつた。後には、其人は、困つて、居留守をつかつた。しかし、それとも知らない良太は、をり〳〵思ひ出したやうに、大きな土產物の折などを抱へて、その石造の門を入つて行つた。

三十三

實は再婚した。矢張、同藩の田舍から伴れて來たやうな人で、年は十九、初婚で、頰の赤い、まだ世間のことを知らない娘々した女であつた。良太夫婦は、心の底に一種のさびしい感じを抱きながら、揃つてその結婚の席に列した。

孫に對する愛を新しい母親に奪はれはしないかといふ懸念は、良太夫婦にもお幾にもあつた。そして其點で、お幾は再び良太夫婦の側に一致した。

お初に對したお幾の態度が、やがて新しい嫁の上に働いて行つてゐるのを良太夫婦は見た。おかね

て來た。

歸つて來て、おかねに、

『まア好かつた。死んだものなら死んだもので、それがわかりさへすれや好い。わからなくつては、死んでもあきらめられないからな。兎に角、公使館で調べて貰へば、外務省などとは違つて、ちよいちよい往復もするのだらうから、長い中には、樣子がわからないつて言ふことはないだらう。杉山さんつて言ふんだが、何でも、あそこでは、好いところをつとめてゐるらしい。すぐ承知して呉れてな、本國ぢやないけれども、知つてゐるものがあるからつて言つて呉れてな。好かつた。好かつた――』

『それは好かつた。』

おかねの顏にも喜色が溢れた。

しかしその喜悅がどれだけ長く保つことが出來たであらうか。一月ほどして、賴まれて樣子を聞きに行つた實は、外務省以上の不確實と絕望とを其處に感じた。眞弓は眞弓で、『だつて Australia の事を聞かうと思ふのに、Austria の公使館に行つたつて、何がわかるもんですか、丸で見當違ひだ。イギリスの公使館なら、まだいくらか知らないといふ限りもないけれど……』などと言つた。しかし實にしても、眞弓にしても、さう言つて了つて、老いた叔父叔母を失望させるに忍びなかつた。それに、公使館の其人も、Ralia の方に知人があつて、此間も一人二人聞いて見たといふ話をした。實は可い加減に、叔父

な五十ばかりの人で、その邸内に小さな家屋を借りて住んでゐたが、行つた時には丁度館の方へ勤めてゐて、此方へお出なさいと言はれて、西洋館の入口の扉から、ツル〳〵辷る廊下を通つて、大きな裸體の額などのかゝつてゐる立派な應接間へと通された。良太は亭主のあとについて、隅の方に小さくなつて椅子に腰をかけた。

訥るやうにして、きれ〴〵に話し出した良太の物語を一つ〳〵點頭いて聞いてゐたその人は、やがて向うからの最後の手紙を良太の手から取つて、中を讀んだり封筒を見たりしてゐたが、『は、ア、これは、Austria と Ralia との違ひだ。Ralia は英領だ。本國なら、いくらも、さがして上げる便利はあるけれど……』かう言つたが、その區別を言つてきかせてもわかりさうにもないのと、それに、かうして息子を案じてわざ〳〵此處まで聞きに來た親心を失望させるのも氣の毒と思つたと見えて、その人は、すぐ言葉をついで『しかし、本國でなくつても、Ralia の方でも知つてゐるものがないでもありませんから、その中、次手があつたら、聞いて上げることにしませう。兎に角、何うしたことですかな。生きてゐるなら、何とか便りがありさうなものですがな。』かう言つて、手紙の封筒にある會社の名や Mr Punch といふ名などを其人は自分の持つてゐた手帳に書きつけた。

この一片の同情が、新しい世の中の事情に暗い良太を、どれほど力づけたか知れなかつた。良太は返すぐ〳〵も一縷の望みを其處にかけて、くどいほど捜索のことを其人に頼んで、そして嬉々として其處を出

かう言つたが、すぐ、『うん、うん、坊は知らない、知らない。』

『本當に言ふんだよ、死んぢやつたかえ？』

かうおかねが訊直すと、

『知らない、知らない。』

かう言つて、重雄は其處から座敷の方へ歩いて行つた。

近所の店屋の懇意な人に、Austria の公使館に勤めてゐるものがあつた。店屋の亭主は良太夫婦の心を氣の毒がつて、『其處へ行つて聞いて見たら、同じ Austria だから、外務省で聞いて貰ふよりも、もつとわかりが早いかも知れません。それに、其處からならば、屹度本國にも度々便りがあるから種々樣子を聞いて貰ふにも便利ですが、なんなら、其處へ行つて御覽になつては如何です？』と深切に言つて呉れた。

ヨオロッパの Austria と南洋の Australia との區別は、さういふ人達にも、良太夫婦にもよくわからなかつた。で、喜んで、實に賴んで行つて貰はうとは思つたが、その事で、餘り度々厄介をかけてゐるので、良太は最初はその亭主に一緒に行つて貰ふことにした。良太は土產の大きな折などを買つた。

Austriaの公使館は、麴町の通りからずつと奥に入つて行つたやうな處にあつた。大きな石造の門、ひろい瀟洒な庭、石だたみのバルコニィ、店屋の亭主の懇意な人は、其處で執事の下廻を働いてゐるやう

『十錢。』
かう易者は項を擧げて言つた。
良太は財布から十錢銀貨を一つ出して、それを卓の上に置いたが、古ぼけた帽子をかぶつて、そのまま塵埃の中を歩き出した。
その話をすると、『あんな易者に見て貰つたつて、何がわかるもんか。暗い、身動きの出來ないところにゐるなんて、緣起でもない。十錢、唯捨てたやうなもんだ。』かうおかねは打棄るやうに言つた。
幼い罪のない子供は、存外種々な本當なことを知つてゐるものだ。子供には慾といふものがないから。こんなことを言つて、お幾とおかねとは、ある日今年四つになるまだ碌に口の廻らない重雄を窓のところに立たせて訊いた。
『いゝかえ？　重雄は好い兒だから、お婆さんの言ふことをよく聞いて、そして返事をするんだよ。好いかえ？……遠くにゐるお前のをぢさんは生きてゐるかえ？　それとも死んでゐるかえ？』
『…………………』
『何うだえ、生きてるかえ？』
『死んぢやつた！』

山の手の賣の家から歸つて來る町の塵埃の立つ中に、一人の老いた易者が、卓の上に、易だの、九星の本だの、人の掌を大きく書いた圖だのを並べて、しほ垂れた色の褪せた袴をつけて、鏡や筮竹をさしつけて、終日長く通行の人々に聲を懸けてゐた。

ある日、其處に一人の半白の中老人が立つて、眼をしよぼ／＼させて、頻りに何か言つてゐるのを人は見た。それは他でもない良太であつた。

易者は物々しく筮竹をひねつて、その中から一本取つたり、二本取つたりして、算木を彼方此方に動かしてゐたが、わざと深く考へるやうな顏をして、『さうですな、兎に角、この人は暗いところに入つてゐるやうな形ですな。イヤ、死んでゐるとは言はれませんが、何しろ、出たくつて出られないやうなところにをりますな。しかし、この卦は一方眞暗で、一方に微かに光りを認めるといふ形ですから、絶望なさるにも當りません。その中、何とか開けて來るに相違ありません。兎に角、貴方には、この人は大切な人なんですから、向うでも決して貴方方を思つてゐないことはありません。まア、もう少しお待ちなさい。今年はわるいが、來年になると、四月か七月かに何とか便りがあります。』

『では、死んだつて言ふのではありませんな。』

『さうです。死んだつて言ふのではありませんが、兎に角、身の行詰りと言つたやうになつてゐます。』

『これは難有う。いかほどさし上げませう。』

二本も三本も書かせられた。中には、會社そのものに宛てたものなども雜つてゐた。『だつてお上の力で調べて、免狀を持つた日本人の行方がわからないつていふことがあるのかねえ。』不斷、物のわかりの早いおかねまでがこんなことを言つた。

月日はその中にも流るゝやうに過ぎ去つてゐた。やがてお初の三周忌も來た。しかし、海外からは、竟に／＼一片の消息すらもやつて來なかつた。奧の旦那は、『何うも困つたもんだな。矢張死んだのかな。さうでなければ、便りをしないつて言ふ筈はないんだから……。さうだらうとも、外國に行つてゐるものも澤山あるんだから、外務省だつて、さう手が廻つて保護するつていふわけにも行かないからな。』かう實に言つたりした。

今はもう死んだものといふことに人々の意見は一致した。大勢日本人のゐるところにゐては、うまいこともないからと言つて、屹度、內地深く入つて行つて、そして土人にでも殺害されたのだらうと誰も彼も想像した。『本當にお氣の毒にも何にも……お初さんが亡くなつて、銀行が潰れて、それさへお氣の毒なのに、又今度、何うしても西洋へ行つた息子さんの行方がわからないとは、何といふことだか。あんな正直な、眞直ぐな靑山さんに、何うして、そんな不仕合せが廻り合せて來るんだらう。』近所の人達は皆なかう言つて深い厚い同情を二人に寄せた。人々は二人の髮の日增に白くなつて行くのを見た。

でも行つて、少し位置でも出來たら出さう〳〵と思つて出さずにゐるんですよ。』かう言つて、氣の毒がつて人々は慰めて呉れるけれども、二人はそれに滿足してゐられなかつた。

良太は仕事の暇を見ては、新井の藥師やら、堀の内のお祖師樣やら、西新井の大師などへと祈願を籠めに行つた。今はもう佛か神の前に手を合はせるより他に仕方がなかつた。

實は外務省の方へも一二度出かけて行つて聞いて見た。しかし、其處では、更に要領を得なかつた。外國に行つた同胞にはさういふことは間々あるので、外國行の免狀を持つてゐるからと言つて、政府では、その人のすべての保護をするといふことは出來なかつた。其處にゐた官吏は忙しさうにして調べて見て、『何うも、はつきりしたことはとてもわからないかも知れないが、兎に角、領事館もあるところだから、その旨は通じて置きませう。……誰か一緒に行つて居たとか、伴れがあるとか言ふと分り易いんだけれど、』と言つて、向うへ行つて了つた。

實は歸つて來て、その話を叔父叔母にしたが、今の役所の役人の應接狀態をすつかり二人に飲み込ませることは困難であつた。外國免狀と外國滯留の日本人との關係などを說明するのにも實は長い時間を費した。それに、實の身にしては、搜索の絕望なことを老いた叔父叔母にあけすけに打明けて了ふのにも忍びなかつた。

良太とおかねとは、次第に深く焦燥を感じて來てゐた。とても無効だと思ふやうな手紙を實はその後

方の方を見た。

當てにしまいと思ひながら當てにしてゐたといふことが、段々深く二人に思ひやられて來た。最後の希望――烟のやうなはかない希望ではあるけれども、兎に角一番底の底に微かに藏つてをり〳〵そつと觸つて見て力强さを感じてゐた希望、その希望さへ滅茶々々になつて了ふことを考へると、良太もおかねもかうしてぢつとしてはゐられないやうな焦燥を感じた。

『それとも、もう、向うに、上さんなり、子供なりが出來て、日本へ歸つて來ることが出來なくなつたもんだから、それで、生じつか、便りなどするでもないと思つてよこさないんではないか。』かうある時、お幾は言つたが、それをおかねと良太とは、何遍となく繰り返して考へた。『だつてそんなわからない譯がないぢやないか。兎に角、生れ故鄕だし、親、親類もあるんだから、生きてゐる間は、片時だつて思ひ出さないといふ譯はない。それが人情だ。女房子があらうが、何があらうが、何も此方から今すぐに歸れつて言つてやつたわけではなし、歸れないわけがあるならそのわけを言つてよこしたつて差支へる筈はない。女房子を持つたために便りが出來ない？　そんなことはない。』かうおかねは良太やお幾や實に言つた。

唯一つ賴みにしてゐた日本人の靑山詮造宛にして出してやつた手紙も、やがて四ヶ月ほど經つて戻つて來た。もう何うすることも出來なくなつた。『なアに、その中に、便りがありますよ。何處か遠い處に

來てゐた。お初を失ひ、金を失つた二人は、今度は最後の息子の行方の不明について心配し始めた。

『でも、をかしいね、手紙をあれつきりよこさないといふのは？』

何か用をしてゐながら、だしぬけに、おかねはこんなことを言つたりした。

最後の手紙、彼方此方に持つて行つて、くしや〱になつてゐる手紙、その手紙以後のBlank page が絕えず二人には心痛の種となつた。考へるのさへ、餘り面白いことではないが、それから詮造は、何處か日本人のゐないやうな內地に深く入つて行つて、そこで外國の人に殺されてでも了ひはしないか。かう思ふと、良太もおかねも黯然とした。曾て聞いたことのある外國に行つて行方不明になつた人達の話などが繰返された。外國では——日本を遠く離れてゐては、何んなことをされても、容易には此方には知れて來なかつた。幸ひ、其處に、日本人でもゐて、その殺されるのを見てゐるか、でなければ自分も一緒に殺されるところであつたのを運好く助かつて來でもしなければ、それを此方まで知らせて吳れる筈はなかつた。良太は每晚續けて、不吉なイヤな夢から覺めた。

おかねはおかねで、『本當に、子供のことで心配する位、馬鹿々々しい腹の立つことはありやしない。散々人に世話を燒かせて置いて、また今になつて、こんな心配をさせる。……あてにするからわりいんだ。ゐないならゐないで投つて置く方が好いんだ。馬鹿らしい。』こんなことを言つたが、それでも、前を郵便脚夫が通つたりすると、もしや內に入つて來やしないか、外國から消息がありやしないかと思つて其

越して呉れと書いてある手紙、その手紙をまた良太や實は引繰り返して見た。Alexie street Merboune, Australia, かういふ地名で、その上につとめてゐる會社の名が書いてあつた。それは矢張造船の工場らしく、封筒には Dock や汽船の繪などが書いてあつた。その手紙は一昨年の一月の十日の日附であつた。

『宛名の人がゐないとなると、其處にはゐないのだ。もう其處につとめてはゐないのだ。しかし、其處から、何處へ行つたもんだか、何處かへ行つたとすれば、何とか手紙をよこしさうなものだが――現に、今までもアウストラリアにゐた時に、手紙をよこしたんだから。』かうおかねと良太とは顏を合せて、

『ことによると、西洋人の名前でやつたから、却つてわからなかつたのぢやないかしら? 日本人の青山詮造であつたら解つたんぢやないかしら?』

『さうかも知れない。しかし、向うから、ちやんと言つて來てあるんだから、そこにゐるなら、其名だつてわからなくつてはならないんですがね。』

『さうさね。』

おかねは深く考へるやうな顏の表情をした。暫くしてから、『でも、念のため、日本人の名で、青山詮造で、もう一度、出して見るかね。』

『それは好う御座んすとも……』

それでその手紙はまた追懸けて出して見たけれど、息子の行方は、一日增に、二人には心配になつて

つて來るかわかりやしないよ。』

『あてになるもんかね。そんなことを當てにすると、とんだ事になる……。まァ、好くなつて歸つて來れば來るで、それは其時と思つてゐるのさ！』

かう投げるやうにおかねは言つた。

しかしおかねも良太も、詮造を當てにしないわけには行かなかつた。捨てた積で、勝手にしたいことをする方が好いと、昔から言つてはゐたが、お初の死別に逢つた時分から、いつか二人は詮造を頼みにしてゐるのに氣が附いた。銀行の方が駄目ときまつた前後には、一層それが必要になつて、あれにでも歸つて來て貰つて、何うにか曲りなりにも生計を立てゝ行くやうにして貰はなければと思つた。

で、二人は海外から來る返事を待つた。一月、二月、もう此方からやつた手紙が着いた時分だ。其處にゐて、親から行つた手紙を讀んだなら、何うしても返事をよこさなければならない。かうおかねも良太も思つてその返事を待ち侘びた。二月三月はまた經つて行つた。しかし返事は竟に〳〵來なかつた。

で、二度目にまた手紙を實に書いて貰つて出したが、その返事の來る時分になつて、それは來ずに、却つて二度目にやつた手紙が附箋を澤山につけて戻つて來た。宛てたところには、さういふものは住んでゐないといふことであつた。

最後に來た手紙　横封の手紙、日本人の姓名を書かずに Mr Punch といふ名で手紙をよこすなら寄

『さう〳〵、ゐたね、お雪とか何とか言つて、私がよく喧嘩したもんだ。犬なんかけしかけてやつたもんだ……あの時分は、死んだ祖父さんもまだ若かつた。お婆さんが目がわるくなつた時分で、よく溫泉になんか面倒を見て伴れて行つてやつたもんだ。』考へて、『本當に、夢見たいだ。……それにしても、長生しなくつちや損だよ、嫂さん。くだらないことをやきもきしないで、精々長生をする方が得だよ。死ぬものが一番損だ。死ぬもの貧乏つて言ふが、本當だよ。』かう言つたおかねは又してもお初のことを思ひ出してゐた。

『それにしても、詮造さんから便のないのが心配だねえ。此方の家でも、詮造さんが早く歸つてあとをついで呉れるやうになると好いのだけども……もう一度、手紙を出して見ては何うだらうね。』

『さうだね、出したのが四月前だから、もう何んとか返事が來るだらうと思つてはゐるんだけれどもね。二月かゝると、手紙は着くさうだから。』

『兎に角、丈夫ではゐるんだらうけれど、離れてゐては、矢張心配だからね。』

『本當だよ。』

『もう、一本、實にかゝせて、出して見る方が好い。』

『さうだね……何うせ役には立たないけれども……』

『でも、詮造さんは、實なんかと違つて、氣が勝つてゐる方だから、今に、どんなに立派になつて歸

重雄はよくお幾になづいてゐるのをおかねは見た。『それでも、この坊主がゐるので、此頃は餘程まぎれて暮してゐますよ。子供つて言ふものは可愛いもんだ。』かうお幾は言つた。お幾の髪にももう白髪が見えて來てゐた。

『嫂さんも、白くなつたね。』

『え、もう、すつかり……』

『お互に年を取つて行くばかりだね。』

『本當だよ。昔のことを考へると、丸で夢のやうだよ。そら、山形にゐる時分、雪が降つて降つて、五尺六尺もつもる中を、おかねさん、お祖父さんの酒を買ひに、跣足で、長町までよく行つたつけが、あゝいふ時分もあつたんだからね。』

『本當だねえ。』

『いくつだつたらう、あの時分。』

『私が十六、嫂さんが嫁に來たばかりだから、まだ十八だつたらう。あの時分は、まだ、殿樣がゐて、刀を差してゐたんだがね。いつ變るともなく世の中が變つて行つて了つたんだね。そして、變つたとも思はないで、かうしてゐるんだね。考へると、不思議には不思議さ。』

『あの時分、長町に評判の娘がゐたつけが、何うしたらうね。』

働いてその日〳〵を暮して行つてゐた。

重雄は此頃はもう餘程大きくなつてゐた。いつまでも里親に預けて置いて、情愛がなくなつてはと言ふので、お幾は引取つてそれを育てることにした。實の後添の話も、それまでに度々出たが、實はつひぞ一度も貰ふといふことを言はなかつた。『でも、お前、母さんに重雄を育てさせて、あとに來た人になじまないやうでも困るから、好いのがあつたら貰つた方が好くはないかえ？』かう度々おかねに勸められても、實は『まア、もう少し、一人でゐる方が却つて氣が樂で好いから、』と言つてゐた。

お幾が重雄を伴れて來て、二晩三晩、良太の家に泊つて行くことなどがあると、重雄は遊び友達のないのに、終には倦きて、廻らぬ舌で『ちんまかへらう。ちんまかへらう？』などと言つた。

『何だえ？　ちんまかへらうとは？　わからないことを言ふね、この兒は？』かうおかねが不思議にして言ふと、『いゝえ、家へもう歸らうと言ふんだよ。口が廻らないんだよ。』

『さうかえ、まア。ちんま、かへらう。なるほど。さう思つてきけば、さうだね。』こんなことを言つておかねは笑つた。

通りに面した窓の竹の格子につかまりながら、通つて行く俥を見ると、『ちんまかへらう、ちんまかへらう！』と重雄は連呼した。『そら、ちんまかへらうが始まつた。』かう言つて、良太もおかねもお幾も笑つた。

後には、滅多にさういふ敗殘者も訪ねて來なくなつた。松江の藩に嫁いた奧方の妹の夫も四五年前に死んで、今は總領の息子の代になつてゐた。

東京の眞中には、市區改正などといふ大規模の工事が始まつて、狹い通りは次第に廣くなり、古風な木橋は新式の鐵橋に架けかへられ、その袂に店を張つてゐた商人は、皆な裏通へと引込ませられて了つた。松江の妹の二番息子は、高等學校の入學試驗に及第すると間もなく、奧の本當の養子になることになつて、やがて此方に引取られて、日曜日には、その學校の制帽制服をつけた姿を邸の中に見せた。若い人達は誰でも皆な英語やドイツ語を習つた。

三十二

Liverpool から二度、それから何處とも所在のわからないやうなところから一度、次に Australia の植民地の或る港から一度、それだけたよりがあつただけで、詮造からの消息はいつかぱつたり絕えて了つた。

しかし良太もおかねも別にそれを氣に懸けてはゐなかつた。忙しいし、それに、筆無性だから手紙を書くのが億劫なのだらう。何か事變があれば、外國行の免狀をも持つて行つたことではあるし、此方の公使館、領事館と云ふものもあるのだから、何とか知らせて來るに相違ない。何ァに、たよりのないのは達者で暮してゐるからだ。……良太もおかねも唯かう思つたばかりで、別に深くも考へずに、せつせと

して、奥方に嫉妬を起させる樣なこととは、すつかり緣を切つて了つた。それでも、奥方は、昔の習慣で、もう五十三四になつてゐるにも拘らず、割合に大きな丸髷を一日おきに結つて、毎日湯に入つて、うつすりとお化粧などをした。「奥さまはいつもお若い。」などとおかねが言ふと、「何うして？　お前、若いどころか、此頃は、何もしないでゐても、かう手が荒れて仕方がないよ。矢張、年の故だよ。お婆さんになつちやもう仕方がない。」こんなことを言ひながらも、何うかすると、派手な長襦袢姿で、風呂場から居間の方へと歩いて行つた。

製茶工場を建てたり、麥酒釀造場を拵へたりしたところも、仕事をしなくなつてから長い間そのまゝにして放つて置いたが、かうして置くのもつまらないと言つて、それを表に持つて行つて長屋にして、あとはもとの畑にした。良太はそこに菜だの、里芋だの、茄子だのをつくつた。

世間にも、維新前後の物語や、その大きな潮流に觸れた士族の零落の話や、裃をつけて兩刀を挾んだ時代の追憶や、さういふものが、段々繰返して語られなくなつて行つてゐるのと同じやうに、矢張、奥の人達の夕飯の後の茶話にも、さういふ話は改めて出なくなつて行つてゐた。世の中は日に／＼新しく變りつゝあつた。一にも西洋、二にも西洋と言つた時代はいつか通過して、保守主義、日本主義などといふ思潮が次第に頭を擡げて來てゐた。奥方のところによく金の無心に來た維新の敗殘者の弟は、三四年前に、足尾の山の中で、のたれ死のやうな悲慘な死に方をしたといふ噂があつたばかりで、それから

つて行つた。眞弓は二十三四で、蒼白い顏をして、痩せて、丈ばかりわるく高くなつて、頻りに歌などを詠んでゐた。克巳はそれに引かへて、軍人になるのだと言つて、ユキの短かい縞の着物を着て、常に活潑らしいことを言つてゐた。氣分ものんきで、體格も丈夫であつた。お初の死について、眞弓が悲しい涙を流して、母親の批評などをするのに引替へて、克巳は世間のことはまだ何も知らないといふ風に、無邪氣なことを言つて遊び歩いた。二人は今だに孟暮におかねから貰ふ金を當てにしてゐた。

奥の生活も此頃では以前とは餘ほど變つて來てゐるのを良太もおかねも見た。女中も一人きり、男衆も無駄だからと言つて、此頃では家賃のことから、稅のことから、長屋の修繕のことまですべて良太にさせることにした。役所向の勤めのなくなつた旦那は、終日書齋に引籠つて、讀み書きばかりに耽つてゐるし、奥方も滅多に芝居になども出かけて行かないし、唯、養女のお光ばかり、綺麗に着飾つて、俥で生花や琴の師匠の許に出かけて行つた。訪ねて來る客などももう滅多になかつた。

それに、一時熱中した事業熱にも、度々の失敗に旦那はもう厭氣がさしたと覺しく、最後まで思ひを殘してゐた麥酒釀造にも此頃では全く手を出さなくなつて了つた。良太やおかねの上に積つた年月は、矢張旦那や奥方の上にも積つて、『何も、そんなに躍起しないでも好い、手を出すから却つて損をするのだ。かうしてぢつとしてゐさへすれば、それで安樂に暮して行かれるのだ。』かう旦那も奥方も思つたらしかつた。旦那は前の妾と別れてから、又一人ある女をある處に圍つて置いたが、それも此頃はやめに

初のわる口らしいことを言はなかつた。實は矢張奥の旦那の世話で、舊藩侯の家の歴史の方の仕事をするやうになつたが、此頃では、何うかすると、一晩、二晩家を明けるやうなこともあるなどとお幾は話した。お幾達が東京に出て來た當座、實がなぐさみに月琴を習ひに行つた家が、此頃非常に困つて、その娘と母親とが、ちよい〳〵實の許に訪ねて來る話などもした。その娘は自活の道を講ずるため、小學校の女教師にならうとして、漢文を一日おき位に實の許に教はりに來てゐた。『本當に、あんなものに家に入り込まれては、それこそ大變だから、喧しく言ふんだけれど、實がお人好しでね。女に甘く出來てゐるからしやうがないんだよ。それァ、貧乏してゐるんだからね。娘でも何でも、すつぺッた下駄を穿いてやつて來るんだが、よくあんな風をして來られると思ふ位だよ、おかねさん。……器量はちよつとした娘だけどもね……えゝ、もう亭主を持つたことがあるんですとも、亭主どころか、月琴なんか教へた家だから、他に男だつてあるか何だかわかりやしないんだよ。』などとお幾は言つた。實は別に母親のことをとやかう言はなかつたけれど、お幾は實の意氣地のないことを來てはよくおかねに滴した。

里親が重雄に乳をふくませてゐるさまを見ると、容色といひ、様子といひ、年といひ、お初には似てもつかないほど違つてゐるけれども、それでもおかねは死んだ娘を思ひ出した。そしてお初の不斷着てゐた銘仙の着物をその里親にやつたりした。

眞弓や克巳もよくやつて來た。銀世界に梅見に來たとか、十二社へ遊びに來たとか言つては、よく寄

三十一

お幾はそれでもをり〳〵良太の家を訪ねて來た。何うやら斯うやら命を取留めた男の兒は名を重雄とつけられて、二月ほどしてから、近所の貧しい家に里子に出したが、此頃では大きくなつて齒が生え、父母の顏がわかり、えん〳〵と跳り上つたり、見てゐない間に三四尺も前にゐざり這ひをしたりした。『生きなくつて好いものが生きて、生きて貰はなければならないものが死んだ、』などと其時は言つたが、かうなつて見ると、娘の形見といふ氣がして、段々深い愛情が良太にもおかねにも出て來た。山の手の實の家に行く度に、二人はその里親を訪ねて、菓子だのでん〳〵太鼓だの犬張子だのを置いて來た。

お幾が里親と一緒に、その兒を連れて良太の家に來た時には、おかねはそれを抱いて、奥に見せに行つたりした。『まァ、早いもんだね。こんなに大きくなつたかえ。まァ、人見知もしないでよく笑ふね。その笑顏はお初にそつくりだよ。』かう言つて、奥方も姉刀自も代り〴〵に抱いた。養女のお光は、『まァ、重雄さんつて言ふの、可愛いのね、よく笑ふのね、』などと言つて、其處にあつた菓子を持たせた。穀屋に伴れて行くと、上さんは、手を離さずに、抱いたり頰摺りをしたりして、終には、『お初さんさへ生きてゐればねえ、をばさん、申分がないのにね。本當に、悲しい形見ですね、』と言つて泣いた。お幾も今になつては、お初が生きてゐて吳れゝばといふやうな語氣を洩らした。もう以前のやうに、お

かう言つて、古着屋の男は、好いのとわるいのとの二通りにわけた。

『さうですかねえ、餘りお廉いやうですね。……それぢや、また、もう少し考へて見るとしますかな。』

『でも、これでも、手前の方では、十分勉强して申上げたつもりで御座いますが――』

『まア、もう少し考へて見ることにしませう。それに、宅にも一度は、相談して見なければやならないから。』

おかねはかう言つて、比較的惜しくない着物を二三枚賣つたけれど、あとは何うしても賣ると言はなかつた。おかねは茶を汲んで來て勸めたりした。『折角、かうしてあつても、着手がゐなくつちや仕方がないもんですね。』こんなことを言つて、其處に展げて見せた着物を一枚々々丁寧に疊んでは、それを簞笥の抽斗に入れた。

『では、折角拜見させて戴いたんですから、もう少し奮發することに致しますが――』後には古着屋はこんなことを言ひ出した。しかし、おかねには、もう賣る氣はなくなつてゐた。『え、またその中、考へて置きますから、』と言つて、おかねは片端から着物を元のやうに簞笥の抽斗の中に入れて、ピンと錠を下して了つた。午後の日影が一しきり明るく窓の障子に差して、通りを荷車や荷馬車がガダ〳〵と通つて行つた。

て、他に呉れてやるものもない。いつそ賣つて金にして置く方が思ひ出す種がなくつて好いだらうと、良太も言ふので、それでおかねも其氣になつたが、さて賣るとなると娘の着物にさへ別れなければならないかといふ悲哀が堪へ難く胸を壓した。

　そこに展げられた着物――それには皆一つ〳〵深い思出が籠められてあつた。十七の時御奉公に上るからと言つて拵へてやつた瀧縞のお召の羽織、其時分はやつた金絲織の帶、それを着て、髪を文金に結つて嬉しさうにして鏡臺の前に立つた姿は、今でも其處にゐるやうに歷々と見える。裾模様の波に落花、それが其時氣になつたが、それが不幸の暗示でもあつたやうに、今かうして其處に展げられてあるのも悲しかつた。鹿の子絞りの帶揚、鬱金の扱帶、一枚でも着物が多い方が好いからとて、自分の袷を縫ひかへてやつたが、おとなしい、やさしい氣分のお初は、別に、『こんな古い着物着られやしない、』とも言はずに、素直に簞笥の中に入れて行つた。多い着物の中には、實が此處に寄寓してゐる時分、何かの次手に大丸で買つて來たと言つて、お初に呉れた派手な草花の模様の襟のついてゐる着物などもあつた。つぎはぎして自分が丹精して拵へてやつた長胴着なども出て來た。

『へえ、そんなもんですかね。』

『此方は、此れでも、まだ値が御座いますけれども、此方の方は、から、もう、致し方が御座いません。』

『何うせ、もう、着手がゐないんだから。かうしてねかして置いたつて仕方がないんだから、値をよく買つて呉れゝば、拂つて上げても好いんだけど。』

こんなことをおかねは言つて、猶ほ別な抽斗から不斷着の女物などを出した。

『へえ、さやうですか。二十三で、それはまァお氣の毒なことで……へえ、前の日まで働いていらしつたのが、一夜で、お亡くなりになつたので御座いますか。お產といふものは恐ろしいもので御座りまするな。』

かう言ひながら、古着屋の男は、其處に展げられた女物を彼方此方とひつくりかへして見て、『さやうで御座いますとも……殘して置かれても、却つて種々思ひ出す樣になるもんで御座いまして……左樣で御座いますとも……本當に、その時は、さぞ御愁傷で御座いましたことで。』揉手をしながら、『何うも、かういふものは、當今では、すこしすたり氣味で御座いまして。……それはもう、お揃へになる頃には、お寶も十分にお出しになつたので御座いませうけれど……矢張、はやりすたりといふことが御座いまして。』

『それは、さうだらうともね。』

おかねはその前にも、かうして持つて來て、手も觸れずに放つて置いても仕方がないからと思つて、簞笥の抽斗を何遍となく明けては見たけれど、すぐお初のことが簇々と思ひ出されて來て、終にはいつも獨りで泣かされて了ふのが例であつた。しかし、かうして放つて置いたつて仕方がない。さうかと言つ

はず、四邊が開けて、午前の日影が明るくそこにさし入つてゐた。良太は先づ舅姑の墓に、次に娘の墓に買つて來た樒を供へて、線香を上げて、水をかけて、久しく合掌しながら、位置を定めて、荷車の上にかけた細引を解いて、樹を下に下ろした。

お初の取つて來た楓は、もうかれこれ良太の脊位に大きくなつて、枝が四方にはびこつて出てゐた。良太はそれをお初の墓の後のところに植ゑた。

椿の木は舅姑の墓の傍に、さつきは入り口の右の方へ植ゑた。

それがすむと、良太は改めて二つの墓の前に更に手を合せた。

殘つた手桶の水と、樒と、線香と、それを良太はおてつの墓に手向けようと思つた。何年にもお參りしたことがないので、初めはちよつとわからなかつたが、彼方此方と搜して、良太は漸く松の茂つた向うにおてつの墓のあるのを見つけた。

三十

ある日、おかねは此頃から御不用の品はないかと言つてやつて來る古着屋の男と相對して坐つて居た。その前には、縮緬の裾模様だの、帶だの、お召の羽織だの、昔自分に着た古い八端の着物だのが展げられてあつた。おかねは立つて簞笥の抽斗を明けて、長襦袢だの長胴着などを出して見せた。

で、掘り上げて、裏の小屋から、筵を二三枚持つて來て、それで根を包んで、ざつと繩をかけて、さて近所の穀屋へ行つて、荷車を一臺借りて來て、それに掘つた樹木を載せた。
『源さんに頼んで、定公にでもやつて貰へば好いのに。』
『なァに、次手だ。わけはない、俺が持つて行つて栽ゑて來る方が、佛の供養になる。』
こんなことを言つて、支度をして、良太は自分で荷車を曳いて出かけた。良太は到るところで知人に逢つて、車を留めては、墓に樹を植ゑに行く話を話さなければならなかつた。行きちがつた植木屋の親方は、
『青山さん、自分で持つて行くのは大變だ。今、定にやらせるから、さうして置きなさいよ。』などと言つて呉れた。
で、荷車を曳いた良太の姿は、暫しの間、橋の畔や、田圃に添つた道や、楢の穉樹の林や、さびしい場末町や、大きな邸の門や、さういふ處を通つて、段々青山の墓地の方へと近づいて行つた。
青山の茶屋の前では、車を下して、樒と線香とを買つて、手桶を一つ借りて、水を汲んで、そして、それを車に載せた。茶屋の上さんは覺えてゐて、『佛の御供養に、それはまァ結構で御座います、』などと挨拶した。
墓地は大通りから右に入つて、それから又右に細く曲つて入つて行つたやうな處にあつた。墓にも似合

二十九

ある霜の白い寒い朝、良太は裏庭に行つて、頻りに其處にある木の根を掘りかへしてゐた。

『何をするんだね？』

『うむ――』

良太ははつきりした返事をしなかつた。

『何をするのさ？』

『昨夕お初の夢を見たから、今日は一日休んで、青山へ行つて來ようと思つて？　それには、丁度、今、時節が好いから、この楓と椿とさつきを持つて行つて栽ゑて來ようと思つてな……これは、お初が裏の山から芽生を取つて來たんだが、こんなに大きくなつた。人間よりは木の方が壽命が長いな。』

こんなことを言ひながら、良太はせつせと根元を掘つた。植木屋に賴んで持つて行つて栽ゑて貰はうと思つてゐたのだけれど、自分が持つて行く方が佛が喜ぶだらうなどと良太は思つてゐた。それに、青山の墓地には、娘ばかりでなく、自分の世話になつた舅姑の墓もあつた。『春になつて、椿やさつきが咲いたら、お爺さん、お婆さんも喜ぶだらう。』かう掘りながら良太は思つた。自分があれほど止めたのもきかずに、戰爭に行つて戰死した義兄のことなどもかれの胸に往來した。

は望みもかけられないことはなかつた。それが、今となつては、老いて行きつゝある身の上に突然降りかゝつて來た非運に對しては、もう昔のやうに張詰めた心持で押し通して行くことは出來なかつた。良太もおかねも著しく元氣がなくなつた。毎朝、草鞋を穿いて出かけて行く良太の後姿にも何となくさびしさが添つてゐた。おかねの髮にも白髮がチラ〳〵見えた。

夜など二人はぽつねんとして坐つてゐた。ランプがぼんやり點いて、室の隅々には、暗い影が動いた。三四年前に、實が寄寓してゐた頃の明るい賑やかな空氣はあれは何處であつたかと思はれた。良太は寢る前の茶を默つて猫板の上の茶碗に注いだ。

『まだ、起きてるかえ、お前？』

『これから、さゝらを三把位内職するんだよ。内職して、これから、死金でも拵へなければ、誰も世話して呉れるものなんかありやしないよ。それに、奥からだつて、いつ、もうお前達は要らないつて言はれるか知れやしない。人をあてにするのは、何でも駄目だ。何でも自分一人だ。自分のことは自分一人でするより他仕方がないんだ。貴方は實なんかを當てにしてゐるけれど、實だつて、あてになりやしない。他人の家の子だ。』こんなことを言つて、おかねは良太の寢床に入るのも拘はず、勝手の傍の仕事場に下りて行つて、夜更まで、せつせと鉈でさゝらにする竹を割つた。

人は激昂したり絶望したりして下りて來た。『こんな銀行叩き潰せ！』かう怒號するものなどもあつた。その中を一人さびしく默つて、こゞみ加減になつて、眼をしよぼ〳〵させながら、下りて來る一人の半白の老人があつた。それは良太であつた。

『こんな馬鹿なことはありやしない。割戻金つて言つたつて、百圓一株で十圓、一割しかありやしない。お上でついてゐながら、こんな馬鹿な目に逢はせるつていふ法がありやしない。重役が一人二人牢に入つたつて、そんなことは役に立ちやしない。』良太は逢ふ人々にかう言つて愚痴をこぼした。

おかねはおかねで、『かうなつちや、ぐづ〳〵してゐられやしない。まご〳〵すれや口が干上つて了ふ。これから働いて、てんでに自分の身の上の始末をつけなければならない。』かう自棄半分に言つたりしたが、今まで二十餘年も働いて溜めた金は、これから一生かゝつても、もう再び手にすることが出來ないと思ふと、牢に入つてゐる重役の肉を食つても猶足りないやうな憤怒をおかねは感じた。

良太は五十三、おかねは五十一、二十四年前、奥の旦那に賴まれて、國から此方に來た時にはまだ若くつて、元氣が熾んで、何んな艱難をも艱難とは思はないやうなところがあつた。働いて生きて食つて行きさへすれば、他には別に希望はなかつた。それに、時が來れば――運が向いて來れば、思ひもかけない幸運がその前に無限に横はつてゐるやうにも思はれた。生ひ立つて行く子供の上にも、望みと言へ

の中に知れて來た。

町の中でも、その銀行に金を預けて置くものがかなりにあつた。材木屋、穀屋、尼寺、ある大きな百姓、種物屋――それは、良太と同じく、年二期の利子の分配の日には、袴を穿いて、紋附の羽織を着て、日本橋の賑かな通りにある大きな銀行の二階に案內されて、丁寧な社員の待遇を受け、茶菓などを饗されて來た人達であつた。しかし、今になつて、さういふ人達が騷ぎ出してもそれは何の効もなかつた。

『だから、あれほど、私が言つた。郵便局に入れるなり、公債にして置く方が安心だつて、あれほど言つた。本當に、あれが駄目ぢや、木から落ちた猿も同然だ。本當に、困つたことが出來た。』

かうおかねが言つて見たところで、ごまめのはぎしりで、何うすることも出來なかつた。銀行の方でも何うかして、それを彌縫しよう。株主に迷惑をかけないやうにしよう。かう言つて努力もし、心配もしたらしいが、明けた大穴は、つひに塞ぐことが出來ず、その年の秋の末には、株主大會と言ふやうなものがあつて、出來るだけの割戾金をして、責任者を刑事上の罪人にしても仕方がないといふことになつた。

その議決後の株主大會は騷ぎであつた。人々は總立になつて罵つたり喚いたりした。『泥棒』『詐欺』『かたり』などといふ聲は場內に充ちた。さういふ人達の中には、そのために明日から食へなくなるといふやうなものもあれば、先祖代々の家產を滅茶々々にされたといふものもあつた。二階から下まで、人

良太一家に取つては、お初の死は、つゞいて來る災害の最初の暗示のやうなものであつた。良太とおかねとは、間もなく恐ろしい颶風の襲つて來るのに逢つた。

それはかれ等が尠なからぬ金を貯へてゐた銀行の破産の風說であつた。

その銀行には、良太は長年貯蓄した大部分の金を預けて置いた。始め千圓、次に五百圓、その額はかれこれもう二千圓近くに上つてゐた。其他にも、良太は少しは金を持つてゐたけれど、それが萬一のことがあつては、それこそ大變であつた。その風說を良太は初め近所で同じく貯金してゐるものから聞いたが、奥に行つて、それを糺すと、奥でも大分そこの株を持つてゐるので、大恐慌を來してゐることがやがて解つた。

『立派な人達がやつてゐるんだから、そんなことはないと思ふけれど、そんな風說があるんで困つてゐるんだよ。うちなんか、大きいんだから、もしものことがあつちやそれこそ大變だ。しかし、旦那はまださう心配してない。昨夜も、なアになんて言つていらしつたから、噂ほどではないんだと思ふけども。』

かう奥方は良太に話した。

しかし、その風說は日增に大きくなつて行つてゐた。新聞にもその事實が大變長く書かれてあつたなどといふことを良太は聞いた。つかひ込みをして大きな穴をあけた社長、支配人、重役の一部の不都合、それに、ある事業に資本を出して、その方がすつかり回收することが出來なくなつたことなども段々世

『それが、もう、奥さま、死んでゐるんですからね。』
おかねは急に悲しくなつたやうに顔を曇らせた。
Liverpool, England. さういふところは、何處にあるのだか、何ういふ處にあるのだか、それは良太にもおかねにもわからなかつた。で、その次ぎ、實の來るのを待ちかねて、良太は牛込の山の手の家へと出かけた。一日おいて、實はやつて來て、長い間かゝつて、その返事を書いた。
『お初も死んだし、お前も、一刻も早く歸れつて言つてやる方が好いよ。さう書いてやつてお呉れ。』
かうおかねが言ふと、
『でも、折角、當人が勉強して、藝を身につけて歸らうつて言ふんだから、さう言つてやるのもあまり好くない。それよりも、時々便りをよこすやうに書いてやる方が好い。今、歸つて來なくては、困るといふ譯でもないんだから。』
良太はかう打消した。さういふ息子がまだ一人ゐて、さういふ志を抱いて、行きたくても人の滅多に行けない外國に行つてゐるといふことが良太には賴もしかつた。で、お初の死や、此方の消息や、さういふことを長々しく書いた手紙を封じて、それを持つて、實は家に歸つて來た。
英語の出來る眞弓がその封筒の上に住所と宛名とを書いた。

かう言つて、ある日、めづらしく郵便脚夫が橫封の手紙を其處に投り出して行つた。滅多に郵便などの來たことがないので、おかねはすぐそれを奥に持つて行つて見て貰つた。それは海外にある詮造から、久し振りにやつて來たものであつた。

旦那にも奥方にも外國語はわからなかつたが、丁度運好く其處に養子になる高等學校の生徒が來てゐたので、詮造はイギリスのリバプウルといふ港にゐて、この手紙はそこから來たのだといふことが分つた。

『ぢや、もう船に乘つてゐないんでせうか。』

一わたり、手紙を讀んで貰つてからおかねは訊いた。

『この手紙ぢや、もう船には乘つてゐないやうだね。何でも、折角外國に來た甲斐に、其方で、何か土産になるやうな身についたことを覺えて行かうと言ふので、いろ〳〵苦勞した結果、漸く造船學を修業することが出來るやうになつて、今、此の會社に入つた。こゝで、三四年修業して出來上つたら、歸る。それまで、父上も母上も丈夫で暮してゐられるやうに、お初も、もう何處にか嫁に行つたとは思ふが、これも體を大事にして、と書いてあるよ。』

『それぢや、まだ、實の所へ行つた時知らせてやつた手紙も見ないと見えるんですね。』

『さうと見えるね。』

なことになつたんだらう。本當に、お產と言ふものはこはいねえ。』姉刀自はこんなことを言つた。

二七日、三七日、二人はさびしく暮した。いくら待つても、もう再びとはそのやさしい娘の笑顔を二人は見ることが出來なかつた。をり〳〵實がたづねて來ては、更にその涙を新たにした。

實の家からは、やがてお初の嫁く時に持つて行つた簞笥や道具類をすべて一切返してよこした。慣例としては、さういふものは、すべて嫁に行つた先のものになるべきものであるが、『殘して置いて、いろいろなことを思ひ出すのは辛いし、それに、葬式のお世話もかけたし、墓石も其方で思ふやうに立てると言ふしするから。』かう言つて、お幾は皆な一つ殘らず送り届けて寄越した。

で、その簞笥や道具類はすべて入口の六疊の處に並べて置かれた。おかねは一度それを調べて見ようと思はないではなかつたけれど、いつもやりかけては、すぐやめて了つた。簞笥の抽斗を一つ明けただけでも、娘の面影は漲るやうに母親の胸を壓した。

縮緬の裾模樣の襲ね、羽二重の羽織の裏地、繻珍の帶、それには、皆なつかしい娘の移香がまだ鮮かに殘つて嗅がれた。三味線の糸を入れた小箱、袱紗、香合、手帳、其處からは、さういふものが一つ一つ出て來た。おかねは堪らなくなつたやうに、急いで簞笥の抽斗を閉めて了つた。

『郵便――』

頭部に殘つて、それが化膿したので、これとても長くは生きてゐまいといふ醫師の診斷であつた。ある時は、もしものことがあつて、また此方の無念だと言はれてはならないと言つて、眞弓が飛んで知らせに行くと、おかねは、『子供なんか、死んだつて、わざ〳〵知らせて呉れないでも好い。』といふやうなことを言つた。

それにも拘らず、その生兒は、お初の初七日頃から、段々元氣が出て來て、後には、醫師は、『これなら大丈夫だ。』などと言つた。『世の中つて言ふものは、何でもあまのじやこに出來てゐるものだ。死んでも好いものは死なないで、生かして置きたいものが死んで行く。』ともすると、かうした愚痴がおかねや良太の口から出た。

おかねと良太とはさびしく暮した。二人に取つては、最愛の一人娘の死は、今までに受けたことのないほどの大打擊であつた。良太は佛壇に燈明をさゝげて、いつも長い間手を合せた。

近所の人達は、それと聞いて、同情して、毎日二人を訪問して來た。お初の仲好しの中年の穀屋の上さんは、自分の姉妹でも失くしたやうにして眼を赤くして泣いた。いくら悔んでも、取りかへしのつかないやうな悲哀が、暗い狹い家の空氣を濕らせた。材木屋、植木屋、土方の親分、芝留の爺、息子の定さん、左官の親分、さういふ人達も、代る〳〵來ては、悔みを述べて行つた。奧では、奧方はそれを聞いた時は二日二夜寢られなかつたなどと話した。『利口な素直な子だつたがねえ、何うして、まア、そん

の上であつた。お幾にはこの生計の不如意な時に際して、また、かういふ災害に遭ふといふことが辛かつた。東京へ出て、息子と暮すやうになつたら……と思つて、そこを萬花亂れ開く理想境のやうに想像して、幾多の幸福を期待してゐたのに、……田舍での長い辛勞は少しも報いられずに、却つて更に悲しい辛い艱難と災害とがやつて來た。お幾は默つて、堪へ難い悲哀をぢつとこらへて、良太やおかねの悲哀に對した。

自分が唯一の希望をかけた實が、良太やおかねや、乃至は死んだお初のものに全くなつて了つてゐるやうに、男の立場を忘れて、唯一圖に、妻の死を慟哭してゐる形もお幾には賴りなく腑甲斐ないやうに思はれた。

二十八

お初の葬式は、さびしい屋敷町の裏のやうな處を通つたり、賑かな通りを此方から向うにつき切つたりするやうにして、青山の墓地へと向つた。俥にも乘らず、さびしさうにして、良太はぼつ〳〵とあとから歩いてついて行つたが、この一打撃のために俄かに十年も年を取つたやうに見えた。

葬式の費用なども、實は良太から借りなければならないやうな位置に身を置いてゐた實は、叔父叔母の家に行つては、よくお初を思つて慟哭した。生れた兒が弱くつて、殊に出す時の機械の觸れた跡が後

なつたか。』

良太は暫し其處から離れようとはしなかつた。

『さういつまで悔んでゐたつて仕方がないよ。壽命なんだから、死ぬのは仕方がない。死口に逢はなかつたのは殘念だけども、これも此方の無念なんだから仕方がないぢやないか。』かうおかねは力強く言つて、辛うじて良太をそこから引き離した。

種々な人達が種々なことを言つて慰めたりなだめたりするのを、良太は默つて坐つて、眼から涙をほろ〳〵と流した。

『男の兒だつて、何だつて、親を殺しちや仕方がありやしない。子を殺して、親を扶けるのが本當だ。』

おかねはこんなことを言つて、その生れた兒を見ようともしなかつた。おかねの胸には、お幾の仕打やら平生やらが堪らない憤怒を催させた。

『實、泣いてばかりゐたつて仕方がない。死んだものを何うしようもないぢやないか。』かう強く言つて、娘の死屍の前に逆屛風を立て廻させたり燈明を上げさせたり花を供へさせたりした。お幾は唯小さくなつてゐた。

お幾の眼にも涙は見えた。しかしお幾の悲哀は嫁を亡つた悲哀と云ふよりも、世路の艱難といふことに對する悲哀であつた。實は十日ほど前に、役所の大淘汰に罷められて、今月は他に職もないやうな身

醫師も歸る。產婆もちよつとと言つて歸る。まア好いと思つていくらか安心して、實が醫師に行つてゐる間に、不意に變が來た――。さういふ話をお幾や眞弓がくり返しまき返しするのをも、おかねは聞かうともしないやうに見えた。おかねは唯續けさまに烟草を吸つた。

暫くして、俥がまた家の前で止つた。それは良太であつた。

かれはあたふたとして入つて來たが、障子を明けて、茶の間に入りかけて、其處に、長火鉢のところにおかねの坐つてゐるのを見て、何か言はうとした……と、急に、

『お初は死んだとさ。』

かうおかねが言つた。

『え……』

『私も、死目に逢はれなかつた。』

『やれ、やれ、それは――』

かう言つて、良太はべたりと其處に坐つて了つた。

良太がお初の死屍の前に行つたのは、それから暫く經つてからであつた。おかねよりも却つて良太の方が絕望したさまは、歷々とその態度に見えた。死屍の顏を蔽つた布を取つた時には『やれ、やれ、南無阿彌陀佛。』かう口の中で唱名したが、大きな涙は、皺の多い兩頰を傳つて流れた。『やれ、やれ、かう

た！』と言つて慟哭した。

二三十分ほど、おかねはぢつとして其處に坐つてゐたが、其儘すうつと立つて、其處に寢かしてある生兒――機械で辛うじて出した生兒を見ようともせずに、其儘、茶の間の長火鉢の前に來て坐つて、帶の間から烟草入を出した。

『すんだことは仕方がない。いくら嘆いたつて、死んだものは仕方がない。』丁度其處に顏を出したお幾に向つて言ふともなく、獨語ともなくかう言つて、『昨夜早く知らして呉れれば好かつたんだ。死ぬものは、まア、仕方がない。壽命だから仕方がないけれど、何故、早く知らして呉れなかつたんだらう。』かう言つたが、『これもどうも仕方がない。此方の無念なんだから。』

烟草を一服トンとはたいた。

昨夜から催して來た狀態、急に呼びにやつた產婆、もう生れさうなものだと思ひつゝ何遍となく竈を焚き附けてはやめた話、難かしい產だといふことがわかつて、夜中に醫師を迎へに行く。その醫師がまた寢てゐて容易に起きて呉れない。漸く曉方近く來て診察したが、子癇と言つて、非常に激しい難產。それでもまだ經驗がないからお腹の子さへ生れゝばと思つて、成るたけ叔母さん達に心配をかけないですめばすませたい。しかし、夜が明けたら、一刻も早く知らせにやらう。かう思つてゐる中に、機械で何うやら斯うやら醫師がお腹の子を出した。それ泣聲が聞えた。それ男の兒だ。かう思つて、ほつとして、

それと聞いて、奥から飛び出して來た實は、溢れ落ちる涙を押へる暇もなく、泣聲を出して、

『をばさん、間に合はなかつた。お初は死んぢやつた！』

『え、死んだ？』

おかねは地の底深く自分の身の沈んで行くやうなのを感じた。おかねはワク／＼した。涙も出なかつた。

『をばさん、死んぢやつた！ こんなに早く死ぬんなら、醫師になど行かなければ好かつた。醫師に容子をきゝに行つてる間に、をばさん、お初は死んぢやつた！』泣きながらから實は言つて、『その位なら醫師になんか行かないで、傍にゐてやれば好かつた。』また聲を立てゝ泣いた。

おかねは急いで奥の一間へと入つて行つた。母親には娘はさう早く死んだとは何うしても思はれなかつた。しかしおかねの眼には、脱脂綿や、繃帶や、藥罎や、種々なものゝごた／＼と散らばつてる向うに、髪を亂したまゝに、向うむきになつて、死屍になつてゐる娘の姿が見えた。

づか／＼と近寄つて、顔を被つてある布をおかねは取つて見た。

昨夜からの長い苦痛と絶叫との面影を顔に表はしてお初は死んでゐた。

おかねは、其處に坐つたきり、身動きもしなかつた。唯ブル／＼と身を戰はしてゐるのが眞司や克巳に見えるばかりで、泣きもしなかつた。其處に實は寄つて行つて、『をばさん、到頭お初を殺しちやつ

で、おかねは頭の上の手拭を外して、茶畑の中から出て行つたが、其處にゐる車夫と一言二言話すと、すぐ引返して『お初の產が重いさうですから、』とかう皆なに言つて、今度は宅に歸る前に、良太のゐる處を彼方此方とさがした。良太は其時植木屋を相手に壞れた垣に横竹を入れてゐた。

『ぢや、俺もすぐ後から行くから。』かう言つた良太の顏にも一種不安な暗示と戰慄とが歷々と見えた。

おかねは取るものも取敢へず、髮を梳く間もない樣にして、急いで其處に待つてゐる迎への俥に乘つた。

『昨日の夕方から始まつたのですが、何うも重くつて、醫師が來て、機械でお腹の子を出すつて言つてゐましたが、私の來る時には、まだお生れになつたやうな樣子は御座いません。』かういふ車夫の言葉が蓋をするやうに胸一杯に塞がつた。おかねは俥の上でワク〳〵して絕えず身を震はした。

『昨夜、始まつたんなら、すぐ知らせて呉れゝば好いのに……』かう思ふ一方に、『旨く生れてゐて呉れゝば好いが――なァに、案じたほどのことはないだらう。もう生れたらう。』かう思つて心を靜めようとしたが、しかし胸騷ぎがして何うしてもそれを押へることが出來なかつた。一生懸命に走つて行つてゐる車夫の脚もまどろこしく思はれた。

俥を下りるより早く、轉げるやうにして入つて行つたおかねの眼には、ごた〴〵と綿やら着物やらの散らばつてゐる向うに、後向きになつてゐるお幾の半白の髮と、髮の毛のボサ〳〵した眞弓の泣きはらしたやうな赤い眼とが映つた。克巳は柱のところに立つてまご〳〵してゐた。

達も、皆な揃つて茶を摘みに出かけて來た。
お初の臨月の近いのを氣にしながら、おかねも良太も忙しいのに趁はれて、さう度々は行けなかつた。最後におかねが行つたときには、家庭は依然として元のまゝで、大きい眼に立つ腹を抱へて、お初は髮も梳かさずに働いてゐたが――初產だから家で生ませたいと言つて、餘程つれて來ようかとも思つたけれども、長い間を俥に乘せて來ては、却つて體に毒だと思つて、そのまゝにして來た。『何うしたらう。もう產れる時分だが。』おかねと良太とは、一日の用事を濟して歸つて來ると、いつもかう言つてその噂をした。
『明日こそ行つて見よう。』
かう思つてゐると、生憎、急な用事が奥であつたり、仕事が忙しかつたりして、一日は一日と延びた。と、ある日のことであつた。それは丁度雨あがりのくつきりと晴れた日で、今日摘まなければ芽が延びすぎるといふので、おかねは、朝飯をすますと、裏の雨戶の錠を下して、籠を抱へて、髮を手拭で蔽つてそして梅の林の下にある茶畑へと行つた。茶の葉はまだ雨のしめりを持つて、心持よく綠に延びてゐた。朝日は綠葉を漉してさやかにあたりに照つた。
奥の玄關へ行く路から、三桁ばかり先の茶畑で、おかねはせつせと茶を摘んでゐたが、ふと其處等を行つたり來たりしてゐる法被を着た車夫らしい男が眼に入つたので、其方を向くと、『靑山さんはゐませうか。』

ていふ騷なんだから。』

『困つたもんだね。……でも、子供がもう大勢あるんだらう？』

『三人！　今度四人目でせう。』

『困つたもんだね。何處にも、そんなことばかりあつて。――』

おかねは笑ひながら云つた。

お初はそれからまだ十日ほど里で寢たり起きたりしてゐたが、大分體が好くなつたし、お幾も早く歸して貰ひたいと言ふので、花の散る時分に、土産物などを持つて、山の手の家へと歸つて行つた。

二十七

茶の頃は良太もおかねも忙しく暮した。算盤が取れないので、製茶工場の方はとうにやめたが、それでも茶の芽を買ひに來るものは今だに多かつた。七萬坪からある廣い地面、その三つ一は、良太の長年の骨折で、立派な茶畑になつて、その緣の間には赤い襷や髮を包んだ白い手拭などが到る處に隱見した。茶摘唄なども彼方此方にきこえた。

一番目、二番目の芽を摘む頃には、をり〳〵雨が降つて來たりした。眞竹の藪に出た筍の大きくなつて路傍に出てゐるのなどを、茶摘女は折つて籠に入れて歸つて行つたりした。近所の町家の上さんや娘

本さんに置いていらしつた男の兒がそんなに大きくなりますかね。もう二十五ですつて？　さうですかね。早いもんですね。本當に月日は流るゝやうに經つて行つて了ひますね。お姉さまはおいくつだらう。さう〳〵、私と三つ位上でしたかね。』

『私と一つ下ですから、丁度、その位におなんなさるでせう。』

『それと言ふのも、旦那樣がしつかりしていらつしやるからですね。奧なんか、本當に心配がない。あれで、今のお孃さんに、しつかりした養子でも出來れば――』

『あのお孃さんは、養子を取るよりも、何處かへお出しになる積りでせう。何うも、奧さまと性が合ひませんから。』

『さうですかね。』

こんな話が長く續いた。そして日暮れ頃に、車に乘せられてお幾は自分の宅の方へと歸つて行つた。歸つたあとで、おかねは言つた。『ちつともむづかしい母さんぢやないと思ふがね。』

『あれで、家では、また違ふんですよ。矢張、母さんも淋しいんでせう。一人でゐると、何となく氣がむしやくしやして來るんでせう。それに、田舍の方のことなども心配になるんでせう。』

『お勝のことかえ？』

『此間は、何うやら斯うやら元に戻つたやうな話だつたけれど、矢張、何ぞと言ふと、出る、戻るつ

初は裏から梅の枝を折つて來て、それを花瓶に生けた。と、眞弓は、『これは嫂さん生けたの？　旨いんだな。家ぢやちつとも生けたことなんかないぢやないか、』などと言つた。克巳の來た時には、おかねはお汁粉などを拵へて御馳走した。

お初が此方に來てる間に、お幾も二度ほど見舞物などを持つて訪ねて來た。平生それほど嫁に辛いとは良太にもおかねにも何うしても思はれないほどやさしい物の解つた口の利き方をした。

『どうも、皆な實にまかせて置くと好いんだけども……、何うも、一軒暮しを立てゝ行くと、さうも行かないもんでね。』

後に來た時には、丁度戌の日で、ちやんと紅白の腹帯を揃へて持つて來た。嫁の口に合ふやうな見舞の物などをも持つて來た。他人が見ては、この姑とこの嫁との間に、さうした艱難と辛苦とが横つてるとは何うしても思はれなかつた。

其日は心ばかりの祝だと言つて、おかねは肴を取つたり吸物を拵へたり小豆飯を炊いたりした。お幾は上機嫌で、盃を手にしながら、早く歸つて來た良太と、遠い昔の話などをした。世間の變轉の早いといふことなども話した。『でも、奥なんか、旦那樣がお役をお止めになつて、ぢつとして遊んでゐられる身分だから。』

姉刀自の噂をしては、『本當に、お姉さまなんか好い御身分ですね。へえ、さうですかね。もうあの杉

『本當に、大事にしなくてはいけないよ。もう動くかえ？』
『まだですよ。四月ですもの。』
『でも變だらう。』
『氣分がわるいのが一番困りますよ。途中で、變な匂ひをかいで、すぐ嘔きたくなるやうなことがあるんですもの。』
『心臓の方は何うだえ。』
『矢張、呼吸ぎれがしますけれどもね。もう大變好いんです。』
お初が見せた乳は、もう大きくなつて、周圍は黒くなつてゐた。『男の兒でも生れゝば母さんだつて、もう、そんなに難かしくは言はないだらうから。』かう言ふ考へがお初にも實にもおかねにもあつた。
『まア、大事にしなければいけない。それに餘り長く此方にばかり來てると、あとが猶わるいから、少しよくなつたら、難儀でも、早く歸るやうにして吳れる方が好いね。』
『さうしますわ。』
お初は此方から誠心を盡しさへすれば、何んな難かしい姑でも、折れないことはない筈だからと健氣に思ひ返した。お初は時にはやがて母親になる身の樂しさなどを床の中で繰返した。
眞弓が見舞に來たり、克巳が表から元氣よく格子を明けて入つて來たりした。氣分の好い時には、お

『えゝ。』

『よく出來たね。』

『さう。』

かう言つて、お初は後の髻と鬢のところを見せて、『今日は髷に結ふのは、イヤだつたんだけどもね。髪結さんが結へ〳〵つて言ふもんだから、結つて見たんですがね。久しく結はないにしては、まアよく出來た。』

『よく似合つてゐる。』

『さうですか。』

嬉しさうにお初は笑つた。

實は、『何うだえ？　ちつとは好いかえ。』かう言つて、家の方の話や、役所の話などをした。『母さんだつて、お前に、此方に來てゐられると困つてはゐるんだけどもね。何うも困つたもんだね、』などと言つた。

實は早く歸らうといつも思ひながら、つい別れ難ないやうな氣がして、夜は十時近くまで其處にゐた。

何うかすると、日曜日などには、おかねは用事があつて奥に行つてゐて、お初と實と二人きりで半日を其處に過すことなどもあつた。その時には、二人は結婚しない昔にかへつたやうにして睦しく話した。二人は手を握り合つたり一緒に床の中に入つて寢たりした。

て貰つた髪結さんを呼んで來ては、髪を結はせた。

しかし、お初は滅多に丸髷に結はうとはしなかつた。『輕くつて、これが一番好い。』かう言つてはいつも銀杏返しに結つた。

しかし、髪結に勸められて、丸髷に結つた日の夕方に、實がひよつくりやつて來たのは、お初には嬉しかつた。

實は成たけ度々見舞にやつて來たかつた。けれど本郷から役所が退けてから廻つて來るのでは、電車のない時分には容易ではなかつた。それに、あまり度々やつて來ると、母親がきまつてむづかしいことを言つた。それがお初にもおかねにもよくわかつてゐた。

『よく來られてね。』

『今日は少し早退けにして來た。』

『さう――』

うれしさうにして、お初は夫の顏を見た。つゞいて情人か何かのやうにして夫を待たなければならない自分の身の上をお初は悲しく思つた。鬚の生えた、身裝の整はない、辛苦にやつれた夫の姿にも涙を催させられた。

『今日、結つたの？』

り合つて見返された。心臟もわるいが、懷姙といふことも一方で知れてゐるお初は、切つても切ることの出來ない羈絆といふことを考へた。

折角摘んで來た摘草の籠を裏口のところに置いて、家に上つて、『何だか、寒いから、少し寢ませう、』と言つて、搔卷をかけて身を横にした。

『お前、無理をして、風邪を引いたんぢやないか。』

『大丈夫ですよ。今、そこで、おせんちやんに逢つて、お照さんのことを聞いたもんだから。』

『あの子も可哀相だね。』

『お女郎に賣られて行つたんですつてね。可哀相ね。何處へ行つても好いことはないもんですね。』

『本當だよ。』

『私なんか、まァ好い方かも知れない。』

こんなことを言つて、お初はさびしさうに笑つた。おかねが裏口に捨てゝあつた摘草を拵へて晩の膳にそれを酢味噌にしてつけて出すと『あ、母さん、拵へたの？　これを食べると、何だか昔にかへつたやうな氣がしますね。』お初は嬉しさうになつかしさうにしてそれを食べた。

時には、おかねは、『お前、髮でもお結ひな、さうすると、ちつとは、氣分がよくなるよ。向うの母さんの言草ぢやないけれど、本當にビイドロ娘で、弱くつちや仕方がないよ、』などと言つて、昔よく結つ

『いゝえ、本當ですよ。』

こんなことを言つて、二人は路傍で長く立つて話した。頬かぶりをした百姓がその傍を通つて行つたりした。

『お照さん、何うして？』

『お照さんつて言へば、氣の毒ですよ。あの時分から、家はもう駄目でしたけれども、今では滅茶滅茶になつて、父さんや母さんも、もうあそこにゐないでせう？　お照さんは、何でも吉原とかに賣られて行つたつていふ話だけども……また別な話では、田舍だとも言つてゐましたよ。しかし、お女郎になつたのは本當でせう。』

『さう！　それは可哀相ね。』

お初はお照とは仲が好かつた。よく二人は往つたり來たりした。お初が嫁に行く時には、悲しがつてお照は泣いた。お照はその時分既に身代の傾きつゝあつた材木屋の二番娘で、近所でも容色が好いので評判であつた。

おせんと別れてからも、お初はお照のことを考へながら、家の方へ戻つて來た。艱難な生活、辛勞多い世の中、さういふことが自分の心と體とを透して染々とお初の胸に繰返された。一方に大勢の客を相手に暮してゐる友達の姿が見えると共に、一方には何うにもならない自分等夫婦の辛い生活がそれに混

はこの奥の方にある瀧見茶屋の一人娘で、お初と同じ年、同じ級の友達であつた。
『まア、お初ちやん。』
『まア、おせんさん、何うも似てる、似てるつて思つてゐたんだけども。』
『さう、私はちよつとも知らなかつた。』かう言つて、『摘草？　あゝ大變に取れた。……此頃は此方へ來ていらつしやるんですか。』
『少し加減がわるいものですから。』
『それはいけませんね。何うなすつたんです？』
『少し心臟がわるくつて。』
『一度、ねえ、ゆつくり話したいと思つてゐることがあるんですよ。まア、本當になつかしい。何年振でせうね。もう三年と少しになりますね。旦那さんは？』
『難有う、別に……』
『お丈夫で、それは結構ですね。ちつとも、お噂をきかないから、何うなすつたかと思つて……』
『貴方は？……』
『まだ一人。』
『本當？　うそでせう。』

らか殘つてゐたけれども、表通りは、家がすつかり建て込んで、尼寺の傍の空地に建てた平家には、新式の醫師などが來て住んでゐた。そしてそこからは髪を流行の束髪に結つた若い女學生が毎朝町の方へと出かけて行つた。

西風の梢を鳴らす寒い日もあつたが、時には、やがて咲く花を思はせるやうな日影の暖い穩かな日もあつた。さういふ日には、お初は、一人で裏へ行つて、なづ菜だの芹だの野びるだのを摘んで來た。と、その近所で仕事をしてゐる良太は、お初の方をのぞいて見て、昔小娘であつた時分と同じやうに、『あゝ、芹が大變にあつた、』などと言つて莞爾した。矢張、裏にはその大きな古い松が高く碧い空に聳えて立つてゐた。

何うかすると、矢張、ぶら〳〵其處等を歩いてゐる肥つた姉刀自に邂逅した。

『初坊、何かあるかえ？』

かう言つて姉刀自は近寄つて來て、

『おゝ、野びる！』

のぞいて見て、『田舍にゐる時分には、よくこれを取つたもんだがね。これを酢味噌にすると旨いもんだがね。それから、この玉をね。揃へて、油で揚げて食べると、おいしいもんだよ。』

ある日は、向うから二十四五の女が歩いて來た。似てると思つたが、段々近寄つて來ると、矢張それ

て、

『さうですか、それはいけませんね。お大事になさいまし、』などと言つて挨拶した。誰も彼もお初のやつれて世帶染みた風を振返つて見た。

お初は、以前に實が机を据ゑた奧の四疊半に寢たり起きたりしてゐた。娘の爲めに母親が二枚重ねて敷いて呉れた柔かい蒲團、メリンスの肩當のかゝつた綿のふつくりした搔卷、その上に大柄の縞の四布をかけてお初は寢てゐた。お初の蒼白い顏はをり〳〵厠に行く緣側のところに見えた。

池にはもう金魚はゐなかつた。構ふ人がないので、あたりに木の葉が散り積つて、幼い頃お初が裏山から茅生を取つて來て植ゑた松やら楓やらが徒らに大きくなつてゐた。ある日はその裏の狹い庭を雪が眞白に埋めた。

奧でも心配して、奧方や姉刀自は、見舞物などを呉れた。養女のお光は、もう十五位になつて綺麗なお孃樣になつてゐたが、それが裏の木戶からそつと入つて來て、一時間位遊んで行つたりした。奧では、旦那は、もう何處にも勤めに出て居なかつた。良太が此處に來た時分とは、また夥しく世の中の潮流が移り變つてゐた。旦那なども、もう今では當年のハイカラではなかつた。また廟堂の上に立つ有力者でもなかつた。參議と言ふ名は大臣に變り、元老院は樞密院にかはり、新たに議會は設立されて、新聞はその記事で賑はふやうになつて行つてゐた。町の外れに行くと、それでも、まだ昔の淋しい氣分がいく

その頃から、お初の體は變調を呈した。『とても働いてゐられないから。』から言つてはお初はよく里の家へと歸つて行つた。『また、家の嫁の我儘が始まつた。』から母親に言はれるのを顧慮してはゐられないほどお初の體は勞れてゐた。

ある時には、おかねは腹に据ゑ兼ねたと言ふやうにして出て行つたが、やがて歸つて來て、『あゝして放つて置いては第一體がたまらない。少し家に來て、やすむやうに話して來た。嫂さんも本當にわからないんだから困つて了ふ。昔からよく言ふことだが、女親一人のところには忘れても娘をやるなつて言ふが、本當にさうだ。あの年になつてて、人間つて言ふものは、そんなもんかね。』から激昂したやうな調子でおかねは言つた。

『もう少し、貴方が言つて呉れると好いんだけども……』

『それぢや廉が立つからな。』

『廉が立つ、廉が立つッて、それぢや際限がありやしない。貴方が少し位、難かしく見せてやる方が好いんですよ。貴方がのんきだもんだから、私一人、わる者にならなけれやならない。』

良太は默つて眼をしよぼ〳〵させてゐた。

それからお初はずつと里に歸つて來てゐた。近所の人達は、道で、また湯の歸りなどで、お初に逢つ

が辛いんだから、』などとも言つた。それが良太やおかねには一層不憫な感じを起させた。

實の性質も此頃著しく變つて來てゐるのを、良太もおかねも見遁さなかつた。快活な青年、やさしい青年、ユウモアに富んだ青年、それがこの二三年此方非常にさびしい、沈默な、悲觀的な青年になつて行つてゐるのを見た。母親と妻と生計との間に立つて、雄心の消磨し儘したやうな青年を見た。

『實だつて、苦勞はしてるんだから、さううるさく言はれやしないしね……』嫂さんさへ、もう少し考へて吳れると好いんだけれど……』かうは言ふものゝ、お幾のさびしい生活を考へると、おかねは其處にも同情し理解しなければならないある理由の橫つてゐるのを感じた。

その狹い暗い家で、不幸にも末の克巳は腸チブスにかゝつて、半年以上も床に就いてゐた。克巳はもう十五になつてゐた。醫師への藥取、夜中の氷、その看病にもお初は心身を苦しめた。お初は種々な心勞に急に五六年も年を取つたやうな氣分になつてゐた。

その年の暮近く、實の家はまたそこから移轉した。それは、石川の持家で、一昨年石川がある警察署長から田舍の郡長に左遷されて行つたあとは、奧の家も前の家も人に貸して置いたが、その前の家が今度空いたと言ふので、それで、實一家は其處に移り住むことになつたのであつた。それは石川が裏の二階屋を新築しない前に住んでゐた家で、其處で石川とおてつとは結婚した。

移轉した日、お幾はその時分のことを思出して、『おてつさへ生きてゝ吳れゝば――』などと慨嘆した。

その間に、實の家では、二度移轉をした。初めて住んだ家は、庭もあり間數も多く家賃も安かつたが新しく家を建て替へるために立退を請求されて、山手のある通りから少し入つたやうな家に移轉した。それはある大きな邸の門前に軒を並べて出來てゐるやうな家で、入口二疊、座敷八疊、茶の間六疊といふやうな狹い家であつた。實は毎朝其處から袴を穿いて、其時分は濠端から本郷の方へ移つて行つた役所へと通つてゐた。憲法發布の日には、雪が降つて、町中の折角の出し物も十分に賑はしくすることが出來なかつた。その時、良太は丁度仕事が休みで、そこへ訪ねて行つてゐた。町の出し物には、裃を着たり、刀を差したり、槍を立てたりして行列がつゞいた。

良太もおかねも其の狹い暗い茶の間の空氣の中に蒼白い顏をした娘を發見した。髮も碌に結はず湯にも碌々入らない娘を發見した。辛勞と艱難と嫉妬と愛情との間にやつれ果てた娘を發見した。それまでにはおかねは度々思ひ切つたやうなことをお初に言つた。『何うも仕方がない。緣がないものなら、親類が不義理の仲になつたつて何だつて仕方がない。お前の體がそのために壞れて了ふやうでは仕方がないから、お前さへ、そのつもりなら、何うにでもするから……。實だつて、わかつてゐるから……』しかしお初は決して實に別れようとは言はなかつた。

『これも私の運ですから。』

お初はかう言つてさびしく笑つた。時には『あんまり母さんに何か言ふのはよして下さい。却つて私

つた。

良太も流石に腕を組んで考へた。

『困つたもんだな。』

『だつて、今更、何うするわけにも行かないし……困つたことになつた。それも、當人同士が氣が合はないとか何とか言ふのなら、何うにも仕やうがあるけれども……さうかと言つて、餘り此方で下手にばかり出てゐても、餘りお初が可哀相だし、實に言つたつて、あれだつて、何うすることも出來ないし、困つたもんだ。』

『困るな。』

『だから、親類同士は、好ければ好いけれど、わるいと困るからつて、私はあれほど言つたんだけれど……』

『今になつて、そんなことを言つたつて仕方がない。』

夜遲く、暗いランプの下で二人はこんなことを話した。

二十六

それから一年は經過した。

それに引かへて、お初の此頃は、以前とは丸で變つた。娘時分の若々しい氣分はすつかりなくなつて了つて、皮膚の色なども艶がわるくなつた。髮を丸髷に結つて來ることなどは滅多になく、銀杏返の壞れかけたのを梳きもせずに裏からそつと入つて來たりした。近所の上さん達も、『お初ちやん、何うかなすつたんですか、加減でもわるかつたんですか、』などと訊いた。

『髮なんか少し綺麗にしたら好いぢやないか。』

見かねておかねが言ふと、

『だつて、母さんが喧しいんですもの、鏡臺なんかに向つてゐると、すぐ小言を言はれるんだもの。お女郎見たいに、べた〳〵してなんてすぐ言はれるんだもの。』

『だつて、お前。』

『でも、髮結さんが來て、髮を結つて貰つてゐても機嫌がわるいんだもの……。眞黑になつて働いてゐなけれや、母さんは機嫌がわるいんだもの。』

『何うしてだらうね。』

『此間も着物がわるくなつたから、銘仙の方を着てゐたら、叱られちやつた……。それに、一番困るのは、夜など、六疊に行つてゐると、こはい眼で睨められるんだもの。』

こんな話は際限なく續いた、時には道すがら泣いてゞも來たやうに、眼を泣腫してゐることなどもあ

に任せておかれるものか。それこそ何んな眼に逢はされるか知れやしない、』などと何かにつけて實に言つた。

それからお幾は、生計向のことなどをもおかねに話した。月給二十圓、それに父親の恩給が年に四十六圓、『それでやつて行くんだからね、おかねさん。恩給位は、私の小遣にでもなるんなら好いけれど、それを混ぜても足りないんだから。……そしてそれを言ふと、あれはまた怒るしね。何故、それなら、陸軍なり、大學なりに入れて勉強させて呉れなかつたつて言ふし、困つて了ふのさ――』

『それは、さうだよ。何處だつて有り餘るつて言ふ家はないからね。』

『それでも、公債がまだ一二枚殘つてゐるから、それで、まア、眞弓を學校に通はせて置くがね。あれだつて、何になるもんか、當てになりやしない。子供なぞ、大きくしたつて、自分のためになんか少しもなりやしないね。』

『それはそんなもんだね。』かう言つたおかねは詮造のことなど思起してゐた。

實は奥に用事がある時には、いつも歸りには良太の家に寄つて行つた。良太やおかねに取つては、實はお幾の言ふやうな難かしい表裏のある男ではなかつた。何方かと言へば、母親思ひで、おかねが種々なことを言つても、母親に對して批評がましいことは遂にその口から出なかつた。『あんまり遲くなると、母さんが心配するから。』かう言つて實はいつも早く歸つて行つた。

が覺えがわるいつて、それはまだ小さいからだよ。それを無理に叱つたり何かしてはいけないよ。さうして、晩の御飯の時には、揃つて仲よく食ふやうにしなけれやいけないよ。母さんがお酒でも飲まうつて言ふ時分に、本を覺えないからつて、お前が弟を叱つてゐたりしては、母さんだつて面白くないよ。母さんはこれまで苦勞をして來たんだから、成たけ逆はないやうにしなければ――』

かういふ風に、お初から聞いた話は、おかねから皆な實の方へとひつくりかへつて反響して行つた。お幾と、お初と、おかねと、實と――この四人の間には、往つたり來たりする間に、絶えず小さな旋風が渦を巻いた。

時々良太の家に遊びに來るお幾は、お初のことは言はずに、『矢張、實が意氣地がないから仕方がないんだよ。東京に行つて、息子と一緒に暮したら……と思つて、朝晩言ひ暮らしてゐたつけが、世の中は思つたやうにはならないもんだね。來て見れば、それほど好いことはない。却つて年寄のゐた時分の方が苦勞がない、』などと言つた。僅かな俸給、それでゐて百圓取りの旦那さまのやうな顏をしてゐるといふことやら、此頃は朝寢坊になつて搖ぶつて起さなければ起きないといふことやら、弟達に本を敎へて呉れるのは難有いけれど、長い煙管を傍に置いて、二三度覺えないと、それでぴしや〳〵打つことなどを種々と話した。『そんなに苦勞せずに、若い者にまかせて置きなさいな。』かうおかねが言ふと、その時は『さうしよう、』と穩かに言つてゐるけれども、蔭では、『新町では、さう言ふけれども、……さう若い者達

夜更にひとりで長火鉢の前に坐りながら溜息を吐いた。此間、お初が來た時にも、『お前、そんなことを言つたつて仕方がないよ。嫂さんだつて、苦勞して來たんだから、お前がわるくないものを、無理を言つて叱るわけはないんだから、姑を大事にしなくちやならないのは、昔から嫁の定法だから、何んなにも盡してやらなければいけないよ。それに、他人ぢやなし、伯母さんだもの。』かう言つてなだめて歸してやつたけれども、双方の爲めと思つて、幾分は犧牲になつたつもりでやつたことが、さうした思ひもかけない結果を來たさうとはおかねには思はれなかつた。

それに、お幾とおかねとは、普通の嫁、小姑の間柄とは違つて、口爭ひ位はしたことはあつても、互に顔を赤らめ合つたり、蔭でわる口を言ひ合つたりするやうなことはなかつた。兄が戰死してから、おかねは殊にお幾に同情した。姉妹も及ばないやうな親身の情をお互ひに見せた。それが、一人娘のお初に辛く當るなどとは何うしても思はれなかつた。おかねは内職の麻を繋ぎながら、娘の言つたことを種々に想像した。若夫婦の寢てゐる隣の間、醉覺めの夜の寂寥、中年で夫をなくして艱難と辛勞との中に獨居した嫂……さういふことが際限なく思起された。

役所から歸つて、實が兄弟だちに本を教へるが、末子の克巳がまだ稚なくて、覺えがわるく、夕飯の支度が出來ても、膳に向ふことが出來ない。それがいつも家庭の紛紜の一つとなると言ふので、ある時は、實に向つて、『本を教へるのも好いけれど、そんなに大騒ぎをして教へなくつたつて好いぢやないか、克巳

『その中歸つて來るよ。』

實の家に出かけて行つて良太が歸つて來た夜などには、

『でも、感心に働いてゐた。』

『實はゐたかえ？』

『實は今日は何處かに廻るつて言つて出て行つたつて、ゐなかつた。』

『何んな風だえ？』

『別に、變つたこともなかつた。』

『二人の睦ましいのは、何よりも結構だけども、嫂さんがあれでいくらか難かしいね。』

『難かしいつて言ふこともないがね。』

『酒を飮むと、むづかしくなるつて、此間もお初が言つてゐたが。――何うして、酒なんか飮むやうになつたかね。』

良太は默つてゐた。良太は夕飯をすまして了ふと、また明日の仕事があるといふやうに早くから寢た。それに、長い間放つて置いたトラホウムが、此頃いくらかわるくなつて、眼が鬱陶しくつて困ると言つてゐた。おかねは夜遲くまで起きて、裁縫をしたり、內職の麻絲を編んだりした。

一月二月經つた頃には、おかねの胸には今まで豫期しなかつたある心配が萠して來てゐた。おかねは

ら、二人は俥に乘つた。お初はさびしさうにして其處まで出て來た。お幾も、實も、姪も、眞弓も、克巳も。

二十五

お初の行つた後の良太の家は、さびしかつた。いつものやうに、朝早く良太が出て行つたあとで、用事のない時には、茶の間に一人坐つておかねは裁縫などをしたが、大抵は奧に用事があるので、裏口の錠を下しては出かけて行つた。お初の買つて來て放つて置いた小さな池の金魚の上には梅雨が毎日のやうに降頻つた。

夕飯の後を二人相對してさびしく坐つてゐるやうなことも時にはあつた。

『でも、まア、實がしつかりしてゐるからな……これで、まア、死んだお祖父さんやお祖母も安心して呉れるだらう。』

『でも詮造は何うしたんだか。』

『なアに、詮造には、詮造の了簡があるから、さう心配することもない。』

『でも、此間、知らせてやつた返事もまだ來ないぢやないか。』

『何處かに、遠くにでも行つてるんだよ。』

『それにしても、手紙は廻してやつて呉れたらうから、何とか言つて來さうなもんだのに……』

年望んでゐた息子との生計をも遂げて見て、愈〻今度嫁が出來るといふ段になると、俄かに自分の仕事がなくなつたやうなさびしさを感じない譯に行かなかつた。『まァ、樂みもないんだから、晩の酒の一合位は飮むかな。』こんなことをお幾は言つた。

『まァ、今度は詮造さんが早く家でも持つて、嫁さんでも來るやうにならなければ――』

かう姪がおかねに言ふと、

『あれは當になりやしませんよ。海のもんだか川のもんだかわからないんだもの。それよりや、まァ、實がしつかりしてゐるから、行く〳〵は何うしても、此方の世話にならなければならないんですよ。』

『それはさうですとも……』

戰死した父親を祀つた明るい神棚の下で、內々の人達はかうして話した。實の眞面目な顏と、お初の水際立つた島田髷と、お幾の酒に醉つた赤い顏と、良太のしやんとして坐つた姿とは鮮かに四邊に見えた。室の一隅には、お初の持つて來た簞笥が新しく白く見えた。

十一の克巳は、をり〳〵母親の傍に行つて『さつき上げたぢやないか。おとなしくしてお出でよ。』などと言はれてゐた。

良太やおかねが歸る頃には、雨はかなりに強く音を立てゝ降つてゐた。外には幌をかけた俥が二臺待つてゐた。『生憎ですね、大分降つて來た。しかし、降るのはお目出度いと言ふから。』かう言ふ聲を聞きなが

『なアに、そんな心配なんかありやしませんよ。皆な内々で、氣を飲み込んでゐるものばかりだから。』姪は二人の間に入るやうにして、『此方の伯母さんも、これまで散々苦勞をして來たから、これからは、氣を暢氣に持つて、遊んででも歩くやうにする方が好いよ。本當に、こんなに嬉しいことはない。二軒の家が一軒になつたやうなもんだから。』かう言つて、姪は盃をかさねた。

相變らず、默つて、莞爾して坐つてゐる良太の方に向つては、

『叔父さんは、矢張、お酒は一つも行けないんですかね。』

『え、もう澤山。』

『でも、お初さんのお目出度いことなんだから、一二杯いかゞです？』

で、徳利を其方の方へ持つて行くと、それでも辭退はせずに、つぐ眞似をさせて、そしてそれを膳の傍に置いた。良太は昔から一滴も酒を飲まなかつた。『本當に、叔父さんは、昔からかうなんだから。』『意氣地がなくつて仕方がないんですよ』といふやうにしておかねは笑つた。

それに引かへて、お幾は、近頃、いつとなく盃を手にするやうになつてゐた。『本當に、伯母さんだつて樂しみはなし、さびしいからね。少しは夕飯の時には、藥になつて好いんですよ。』などと姪は言つた。實際、お幾はさびしかつた。年寄子供の世話をしてゐる間は、艱難に堪へる爲めの努力に年中心も體も張りつめてゐたが、——晩酌を樂む餘裕などはなかつたが、さて、年寄が死に、子供が大きくなり、多

しいこともないのだからと言つて、そのまゝ内々で式を擧げることにした。

箪笥だの寢道具だのの來た頃から、雨になつて、初冬の新寒が著るしく肌に染みた。それは丁度十一月の末で、庭には菊などがまだ殘つてゐた。

丁度其處に手傳に來たお幾の姪は『むつまじく暮らすやうに』などと言つて、大きな鯱を二疋籠に入れて持つて來たりした。神棚には、燈明が明るくついて家の中は平和と幸福とに輝くやうに見えた。

『今度は眞弓さんの番だね。その時にも、私が手傳ひに來て上げるからね。』

眞弓は顔を赧くした。

日の暮れる頃、良太とおかねとはお初を作れて來た。そんな必要はないとて別に媒妁はきめなかつた。で、實とお初は、昨年老祖父母の死んで行つた座敷の八疊で、形ばかりの式を擧げた。お幾の姪は何くれとその間を斡旋した。

石川はその席に列る筈であつたが、官用で出張してゐたので、その前の日に、後妻がきらびやかな粧をして、祝物を持つて來た。手車が門前に待たせられてあつた。『おてつが生きてゐて呉れゝば――』かうお幾はその時の話をおかねにした。

『本當に、嫂さん。まだ子供なんですからね。世話が燒けて大變だらうけれど、そこはよく飲込んで置いて貰はないと――』おかねは何遍も前に言つたことを更にあらためて繰返してお幾に言つた。

ら。』

『そんなら結構だな。』

話は何の障礙もなくすぐきまつて行つた。お幾は來て、『唯、實が痩腕だし、それに、弟が多いから、お初ちやんには、氣の毒だけれども、』などと言つた。石川もその話をきいて、『それは好い。お初ちやんならそれは持つて來いだ。知らない中ぢやないからな、』と喜んで贊成した。

話がきまつてからも、幼馴染同士は平氣で往つたり來たりした。矢張、『お初ちやん』『實さん』で二人は話した。實は小遣錢の中から、其頃はやつた鹿の子の根だけを買つて行つてやつたりした。

『お前、話がきまつたんだから、あんまり、ちよい〳〵、新町へはお出でないよ。可怪しいからさ。』

かう母親に言はれて、

『うむ……』などと言つてゐたが、それでも實はよく出懸けた。

眞弓はその時十八で、矢張、神田の英語の塾に通つてゐたが、この話を聞くと、總身の血が逆に流れるやうな氣がした。しかし、一方では、その綺麗なやさしい好きなお初を自分の嫂さんとして考へることがめづらしくもあり、嬉しくもあつた。同じ家に一緒に住むといふことも樂しかつた。眞弓は不思議な氣がした。

誰かしつかりしたものを媒妁にきめなければならないのだけれど、お互の間柄ではあるし、別に難か

二十四

實の友達の妹が餘所へ結婚した年の秋に、實とお初の緣は突然結ばれることになつた。

『お初、何うだえ！』

かうおかねは言ふと、

『私は何うでも……』

『實なら、人間はたしかだし、それに根がやさしいから、間違ひはありやしないから好いと思ふがね。』

何方かと言へば、甥といふよりも實の子のやうに實を思つてゐるおかねは、さうする方が生中の知らない家から、やつたり貰つたりするよりも、兩家の爲めにも好いと思つた。おかねは良太に言つた。』詮造があゝいふ風なんだから、それや、養子をするに越したことはないけれど、家のやうなところへは、碌な養子の來手がある筈はないんだから。知らない他人を貰つて苦勞するよりも、實にやる方が好いぢやないか。詮造が歸つて來ればそれでよし、歸らない時には、家の跡を相續するものだつて、さうすれや、其處から貰へば好いんだから。その方が兩だめで好いと思ふね。』

『實さん、貰つて吳れさへすれや、それは結構だ。』

『なァに、嫂さんも、そんな謎を薄々かけるんだよ。實だつて、さういふ氣はないんぢやないんだか

んだね。それに、實は男だから、何うしても女の心持はわからないところがあるよ。矢張、おてつでも生きてゐて呉れゝば好いと思ふよ。』

『それやね、おてつが生きてゐれやね。……でもまァ、子供達が大きくなつたんだから、嫂さんも大變だつたんだから、つまらなく、くよ〳〵しないで、のんきに暮すのさ。』

『まァ、その積りでゐるんだけども。』

お幾とおかねとは、絶えず行つたり來たりした。元は小姑と嫁との間柄で、イヤな暗鬪默鬪もお互にあつたのではあるけれども、幾多の艱難を經て來た身には、もうさういふものは跡も形も留めなくなつてゐた。めづらしい貰物などをおかねがお初に持たせてよこすと、お幾は五目鮨やぼた餅を眞弓や實に持たせてやつた。

眞弓に取つては、叔父叔母の家に行くのは、何となく氣がひけた。昔の丁稚時代のことは、叔父も叔母も何も言はないけれど、眞弓の胸には、そのことがはつきりと印象されて殘つてゐた。眞弓には、奥に挨拶に行けと言はれるのが一番辛かつた。ことに、熊の皮に坐つてゐる旦那の姿を見るのが厭だつた。運わるく、邸内を旦那が散歩してゐるところなどに邂逅すと、顔を眞赤にして、打たれた犬のやうになつて歸つて來た。眞弓は毎日神田の方にある英語の塾に通つて行つてゐた。

だ勉强するつもりでゐますし、私も若いから、もう少しかうして置きませう。それに、弟達もあるんですから。』

『だけど、さういふものではありませんよ。先づ〳〵、實だつて一人前になつたんだから。何處か實の友達にも妹があるつて言ふぢやありませんか、そこになんか、よく出かけて行くんでせう。』

『え、ちよい〳〵行きますけども――』

『まア、良緣があつたら、さうする方が好いよ。何も急がなくつても好いが――』

その話を實にすると、『女房なんか、まだ持てない。それよりも、これから少し勉强しなくつちやならないんだから。』

その癖、お初が來たり、同藩士の娘が母親と一緒にたづねて來たりすると、實は機嫌が好かつた。時にはお幾はおかねにこぼし話をした。『何うも、矢張、旨く行かないもんだね、おかねさん。田舍にゐる中は實と一緒に暮すやうになつたら、もう、何も望みはない。何んなことでもするし、何んな世話にもなると思つたんだけれど、一緒になつて見ると、さう好いこともないもんだね。人間といふものは、さうしたものかね。』

『何かわるいことでもあるのかえ、實に――』

『なアに、別に、ありやしないけれど、矢張、年寄がゐなくなつたりすると、お互に勝手が出て來る

總領のお孃樣などには、いつもお供をして、小石川の學校へと通つて行つた。お初は益〻下町式の娘になつて、髮を銀杏返などに結つて、よく實の家に訪ねて來た。葬式の時に着た紋附などは、ことによく似合つて、多い會葬者の眼を惹いた。

『新町では、お初ちやんを何うするつもりなんだらうね。お婿さんでも取るつもりなのかしら?』

お幾の姪になる女は、ある時、かう言つてお幾に話した。

月給は尠いけれど、實の家は、何うやら斯うやら生計を立てゝ行つてゐるのを、良太もおかねも見た。それに、實は弟達の世話をもよく見てやつた。役所から歸ると、何んなに勞れてゐても、二人の弟に漢學を教へてやらなければ夕飯の膳に向はなかつた。そして、日曜日などには奧から良太の家へとかけて實はよく遊びに來た。

田舍で居食ひにして食つて來た公債は、それでも一枚や二枚はまだ殘つてゐた。その中の一枚を、眞弓の修業費にするといふ話などを實は良太やおかねに話した。

老人達が死んだ後は、自然の道行きとして、實の嫁の話が親類達の口に上つて來た。『固いから大丈夫だらうけれども、若い者だから、いつ氣が其方に向いて行くかわからない。相應なものがあつたら、』などと深川の署長をしてゐる石川が來て話した。

『だつて、少しばかりの月給で、女房子を養つて行かれやしないぢやありませんか。それに、實もま

座りまするか。貴方様は、御用人さまでいらつしやいまするか。これは失禮を仕りました。』『こんなことをも言つた。昔のさまが一々蘇つて、歴々と眼の前に見えるらしかつた。傍で、盲目の老母は、『また、おぢいさん、何か言つてるよ。おぢいさんも、ぼけちやつたんだね、』などと言つた。

四月の花の咲く頃に、老祖父は死んで行つた。丁度、其頃は國會開設の議論の盛んな頃で、新聞では、市外に追放された政治家達の行動などが詳しく書いてあつたりした。『おぢいさん、たうとう死んだかね。』こんなことを言つて、老祖母は目の見えない白い顔に涙を流したが、それもその時だけで、矢張、障子に向つて、鼻唄を唄つて、雜巾をさしてゐた。しかし老祖父の心配したほどのことはなかつた。四十九日がすんだ頃から病みついた老祖母は、其年の秋の九月の末に、白髪のぐる〳〵巻きを後に見せて、齒のない顎を一度二度しやくつて、そして祖父の跡を追つて行つて了つた。

『矢張、おぢいさんが心配して迎へに來たんだね。なかの好い夫婦だつたからね。目がわるくつて、たうとう盲目にならうとする時分には、おぢいさんは、何處の溫泉が好い、此處の溫泉が好いと言つて、あちこちと伴れて行つたもんだからね。羽州の貼折の溫泉などには、隨分長く行つてゐたよ。』おかねは線香を供へながら、昔を話した。

お初はその頃は邸から下つて、家に歸つて來てゐた。十九――もうそろ〳〵身の振方をきめなければならない年齢に達してゐた。三條さまのお邸では、嬢さん方の世話をして、後に、宮様にお嫁きになつた

その次ぎに、良太の家に行く途中で、汽車の踏切のところで、ばつたり出逢つた時にも、何處の綺麗な娘かと思つた。それが、段々近寄ると、急に向うから挨拶されたので、眞弓は狼狽した。

『家に行くの？』

『え。』

眞弓はかう言つたきりであつた。お初は邸に歸る途中であつた。眞弓は若い女の前に出ると、顏がほてつて仕方がないやうな少年であつた。

上京した年の暮あたりから、老祖父は何だか體が變だと言出した。良太の家へも、引越して來てから、一度訪ねて行つたばかりであつた。眼が霞んでいけないなどとも言つてゐた。それが正月には寢たり起きたりするやうになつてゐた。東京に來るまでは、自分が弱つてはならないと思つてゐたが、實とお幾に一家をまかせてからは、矢張安心して氣が弛んだので、それで體がすつかり老衰して了つたのであつた。『でも、な、俺が先きに死にたくないな。肓目のばあさまを後へ殘して置きたくない。一日でも好いから、俺の方が後に殘りたい。ばあさまのあとを見てやつて、そして死にたい。』こんなことを口癖のやうに言つてゐたが、その年の梅の咲く時分には、夜などをりくむつくり起き上つて、昔經て來たさまぐの生活を、夢にでも見たやうにして、『私は此處に、午の刻から控へて居りますが、まだ何の御沙汰も御座りませんが、もう一度お次取を願ひたいもので御座りまするが――』などと言つた。『左樣で御

その日は、夕飯に、鰻を御馳走になつて、やがて詮造は暇を告げた。

歸り際に老祖母は言つた。

『な、それぢやな、丈夫でな。父さんや母さんのところにも便りをよこしてな。外國に行くまでには、まだ一度や二度は來て呉れるだらうけれど、おばァさんや、おぢいさんは、年を取つてゐるから、いつ死ぬかもわからないからな。何でも體を丈夫にしておかなければいけないよ。そして、親に安心させるやうにしなけれや――』

『え。』

詮造は老祖父にもお幾にも、實にも挨拶して、良太と一緒に歸つて行つた。『今度、面白いものがあつたら、送つてよこすからね。』其處まで送つて出た眞弓に向つては、詮造はこんなことを言つた。

二十三

眞弓の眼には、お初は綺麗なやさしい娘に見えた。宿下りの日に來た時に、眞弓は五年振でお初に逢つたが、此前見た時とは、丸で別な人のやうに思はれた。先は姉さん振つて、ちつとも人見知りをしないのに、何故か眞弓にはお初の前に出るのが恥かしかつた。眞弓は顏を紅くして、挨拶して、そしてすぐ自分の室に引込んで了つた。

かう眞弓は昂奮したやうな顏色をして言つた。

詮造はその時、白い硝子の球の中に細い銀色した針金のピラ〳〵動いたものを持つて來て、皆なに見せて、『これは、電氣ですがね。この針金に、明るい灯がつくやうに今になるんですよ。外國では、皆な、これをつかつてゐて、町なんか、丸で晝のやうだつて言ひますからね。瓦斯も明るいけども、それどころぢやありませんよ。日本でも、今、研究最中なんでせう。』

『この中の針金につくのかな。』

老祖父はめづらしさうに、その白い球を透すやうにして見た。『おぢいさん、私にも見せて……』眞弓はそれを手に取つて、『陽電、陰電つて、二つあるんだね。だから、針金が二本あらァ。』

『よく知つてるな。』

詮造が笑ひながら言ふと、

『だつて、學校で教はつたもの。』

『豪い、豪い。』

『お前、そんなことをして、落して、壞すといけないよ。』眞弓と克巳がめづらしさうに、それをいぢくり廻してゐるのを見て、お幾は傍から言つた。

詮造と實とは餘り多く口をきかなかつた。

かう盲目の老母も合せた。
『でも、詮造、時には、親の許へも手紙をよこさなけれやいけないよ。』
『本當だよ、詮造さん。』
お幾は傍から口を挿れて、『家でも、心配してるんだから……。手紙位、何處だつて書けるでせうから。ちよい〳〵、手紙だけはよこしなさいよ。さうすれば、家で安心してゐるんだから。』
『え。』
詮造は頭を掻いた。
『これから、外國へ行くつて言ふんですがね、何うしても、內地ばかり歩いてゐる船では、旨いことが出來ないから。そして、向うに行つて何かしつかりしたことをやつて來ようつて言ふんですがね。』
良太が說明すると、詮造は、『來年は行けると思ふんですけど。』
『それは結構ですね。』
かう言つたお幾は、今からかう志がきまつてゐては、行末は何んなに豪くなるだらうなどと心で思つた。學問はしてゐても、僅かな月給取りで、毎日辨當を下げて行く實が腑甲斐がないやうにお幾には思はれた。眞弓も克己も來年は外國に行くといふ從兄を羨ましいやうな妬しいやうな心持で見た。
『僕も外國に行きたいな。』

ホッとしました。』

『大變だねえ。』

『しかし、北海道には、好いところはありませんよ。ひどいところばかりで、十里も二十里も、一軒も人家もないやうなところが、まだ澤山あるんですから。それに、アイヌといふ日本人とは丸で違ふ人間がゐましてね。それはおとなしい奴ですけれど、日本人には手向ひはしませんけれど……ひどい風をして、女だか男だか、ちよつと見ては、わからないんですから。』かう言つて、卷烟草の灰を烟草盆の中に落して『さう言へば、あれを持つて來て上げれば好かつた。そのアイヌが拵へた小刀だの短刀だの、いろ〳〵なものがあつたですよ。宿に置いて來て了つた。』

『それでも、まァ、さういふめづらしいところを見て歩けるんだから。』

『それから、長崎にも、鹿兒島にも行きました。新潟にも行つて見ました。新潟は舟つきのわるいところで、三日四日、風がわるくつて、佐渡に行つて、天氣の直るのを待つてゐました。』

『おゝ、佐渡へも行つたかえ？　今は便利だな、さう言つて、何處へでも出かけられるんだから、これからの若い人は仕合せだ。』

かういふ老祖父のあとについて、

『本當にな。便利な世の中になつたなァ。』

と言つて、三日暇を貰つた中の一日を、良太は詮造を伴れて、實の家へと訪ねて行つた。

詮造はリンネルの白い夏服を着て、頭を綺麗に分けて、巻烟草などを燻らしてゐた。詮造はもう二十五になつてゐた。

『まア、立派になつたこと。丸で、見違へるやうになつた。』

かうお幾は驚いたやうに言つて『本當に、此前、逢つた時には、から、まだ子供でしたがねえ。立派になんなすつた。それも、詮ちやんのは、一人でかう立派になつたんだから豪い。』

『何んなものだか、まだ、海のものとも川のものともわからない。』

かうは言ふものゝ、良太の顔には得意の色が歴々と見えた。

詮造は老祖父母や、お幾や、實や、眞弓を前にして、船の話だの、遠い航海の話だの、めづらしい國の風俗の話などをした。北海道の根室に行つた話をした時には、地理で讀んで知つてゐる眞弓は、『本當に、根室へ行つたの？　あんな遠くに？』かう言つて目を丸くした。

『北海道は、何處でもひどいけども……根室に行つた時は困つた。丁度今年の初めでしたがね。流氷つてね。氷の大きい奴が――それは大きいんですからね。家の十層倍もある奴が、ぐん〳〵流れて來るんですからね。そして、間違つて、それにつき當れば、船なんか滅茶々々になつて了ふんですからね。それは生命がけでしたよ、本當に……。それを、まア、何うやら斯うやら拔けて、釧路の方へ來た時には、

内に入つて行つて、

『本當によく見えますよ。良太さん、ちよつと見て御覽なさい。』

良太も出て行つた。良太が眼をしよぼ〳〵させながら、顏を仰向けにさせて、『は、はァ』などと言つて見てゐるのが、内の中からもよく見えた。

段々光線は薄く〳〵なつて行つた。あたりの空氣は、最早薄暮に近い位になつて來てゐた。

『あゝ、もう星が見える。』

『すつかり夜と同じだ。』

かういふ聲が外からきこえた。

老祖父は、『年寄なんか見たつて仕方がない。役に立たない。これからは若い者はさういふことを研究して、えらくならなければならないけれど――』かう言つて、勸められても、出て見ようとはしなかつた。

暫くすると光線は次第に明るくなつて來た。

二十二

久し振で、銓造が船から歸つて來た時には、田舍からお祖父さんお祖母さんが引越して來てゐるから

『どれ、どれ。』

實は急いで出て行つた。

『ね、そら、少し此方の方がかけ出したらう、ね。』

『お、かけた、かけた。』

『どれ、どれ、私にも見せて――』

克巳も傍に寄つて來た。

外で、こんなことを言つて、子供達が大騷ぎをしてゐる中に、太陽の光線は、次第に薄く〳〵なつて來て、後には、まだ日盛りであるのに、日暮に近いやうな暗い光線になつて來た。

『母さん、來て見て御覧よ。もう半分の上かけたよ。』

眞弓に言はれて、お幾も出て垣根のところに行つた。

『まぶしくつてよく見えない。』

『見えるぢやないか、よく見えるぢやないか、ねえ、兄さん。母さん、これを當てゝ見て御覧、よく見えるから。』眞弓は自分の持つてゐたガラス板を貸して、『ね、見えるだらう。よく見えるだらう？　母さん。』

『あゝ見える。』暫く見てゐたお幾は、『大變にかけた、もう七分通りかけた。』

外の草原には、晝顔などが萎れて咲いてゐた。
子供達が度々外に出るので、
『帽子も被らないで、さう外に出て、霍亂にでもなると大變だよ。』
お幾は心配して内から聲を懸けた。子供達は、小さなガラスの板に、眞黑に墨を塗つて、それを一枚一枚持つて、をり〳〵外に出ては、太陽を仰いだ。
昔は日蝕はあつたけれど、それが何時かけるか、何の位多くかけるか。そんなことはお城の中の天文所でもあらかじめ知らせることは出來なかつた。それが今では一月も二月も前からちやんと知れて、日本が一番それを見るのに位置が好いと言つて、わざ〳〵外國から學者が研究にやつて來た。日本の中でも、陸中の水澤あたりが一番好いといふことなども新聞に出てゐた。
『何でも、わかる世の中になつたなァ。』かう老祖父は感心したやうに言つた。
『何でも、今の世の中では、學問でなくつちや駄目ですよ。人間の體の中でも何でも、自分で入つて行つて見たやうに、今の新しいお醫師さまには、すつかりわかるんですからな。』
良太はかう合せた。
『あ、兄さん、少しかけ始めた！』
外の垣根のところで、ガラス板を日に當てゝ、一生懸命に太陽を見てゐた眞弓は言つた。

一つ買つて見て吳れないか。』かう言つて、通りを觸れて歩く肴屋を呼んで買つたりした。『越前さまの御老中時分には、御儉約、御儉約で、女が絹物を着ることなどは出來なかつた。それに、今では、不斷に、やはらか物を着るんだから、何も時世時節だな。』退屈すると、老祖母を捉へて、こんなことを話し合つた。

良太とはそれでも一番よく昔の話が合つた。お國替前の羽州の話や、河内の御陣屋の話や、在番に江戸に出てゐる時分の蒲燒が五文で、中でも日本橋のが旨かつた話などがいつも出た。維新の勤王佐幕の話が出ると、『何が何だかわからんな、今になつては。何方が好いもわるいもありやしない。骨を折つて、切腹したものなどが一番損だつたな。羽州で切腹した新見さんなどは一番つまらなかつたな。しかし、これも何うも仕方がない。』さういふ話が盡きずに出た。良太は雨が降つて仕事の休みの日などに、よく出かけて來て、半日緩くりと話して行つた。

二十一

その日も丁度良太が來てゐた。

『もうかけ始めさうなもんだ。』寶も眞弓も克巳もかう言つては度々外に出て見た。それは暑い八月の末の晴れた日で、百年に一度あるかないか知れないほど完全にかけるといふ日蝕の日であつた。垣根の

田舍でよく讀耽つた近松の淨瑠璃本を何遍も何遍も繰返して讀んだ。
『東京もひどく變つたな。』
かう言ふと、良太は、
『變つたにも何にも、もうお話にもならない位です。通り筋などでも、見違へるやうな處が澤山ありますからな。それに、馬車は通る。俥は通る。瓦斯なんて言ふものが出來る。西洋づくりが出來る。世の中は丸で變つて了ひましたからな。』
『神田橋のお邸は、もうなくなつたかな。』
『もうとうになくなりました。大きな煉瓦のお役所になりました。』
『實の勤めてゐるお役所と言ふのは、紀州さまのお邸か。』
『さうですよ。』
『一度、出て見たいと思ふけれど、年を取つては、面倒だし、老人が見ても、何の役にも立たないと思つてな。』
『でも、一度、實さんにでも伴れて貰つて、あちこち歩いて御覽なさい。』
『イヤ、もう、それも無駄だ。』
かうは言ふものゝ、時には、昔のことを考へて、『今頃は江戸時代には、鰯が旨いもんだつた。お幾、

『それに、利子の渡る時にも、ちやんと其處へ行つて、茶や菓子なんかも出て、向うでへいへいして利子を渡して呉れるんだつて言ふから。』

『それぢや、さうする方が好いでせう。』

『それにきめようよ。』

『好いでせう。』

良太夫婦は、長年稼いだ金を尠なからず公債にして貯めて持つてゐた。その他、奥の旦那や奥方にも預けて置いた。それを、今度旦那に勸められて、旦那の關係してゐる銀行の株劵にしようとしてゐた。良太夫婦はをりをりその溜つた金を算盤に載せて勘定して見たりした。『もう少しで千だ。』こんなことを良太が言つたのももうとうの昔であつた。

良太とおかねとは、ちよいちよい實の家へと出かけて行つた。行く度に、あたりは整頓して、道具の位置などもちやんときまつて行つてゐるのを見た。座敷は老祖父と老祖母の室になつて、入口の離れの四疊半に、眞弓と克巳とが机を並べて置いた。盲ひた老母は、矢張、田舍にゐた時と同じやうに、障子を前にして坐つて、鼻唄を唄ひながら、雜巾などを刺した。老祖父は老祖父で『何うも矢張退屈でいかんな。何かすることがないかな。袋張りでもしようと思ふけれど、東京では賴み手がないで、』などと言つた。

その夜、良太はおかねに言つた。

『さうした方が好いな。』

『さア、私には、わからないけれど、旦那は大丈夫だつて言ふんですか。』

『それは大丈夫だよ。皆な歷々がやつてゐるんだから。そんな心配はありやしない。旦那もそこの役員になつてゐるんだからな。』

『そんなら好いでせう。』

かう言つたが考へて、『でも、矢張、公債にして置く方が、大丈夫には大丈夫だと思ふね。そんなことはないだらうけれど――ないにきまつてゐるだらうけれど、萬一と言ふことがあるからね。公債にして置けば、利子は少ない代りに、さういふ心配はない。』

『それはさうだ……』良太も考へて、『でも、旦那があれほど言ふんだからな。それに、利子が倍以上も違ふんだからな。大丈夫だよ。』

『そんなら、さうなさい。』

『それに、その銀行の株を持つてゐると、公債とは違つて、社員になれるんだから。言はゞまあその銀行の一人になれるんだから。奧では千株とか入つたつて奧さまが仰しやつてゐたよ。』

『さうですか、奧なんか、お金があるんだから心配はないけども。』

が何だかわからない。あれはあれで、勝手なことをしてゐるんだからね。』

『でも、まア、獨りでさうやつてゐるのは結構ですよ。それに、船にでも乘らなければ、さう日本中を見て歩くわけにには行かないからね……。しかし、まア、好い婿さんでもありや、家には、お初ちやんの養子でもする方が好いんだけど……』

『家のやうなところに、誰が養子になんか來手があるもんかねっ』おかねはこんなことを言つて笑つた。

日の暮れる時分には、それでもあらかた片附いて、良太と實とは、近所の湯になど行つた。『湯は近くつて好い。好い湯ですよ。それに、ちよつとしたものは、あの通りで間に合ひますね。』湯から歸つて來てから良太はかうお幾に言つた。

歸る時、おかねは金を一圓包んで、それを老母の手に渡して、『ぢや、おばァさん、又來るからね。今度は近くなつたから、いつでも來られるから。……これはね、少しだけどもね、お小遣におし、何か食べたいものでもあつた時には、嫂さんにさう言つて買つてお貰ひ……』

『こんなものいらない。……何も不足はないんだから、』と返すのを無理に押しつけるやうにして渡して、『ぢや、嫂さん、又來ますよ。眞弓も遊びにお出で、實、さやうなら。』かう言つて、良太と一緒に歸つて行つた。

したあとで、實は長くかゝつて、机だの本箱だのを整理した。實は其處を自分の書齋にした。

良太はその日は精々と働いた。神棚を吊つたり、棚をこしらへたり、遙々持つて來た義兄の遺愛の椿や躑躅を庭に植ゑてやつたりした。『良太さん、まア、お茶でもおあがんなさい。』かうお幾が言つても、良太は仕事の手を留めなかつた。

『でも、結構だね。三條さまなんて、ちよつと我々が御奉公に上りたいつたつて、容易に上れやしないからね。』

『でも、まア、奧向では氣に入つてつかつて下すつてゐるやうですから、まア、結構だと思つてゐるんですよ。』

『好い娘さんになつたらうね。十八だね。もうぢきにお嫁にやらなければならないね。』かう言つたが、お幾は考へて『それにしても、詮造さんは、何うしました？』

『あれも、ひとりで、何うか斯うかやつてゐますよ。一昨年あたりは、通運丸なんかに乘つてゐたさうだつたけれど、今ぢや大きな船に乘つてゐるさうですよ。』

『時々便りがあるんでせう？』

『此間も、ちよつとあつた……をぢさん』良太の向うで働いてゐるのをかう呼びかけて、『何處でしたけね。九州だつたかね。……さう〳〵、下の關とか言ふところから便りがありましたよ。……しかし、何

て置かれた。良太と實とは、一々荷物を調べて受取つて、片端から庖丁で繩やら薦やらを切つて、それを室の中に運んだ。

『母さん、荷物はこれだけですね、ちよつと見て下さい。』

實は人足のわたす送り狀を手にしながら、かう言つて母を呼んだ。

『夜具の包が二つあるかえ？ ある、ある。それから、小さな箱を包んだものがある筈だが、……あゝあつたよ。』

『それぢや好いんですね。』

『あゝ好いんだよ。』

實は自分の財布から金を出して運賃を人足に渡した。

道具類を室の中に配置するに就いて、また一騷ぎさわいだ。一度置いた簞笥を都合がわるいと言つて、また別のところに置き改へたり、矢張、此處が好いと言つて、長火鉢を窓の處に持つて行つて据ゑたりした。勝手道具の置き場所などに就いても、お幾は何のかのと心配した。箪は良太が豫め大きなのを買つて置いた。『まア、嫂さん、さう一どきにしようと思ふと、骨が折れるから、段々に片附くよ。』おかねは傍からこんなことを言つた。

實の道具は、今朝早く良太の家から運んで來て、取敢へずそれを奥の六疊に入れて置いたが、一片附

『あれは、可哀相だつたけれど……餘所へ呉れたんだしね。仕方がないから置いて來ましたよ。あれも、東京につれて來てから嫁ける方が好かつたんですけどもね。いつそ、伴れて來ようかとも餘程思つたんですけども……』

『だつて、子供があるんだらう。』

『子供があるけれどもね。二三日前にも來て、子供なんかいらないから、一緒に伴れて行つて呉れつて泣くぢやないか、おかねさん。』

『機屋さんだね。』

『もと、在の者で、前の機屋に來てゐた人なんだけれどもね。もとは、身上が好くつて、親の代には、ところでも金持の方だつたんだがね。……今でも、ちつとは地面なんかあるにはあるとさ……。だけど、矢張士族の娘は、町人とは氣風が合はないからね。下品な眞似ばかりするつて、いつもあれが怒るぢやないか、おかねさん。一人ぼつちにして殘して來て、本當に可哀相だつたけれど、これも仕方がないのさ。あれの運がないんだから。』

『でも、まア、子供があつちやね。』

こんな話をしてゐる中に、通りに荷馬車の音がして、小網町の船宿から荷物をとゞけて來た。皆なはぢつとして落着いては居られなくなつた。薦包にした箪笥だの長火鉢だの夜着だのが一杯に縁側に並べ

てつの死んだのが唯一つ殘念だといふことやら、子供達が大きくなつて好いといふことやら、それからそれへとお幾とおかねの間には話が盡きない。其處へ蕎麥屋のかつぎが、山のやうに積んだ蒸籠を持つて來て縁側のところに置いて行つた。

『さア、さア、腹が減つたらう。もう一時だ。さあ、眞弓も克巳も此處に來て、お蕎麥でもお上り。』

かういふおかねの言葉につれて、めづらしがつて外で何かしてゐた子供達も其處にやつて來た。われ勝ちに、箸と汁を入れる猪口とを取つた。

『さア、嫂さん……。實、實はなにしてるんだえ？　實も此處に來ておあがり。』

おかねは別に、祖父と祖母に蒸籠を三つづつ取つて持つて行つてやつた。『おばァさん、そら、此處にお蕎麥がある。おなかが空いたでせう。そら、これが猪口、これが箸、これが蕎麥だよ。』

『なアに、ばァさまは、一人ぢや駄目だ。一々入れてやんなくつちや。かんがわるいばァさまだからな。』

斯う言つて、祖父は一々祖母の猪口に蕎麥を入れてやつた。

『東京の蕎麥は、汁が旨いから、』お幾も縁側の處に行つて、良太やおかねに取つてやつて、そして自分も箸を取つた。

『何か物足らないとさつきから思つたら、お勝ちやんがゐないんだねえ。』

『さうだつてね。毎日、何百人つて死ぬんだつてね、コレラで。昔、はやつたのと同じだつてね。』
『でも、なァに、食物さへ注意すれば、大丈夫だよ。わるい物を食ふからわるいんだよ。』
『田舍でも、さう言つて來たんですよ。東京はコレラがはやるから、食物は滅多なものは食へない。何でも、梅干とごま鹽さへ食つてゐれば大丈夫だつてね。』
『さうともね。』
おかねは老母の傍に行つて、『それでも、おばァさん、よかつたね。無事に着いて。一體、何年逢はないんだらう。東京に出て來た時ぎり逢はないんだから、もう十三年になるよ。いろんなことがあつたね。』
『もう〳〵考へないんだ……。かうして、お前に逢へさへすれば、それで好いんだ。實が月給取になつて、東京に來て、お前の聲をきゝさへすれば、それで、もう、明日が日に死んでも好いんだから。』盲目の老母は、白い顏を上に向けて、昂奮したやうなさまして、齒のない口をもご〳〵させて體を震はせた。
『まァ、あばァさんも、祖父さんも、これからのんきにするんだね。私も近いから、これからは度々來るし、私の家にもたまには遊びに來て、旨いものでも食つて、のんきにするんだね。』
『旨いものも何にも食べたくない。……かうしてお前や良太に逢へればそれで澤山だ。』
氣が附くと、老母の頰には、涙がほろ〳〵と流れてゐた。
でも、まァ、實がしつかりしてゐて呉れたから、かうして一家揃つて話が出來るといふことやら、お

きな家に住み得るとは思つてゐなかつた。

『まア、奥にもあるんだね、一間。皆で幾間だえ。四間、五間あるねえ。それに皆な室が大きいよ。』

『なアに、それでも、家賃は安いんだよ。』

かう實が言ふと、

『さうかい、好いところが見つかつたね。それに勝手が便利だ。』お幾はあちこちを見て廻つて、荷の着くまでと思つておかねが取敢へず運んで來た火鉢の傍に行つて、改めて挨拶して、『今度はまア、いろいろお世話になつて、何からお禮を申して好いかわからない。實のことも、何んなに叔父さんや叔母さんに世話になつたか知れないんだから。』

『何にも行屆かないで……それでもまア、無事で着いてよかつた。おばアさんもゐるし、何んなに困つたらうと思つてね、嫂さん。』

『それでも、祖父さんが丈夫で船宿へ行つてかけ合つて呉れたり何かして呉れましたからね。それでも、船の中は心配でしたよ。おばアさんや、子供にもしものことがあつてはと思つてね。』

『まア、然し、話はゆつくりあとですることにして、それよりも暑かつたでせう。實や、水でも汲んで母さんやお祖父さんに顔でも洗はせてお上げな。……今年は梅雨が足りなかつたもんだから、今月になつてめつきり暑い。それにね、わるい病氣がはやるんでね。』

『おぢいさん、まァ、丈夫で結構でしたね。』

『やれ、やれ、まァ、東京に着いて、嬉しかつた。女子供だから、途中で若しものことがあつてはと思つて、心配したが、まァ〳〵好かつた。良太と實とが迎へに來て呉れたんでほつとした。』

かう言つて、頭の禿げた、いくらか腰の曲つた、今年七十一になる祖父は、暑いのを扇であふぎながら、靜かに井戸などのある細い通りを奧の家の方へと歩いて行つた。お幾が手を取つて老母を作れて行かうとすると、實が、『母さん、おばァさんは私が負つて行くから、好う御座んすよ、』と言つて、輕々と白髮の祖母を負つて先に立つた。

『まァ、まァ、眞弓の大きくなつたこと……。それに、これが克巳ちやんかえ？　まだ赤坊だつたつけがねえ。こんなに大きくなつたのかえ。』

眞弓は十六で、紺の絣に唐縮緬のへコ帶などをしめてゐた。克巳は田舍染みた結城木綿の單衣を着て、めづらしさうにして、ちよこ〳〵と彼方此方を歩いてゐた。克巳は十一であつた。

人々はやがて家の中に入つた。

『好い家だね。ひろいね。間數が澤山あるぢやないか。しかしこれぢや、餘程、家賃が出るだらうね。』

東京生活を石の上の生活のやうに思つてゐるお幾は一番先にこんなことを言つた。實の月給が十八圓、それに父親の恩給が年に四十六圓、それで生計が立つだらうかと絕えず心配してゐるお幾は、こんな大

其處此處と役所の歸りなどに實がさがして歩いた貸家は、市ヶ谷の奥のさびしい通りの裏にあつた。元は大きな大名の下邸の一部で、留守居の家來が住んでゐたが、それが引越してからは、家は雨風に打たれたまゝ、借手もなくて、徒らに長い月日を經過してゐた。『しかし家は古くつても、廣い方が好い。』

かう言つて實は其處を借りることにした。

船から來て東京の小網町の船宿に着いた田舍の人達の一行は、やがてその最初の借家住ひの家を、さびしい畠の多い田舍めいたところに發見した。おかねは其日は手傳ひに行つてゐたが、車の音がすると、何もかも捨てゝ急いで迎へに出て行つた。

『まア嫂さん。』

『まア、おかねさん。』

かう言つて、二人は互にうれしさうに顏を見合した。

續いて、おかねは、良太に扶けられて俥から下りようとしてゐる盲目の祖母の傍に走り寄つた。

『おばアさん、おかねですよ。』

『まア、まア、おかねかえ。』

老母はこれ以上に何も言ふことが出來なかつた。續いて、祖父、眞弓、克巳などがぞろ〳〵と俥から下りた。

に行つたが、あとはひつそりとして、實の勉強するランプの灯ばかりが遲くまで四疊半を照した。

梅が白く垣根に咲く時分には、近くにある名高い郊外の梅園に大勢東京から人が訪ねて來た。瓢簞などを持つて來て、日當りの好い芝生で、酒を酌んだりなどする人達もあつた。梅の多い奥の邸に間違へて入つて來て、『や、こゝは銀世界ぢやないのか。それでも梅が澤山あるぢやないか。』などと言つて、門の中から引返して行くものなどもあつた。

實の姿は奥の庭やら、銀世界やら、垣に添つたさびしい道やら、奥の十二社の方へ行く道やらに見えた。實の郊外雜詠は、段々多くなつて、その年の四月頃には、百首以上にも達して行つてゐた。別に、實は柳州の八記に模して、郊外小記といふ短かい文章を書いた。十二社の池の畔の料理店の娘は、後には、實の顏を見覺えて、『いらつしやいまし、』などと言つて迎へた。『母さん、知らないの、あれは、青山さんにゐる若旦那ですよ。お初ちやんの御亭主になる方かも知れないよ。』かうも言つて噂した。

綠葉の中に幟の鯉のひら〳〵する時もすぎて、やがて梅雨が近くなる頃には、田舍の人達の上京する準備の出來たといふ手紙が實の机の上に載せられてあつた。

二十

七月の初めに、田舍の人達は上京した。

お初は默つてゐた。

年の暮から正月にかけては、一家は賑やかに暮した。注連飾、お供餅、廻禮の人達、夜はお初が三味線を彈いたり、近所の娘達を誘つて來て歌留多を取つたりした。良太は袴をはいて、紋附の羽織を着て、駿河臺の殿樣のお邸へ年始に行つた。『本所の方へも廻つて來たが、先の殿樣の御病氣は大變におわるいつて、あつちのお邸はひつそりしてゐました。おみきさまにお目通りをして來たが、あの奧さまは、本當に御苦勞ばかりなすつて、お可哀相でした。あの殿樣が太田原から御養子に入らつしやる、丁度あの時分が、藩では朝敵になるか、官軍になるかつて言ふ境で、あの殿樣は、お若いのに、一方ならず御心配なすつたんですからな。そのため、あんな風に氣が違はれたんだから……。御養子に入らしつて、おみきさまが本多家からお輿入になつて、あの新御殿が出來た時分には、それは盛んなもんでしたがな。殿樣も御美男でいらつしやるし、おみきさまもお美しくつていらしつたから、それこそ好い御一對だつて誰もお見上げ申上げたんだが――本當に、御不幸なのは、おみきさまだ。今日もお目通りをして、お氣の毒になつて、涙が出た。』良太は歸つて來てから、かうおかねや實に話した。

『本當だねえ、世が變つたんだから、これも仕方がないけれど――上つ方でも、矢張、人間は思ふままにならないんだね。』おかねも昔を思ふやうにして染々と言つた。

やがて正月は過ぎて行つた。で、その月の末には、お初は支度を整へて、永田町のお邸の方へと奉公

『その代り好きな芝居は見られるでせう？』

『何うですかね……』

『しかし、さうして一年位行つて、行儀見習をして來る方が好う御座んすよ。』

『でも、ね、奉公なんて、イヤなものですよ、氣がつまつて――』

『奥方つきでせう、しかし。』

『え、お孃さんの世話を主にしなくつちやならないんですつて……。旦那さまがきめていらしつたから仕方がないけれど、本當は行きたくないんですよ。』

『まア、皆な、さういふんだから、少しの間、行つて來る方が好う御座んすよ。』かう言つたが、實は言葉をついで『それで、すつかりきまつたんですか。』

お初は點頭いて見せた。

『それで、いつ行くんです？』

『正月になると、ぢき行くんでせう？』

『それでも、時々宿下りは出來るんでせう？』

『それは月に一度位は。』

『まア、さういふ邸に奉公するのは好う御座んすよ。あそこは好い家庭だつて評判なんだから。』

かなさまを見て『これどりはおかねは上手だ。あれでよくあぶなくないもんだね、』などと言つた。姉刀自の姿も其處に見えた。奥では、養女のお光が琴をさらつてゐる氣勢がした。

『實。旦那さまが呼んでゐるよ。』かう言はれて旦那の室に行つて、歴史の話をして歸つて來ると、丁度午で、おかねはつき立ての餅をお櫃に入れて持つて來て『お初、これを雜煮にして、實とお前とお上り。』かう言つて臺所に置いて行つた。お初は赤い襷をして、結立の髪を綺麗に見せて、丁度世話女房でもあるかのやうに、竈の前にしやがんで鍋の火を燃した。

『實さん、お雜煮ばかりで好う御座んすか。お汁粉も拵へませうか。』

『さうねえ。』

『拵へませうねえ、わけはありませんよ。小豆はもう煮てあるんだから。』

こんなことを言つてせつせと働いた。午には二人はお膳を並べて、睦しさうにして、汁粉や雜煮を食つた。

『私、三條さまへ御奉公に上るんなぞイヤなんだけれども……』

『でも、お邸だから、好いぢやありませんか。』

『それはさうですけどもね、父さんも母さんも、さうする方が好いつて言ふから仕方がないけれど……』

ら、大事にしなくつてはいけないよ。夜更しがわるいんだよ。十時になつたら、ちやんと寢るやうにおしよ。』

『え。』

『えぢやない、本當だよ。母さんやお祖父さんは、皆なお前を便りにしてゐるんだからね。』

『大丈夫ですよ。』

實は矢張勉强することをやめなかつた。獨學でも、何でも、兎に角、自分は豪い人間にならなければならない。他の友達のやうに、今の世に流行する英學を學ぶことは出來ないが、その代りに、漢學では、誰にもひけを取らないすぐれた學者にならなければならないとかれは思つた。體が大事だと年寄はよく言ふけれど、それを思つて勉强しないではゐられなかつた。かれは作つた漢文や漢詩を、日曜日には本鄉の先生の許に持つて行つて見せた。

『うむ、これは好い。こゝから先が好い。こゝは圈點だ。』

かう言つて褒められるのが實には何よりも嬉しかつた。

年は聽て暮れて行つた。奥の餅つきの日には、良太もおかねも例年の通り朝早くから手傳ひに行つた。實が行つて見ると、廣い臺所の眞中に、大きな臼を据ゑて、良太の搗く餅のこねどりをおかねがした。竈の下には火があかく燃えて、重ねた蒸籠からは、湯氣が白く颺つてゐた。奥方が出て來て、その賑や

ても、矢張、實はそこに思ひ出した好い詩の句などを書いた。

良太は明日があるのでいつも早く寢たが、おかねとお初とは、茶の間で遲くまで裁縫をした。おかねは内職の足袋の裏を其處に出して『これでもちつとは小遣になるからね。』などと言つた。茶の間で寢る時には、お初は厠へ行つての歸りに、『實さん、まだ起きてるの？　もうおやすみなさいな。』などといつも聲をかけた。やがて茶の間で床を敷く氣勢が實の方へも聞えて來た。『おゝつめたい。寢卷を行火にかけて置かなくつちや堪らない。』こんなことを言ふお初の聲がしたりした。

床に入つてからも、實はランプを枕元に持つて來て、本を讀んだ。何うかすると、體が温つて來て、つい眠氣がさして、ランプを消さずに寢て了ふことなどもあつた。夜中におかねが厠に行つて見ると、ホヤが黑くなつて、灯がちら／＼と半消えかゝつてゐたりした。『實、お前ランプを枕元に置いて本を讀むのはおよしよ。あれで、手でも延して、ひつくりかへして御覽な、それこそ大變ぢやないか。』かうおかねが言つて聞かせても、實は矢張ランプを枕元に持つて行つた。

それに、役所に勤めるやうになつてからの實の體の弱いのをおかねは心配した。實はよく風邪を引いてイヤな咳嗽をせいた。『何うも體の具合が變だ。』などとも言つた。『何うかしたんぢやないか、お前、お醫者さまに見てお貰ひよ。』かう言つた叔母は、死んだおてつの病氣を頭に浮べてゐた。

『お前の體は、本當に大切なんだから、今、病氣にかゝられちや、それこそ修業した効もないんだか

『さうなるかねえ、早いもんだね……。誰がさう言つたの。』

『芝留さん言つてたつけ。お蔭で、まア、息子も家のものになりました。もう大丈夫です。あの時、貴方がさう言つて下すつたんで、捨てた氣になつて、却つて拾ひました。かう言つてよろこんでゐたよ。孫が出來ましたから、もう安心なもんだなんて、にこ〳〵してたよ。男の兒だとさ。』

『まだ、あの子は里にやつてあるのかしら。』

『さうだと……。もう、餘程大きくなつて、可愛くなつたとさ。好い兒だとさ。引取らうつて言ふんだけども、先で手放さなくつて困るんだとさ……』

『いくつになるだらう？』

『もう來年は四つだ。』

『早いものねえ。』

毎朝、實が袴を穿いて、辨當を持つて、『行つて參ります』と、丁寧に挨拶して出かけて行つてから、一時間以上も經つて、役所に通ふ旦那の倖は家の前を通つて行つた。

夜は實は四疊半に入つて、机に向つて遲くまで勉强した。時には、ランプの油がなくなつて、ぢつと鳴つて暗くなつて行つたりした。ランプの笠には、漢詩の韻字だの、文章の熟字だのがところ〴〵に書いてあつた。『お前、笠に字を書くと、暗くなつて仕方がないぢやないか。』かうおかねが言つても言つ

ましたよ。此方にお出でなさいな。』かう言つて、實を長火鉢の方へ伴れて行つた。
實は其處に引越して來てから、一週間ほどして、やがて役所に勤める身となつた。それには書生のなりでも行かれないからと言つて、おかねは銘仙の着物だのけんちうの羽織だのを買つて來て、急いでお初と二人で夜業をしてそれを縫つた。毎日持つて行く辨當箱なども買つて來た。
『實、お前は何が好きだえ？　辨當のお菜をよくきいて置かなけれや――』
『何でも好う御座んすよ、をばさん。』
『でも、ね、何うせ、持つて行くなら、好きなものの方が好いから。』
『何だつて構ひやしませんよ。塾にゐた時のことを考へれや、食物なんか何だつて好いんですよ。』
『でもね……』
こんなことを言つて、おかねは玉子をいつたり、豆を買つて來たり、肴の切身を一片通りへ行つて買つて來たりした。おかねは俄に男の兒を持つたやうな氣がした。
ある夜　良太は言つた、
『さう言へば、定さん、子供が出來たつてな。』
『もう……』
『だつて、もう一年から上になるよ。あの嫁さんが來てから。』

かつた。

お初も家が賑かになつたのを嬉しさうにいそ〳〵してゐた。

『實さん、いつからお役所に行くの？』

などと訊いた。

その夜は、お初は三味線を下して、近頃習つてゐるものを溫習つて見せたりした。芝居の話も出れば、田舍の話も出た。夜が更けるまで一家は睦しさうに話した。

『矢張、死ぬもの貧乏だ。』

かう言つた良太は、實の父親の戰死などを思ひ浮べてゐた。

實の机を置いたところは、長火鉢のある茶の間の向うの四疊半の一間で、そこは、猫の額のやうな狹い庭ではあるけれども、兎に角樹の影の多い庭に向つてゐた。丁度其の向うが厠になつてゐて、瀨戶の手水鉢の置いてある先には、赤い實のついた南天燭が叢をなして茂つてゐた。厠から出て來るお初の島田髷や、すつきりと形の好い襟首や、派手な唐縮緬の襟や、色の白い手首などが實の坐つてゐる机の處から見えた。

實の机の上には、文集だの詩集だの、歷史の本などが一杯置かれてあつた。時には、机の白紙の上に頭を垂れて、長い間詩や文を苦吟してゐることなどもあつた。と、其處へお初がやつて來て、『お茶が淹り

十九

その年の暮近く、實は旦那の世話で、その同じ役所に勤める身になつた。月給は十五圓、今は少ないが、その中には段々上るやうにするからといふことであつた。實は長年世話になつた先生の本鄕の塾から、本箱やら机やら行李やらを俥に載せて、取敢へず良太の家へと移つて來た。本鄕の先生は餞別に唐本の文集などを呉れた。

『ひとりで下宿なんかしたつて仕方がない。それよりも、家にゐて、此處から勤めに通ふやうにする方が好い。』かう良太もおかねも言つた。移轉して來た日には、『まア、まア、それでも無事に勉強して、先きの先生にも餞別まで貰ふやうになるのは、並大抵なことぢやなかつた。まア、今日はお前のお祝だと思つて……』などと言つて、おかねは赤飯を炊いて、神棚に灯を上げて、お膳にはお頭附などをつけた。

足を洗つて、内に上つて來た良太も、いろ〳〵と机の置きどころや、寢道具のしまひ所などを心配して世話して、『まア、これも實さんだから出來たんだ。並大抵でなかつたのは知れきつてゐる。さうときいたら、田舍でも、お祖父さんもお祖母さんもさぞ喜ぶだらう。唯一つ殘念なのはおてつさんのゐないことだ。姉さんがゐたら、さぞ喜ぶだらうに……』などと言つた。神棚の灯の明るいのもおかねには嬉し

手習の招牌をかけて見たが、お家流なぞ習ふやうなものはもうないわな。……さうかと言つて、車も引けないしな。』

かう言つて、何か欲しいものがあるやうにあたりを見廻して、『おかね、お前のところには、煙草がある な。一服御馳走して吳れな、煙草も買つて吸ふ錢がない。』

『さあ、さあ、何うか。』

おかねが出すのを、皆さうにして吸つて、『これも昔のいろだ。』などと言つて、のんきさうに鼻から烟を出して見せた。

そんな處に、何うかして、お初が歸つて來たりすると、『お初坊、こんなに大きくなつたか。見違へるやうだ。好い娘になつた。あとからずん〳〵皆な大きくなつて來るんだから。』

見兼ねて、シャツの古いのなどを、おかねがやると、『これは難有い。何うして、これでも買へやしない。』さういふ言葉を聞くと、昔を知つてるおかねは、同情せずには居られないやうな氣がした。

『良太にも、久しく逢はんが、よろしく言つて吳りやれ。』

かう言つて義顯は出て行つた。

て困る。』
　こんなことを言つて、硯と卷紙とを借りて、すら〳〵とお家流の巧い字で手紙を書いて、それを封じて、お姉さま、義顯よりとして、それをおかねに渡した。
　さういふ時には、奧方は旦那に內所で、いつも三圓、五圓と渡して寄越した。
『何うもな、かうなつちや、人間もおしまひだ。』
　こんなことを言ひながら、義顯は暢氣に笑つて見せた。
『でも、政行さんは――』
『あれは、もう何うしたか、何處に行つたかわからない。死んだかも知れないよ。』
『おかつさまは――』
『あれも、な、親不孝でな。私が行つたつて、親が來たとも思つてやしない。それに、子供にしても、さう度々無心を言はれては困るからな。』
　困つてゐながら、さう困つた風にもおかねには見えなかつた。
『どうも世の中が移り變る。見てゝも、目まぐろしいやうだな。昔のことなんか、丸で夢のやうだ。瓦斯だなんて言ふものが出來て、夜も明るくなつたな。何でも、昔ものは駄目だ。世に後れて了つては、何一つ、仕ようと思つたつて、出來るものがないんだから。まア〳〵字が書けるからと思つて、此間中、

その方に手を出して、贋の繪などを拵へて、辛うじて生活をつゞけてゐた。

それに、奥方の末の弟が、四十五六で、襤褸を下げては、よくやつて來た。昔は江戸家老の坊ちやまで、上下や袴をつけたその姿は何處の貴族かと思はれるほどであつた。お家流の字が上手で、歌が上手で、武藝では弓が藩でも指に折られるほど上手であつた。矢貝樣の義顯さまと言へば、諸家の藩中の娘達は知らないものはない位であつた。それに、今では、不都合なことがあつて、奥でも出入をさし留めてゐるので、姉に逢はうとしても、ぢかに訪ねて行くことは出來なかつた。

かれは昔緣故のある人達といふ人達をさがしては、あはれつぽい手紙を書いて、そして金を無心した。その金ももう大きな額ではなかつた。一圓貸せ、二圓貸せ、自分の下に使つた仲間の家には、五十錢貸せと言つてやつて、それを借り倒したといふので評判であつた。

『義顯にも本當に困る。』

奥方はその話が出ると、いつも穴にでも入りたいやうな顏をして言つた。

その弟が時々おかねの家の裏の木戸をそつと明けて訪ねて來た。

『おかねゐるかえ？』

かう言つて入つて來て、

『氣の毒だけれど、また、一本、手紙を姉の許へ持つて行つて吳れないか。この寒空に着物がなくつ

其頃、奧では人を多勢入れて、麥酒釀造などを始めてゐた。そのために、別に裏に一軒、家を建てゝ、機械や道具を据ゑたりなどした。外國人の技師などがやつて來て、邸の中を步いてゐたりした。その技師は名をカアルスロップと呼ばれた。養女は、『カアルスロップ、カアルスロップ』などと言つて、その跡をついて行つた。姉刀自の肥つた姿も、をり〳〵釀造所のあたりに見えた。

『旦那は本當にあゝいふことをするのが好きだからね。なアに、ビイルなんて言つて、まだ今年出來やしないんだよ。お錢をかけて、寢かして置くやうなもんだよ。來年か、來々年にならなけれや、賣り出すわけになんか行かないんだよ。何でも、旦那はめづらしいことだと云ふと、すぐ乘つて了ふんだから。それで、つい損をするんだよ。お茶の時だつて、葉で賣れば好いものを、大きな構へにして、お終ひには矢張損なんだから、よせば好いのさ。』その話が出ると、おかねはいつもから言つた。

『でも、まア、奧なんか、少し位損をしたつて、お金があるんだから。』

こんなことをも言つた。

奧に訪ねて來る零落した親類達の話をもおかねはよくした。中には、旦那を欺いて、ある人のために、三重抵當の金を借り出してやつたりするものもあつた。旦那の方の親類にも、奧方の方の親類にも、榮えてゐるやうな人は一人もなかつた。田舍で石屋を始めた元の國家老の家の主人は、暫しの間にすつかり損をして、田舍にもゐられなくなつて、東京へ出て來たが、書畫の方にいくらか眼が明いてゐるので、

を聲高く讀んだりした。

夕飯には、おかねは五目飯を作つたり、旨いお汁を拵へたり、通りに行つて肴を買つて來たりして、いつも實を御馳走した。『をばさんの處に來ると、お汁を御馳走になるのが一番樂みだ。塾のは拙いんだもの。丸で鏡汁見たいなやうなもんだもの。』こんなことを實は言つた。

時にはおかねは奧の話などをした。『精一さんには、お嫁さんが出來て、前橋へ行つて、一本立でやつてゐるから、何うしても、あとをつがせる養子をお貰ひにならなけれやならないんだが、行く〳〵は、あの松江のおみかさまの御次男をお貰ひになるやうなおつもりらしいが、お孃さんが、わからずやでね。もう、今年、お前十二だらう。それなのに、學校は落第するし、勉强は嫌ひだし、奧さまが喧しく仰しやつても、ちつともわからないんだから、あれも困るのさ、』などと言つた。叔父、叔母を透して見た奧の家庭の空氣なども、實にはおぼろげながら此頃飲み込めて來てゐた。お光と言ふ養女は、美しい子だが、それが、實がたづねて行くと、『實さん、實さん、裏に行つて遊びませうか。』などと言つた。

實の眼に映つた良太は、いつも變らないをぢさんであつた。いつ行つて見ても、草鞋を穿いて、彼方此方と邸の周圍を直したり何かしてゐた。植木屋と一緒になつて働いてゐたり、大工や左官の世話を細々と燒いてやつたりしてゐた。邸の中で顏を見合せると、『あ、實さん、來たかえ、緩くりしてお出で、』などと言つた。

の體だからね。』

『私も、漢學なぞやらないで、士官學校へでも入れやよかつた。』

『あんなことを言つてる。』

『でも、水澤の政、あれなんかも入つたし、それから小林も入つた！』

『でも、父さんのことがあるから、軍人にしたくないつて、母さんが言つて、それでよしたんだもの。』

さう言はれると、實はいつも默つて了つた。

『まァ、そんなに言はないで、勤めに出たつて、勉強は心がけ次第で、いくらも出來るんだから――。まァ、兎に角一度は早く親達を呼んで安心させるやうにしなけれや。――奥でも、旦那がそんなことを言つてたよ。實も、いつまで勉強してゐたつて仕方がないから、勤める口があつたらつとめたら何うだつて、旦那が勤めてゐる中は、何うにでも出來るやうな話し振りだつたよ。』

『え……。』

實は煮え切らないやうな返事をした。

實は來ると、いつでも奥に行つたり、廣い邸の中を歩いたり、近所にある十二社の瀧の方へ行つたりして一日を暮した。天正時代からあるといふ松の古樹に思ひを寄せて、長い七言古詩をつくつたりした。實には、此頃世の中のことも、生活のことも、東京のことも段々わかつて來てゐた。實は韓退之の文章

『それは仕方がないつて言へば仕方がないさ。』かう言つて、おかねは言葉をとゞめて、『姉さんを生かして置きたかつた！』

實は默つてゐた。

『田舍から便があるかえ。』

『此間ありました。眞弓が大きくなつて、漢詩なんか作るんですつて、東京に早く出たい、出たいと言つてゐるんですつて。』

『お祖父さん、お祖母さんも丈夫？』

『別に、變りはないやうです。』

『早く東京に呼ぶやうにしなくつちやね、お前。』

『え。』

何うかすると、實は此まゝ勉强を止して了はないで、大學へでも入りたいやうな語氣を見せた。

『何うも漢學ばかりでは、今の世の中は駄目ですよ。何處へでも、英語が要るんですからね。英語でなくつちや、役に立たないんですよ。』

『だつて、お前、さういつまでも勉强してゐられやしないよ。それやね、あり餘つて、學資がつゞけられて、家がしつかりしてゐれば、勉强するに越したことはないけれど、さうも言つてゐられないお前

『え。』
『でも、お前など行つても、よくして呉れるかえ。今度の家へは、まだ行つて見ないけれど、深川だつて言ふぢやないかえ。何處だえ、殿様のお下邸のある近所かえ？』
『高橋のぢき近所です。』
『それでも、石川さんは段々立身して行つて好い鹽梅だね。署長さんだつてね。』
『え。』
『ぢや、官舍だね。』
『え……』
『新しい嫂さんの親類の書生さんが來るつてね。』
『嫂さんの甥でせう。醫者を勉強してゐる人です。』
『さうかえ？』かう言つたが、『お幸だけは惜しいことをしたね。もう少し田舍で預つてゐれば好かつた。それやね、嫂さんがわるいんぢやないんだらうけども……、もう少し早く氣がついて、醫師にでもかければねえ。死んだおてつの記念のやうな子だつたし、田舍でも、骨を折つて、あれまで大きくしたんだからね。』
『仕方がありませんよ。』

お初はお茶を淹れて、けんどんの中をさがして、近所で買つた菓子などを出した。お初は眼の細い、色の白い、やさしい、素直な娘であつた。芝居が好きで、近所の上さんと一緒によく猿若町へなど行つた。

『今度の狂言は、何う？　知りませんか。』

『よく知らないけど、此間、新聞にかいてあつた。今度は、餘り面白くないやうです。』

『さう？　木挽町は？』

『木挽町も好いけど……、新富の方が今度は好いんでせう？』

『さう。』

かう言つたが、實の顏を見て、『今度、又奧さまと一緒に伴れて行つて戴かう。』

其處へ、裏の木戸の開く音がして、おかねは歸つて來た。

『實が來てるのかえ？』

『今、來たばかりですよ。』

おかねは上つて來て、

『牛込ぢや變りやないかえ。』

『此の前の日曜に行つたぎりだけども……』

『新しい嫂さんに、子供がないつて好い鹽梅だね。』

の下から白い美しい肌やら襟やらをのぞかせながら、獨り靜かに三味線を彈いたりなどした。其處に、表の格子が音高く明いて、實が不意にやつて來たりした。

『誰？　實さん。誰かと思つた……』こんなことを言ひながら、お初は猶三味線を彈きつゞけた。

『叔母さんは？』

『奥。』

『さつき行つたの。』

『もう、歸つて來る時分ですよ。』

平氣で一段續けて彈いてから、お初は三味線を袋に入れて、柱にかけて、それから、火鉢の傍に來て、鐵瓶の下の火をあらけた。

『今日は、休み？』

『休みぢやないけども、麻布まで代稽古に來たから。』

『麻布から廻つたの？　遠いでせう。』

『なァに……』

『本郷から來るより、それでも近いかしら？』

『同じ位ですよ。』

その頃はやり出した神道で葬儀を行つたので、おてつは久志岐命といふ諡號を得た。桃の花の咲く時分には、田舍の神棚にも、良太の神棚にも、その諡號を書いた紙が張られて、赤飯などが供へられた。お幾からおかねに寄した手紙には、泣いても泣いても盡きない涙が字句の間に薄くにじみ出してゐた。

十八

一年二年はまた經つて行つた。その時分には前の通りに面して、長屋が何軒も出來たので、『良太、お前も長屋に入つたら何うだ。』かう旦那や奥方から言はれて、良太は、その門前の左の角のところにある一軒に移つて住んだ。三疊に六疊に四疊半、狹い小さい家だけれど、それでも奥の二階に住んでゐるよりも、自分の家ときまつただけに居心地が好かつた。良太はいつも其處から朝早く草鞋がけで出かけて行つた。おかねも奥から呼びに來ると、何をやめても出かけて行つた。

お初はもう十七になつて、學校も去年で卒業して、其頃は近所の裁縫の師匠の許に通つて行つてゐた。常磐津の娘に糸口をあけて貰つた三味線も、根が好きなので、その後もやめずに近所に通つて、此頃では乘合位は立派に彈けるやうになつてゐた。長火鉢の置いてある六疊の一間の長押には、其時分の參議連の肖像の銅版畫が麗々しく額緣に入れられてかけてあつて、その傍の柱に、鬱金の袋に包んだ三味線が下げてあつた。何うかすると、お初は、結ひ立の島田髷の鬢をふつくらと見せて、唐縮緬の派手な襟

病人の危篤を報じた。

良太は取るものも取敢へず出懸けた。つゞいておかねも行つた。

しかし、おかねが行つた時には、病人はもう死屍となつて床の上に横つてゐた。良太が行つた時には、それでもまだ眼を明いて、良太の顔を見て、何か言ひたいやうに口を動かしてゐたが、それから呼吸を引取るのにもう間はなかつた。死人の周圍には、石川だの實だの老いた舅だの小姑だのが皆な集つてゐた。石川に抱かれた男の兒は、一度寢たのを起されて、大きな眼を明いて、不思議さうにして、大勢集つた人々の顔を見てゐた。總領の娘は、實の側に坐つて、『母さん、何うしたの? 死んぢやつたの?』などと言つて訊いた。

病人は最後まで確かりしてゐた。一番先に舅に禮を言ひ、次に石川に子供のことを賴み、實にやさしい悲しい訓戒を與へた。小姑に向つては、『おせつさん、それでは、丈夫でいらつしやい、』などと言つた。『本當に、しつかりしてました。』かう言つた石川の眼には、涙が見えた。石川はその夜遲くまでかゝつて、田舍の母親におてつの死去を報ずる長い長い手紙を書いた。

野邊送りの日は、晴れた好い日であつた。石川の同僚や友人が多いので、會葬者は家の內外に溢れた。生花、銘旗、晒布にまかれた大きな墓標には、石川――妻てつ子、享年二十五歲と記された。幼ない男の兒が實と一緒に俥に乘つて、香爐を持つてついて行つたさまは、道行く人の眼を惹いた。

此頃では左の肺も右の肺もすつかりわるくなつた。血なども澤山出た。おかねが見舞に行つた時には、咳嗽が留度もなく出て、痰壺に口を當てながら、顏を眞赤にしてゐた。話なども碌々出來なかつた。年の若い實は始末に困つて、まご〳〵してゐるのをおかねは見た。

歸る時、おかねは廊下まで送つて出た實の傍に行つて、

『けどもね、お前。お前も用心しなくつてはいけないよ。お前でもまた、病氣でも受けるやうになると、それこそ大變だから。』

『大丈夫ですよ、叔母さん。』

『それは、大丈夫だらうけどもね、あんなに痰が出るんだから。用心しないといけないよ。いゝかえ？　本當だよ。』

『え。』

實は輕く點頭いて見せた。

病院で死ぬのは何うしても厭だと言ふので、動かしてもよくないといふ病人を吊臺に乘せて、牛込の家に伴れて戾つたのは、二月の初め頃であつた。山の手では、二三日前に降つた雪がまだ樹蔭の處々に殘つて、寒い〳〵風が裏の大樹の梢を鳴らした。その夜は節分で、豆を入れた大桝を三寶の上に載せて、例年の通り、奧の一間每に、福は內、鬼は外と良太がやつてゐる時、突然、牛込から使がやつて來て、

『役所が遲くなつたつて、夕方來た。それから、俺は代つて歸つて來たけれど。』

『おてつは何うしたえ？』

『矢張、氣難しくなつて、實が困つてゐたよ。石川さんが、今日から病院に入つたんだから、何も氣にすることはない。唯、病氣さへ治して吳れれや好いんだからつて言ふと、病院なんかイヤだつて言ふのに、無理につれて來るんだから、何うせ、私なんか、質のわるい病氣なんだから……なんておてつは石川さんを困らせてゐたよ。矢張、病氣だ。焦々してゐるんだらう。』

『石川さんだつて、手もないにはないが、病氣が病氣だからうつつたり何かして困ると思つたんだらうね。』

『さうばかりでもなからうよ。實際、あゝ重くなつちや、家ではとても病院にゐるやうに十分な世話は出來ないからな。』

『何うかして治らないもんかね。あれで死なれては、子供も可哀相だ。』

おかねはかう言つて、深く物を考へるやうな顏をした。

病人は病院生活に次第に飽きて、やれ子供が見たいの、やれ實の來やうが遲いの、石川は何うしたのと喧しく言つて仕方がないといふ話などもやがて聞えて來た。死んでも好いから田舍の母親の許に二三日やつて下さいなどと言つて、立居も自由に出來ない身をもがいて、石川を困らせたことなどもあつた。

その病室は丁度二階の南の一隅で、ガラス窓を明けると、下に賑かな通りが見下ろされた。一間借りの一等室で、白い寢臺の傍の小さな卓の上には、赤い白い西洋の草花などが置かれてあつた。午後からは、夕日がまともに室の中にさし込んで來た。

『實、そこの日蔽ひを引張つてお呉れな。あまり明るすぎる。』

こんなことをおてつは言つた。髮の長い實と、四十二三になる良太とが其處に侍してゐると、其頃はまだめづらしかつた看護婦が、白い着物を裾長に着て、病人の傍に來て、種々と世話をして行つた。良太の眼には、時の間に外國化して行つた世の中の風俗が不思議に思はれた。何も彼も變つて行く。家の構造から日常の言葉まで。もう何處にも髷を結つたり上下を着けたりした人は見たくも見られなかつた。何から何まで西洋一點張で、日本の女で外國人の眞似をして、裾長い洋服を着て町の通りを歩いて行くものなどもあつた。通りには、二階三階の高い煉瓦造の色硝子の窓の日に照る家屋なども出來た。

良太は病院から歸つて來ておかねに言つた。『大したもんだな。成ほどあれぢや一日二兩の三兩のつてかゝるのも無理はない。何から何までちやんと揃つてゐて、白い服を着た看護婦が皆な世話をして行くんだから。丁度院長が來て診察して行つたが、大變な弟子達だよ。五人も六人も一緒にやつて來て一々診て行くんだから。』

『石川さん、來てたかえ？』

『でも、それでも、さうして、自分で、ちやんと路を拵へて行くから感心ですね。今に、よくなりますよ。さういふ子に限つて、屹度出世しますよ。』

『何んなもんだか。』

おかねは笑つて、『仕方がないから、内ぢや年頃になつたら、お初に養子でも取るんでさ。銓造なんか、もう當てにはしてゐないんですよ。』

こんな話が長く續いた。で、あくる日はお幾はまた牛込へ行つたが、二三日經つて、名殘は惜しいけれど、さういつまでも滯在してゐる譯には行かないので、生れた赤兒をつれて、お幾は娘に別れて、田舍の方へと歸つて行つた。

おてつの病氣は、寒くなるにつれて、段々わるくなつて行つてゐた。もうどつと寢てゐるやうなことが多かつた。良太もおかねも、その間に、一二度見舞に行つて見たが、到底助かる見込のないのは、誰の眼にもそれと知れた。賓は行く度に、『お前はしつかりしてお吳れよ。お前がしつかりして吳れないと、家はさゝふさだよ。私なんか、いつ死んだつて、女だから、構はないけれど、お前は男だし、家の心棒になる人だから、うはの空でゐて吳れては困るよ、覺えてゐてお吳れ。』かう言つては戒められた。病氣が重く、内では看護の手が足りないので、その年の暮に、和泉橋の大學附屬病院につれられて行つた時には、良太は賴まれて、賓と一緖に、病院まで送つて行つた。

きな立派な長火鉢なども買はれてあつた。娘のお勝が東京から歸つて來た時、『新町のをぢさんやをばさんは、銀行の株券を澤山持つてるつて言ふ話ですよ、』などと言つたことが思ひ出された。お幾は、一夜とまつて、田舍の士族の益々零落して行く話などを盡きずに良太夫婦にした。

話の中には、實の話だの、眞弓が世話になつた話だのが出た。『それでも、田舍に置いたら、此頃は、大分よくなりましたよ。勉强もしますし、成績もまァ好い方です。あの時、東京から歸つて來た時には、まァこのすれつからし、一年の中に、かうも人間がわるくなるかと思つて喫驚しましたよ。あの時は、本當にあきれちやつた……。實や私に喰つてかゝるんですからね。東京といふところは、怖いところだと思ひましたね。』

『矢張、はたがはただから……何うしても染まるんですよ子供は……。子供を育てるには、矢張田舍の方が好い。』

詮造の話が出た時には、『あれも困りもんさ。何うせ碌なものにはなれないと言ふんだけども……をぢさんはまた構ひつけないんですからね。何でも放つて置け、放つて置けつて言ふんですからね。もう構ひつけないんですよ。さァ、何處を何うしてますかね。何でも、御所の別當をよして、それから、船に乘るんだとか何とか言つて、今ぢや、其方の方へ行つてるんでせうよ。利根川の通運丸にでも乘つてやしませんか。』

な氣がしますよ。あの子位小さい時から苦勞して、私を思つて呉れたものはないのだからね、おかねさん。それや、ね、石川も心配して呉れて、高いお醫者にもかけて呉れたり、看病には何不足もないけれど、それでも、十日でも好いから、出來るなら田舍に伴れて行つて、ゆつくり保養させたいと思ふよ。何と言つたつて、病氣の時には、肉身でなくちや、ねえ、おかねさん。』

かうお幾はおかねに話した。

『でも、まァ、田舍ではかゝりたくつてもかゝれないやうな醫者に見て貰つてゐるんだから、……二日おき位には、診察料を五圓とか取られるんださうですよ。』

『それは、ねえ、もう、石川はよくして呉れるのはわかつてゐるけど。』

かう言つてお幾は涙の眼を拭つた。

『でも、まァ、折角、來たんだから、實にでも一日案内させて、東京を見てお出でなさいよ、嫂さん。東京もあの時分とは、餘程變つたから。』

慰めるつもりで、かうおかねが言つても、お幾は、『見物どころぢやない。』かう言つて、一日でも多く牛込の病人の側にゐようとした。

お幾は自分等の田舍の貧しい居食の生活に引くらべて、良太夫婦の生活の次第に餘裕が出て來てゐるのを見た。姪のお初なども見違へるほど大きくなつて、不斷着る着物なども綺麗なものを着てゐた。大

實がかう言ふと、

『さうだねえ、心配するからつて、知らせずにも置けないねえ。仕方がないから、言つてやるんだね。』

おかねの顏には、心痛の色が歷々と見えてゐた。

日本橋にある藥を取寄せて、それを最中の餡の中に入れて、實が持つて行つてこつそり飮ませたりした。『何だか、變な顏をしてゐましたけども、別に氣も付かないやうでした。』その次ぎ來た時、實はかう叔母に話した。

發病したのは、その前の年の秋あたりからであつたが、その年の秋近い頃には、その容體はもうかなりに重くなつてゐた。おてつは、その時三番目の子を懷姙してゐたが、生れ月の九月に生れた可愛い女の兒を、かれはもう哺育することが出來なかつた。病氣は日増にわるくなつて行つた。叔父や叔母や故郷の母や、さういふ人達の神詣りも祈禱も何の効もなかつた。實は此頃では蒼白い顏を薄暗い六疊の室氣にくつきりと際立たせて、さびしさうにして寢てゐる姉の姿を日曜日ごとに見た。

女の兒を預る爲めに、一つは娘の病氣を見舞ふために、田舍からお幾が上京したのは、秋ももう末近い頃であつた。お幾は七年振りで、おてつやおかねに逢つた。『私はおてつの顏を見ると、涙が出て、碌に話も出來ないんだもの。舅も小姑もゐるんだからと思つて、こらえてゐるんだけれど、顏を見ると悲しくなつて……。本當に、何うしてあんな病氣に取附かれたのか。それを考へると神樣も佛樣もないやう

とや、一家のことや、一家に對する自分の責任などがもうそろ〳〵わかりかけて來てゐた。矢張、袴を短く、大きなステッキをふり振りして、天氣の日に高い足駄などを穿いてゐるけれども、學問は日に立つほど進歩して、漢文でも漢詩でも出來て、今では塾頭になつて、先生の代理に彼方此方に出かけて行くことが出來るやうになつてゐた。旦那なども、『實は出來る。此間作つた漢文を見たが、立派なもんだ、』などと言つて褒めた。

診察料が十圓、その高いのに誰も驚く伊東博士の診斷も、おてつの病症に、はつきりした斷案を下したに過ぎなかつた。『何うしても、肺病なんですつて。もう、かなりわるくなつてゐると言ふ話でした。大丈夫だよ、心配しないでも、石に噛りついても、まだ十年や十五年は生きてゐて見せるなんて姉さんは言つてゐたけれど、矢張淋しさうな顔をしてゐました。』かう實は叔父叔母に話した。

『まア、おてつが、それは困つたね。何うしてそんなわるい病氣になつたかね。』かう奥方もお姉さまも言つた。『あの病氣は、産後、何うかすると出るつて言ふから、矢張、いろ〳〵心配したと見えるね。』

『そんな血統なんか、何處にもありやしないんですのに、何うしたことですか。』良太はかう考へるやうにして言つた。

『姉さんは、國へは言はずに置けつて言ふんですけれども……何うしたら好いでせう。心配はするにはするでせうけれど、さうかつて、知らせずには置けないんだから。』

目が覺めたんだらうよ。あれから二年になるもの。』

『そしてあの子は、何うするんだね？』

『子供は引取るんだらう。女の兒は女につくんだつて言ふけれど、あの母子に押つけては可哀相だ。それは芝留さんだつて、わからない人ぢやないから、その位のことはするだらう。』

『定さんは、矢張田舍に行つてるのかしら？』

『さうだらう？　この春あたりでも、よく逢ひに行つて困つたつて言ふから。』

『ぢや、子供は矢張、あそこに里にやつてあるのかしら？』

『さうだらう。……』

『あの娘は？』

『矢張、吉原でおいらんをしてゐるんだらう。大變賣れるんだつて？　お職を張り通してゐるつていふ話だよ。だから、あのお袋も、今ぢや樂なんだらう。何でも下谷近所にゐるつていふ話だよ。』

『難かしい話でも、何でも、時が經ては何うやら斯うやらきまつて行くもんだな。』

良太はこんなことを言つて笑つた。

その次ぎの次ぎの日曜日にやつて來た時には、實は詳しく伊東博士の診察したおてつの病狀を良太やおかねに話した。二三年經つ中に、實は見違へるほど大人になつてゐた。丁度二十一歲で、世の中のこ

らないで下さいつて言つてゐたつけ。本當に、苦勞性だからね、あの子は――』
『勞症には、何かよい藥があるつて言つたね、日本橋か何處かに――』
『あ、それはお姉さまがお存じだ。姪の山田さんに、あれをそつと飮ませたら、大變に効目があつたと言つていらつしやつた……。しかしあの藥は當人に知らせないやうにして飮ませるんだつて……』
『何うしてだえ？』
『何でも、そんなことを言つてゐましたよ。今度實が來たら、一つ買はせて、内所で飮ませて見なくつちや――。今、死なしちや、本當に可哀相だ。苦勞をしに生れて來たやうなもんだから。せめては、實でも、一人前になつて、田舍の人達を呼ぶ時分まで生かして置かなければや。』
『さうだとも……』
『思ふやうにはならないもんだねえ。折角、好いところへ行つて、運が向いて來たと思へば、病氣になんかかゝつて。』
『本當だ。』
『さう言へば、定さんも、いよ〳〵家に歸るつて言ふぢやないか。』
『さうだつてな、俺の言つた通りだ。何うせ、長いことはない。一二年だつて、だから、俺は言つたんだ。この前、芝留さんに逢つたら、良太さんの言つた通りだつて言つて喜んでゐた。定さんも、もう

『どつと寢てゐるんぢやないだらう？　一體、何んな風なんだえ？　醫師にかゝつてゐるのかえ？』

忙しい中を、半日の暇を貰つて、おかねが見舞に行つて歸つて來た時には、心配の色がありありとその顏に見えてゐた。『困つたもんだねえ、何うも勞症らしいつて言ふんだよ。別に變つたことはない。矢張、起きて立働いてはゐるんだがね。いくらか瘦せたよ。』

『醫師は？』

『近所にゐる醫師にかゝつてゐるんださうだけれど、何うも本當のことがわからないらしいから、この次の日曜に、一緒に伊東さんへ見て貰ひに伴れて行くつて石川さんが言つてたよ。あ、丁度、私が行つてゐると、早退けか何かで歸つて來てね。石川さんも心配してるよ。それに、おてつはまァ、よせば好いのに、あの氣性なもんだから、舅の世話をしたり、小姑の面倒を見てやつたりしてゐるんだもの。病人だから、靜かに落着いて寢てゐれば好いのに、それも出來ないんだよ、あの子には――』

『困つたもんだな。』

良太はかう言つて嗟嘆した。やがて、

『それで血でも出るのかえ？』

『少し出るやうなことを言つてたよ。たんとぢやないけども、昨日も出たなんて言つてゐたつけ……。それにね、そんなことを田舍に言つてやると、何んなに心配するかわからないから、餘り言つてや

ぐる巻の髪と蠟のやうに白い襟首とを此方に見せて、靜かにすや〳〵と眠つて行つた。三分の釣ランプが薄暗くあたりを照した。

あくる朝、早く目覺めたお初は、『生れたの？　女？　うれしい。』かう言つて、何をもさし措いて、逸早く師匠の家へと走つて行つた。そして、挨拶もせずに、いきなり產婦の枕元へと上つて行つた。

お初は娘の傍に色の白い髮の毛の濃い可愛い赤兒の靜かに寢かされてゐるのを見た。『お初ちやん、來たの？　よく見て下さい。』かう言つて娘は莞爾笑つて見せた。

『負はせて下さいね。ね、ね、大きくなつたらね。』お初は妹でも出來たやうに喜んだ。

十七

おてつが二番目の男の兒を生んでから、體が際立つてわるくなつてゐるといふことを良太もおかねも耳にした。『何うしたんだらうね。餘り氣苦勞をしたからだよ。お勝のことで心配したり、眞弓のことで心配したりしたからだよ。おてつは、本當に大抵ぢやない。舅のことから、家のことから兄弟のことまで一人で心配しなけれやならないんだから。』

實が日曜にやつて來ると、『何うしたえ？　牛込へ寄つて來たかえ？』

かういつもおかねは訊いた。

て懸つた。娘は隅の方で小さくなつて歔欷げてゐた。

いよ〳〵産氣が萠して、もう生れるのもほどがないといふ夜には、おかねはかねて頼んで置いた産婆よりも早く出かけて行つて、何彼と世話をした。二間しかない狹い家では、別に産をするところをきめておくことなどは出來なかつた。定は良太の家から、二枚折の古い屛風を借りて來て、それを産婦の枕元に立て廻した。

定は蒼白い娘の顏ををり〳〵心配さうに覗きに行つた。

しかし、産は思つたほど重くはなかつた。婆さんがやつて來て、定とおかねとが湯をわかしたり何かしてゐる中に、生れた赤兒は、さゝやかな泣聲を立てた。

『男かえ？』

かう一番先に母親が訊いた。

『お孃ちやん。』

『女かえ？』『女ぢやつまらない』といふ顏を母親はした。男でもあれば、それを緣に、また何んな運が向いて來ないとも限らないのにといふ腹が母親にはあつた。

『好い子だよ、色が白い。母さん似だ。』其處に行つて見たおかねは、かう言つて、臺所に立つてゐる定の方を見た。定は嬉しさうな顏をしてやがて此方へやつて來た。後産が下りて了つた後は産婦はぐる

『少しは考へてゐるだらうけど……。この間も、そんな話をしたから、親達を恨んではいけない。親は心配してゐるんだからつてよく言つてきかせて置いた。そこは、定さんだつてわかつてゐるよ。私が一番わるいんですからつて言つてゐたよ。』

『何うも、しやうがないね。』

『お互に運がわるいんだと思つて、あきらめるより他に仕方がない。その中、何うにかなるよ。』

『もう、ぢきですね、生れるのは――』

『來月かえ?』

『さうらしいよ。』

仲がよくつても、時には息子と娘と母親と三人して言ひ合ひをして、互に高い聲を立てゝゐることなどもあつた。ある日、それを止めに、良太が入つて行つた時には、息子の定も娘も涙を流してゐた。『をぢさんきいて下さい。私だつて、これほど思つて働いてゐるんですから、さう言はれては立つ瀨がありませんから。』かう言つて定は涙を平手で拭いた。母親は母親で『何もこんなところにまご〱してゐなくつたつて好いんだよ。お前さへしつかりしてゐて呉れゝば、初めから、こんなことにやなりやしないんだよ。馬鹿々々しい。お女郎にでも何でもなつて、母さん一人位立てすごすのがお前の役目だよ。こんなところにいつまでぐづ〱してたつてしやうがありやしない。』かう言つて、傍で泣いてゐる娘に喰つ

はあつたが、さうかと言つて、折角の彼方の好意を無にするにも忍びなかつた。それに、お初は、三味線が好きで、學校から歸つて來ると、道具を其處へ投り出して置いて、いつも一番先に娘の許へ驅け出して行つた。

良太にしても、師匠親子の生活に入つて行つて見ると、唯わるだくみがあつて、芝留の息子を誘拐したとばかりは思はれなかつた。そこには矢張それだけの理由があり、道筋があつた。それに、息子の定が、女の爲めに、またはまだ生れない子のために、何不足のない家に育ちながら、貧乏人のやうに、せつせと働いてゐるのも同情された。

『おとなしい娘には、娘だけども……』

かうおかねが言ふと、

『それはさうだけども……芝留さんになつても、ちよつと、あれを内に入れるには、困るんだよ。もつと開けてゐると好いんだけども、中々あれで頑固だからな。』

『定さんだつて可哀相だ。』

『でも、まア、仕方がないよ。まア、好きな暮しをしてゐるやうなもんだから。兎に角、娘が身二つにならなけれや仕方がない。』

『定さんだつて、今ぢや、考へてゐるだらうね。』

『本當に、先方のわからずやにも呆れて了ひますよ。息子がかうやつて、苦勞して、働いてゐても、ちつとも可哀相とも何とも思つて呉れないんですから……。何ぞと言ふと、金を取られるとばかり思つてゐるんですから。ねえ、お上さん、出來たものは仕方がないぢやありませんか。ぐづぐづ言つたつて、取かへしがつくもんぢやないぢやありませんか。向うの息子も大事なら、こつちの娘だつて大事なのは同じことですよ。何も、すきこのんで、私が何う斯うさせたと言ふ譯ぢやなし――』聞いてゐれば、容易に盡きない、流るゝやうな辯で、母親はいつもおかねに話しかけた。

『矢張、お侍さんでなくつちや駄目だ、土百姓は何時まで經つても土百姓だ。』こんなことを母親は言つた。

良太夫婦は、何ぞと言つては、不足勝なものを其處へ持つて行つてやつた。五目鮨など出來ると、重箱に詰めて、それをお初に持つて行かせたりした。後には、お初も段々その母親と娘とに親しくなつて、『お初ちやん、三味線を敎へて上げませうね。』かう言つて、娘は長押から三味線を取つて、鬱金の袋を外して、鬢、髱をつめて赤い片などを頭にかけたお初を其處に坐らせて、常磐津の初めの方を敎へた。

『お初ちやん、本當に糸の筋道が好い。少し習ふと、ぢき上手になりますよ。』かう娘はおかねに言つた。

おかねにしては、三味線なんか敎はつたつて仕方がない。碌なことを覺えやしない。かうも思ふので

『でも、野郎、困つてるにや困つてゐる。野郎が食はせなければ、今ぢや稼ぎ手つてねえんだもの。ぺこ〳〵彈きに來る奴も、もうゐやしねえからな。』

良太は言つた。『まア、心配しないでお出でなさいよ。蔭ながら、私が見てやるから……。お前さんが出ちや面倒だが、私なら、差支ないから……。心配しないで、見てお出でなさいよ。一二三年すりや、何うせ元の巣へ歸つて行くから。』

『難有う、……何分よろしく。』かう言つて芝留はいろ〳〵と息子のことを良太に賴んだ。

それから良太は陰になり日向になりして、息子の定の面倒を見てやるやうにした。それから一月經つた頃には、良太の姿はをり〳〵常磐津の師匠の家の中に見えた。良太は邸にある仕事を息子に宛がつて、僅かながらも、その日〳〵の賃金を得させるやうにした。

息子の定の姿は、土方人足の中に交つて鋤、鍬を手にしてゐたり、良太と一緒に垣根に靑竹を當てゝゐたり、邸の裏のところで、大きな樹の枝を薪に割つて、それを小さくいくつにも束ねたりしてゐた。夜は定は狹い臺所で遲くまで繩をなつた。

おかねが行つて見ると、息子が働いてゐる傍に母親も娘も出て來て、種々と禮を述べた。『本當の親さへふり向いても見て吳れないのに、靑山さんには本當にお世話になつて、この御恩は一生忘れることでは御座いません、』など母親は言つた。『奥のおかみさん、奥のをばさん、』と言つて娘はおかねを慕つた。

『お前、見たかえ?』
『成ほど、おなかが大きいよ。五月か六月だよ。』
『でも、本當に、定公の胤とわかつてゐるのかしら?』
『それは、何うだか……この間中、大勢若い衆が來てたからね。』かう言つておかねは笑つて、『それに、あそこでも困るつていふ話だよ。あの娘がさうときまつてから、三味線を習ひに行くものはなくなつたつて言ふからね。』
『それは、さうだらうな。』
それまでは別に氣に留めてもゐなかつたから、逢つても知らずに行過ぎたが、ある日、良太は其處から出て通りの方へ歩いて行く小柄の色の白い娘を見た。銘仙の派手な着物を着て、髪を島田に結つて、赤い鹿の子の布などをかけてゐた。『はゝア、あの娘だな。』かう思つて良太はその後姿を見送つた。
一月ほどしてから、水車場で、良太はまた芝留に逢つた。
『何うも、仕方がねえ、良太さんの言ふ通りにしやした。』
『家に寄りつかねいかね?』
『もう仕方がねえ。勘當した氣で、長い目で見てゐやすよ。』
『まア、さうするより他には――』

へしがつかないから……。まア、貴方の家では、嫁に貰ふことも出來ない。養子にやることも出來ない。さう言つてきめておいて、成行を見るより他に仕方がありませんな。餘り若い者を困らせるのも可哀相だが、ちつとは苦勞させるのも藥になりますよ。金のことなんか、餘り此方から持ち出さぬ方が好い。何うしても、離れないと言ふなら、一二年、捨てた氣で見てお出でなさいよ。さうして見た上で、好い嫁なら、何も常磐津の師匠の娘でも何でも構はないぢやありませんか、家に入れたつて……』

『何うもな、それがな。』

『出來なけれや、それも仕方がないが……』かう言つて、良太は考へて、『まア、成行を見るより他仕方がありませんな。』

『ぢや、まアさうしますかな。』かう言つて、芝留は其日は悄氣て歸つて行つた。

良太は其後種々なことを耳にした。中に入つた男が芝留の家に上り込んで、金を握らずには何うしても動かなかつたといふことやら、息子の定が父親に追かけられて、新町通りを逃げて歩いたことやら、常磐津の師匠が彼方此方に行つて芝留のわる口を言ふことやら、さういふことは絕えず彼方此方から噂になつて聞えて來た。時には息子の定が常磐津の師匠の家に來てゐるのを良太は見懸けたりなどした。

『好い娘つ子だ。』

おかねはある日こんなことを言つた。

てゐた。銈造などを子分にして、わるい悪戯を教へて困つた。それがもう女を拵へるとは……良太は不思議なやうな氣がした。

『何うも、出來たものは仕方がない。金でも少しつかませるより他に、仕方がないでせうな。』

『ところが、向うも中々かしこく出て來てゐる。こんな身分ですけども、金を目當にしてゐるのではない。そちらで貰つて下さらなければ、此方で養子に戴いても好いつて言ふんですがね。困りましたのさ。』

『定さんは何ういふんです。』

『定の野郎は、もうしやうがないんです! すつかり氣が其方に行つてるんだから、少し難かしいことを言ふと、すぐ向うに行つて了ふんだからね。旨く騙されちやつたですな。』

『若い者はそれだから困るね。』

『本當ですよ。』

芝留はかう言つて腕組をして考へたが、『何うしたもんでせうな、良太さん。』

『さア。』

良太は返事に困つた。暫くしてから、『まア、そのまゝそつとして置きなさいよ。餘り喧しく言つたつて仕方がない。若い者同士のことだから、餘り喧しく言つてひよんなことでも出來ると、それこそ取か

やいて、娘が村の若者と一緒に三味線を彈いてゐる姿がはつきりと映つて見えてゐた。

『それは困つた。』

『今日向うから人が來てな、あの娘が懷妊してゐるが、それは定の子だつて言ふんだ。何だかわかりやしねえけれど、まア、さう言ふんだ。それから、定にきいて見ると、さうだつて言ふぢやありませんか。それも、そればかりならまだ好いけども、何うしても女房にする。貰つて吳れつて言ふんですがな。困りきりましたのさ。』

『それは困つたな。』

『若い者には本當に困る。相應なものならな、何うせ一人貰はなけれやならないんだから、貰つてやつても好いけれども、親も素性もわからないものゝ娘を、わしが家に入れるわけには行きませんしな。それに、さういふものを入れては、行末のためにもなりませんからな。』

『さうですとも……』

かう言つたが、『それにしても定さんは幾つになります？』

『二十三です。』

『もう、さうなりますかね。』

良太の身にしては、來た時は、まだ十二か十三で、汚い筒袖などを着て、上水端に來てよく凧をあげ

ある日、向う村の芝留がやつて來て言つた。

『何うしましたね。』

『いや、もう困つちやつた。』

『何うして？』

『何うしても、何にも……。息子が飛んでもないものに引懸つて……』

『定さんが？』

『え、此間から變だ、變だと思つてゐたが、たうとう引懸けられちやつた。お袋がわるだから困る。』

さう言へば、此間から定といふ芝留の總領息子が、常磐津を習ふのだとか何とか言つて、近頃其處に引越して來た常磐津の師匠の許に足繁く出入してゐた。それは四十五六のお袋に二十位の娘二人きりで、お袋も娘も一緒に三味線を近所の子供達に敎へてゐた。『はゝア、こんなところに三味線の師匠が引越して來たな。』『始めは良太は唯かう思つて通りすぎたが、一月と經たない中に、この近所の若者が澤山に其處に集つて來て、毎晩おそくまで三味線を彈いたり唄をうたつたりしてゐるのを良太は見た。つい此間も、おかねにその話をすると、『段々ひらけて、碌なものが入つて來ない。あのお袋は、もと深川で藝者をしたんだとさ。あの娘も、何でも、その藝者をしてゐた時に出來た子だとか何とか言つてたよ。どうせ、碌なもんぢやない、』とおかねは言つてゐた。ある夜には、暗い通りに、其處の障子だけ明るくかゞ

ゐたりした。お光一人きりの時には、『お孃さん、此方へ入らつしやい、好いものをあげる、』などと言つて、茶師は揉んだ茶の塊を投げるやうにして見せた。

茶師の仲間などには、放浪の生活を送つて來たやうなものも多かつた。かれ等は終日勞働して、夜になると、いつも鼻唄をうたひながら、手拭を肩にかけて、新宿の方へと出かけて行つた。中でも、上手な、仕上げをするやうな職人は、怠けたり苦情を持出したりした。新宿に行つては、よく流連をして、馬をつれて來て良太を困らせた。

それに、茶師はよく女中などと通じた。ある女中は、來るとすぐ、仕上げの職人と出來て出奔した。

『何うも風儀がわるくつて困るな。』

かう旦那も考へるやうにして言つたが、最初の年の結果が、芽で賣るよりも數倍利潤があつたので、あくる年もそれをやめるわけには行かなかつた。良太は忙しいので困つてゐた。

そしてその時節になると、いつも旦那が歷史や漢學の本を讀んでゐる書齋にまで茶の壺がいくつとなく並べられた。

十六

『良太さん、困つたことが出來た。』

で見たりした。買手は彼方此方から來た。四谷の方の製茶業者などからもやつて來た。
夕方は、摘子に賃金を拂ふので忙しかつた。女達は晝間書いて置いて貰つた帳面を出して、それを現金に引替へて貰つた。大きな財布に小錢をぢやらつかせながら、一人々々金を渡してやつてゐる良太の姿は薄暗くなるまで其處に見えてゐた。
奧に用事のない時には、私も小遣にするんだなどと言つて、おかねも女達に交つて茶を摘んだ。田舍にゐる時分から經驗があるので、おかねは多く摘むことについては、他の女達に讓らなかつた。『今日は私が一番多く摘んだ。』などとおかねは言つてゐた。
二三年はかうして唯、芽で賣つて來たが、『良太、芽で賣つちや損だな。一つ火爐を拵へて、内でやつて見ようかな。』後には旦那がかう言ひ出して、奧の空地に、掘立小屋のやうなものを長く拵へて、そこに五つほど火爐を作つた。
大勢職人が入るやうにやつてからは、あたりは、目のさめるやうな活動を見せて來た。今までしんとしてゐた邸の中は、俄かに賑やかになつて、奧では、朝は茶師の唄で目をさますやうになつた。從つて賄の方の人手も必要になつて、多くの女中が入り込んで來た。
茶師が半ば裸になつて、せつせと並んで茶を揉んでゐる前で、面白さうにして旦那が見てゐることもあれば、姉刀自が其頃はもう養女になつて來てゐる綺麗なお下げのお光と一緒に笑ひ興じて立つて見て

十五

良太の經營した茶樹栽培は、年を經るに從つて、益々成功した。良太は梅の木の下から、林の緣までも茶樹を栽ゑることに盡力した。此頃では、昔の荒れた邸とは何うしても思はれぬほど四邊が整頓した。柿の木、柚の木、葡萄の蔓、栗、さういふものも繁茂した。ことに、初夏の候の茶の芽の繁茂は見事なものであつた。白い手拭や赤い襷が其處此處に見えて、近所の娘達や上さん達が相對して、ざるをかゝへて、茶を摘んでゐるさまは、丸で繪のやうであつた。夜の雨の晴れた朝などには、ざるの目が出ると言つて、葉の乾かない中を口寬けて女達は早くからやつて來た。茶摘唄がのどかに聞えた。

さういふ時には、廣い臺所の入口に、筵を廣く敷いて、小さな權衡と大きなはかりとを置いて、持つて來る女達のざるを目方にかけて、風袋をさし引いて、あとの目方を銘々の帳面につけてやつた。一杯茶の芽で埋められた筵の傍では、良太はそれを買ひに來る商人と應對した。

『何うも芽がよくありませんな。肥料が足りないからですな。』

かう商人が言ふと、

『そんなことはない。肥料は十分に入つてゐる筈だが。』かう言つて、良太は一摘みつまんで齒で噛ん

その年の秋のある日に、實は眞弓とおかつとを伴れて、田舍の方へと行つた。一度店に歸つたけれど、眞弓のわるい癖は改められなかつた。もう一度他の店へでも奉公に出して見ようかと人々は思つたけれど、『なまなか、東京になど出すからわるいのだ。物心もつかない中に、誘惑の多い都會に一人で出して置いては、當人のためにもよくない。いつそ田舍へ歸して、學校に入れて素直に育てる方が好い。』かういふ說が勝を制して、それで伴れて歸すことになつたのであつた。

お勝も矢張さうであつた。田舍を出る時には、石川にも兄弟が澤山あるから、ひよつとしたら其方に貰はれて行くやうなことがないとも限らない。さうすれば、姉も仕合せなれば妹も好い。こんな風に思つて母親は出してやつたのであつたが、來て見ると、勝氣のお勝は、姉に世話を燒かせるばかりで、小間使の役にも立たないやうなことが多かつた。『何うしてあゝ素直でないだらう。人の言ふことを用ゐないのだから困る。私なんか、岡村さんに奉公してゐる時は、あんなもんではなかつた。』などとおてつは思つた。自分の肉身の妹といふこともつかひにくかつた。おてつは母親の肩荷が下りるためにと思つて、妹の世話をする氣になつたのだが、さて伴れて來て置いて見ると、却つて自分の心勞が殖えた。で、お勝も一緒に國の方へ歸ることになつた。

『それと言ふのも、貴方があまり甘やかして育てたからです。貴方は、子供を可愛がつてばかりゐるから、それで我儘にばかりなつて了ふんです。』

『そんなことを言つたつて仕方がない。』

『あゝ〳〵、もうつく〴〵厭だ、子供は。子供のために心配するなら、いつそ子供を持たない方が好い。』

おかねはこんなことを言つた。

ところが、ある日、宮内省の馬車が揃つて街道を通つた時に、御者になつて、得意な顏をして詮造が驅けて行つてゐたのを見た人があつた。その人はそれを良太の許へと知らせて來た。

探つて見ると、詮造は、果して、何處を何う賴んで、さういふところに入り込んだか、いつか立派な御者になつて、頭をきざに分けて、シガアを燻らしてゐるといふことがわかつた。

『呆れた奴だ！』

かう良太もおかねも言つたが、勝手で出て行つて、勝手でさういふ眞似をしてゐるのをやめさせる譯にも行かなかつた。仕方がないので、そのまゝ放つて置くことにした。

『でも、詮造は一人でさういふ食ふ道をさがすんだから豪い。』

などと言つて旦那は笑つた。

穿いて大きなステッキを持つた兄と、袢纏を着て淺黄の股引を着物の下に見せた弟とは、並んでその大きな店へと入つて行つた。

月日はまた經つて行つた。其時分、奥では養子と養女を貰ふ話が進行して行つてゐた。養子は遠い親類に當る今年二十五の青年であつた。ある役所に勤めてゐた。

『養子と言つたつて、あれに、こゝの跡をつがせるのではない。いくらか分けてやつて、別居させればそれで好い。お前はお前で、あのお光を貰つて、大きくなつたら、別に養子でも何でもすれば好いぢやないか。』

かう旦那は奥方に言つた。

お光と言ふのは、奥方の姪で、今年八歳になつてゐた。綺麗な色の白い子で、これまでにも度々奥へやつて來てゐた。

良太の家にも、詮造のことについて、困つたことが出來た。三度目に行つた店を出されて來た時、餘りやかましくおかねが小言を言つたので、それに腹を立てたのか、詮造は、そのあくる日、其處等にある金をさらつて、そして家出をした。

驚いて、彼方此方をさがしたが、當分はその行方がわからなかつた。

『本當に、困つた奴だ。』

直るものならば直したい。子供のことではあるし、誘惑の多い都會のことではあるから、無理はないのだから、餘り折檻などはせずに、二三日留置いて、よく戒めて貰ひたいといふ道理のわかつた手紙であつた。で、眞弓は二三日を其處で過した。

其間に、眞弓の小さな姿は、熊の皮を布いた旦那の書齋に呼寄せられて、長い間戒められたり、奥方の前に坐らせられて、懇々かんで含めるやうな教訓を與へられたりした。姉乃自は『本當に、眞弓ちやん、人の物を取るといふことは、一番わるいんだから、それが積ると、おまはりさんにわたされて牢屋に入れられて了ふんだから、今度からは、決してそんなことをしてはいけませんよ、』などと言つた。

兄の實が來て、更に懇々說諭して、將來は決してさういふことはしないといふ詫證文のやうなものを半紙に書かせて、その名のところに、掌に墨を一杯に塗つて、ぴたりと捺させた。

眞弓の小さい心は、しかし田舍の母親の方に引かれて行つてゐた。邸の中の竹藪に大きな筍が生えてゐたり、緣葉の中に花が見事に咲いてゐたりするのを見ると、かれの心はいつも遠い田舍の方へと飛んで行つてゐた。店に歸つて行つて主人や上さんや番頭の顏を見るのが辛かつた。

しかしさうは出來なかつた。ある日、實は眞弓を伴れて、町の大通りの方にあるその店へと行つた。實は流石に稚い弟に辛らくは當らなかつた。かれはあるかないかの財布の底を叩いて、弟にある蕎麥屋を奢つた。そして『本當に、今度は心を改めるんだよ。いゝかえ、』などと言つた。やがて髮を長く、袴を

んよ。三つ兒の魂百までもと言ふぢやないか。本當にあきれたもんだ。評判も好いし、寢小便もしなくなつたつて言ふし、世話甲斐があつた、何うか立派な商人になつて、祖父さんや母さんに樂をさせるやうにと思つて喜んでゐたのに……呆れた子だ。』おかねの眼からは涙が流れた。

『實なんか、何うだえ？　親の爲め、家の爲めを思へばこそ、朝は早く起き、夜はおそく寢て一生懸命に勉强してゐるぢやないか。此間も、頭髮を刈るお錢もないつて言つて、茫々した髮をしてやつて來たぢやないか。母さんに心配させてはと思つて、着物が汚れても、それで間に合はせてゐるぢやないか。それなのに、お前は……お前は……お前のやうなのは、兄弟に對して面目ないぢやないか。』

『まァ、好いつて言ふに……』

默つて見てゐれば、打擲にも及びかねまじき劍幕なのに、『まァ、さうお前のやうにがみ〳〵言つたつて仕方がない。少し靜かに落着かせて考へさせる方が好い。』かう言つて、良太は無理やりに、眞弓を二階の方へ伴れて行つた。

二階では、お初とおかつが遊んでゐた。俄かに叔母の劍幕の變つたのを見て、それと事情を察した姉は小さくなつてゐる眞弓の傍に寄つて、『お前、本當に、そんなことをしたのかえ？　え？　え？』などと言つて訊いた。眞弓も悲しくなつて泣き出した。

主人から旦那に寄越した手紙は、しかし解雇するといふ意味ではなかつた。これでは、將來困るから、

『眞弓は一體、何をしたんだ。人の物を取るなんて、そんなことをしたのかえ？　錢を取つたり、行先のかけをごまかしたりして、それで奉公がつとまると思つてゐるのかえ？　お前は武士の子ぢやないか。お父さんは、國の爲めに戰死までした立派な人ぢやないか。それなのに、大それた、人のお錢を取るなんて何うしてそんな了簡になつたんだえ？　お錢が欲しけりや、叔母さんなり叔父さんなりに言へば、いくらでもやるぢやないか。おい、これ、何うしたんだ。默つてゐちやわからないよ。』おかねは恐ろしい權幕で眞弓をこづき廻した。

眞弓は唯低頭いてゐた。そしてをり〳〵少年期に起るやうな不良なわるごすい眼色をして、ちよいちよい叔母の方を竊み見た。『田舍の祖父さんや母さんが聞いたら、何と言ふだらう。牛込の姉さんが聞いたら、何と言つて怒るだらう。そんなさもしい了簡の奴は、岡田家にはゐなかつた筈だ。親の顏に泥を塗るとはお前のことだ。これ、眞弓、お前、本當に、人のお錢なんか取つたのかえ？』苦々しいといふ顏の表情をして、『お言ひな、申開きが出來るなら申開きをおしな。叔母さんや叔父さんは、旦那や奥方の前で、どんなに恥かしい思ひをしたか知れないよ。』

『まア、好いから、緩くり言つてきかせてもわかるから、何しろ、まだ子供なんだから。』見兼ねてかう傍から良太が言ふと、

『お前さんは、默つてお出でなさいよ、子供だつて何だつて、そんなことをさせて默つてはおけませ

は半年の中に、すつかり人馴れがして、使に行つたり物を買ひに行つたりすることを何とも思はないやうな兒になつてゐた。正月に來た時には、丁度その日が日曜日で、其處に來てゐた兄の實と一緒に、近くの町にある閻魔に行つて、終日面白さうにして遊んで、夕方になつてから兄に送られて機嫌よく歸つて行つた。

寢小便の癖があつて、上さんに叱られて、裸體にされて灸を据ゑられたといふ噂も、此頃ではもう聞かなくなつて居た。

ところが、三月の朗かなある日の夕暮に、眞弓はひよつこり、その小さな姿を良太の家の扉のところに現はした。丁度その時、田舍から出て來たおかつが來てゐた。『まア、眞弓ぢやないか、何うして來たの、』と言つて眼を瞠つた。

眞弓は主人から旦那に宛てた一通の手紙を懷ろにしてゐた。眞弓も唯簡單に旦那のもとに使によこされたことゝのみ思つてゐた。『お前、これを持つて、角筈まで行つてお出で。』かう主人に命ぜられて、寧ろ喜び勇んで、長い〳〵夕日の路を歩いて來た。

旦那は其時役所からまだ歸つて來てゐなかつたが、やがて俥の輾る音がして、『お歸り、』と言ふ聲がきこえたが、暫くすると、自分の持つて來た手紙は、實は自分のことに關してゐたといふことを眞弓は小さい心に知つた。叔父はさうでもなかつたが、叔母の劍幕は俄かに變つた。

こんなことをおかねが言ふと、

『女はそれでもすむが、男には出來ない。』

かう良太は言つた。

良太はおてつの二番目の男の兒の大きくなつたことなどを話した。『可愛い子だ……それに、今度は男の子だから、石川さん、可愛くつて仕方がないんだね。抱いて伴れて來たり何かした……それにおかつが田舍から出て來るつてね、田舍で、年寄とお袋の傍に置いても仕方がないから、小間使代りに東京に伴れて來て、世話をするつておてつが言つてゐたよ。何でも、久しく田舍に行かないから、もう少し暖かになつたら、一度國に行つて、さうして一緒に連れて來るつて……』

『それでも、あの子は、よく田舍の面倒を見て呉れるね。』

『本當だ。感心なもんだ。さういふ心掛けだから、運が向いたんだ。』かう良太はおてつを賞めた。

十四

昨年の盆にも、今年の正月にも、主人から出た新しい仕着せを着て、可愛い丁稚姿で眞弓はやつて來たが、良太夫婦は、別にこれと言つて、變つたことをも耳にしなかつた。眞弓は大勢の番頭やら上さんやらから小遣を貰つて、澤山金を財布に持つてゐた。それにおかねも、小遣を、二三十錢やつた。眞弓

は大分馴れて、上さんに氣に入つて、眞弓では呼びにくいから、弓藏と名を改めたことなどが語り傳へられた。ある日、ある人の葬式から旦那が歸つて來た時には、『今日は眞弓に逢つたよ。主人の供をして來てたよ。可愛い小僧さんになつた。莞爾してゐたよ、』などと旦那は話した。

『心配したこともなかつた。』かう言つて、良太夫婦は始めて安心した。

年中無沙汰をしてゐるからと言つて、良太は年始だけには、いつもきまつてわざ〳〵牛込の石川の宅を訪ねた。戰爭後、石川の立身したのは評判であつたが、新しく出來た普請を見ると、一層それが確められた。新建の棟の高い二階屋は、低い茅葺や瓦屋根の上に高く群を拔いてゐた。二階の欄干からは、遠く富士の白雪が見渡された。

良太は座蒲團を勸められても、滅多にそれを布いたことのないやうな人であつた。酒は好まぬから無論のこと、食事時分に氣をきかして先で何か取つて呉れても、遠慮して容易に箸をつけなかつた。石川に行つた時などには、殊にそれが甚しかつた。『まァ、角箸のをぢさん、折角註文したんですから、今、參りますから。』かう言つて、袂を取らぬばかりにしておてつが留めても、良太はいつも遠慮して歸つて來た。

『そんなに留められたら、御馳走になつて來れば好いのに……。先だつて、貴方のやうにされちや氣持が好くない。』

『兄さんが來た、實さんが來た。』

かう言つて喜んで出て來た。

それに、實は奥の人達からも可愛がられた。『好い氣分の兒だよ。それに、氣立がやさしいよ。政十郎に似たと見える。』かう奥方は旦那に話した。姉刀自は、袴を穿いて活潑に入つて來るところを見て、『本當に、實は好い書生さんになつたね。早いもんだね。小さくつてゐたのは、まだ此間だつたのに……』などと言つた。誰も相手にして呉れない時には、實はひとりで、廣い邸やら庭やら林の中やらを歩いた。

その癖、詮造とは餘り仲が好くはなかつた。昔もさうであつたが、『犬と猿のやうだね、一緒にゐさへすれば喧嘩する、』とよく言はれたものだが、今でも詮造のゐるところに出會すと、實は機嫌のわるい顔をして默つて坐つてゐた。しかし家に歸つて來てゐる時でも、詮造は、落着いて其處に坐つてなどはゐなかつた。大抵近所の友達の許に遊びに行つてゐた。

實の評判の好いのに引かへて、『詮造には困る、困る、』と奥の人達からも言はれた。

行つた先からは、眞弓の噂がをり／＼傳はつて來た。『年が行かないから、可哀相だ。この間も、雪の降る日に中番頭と一緒に小石川まで本を背負つて行つたが、途中で歩けなくなつて、歸りは俥で送られたとよ。まだ、九年何ヶ月ぢやそれも無理はないが、まだ、ちつと早すぎたな。もう一年待てばよかつた。』かう旦那はある時、何處からか聞いて來て話した。しかし、さういふ話のあつたのも始めの中で、此頃で

も先づ第一にその人の漢學の素養の有無を標準にした。從つてさういふ子弟を教育する漢學の塾は東京の到るところにあつた。實の就いて學んだ先生は、元、昌平黌の助教授で、漢文も漢詩も旨く、それに、唐宋八家文の無點の素讀が上手であつた。學風は嚴格な保守主義者で、塾生でたまさか外國語などを習ふものがあると、夷狄の奴輩だと言つて、すぐそれを放逐した。日記は起止簿と言つて、すべて漢文で書かせた。

塾生は四五十人もあつた。

實は半年と經たない中に、すつかりその塾の風習に感染して了つた。慷慨悲憤の歌などの流行する時代で、その頃の書生は大抵袴を裾短かに穿いて、髮を長く延して、犬殺しの持つやうな太いステッキを振廻して、雲井龍雄の詩などを聲高々と朗吟して市中を濶步した。脂粉の氣に觸れることを殊に嫌つた。日曜日には、實は別に行くところもないので、石川に行くか、でなければ良太の許に訪れて行つた。しかし石川には、姉はゐるが、張りつめた三味線の糸のやうな氣分で、いつも手痛い戒飭を加へられるのが辛かつた。それよりは遠いけれども、良太の家の方が好いと思つた。おかねのちやほやして呉れるのも嬉しいし、お初に兄さんと慕はれるのもなつかしかつた。實はいつもお初に算術だの本だのを教へてやつた。

實がやつて行くと、お初は、

て育てたのと、近所の遊び仲間に百姓や町人の子が多かつたからで、それまでに二度も奉公にやつたけれど、いつも二月も居らないで出て來た。眞弓が田舍から來た時にも、丁度家に歸つてゐて、おとなしい眞弓を誘ひ出して、上水端に行つて、凧などを揚げた。

それに引かへて、娘のお初は十一になつたばかりで、おとなしい、やさしい色の白い女の兒であつた。いつも學校から歸つて來ると、おやつを貰つて二階に行つて、お手玉を取つたり、猫を相手に遊んでゐたりした。猫は玉ャ玉ャと呼ばれて、いつも喜んでその女の兒の膝の上に行つた。『詮造はおかねの氣象を受けついだが、お初坊は良太だ。良太そつくりだ。』などと、姉刀自はいつも笑ひながら言つた。

眞弓が京橋の方に伴れられて行つた翌々日は、丁度日曜日で、日和下駄を鳴らして、袴を裾短かに穿いて、實がその下宿してゐる本郷の塾の方からやつて來た。手紙が來たので、わざ〳〵祖父に逢ひに來たのであつた。『さう、もう眞弓は行つちやつたの？』かう言つて、實は弟に逢へなかつたのを惜んだ。

實は去年の秋に上京した。學問の方針については、軍人には何うしてもしたくないといふ母親の意見があるので、石川と一緒に種々に迷つたが、兎に角漢學は修めなければならないと言つて、それで取敢へず今の塾に入ることになつた。塾費と食費とは、すべて石川が出すことになつた。

進んだ頭腦を持つた人達は、これから先の學問は、外國語と數學とでなければ駄目だとは思つてゐたが、一般ではまだ漢學が一番に重んぜられてゐた。『うそ字を書くやうな奴は駄目だ。』人を使ふにして

大手を町の方に出る時、『この次來る時には何んなになつてゐるだらう。その時は、士族屋敷などとい
ふ跡も形もなくなつて了つてゐるだらう。』かう思ひながら、良太は川舟の出る舟着の方へと急いだ。か
れは來る時と同じやうに矢張草鞋を穿いてゐた。その舟着までは、町から一里以上も歩かなければなら
なかつた。

十三

賓を迎へた翌年の春に、良太の家では、また老父が眞弓を送つて來るのを迎へた。
眞弓はかぞへ年十一だが、本當にすると、まだ九年何ヶ月であつた。かねて賴んで置いた堅い丁稚奉
公の口が旦那の方にあつて、忽ち話が纏つて、何時伴れて來ても好いとなつた。それは旦那の知人の別
懇な士族から轉業した本屋で、店は京橋の賑かな大通りにあつた。良太は、眞弓が到着すると、二夜泊ら
せて、やがて老父の手から稚い少年を離して、旦那の知人だと言ふある役所の屬官の家を麴町の山王の
下のところに訪ねた。そして其處からは、眞弓はその世話をして吳れた屬官に伴れられて、大通りの本
屋の店に行つた。
良太の總領の息子の詮造は、その時、既に十五になつてゐた。賓とは一つ違ひの年下ではあるが、體
が大きく、惡戲で、父母の言ふことなどは素直にきいて居なかつた。それと言ふのも、父親が甘やかし

金モールの話などが子供達を喜ばせた。盲ひた老母には、獨りで動いて行く車の話が何うしても飲込めなかつた。『汽車は出て行く、サイ〳〵、煙は殘る。のこる煙はサイ〳〵癪の種、』などといふ唄を良太は唄つてきかせた。

『皆な大きくなつて豪くなるんだな。父さんは、國の爲めに戰死したんだからな。父さんの名を汚さないやうに豪くなるんだ。そして、母さんや祖父さんに安心させるんだな。』良太はかう言つて、總領と次男の頭を撫でたりなどした。

あくる日は、良太は自分の籍の入つてゐる家をたづねて行つた。かれは其處にも悲慘な零落した生活を發見した。養父母には殆んど愛情を持たなかつたかれも、見兼ねて、持つてゐた金をいくらか置いて來た。かれはかういふ人達に比べて、自分などは早く決心して好かつたと思つた。良太は歸つてからの茶樹栽培の方法などを考へながら、家の方へ戻つて來た。

別れて來る日は、今更のやうに名殘が惜まれた。盲ひた老母は、『今度はもういつ逢はれるか。とても、この世では逢はれないかも知れない、』などと言つて泣いた。お幾の眼からも涙が流れた。良太にしても、年寄と寡婦と孤兒とを、この古い家に殘して歸るには忍びないやうな氣がした。『では、眞弓さんの方は、好いところがあつたら奉公に出すやうに旦那さまにも賴んで置きますから。……さうした方が結局後のためですから、』と返す〴〵も良太はお幾に言つた。

『何うなつて行くんだらう。』
こんなことを思ひながら、良太は沼の畔まで行つた。麥の畑に沿つた路では、總領の男の兒は、麥の軸を取つて口に當てゝ鳴らした。
歸つて來てから、良太は老父に言つた。
『何處に行つてもさびしい……』
『本當だな、昔のやうな元氣は何處にもないな。』
『杉山の家ではもうゐないんですか。』
『もうゐない。あの親父が奉還して、二年と經たない中にすつかり滅茶々々にして了つたからな。』
『さうですか。今、通つて見たら、丸で違つた人が住んでゐるやうだつたから、聲もかけずに來ましたが……』
『あそこには在のものが買つて、つい此間引越して來たばかりだ。』
『貞さんは何うしたでせう？』
『息子か。息子は親父に、とうから愛想をつかして、去年、東京に行つた筈だがな。』
『さうですか、東京に行きましたか。』
夕飯の後には、皆な長火鉢の周圍に集つて、東京の話などを聞いた。汽車の話や、汽船の話、參議の

い。進んで父親のあとつぎにするやうでなくつてはいけない、』と言つたが、お幾の身にしては、何うしても實を軍人にしようとは思はれなかつた。一度夫の身の上に味はせられた艱難を再び子供の上に見るに忍ばれなかつた。戰死者の遺兒は、士官學校に入るについても、いろ〳〵な特典があるといふ話ではあつたが、お幾は何うしてもさういふ氣になれなかつた。そんな話をお幾は良太にした。

臺所に接した茶の間の壁には、西南戰爭の野津少佐が軍旗を賊兵から奪ひ返すところだの、不忍池から大學の時計臺を見渡した新東京十景だのゝ錦繪が張られてそれがくろく佗しく煤けてゐた。お幾が焚きつける竈の煙は、容赦なくいつも其處まで舞つて入つて來た。

良太は其處に二夜泊つた。初めの日の夕方には、總領の男の兒と次男とを伴れて、家の裏から城を取巻いた沼の遠く見えるあたりまで行つた。昔と今では、何の關係もない沼でさへさびれて暗くなつてゐるやうに見えた。何處に行つても、笑ふ聲も聞えなければ、莞爾した元氣の好い顏も見られなかつた。行逢ふ人達は皆な默々として、手を拱いて歩いた。

ある家の壁は落ち、ある家の屋根は草に蔽はれ、ある家の土臺は今にも倒れさうに傾いて見えたっ夕の煙さへも、昔のやうに賑かには立たなかつた。

子供が連れ立つて、『明日天氣になァれ』と言つて騒いでゐる聲の中にすら、良太は零落と寂寞とを感ぜずにはゐられなかつた。

こんなことを老父は話した。良太は何もお土産を持つて來なかつたからと言つて、五圓札を一枚紙に包んでお幾の方に出し、もう一枚の五圓の方を老父母の前に出した。

午後になると、子供達はぞろ〳〵と學校から歸つて來た。總領の實は、十五で、來年はもう學校を卒業する筈であつた。次の女の兒は、おかつと言つて、今年十三で、お下げに結つて、赤い切れなどを髮にかけてゐた。良太の前に來て、丁寧にお辭儀をしたりした。次の男の兒は十で、いやにはにかみやさんで、隅の方に行つて、じろ〳〵と客の方を見てゐた。

『何うしても、これからは、商人ですね。資本があつて、勉强がさせられゝば、それに越したことはないけれど、我々共にはさういふ眞似はしたくも出來ませんから……。私なども、詮造はもう來年にも何處か奉公に出さうと思つてをります。』

『本當に、それが一番だ。』

『ですから、此方などでも、一人は商人にする方が好う御座んすよ。實は、石川さんで、世話を見て呉れるつて言ふなら、その方をさせるが好う御座んすけれど、眞弓は何處か好いところをさがして、奉公に出す方が好う御座んすよ。』

などと良太はお幾に言つた。總領の學問のことについても、お幾は種々に心配した。石川は、『何ァに、そんなこつちやいけない。親が戰死したから、軍人にさせるのはイヤだなんて言つてゐやうではいけな

かう傍から言つたお幾の眼には涙が溢れ出してゐた。言はないけれど、政十郎さへ無事で歸つて來たならばといふ思ひが、此時誰の胸にもこみ上げて來てゐた。

話はそれからそれへと容易に盡きなかつた。人々は泣いたり笑つたりした。時には、一座默つて深い深い物思ひに耽つたりした。後には士族の零落したさまなども話頭に上つた。

『實際、變りましたね。』

かう良太が言つて、來る途中に見た話をすると、

『それどころぢやない。内に入つて見ると、それは慘めなもんだ。五百石取つたあの新十郎さんの家なんか、見てゐられないからな。何しろ、御新造が襤褸を下げて、娘がいなごを取つて町に賣りに行くつて言ふんだからな。』苦々しいといふ顏をして、『時世とは言ひながら、情けないことだ。』

『本當ですね。』

『お前なんか、早く決心して、あそこに行つたから好かつたよ。青山の此方の家なぞも困つてゐるよ。何うせ寄つて行くだらうけれど、あの息子なども評判がわるくつてな。のらくらと遊んでばかりゐるといふことだ。此間もちよつと行つて見たが、家の中なんかも、隨分ひどくなつてゐるぞ。慘めなもんぢやぞ。』

老父はそれでもまだしつかりしてゐた。息子の死、娘の死、その爲めに受けた打撃は歴々と體の老いに見えてゐたが、それでも嫁や孫達を控へて、自分が弱つてはといふ氣の張りが、絶えず老父の精神を引締らせるやうに見えた。老父は『それでも、奥では、皆なお變りはないかな。それは結構だな。お姉樣もお丈夫か。』

孫娘の話の出た時には『さうともな、お前だつて、忙しい體だから、さう度々行つて見るといふわけには行かないからな。それでもな、あのおてつはな、筆まめで、よく手紙をよこして呉れるから、彼方のことはよく分つてゐるよ。此間も一圓手紙の中に封じ込んでよこして、私に、何か好きなものでも買つて食つて呉れつて言つて來たよ。稚い時分からよく氣のつく子だつた。何でも、また出來たつて言ふことだ。』

『さうですか。それはお目出度い。向うにゐても、ちつとも知りませんでした。』

『まア、おてつだけは安心だ。』

『さうですとも……石川さんも戰地から歸つて來てから、大變評判が好くつて、ずん〳〵立身して行きなさるから、もう安心なもんです。今度は大層立派な普請をなすつたさうですね。』

『さうだつてな。舅や小姑が多いから、辛からうけれど、婿がしつかりしてゐるから仕合せだ。』

『本當に、良太さん、あればかりが賴りですよ。』

れて、其まゝ靜かに歩いて、此方へと伴れられて來た。

『お祖母さん、いつも變らないで。』

かう良太が言ふと、

『まァ、良太が來たかえ。よく來て呉れたなァ。何年逢はなかつたかなァ。』

そつぽの方を向きながら、かう言つて老母は水洟をすゝつた。盲ひた眼からは涙がこぼれた。

『それでもいつも變らないで結構ですね。』

『變らないどころかな、此頃ではな、耳は遠くなるし、齒はなくなるし、それに、體が弱つて、皆なに世話ばかりかけてゐるのだよ。』考へて、『それにしても、良太には、もう何年逢はないか、おぢいさんやお幾は行つて度々逢つてゐるけれど、私は、あの火事のあつた年から逢はないんだからな……もう七年か八年になるな。』

『早いもんですね、もうさうなりますね。』

人々は何から話して好いかわからなかつた。種々なことが皆なの胸を塞ぐやうにした。話が後や先になつた。

『おつるもな、飛んでもないことをして呉れて、その時はさぞ困つたらうな。』かう言つた時には老母の聲は著るしく曇つた。

『では、晝間は此子一人ですね。』

『え、皆な段々大きくなりました。』

こんな會話を取りかはしながら、良太は上へと上つて行つた。古い家は更に古くなつて、土臺さへ既に傾きつゝあるやうなのを良太は感じた。良太は舅と姑とに挨拶をしてから、

『お祖母さんは？』

『さう〳〵、婆さま。』向うの遠くの日向の緣側に白髪頭と猫脊の後姿とを見せて、餘念なく糸車を廻してゐる老婆の方を向いて、『婆さま、良太が來た！』

かう言つたが、聞えないと見えて、矢張ブン〳〵と糸車を廻してゐるので、『此頃、少し耳が遠くなつてな、』と言つて、舅は立つて其方の方へ行つた。

『婆さま、聞えないのかえ？　良太が來たつて言ふのに……』

『え、良太が――』

糸車をやめた老母は矢張ぶる〳〵と體を震はせた。『良太が……良太が來たかえ。それはまア……何時來たんだえ？……今かえ……それはまア、ちつとも知らなかつた。』

『まア、此方へ來やれ。』

で、老母はぶる〳〵體を震はせながら、膝を叩いて立上つたが、ひたと盲ひた目の、老父に手をひか

つて急いで家の中に入つて行つた。

『良太が來た。』

かう言つて、老いた舅は慌てゝ奥の方から出て來た。思ひもかけないといふ喜悅が顏にも態度にも見えて、ぶる〳〵と總身が戰へてゐた。『よく來たな、よく來たな。』これより他に急には言葉も出なかつた。

『まァ、草鞋をお取んなすつて……』

かう云つて、一番先にお幾は盥に水を取つて來た。其處へ四歲になる末の男の兒が、靑洟を垂して、手を泥だらけにして、泣きながら入つて來たが、いきなり母親の後にかじり附いた。『克巳や、お前、何だえ？　東京からをぢ樣が來たぢやないか。そら、御覽、泣くんぢやないよ。東京のをぢさまに笑はれるよ。』

かう母親に言はれて、じろ〳〵と客の方を見たが、男の兒はべそをかくのをやめなかつた。

『一番末のですね。大きくなつた。』

『もうやんちやで仕方がないんですよ。』良太の足を灑いだ跡の水で泥だらけの手を洗つてやりながら、『ほら、おとなしくしないと、叔父樣に笑はれるよ。』

『子供達は？』

『皆な學校に行つてゐます。今に歸つて來ます。』

たところは、多くは畠や栗林になつてゐて、麥の穗が靜かに春の日影に靡いて見られた。菜の花などが處々に咲いてゐた。

少し通りから入つてゐるので、その時燒けるのを免がれた戸部さんの家は、それでもまだ依然として昔の面影を保つては居たが、壁が落ちたり、庇が傾いたりして、屋根には草が茫々と生えてゐた。

それから少し來た良太は、また驚いて足を留めた。お城を取卷いた壕、その壕の土手の上には、何百年と經つた古い松の大樹が美しく靡きわたつてゐたのだが、今は其の影も形もなく、土手には草が繁り、綺麗であつた三の丸の入口は、全く足も踏み込めないほどの草藪と變つて了つてゐるのを見た。ところどころに殘つてゐる石垣にも、名殘なく葛がからみついて、中には半ば崩れかけてゐるのなどもあつた。

『變つたなァ。』

良太はかう思ひながら歩いた。やがて自分の出入した國家老の邸址に來たが、其處は一面の梨畑に變つて、確か三百石取りの侍であつた筈の鬚の生えた男が、二三人の日傭取を相手に、せつせと働いてゐるのを見た。

やがてかれはさびしい哀れな舅の家を昔のところに見出した。家の前に、筒袖を着て、髮を櫛卷にして子供を叱つてゐる汚ない上さんを誰かと思つたら、それはお幾であつた。『まァ良太さんだよ。』かう言

とに見えた。父親は更に一層老いたやうに見えた。父親は死んだ娘の身の廻りの持物などを處分すると、牛込の孫娘の許にも寄らずに、急いで田舍へと歸つて行つた。

それから妾は二月ほど其處にゐたが、やがて再び別居した。

十二

一度良太は暇を貰つて、田舍の方へと訪ねて行つた。

良太の眼には、何よりも先に零落と荒廢と絶望との士族屋敷の光景が慘ましく映つて見えた。大手の門を入る時から、かれはあたりのさまに驚かされたが、大名小路に來て更に一層驚愕の眼を瞠らずには居られなかつた。昔話の浦島が子もかくやと思はるゝばかりであつた。

大手の門は、あの時の火災に燒け落ちたが、それは知つてゐるが、その傍に、田舍の町らしく酒屋が五六軒出來てゐるのが、先づかれの眼を惹いた。そして其處から少し來ると、家老の大きな邸のあつた址はすつかり畑になつて、その向うに、小さい新しい家などが見えた。以前に見たこともない家には、細い煙突から薄い煙が立つて、機業でもやつてゐるらしく、中から座繰をくる音が時雨のやうにきこえた。

田舍はひどくなつたと言ふことは、かねて度々人の口からも聞いて知つてゐたが、良太はこれほどではないと思つた。火災後は、殆ど家らしい家も立たないと言つても好い位であつた。昔は邸と邸で埋られ

かうおかねは叫んだ。

奥方に小言を言はれた位で死ぬ譯がない。それには他に何か深い譯があつたに相違ない。かう誰も彼も噂した。おつまは大勢の中からちよつと一目おつるの死骸を見たが、自分のために死にでもしたやうに、終日二階の一間に籠つて眼を泣き腫らしてゐた。手紙は良太に一通、旦那に一通、父親に一通、いづれも寢床の下に置いてあつたが、長々お世話になつた禮と、かうした不心得をする詫言とばかりで、他に理由らしい理由は書いてなかつた。旦那に宛てた方には、別に手紙は殘して置かないが、おつま樣に宜しくと書いてあつた。

田舍にはすぐ電報で知らせたが、父親が上京するのを待つわけにも行かないので、檢視のすむまで、一夜死骸を良太達の住んでゐる方の室に置いて、お通夜をして、あくる朝、例の街道の奥にある寺へ送つた。

墓は切腹した侍達と倘僂の番人の埋められた隣へと深く掘られた。おかねは泣きながら、線香と水とを手向けた。

やがて父親は上京して、娘の不心得の詫言を旦那や奥方に述べた。『何うも、昔から、氣の狹い女でしたから、何か思ひつめて急に赫と致したのでせう。何もその位のことで、とやかう申すわけが御座いませんから。』かう父親は言つたが、先に息子を失ひ、今また娘を失つた悲哀はありありとその態度と言葉

おつるはかう言つて涙を袖に拭いた。

痛い奥方の小言を聞かされた上、あられもない金時計の紛失の疑ひをかけられた時には、さうでなくつてさへ長い獨棲の神經性のおつるは赫とした。二語三語、言葉を反したが、それを聞いた奥方は眼を吊しあげて、長い煙管で、子供ででもあるかのやうに幾つとなくおつるを打擲した。『奥さま、何をなさいます。好い加減になさいまし。召使でも、岡田彦太の娘です。』おつるはかう叫んで、思はず主に手向ふやうな形を見せた。

おかねだの良太だのが寄つてたかつて、奥方に喰つてかゝつてゐるおつるを引離し、兎に角お詫をさせて、自分の居間に引込ませたが、おつるの心は、それだけではすまされなかつた。おつるはランプの下で、長い間かゝつて、手紙を三通書いた。そして人の寢靜まつたのを待つて、厠の手水鉢のある雨戸を一枚明けて、そこからそつと跣足で戸外に出た。丁度その時、遲い月が樹の間に上つて、濃淡の樹の影を美しく庭に織り亂して居た。おつるは扉のかけ金を外して庭の外に出た。

あくる朝、人々はおつるのゐないのに驚いて、大騷ぎをしてあちこちをさがした。やがて誰も彼も庭の外にある古井戸の周圍へと集つて行つた。男が入つて行つて、水にひた濡れた、髮の亂れたおつるの死骸を引揚げて來たのを見た時には、『姉さん、何故こんなことをして呉れた。』かう言つて良太は泣いた。

『呆れた姉さんだ……』

れも、昔の殿様の世ならばまだ面白い可笑しいこともあつたらうけれど、かう世間が移り變つては、何うなつて行く此身であるかわからなかつた。それに、おかねに比べては、おつるは稚い頃から父母と氣が合はなかつた。緣が遠いのて、父母から持扱はれた時分の苦勞などをおつるは思起した。

おつるは姉刀自に言つた。『お姉樣などは御心配のことなどは御座いません。旦那さまがしつかりしていらつしやいますし、それに、彼方にだつて、置いていらしつた實のお子さんがおあんなさるんですから……。何ぞと言ふ時は、屹度お力になるにきまつてをります。それから比べると、私なんかひとりぼつちですから、誰も構つて呉れるものは御座いません。』

『そんなことがあるもんかね。おかねだつて、兩親だつてあるぢやないか。それに、兄妹に子が多いんだから、好加減な時分に貰つて育てれば何でもないぢやないか。今からお初でも貰つて置くと好い。』

『駄目で御座いますよ。おかねなんかに私の心なんかわかりやしません。せめて、兄でも生きてゐると、ちつとは相談相手になつて呉れたんですけども……』

『本當だね。政十郎は何故戰爭なんかへ行つたんだらうね。』

『ですから、奥さまなんかに種々なことを言はれますと、身も世もないやうな氣が致しますよ。』

『なァに、あれは、お前、おつまがゐるから、あんなことを言ふんだよ。』

『でも、奥さまもあんまりわからなさ過ぎるんですもの。』

奥方はいつもピリ〳〵しておつまに當つた。

おつるは長い間、旦那と奥方との世話をして來た。容色がわるいので緣が遠く、二十五で漸く嫁いたところも、一年ほどして歸つて來てからは、一生奉公と決心して、旦那が城外に幽閉されてゐた時分には、骨身にかへてお世話を申し上げた。旦那と奥方の爲めには、自分の小遣で、米を買つて來たことさへもあつた。それなのに、今になつて、旦那も立身して、いかやうにも此身の世話が出來る身になつてゐながら、世話をして呉れないばかりか、箸の上下にもつらく當られるのを默つておとなしく受けてはゐられなかつた。お妾のことだつて、何も自分がわるいのではないし……『本當に馬鹿々々しい』とおつるは思つた。

『あゝ、もう、つく〴〵世の中がいやになつた。』かうおつるはおかねに言つた。

しかし、おかねにしても、姉の心をよく汲取ることは出來なかつた。それは姉さんにしては辛からうと思はぬではないが、亭主がなかつたり子供がなかつたりするのが結句氣樂で羨ましかつた。『姉さんなんか、一生、此處でお世話になつてゐればそれで好いんだ。けども、私なんかにはそれは出來ない。子供といふものがあるから。子供までお世話になるわけには行かないから。』かうおかねはおつるに言つた。

おつるはをり〳〵田舍にゐる父母や、戰死して世を早くした兄のことなどを、夜、床についてから思ひ起した。艱難の多い世の中である。何處に行つても、何處を見渡しても、幸福といふものはない。そ

かう言ひつゝ猶暫く立盡して、櫻の落花を見てゐたが、その日、旦那が歸つて來ると、五言絕句を一首紙に書いて、そして旦那に見せた。旦那は歷史家で、曾つて勤王論を唱へただけに、南朝、殊に後醍醐天皇の御一生については、言ふに言はれない憧憬の情を常に抱いてゐた。後醍醐天皇の夢を見て、夜半に聲を擧げて泣出したことなどもあつた。

それに、其時分の大官連は、妾を蓄へるといふことを一種の見得にしてゐるやうなところもあつた。奥方に子供のないといふことも、その理由の一つになつてゐた。

姉刀自は、何方かと言へば、妾贔屓であつた。平生、物事を氣にしない方で、時々芝居へでもやつて貰ひさへすれば、あとは何方つかずに、自分の居間におとなしく引込んでゐる方であつたが、それでも時には見兼ねて、奥方に意見を言つた。『あんなやさしい子を相手にして、何もそんなにお虐めなさるもんではありません、』などと言つた。

奥方の態度は常に種々に變つた。馬鹿に機嫌が好くつて、櫛、笄などをおつまにやつたりなんかする時には、本當の妹かと思はれるほどにやさしくしたが、それが時の間にがらりと變つて、呼んでも返事もせずに、焦々して髪に當り散らしたりなどした。朝から顏に赤く血が上つて、ヒステリカルな表情をしてゐることなどもあつた。かと思ふと、風呂の後を長い間鏡臺の前に坐つて、何うかしたかと思ふほど一本々々後れ毛を撫でつけて、十年も前にやつたやうな厚化粧で夕飯の膳に向つた。さういふ時には、

した。奥方づきのおかねでさへ、わるく思ふことの出來ないやうな人で、時には良太の女の兒を伴れて行つて、物を呉れたり髮を結つて呉れたりした。それをまた奥方に見られるのをおかねは憚つた。

それにも拘らず、女の兒は、『おつまさま、おつまさま』と言つては、よくその後を慕つた。おつまが庭を歩いてゐる姿などを見ると、遠くから驅けて行つて、その長い袖にぶら下つたり何かした。『この子は、本當に、私の子のやうです。何うして、かう、私がすきなんです？　え、お初ちやん。』こんなことを言つて、おつまは慈姑の把手のやうな髮を結つた女の兒の頰に口を當てた。

良太が外で仕事をしてゐると、その傍にやつて來て、

『山櫻つてと好いもんですね。』

『え、これは、旦那が御維新の前に、上方へ天子樣の陵をお調べにいらつした時、吉野の後醍醐天皇さまの陵の傍から實をお持ちになつて、お國で蒔いたのを此方に持つていらしつたのです。もう十八九年にもなりますが、大きくなりました。』

『さうですか、これが……。後醍醐天皇さまの陵の傍にあつたんですか。』かう言つて感興を惹いたやうにして梢を見上げて、『わづかの間に、こんなに大きくなるもんですかね。』

『櫻は一番よく此處等の土地に合ひますと見えて、七八年も經つと、見違へるほど大きくなります。』

『さうですかね。』

妾が同居するやうになつたのは、初めは實は奥方の賛成から話が始まつたことであつたが、さて一緒になつて見ると、種々むづかしいことが日毎に起つた。表向では、奥方も妾も至極仲が睦まじいやうに見えもし、行ひもしてゐたが、裏に入つて見ると、凄じい暗流が避くべからざる巴渦を卷いてゐるのを誰も見た。

妾はおつまと呼ばれてゐた。旦那とはもう四五年も一緒に住んでゐて、もとはさる藩の立派なところの娘であつたが、父母に死なれて零落の淵に沈みつゝあつたのを、旦那が不憫に思つて拾ひ上げて來たのであつた。琴も出來れば和歌も出來た。殊に、父親は漢學者で、聖堂で講師の一員に加はつてゐたほどあつて、漢詩などを見事に作つた。旦那の卽吟に次韻することなどもをり〳〵はあつた。その才を旦那は殊に愛してゐた。

おつるは長年妾の世話をしてゐたので、何うしても其間に友情が出來て、奥方よりは寧ろ妾の方にその心を寄せ勝ちであつた。『奥さまも、そんなに仰しやらなくつても好いのに……。大家の奥さまらしくしていらつしやれば好いのに……。餘りだと思ふことがよくあるよ。一方がおとなしいから、あれでもをさまつて行くけれども……。もう少しすれてゐては、とても默つておとなしくしてなんかゐられやしない。本當に、やさしい素直な人なんだから。』かうおつるが見兼ねて滴すことなども度々あつた。

妾はかういふところのお部屋様に似合はないやうな質素な扮裝をして、よく良太のゐる室に來ては話

蕎麥屋も出來れば、牛肉の煮込屋なども出來た。そして、さういふところには、綿フランの襟卷をした百姓や、赤い腰卷を出した娘などが入つて食つて行つた。汚い〳〵、支那にでも行かなければ見られないやうな汚いめし屋などもあつた。街道に面したある百姓家では、副業に其處等で出來る竹を利用して、柄杓やさゝらを作つて、それを都會の方へ運び出した。

あるところからある處へ通ふ圓太郎馬車が毎日喇叭を鳴して通つて行つた。と、そのあとを子供の群は面白がつて遠くまで追ひかけて行つた。その中には、良太の總領の男の兒なども雜つてゐた。

朝の七時頃、いつもきまつて役所に出勤する旦那の倖は、色の白い脊の高い定さんに曳かれて、門を出てその街道を通つて行つた。紋附の羽織と仙臺平の袴と山高の帽子とラッコの襟卷とは、いつも街道の人達の目を惹いた。

十一

九段の邸を引上げて、妾と一緒におつるが此方に住むやうになつたのは、それから一年ほど經つてから後であつた。若い妾は、細面の色の白い脊の低い女であつたが、姉刀自の二階の居間に接した六疊と三疊との間を宛がはれて、當分、其處に同居することになつた。

九段の邸は高い價で賣拂はれた。

山師の定さんは、大きな丈夫な體に鉞をふり上げて、終日長く林の伐採に力を盡した。ある日その惚れた上さんが男を拵へて遁げて行つた時には、定さんは子供を抱へて、がつかりして、仕事にも出る元氣がなくなつてゐた。それを良太は訪ねて行つてなだめたり賺したりした。ある家では、良太が行つて、度々その夫婦喧嘩の仲裁をした。

芝を仕立てゝ、芝留といふ名を取つた大きな百姓の家は、橋を渡つて、丘を越えて行つたところにあつた。家の周圍は大きな欅で取圍まれて、中にある茅葺屋根は、古く押潰されたやうに見えてゐたが、水車の水のことで、良太は度々其處に訪ねて行つた。初めは大分その話に廉が立つて難かしかつたが、誠實な公平な良太の意見は、間もなくその老いた百姓を納得させた。何處に行つても、良太はその味方と友達とを發見した。

邸の門前の街道は、都會の膨脹につれて、次第に賑かな光景を呈して來てゐた。最早、良太が初めて出て來た時のやうにさびしくはなかつた。田舍から都會に出て來る百姓を常得意とする種物屋、鹽物屋、一膳めし屋、あま酒屋、さういふのが軒を並べた。新しく出來た乾物屋の店の前には、いつも馬にふすまを食はせるための荷馬車が二三臺留つて、上さんがせはしく馬方共に應對してゐる傍で、馬はいばりを瀧のやうに流した。『この馬鹿野郎、また食ひながらやらかしやがる、』などと大きな聲で馬方は呶鳴つた。

れて、死骸を載せた車と一緒に、老いた甚さんがとぼ〳〵と坂を上つて、大きな櫸の並んだ路の方へ歩いて行くのが物悲しげに黒く見えた。良太は思はず深い溜息をついた。

水車場の中では、若者達が寄集つて、『中々この血の痕は取れねえ。追々取れるのを待つより他にしやうがねえ』などと言つて、ごし〳〵たはしで板の間や柱などを洗つてゐた。

家に歸つて、その話を旦那に申上げると、『ほ、それは可哀相な。若い者はそれだから困るな。すぐ思詰めて了ふからな。一人息子だから、甚公泣いてゐたらう？』などと旦那は言つた。『いやだねえ、この寒いのに、心中なんて……。』奥方はかう言つて眉を蹙めた。

甚さんに限らず、良太は多くの近所の百姓達と懇意にした。村の交際では、良太は一面旦那の代理をもつとめなければならないやうな位置に身を置いてゐた。で、婚禮の席にも葬式の見送にも、良太はいつも羽織袴で出かけて行つた。百姓達は青山さんと言つて、いつもかれを上座に迎へた。

百姓達は大抵烈しく勞働した。この地方では、米は陸稻ばかりなので、初夏の麥を主なる收穫としなければならなかつた。從つて秋よりも夏が賑かであつた。麥を打つ連枷の音が一村に響く頃には、若者の唄がそこにも此處にもきこえた。頰の赤い娘達は、新しい手拭を頭へかけて、麥刈やら麥打やらに精精と働いた。その時分には、上水の土手の上に、いつも白く卯の花が夕闇を縁取つた。

百姓の中には、副業として土方をしてゐるものもあれば、山師を職業にしてゐるものなどもあつた。

『とんでもないことで……』

良太がかう挨拶するのを聞く暇もなく、慌てゝ水車場の中に飛込んだ甚さんは、『野郎、あきれた眞似をしやがつたな。』かう言つて其處に突立つた。

甚さんの老いた體がぶる／＼慄へてゐるのを人々は見た。

暫くしてから、『女つ子は、幡ヶ谷の照公の娘だ。こんなことにならなけやいゝがと思つてゐやしたよ。』かう言つた老百姓の眼からは涙が流れた。惚れ合つてゐる仲だが、身分が違ふからと言つて、甚さんは二人を一緒にすることを拒んだ。つい二三日前にも、息子は親の監督の眼を忍んで、女の許に遁げて行つたりした。

『昨夜もゐねえから、また、親の眼を偸みやがつた。明日歸つたら、家に寄せるなんて言つて寢やしたが、こんな眞似をしやがるとは思はなかつた……。』甚さんは續いてかう言つたが、長く見てゐるに忍びないといふ風にして此方に出て來た。

つい一月ほど前に開業した若い醫師がやがてやつて來たが、もう何うすることも出來なかつた。で、檢視が濟むのを待つて、死骸を別々に車に乘せて、銘々の家に引取つて行つたのは、それから一時間ほど經つてからのことであつたが、その時分には、朝日は旣に高く昇つて、竹藪の中を流れて來る上水の上にきら／＼と美しく輝いてゐた。水車場の入口のところで良太が見てゐると、親類の百姓達に扶けら

良太はかう言ふより他仕方がなかつた。

『甚さんとこへ知らせたか。』

『今、達公が行つた。』

始めてそれを發見した男は、向うの村の鐵といふ水呑百姓だが、今朝、米を少し搗かうと思つて、戸を明けて入つて來た。と、其處等に紙などが散らばつてゐて、誰かゐるやうな氣勢がした。まだ、少し薄暗いのでよくわからなかつたが、てつきり村の若い者が媾曳の場所にしたなと思つて、わざと氣をきかして遁げる餘裕を與へるために、少しそこでまご〳〵してゐた。と、急に唸聲が中でした。『まさか、こんなことがあらうとは思はねえから、何をふざけてゐやがるんだと思つて、入つて行つて見ると、この始末、びつくらしたのにもなんにも。私や腰を拔かして了つた。來た時は、女の方はまだ呼吸があつたんだ……。それから俺は前の粂さんとこへ走つて行つて、一番前にお邸へ知らせて貰つた。』

『困つたことをしたな。』

良太はかう言つて嗟嘆した。甚さんとはかねて懇意の仲である。そしてこの息子は一人息子である。親が聞いたら、何んなに歎くだらうと思ふと、良太は人事とは思つてゐられないやうな氣がした。取敢へず醫師を呼びにやつたりしてゐる中に、急報を得た甚さんは、蒼い昂奮した顏をして急いで驅けて此方に來た。

の死を遂げた。近頃出來た小料理屋の酌婦は情夫が迎へに來て逃亡した。

『大變だ、大變だ、水車場で心中があつた！』

ある朝、かう言つて、近所の男が知らせて來たので、良太は草鞋を附けて、そこ〳〵に出かけて行つた。それは寒い〳〵朝であつた。霜が白く地上に置いてゐた。氷つた樹々の間からは、朝日が朗らかに昇り始めてゐた。

上水には、水が滿々とたゝへてゐた。岸には、低い眞竹の藪などがあつて、枯れた萱やら薄やらが靜かに朝風に靡いてゐた。良太は霜の白い板橋をわたつて、畠の縁を横ぎつて、そして水車場の方へと行つた。

『甚さんの家の息子だ、男は！』

かう向うから來た百姓は言つた。

『相手は？』

『何處の娘だかわからねえ。』

やがて水車場に入つて行つた良太は、その息子と誰だかわからない女とが鋭利な刀で互に喉を突いて、折重なつて死んでゐるのを見た。女は赤い帶をしめて、顏を向うに向けて、髮を振亂してゐた。

『やれ、やれ、大變なことをやつた。』

それから十日ほどして、お幾達は、老いた父親と一緒に、悲しい根岸の家を疊んで、俥で川舟の出るところまで急いだ。そこには良太と石川とが見送りに來てゐた。良太は父親に代つて、何彼と荷物のことなどの世話をした。舟が岸を離れようとする時、良太は船頭に吳れぐ〵も言つた。『年寄に女子供だから、よく面倒を見てやつてお吳れよ。賴んだよ、いゝかえ。』

舟は出て行つた。遠くなるまで、良太は其處に立つて見送つてゐた。

十

良太は同じやうにして、毎朝草鞋をつけて出懸けた。林と、畠と、廣い空と、唯それのみを相手にして暮してゐるかれには、世の中は丸で自分には關係がなくなつたもののやうに見えた。世の中は何う なつて行かうが、何う開けて行かうが、それとは丸で沒交涉であつた。かれは大抵は戶外に出て、草を刈つたり、垣を直したり、茶樹を栽培したりして暮した。そして夜は女の兒を抱いて寢ることを樂みにした。

しかし世の中には種々なことがあつた。かれの近所の百姓達の身の上にもかなりの變遷があつた。ある百姓の息子は、東京の繁華にかぶれて、金を持出して家出をした。ある老いた百姓は、何も原因もないのに、ある朝、梁に繩をかけて縊れて死んでゐた。ある植木屋は、高い木の上から足を踏外して不慮

をふくませてゐるおてつの傍には、お幾が坐つて團扇をつかつてゐた。

戰死さへしなければ、――石川のやうに無事で歸つて來ての保養ならばといふ腹が誰にもあつて、一座には何となく微かな哀愁が漂ひわたつた。お幾とおてつには殊にその情が深かつた。お幾は田舍に歸つて、老人と子供を相手に暮さなければならない生活を想像した。艱難の多い生活ではある。其日々々の苦勞に追はれて、まだ少しも樂しい思ひもしたことのない中に、人生の半は早くも過ぎて、その眼の前には、何の希望も色彩もない生活が佗しく横つてゐるのをお幾は見た。『かうして、娘と婿と一緒に遊ぶのも今日ぎりだ。』かう思つて、お幾はそつと涙を袖に拭いた。

『實が大きくなるまでは、しやうがないよ。嫂さん。なァに、經つて見れば、ぢきだよ。今、十三だから、あと五六年も經つと、物心がついて來るからね。』

などとおかねは言つた。

そこはその頃東京の人達の遊びに來るところだけあつて、料理も旨く、座敷も綺麗に、女中達にも品の好いのが多かつた。人々は兎に角樂しく暢々した氣分で半日遊んだ。次男の男の兒が大きな一人前の膳を前にして坐つてゐるさまなども、後には大きな記念になつて、人々の頭に殘つた。

日が蔭つて、かな／＼蟬の鳴く頃、別に俥を頼んで、皆なてんでに別れて自分の家の方へと歸つて行つた。時は遠慮なく經つて行つた。

おてつははら〳〵しながら、絶えず傍から訂正した。『お父さんの言葉はちよつとわからないから、』などと笑ひながら言つたりした。おてつは、いつの間に、かういふ立派な一人前の奥さんになつたかと思はれるやうな風をしてゐた。老いた父親は、遠慮勝に、酒の御馳走になつて其處を辭した。

田舍に歸つては、もう今までのやうに度々逢ふことは出來ないからと言つて、惜別のつもりで石川は一日、お幾と子供達とおてつとを伴れて、護國寺から王子の方へと遊びに行かうと言つた。其時、おかねも老いた父親も誘はれたが、父親は辭つて、おかねだけが行くことになつた。で、其日は人々は皆な牛込の家へと落合つた。行く間際になつて、おせつといふ石川の妹も一緒につれ立つた。

俥を一臺頼んで、代る〴〵乘つて行つた。暑い夏の日で、太陽が上から熾けるやうに射した。綠の蔭を求めては、人々は息つくやうにして休んだ。おかねの額からは、汗がだら〳〵流れた。『角筈のをばさん、代つて乘つたら何うです？』かう度々石川から勸められたが、おかねは、俥なんかと言つて、ずんずん歩いた。後では疲れたと言つておせつが俥に乘つた。

綠葉に埋められた川の畔の茶屋に着いた時には、人々はほつと呼吸をついた。何處かで瀧の落ちる音がして、涼しい風が明放つた廣い室に滿ち渡つた。川の緣にある吹井のほとりで、おかねが冷めたい水に顏を洗つてゐると、二階の欄干から總領の男の兒が見下して聲をかけたりなどした。抱いた兒に乳房

て、下邸をお拵へになつた。もとは、あの十二社の熊野の社が此處にあつたといふことだ。だから、御維新の時にも、此處の邸だけは、お上に返さなくとも好かつたのだ。その谷村時分からあるんだから、この松はもう餘ほど古い。』かう言つて、空を凌ぐばかりに高く聳えた老松を仰ぎ見た。

それから良太は、奥の林や草藪の方へも伴れて行つた。かなりの年月を經たけれども、まだ其方の方は少しも手が着けてなかつた。『矢張、旦那が時々氣が變るもんですから、手を着けようにも手が着けられないんで困ります。』と良太は説明した。

『それで、これは、お上から、しまひには旦那が頂戴するやうになるのかな。』

『いづれ、さうでせう。』

『大したもんだな。』

かう言つて、老いた父親は、腰を伸すやうにしてあたりを見渡した。

老いた父親は、其時おてつの嫁いてゐる牛込の家にも訪ねて行つた。折角出京して來て寄らずにも行かれなかつた。其處では、石川の老父とおてつの老祖父とが始めて相對した。石川の老父は、會津藩でもかなりのところをつとめて、維新の亂には、農兵を募集して、南會津口を固めた一人であつたが、漢學も出來、漢詩も作り、武藝にも達してゐた。がつしりした體格をしてゐた。會津訛と關東訛とは、話してゐながら、互によくは飮み込めないやうに見えた。時々、とんちんかんの言葉を取交した。それを

よく來てはお前の噂ばかりして行くよ。あれもね、旦那が立身しないから、餘り樂には暮してゐないけれどもね。今でも、時々歌なんか咏んで、彦太がゐればつて、いつでもお前のことを思ひ出してゐるよ。』などと奥方は言つた。

で、其夜は『彦太は好い酒が好きだから。』と言つて、キの正宗を御馳走になつて、若い時からの癖の古い唄などを歌つた。『久し振りで彦太の唄をきいたよ。何だか大名小路にゐる時分の心持がする。本當にね、何も彼ももう昔になつた。』かう言つて姉刀自は昔を思ふやうな顔をした。

父親はあくる日は半日、邸の中を彼方此方と良太に伴れられて歩いた。竹藪、茶畑、梅林、そこにかれは婿の努力の一通りでなかつたのを見た。良太は種々なことを説明してきかせた。

『これは大事だ、これまでにするには、並大抵のことでは出來ない。……矢張、地面がわるいから、茶なんかゞ好いかな。これは好いところに思ひ附いた。』

こんなことを言ひながら歩いた。大きな松の樹の下に來た時には、『これは、これで餘程古い。私がよくこの下邸に來る時分には、丁度此處のところに御殿があつて、この松が、かう座敷から見上げて見えるやうになつてゐたが、何でも殿樣の御先祖が谷村からお上りになる時分からあつた松だと言ふことだ。一體此處の邸は、お家の先祖が、甲州の谷村から來ると、一日路で、日暮に此處に着くので、始めは庄屋などに宿を取つてをられたが、何うかして一軒、邸が欲しいと言ふので、それで、此處に地所を買つ

した。昔ならば……十萬石の殿様で、輕いものなどには、ぢかにはお目通りが出來なかつたのに……それなのに、殿様はづか〳〵と手輕に端近にお出ましになつて、岡田は可哀相なことをしたが、國家の爲めだから餘り嘆かぬやうにと仰しやつた。それが、堪らなく勿體ないやうに父親に思はれた。

父親は良太の二階に三日ほど泊つて行つた。良太夫妻が、兎に角早く決心して、東京に出て一廉の生活をしてゐるのが、父親には此上もなく力になるやうに思はれた。おかねの元氣で働いてゐるのも賴もしかつた。九段の邸に行つて、姉娘のおつるにも逢つた。

奥方も姉刀自も、父親は昔からよく知つてゐた。奥方の父に當る江戸家老をした人には、ことに世話になつてゐた。稚い奥方から、『彥太や、彥太や、』と言つて、慕はれたものだ。主從らしい關係があるから、應對には言葉の區別がちやんときまつてゐるけれど、お互になつかしい氣分はその中にも流れてゐた。『彥太はまァ年を取つたな。いくつだね。六十五、それぢや、もうさう禿げるのも無理はない、』など

と奥方は興じた。姉刀自も滅多に出て來ない二階の居間から、聲をきゝつけて下りて來て、『今度はまァ、政十郎がなくなつて、殘念なことをした。しかし、お國の爲めだから……。あまり嘆いて體をこはさないやうにしなければいけない。これからは、嫁と子供ばかりだから、お前に若い氣になつて、しつかりしてて貰はなくつては仕方がないよ。おかねもおつるも心配してな。』かういふ挨拶から、話は段々昔の方へ飛んで行つて奥の世話を申上げた時分のことがそれからそれへと盡きずに話された。『松江に行つた姉が、

になつたが、それを聞いた時には、『父さんも、早く何處かに少しでも怪我をすれば好かつたに……』そつとお幾はおてつに言つた。

田舍から老いた舅が上京して、一家をまとめて、再び其方へ歸らうとする時分には、もう戰爭がすんで、石川も無事に凱旋して來てゐた。一年はいつか經つて行つてゐた、良太が先年から開墾した林は、最早半は茶畑になつてゐた。

戰爭の濟んだ後の東京は、更に一層の賑かさと生々しさとを加へてゐた。錦繪を賣る店には、戰爭の錦繪、凱旋の錦繪などが一杯に下つて、人が大勢立つて見てゐた。車と馬車とは織るやうに市中を通つてゐた。料理屋からは、凱旋した軍人達の騷ぐ氣勢が手に取るやうにきこえた。

老いた舅は、

『變つたなア、丸で、もとの江戸とは思はれない。何處を歩いても、在番で來た時分の樣子はない。今日も大通を歩いて見たが、家のつくりからして變つた。』

かう驚いたやうに言つた。老いた父親の眼には、町人と侍との區別がつかずに、人が皆なザンギリで無腰で歩いてゐるさまが不思議に見えた。それに、箱馬車に乘つて出勤して行く大官の金モールもめづらしければ、外國人のそこらを平氣で夫婦腕を組んで歩いてゐるのもめづらしかつた。始めて駿河臺の邸に、舊藩主を訪ねて行つた時には、昔に似合はず、殿樣の打開いた輕い態度に涙がこぼれるやうな氣が

ぢつとしてきまつた日數を產室の中に過してはゐられなかつた。自分が慰めてやるより他に、自分が力になつてやるより他に、何うすることも出來ない母親をおてつは思つた。母親がおてつの產室を訪ねて來た時には、人目もあるので、互に泣顏をも見せることが出來なかつたが、お宮詣がすんで、おてつが出懸けて行つた時には、親子は折重るやうにして泣崩折れた。慰めたり力をつけてやつたりしようと思つても、それが自分から泣き崩れて行つてゐるのをおてつは見た。『仕方がないよ。母さん。これから皆なして、力になつて行くから、心配しないで御出なさいよ。これもかうなる運だから仕方がない。』かう言つてまた親子は泣いた。

お幾はお幾で『それで、石川からは便りがあるかえ。お父さんは、それでも、もう年を取つてゐるんだから仕方がないけれど、石川はまだ若いんだから。』

かう言つて涙を飲み込むやうにした。

おてつは、自分が今は他人の妻で、一緒にゐて力になつてやることの出來ないのを歎きながら、日が暮れない中に、牛込の方へと歸つて行つた。

悔んでも歎いても仕方がなかつた。さうしてゐる中にも月日は經つて行つた。戰爭は段々下火になつて、遺族の許に戰死者の遺品の屆いて來る時分には、もう賊軍の掃蕩されるのも目に見えるやうになつてゐた。石川はある戰爭で、指揮刀を持つた手に銃丸を受けて、水俣から長崎に引返して、病院に入るやう

義兄の戰死の報は、一番先に石川からおてつの許に知らせて來た。警視廳の方でも、わかつてはゐたけれども、まだ公然に遺族の許に知らせる段取にはなつてゐなかつた。一戰爭すんで、他の同僚の家々には便りが來るけれど、うちには何うしてかやつて來ない。お幾は心配で、心配で仕方がないので、十三になる總領の男の兒を牛込の石川の家にやつたり、良太の許によこしたりしてゐた。おてつはその報知を得ると、母に知らせる前に、先づ良太の許にやつて來て、その話をした。

良太は黯然として、『は、は、』と言つて低頭いて聞いた。それに引かへて、おかねは、『だから、言はないことぢやない。死ぬ當人は、勝手で死ぬんだから構はないけれど、あとを何うするんだつてあんなに言つたんだ。』涙をはら／＼と落しながら言つた。

丸髷に結つたおてつは、青白い昂奮した顏をして、默つて坐つてゐた。涙は流し盡して、もうなくなつたといふやうに見えた。『でも、お前の體だつて大切だよ。もう今月ぢやないか。』かう叔母が言ふと、『いゝえ、私なんか何うなつたつて構ひませんけれど、母さんが何んなだらうと思つて……』かう言つて、そつと涙を襦袢の袖で拭いた。其夜、良太は根岸の家に嫂を訪ねた。

奥方は言つた。『まァ、ね。あの子の氣丈なこと。母さんのことばかり心配してゐるんだよ。親孝行な子だねえ。』

おてつはこの悲報の中で、やがて女の兒を生み落した。おてつは、初產であり、夫は留守であるが、

手がつけられなかつたのですよ、』と言つてお幾は滴した。

新聞はあつたけれど、其時分は、今のやうに早く詳しく、戰地の狀態が此方には知れ渡つて來なかつた。おかねと良太とは、却つて旦那の晩酌の話の中から戰地の模樣を知つた。『何うも思ふやうに戰爭が運ばない。熊本が危ない。それを援けに後から廻した方の旅團の中に、石川も岡田もゐるんだが、その方面よりも、却つて前の方面の方の賊軍が強い、』などと旦那は言つた。熊本が救はれた報の達した時には、『まア、好い鹽梅だ。今度の戰爭には、賊軍も大分痛手を負つたらしい。石川や岡田の入つてゐる方の旅團と熊本とが第一に連絡が取れた。その樣子で見ると、其方の方面でも、隨分激しい戰爭があつたらしい。』と旦那は話した。そして、『これさへすめば、もう大して大きな戰爭もあるまい。』から旦那はつけ足した。

戰地に行つた義兄からは、良太の許に一度便りがあつたばかりであつた。梅の花が散り、門前の吉野櫻が散り、野椿の赤い花が黑い春の土の上にいくつとなく重つて落ちた。雪解の水が山から押して來るので、良太はをり〳〵水車場の方に水の調節をはかりに出かけて行かなければならなかつた。續いて、筍の季節が來て、竹藪の中には、それを買ふために、大勢の商人が集つて來た。それを監督したり、値段をきめるために買手をせらせたりして、良太は忙はしく暮した。良太は買手から金を受取つて、一々それをおかねに渡した。

大變だよ、嫂さん、大事にしないといけませんよ。』かうおかねが言ふと『本當にこの兒はやかましくつて手がかゝつて仕方がない。一體、體があんまり丈夫ぢやないのかも知れない。』と言つて、お幾はそれを黄縞のねんねこで負つた。お幾に取つては、長年の田舍生活、舅生活から、不自由勝ながらも、兎に角夫婦水入らずの生活に入つたと思ふと間もなく、俄かに夫は出征して、僅かの間の樂しい生活も忽ち夢と過ぎ去つて了つたのを悲しまずには居られなかつた。

『何うせ、女はかうですよ。一生苦勞するやうに出來てゐるんですよ。』

かうお幾は眼に涙を浮べて言つた。

續いておてつが訪ねて來た話などをお幾はした。大きなお腹を抱へながら、別段悲しいやうな顏も見せなかつたことや、それと言ふのも、大勢の子供を抱へた母親に悲しい思ひをさせまいとする健氣な心からであつたらうといふことや『母さんだつて、武士の妻だから、そんなにくよ〳〵思はない方が好い、』とあべこべに慰めて歸つて行つたことなどがそれからそれへと語り出された。『それに、石川は隊長になつて行つたんだから好いけれど、うちなんか、本當に、行けとも言はれないのに、狂氣のやうになつて出かけて行つたんだから……。本當に家のことなんか少しも思つてゐないんだから。それに、國からも、無論留めて來たんですけども、そんなことには頓着しようとせず、私が、もしもの時は、あとは何うするんですのつてきくと、なるやうにしかならない、好いやうにするさと、かうなんですからね。丸で

早く歸るといふのを、それでも酒を一杯御馳走して、日が暮れてから、おかねは兄を門口まで送り出した。

『兄さん、本當に考へて見る方が好う御座んすよ。』

『まァ、國からも、何とか言つて來るだらうから。』かう言つたが、やがて襟卷をまきつけた兄の姿は、夕闇の中に消えた。

九

兄が戰爭に出かけてから、おかねは一度根岸の嫂の家を訪ねた。此處では廣すぎるからと言つて、兄が移轉させて行つた家は、小さな川に臨んだやうな處にあつた。二疊に六疊、その隣には版木屋の職人が住んでゐて、死に瀕した老爺が二三日前から炬燵に當り切りであつたが、おかねが訪ねて行つた前の夜、家の羽目から煙が出るので、驚いてお幾が行つて見ると、爺さんは死んで、着物の裾か何かゞ炬燵にくばつて、危く大事に及ばうとした。『喫驚したにも何にも……。それでもまァ大事にならないでよかつたんですよ。』お幾はおかねの顏を見るや、挨拶もせずにその話を持ち出した。

おかねはさびしい嫂の家を見た。二番目の男の兒は、それでも日當りでおとなしく遊んでゐたが、今年生れた男の兒は、風邪を引いたかして、咳嗽を苦しさうにのべつにせいてゐた。『百日咳にでもなると、

良太もしかし强つて留めるわけには行かなかつた。良太には、その方の望みは、もうすつかり絶えて了つてゐたけれど、武藝もあり算筆の達者な義兄に、榮達の心を捨てることを望むのは酷であつた。妻子を捨てゝも、自から進んで戰場に赴かうとする心は、良太にもよく飮み込めてゐた。

『田舍の方にも昨日手紙を出した。』

かう續いて岡田が言つた。

『さう——そつちだつて、考へて見なけれやならない。お父さんだつて、もう年を取つてゐるし、母さんはあの通り目が見えないし、もしものことがあつたら、それこそ嫂さんが大變なんだから、年寄、子供を抱へて……』

『それは仕方がないよ。』

兄は素氣なく言つた。

『兎に角、何とか國からも便りがあるでせうから。』とてもその思ひ立をとゞまらしめることが出來ないのを見て取つた良太は、かう言つて話の段落をつけた。

義兄はそは〳〵してゐた。戰爭に誘はれた昂奮した血は、名殘なくその全身に滿ち渡つて居た。行く行かないよりも、警視廳でやつて吳れるかやつて吳れないかが問題になつてゐるやうな口のきゝ方であつた。おかねばかりが、唯將來を心配した。

『本當だともね……。何も望んで行くには當らない。女房子のことだつて、心配せずには置かれないんだから。』

と、おかねが言ふと、

『それは、まァ、さうに違ひないが、いつまで巡査なんかをしてゐたつて仕方がない。かういふ時に行つて、一働きして來るのが武士の勤めだ。それは死ぬかもわからない。しかし、戰爭に行かなくとも、明日死んで了はないとも限らない。何ぞの時には、進んでお上の用に立つのが武士の習ひだ。死ぬことを考へては、戰爭などには行かれない。』いくらか激昂した調子で岡田は言つて、『おてつの亭主にも、もう命令が下つたさうだ！』

『あゝ石川さんも行くのかえ？』始めて聞いたやうにおかねは聲を高くして、『それは心配だねえ。おてつは六月ぢやないか。』

それには岡田は頓着せずに、

『兎に角、私も行くことにきめて願書を出して置いたんだから……』

『困るねえ、男は。嫂さん、困つてゐるでせうねえ。』

『でもな、そんなことは言つてゐられない。その代り歸つて來ればわるいことはないんだから。』

『それはさうだらうけれど……』

警視廳の詰所あたりにも殺氣が漲つてゐた。零落に瀕して、何か事あれかしと思つてゐた士族は勿論、薩長に酷められた方の藩の侍共は、今こそ復仇の時が來たとばかりに、從軍を志願するものが、其處にも此處にも集つて來た。

その年の初めに、お幾は男の兒を生んだ。それのお祝に良太もおかねもまだ行つてゐなかつた。お幾は漸く產室を離れて、人並に臺所を働くことが出來るやうになつたばかりであつた。

丁度其時、良太は裏の方の林を開墾して、茶樹を栽培しようとしてゐた。廣い邸址の荒地は、長い月日をかけても、容易に未だ十分の成績を示すことが出來なかつた。それに、此頃、且那は水車場を一つ經營して、上水の水をひいて、そこに水車を二つ仕かけた。その方にも、良太は出かけて世話を見てやらなければならなかつた。

『おい、おい。』

誰か呼聲がすると思ふと、それはおかねが良太を迎へに來たのであつた。良太は林から出て行つた。

『あゝさうか、今すぐ行くから。』かう言つて、それ〴〵土方達に用を命じて置いて、そして自分の住宅の方へと歸つて行つた。家には義兄が待つてゐた。

『お上の御用なら仕方がないが、何も此方から望んで行くには當らないと思ふけれど……』

かういふ良太の後について、

か。」

三年間溜めて置いたと言はぬばかりに、其夜は三人して語り合つた。主人の兄は、二合の晩酌を旨さうに飲んで『それにしても變つたな、東京は？　丸で見違へるやうになつた。』などと言つた。

其家から遠く隔らない町の角には、賑やかな青物市揚などがあつた。其處では、大勢の人々が寄り集つて、カンテラの油煙の高く暗く靡いてゐる下で、わからぬ聲を張上げて野菜の相場をきめてゐた。ある社では、其夜が丁度縁日で、いろ／＼な店が到るところに並んでゐた。總領の男の兒を伴れたお幾とおかねとは、そこらをぐる／＼と廻つて、別な路を通つて、兄の勤めてゐる警察署の横から折れて、そして家の方へ歸つて來た。

八

その時分、廟堂の空氣が變調を呈してゐることは、度々旦那の晩酌の口から洩れたが、次第に險惡になつて、新聞にまでもその記事が公然と載せられるやうになつた。『困つたもんだな。折角これまでにしたんだから、內輪揉めはしないやうにする方が好いんだがな。外國人がその隙間を覗つて、何んな眞似をするかわからないんだから。』旦那はこんなことを言つてゐたが、一月二月經つて、年を越すと、いよいよ戰爭は避けることが出來ないといふ形勢になつて來てゐた。

ね。ひどいとはきいてゐたけれど。』かう言つておかねは嗟嘆した。
『何でも、これからは商人が一番だよ。とても我々では、子供を立派に修業させるといふわけにも行かないから、商人にするのに限るよ。そら、おかねさんは知つてるか何うだか知らないけども、元、足輕で、疊が敷けなくつて、藁の上に暮してゐた家があつたがね。あそこなんか、初めから困つて、息子を年季にやつたもんだから、今ではその息子が出來上つて、機屋を始めて、それは大したもんだよ。今ぢや、その婆さんなんか、昔のことを忘れて、大きな顔をしてゐるからね。』
『さうかね……。百姓にはさう急にはなれないから、何うしても商人だね。宅でなども、もう十三だから何處か好いところへやりたいと思つてゐるんですよ。』かう言つたおかねは、此間中二つ三つあつた年季奉公の口などを思ひ出してゐた。
話はそれからそれへと續いた。後には、おかねは奥方の嫉妬深いことなどを話してきかせた。と、お幾は『上つ方でも、矢張さういふ苦勞があるのかねえ。え、え、本當だともね。妾の一人や二人、あの身分では何でもありやしないんだから、默つて放つて置けば好いのに……。矢張子供がないからねえ。』
『一人でもあると好いんだが。』
『本當だねえ。』
其處に主人の兄が劍の音をぢやらつかせながら歸つて來て、『お、めづらしい。誰かと思つたらおかね

『でも、まァ〳〵、慾を言へばきりがないから……。それに、あの子はませてゐて、親のことばかり心配してゐるから、まァ、今度のことは好い縁なんでせうよ。』

　こんな風にして二人は盡きずに話した。何も構ふものはないが、まァ、緩くりして泊つて行つて下さいと言つて、お幾は自分で肴屋を見に行つたりした。總領の男の兒は、『只今、』と言つて、やがて元氣よく近所の學校から歸つて來たが、續いて十になる女の兒が、『母さん、お菓子、』と外から入つて來て、そこに叔母さんが來てゐるのを見て、慌てゝ風呂敷包を放り出して、お辭儀をした。

『まア、大きくなつたね。内のお初と三つちがひだね。本當に大きくなつた。』かう重ねて言つて、おかねは菓子を二人にわけてやつてから、傍に立つてゐる三番目の男の兒の方を見て、『そら、お前さんにも一つ。さつきやつたんだから、餘り食べるとポンポをわるくするよ。』

『もう澤山だつてお言ひなね。さつきもあんなに戴いて。』

かう傍から母親は言つた。

　二人の話は容易に盡きなかつた。一番問題になつたのは、田舍の士族の零落の話で、何處の家では奉還して一時は好かつたがすつかり駄目になつて了つたの、彼處の家は今だに方針が定まらずに主人がぶら〳〵遊んでゐて、居食同然だから一家のさまが慘めで見てゐられないの、彼處は何うの其處は何うのといふ話がそれからそれへと續いた。家老が落魄れてひどくなつた話をした時には、『そんなになつたか

『結構なことはひとつもありやしない。總領がもうお嫁に行つたのに、これでは本當に仕方がないつて言つてゐるんだよ。』

田舍風の口の利き方やら、野暮な取繕はない樣子などが、却つておかねに田舍の生活をなつかしく思はせた。尻上りのアクセント、ぞんざいな言葉づかひ、それを聞くと、おかねは再び田舍にゐた時分に返つたやうな氣がした。

『でも、良太さんは仕合せだ。あの時思ひ切つて東京に出たのが好かつたのだよ。大へん好いつていふ噂だよ。』

『そんなことがあるもんですか。』

『でもお邸が盛んだから、何んなにでも好くなつて行けるからね。』

『何が、何だか――』

娘が世話になつた禮を、あとになつてから思出したやうにしてお幾は言つたりした。『まア、まア、あれが片附いたから、それでも好いんだよ。年が少し違ひすぎるし、前に二度も上さんが不緣になつて出て行つた家だつて言ふから、まだ、海のものとも川のものともつかないけれど……』

『でも、石川さんは、警視廳でも評判が好いんだつて、……宅の旦那さんなども、御存じで、よく賞めてゐますよ。おてつが親孝行だから、あゝいふ好い緣が出來たつて言つてゐますよ。』

良太もおかねもその話には不賛成ではなかつた。奥方も旦那も好い緣だと言つた。會津では、かなりに好いところを勸めた家柄で、昔なら、とてもさういふところへは嫁けなかつたといふことであつた。その緣は、岡田の家内が東京に來ると、間もなく結ばれた。奥方は餞別に指環だの着物などを呉れて別れを惜しんだ。其結婚の席には、良太も羽織袴で出かけた。

おかねは是非一度兒の家に行つて見たいと思つてゐたが、子供の世話やら、奥の用事やらで容易に家を明けることが出來なかつた。それに、都の隅と隅とに離れてゐるので、交通の不便な當時にあつては、さう手輕には出かけて行けなかつた。おかねが始めて其家をたづねて行つたのは、嫂が上京して二月ほど經つてからのことであつた。

嫂は落ちるばかりの腹を抱へてゐるのをおかねは見た。總領の男の兒が十三、次が女の兒で十、その次には七つになる男の兒、それでさへ隨分重荷であるのに、また出來ては兒も大抵ではないと思つた。嫂はお幾と言つて、三十八、矢張同藩士の士族の娘で、おかねが十四から十八九になつてお邸に奉公に上るまでひとつ家にゐて、同じ飯を食つたので、嫁、小姑の間柄ではあるが、長くわかれてゐると、なつかしいやうな愛情が其の胸に萠さずには居なかつた。

『おかねさん、また出來るんで困るよ。』

『結構だがね。』

と言つて呉れた。で、おてつはその時始めて、私は岡田政十郎の娘だと言ふことを述べて、丁寧に挨拶をした。

その翌日、若い部長は、おてつの父親に言つた。

『岡田さんには、大きい娘さんがあるんですね。』

『いや。』

『中々別品さんだ。』

挨拶に困つてゐると、

『何うだらう？　私に呉れませんか。』

『さア。』

『好いだらうと思ふんだが。』

『私も好からうと思ふが……』

『ぢや、下さい。』

こんな冗談見たやうなことで、その縁談は始まつたが、岡田の家内が上京する頃には、その話は最早すつかりきまつてゐるやうなものになつてゐた。おてつの父親は、若い同僚とは交情が好く、その氣質やら家庭やらをもよく知つてゐた。その男は石川と呼ばれて、その一家は牛込の方に住んでゐた。

るからわるいんだ。父親の威光がないから、仕方がないから、私が出て折檻すると、この餓鬼は、好い氣になりやがつて、お前さんにばかりついて行く。本當にしやうがありやしない。』かう言つておかねは嗚咽つた。

七

おかねの兄の家内が、子供達をつれて東京にやつて來たのは、その翌年の秋であつた。さういつまでも夫妻わかれて住んでゐるわけにもゆかない。何うやらかうやら生活の方法が立つならば田舍は田舍ですることにして、そつちで一軒持つた方が好い。かう言はれたので、家内は思切つて東京に來て、始めて古い榎の木のあるあたりに一軒、家を構へた。

その以前にも、おてつは正月とか盆とかには何處にも行くところがないので、父親の下宿してゐる合宿所に訪ねて行つて、一日遊んで來るやうなことが度々あつた。それは去年の秋頃であつた。ちよつと、用事があつて、其處に訪ねて行くと、生憎、父親はゐなくつて、二階には大勢若い巡査が集つてゐた。上るにはあがつたが、きまりがわるくつて困つてゐると、會津の藩士だといふ二十八九の若い巡査部長が見かねて、

『此方へお出なさい。岡田さんは、もうぢき歸つて來ますから。』

叔母のおかねは、良太に比べては、元氣の好い、勝氣な質であつた。何ぞと言ふと、家名にかゝはるといふことを叔母はよく口にした。『お前、そんなことをしては、父さんや母さんの恥辱ばかりではない。岡田家の家名に係はるから、そこをよく考へなければいけないよ。岡田家はこれまでついぞ人に後指さゝれたことはないんだから、』などと言つて戒めた。

叔父と叔母とは、時には口をかへし合つたりするやうなこともないではないが、大抵は叔母が言募ると、叔父はぶつ〳〵言ひながらも默つて了ふのが例であつた。其時分、良太は門前の通りに、遠くから古い家を買つて運んで來て、長屋を建てることについて、大工だの土方だのを指揮して忙はしく暮してゐた。奥から下つた金は、それを一々叔母に預けて、簞笥にしまつて錠をかけさせた。土方の勘定などは、奥の手を煩はさずに、皆なおかねの手から支出してやつた。

良太達の女の兒は、丁度七つになつて、來年からは學校に行くと言つてゐたが、可愛い盛りで、終日長く日當りの好い緣側で歌を唄つたりおばさごつこをしたりして遊んでゐた。おてつが奥の用事の隙に、其處に行つて見ると、人形を箱の中に並べて、何か獨言を言つてゐた。女の兒は、『田舍のねえちやん、田舍のねえちやん、』と言つては、おてつの後を追つた。それに引かへて今年十一になる男の兒は、思ひ切つた惡戲子で、母親の言ふこともきかずに、泥いぢりをしたり、近所の池に行つて水泳をしたり、着物を泥まみれにして歸つて來て母親に烈しく折檻されたりした。時には、『一體、お前さんが甘やかして育て

下の一間に良太を迎へたが、其時、總領の娘を上京させるといふ話が始めてきまつた。酒を飲まない良太は、近所の名高い汁粉などを取つて貰つて、歸りは上野の森をぬけて來た。

おてつはその翌年の春になつて始めて上京した。丁度東京に來るといふ近所の確かな人があつたので、それに伴れられて、田舍の川の端にある船宿の棧橋から舟に乘つて、大きな流を下つて、その翌日の午後に父親の下宿してゐるところに着いた。父親は一晩とめて、翌日すぐ良太の許へとおてつをよこした。

俄かにませて大きくなつた姪を叔母は見た。田舍仕立ではあるけれども、色は白く、髮は濃く、姿はすらりとして何處となく品があつた。落着いて物を言ふやうな質で、怜悧な勝氣な氣質がありありとその態度に見えてゐた。一目見た奧方は、忽ち氣に入つて、奧方の小間使の格で、其處にゐることになつた。

その時分は、邸奉公は、一面娘を教育する方便であつた。奧方は何の彼のと言つてはよくおてつの世話を燒いた。來てから一月も經たない中に、おてつは、着物を拵へて貰つたり指環を貰つたりお高祖頭巾を貰つたりした。風俗も次第に都會風になつて行つた。飲み込みの早いおてつは藤の花の咲く時分には、土臭い田舍言葉から脫して、人もふり返るやうな都の娘になつてゐた。

『おてつ、おてつ。』

かう言つて、旦那も奧方も姉刀自も可愛がつた。

同藩の者が澤山に集つてゐた。中にはかなり好いところまで立身してゐるものなどもあつた。義兄はさしづめ下谷の坂本署詰を命ぜられて、取敢へず其方に下宿したといふ報知があつたが、最初の日曜日には、朝早くから義兄が良太を訪ねて來た。

國の話やら、士族の零落した話やら、新しい勤口の話やらが盡きずに語り出されたが、それに引かへて、おかねは兄の口から父親や母親や姪甥達の消息などをきいた。兄の總領の娘の話なども出た。『おてつはもうとつて十七になるかね。田舍に置いたつて、しやうがないぢやないか。それよりも東京にお出しよ。お邸にも、今、丁度手がないんだから。奥樣にお願ひしたら、使つて下さるかも知れないよ。田舍に置いたつて仕やうがありやしないぢやないか、』などとおかねは言つた。おかねは、國を立つて來る時大手のところまで嫂に伴れられて送つて來て吳れた色の白いほつそりした姪の大きくなつたさまを眼の前に浮べてゐた。

兄はかねて主從に近い關係があるので、奥へも手土産を持つて顏を出したりしたが、その日は奥で御馳走になつて、元氣の好い顏をして夕方に歸つて行つた。總領の娘の話は奥方の口からも出た。

その次の日曜日には、今度は、そのかへしに良太が義兄を訪ねて行つた。それは丁度根岸の奥に當るやうなところで、旗本の隱遁した大きな二階は、その大勢の巡査の合宿所になつてゐた。そこには各藩の人々がゐた。佐土原藩の人もゐれば、會津藩の人もゐた。義兄は、そこでは話が出來ないと言つて、

高が植木屋だから大したことも出來ねえが、それでも傳馬の一杯も品川から出すと、歸りには胴がけにチヤラ〳〵する程金になるんだからね、』などと言つてきかせた。しかし、良太は、さういふことに對しては、更に心を動かさなかつた。酒も飮まず女にも興味を持たない良太は、近頃出來た場末のあやしげな小料理屋の前をも知らぬ顏をして通つて行つた。

國の方からの便りと、新しい東京の勃興して行く光景とは、かれの眼の前にいつもごた〳〵と混り合つて見えてゐた。一方では士族が零落して行くと共に、一方では新しい氣運が凄じい勢で巴渦を卷いて進んで行つてゐた。をり〳〵用事があつて東京の方に行つて見ると、車が通り、馬車が通り、汽車が駛つてゐた。人々の風俗なども著しく變遷した。もう昔のやうな大小を差したお侍を見ることも出來ず、自身番なども見ることも出來ず、十年前なら誰か必ず斬つて捨てゝ了つたであらうと思はれる外國人が、意氣揚々として馬車に乘つて街頭を走らせて行つてゐた。

寫眞だの新聞だのも、かれにはめづらしく思はれた。

おかねの里の兄からは『田舍にゐたつて仕方がない。何うか方法を立てなければならない。老父はもう年を取つたから仕方がないが、私はかうしてぢつとしては居られない。それに子供も大勢ゐるから、そのことも考へなければならない。』かう度々言つてよこしたが、遂に決心して、警視廳の巡査を志願して東京に出て來たのは、良太が其處に來てから三年目の年の暮に近い頃であつた。其時分、警視廳には、

ら、土地に對する種々な計畫を立てた。梅の若木を安く買つて栽ゑさせたのも、竹藪を段々大きくさせたのも、皆な旦那の意見であつた。ある日には、奧の林の緣で働いてゐる良太を捉へて、『良太、良太、好いことがある。茶を栽ゑろ、茶を栽ゑろ。茶ならきつと旨く出來る。十年後には立派なものになる。狹山茶つてな、この奧に行くと、茶が澤山出來る。』かう言つて、茶樹の苗を澤山に安く買つて、それを梅の樹の下に一杯に栽ゑさせた。

良太は常にせつせと働いた。國の方の士族の零落の話などを聞くと、再び世に出ようとするやうな念はもう毛頭起らなかつた。此處にゐて、精々と働いて行くより他、適當な職業は自分にはないやうに思はれた。良太は旦那の家の內のことも外のことも、いつも相談相手になつたが、しかし多くは草鞋を着けて戶外に出て働いてゐた。それに、近所にゐる百姓達との交渉もすべてかれがその任に當るので、その人達との交際も段々篤く深くなつて行つた。何處に行つても良太の評判はよかつた。『あんな正直な人はあんめい。』かう誰も彼も言つた。お邸の靑山さんと言へば、近所で知らないものはなかつた。植木屋、土方、左官、指物師、さういふ人達は總べてかれを靑山の旦那、旦那と言つて尊敬した。

植木屋の親方は、其頃矢張かれと同じ年恰好であつたが、新開地の橫濱の方に好い仕事があつて、想像にも及ばぬほど金廻りがよかつた。『旦那、それは大したもんですぜ。素手で行つても、少し、頭のあるものなら、ぢき、でかい金持になれる。金がころがつてゐるつて言ふのは、橫濱のこつた。私なんか、

維新の初めに父親が死んでから、兄弟はいづれもやくざで、長男は家出、次男は放蕩、三男が國を仕舞つて東京に出て、何處か下町で商賣を始めたが、これも思はしくなくて、をり〳〵奥方の許に愚痴を滴しに來た。國家老の跡目を相續した中年の男の許には、此家の旦那のおきよ様といふ妹が嫁いてゐたが、何の彼のと思はしくないことが多く、火災に燒けた後は、町に家作を買つて、人を使つて石屋などを始めてゐた。『林は駄目だ。のらくら者だからな。あんなものに妹をやつたのが誤りだ。昔なら、馬鹿でも何でも家老様で通つて行つたが、世の中がかうなつちや何うにもならない。あれこそ本當に木から落ちた猿だ。』かう言つて旦那は笑つた。其他、松江の藩士に嫁いた奥方の妹が、一家職を求めて上京して、近い處に住んでゐるので、ちよいちよいよく訪ねて來た。その妹には、七歳の總領の男の子に四歳の次男があつた。良太は昔から知つてゐて、おみか様、おみか様と呼んでゐた。それに、その夫もをり〳〵は訪ねて來た。武藝の達人で、槍は藩中でも聞えた方だが、それより他には學問も世才もないやうな人で、旦那とは話が合はなかつた。『あゝいふ人間が多いから困るんだ。時勢を丸で知らないで、また再び殿様の世になるやうなことを考へてゐるんだからな、』などと旦那は言つた。

六

旦那は學者でゐながら、一方稼穡の道にも長けてゐた。廣い邸の中を日曜などにはぶら〳〵歩きなが

『そんな馬鹿なことがあるもんか。』

『だつて、さうなんだもの。』

しかし旦那とお高刀自の前では、奧方は夢にもそんな風を見せなかつた。奧方は綺麗にお扮裝をして、しやんとした姿で、旦那の晩酌の濟むのを待つて、女中なりおかねなりに給仕をさせて夕飯の箸を取つた。旦那は旦那で、機嫌の好い顏をして、役所であつたことや、世の中の移り變りや、租税の話や、銀行の話などを種々と話した。兵營の騷動の話なども、家の人達は新聞よりも却つて旦那の口から詳しく聞いた。參議達の噂なども旦那はよくした。

『これからは、俺は士族だからでは通らない。何でも自分の力でなければ駄目だ。町人でも實力さへあれば、何んなにでも、立身出世が出來る世の中になつたんだから……。何でも勉強が肝心だ。それにしても、考へると、よくもかうも變つたものだ。十年前には、今、こんなにならうとは夢にも知らなかつた。參議達でも、あんまり變りすぎたのに喫驚してゐる位だからなァ。』

時にはまた、『それにしても、士族は慘めなもんさ。公債を貰つたつて、奉還したつて、僅かの金では何にもなりやしない。それに、士族をやめたから、小さく町人になるつていふ譯にも行かないし、昔の癖が除れないから困るよ。國などでも、もう隨分困つてゐるものもあるやうな話だ。』

さういふ時には、奧方の里の話や、緣戚に當る國家老の家の話などがきまつて出た。奧方の里では、

やがて、『定さん、旦那さまがお出まし！』

かういふ聲がきこえると、やがて車の音が門前の礫を轢つて向うへと出て行つた。毎日四時頃には、旦那はきまつて歸つて來るが、時には九段の邸の方へ廻つて泊つて來ることなどもあつた。其處には、二十七八の綺麗な妾がゐて、おかねの姉のおつるは、取締をするために、移轉してから間もなく再び其方へと行つて勤めてゐた。

『昨夜は向うへお泊りなもんだから、今日は奥樣の御機嫌がわるくつて仕方がない。』おかねはをりをりこんなことを良太に言つてきかせた。

『子供がないから、何うしても、並ではありませんよ。』

『一人位あると好いんだが。』

『本當ですよ。あればまぎれてゐるんだけども、ないもんだから、氣難かしくつてしやうがない。今日もさんざ怒られた。』

『仕方がない。』

『それァね、奥樣の身になれば、尤もですけども、こんな立派なお家なんだから、お妾の一人や二人位平氣で入らつしやると好いんだけども……』かう言つたが、『それに、奥樣は姉さんが向うに行つてゐるのですつかり向う側になつて了つたと思つていらつしやるんだから、本當に困る。』

つてからも、長い間かゝつて、其處でお化粧をするのが常であつた。湯あがりの奥方の顏は灯のまだつかない夕闇の空氣の中にくつきりと白く見えた。

前から抱へてゐた車夫の定は、旦那が引越すと共に、一緒に引越して來て、門前からさして遠くない小さな百姓家の片榻を親子三人して借りて住んでゐたが、朝、七時になると、きまつて、倅を玄關の方へ持つて行つて置いて、臺所の前の日當りの處に立つてゐたり、良太が住んでゐる緣側のところに來て腰をかけてゐたりして待つた。さういふ時には、おかねはきまつて火鉢を出したり茶を出したりした。

二番目の女の兒はもう四歲になつて、ちよこ〳〵と其處に步いて來ては無邪氣な口をきいた。

『遠くつて大變だね。』

『なァに、それほどでもありません。』

『お役所に行つて、待つてゐる間が大變でせうね。』

何うかしておかねがこんなことを訊くと、

『なァに、溜りがありましてな。いろんなことをしますよ。私はから駄目だが、博奕を打つ奴も隨分ありますよ。此間、副島さんの車夫と藤浪さんの車夫とが喧嘩して、頭から血を出したりなんかして大騷ぎでしたよ。亂暴者が多う御座んすからな。』さういふ定は、おとなしい、無口な、人の好い車夫であつた。

五

五十恰好の常さんといふ奴僕は、毎日午後二時頃になると、内井戸の釣瓶を繰つて、据風呂の水を汲んで、その下の火を焚きつけた。

それは丁度奥の茶の間から廊下を通つて來るやうなところにあつた。火を燃すところは、晝でもちよつと薄暗く、外から入つて來ると、人のゐるかゐないかもわからない位であるが、下を焚きつけると、火がちよろ〳〵と薄暗い壁に映つて、脊を丸くして、木片や木の根つ子を釜の中に投り込んでゐる常さんの姿がぼんやり浮んで見えた。常さんはいやに鼻にかけて口をきくやうな老爺で、ふが〳〵爺といふ名が下では通つてゐた。『本當に、あのふが〳〵が、遊んでばかりゐてしやうがない、』などと女中達はいつも噂してゐた。

風呂が沸くと、常さんはいつも臺所へ行つて、

『お湯が沸きましたから、お上に申上げて下さい。』

と吃りながら言つた。

しかし決して奥方が一番先に入ることはなかつた。お姉様が入つて、旦那がゐれば旦那が入つて、それから奥方が入つた。奥方は風呂場の戸を明けた處にある三疊ばかりの一間に着物をぬいで、湯から上

麗に掃除されて、石の手洗鉢には綺麗な水が一杯に滿ちて、それに、新綠と空と白い雲とが靜かに映つた。小鳥の聲が賑やかにきこえた。

『鳥が多う御座いますね。』

『町中とは、何うしても違ふね。』

『九段にをりますと、鳥の聲など、滅多にきこえない位ですもの。』

『さうですね。』

二人はかう話しながら歩いた。

飯焚きに、小間使に、僕に、それに、おかね姉妹に、親類の人達などが來て、その日は湧き返るやうな賑やかさであつた。今まで長い間、戶締になつて、暗くさびしく林や草藪の中に埋れてゐた家とは何うしても思はれない。おかねの總領の男の兒は、近所の學校に通つてゐたが、歸つて來ると、俄かに人が大勢入り込んで來てるるので、喫驚したやうな顏をして、凝とそのさまを見詰めてゐた。

暫くすると、門から長い涼しい木蔭の路に車の轣る音がして、旦那は役所からぢかに此方へと歸つて來た『あゝもう皆な來たか。それは好かつた。早かつたな。何うだ。少し陰氣だが、まア暫らく此處に我慢してゐるんだな。』莞爾しながらかう言つて、奧方や姉刀自のゐる茶の間の長火鉢の前に來て、どつかと坐つた。

揉手をしながら良太が言ふと、

『はァ、これはもとお邸の奥の間の方だねえ。餘程前に、一度お上のお伴をして來た事があつたが、その時分は、もつと大きなお邸だつたが、』緣側に出て見て、『それでもお庭は變らない。』

『隨分ひどくなつてをりましたんですけれども、まァ何うやら斯うやら、この位まで致しました。今日までもう少し植木に手を入れさせようと致しましたんですけれども……間に合ひませんで。』

『段々でなければ、さう綺麗にはならないよ。』かう言つて、姉刀自は自分の居間と定められた二階の方に行つて見た。そこは奧方の居間の入口から階段を上つて行くやうなところで、南の丸窓からは、庭の新綠が滴るやうに美しく見えた。涼しい風が、兩方明いた障子から流るゝやうに入つて來た。

『此處は夏は涼しくつて、冬は暖かだらうと思ひました……』

『結構だねえ、勿體ない位だよ。繁行の書齋にでもする方が好くはないか。』

『旦那樣のは、奧に御座いますし、それに、さう仰しやられましたから。』

『さうかえ。』

肥つて何の苦勞もなさゝうな姉刀自は、緣側へ出て、暫し庭の方を見てゐたが、やがて下に下りて、

『お君さん、好いところだねえ、』と奧方に聲をかけた。

奧方と刀自とは、彼方此方と家の中を見て步いた。旦那の書齋、客間、疊を敷いた長い廊下、厠も綺

旦那が佐幕黨の家老達から壓迫されて閉門を仰付かつたり城外の村に住んだりした時分には、この奧方も隨分種々な艱難に遭遇した、時には米櫃に米がなくなつて、侍女のおつるが一升買をしたことなどもあつた。それに、旦那は家に居ないやうな時が多かつた。旦那は結婚した當座から、京都の方へ行つたり、水戸へ行つたりして、家を外に、天下の志士と交際した。今でこそ、新しい政府に重く用ゐられて、立派な邸宅に住むことが出來るやうになつたが、時勢が非であつたなら、更に何んな艱難に遇つたか知れなかつたのであつた。

奧方と一緒に、旦那の實の姉に當る三十八九の刀自が、小形の丸髷に餘り派手でない扮裝をして、後から續いた。この姉は名をお高と呼ばれて、七八年前に家中のさるところに嫁いで、男の兒を一人持つたが、不緣で出戾つて來て、弟の許に厄介になつて居た。しかし物の解つた弟は、決して邪魔にするやうな素振も見せず、自分始め、お姉樣、お姉樣と言つて、下々の者までそれを眞似させた。食事の時などにも、お姉樣が座に着かない中は、決して自分も箸を取らなかつた。姉はまた姉で、繁行、繁行と言つて、何事に由らず總て弟に相談した。奧方との間も至極圓滿であつた。

『良太、御苦勞だつたな。』

かう言つて、姉刀自はそこに働いてゐる良太に聲をかけた。

『まだ、本當に片附きませんで……』

夏の光線に彩られた。新しい疊、新しい襖、床の間の欅の一枚床は鏡のやうに拭き清められて、勝手元と居間との間の扉には新しい檜の匂がした。

をり〳〵様子を見にやつて來た旦那は、『かうして見れば、そんなに住み心地もわるくないな。』こんなことを言つて、大工や植木屋のせつせと仕事をしてゐる傍に立つて見てゐたりした。

移轉の日には、車が何臺も何臺も街道から門の中へと入つて行つた。古い本箱などを積んだ車は、玄關から下されて、そこから手傳の人足達がそれを奥に運んだ。勝手元の方には、おかねの姉のおつるが先に立つて女中を指揮して、勝手道具や簞笥や行李などを其處此處に並べた。午には遠い町の蕎麥屋から、男が山のやうに重なつた蒸籠を臺所口に運んで行つた。おかねは女の兒を負つてせつせと奥の整理を手傳つた。

午過になつてから、奥方の一行の車は着いた。

奥方は三十四五で、綺麗に髪を丸髷に結つて、その頃流行つた小紋の袷に、黒繻子と縮緬との腹合せの帶をしめて、笄をさしてゐた。色はぬけるほど白く、脊は中脊で、姿はすらりとしてゐた。江戸家老の家柄に生れて、姫様として育つた品格は、何處となくその態度に備はつて、立居振舞にも大家の奥方らしいところが十分にあつた。それに、この奥方には子供がなかつた。從つて年に比べては、非常に若く美しく見えた。

『この死んだ人が慌てゝ飛び出して來たつけがなァ。』

『早いもんだ。年月の經つのは――』

ある老人は慨嘆するやうに、『あの時、切腹した人達だつて、今になれや死ななくつたつてよかつたんだ。今になれや、却つて手柄があつたつて重く用ゐられてゐたかも知れねえ。運がねえんだな。中に、一人坊主がゐたつけが、死ぬ時口惜しがつて騷いだつて言ふことだつた。若い立派な侍もゐたな。』

『運がねえんだな。』

こんな話をしてゐる間に、棺は下に下されて、穴掘の男は無雜作に土をかけた。

やがて人々は散じた。

四

旦那が九段の邸から、此方へ移轉して來たのは、その翌々年の初夏の頃であつた。その時分は周圍はかなりによく整理されて、前の草藪は梅のわか木の林になり、それにつゞいて畠などが綺麗に出來てゐた。その年の初め頃から、今年は愈ゝ其方に移轉するからといふ話があつて、植木屋だの大工だのが大勢入つて、釿の音や木鍬の音が四邊の綠の中に響きわたつて聞えてゐたが、愈ゝ移轉といふ月の初めには、家屋の部分々々の修繕も殘りなく出來上つて、久しく閉された家は、再び春に逢つたやうに、美しい初

九段でもお邸でも、厚く葬つてやれと言つて、然るべきお思召の香奠が下つた。それで、良太は坊主を呼んだり、棺を拵へたり、通夜の酒を買つたりした。皆な立合つた上で、持つてゐたものを調べて見たが、金が二分と少しに、汚ない着物が二三枚あつたばかりで、他にはそれらしいものもなかつた。昨日買つて食つたらしい大福の殘りが二つほどごろ〳〵と轉り出した時には、人々は可笑がつて笑つた。

『よく物を食ふ人でしたよ。始終口をもご〳〵させてゐましたよ。酒を飲まないから甘いものを食ふのが何より樂みだつたんですね、』とおかねは言つた。

あくる日の午後に、導師を先に立てた棺は、五六人の人達に送られて、淋しい裏道を寺へと向つた。街道よりも裏道をこつそり葬つて了ふ方が好いといふ老人達の意見に從つたのであつた。その日は、寒い風が路傍の落葉をがさ〳〵と吹き起した。地平線を遠く劃つた山の頂には、雪が白く光つて、林の上には富士が眞白になつて聳えてゐた。

街道の奥にある寺では、讀經する僧の傍に、蠟燭がチラ〳〵と瞬いた。やがて棺はそこから裏の林に添つた墓地へと運ばれて行つた。墓は丁度八年前に下邸で切腹を仰せ付けられた三人の勤王黨の埋葬せられた傍のところにあつた。

老人達は話した。

『あの切腹の時は騷ぎだつたな。』

つと見てやればよかつた。』

『本當にびつくらした。』

おかねは上つて來て、また覗くやうにして、『私、始めは寢てゐるかと思つた。でも、體を半分乘り出してゐて、何だか變だから、上つて、手にさはつて見ると、つめたいから、びつくらした！』

『やれ、やれ。』

良太は再びかう言つたが、『それにしても、知らせてやるところがない。何でも姪が府中とかにゐたが、それも、此間、死んだつて言つて、がつかりしてゐたから、何處にも言つてやるところがない。しかし九段とお邸とにはしらせなければならない。』

で、良太が知らせに行つて歸つて來る間に、近所の百姓の老人達――四十年も前から知つてゐる人達が二三人それと聞いて集つて來て、線香を立てたり、團子を拵へて來て上げたりした。ある老人は死んだ人が始めてこの下邸に奉公に來た時分を思出すやうにして、長い年月の間に種々のことがあつたことを話した。『若い時は、それでも元氣な男だつた。二十年ほど前に、向うの村に、水呑百姓の後家があつて、それと出來て、隨分長い間通つてゐたもんだが。』かうある人が言ふと、『さうさ、よくあそこに行つてゐたもんだ。』などとその時分を知つてゐる人達が相槌を打つた。邸の傴僂と言へば、近所では誰も知らないものはなかつた。

急に聲を立てた。

丁度其時厠に入つてゐた良太は、けたゝましい聲を聞きつけて、何事かと思つて急いで其方へと走つて行つた。

『何だ、何だ。』

驚いたやうな、氣味のわるいやうな顔をして立つてゐたおかねは、『大變、大變、捨さんが死んでゐる!』

『え!』

『捨さんが死んでますよ。』

良太は急いで三疊へと入つて行つた。見ると、その佝僂は、汚ない破れた蒲團の上に身を半分乘り出して、何の苦痛もなかつたやうに、さながら眠つてゐるのではないかと思はれるやうに顔を半分上に向けて死んで冷めたくなつてゐた。二三日前から、何だか體の具合がわるいとは言つてゐたが、昨日も夕方に一人でそこらをぶら〳〵してゐた。欒でも上げませうかとおかねが言ふと、『あらば貰ふかな、』と言つて、風邪ぐすりを一服貰つて飲んで寢た。しかし死ぬやうな病氣とは二人とも夢にも思つてゐなかつた。

『やれ、やれ。』

かう言つて良太は顔を持ち上げて見て、それから夜着を上にかけてやりながら、『いくつだらうな、七十二三だとは思ふが、年をきいても話さない人だつたから……やれ、やれ、そんなにわるいんなら、も

かう言つて、來ても旦那はぢき歸つて行つた。かと思ふと、おかねが緣側で汚れた小切などを散らかして裁縫をしてゐる傍に、ひよつくり、庭の扉を明けて入つて來て聲をかけて驚かしたりした。旦那は良太とは三つ年上であつた。それに稚い時からおかねは邸に上つてゐたので、『おかね、おかね』と言つて旦那はいつも親しい言葉をかけた。今でもおかねの姉のおつるは九段の邸に奉公してゐた。

竹藪を隔てゝ向うに小さな尼寺があつた。その本堂の灯は、日が暮れると、大海の中の灯のやうに、闇の中に、ぽつつりと一つさびしく輝いて見えた。朝は早くから讀經の聲がきこえた。

さびしい寒い初めての冬が來た。野を通つて來る風は、凄じく周圍の櫟や樫に鳴つた。朝ごとの霜は庇を白くした。

『國よりも寒い位だ。』

おかねはかう言つて、古い炬燵に火を入れた。東京の方に、何處か遠くで火事があると見えて、半鐘が一つ鳴つてそして止んで了ふやうな夜もあつた。

三

ある朝おかねは何氣なく三疊の戸を明けて見た。

『貴方、貴方！』

男の兒は初めは遊び相手のないのを淋しがつてゐたが、それにもいつか馴れて、良太の仕事をしてゐる傍で、何か獨言を言ひながら、終日長く遊んでゐた。おかねは女の兒を負つて、物を買ひに通りの方へ出て行つたが、綿の厚く入つた黃縞のねんねこが馬だの車だの通る街道に浮くやうに際立つて見えた。おかねは言つた。『東京つて言つても、名ばかしね、小切を買ひに行くんだつて一里も行かなけれやないんだもの、田舍の町の方が餘程近い。』

勤王家で學者の旦那の家は九段の方にあつたが、暇な時には、をり／＼此方を見にやつて來た。

良太の働いてゐる傍に來て、

『おう、大分綺麗になつた。』

こんなことを言つて、ぶら／＼しながら、東京の方であつた話だの、役所の話だの、君公の話だのをした。良太が來て吳れたので殿樣が安心したと仰しやつたといふ話をしてきかせた時には、良太は冥加に餘つて勿體ないやうな氣がした。昔ならば、一生經つても、殿樣からお言葉を頂戴することなどは望んでも得られないことなのに、いかに四民平等の世になつたからと言ひながら、ぢかに良太と仰しやつた言葉を聞くのは、良太には此上もない名譽に感じられた。良太は駿河臺にある舊藩侯の宏壯な邸に二度ほど行つてゐた。

『私に引越せと殿樣は仰しやつて下さるが、まだ二三年は駄目だな。』

姓達に對しても、決して自からを高くするやうな態度を示さなかつた。後には彼方此方に風呂を貰ひに行くほど親しくなつて、夜は遲くまで爐端で話した。

良太の妻のおかねがやつて來た時には、餘ほど周圍が片附いてゐたが、それでもまだおかねの眼を驚かした。『えらいところだ。私はこんなぢやないと思つた。』かう言つて、おかねは奥の戸などを明けて見た。

總領の男の兒は、今まで見たこともない倘僂の其處等を歩いてゐるのを見て、氣味をわるがつて、ぢつと見てゐたが、やがて母親の方へ駈寄つて、指してそして泣いた。

其時、良太は三十八、おかねは三十二であつた。二人に取つては、さびしい生活ではあつたけれど、養父母の許に虐げられて暮してゐるよりは、何んなに好いか知れないと二人は思つた。おかねは故鄕の父母や兄や嫂などにわかれて來た話をした。中年で盲した母親が、『東京に行つてはまた何時逢はれるか知れない。達者でゐなよ。』と言つて見えぬ眼から涙を流した話や、川舟の出るところまで父親と兄とが送つて來て吳れたことなどを繰返して、おかねは眼に涙を浮べた。『兄さんもつとめに出るやうになつたけれど、とても田舍に引込んでゐては仕方がない。巡邏なり何なりに志願して、その中、東京に出るやうにすると言つてゐました。丸で木から落ちた猿も同じだから、何處の家だつて困つてゐない家はありやしない。僅かなお金では、百姓にだつて急になれはしませんものね。』かう言つて田舍の士族達の話をした。

も若くつて美しかつた。……あのお殿樣が狂氣にならつしやるとは……。世が變つたんで、えらう御心配なすつたと見えるな……。奥方は？　まだそれでも生きていらつしやるか……。昔は何も彼も立派ぢやつた……』かう言つて眩しさうにまばたきをした。

良太がやつて來ても、別に邪魔にするでもなく、さうかと言つて力にするでもなく、唯それだけが自分の用事と言はぬばかりに臺所の内と入口の前のところとを毎日掃いた。そして水などを汲んで手傳つた。

良太は先づ家の周圍から整理してかゝらなければならなかつた。一番先に、垣を直して、それから路を直した。良太の岩乘な姿は、荒れた邸の址のところ／＼に見えた。時には竹藪の中に見えたり、夕日の當つた垣根のところに見えたり、凩の吹き荒ぶ林に添つた路のところに見えたりした。そのあたりにはいつも新しい繩だの竹だの鋤だのが散らばつてゐた。

邸の前の街道は、江戸の四街道の一つで、交通上最も往來の頻繁な道路であつたが、都會の外れの宿場からもうかれ是一里近くも隔つてゐるので、人家なども疎らに、畠や林や草藪がその間に縫ふやうにして雜つてゐた。其處等に住んでゐる百姓達は、何百年も祖先傳來つゞいて土着してゐるやうな人達ばかりで、都會の市場に持出す野菜だの、甘藷だの、陸稻だのを作つて、それでその日／＼の生計を立てゝゐた。良太は來ると間もなく、その人達と懇意になつた。侍ではあるが、根が農家に生れたかれは、百

百年以上も經過した家なので、垂木も古く、庇もところ〴〵破れて、入つて見ると壁は到る處落ちてゐた。で、主人の入るまでは、其方は其方でそつとして置くことにして、かれは先づ勝手に近い、昔女中の住んだらしい六疊の二階と八疊の下階とを掃除した。

勝手の傍には、古い内井戸があつて、腐つた繩や古い桶がそれに吊されてあつた。かれは先づそれを新しくして、つゞいて流しの板を張り替へさせた。昔から十何年も番人として住んでゐた佝僂の男は、もう七十近い年であつたが、その男は、フム〳〵などと訥つたやうな口の利き方をして、臺所の向うにある三疊の一間に犬か猫のやうな汚ない生活をしてゐた。そこにさし込む午後の日影は、何時も破れた蒲團と襤褸と黑い壁とそこにちゞこまつて日向ぼつこをしてゐる佝僂の蒼い喪心したやうな顏とを照した。

『捨さん、もつと綺麗にしたら好からうにな。』

かう見かねて良太が言ふと、

『なァに、これで澤山だ。お天道樣が何よりも暖かい。』

こんなことを言ふかと思ふと、フム〳〵などと言ひながら、何か買ひに通りの方へと出て行つた。甘藷などを買つて來て、ひとりでそれをむしや〳〵食つた。

何うかすると、その佝僂は、良太に、殿樣がお出になつた時分のことを口をもが〳〵させながら途切れ途切れに話した。『世が變つた、世が變つた。……もう、昔のやうなことは見られねえ。……お殿樣も奧方

したが、たうとうそれを引受けることになつた。妻の父は、『代々お世話になつてゐるお家だ。それは結構だ。』かう言つて賛成した。

其時、良太に養父母がなかつたなら、かれは東京行を思ひ留つたかも知れなかつた。良太は侍になりたいばかりに、自分で望んで養子には入つたのだけれども、今になつて見れば、強ひてその家名を相續する必要もなかつた。それに、その養父母と妻との折合も餘り睦しい方ではなかつた。養父母には後になつてから男の兒が產れた。

良太が田舍を立つて來る時、養母は言つた『お前は、家のあとはつがない氣かえ? それならそのやうにしなければならないから……』この言葉の陰には、公債の處分がかくれてゐた。養父母はそれなら當然公債は此方で貰はなければならないといふ腹であつた。しかし良太はそれには確答を與へないで出京した。

それから半年ほどして、妻のおかねは二人の兒を伴れてやつて來た。

二

良太は半ば破壞された下邸の一部を整理して住んだ。それは元の邸の殘部で、流石昔は殿樣が折々お出になつただけに、木口なども精選され、庭と客間の具合なども注意してつくられてあつたが、何しろ

君公もあれをもう少しよく整理して置きたいと仰しやる。それに、當分私に住んでは何うだと仰しやる。不便だから今は困るけれど、その中にとお受けをして置いた。誰か一人是非眞劍にやつて貰はなくてばならないのだが、お前達夫婦がやつて吳れると好いがなア。』

『猶よく考へまして……』

『これからは、士族はもう駄目だ。ちやんと土臺をきめてかゝらなければ立行かない。これまでは家祿と言ふものがあつて、言はゞまア、遊んでも食つて行かれたやうなものだが、これからはさうは行かない。皆な獨りで獨立して行かなければならない。引受けて吳れゝば、お前達夫婦の一生の世話は、私が見てやるが……何うだな？』

『猶、考へて見まして……』

『お前も知つてゐる通り、あの邸は廣いが、急に整理する必要もない。段々に、お前が指揮してやつて吳れゝば好いのだ。さうすれば、おかねも來て吳れるやうになるし、萬事につけて都合が好いから、成るべくなら、さうして欲しい。』

その時は確答もせずに引下がつたが、今までの關係上、無下に斷るわけにも良太には行かなかつた。主家の緣戚ではあるし、妻の幼い頃からの主人ではあるし、それに自分の身の上から考へて見ても、將來何をしようといふ確りとした目算があるではなし、良太は數日の間、彼方に行き此方に行きして相談

『刀は侍の魂だ。刀をさゝせないとは餘りだ。』

『刀を捨てゝ町人と同じになれとは情けないお布令だ。』

かういふ聲が彼方でも此方でもきこえた。髪を斷つのは一層それよりも辛いらしかつた。そして一方では、かれ等はこれから先の身邊といふことも考へなければならなかつた。殿様の去つた後の城下は寂として丸で火の消えたやうであつた。

城の焼ける時分には、時勢の潮流に乘つた藩の人達は、皆な多くは新しい東京の方へと出て行つてゐた。主家の主人も、勤王家の學者も、皆なそれ〴〵要路に向つて出て行つた。ことに、良太の世話になつた勤王家は、早くから攘夷を唱へた人だけあつて、當路の人々に知己が多く、逸早くある官省に職を奉じて、今では立派な位置に身を置くやうになつてゐた。

良太はある時その人から相談を受けた。

『何うだ、やつて呉れないか。』

『左様で御座いますな。』

かう言つて良太は躊躇した。

と、勤王家は、『田舎に引込んでゐたつて仕方があるまい。ぐづ〳〵してゐれば、何うせ碌なことはない。終には、公債までも手をつけて了はなければならない。それよりもあそこの下邸は、古いお下邸で、

從つて藩中も動搖した。藩唯一の學者で、前には山陵検分のために伴をした勤王家は、佐幕派の方から壓迫されて、一時は閉門を命ぜられて、それから間もなく水戸の方に行き、歸つて來てからは、城外のある村に閉居した。かれの妻と妻の姉とは、其時分、其處に行つて、その勤王家とその奥方との萬端の世話をした。

振返つて考へて見ても、實に目まぐるしい變遷であつた。何が何だかわからないやうなことが多かつた。鳥羽の戰爭から將軍家の歸東、彰義隊の亂、つゞいて薩長の官軍が潮のやうに關東に入り込んで來るまで、かれは或は江戸に、或は田舍にゐてそれを見たり聞いたりしてゐたが、何れが本當で何れが嘘だかわからない中に、城は官軍に明け渡すことになつて、總督の軍隊がやがて潮のやうに城の内に入り込んで來た。

筒袖にだんぶくろ、陣太鼓を叩いて調練するさまも異樣であつた。『宮さん、宮さん、お馬の前にひらひらするのは何ぢやえな……』さうした歌が城内の到る處へ滿ち渡つた。

かれの總領の男の兒は其時丁度四つ位であつたが、いつもその調練の太鼓の音に眼をさました。

會津、奥羽の役には、かれは磐城口から仙臺の方へと入つて行つた。しかし大した戰爭のなかつたその方面では、一年と經たない内に歸ることになつて、翌年の春には、かれは妻子の安全な顔を見ることが出來た。そしてそれから後には、廢藩置縣、斷髮令、禁刀令などが續いたのであつた。

氣丈な妻は、箪笥を持ち出す時に怪我したといふ膝や額の血を拭ひもせずに『それでも好い鹽梅に八分は出しました。鍋、釜まで出したから、まア好い方だ。安心して下さい。』かう言つて、矢張疊を立て廻した中から昻奮した蒼い顔を出して笑つて見せた。

良太は生れながらの侍ではなかつた。かれは城を取卷いた沼の向うの村で生れた。その妹は城下の町の小商人の妻になつてゐた。しかしかれは祖先傳來の百姓に滿足しては居られなかつた。かれは若い頃に、今の主家の仲間に住み込んで、それから足輕になつた。主家は代々藩の家老をつとめるやうな立派な家柄なので、江戸と田舍との間をかれは何遍往來したか知れなかつた。主家の縁戚になつてゐる矢張家老の家柄の、若い勤王家の伴をして京都から河内の方へと旅行した時には、歴代の荒廢した山陵をそれからそれへと檢分して歩いた。何の守樣家來といふ堂々とした書附を先から先へと廻して、宿場といふ宿場からは、本馬と輕尻とを仕立てさせた。

それは丁度維新の風雲の次第に色濃くなりつゝある時代であつた。浦賀の黑船、櫻田の變、横濱の開港、つゞいて長州征伐が始まつた。その時、かれは藩の侍分の家に養子に入り込んで、もう一廉の侍になつてゐたが、同藩の人達と共に御領分の河内の陣屋詰を命ぜられて、いざと言へば、大阪から長州の方へと出張するばかりになつてゐた。何んといふ騷々しい世の中であつたであらう。京都では暗殺が暗殺につゞき、江戸と京都との間には、早打が織るがごとくに往來した。

京のお邸にお引移りになつた翌々年であつた。火は大手に近いある邸から起つて、見る／＼大名小路の士族屋敷を燒き拂つて、勢熾んに三の丸の新御殿へと移つて行つた。人々は何うすることも出來なかつた。自分の邸の防禦にすら手が足りないほどであつた。あれよ／＼と言つて、人々は唯新御殿から本丸の方へ燒けて行くのを見た。黑煙は漲るやうに卷き上つて、猛火の中に天守閣の白く立つてゐるのが見えた。

其時良太は大名小路の主家の難に赴いて、一方家人を指揮すると共に、一方家具を裏の廣場へと持ち出してゐた。箪笥、挾箱、槍、刀、刀架、勝手道具、その向うには、疊を立て廻した中に、奥方や老隱居や女中やお子達の避難してゐるのが見えて、折々立つて此方へ出て來る奥方の姿が鮮かに畠の中に浮び出してゐた。あたりは時の間に燒野原と變つて、寒い西風が凄じく災後の餘塵を吹き立てた。誰の顏にも悲慘な絶望と悲哀とが明らかに見えた。殿樣に別れ、世祿に離れ、權力に離れて、更に逢つたこの不慮の火災には、愈々士族の人達をして恐ろしい封建の末路を思はせずには置かなかつた。『もう、殿樣の世もこれでお了ひだ。』かう思ひながら、猛火の中に燒け落ちる天守閣を人々は唯茫然として見詰めた。

その火は殆んど城と城下とを悉く燒き盡した。朝から始まつて、夜になつても其火は猶消えなかつた。一方屋敷の方へと出て行つた火は、徒士足輕の住んでゐる方までをも燒き拂つた。良太の家も、かれが主家の世話に忙殺されてゐる間に燒けた。かれの妻は、養父養母と、七歳になる男の兒と、二歳になる女の兒とを危くないところに避難させて、そして家具を戸外に運び出した。良太が行つて見た時には、

時は過ぎ行く

一

『何うも大變だ。』あたりを見廻すと、良太はかう太息しない譯に行かなかつた。垣根は壞れてゐるし、畠は捨てたまゝになつてゐるし、草藪は容易には入つて行けないほどに深く〳〵繁つてゐた。奥の築山のあるあたりは、それでもいくらか秩序立つてはゐるけれども、何年にも手を入れたことのない松やら楓やら高野槇やらが繁りたい放題に繁つて、昔の大きな邸の址は、人工から再び自然に歸らうとする趣を見せてゐた。

『まア仕方がない、ゆつくりやるだ。』良太はかう思つて鋤を捨てゝ休んだ。あたりには誰もゐなかつた。林を透して通る夕日の影は赤くかれの顔を照した。

良太は田舍から頼まれて急に此處に來るやうになつた事情などを思ひ浮べた。今年の春、西風の寒く吹く日に、歴代の殿樣の住んでゐた田舍のお城が燒けた。丁度それは維新の大政がきまつて、藩侯が東

時は過ぎ行く

花袋全集第六卷目次

武林寫眞館(麹町一番町)にて

(明治三十一年一月六日)

國木田獨步

田山花袋

宮崎湖處子

柳田國男

太田玉茗

生れたところ（館林外伴木）

福岡益雄撮影

田山花袋著

第六巻

時は過ぎ行く

合歓の花外十一編

花袋全集刊行會